

崎 山 貝 塚

— 範囲確認調査報告書 —

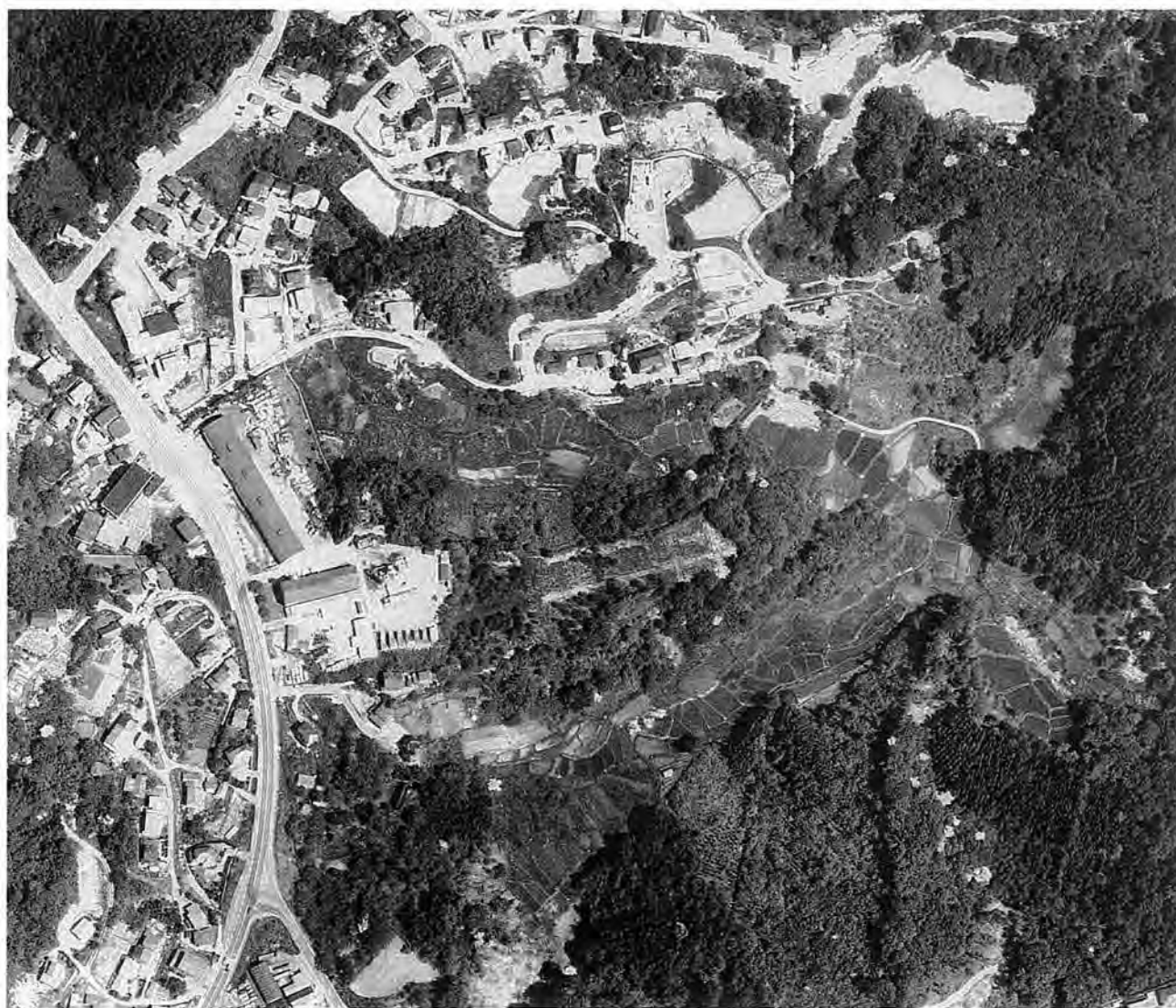
1995.3

岩手県宮古市教育委員会

崎 山 貝 塚

Sakiyama Shell Mounds

— 範囲確認調査報告書 —



崎山貝塚垂直写真

1995.3

岩手県宮古市教育委員会

The Miyako Board of Education

Miyako, Iwate, Japan

カラー 1 崎山貝塚航空写真（北東より）

カラー 2 崎山貝塚垂直写真（撮影 小野寺文雄氏）



カラー 1



カラー 2

カラー 3 第11次調査区全景（北西より）

カラー 4 S 9 W12-1 号配石遺構磨製石斧出土状況



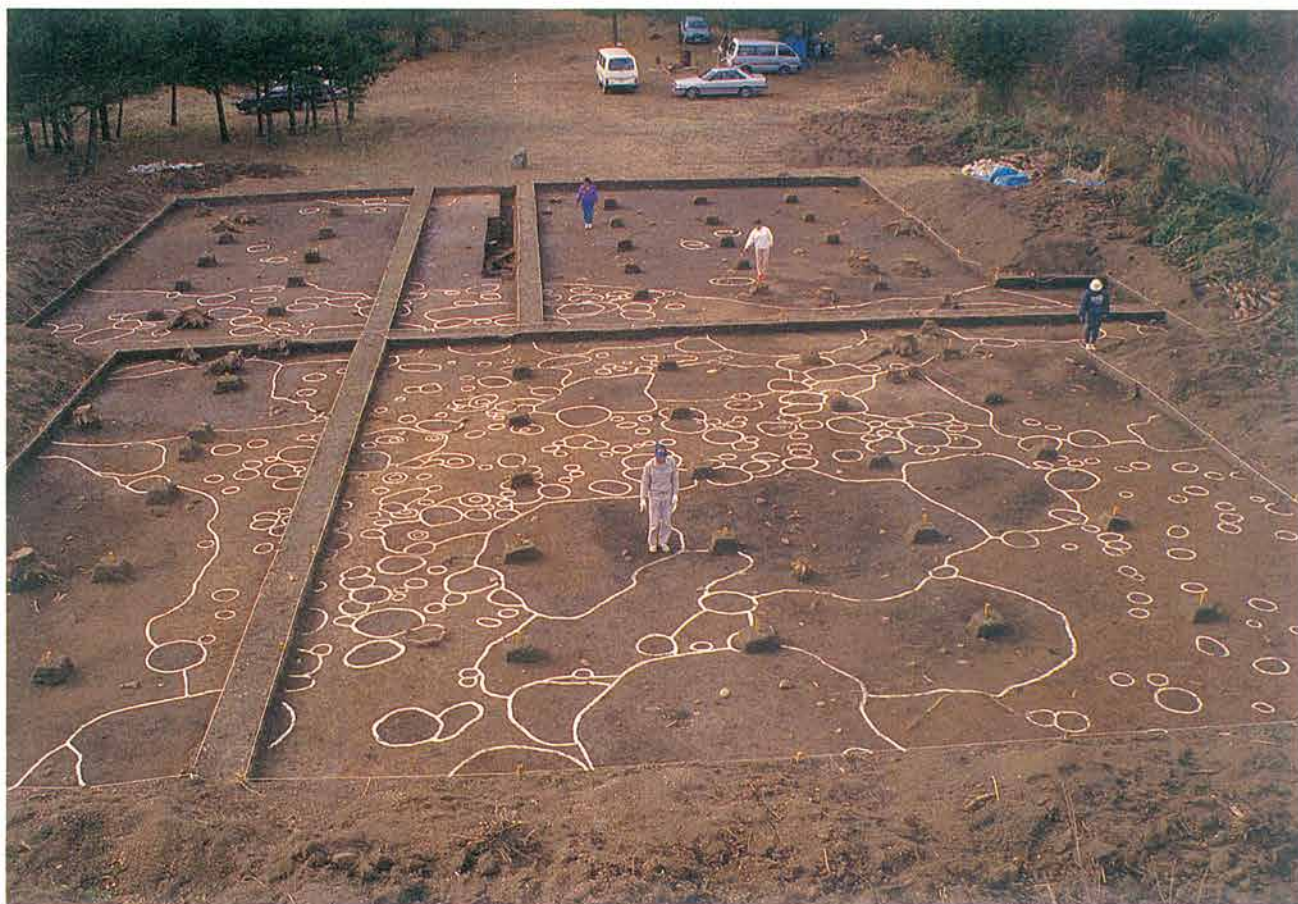
カラー 3



カラー 4

カラー 5 第9次調査区全景（北東より）

カラー 6 西集落検出遺構（S30W138-1号・S36W138-1号竪穴住居跡）



カラー 5



カラー 6

カラー 7 南貝塚第 2 次調査区

カラー 8 南貝塚第 2 次調査区出土動物遺存体（シカ下顎骨 R）



カラー 7



カラー 8

序 文

宮古市における考古学的な調査は明治40年代の岸上鎌吉先生による鯨ヶ崎館山貝塚の発掘調査を端緒とし、以来昭和初期まで様々な研究者が当地を訪れて貝塚などの発掘調査を実施しております。

市内にはこの様な縄文時代の貝塚をはじめとする遺跡が400ヶ所以上存在しますが、昭和57年度から昭和60年度にかけて実施した分布調査により、崎山貝塚は市内に分布する貝塚群の中で最も保存状態が良好であり、しかも学史的にも重要な内容を持つことが再確認されました。

しかし、当貝塚周辺でも次第に宅地化の波が押し寄せており、将来にわたりこの貝塚が保存されていく見通しが全く立たない状態となりました。このため、宮古市では崎山貝塚の保存を前提として国庫補助、県費補助を受けて昭和61年度から平成5年度の8ヶ年にわたり崎山貝塚の範囲確認調査を実施してまいりました。更に、平成6年度から平成7年度には地点を絞って遺構精査等を実施する内容確認調査を継続して実施中であります。

これまでの調査により、崎山貝塚は縄文前期から後期にわたり極めて長い間集落が営まれ、しかもその形態が集落の中心部に立石や墓壇跡などがあり、これを環状遺構帯が取り囲むという非常に特徴的なものであることが判明しております。また、この集落跡に伴い南貝塚や北貝塚などと地点や構成内容を変えながらも貝塚が形成され続けたことも確認されております。更に、遺跡外縁の低湿地からは将来水場遺構などの検出される可能性も指摘されております。

このような重要性を鑑み、宮古市としても地権者をはじめとする市民皆様の御協力をいただきながら崎山貝塚を保存した上で有効に活用するという意志決定が成されております。

ところで、本書はこれまでの9ヶ年にわたる発掘調査の内容をとりまとめた正報告書ですが、発掘調査の着手から本報告書の刊行までに極めて長い年月を要し、関係者の皆様方にご迷惑をおかけしましたことにつきましては深く反省して居ります。今後は様々な問題を克服し、早急に事業を推進してまいる所存であります。

最後になりましたが、発掘調査の実施と本報告書の作成にあたり様々なご指導をいただきました鈴木公雄先生をはじめとする崎山貝塚調査指導委員会の先生方、文化庁記念物課、岩手県教育委員会文化課、岩手県立博物館、(財)岩手県埋蔵文化財センター、陸前高田市立博物館等々の関係機関並びに研究者の方々、御理解、御協力下さった地権者各位と関係者の皆様に厚く御礼申し上げて序文といたします。

岩手県宮古市

宮古市教育委員会

教育長 佐藤 勇 逸

例 言

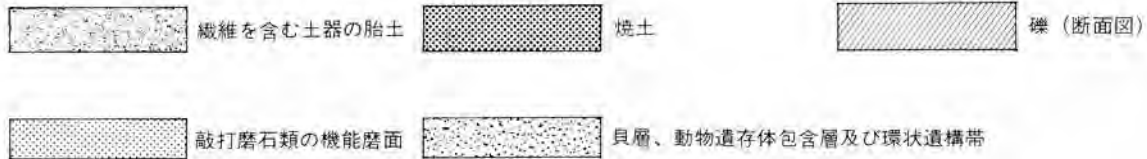
1. 本書は、国庫補助を受けて昭和61年度から平成5年度にかけて実施した崎山貝塚範囲確認調査と平成6年度に実施した崎山貝塚内容確認調査の発掘調査報告書である。
2. 崎山貝塚の調査内容については、本書以前に刊行された調査概報や各種刊行物等の記載内容との間に相違点がある場合には本書をもって訂正する。
3. 発掘調査の主体は宮古市教育委員会で、発掘調査および本書の執筆、編集は高橋・三浦が担当し、竹下・鎌田・阿部がこれを補佐した。
4. 調査座標は平面直角座標第X系を座標交換して使用したが、調査用の局地的な座標系であることを明示するためにRを冠して表示した。

座標軸方向 第X系に準じる

調査座標原点 X -35,800.000 Y +97,000.000

また、調査区の設定や遺物の取上げ等については、遺跡の中軸線上に任意の原点を設置し、これを中心として3m×3mのグリッドを単位として実施している。

5. 高さは標高値をそのまま使用した。
6. 遺構・遺物等の表現については下記のとおりとした。



7. 本文中の引用文献は次のとおりとした。(いずれも宮古市教育委員会刊行)

1979 『宮古市大付遺跡発掘調査報告書』 小田野哲憲 熊谷 常正 → 『大付報文79』

1983～86 『宮古市分布調査報告書1～4』 武田将男 → 『分布調査1～4』

1986 『宮古市遺跡分布図 昭和60年度版』 武田将男 → 『分布図86』

1987～1994 『崎山遺跡群I～Ⅷ 昭和61年度～平成5年度発掘調査概報』
高橋憲太郎ほか → 『崎山遺跡群I～Ⅷ』

1987 『崎山貝塚・トロノ木IV遺跡発掘調査報告書』 上野猛 → 『崎山報文87』

1989 『トロノ木I遺跡第1次～第7次発掘調査報告書』 高橋憲太郎ほか
→ 『トロノ木I報文89』

1989 『千鷲遺跡 昭和62年度発掘調査報告書』 高橋憲太郎 鎌田 祐二 → 『千鷲報文89』

1990 『歛ヶ崎館山貝塚 平成元年度発掘調査報告書』 鎌田祐二 → 『館山報文90』

1992 『重茂館遺跡群第1次発掘調査報告書』 高橋憲太郎 → 『重茂報文92』

目 次

序 文	
例 言	
目 次	
I 遺跡の位置と環境	1
1 三陸沿岸の貝塚と宮古湾沿岸の貝塚	1
(1) 三陸沿岸の貝塚	1
(2) 宮古湾沿の貝塚	6
(3) 宮古湾周辺での貝塚研究の歩み	8
2 崎山貝塚の位置	16
3 崎山貝塚と周辺の遺跡	16
(1) 地形と地質	16
(2) 崎山貝塚と周辺の遺跡	20
II 調査経過	22
1 調査経過	22
(1) 調査にいたる経過	22
(2) 調査の経過	22
2 調査の体制	27
III 調査の結果	36
1 崎山貝塚の構造	36
2 集落跡	36
(1) 基本層序	36
(2) 検出された遺構と遺物	36
a) 中央広場	36
i) 立石	37
ii) 墓壙跡・土坑跡	37
b) 環状遺構帯	56
c) 環状遺構帯内検出遺構	79
i) 竪穴住居跡	79
ii) 墓壙跡・土坑跡	80
iii) 配石遺構	104
iv) 柱穴状ピット	107
d) 東集落	119
i) 竪穴住居跡	128
ii) 掘立柱建物跡・柱穴跡	128

iii)	土坑跡	130
iv)	遺構外出土遺物	140
e)	西集落	149
e-1)	西集落東部	149
i)	竪穴住居跡	149
ii)	土坑跡・焼土遺構	155
iii)	配石遺構	156
iv)	遺構外出土遺物	156
e-2)	西集落南部	176
i)	竪穴住居跡	176
ii)	遺構外出土遺物	188
3	貝塚及び遺物包含層	198
(1)	南貝塚	198
a)	第1次調査区	198
i)	基本層序	198
ii)	出土遺物	204
①	土器	204
②	石器	218
③	土製品・石製品	227
④	骨角器	227
⑤	動物遺存体	227
b)	第2次調査区	233
i)	基本層序	233
ii)	出土遺物	240
①	土器	240
②	石器	246
③	骨角器	250
④	動物遺存体	255
c)	ボーリング調査	277
(2)	北貝塚	280
a)	第8次調査区	280
i)	基本層序	280
ii)	出土遺物	285
①	土器	287
②	石器	311
③	土製品・石製品	318
④	骨角器	318
⑤	動物遺存体	318

b) 第5次調査区	323
i) 基本層序	323
ii) 出土遺物	323
①土器	323
②石器	332
③動物遺存体	332
c) 第7次調査区	332
i) 基本層序	332
ii) 出土遺物	333
①土器	333
4 低湿地	342
(1) 基本層序	342
(2) 出土遺物	342
5 資料紹介	344
IV 考察	350
1 崎山貝塚の集落構成とその変遷について	350
(1) 検出遺構の分類について	350
a) 立石	350
b) 竪穴住居跡	350
c) 堀立柱建物跡	351
d) 土坑跡	351
e) 配石遺構	352
(2) 集落構成とその変遷について	356
(3) 周辺遺跡との関係について	365
(4) 同心円状の重層構造を呈する集落について	368
(5) 立石について	375
2 貝塚とその構成内容について	382
(1) 崎山貝塚から検出された動物遺存体について	382
(2) 南貝塚と北貝塚の比較について	392
(3) 骨角器について	395
3 出土遺物について	403
(1) 土器群の分類と編年について	403
(2) 石器群について	414
(3) 土製品・石製品について	420
a) 土製品	420
b) 石製品	420
4 植物遺存体について	427
5 崎山貝塚の範囲について	429

V 調査まとめ	433
分析結果	435
英文要旨	440

図 版 目 次

第1図版	航空写真（北より）・第11次調査区全景（北西より）
第2図版	N3E9-1号立石・中央広場検出墓壙跡・土坑跡（S3W6グリッド付近）
第3図版	環状遺構帯堆積状況（SCトレンチ）・環状遺構帯盛土層堆積状況（SWトレンチ）
第4図版	環状遺構帯内検出土坑跡（S24W6-1号土坑跡）・同検出墓壙跡（S24W15グリッド付近）
第5図版	環状遺構帯内ドンブリブロック検出状況（Eトレンチ）・同マグロ属椎骨検出状況（N21E3-1号土坑跡）
第6図版	環状遺構帯内検出配石遺構（S6W15-1号配石遺構）・同（S9W12-1号配石遺構）
第7図版	第9次調査区全景（北東より）・環状遺構帯内石棒出土状況（N6E18-1号石棒埋設遺構）
第8図版	東集落石棒出土状況（N15E36-1号竪穴住居跡）・同（N6E42-1号竪穴住居跡）
第9図版	環状遺構帯内石皿出土状況（第11次調査区）・西集落検出遺構（N15W51-1号竪穴住居跡ほか）
第10図版	西集落検出遺構（S15W30-1号配石遺構）・同（S30W138-1号・S36W138-1号竪穴住居跡）
第11図版	南貝塚第1次調査区（南東より）・同第2次調査区（北西より）
第12図版	北貝塚第8次調査区（南東より）・同A7区遺物包含層検出状況
第13図版	東包含層D区（東より）・同C区（北西より）
第14図版	出土土器（前期）・同（中期）
第15図版	出土骨角器（南貝塚）・同（北貝塚）
第16図版	出土骨角器（個人所蔵）・南貝塚出土遺物
第17図版	N21E3-1号土坑跡出土マグロ属椎骨・出土遺物（土製品・石製品）

〈本文中写真図版〉

柴田常恵と小田島祿郎により注目された崎山貝塚の立石	12
昭和60年度調査区と出土遺物	172
川井村片巢遺跡立石遠景・同近景	379
北貝塚A地点貝層の堆積状況・同獣骨出土状況	383

〈内表紙写真写真図版〉

崎山貝塚垂直写真

カラ＝図版目次

- カラー1 崎山貝塚航空写真（北東より）
カラー2 崎山貝塚垂直写真
カラー3 第11次調査区全景（北西より）
カラー4 S9W12-1号配石遺構磨製石斧出土状況
カラー5 第9次調査区全景（北東より）
カラー6 西集落検出遺構（S30W138-1・S36W138-1号竪穴住居跡）
カラー7 南貝塚第2次調査区
カラー8 南貝塚第2次調査区出土動物遺存体（シカ下顎骨R）

挿図目次

- 第1図 三陸沿岸地方の貝塚分布図……………3
第2図 宮古湾沿の貝塚分布図……………7
第3図 岸上鎌吉により報告された鉄ヶ崎館山貝塚の骨角器……………9
第4図 鉄ヶ崎館山貝塚と出土遺物……………11
第5図 崎山貝塚周辺地形分類図……………17
第6図 崎山貝塚周辺表層地質図……………19
第7図 崎山貝塚と崎山遺跡群……………21
第8図 崎山貝塚地形図及び調査区設定図……………23・24
第9図 崎山貝塚検出遺構配置図……………29・30
第10図 崎山貝塚集落跡中央部検出遺構配置図……………31・32
第11図 集落跡土層断面図(1)……………33
第12図 集落跡土層断面図(2)……………34
第13図 集落跡・南貝塚土層断面図……………35
第14図 中央広場検出遺構(1) S3E6～S9E6グリット……………39
第15図 中央広場検出遺構(2) N3W3～N3E3グリット、N3E9グリット……………40
第16図 中央広場出土遺物(1)……………44
第17図 中央広場検出遺構(3) N9E6～S6EW12グリット……………47
第18図 中央広場検出遺構(4) S6W6～S15W12グリット……………48
第19図 中央広場検出遺構土層断面図……………49
第20図 中央広場出土遺物(2)……………54

第21図	中央広場出土遺物(3)・西集落西部テストピット出土遺物	55
第22図	環状遺構帯平面図(1) N3E12～N3E27グリッド (Eトレンチ)	57・58
第23図	環状遺構帯土層断面図(2) N3E12～N3E27グリッド (Eトレンチ) ドングリブロック 堆積状況	59
第24図	環状遺構帯平面図(2) N18E3～N9E3グリッド	60
第25図	環状遺構帯土層断面図(2) N18E3～N9E3グリッド	61
第26図	環状遺構帯出土遺物(1) Eトレンチ	65
第27図	環状遺構帯出土遺物(2) Eトレンチ	66
第28図	環状遺構帯出土遺物(3) Eトレンチ	67
第29図	環状遺構帯出土遺物(4) Eトレンチ	68
第30図	環状遺構帯出土遺物(5) Eトレンチ N18E3～N9E3グリッド	69
第31図	環状遺構帯出土遺物(6) N18E3～N9E3グリッド	70
第32図	環状遺構帯出土遺物(7) N18E3～N9E3グリッド	71
第33図	環状遺構帯出土遺物(8) SCトレンチ・SWトレンチ	74
第34図	環状遺構帯出土遺物(9) SCトレンチ・SWトレンチ	75
第35図	環状遺構帯出土遺物(10) SCトレンチ・SWトレンチ	76
第36図	環状遺構帯出土遺物(11) 第3次調査区	77
第37図	環状遺構帯出土遺物(12) 第3次調査区	78
第38図	環状遺構帯平面図(3) N21E3-1号土坑跡	83
第39図	環状遺構帯平面図(4) S12W6～S24W12グリッド	84
第40図	環状遺構帯平面図(5) S21W6～S30W12グリッド	85
第41図	環状遺構帯土層断面図(3) SCトレンチ	86
第42図	環状遺構帯土層断面図(4) SWトレンチ	87
第43図	環状遺構帯平面図(6) N9W15～S15W15グリッド	88
第44図	環状遺構帯平面図(7) S15W15～S30W15グリッド	89
第45図	環状遺構帯検出配石遺構平面図	105
第46図	環状遺構帯検出配石遺構 土坑跡土層断面図	106
第47図	環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(1)	109
第48図	環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(2)	110
第49図	環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(3)	111
第50図	環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(4)	112
第51図	東集落西半部検出遺構配置図	113・114
第52図	東集落西半部検出遺構(1)	115・116
第53図	東集落西半部検出遺構(2)	117・118
第54図	東集落出土遺物(1)	124
第55図	東集落東半部検出遺構	125
第56図	東集落土層断面図(1)	126
第57図	東集落土層断面図(2)	127

第58図	東集落出土遺物(2)·····	132
第59図	東集落出土遺物(3)·····	133
第60図	東集落出土遺物(4)·····	134
第61図	東集落出土遺物(5)·····	135
第62図	東集落出土遺物(6)·····	136
第63図	東集落出土遺物(7)·····	137
第64図	東集落出土遺物(8)·····	138
第65図	東集落出土遺物(9)·····	139
第66図	東集落出土遺物(10)·····	141
第67図	東集落出土遺物(11)·····	142
第68図	東集落出土遺物(12)·····	143
第69図	東集落出土遺物(13)·····	144
第70図	東集落出土遺物(14)·····	146
第71図	西集落東部検出遺構配置図·····	147 · 148
第72図	N15W51-1号(第14号)竪穴住居跡・N12W48-1号土坑跡·····	150
第73図	西集落土層断面図・N15W51-1号(第14号)竪穴住居跡炉·····	151
第74図	西集落出土遺物(1)·····	153
第75図	西集落出土遺物(2)·····	155
第76図	西集落出土遺物(3)·····	157
第77図	西集落出土遺物(4)·····	158
第78図	西集落出土遺物(5)·····	159
第79図	西集落出土遺物(6)·····	161
第80図	西集落出土遺物(7)·····	162
第81図	西集落出土遺物(8)·····	163
第82図	西集落出土遺物(9)·····	164
第83図	西集落出土遺物(10)·····	165
第84図	西集落出土遺物(11)·····	167
第85図	西集落出土遺物(12)·····	168
第86図	西集落出土遺物(13)·····	169
第87図	西集落出土遺物(14)·····	170
第88図	西集落西部調査区設定図·····	171
第89図	西集落西部検出遺構配置図·····	173
第90図	西集落西部土層断面図(1)·····	174
第91図	西集落西部土層断面図(2)·····	175
第92図	S30W138-1号(第11号)竪穴住居跡·····	177
第93図	S30W138-1号(第11号)竪穴住居跡・炉·····	179
第94図	S30W138-1号(第11号)竪穴住居跡出土遺物·····	180
第95図	S36W138-1号(第12号)竪穴住居跡(1)·····	181

第96図	S 36W138-1号(第12号) 竪穴住居跡(2)	182
第97図	S 36W138-1号(第12号) 竪穴住居跡・灰	183
第98図	S 36W138-1号(第12号) 竪穴住居跡出土遺物(1)	185
第99図	S 36W138-1号(第12号) 竪穴住居跡出土遺物(2)	186
第100図	S 27W144-1号(第13号) 竪穴住居跡	187
第101図	S 27W144-1号(第13号) 竪穴住居跡出土遺物・遺構外出土遺物(1)	189
第102図	遺構外出土遺物(2)	191
第103図	遺構外出土遺物(3)	192
第104図	遺構外出土遺物(4)	193
第105図	遺構外出土遺物(5)	195
第106図	遺構外出土遺物(6)	196
第107図	遺構外出土遺物(7)	197
第108図	南貝塚調査区設定図	199・200
第109図	第1次調査区全体図	201
第110図	第1次調査区・No1~No4 グリッド・No15~No22 グリッド	203
第111図	第1次調査区出土遺物(1)	205
第112図	第1次調査区出土遺物(2)	206
第113図	第1次調査区出土遺物(3)	207
第114図	第1次調査区出土遺物(4)	208
第115図	第1次調査区出土遺物(5)	210
第116図	第1次調査区出土遺物(6)	211
第117図	第1次調査区出土遺物(7)	212
第118図	第1次調査区出土遺物(8)	214
第119図	第1次調査区出土遺物(9)	215
第120図	第1次調査区出土遺物(10)	216
第121図	第1次調査区出土遺物(11)	217
第122図	第1次調査区出土遺物(12)	219
第123図	第1次調査区出土遺物(13)	220
第124図	第1次調査区出土遺物(14)	221
第125図	第1次調査区出土遺物(15)	223
第126図	第1次調査区出土遺物(16)	224
第127図	第1次調査区出土遺物(17)	225
第128図	第1次調査区出土遺物(18)	226
第129図	第1次調査区出土遺物(19)	229
第130図	第1次調査区出土遺物(20)	230
第131図	第2次調査区設定図	231・232
第132図	第2次調査A区平面図	235
第133図	第2次調査A区上層断面図	236

第134図	第2次調査A2区貝層平面図	237
第135図	第2次調査B区平面図・土層断面図	238
第136図	第2次調査区出土遺物(1)	241
第137図	第2次調査区出土遺物(2)	243
第138図	第2次調査区出土遺物(3)	244
第139図	第2次調査区出土遺物(4)	245
第140図	第2次調査区出土遺物(5)	247
第141図	第2次調査区出土遺物(6)	248
第142図	第2次調査区出土遺物(7)	249
第143図	第2次調査区出土遺物(8)	251
第144図	第2次調査区出土遺物(9)	253
第145図	第2次調査区出土遺物(10)	254
第146図	南貝塚ボーリング柱状図(1)	278
第147図	南貝塚ボーリング柱状図(2)	279
第148図	北貝塚調査区設定図	281・282
第149図	第8次調査A区・B区平面図	283・284
第150図	第8次調査区土層断面図(1)	286
第151図	第8次調査区土層断面図(2)	287
第152図	第8次調査区出土遺物(1)	289
第153図	第8次調査区出土遺物(2)	290
第154図	第8次調査区出土遺物(3)	291
第155図	第8次調査区出土遺物(4)	292
第156図	第8次調査区出土遺物(5)	293
第157図	A7区遺物包含層平面図・土層断面図	294
第158図	第8次調査区出土遺物(6)	296
第159図	第8次調査区出土遺物(7)	297
第160図	第8次調査区出土遺物(8)	299
第161図	第8次調査区出土遺物(9)	301
第162図	第8次調査区出土遺物(10)	302
第163図	第8次調査区出土遺物(11)	303
第164図	第8次調査区出土遺物(12)	304
第165図	第8次調査区出土遺物(13)	305
第166図	第8次調査区出土遺物(14)	307
第167図	第8次調査区出土遺物(15)	308
第168図	第8次調査区出土遺物(16)	309
第169図	第8次調査区出土遺物(17)	310
第170図	第8次調査区出土遺物(18)	312
第171図	第8次調査区出土遺物(19)	313

第172図	第8次調査区出土遺物(20)	314
第173図	第8次調査区出土遺物(21)	315
第174図	第8次調査区出土遺物(22)	316
第175図	第8次調査区出土遺物(23)	317
第176図	北貝塚出土遺物(骨角器表採資料)	319
第177図	第5次調査区設定図	324
第178図	第5次調査区土層断面図	325
第179図	第5次調査区堆積層平面図	326
第180図	第5次調査区出土遺物(1)	328
第181図	第5次調査区出土遺物(2)	329
第182図	第5次調査区出土遺物(3)	330
第183図	第5次調査区出土遺物(4)	331
第184図	第7次調査区出土遺物	333
第185図	第7次調査区設定図	334
第186図	東包含層調査区設定図	335・336
第187図	第7次調査C区・D区平面図	337・338
第188図	東包含層土層断面図	340
第189図	東包含層出土遺物	341
第190図	北側低湿地調査区設定図	343
第191図	崎山貝塚出土骨角器—中嶋コレクション(1)	345
第192図	崎山貝塚出土骨角器—中嶋コレクション(2)	346
第193図	崎山貝塚遺構変遷図(1)・(2)	353
第194図	崎山貝塚遺構変遷図(3)・(4)	354
第195図	崎山貝塚中央部遺構変遷図(1)	355
第196図	崎山貝塚中央部遺構変遷図(2)	358
第197図	崎山貝塚中央部遺構変遷図(3)	361
第198図	崎山貝塚中央部遺構変遷図(4)	363
第199図	環状遺構帯土層断面図	364
第200図	紫波町西田遺跡地形図・検出遺構配置図	369
第201図	一戸町御所野遺跡地形図	371
第202図	一戸町御所野遺跡検出遺構配置図	372
第203図	山形県村山市西海淵遺跡・青森県八戸市風張(1)遺跡	373
第204図	二戸市荒谷遺跡の配石遺構と立石	377
第205図	田野畑村館石野I遺跡の立石	378
第206図	骨角器集成図(1)	398
第207図	骨角器集成図(2)	399
第208図	土器集成図(1)	404
第209図	土器集成図(2)	406

第210図	土器集成図(3).....	409
第211図	土器集成図(4).....	410
第212図	石器分類図.....	416
第213図	土製品・石製品分類図.....	421
第214図	崎山貝塚地形図（昭和36年度）.....	431・432

付 表 目 次

第1表	G1層出土動物遺存体.....	42
第2表	第2次調査区土層一覧表（1）.....	239
第3表	第2次調査区土層一覧表（2）.....	239
第4表	A1層出土魚類集計表.....	257
第5表	A2層出土魚類集計表.....	257
第6表	A3層出土魚類集計表.....	258
第7表	A4層出土魚類集計表.....	258
第8表	A5層出土魚類集計表.....	259
第9表	A6層出土魚類集計表.....	259
第10表	A7層出土魚類集計表.....	260
第11表	A8層出土魚類集計表.....	260
第12表	A9層出土魚類集計表.....	261
第13表	A10層出土魚類集計表.....	261
第14表	A11層出土魚類集計表.....	262
第15表	A12層出土魚類集計表.....	262
第16表	A13層出土魚類集計表.....	263
第17表	A14層出土魚類集計表.....	263
第18表	A15層出土魚類集計表.....	264
第19表	A16層出土魚類集計表.....	264
第20表	A17層出土魚類集計表.....	265
第21表	A18層出土魚類集計表.....	265
第22表	A101層出土魚類集計表.....	266
第23表	A102層出土魚類集計表.....	266
第24表	A103層出土魚類集計表.....	267
第25表	A104層出土魚類集計表.....	267
第26表	ボーリング1出土魚類集計表.....	268
第27表	ボーリング2出土魚類集計表.....	268
第28表	ボーリング3出土魚類集計表.....	269
第29表	ボーリング4出土魚類集計表.....	269

第30表	ボーリング5出土魚類集計表	270
第31表	ボーリング6出土魚類集計表	270
第32表	ボーリング7出土魚類集計表	271
第33表	ボーリング8出土魚類集計表	271
第34表	ボーリング9出土魚類集計表	272
第35表	ボーリング10出土魚類集計表	272
第36表	ボーリング11出土魚類集計表	272
第37表	A1層～A18層出土貝類集計表	273
第38表	ボーリング1～11出土貝類集計表	273
第39表	A1層～A18層出土爬虫類・鳥類・哺乳類集計表	274
第40表	ボーリング1～11出土爬虫類・鳥類・哺乳類集計表	274
第41表	A1層～A18層出土蔓脚亜綱・海胆綱集計表	275
第42表	ボーリング1～11出土蔓脚亜綱・海胆綱集計表	275
第43表	B区・A区クリーニング動物遺存体集計表	275
第44表	B区出土哺乳類集計表	276
第45表	第2次調査区表土出土動物遺存体集計表	276
第46表	第8次調査区出土貝類・蔓脚亜綱・海胆綱集計表	320
第47表	第8次調査区出土魚類集計表	321
第48表	第8次調査区出土爬虫類・哺乳類集計表	321
第49表	第3次調査区出土動物遺存体集計表	322
第50表	第8次調査区出土魚類集計表	332
第51表	中嶋コレクション魚類集計表	348
第52表	中嶋コレクション動物遺存体集計表	349

図 表 目 次

第1図表	崎山貝塚出土二枚貝綱・腹足綱・蔓脚亜綱の1,000ccあたりの固数体	387・388
第2図表	崎山貝塚出土軟骨魚綱・硬骨魚綱の1,000ccあたりの固数体	389・390
第3図表	宮古湾周辺での漁獲時期	391
第4図表	ドングリ類の長径毎出土点数	428

I 遺跡の位置と環境

1 三陸沿岸の貝塚と宮古湾沿の貝塚

(1) 三陸沿岸の貝塚

三陸沿岸地方とは、北は八戸市周辺部から南は牡鹿半島周辺部までの海岸部を総称するものであり、宮古市はこれのほぼ中心部に位置している。本地域の沖合は、北海道東海岸沿いに南下する親潮（寒流）・本州太平洋岸を北上する黒潮（暖流）・日本海側から津軽海峡を経て南下する津軽海流（日本海流－暖流）の3海流がぶつかりあい、複雑な潮境をつくり出している。

それぞれの海流によって本地域に來遊する魚種も豊富で、このため古來三陸沖は世界三大漁場のひとつにあげられる程漁業の盛んな地域である。

また、宮古市や田老町などの河川にそ上するサケ、マス類も豊富であり、近年では北海道を除く本州域最大の漁獲高を上げている。

本地域の地形的景観は宮古市周辺を境として南北に2大別される。南側は複雑に入組んだりリアス式海岸で、岩礁や砂浜がみられるのに対し、北側は標高100～200mほどの海岸段丘が続くために、海岸線は急崖を成し岩礁地帯が主体となり砂浜の発達は著しく悪い。

しかし、本地域の外線部に相当する仙台湾周辺地域と八戸市～小川原湖周辺地域は、比較的海岸線が単調で砂浜が良く発達している。これは、南端部での北上川や阿武隈川、北端部での馬淵川や新井田川といった大河川の堆積作用に関係するものと思われる。

三陸沿岸部におけるこのような地理的な好条件は、おそらく基本的には縄文時代にまでさかのぼるものと思われ縄文人たちの活発な漁業活動は、関東地方に次ぐとされる貝塚の密集地帯を形成している。

ここでは、三陸沿岸地方を含む、東北地方太平洋岸のうち北は下北半島から南は阿武隈川河口部までの地域に存在する貝塚群を立地環境に基づき7ブロックに分けて概観してみる。

Aブロック（下北半島北端部～陸奥湾北東海）

貝塚数は少ないものの、最花貝塚やドウマンチャ貝塚などの著名な貝塚が存在する。特にドウマンチャ貝塚では、鯨骨製籠が多出したほかトドの焼骨の出土などが注目される。

貝塚の形成時期は、前期と晩期に集中するようである。貝類は最花貝塚が汽水性、ドウマンチャ貝塚が岩礁性を主体とする。

Bブロック（下北半島基部～小川原湖周辺）

貝塚数はやや多く、小川原湖周辺に集中する傾向がみられる。青森県内では最大級とされる二ツ森貝塚や早期後葉～前期初頭に形成された野口貝塚などが存在する。二ツ森貝塚からは骨角器の出土量も多く、青竜刀形骨製品、単式釣針、開高式銚頭、刺突具類、装飾品類が出土している。

貝塚の形成時期は、早期（後葉）～晩期にわたるが、前期に形成されるものが多い。貝類は

三陸沿岸地方

リアス式海岸
海岸段丘

早期～前期のものがアサリやハマグリなどの鹹水性貝類を主体とし、中期前葉～後葉にかけてはアサリにヤマトシジミを含みながら、中期末葉ではヤマトシジミ主体の汽水性貝塚へと移行するようである。

Cブロック（八戸湾周辺）

馬淵川や新井田川河口部周辺にややまばらな貝塚の集中がみられる。この中で、八戸市内には長七八地貝塚・一王寺貝塚・赤御堂貝塚などの著名な貝塚が多く、前二者は国指定史跡として保存されている。骨角器は長七八地貝塚・一王寺貝塚出土のものが重要である。これらは前期後半という比較的古い時期に伴うものであるために器種のバラエティーは少ないものの、組合せ式釣針、開窩式銚頭、骨針、刺突貝類、櫛、装飾品類などがみられる。

貝塚の形成時期は、早期（後葉）のものを含むが、前期～晩期のもものが主体となる。貝類は早期～晩期の段階で鹹水産主体と汽水産主体の2者が見られ、晩期では名川町平虚空蔵貝塚でのみイシガイを主体とする淡水性貝塚が確認されている。おそらく、本ブロックでも時期が下るに伴い鹹水性→汽水性→淡水性（部分的）という貝塚の変質があるのだと思われる。

Dブロック（宮古市～久慈市）

宮古湾以北の海岸段丘上に立地する貝塚群を一括する。岩礁地帯が多く砂浜が少ないためか、貝塚の数が極めて少ない。

しかし、近年の調査により特に北端部での様相が次第に明らかになりつつある。

野田村根井貝塚は標高225m、海岸線からの直線距離2.5mの海岸段丘上に立地する。昭和58年～60年度に岩手県立博物館による発掘調査が実施され、後期末葉の竪穴住居跡に伴う貝層が確認されている。骨角器は多種多様なものが出土しているが、特に燕尾形銚頭の出土が目され、これが現在のところ分布域の最北端になっている。

動物遺存体は、貝類が岩礁性のものを主体とし、内湾性のものを極めて少量含んでいる。魚類は外洋性～岩礁性魚種を主体としながらも、極大種のマグロと極小種のイワシ・サバ類が極めて少ないという一風変わった組成を示している。

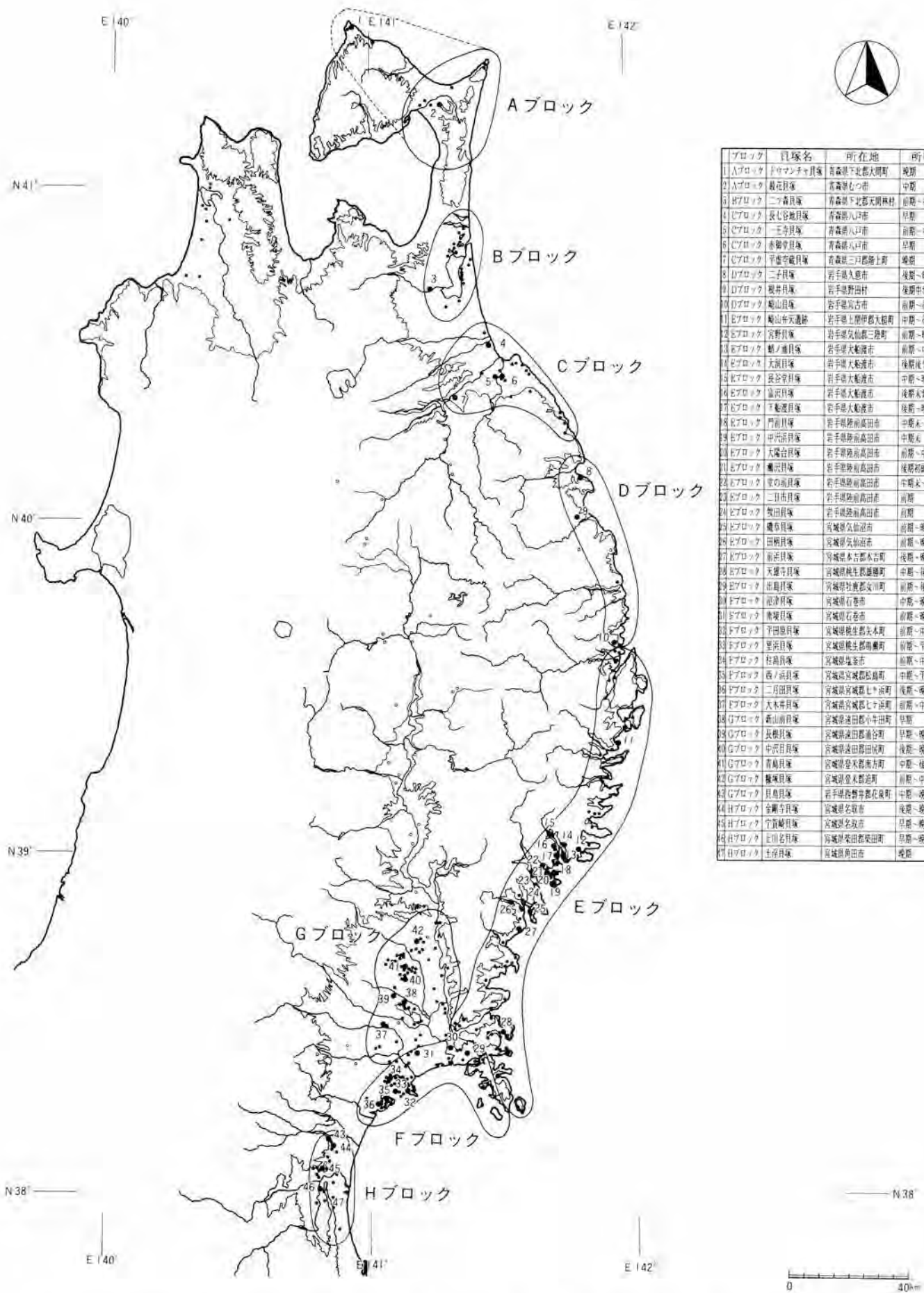
久慈市二子貝塚は海岸線に面した標高30mの低位段丘面に立地する貝塚で、久慈市教育委員会による平成元年度～2年度にかけての調査により、晩期に伴う埋葬人骨3体などが出土している。貝層は後期後葉～前期中葉にかけて形成されたもので、岩礁性貝類を主体とする。骨角器はやはり多種多様なものが出土しているが特に小型の釣針が多く出土している点が注目される。貝層から検出される魚類も釣針のサイズを反映してか、小型の魚種が多いとのことである。

久慈市よりも更に北側の種市町にも数ヶ所の貝塚が分布するが、正式な報告が極めて少なく、その実態は不明である。貝塚の立地環境だけを見ると、北方のCブロックに類似し、これにとり込まれる可能性が大きい。

崎山貝塚と大付貝塚は本ブロックの最南端に位置する。

Eブロック（宮古湾～牡鹿半島太平洋岸）

本来であればもう少し小さな区分けが必要だと思われるが、特に北部での報告例が著しく少



ブロック	貝塚名	所在地	所属時期
1	Aブロック	トウマンチャ貝塚	青森県下北郡大間町 晩期
2	Aブロック	越花貝塚	青森県七戸町 中期
3	Bブロック	二ツ森貝塚	青森県下北郡天間林村 前期-中期
4	Cブロック	長七谷地貝塚	青森県八戸市 早期
5	Cブロック	玉寺貝塚	青森県八戸市 前期-中期
6	Cブロック	赤御堂貝塚	青森県八戸市 早期
7	Cブロック	平盛守蔵貝塚	青森県三戸郡陸上町 晩期
8	Dブロック	二子貝塚	岩手県久慈市 後期-晩期
9	Dブロック	観井貝塚	岩手県野田村 後期中葉-晩期前半
10	Dブロック	駒山貝塚	岩手県久吉町 前期-後期
11	Eブロック	駒山新天邊跡	岩手県上原伊藤大畑町 中期-後期初期
12	Eブロック	宮野貝塚	岩手県久慈郡二戸町 前期-晩期
13	Eブロック	鶴ノ嶋貝塚	岩手県大船渡市 前期-中期
14	Eブロック	大原貝塚	岩手県大船渡市 後期後半-晩期
15	Eブロック	安谷堂貝塚	岩手県大船渡市 中期-晩期
16	Eブロック	湯沢貝塚	岩手県大船渡市 後期中葉-晩期
17	Eブロック	下船渡貝塚	岩手県大船渡市 後期-晩期
18	Eブロック	門前川貝塚	岩手県陸前高田市 中期末-後期初期
19	Eブロック	中沢貝塚	岩手県陸前高田市 中期末
20	Eブロック	大塚台貝塚	岩手県陸前高田市 前期-中期
21	Eブロック	瀬沢貝塚	岩手県陸前高田市 後期初期-晩期
22	Eブロック	空の高貝塚	岩手県陸前高田市 中期末-後期初期
23	Eブロック	二子貝塚	岩手県陸前高田市 前期
24	Eブロック	牧田貝塚	岩手県陸前高田市 前期
25	Eブロック	磯谷貝塚	宮城県久米郡 前期-晩期
26	Eブロック	田原貝塚	宮城県久米郡 前期-晩期
27	Eブロック	前浜貝塚	宮城県本吉郡本吉町 後期-晩期
28	Eブロック	天釜貝塚	宮城県陸生郡陸奥町 中期-後期
29	Eブロック	出島貝塚	宮城県牡鹿郡久米町 前期-後期
30	Eブロック	沼津貝塚	宮城県仙台市 中期-晩期
31	Eブロック	青塚貝塚	宮城県石巻市 前期-晩期
32	Eブロック	千田貝塚	宮城県陸生郡久米町 前期-中期
33	Eブロック	里浜貝塚	宮城県陸生郡鳴瀬町 前期-平安時代
34	Eブロック	柱高貝塚	宮城県塩釜市 前期-中期
35	Eブロック	西ノ浜貝塚	宮城県宮城県松島町 中期-平安時代
36	Eブロック	二子田貝塚	宮城県宮城県七ヶ浜町 後期-晩期
37	Eブロック	大木井貝塚	宮城県宮城県七ヶ浜町 前期-中期
38	Eブロック	轟山前貝塚	宮城県遠田郡小牛田町 早期
39	Gブロック	長根貝塚	宮城県遠田郡湯谷町 早期-晩期
40	Gブロック	中沢貝塚	宮城県遠田郡田代町 後期-晩期
41	Gブロック	青島貝塚	宮城県金沢郡南方町 中期-後期
42	Gブロック	蟹塚貝塚	宮城県金沢郡湯谷町 前期-中期
43	Gブロック	貝島貝塚	岩手県西磐井郡化泉町 中期-晩期
44	Hブロック	金剛寺貝塚	宮城県名取市 後期-晩期
45	Hブロック	宇賀崎貝塚	宮城県名取市 早期-晩期
46	Hブロック	三川名貝塚	宮城県栗原郡栗原町 早期-晩期
47	Hブロック	生原貝塚	宮城県栗原郡 晩期

※本図における貝塚群の分類は、村越（1980）、八戸市立博物館（1988）、藤沼ほか（1989）を参考にした。

第1図 三陸沿岸地方の貝塚分布図

ないため、あえて宮古湾以南のリアス式海岸部に立地する貝塚群を一括した。

貝塚は岩手県域の三陸町から宮城県域の気仙沼市周辺に特に集中する傾向がうかがえる。

本地域のうち岩手県域の三陸町、大船渡市、陸前高田市に存在する貝塚は日本考古学史上特に重要なものが多く、宮野貝塚・長谷堂貝塚・大洞貝塚・富沢貝塚・堂の前貝塚・門前貝塚・大陽台貝塚・瀬沢貝塚・牧田貝塚・二日市貝塚などの貝塚が知られている。北部では宮古湾沿の諸貝塚のほか、大槌町崎山弁天遺跡などがある。

また、大正13年の内務省考査官柴田常恵らによる調査にて大船渡市蛸ノ浜貝塚・下船渡貝塚・陸前高田市中沢浜貝塚の3貝塚が国史跡として指定されている。

さらに、現在大船渡市大洞貝塚では保存を前提とした範囲確認調査が実施されている。

宮城県域では気仙沼市田柄貝塚・同磯草貝塚・本吉町前浜貝塚・雄勝町天雄寺貝塚・女川町出島貝塚などが知られる。

特に田柄貝塚では1mmメッシュの篩分けにより膨大な量の骨角器や動物遺存体が出土しており注目される。

本ブロックでも特に気仙地方以南では、南境型銚頭や錨型釣針などの分布域として同一の文化圏と認められるものである。

本ブロックでの貝層形成時期は前期～晩期にわたり、早期～前期前葉のものは極端に少ない。貝層を形成する貝類は、岩礁性を主体とするものと、アサリを主体とし岩礁性のものを含むものがある。

Fブロック（仙台湾沿岸）

石巻湾・松島湾・旧北上川河口部周辺に集中する貝塚群を一括した。本ブロックでもEブロック同様に日本考古学史上特に重要な貝塚が多く、極めて大規模な貝層を形成するものも多い。

大木式土器の標式遺跡として有名な大木囲貝塚のほか西ノ浜貝塚・里浜貝塚が国指定史跡として保護されている。これら以外には南境貝塚・沼津貝塚・平田原貝塚・桂島貝塚・二月田貝塚などが著名である。

特に東北歴史資料館が主体となって調査した里浜貝塚では、今後の貝塚調査方法についてひとつのあるべき姿勢を提示しており注目される。

本ブロックでの貝層形成時期は、やはり前期～晩期を主体とし、早期～前期前葉に伴うものは少ないようである。貝塚を形成する貝類はアサリ等の内湾性のものを主体とし、これに岩礁性貝類を含むものが多いようである。

Gブロック（北上川下流域）

岩手県花泉町以南の北上川下流域およびこれの支流域と伊豆沼や長沼などの湖沼域に形成された貝塚群を一括した。全国的にも極めて稀少な淡水系貝塚の集中域として重要である。

岩手県域では花泉町貝鳥貝塚が著名である。豊富な骨角器や動物遺存体もさることながら、89体以上とされる人骨の出土には堂目させられる。

宮城県域では田尻町中沢目貝塚・小牛田町新山前貝塚・桶谷町長根貝塚の3貝塚が国指定史跡として保護されている。また、この他に糠塚貝塚や青島貝塚などが知られている。

これらの中で、特に東北大学で調査された中沢目貝塚では廃棄ブロックとしての堆積層の認識や1mmメッシュでの篩分けによる微細な遺物の分析等、現在の貝塚調査での基本方法を実施しており、後の田柄貝塚や里浜貝塚などの調査に大きな影響を与えている。

本ブロックでの貝層形成時期は早期～晩期にわたるが、特に後期～晩期に伴うものが多いようである。貝塚を形成する貝類は早期～前期初頭はカキやハマグリなどを主体とするが、前期中葉～中期はヤマトシジミ、後期～晩期はオオタニシ・ヌマガイ・イシガイなどを主体とし、時期が下がるにつれて、鹹水性→汽水性→淡水性と貝塚の特性に変化が見られる。

Hブロック（阿武隈川下流域）

阿武隈川下流域～河口部および阿武隈山地の太平洋岸に立地する貝塚群を一括したが、福島県域のものは割愛した。

本地域では、比較的古い時期に形成された貝塚も多く、名取市宇賀崎貝塚・同金剛寺貝塚・角田市土浮貝塚・柴田町上川名貝塚などが知られる。

この中で土浮貝塚では上川名Ⅱ式を中心とする時期にヤマトシジミを主体とする貝層が形成されており、特に骨角器では日本最古とされる閉窩式離頭銛の出土が注目される。

本地域での貝層形成時期は早期～晩期であるが、特に前期中葉～中期のものが多い。貝層を形成する貝類は、遺跡により差異はあるもののおおむね早期のものはハマグリなど鹹水性のものを主体とし、前期以降はヤマトシジミなどの汽水性のものを主体とする。ただし、Gブロックと異なり後期以降に淡水性貝類を主体とした貝塚は形成されない。

以上、三陸沿岸を中心として北は下北半島から南は阿武隈川下流域までの太平洋沿岸に立地する貝塚を概観して来た。

北部のA～Cブロックでは、貝塚は早期後半から晩期にわたるが、前期に伴うものがやや多い傾向がある。

本地域のうちB・Cブロックでは馬淵川・新井田川・五戸川などの河川周辺には広い沖積平野や小川原湖などの湖沼が形成されているが、貝塚形成初期（早期後葉～前期）では海進の影響により内湾の状態を呈していたとみられ、主に鹹水性貝類を主体とした貝塚が形成された。また、時期が下るにつれて、干潟や湖沼が形成されはじめて、ヤマトシジミなどの汽水性貝類を主体とした貝塚に変容して行くようである。しかし、後期～晩期に至っても一部の例外を除けば淡水性の貝塚へは移行していないようである。このような様相は、南端部のHブロックに酷似している。

魚類についてはひとつおりのものが検出されてはいるが、スズキ・マダイ・ボラといった内湾性の魚種が主体となるようである。

これらA～Cブロックは例えば前期～中期にかけては円筒式土器の分布域であり、また、骨角器では開窩式離頭銛の分布域として安定したひとつの文化圏を形成しており、これが、基本的には後期～晩期までも続くものと思われる。この文化圏は立地環境を別にすればDブロック北半の久慈市二子貝塚や野田村根井貝塚周辺までをも取り込んでいるようである。

南部のE～Hブロックも前期～中期では大木式土器の分布域として、また、骨角器では南境

型離頭銛・錨型釣針などの分布域としてひとつの文化圏を形成しており、北部のA～CブロックおよびDブロック北半部と対峙している。

F～Hブロックは北上川や阿武隈川などの大河川流域に広大な沖積平野を形成している。

貝塚形成初期（早期～前期）ではやはり内湾の状態を呈しておりいずれも鹹水性貝類を主体とした貝塚が形成されるが、G・Hブロックでは前期初頭～中葉以降干潟や湖沼の形成が始まるとヤマトシジミなどの汽水性貝類を主体とした貝塚へ変容し、やがて後期～晩期にはGブロックでのみオオタニシやヌマガイを主体とした淡水性貝塚へ移行して行く。

一方、Fブロックでは絶えず外洋～内湾に面しており鹹水性貝塚のみが形成されている。

魚類はおおむね内湾性のものを主体とするが、G・Hブロックでは時期が下ると淡水魚を主体とする場合も多い。

D・Eブロックでは他の地域に比して貝塚の形成初期がやや遅れ、前期以降が主体となる。外洋に面した貝塚では岩礁性貝類が主体となるが、入江や湾に面した貝塚ではアサリなどの内湾性貝類を主体とする場合もあるが、汽水性や淡水性貝類を主体とする貝塚は無い。

魚類については、古来マグロ・カツオ等の外洋性回遊魚やフサカサゴ科やアイナメなどの岩礁性魚種およびマダイなどの比較的大型の魚種のみが注目されて来た結果、比較的小柄な漁業活動のみが注目されて来たが、近年の調査ではイワシやサバ等の小魚が以外に大きなウェイトを占めていたことが確認されて来ている。

(2) 宮古湾沿の貝塚

三陸沿岸のほぼ中心部に位置する宮古湾は北東に開口する比較的大型の湾で、西岸に閉伊川や八木沢川などが、湾奥部に津軽石川が注いでいる。宮古湾沿部は丘陵や山地が海岸線まで迫っているが、閉伊川や津軽石川などの下流域にややまとまった沖積平野が形成されており、おそらくこの部分は縄文海進時には海水中に没していたものと思われる。

宮古湾沿にはややまとまった縄文貝塚の集中が見られるが、これらの中には気仙地方と同様に、日本考古学史上極めて重要な貝塚を含んでいる。

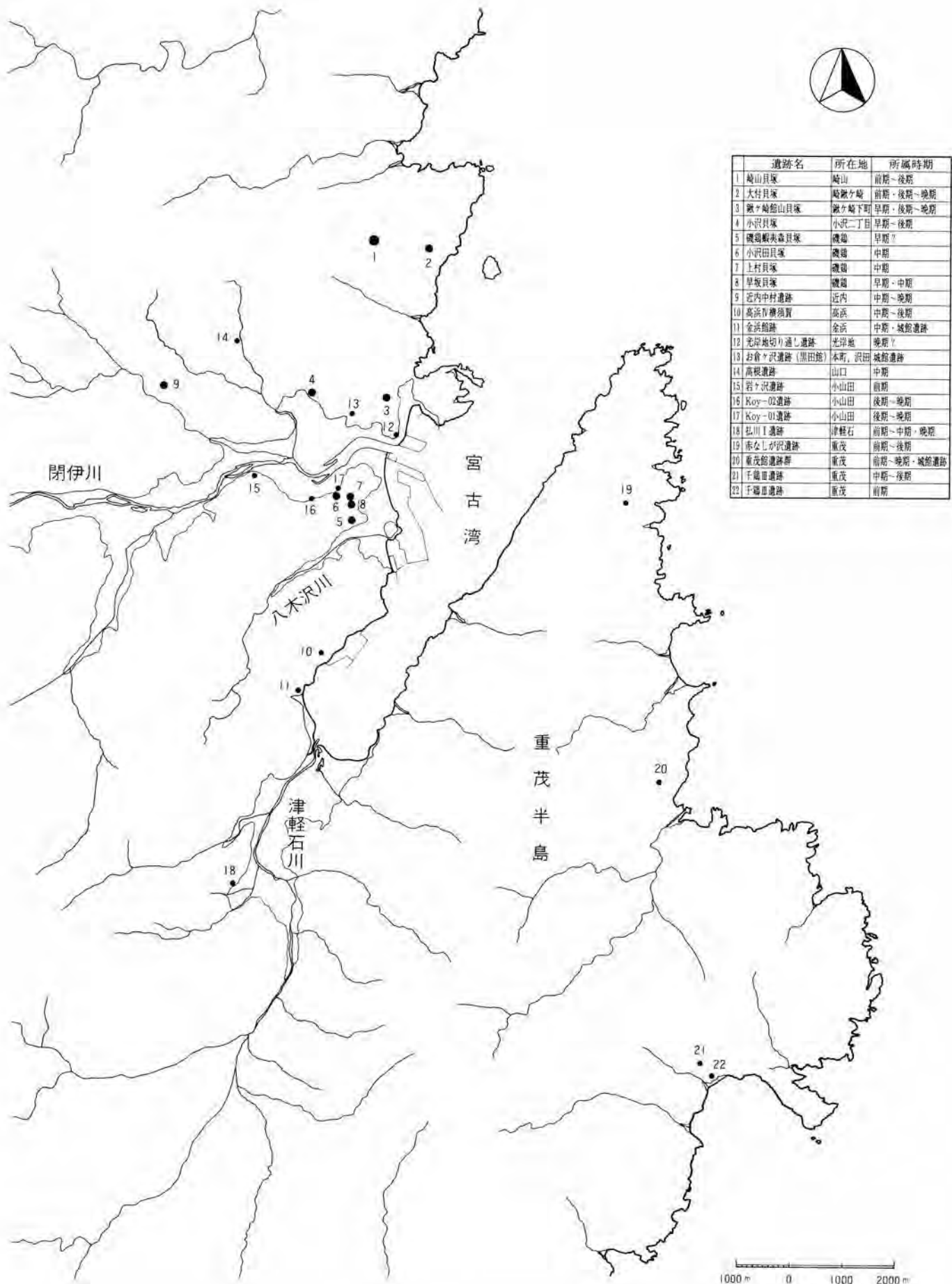
これらの貝塚は地形等の立地環境から2つに大別される。ひとつは北部の崎山貝塚と大付貝塚であり、外洋に面した標高100m以上の海岸段丘（小本丘陵）上に立地している。これらは前述したDブロックに含まれる。他のものは閉伊川河口部や八木沢川河口部周辺などの内湾に面した丘陵や緩斜面上に立地しており、鎌ヶ崎館山貝塚・小沢貝塚・磯鶏蝦夷森貝塚・小沢田貝塚・上村貝塚・早坂遺跡が相当する。これらは前述したEブロックに含まれる。

前者のうち崎山貝塚については後述するとおり、岩礁性貝類と極めて多量に出土する魚骨により特徴づけられる。一方、後者については上村貝塚や早坂遺跡などで内湾性のコタマガイなどをやや多く含む傾向がある他、岸上鎌吉によって報告された鎌ヶ崎館山貝塚では組成比率が判明しないものの岩礁性貝類と内湾性貝類の両者が記載されている。

また、閉伊川の支流近内川中流域に位置する近内中村遺跡では後期～晩期の貝層が形成されていることが確認された。海岸線から直線距離で6 kmほど離れており、現在のところ最も内陸部に形成された貝塚となっている。この貝塚については現在も調査中であり、詳細については後日改めて報告したい。

Dブロック

Eブロック



遺跡名	所在地	所属時期
1 崎山貝塚	崎山	前期～後期
2 大村貝塚	崎ヶ崎	前期、後期～晩期
3 磯ヶ崎館山貝塚	磯ヶ崎下町	早期、後期～晩期
4 小沢貝塚	小沢二丁目	早期～後期
5 磯崎飯浜貝塚	磯崎	早期?
6 小沢田貝塚	磯崎	中期
7 上村貝塚	磯崎	中期
8 早坂貝塚	磯崎	早期、中期
9 近内中村遺跡	近内	中期～晩期
10 高浜IV横須賀	高浜	中期～後期
11 金浜館跡	金浜	中期、城館遺跡
12 荒原地切り通し遺跡	荒原地	晩期?
13 お倉ヶ沢遺跡(黒田館)	本町、沢田	城館遺跡
14 高根遺跡	山口	中期
15 岩ヶ沢遺跡	小山田	前期
16 Koy-O2遺跡	小山田	後期～晩期
17 Koy-O1遺跡	小山田	後期～晩期
18 弘川I遺跡	津軽石	前期～中期、晩期
19 赤女しが沢遺跡	重茂	前期～後期
20 重茂館遺跡群	重茂	前期～晩期、城館遺跡
21 千歳II遺跡	重茂	中期～後期
22 千歳III遺跡	重茂	前期

第2図 宮古湾沿の貝塚分布図

更に、これらのほかにかつて貝塚として記載されたものは、高浜貝塚・金浜館跡・光岸地切通遺跡・小山田岩沢遺跡・弘川遺跡・重茂館遺跡・長沢遺跡・お倉ヶ沢遺跡などがある。

このなかで、昭和55年に調査した金浜館跡では極めて小規模な廃棄ブロックを確認しているものの詳細については未報告である（註3）。

他のものについては、個人的な採集資料などに基づくものであり資料の公開が成されてはいない。また、道路工事などの各種開発により破壊されたものもあり、現在では貝層の存在を確認できるものは無い。従つてこれらの遺跡について貝塚として周知されているとは言い難い状況にある。

(3) 宮古湾周辺での貝塚研究の歩み

〈明治時代〉

1877年（明治10）のE. S. モースによる大森貝塚が発掘と翌々年の1879年（明治12）の『SHELL MOUNDS OF OMORI』の刊行は、日本考古学にとって大きな一歩を標したことは改めて述べるまでも無いことである。1883年（明治16）にはモースの弟子佐々木忠次郎らにより茨城県陸平貝塚の調査が実施されるが、これは日本人だけで実施された初めての発掘調査である。

また、1893（明治26）には東京帝国大学理学部に人類学講座が開設され、坪井正五郎が教授として赴任している。この10数年の間、岩手県内では目立った動きはなく、豊富な貝塚群も中央の学会にも周知されない状況が続いている。

1896年（明治29年）鳥羽源蔵は人類学雑誌上に「陸前国気仙郡ノ石器時代遺跡」を寄稿し、門前貝塚などの紹介を行うが、これが岩手県内における貝塚研究の第一歩であると言うことができよう。

1899年（明治32）、当時帝国大学嘱託の八木契三郎は鳥羽の案内で門前貝塚・瀬沢貝塚・長谷堂貝塚の発掘調査を実施しているが、おそらくこれが県内での貝塚調査の実質的な端緒出あろう。鳥羽はこの後も門前貝塚・瀬沢貝塚などの発掘調査を実施して行く。

この後、1906年（明治39）の高島多米治による小友村地内の貝塚調査と1907年（明治40）～1908年（明治41年）の二条侯爵家銅駝坊陳列館派遣の野中完一による瀬沢貝塚と中沢浜貝塚の発掘調査が実施され、特に野中により中沢浜貝塚からは23体もの縄文人骨が発見されたと言う。

このように県内の貝塚研究は当初において気仙地方の貝塚が中心となり進められて来た。

しかし、これにやや遅れるものの宮古地方においても貝塚研究の第一歩が標されている。

中嶋吉兵衛

1903年（明治36）、当時銚ヶ崎尋常小学校で教鞭をとっていた中嶋吉兵衛は銚ヶ崎館山貝塚で1点の釣針を発見している。この後、中嶋は1908年（明治41年）まで表面採集のみにより同貝塚の資料採集を続けている。

岸上鎌吉

1908年（明治41）に東京帝国大学農科大学水産学科が開設され、岸上鎌吉が教授として赴任すると、岸上は翌1909年（明治42）7月に岩手県を訪れ、細浦上ノ山貝塚を発掘している。

この直後に岸上は宮古地方を訪れ、中嶋に会っている。岸上は中嶋に銚ヶ崎館山貝塚の状態を親しく質問した後に、中嶋を案内に同貝塚へ赴き3日間の調査を実施している。これが当地方における貝塚の発掘調査の端緒となっている。岸上はこの調査で有力なる参考品として骨角

器のほか魚骨や貝殻等の動物遺存体を多数得ている。このため岸上は、1910年（明治43）7月と1911年（明治44）と再三にわたり同貝塚を調査したほかに、1910年（明治43）11月には助手の久保雷之助を派遣して調査にあたらせている。この結果、岸上は充分な調査結果を上げることができたようである。

この間、中嶋も岸上の調査に参加するとともに独自に同貝塚の発掘調査を継続しており、岸上が必要とする資料は岸上へ提供するとともに、それ以外の遺物（石器、土器、骨角器等）は皆坪井正五郎へ寄贈している。

岸上は鯨ヶ崎館山貝塚をはじめとする全国の貝塚の情報を基に1911年（明治44）に「Prehistoric Fishing in Japan」を発表しているが、この中で鯨ヶ崎館山貝塚出土の骨角器が重要な位置を占めているうえに、動物遺存体も棘皮動物1種、軟体動物14種、魚類24種のほかにクジラ類とアザラシという他の貝塚を圧倒する数と量を記載している。

また、同貝塚ではマグロ等の外洋性回遊魚やダボギスなどの深海性魚種などへの積極的な漁撈活動があったことを特筆している。

岸上は漁業という生産活動を復元するために貝塚を研究対象とする点において、当時の学会では他の研究者とは一風変わった切口を持っていた。そもそも岸上が研究の目的とした所は1919年（大正8）に著した『趣味の魚』で「要するに本邦石器時代の漁業は今から想像し難い程度にまで進歩していた。魚の種類も多いし、沖も遠くまで、海も百尋の深さまで出漁していたと見え、ダボギス、ツノザメ等の深い海底に住む魚類の骨もある。就中、漁具の種類に富む点は世界の諸国に見る事の出来ない進歩である。当時の漁具で世界各地から従来発見された物を

Prehistoric Fishing in Japan



岸上鎌吉（1867～1929）

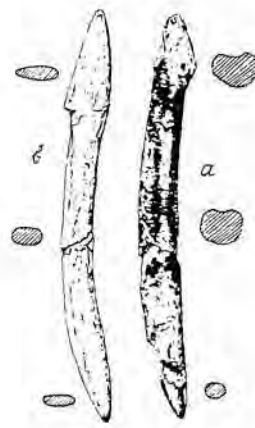


Fig. A. Dart-heads of deer-horn. From Kuwagasaki.

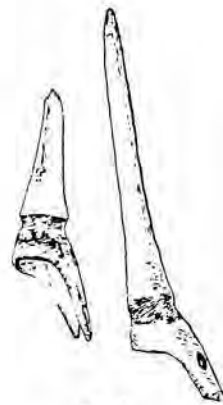


Fig. C. Harpoon-heads of antler. From Kuwagasaki.



Fig. D. Fish-hook of antler. From Kuwagasaki.



Fig. E. Fish-hook of antler. From Kuwagasaki.



Fig. II. Fish-hook of antler. From Kuwagasaki.



Fig. K. Fish-hook of antler. From Kuwagasaki.



Fig. F. Fish-hook of antler. From Kuwagasaki.

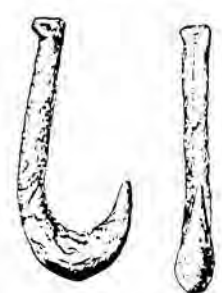


Fig. L. Fish-hook of antler. From Kuwagasaki.

第3図 岸上鎌吉により報告された鯨ヶ崎館山貝塚の骨角器

全部合算しても日本一国の其より其数、其品種に於て遙かに貧弱であるとは実に驚くべきではないか。何れの点より見るも、歴史前の日本は勝たる水産国で、いまからいえば反って今日の方が衰微している。自分の此歴史的考究も詰り現今の漁業を振作せしめようとするに他ならぬ。」と結んだ一文により知る事が出来る。

先史遺物帖

一方、中嶋も坪井、岸上、柴田常恵（当時助手）の指導を得ながら1909年（明治42）以降銚ヶ崎館山貝塚の資料整理を開始する。坪井の命名により『先史遺物帖』と題し、坪井、岸上を始めとし新渡戸稲造、風鐸博士（和田博士か？）、八重樫七兵衛らが序文を寄せたこの文献はおよそ1912年（明治45～大正元）ころに一応の完成を見たようであるが、以後も追補を行っているようである。この『先史遺物帖』は残念ながら刊行されることはなかったが、『宮古市史 漁業・交易』においてその一部が紹介されている。岸上の薫陶を受け、骨角器と動物遺存体についての記述に重きが置かれているが、なかでも釣針の記述では他地域との比較により当地方の特徴について触れており、また、銚については閉窩式の燕形離頭銚2点と区別して開窩式離頭銚5点を形態の異なる銚であると記載している。

『先史遺物帖』は骨角器の分類、記述の内容、実測図の正確さなど質的に高いものがあるが、何よりも自らが収集した資料をこのような形でまとめ上げる姿勢には最大級の評価が与えられるべきであろう。

岸上と中嶋らは銚ヶ崎館山貝塚と同時に磯鷄蝦夷森貝塚の調査も併行して行っており、1909年（明治42）に貝層を発見すると、1910年（明治43）に久保助手の来跡を経て、1911年（明治44）の岸上の来跡の折には別な地点で貝層を発見しており、中嶋は貝の種類の高さと面積及び層厚は付近の貝塚にその例を見ないと記録している。

また、中嶋は1910年（明治43）に大付貝塚を発見しており、岸上は「Prehistoric Fishing in Japan」の中で、軟体動物2種、魚類2種とクジラ類を記載している。

〈大正時代〉

1912年（大正2）、坪井正五郎が没すると貝塚研究の目的は人種論を中心とした民族論から形質人類学へ次第に移行して行くが、やはり人骨の検出が必須であり、全国の貝塚が発掘され続けることになる。

宮古地方では中嶋の案内により磯鷄蝦夷森貝塚にて1915年（大正4）和田博士による調査と翌1916年（大正5）新渡戸稲造博士による調査が実施されている。

下閉伊郡誌

中嶋はこの後も積極的に調査地域を拡大して行き、1922年（大正11）に刊行された『下閉伊郡誌』「付録・石器時代遺跡考」の中で中嶋は下閉伊管内に百数十ヶ所の遺跡を確認している。

しかし、この時点で宮古湾沿地方で貝塚として記載された遺跡は銚ヶ崎館山貝塚・大付貝塚・磯鷄蝦夷森貝塚の3遺跡のみであった。

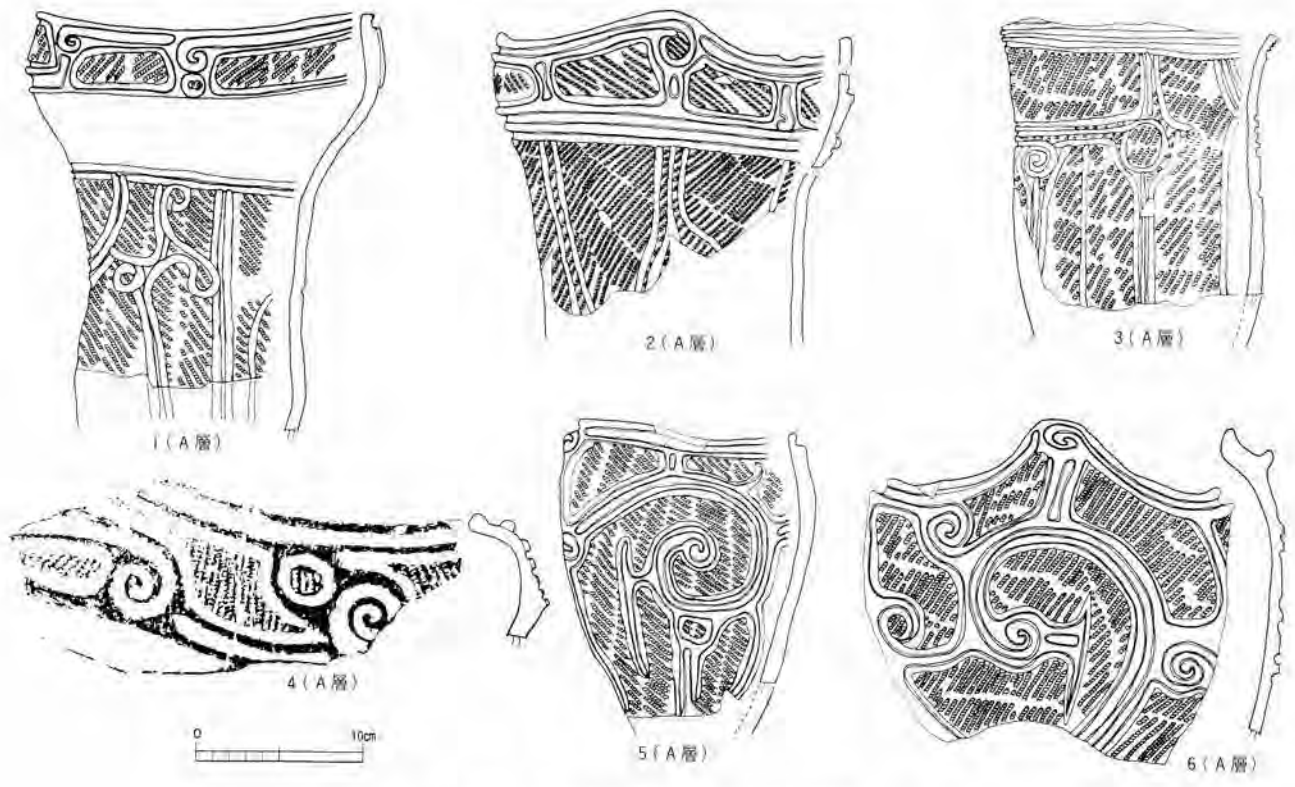
1923年（大正12）には東北帝国大学長谷部言人教授により磯鷄蝦夷森貝塚の大発掘が実施される。これは人骨の検出を目的としたものであったが、この折にはわずかな人骨片を検出したのみで終わったようである。また、これ以外の遺物については正式な報告が成されておらず詳細は不明である（註4）。

柴田常恵と小田島祿郎

1924年（大正13）夏、内務省考査官の柴田常恵は小田島祿郎（史跡調査員）を案内に岩手県



館山貝塚 (Shell mounds of Tateyama)



第4図 鎌ヶ崎館山貝塚と出土遺物

※鎌ヶ崎館山貝塚は明治末年の岸上や中嶋らによる発掘調査以降何年かの発掘調査が実施されてはいるものの、正式な報告は極めて少なくその実態は不明なままである。

上の地形図は表面採集と聴き取り調査により作成したものであるが、これによると台地をとりまく北・東・南の斜面部に貝塚が形成されているようである（『分布調査1』より）。

また、平成元年度には台地上にある宮古測候所の建替えに先立つ発掘調査が実施され、縄文中期中葉～後期の遺構が確認された。図示した土器はこの際に第1号土坑跡からまとまって出土したものである。

更に遺物包含層などからは早期～晩期にわたる遺物が検出されている。

縄文期の集落以降は、古代の集落、中世の城館として極めて長期にわたり台地上が活用されており遺構の保存状況は必ずしも良好ではない。

沿岸部の遺跡を踏査している。この踏査は国指定史跡の選定を目的としたものであり、気仙地方の主要貝塚を踏査した後に宮古地方に立寄り、中嶋を案内に加え3日間の踏査を実施している（註5）。

宮古地方での初日は磯鶏蝦夷森貝塚にて発掘調査を行い屈葬人骨を1体検出している。この時に記録された柴田の野帳には、

「上は荒地の畑（遺物見当らず）の崖地（高約八尺）にて上層一尺五寸黒土、貝層二、三寸 其下七寸にして人骨、其下四、五寸にて赤土」

などと記入されており、人骨の出土状況や貝層断面のスケッチと写真が残されている。

また、この折に台地上の立石に大きな興味を示し、その存在を確認している。

2日目は鉾ヶ崎館山貝塚に立寄っただけで崎山村へ向かっている。崎山村では崎山小学校で周辺部の遺物等を見学した後指定候補地の大付貝塚へ向う予定であったが、すぐ近くにも遺跡があるというので立寄った所が崎山貝塚であった。少し長くなるが、小田島の寄稿した新聞記事を引用する（註6）。

11月21日号（四十六）

崎山貝塚の発見

「（前略）（大付）貝塚を発掘すべく（崎山小）学校を出る。直近所にも土石が出る
と云うので立寄った。三面溪谷を繞らした丘陵は一寸険要の地形を示して居る。作物
の間に分け入ってガサガサと探し廻っていると大きな石が突っ出っていた。
意外と心中にさげんだ。



南より



東より

柴田常恵と小田島禄郎により注目された崎山貝塚の立石

此處にも磯鶏式の遺跡があるのである。柴田氏は余を顧みて「これは堅穴じゃないか」と質問された。稗の穂先の窪んでいる如何にもきにかかる。一寸失礼して石に上って見たがなお明瞭でない。此の土質と傾斜の度合からすれば若しあったとしても先づ先づ埋没□□□□べき程度であると断定を下して降りた。」

11月22日号（四十七）

「地主が獣骨も出ると云うに力を得て詳しく聞くとなんでも貝層もあるらしい。一つ掘ってみようと中腹に行く。如何にも鹿や鮪の巨大な骨が現れて人々を喜ばしたが、比海遠き丘陵から鯨の出て来るのは殊に面白い。貝層もあった。極めて薄い立派に貝層と命名し得るものである。畠山校長のお話では反対斜面にも出るらしいが大付貝塚発掘という日程だから此處は匆々に切り上げた。とにかく偶然貝塚が発見されたのは頗る愉快なことでやはりくどく聞くに限ると考えざるを得なかった。

大付貝塚は中嶋君愛蔵の土ほりの土器よりすれば正に新旧夾雑のものである。相当の面積と層厚があれば勿論指定候補地として有力なものとして期待して行った。

（中略）要するに（大付貝塚は）普通の遺跡に貝の微量をふりまいた位のもので貝塚の名は与えられるべき程度のものではない。

こんなことなら新発見のもの（崎山貝塚）を掘る方がよっぽと価値があったとこぼしたが今さらとりかえしはつかない。」

最終日の3日目は山口村の一石一字経塚を調査している。

この柴田による一連の踏査により蛸ノ浦貝塚・下船渡貝塚・中沢浜貝塚・関谷洞穴と山口村の経塚が指定候補地として選定された後に仮指定を経て、1934年（昭和9）に三貝塚は国史跡として指定されている（註7）。

指定された貝塚はいずれも大規模なものであり、貝層の分布面積や層厚が指定の重要な要件となったのは当時の指向性からすれば止むを得ないことであった。

また、柴田は瀬沢・細浦上ノ山・鎌ヶ崎館山といった著名な貝塚は、それまでの発掘調査により主体部分は掘り尽くされたものとしてあまり重要性は認めていないようである。

〈昭和時代〉

1919年（大正8）に「史跡名勝天然記念物保護法」が公布されるが、これはひとつには人骨を求めた研究者たちによる貝塚などへの乱掘を阻止しようとの目的があったとされている。これ以降、昭和初期には県内での貝塚調査事例は著しく減少していく。

1927年（昭和2）小田島は宮古以北の沿岸部を踏査しているが、この際に鎌ヶ崎館山貝塚・大付貝塚のほか柴田とともに発見した崎山貝塚を調査している。

また、1938年（昭和13）には角田文衛による鎌ヶ崎館山貝塚の調査も実施されているが、これらの成果は公表されていない（註8）。

敗戦後、慶応大学・早稲田大学・岩手大学などを中心として発掘調査が再開されるが、貝塚については気仙地方と県南部の貝島貝塚などに調査が集中している。

この間、宮古湾沿地方では目立った動きはなくなるが、田村忠博・中嶋隆（吉兵衛氏の子息）

両氏による分布調査が開始される。

1967年（昭和42）に田村氏と岩手大学草間俊一教授により調査された磯鶏蝦夷森貝塚からは完全な形で屈葬人骨1体が検出され、現在は市史編纂室に保管されている。

また、1978年（昭和53）に田村・中嶋両氏の協力を得て岩手県立博物館が発掘調査を実施した大付貝塚からも屈葬人骨1体のほかに竪穴住居跡1棟などが検出された『大付報文79』。これらの資料は現在同博物館に展示されている。

両氏の努力により、当地方では新たな貝塚を発見できたことは(2)に示した通りであるが、これらの資料は大半が公表されないままになっているために、現在その存在さえも確認できない貝塚も多いことは遺憾である。

ただし、田村氏の採集した資料は一括して市史編纂室に寄贈されており、一部についてはその報告も行われている（註9）。

この後、1987年（昭和62）に岩手県埋蔵文化財センターにより上村貝塚の発掘調査が実施されている。ここでの貝層は中期の竪穴住居跡埋土中に形成された極めて小規模なものであったにもかかわらず、篩分けの結果内湾性二枚貝類を含む多くの動物遺存体が検出されている。また、再葬と思われる5体以上の人骨が出土しており特筆される。

以上、明治時代から昭和時代までの当地方における貝塚の研究史を辿ってみた。当地方においては明治40年代の岸上の來宮により本格的な調査が開始され、その黎明期において鎌ヶ崎館山貝塚や大付貝塚が果たした役割は極めて重大なものであった。中嶋が坪井や岸上をはじめとする当時の研究者たちとどのような交流があったのかは、中嶋家に残された書簡類や記録類を調査すればより明瞭になるものと思われる。今後、どのような形で公開されることを望む次第である。

また、岸上以降多くの研究者達が訪れて貝塚を調査しているが、岸上以外の多くは正式な報告が成されて居ないままである。あるいは、筆者らの管見に触れない事例が多々あるかも知れない。

最後に、崎山貝塚についてはその発見が大正期に入ってからであり、乱掘とも言うべき大規模な発掘調査を免がれている。このため、後にその名前のみは有名となったものの遺跡としての実態は不明瞭なままとなっていた。

反面、このことは奇跡的とも言える保存状態の良さを保つ一因となったことも否めないのがある。

〈 註 〉

註1 Kmakichi Kishinouye 「Prehistoric Fishing in Japan」、『東京帝国大学農科大学紀要』第2巻

註2 これらについては次の文献に記載がある。

小岩末治 1960 『岩手県史、第1巻、上古篇、上代篇』 岩手県編

宮古市 1981 『宮古市史 漁業・交易』 宮古市

文化庁 1984 『全国遺跡地図 岩手県』 文化庁

- 註3 この廃棄ブロックは所存時期が不明であり、報告書への記載も成されていない。
- 註4 小田島祿郎 1924 「東海岸の史跡踏査」岩手日報より
- 註5 この柴田による踏査については同行した小田島が54回にわたり紀行文を寄せており、行動の様子を詳しく知ることができる。尚、当初は「気仙の史跡踏査」として、また、14号からは「東海岸の史跡踏査」と改題している。
- 註6 小田島祿郎 1924「東海岸の史跡踏査(46)・(47)」岩手日報より
- 註7 このほか、同時に選定された大船渡市関谷洞窟は昭和32年に、宮古市一字一石経塚は昭和50年にそれぞれ県指定史跡として指定された。
- 註8 『分布調査1』より
- 註9 鎌田祐二 1987 「宮古市磯鶏蝦夷森貝塚出土の資料—自然遺物及び骨角器を中心として」『宮古地方史研究』第4号 宮古地方史研究会

〈参考・引用文献〉 前掲したものは除く。

- 八戸市立博物館 1988 『図録 青森県の貝塚』 八戸市立博物館
- 青森県教育委員会 1980『長七谷地貝塚』及び村越潔「特別寄稿 青森県の貝塚」、青森県埋蔵文化財発掘調査報告書第57集
- 熊谷常正ほか 1986 『昭和61年度企画展 岩手の貝塚』 岩手県立博物館
- 熊谷常正ほか 1987 『岩手県野田村根井貝塚発掘調査報告書』 岩手県立博物館調査研究報告第3冊
- 草間俊一・金子浩昌 1971 『貝鳥貝塚』 岩手県文化財愛護協会
- 草間俊一ほか 1974 『崎山弁天遺跡』 大槌町教育委員会
- 陸前高田市 1994 『陸前高田市史 第2巻 地質・考古編』 陸前高田市
- 大船渡市 1978 『大船渡市史 第1巻 地質・考古編』 大船渡市
- 三陸町 1990 『三陸町史 第1巻 自然・考古編』 三陸町
- 及川洵 1983 『気仙地方の縄文貝塚』陸前高田市郷土史第二集 陸前高田市郷土史研究会
- 千葉啓蔵 1992 「岩手県二子貝塚」 『季刊考古学』 第41号 雄山閣出版
- 草間俊一 1963 『種市の歴史(原始—中世) 種市町内諸遺跡の調査報告』 種市町
- 佐藤正彦ほか 1985～1988 『中沢浜貝塚Ⅰ～Ⅳ』 陸前高田市教育委員会
- 藤沼邦彦ほか 1989 『宮城県の貝塚』 東北歴史資料館資料集25
- 岡村道雄・藤沼邦彦ほか 1982～1991 『里浜貝塚Ⅰ～Ⅶ』 東北歴史資料館
- 宮城県教育委員会 1986 『田柄貝塚Ⅰ～Ⅲ』 宮城県文化財調査報告書第111集
- 須藤隆ほか 1984 『中沢目貝塚』 東北大学文学部考古学研究会
- 須藤隆 1986 『中沢目貝塚—第3次調査概報—』 東北大学文学部考古学研究会
- 須藤隆 1994 『土浮貝塚 平成5年度調査概報』 角田市教育委員会
- 岸上鎌吉 1919 『趣味の魚』 日新閣出版
- 小田野哲憲 1984 「岸上鎌吉；日本先史時代の漁撈」『岩手県立博物館研究報告』 第2号
- 小田野哲憲 1985 「岸上鎌吉；日本先史時代の漁撈(2)」『岩手県立博物館研究報告』 第3号
- 小田野哲憲ほか 1991 『上村貝塚発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第158集

2 崎山貝塚の位置

崎山貝塚は岩手県宮古市大字崎山第1地割字千束長根、第2地割字道ノ下、第3地割字トロノ木に位置しており、遺跡の基部を国道45号線が通っている。

遺跡の所在する崎山地区は宮古市北方の沿岸部に位置し、JR宮古駅から直線距離で北北東へ約4km程であり、北へ3.5km程で田老町との境界に達する。

遺跡付近は市街地からやや離れていることと、海岸線付近が陸中海岸国立公園として指定されていることにより、地形や自然環境の保存状態が比較的良好である。

しかし、近年は次第に宅地化の波が押し寄せて来ており、国道や市道に面した利便の良い場所を中心に、昭和50年代以降緊急発掘調査が増加して来ている。

3 崎山貝塚の環境

(1) 地形と地質

第5図と第6図は宮古湾沿地区北半部の地形と地質を示した図である。

第5図西端には北山山地の東縁部に相当する山地が見られ、閉伊川以北のものを黒森山山地以南のものを花輪山山地と呼ぶ。これらは比較的起伏量が少なく、中起伏山地～小起伏山地に分類されている。これらはいずれも宮古花崗岩体と呼ばれる花崗岩類を基盤としている。この花崗岩類は風化が進み、表層では真砂土化しているところも多い。

本図幅南西端部に位置する重茂半島に位置する山地は十二神山山地と呼ばれる。これも大浦花崗岩体と呼ばれる花崗岩類を基盤岩としている。

なお、本図幅外の閉伊川中～上流域や岩泉方面などの北部北上山地にはペルム紀～三疊紀に堆積したチャート・粘板岩・砂岩・火山岩類などが広く堆積している。これらの地層はもともと固いうえに、花崗岩による熱変成作用を受けて更に固化している。このためなかなか風化が進まずに、山間部を流れる河川は一様に狭い谷を形成している。

しかし、縄文時代においてはこれらの地区は剥片石器の素材となる母岩の重要な供給源となっていたはずである。

山地の縁辺部と海岸部には丘陵地がみられる。これらの中で閉伊川流域に帯状に分布するものを千徳丘陵と呼び、八木沢川流域に分布するものを八木沢丘陵と呼ぶ。これら、はいずれも市街地の後背地を形成している。基盤岩は、やはり宮古花崗岩体で著しく風化しており所によってはかなり深くまで真砂土化している。このため、小河川や沢による開析が著しく、平面形態は樹枝状を呈し、谷底は浅く開かれて、複雑な入組みをみせている。海岸部に分布する丘陵地で、崎山地区以北のものを小本丘陵、重茂半島のものを鮎ヶ崎丘陵と呼ぶ。

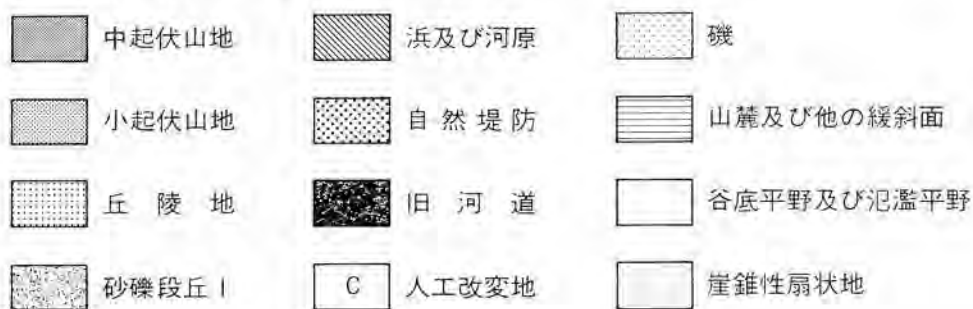
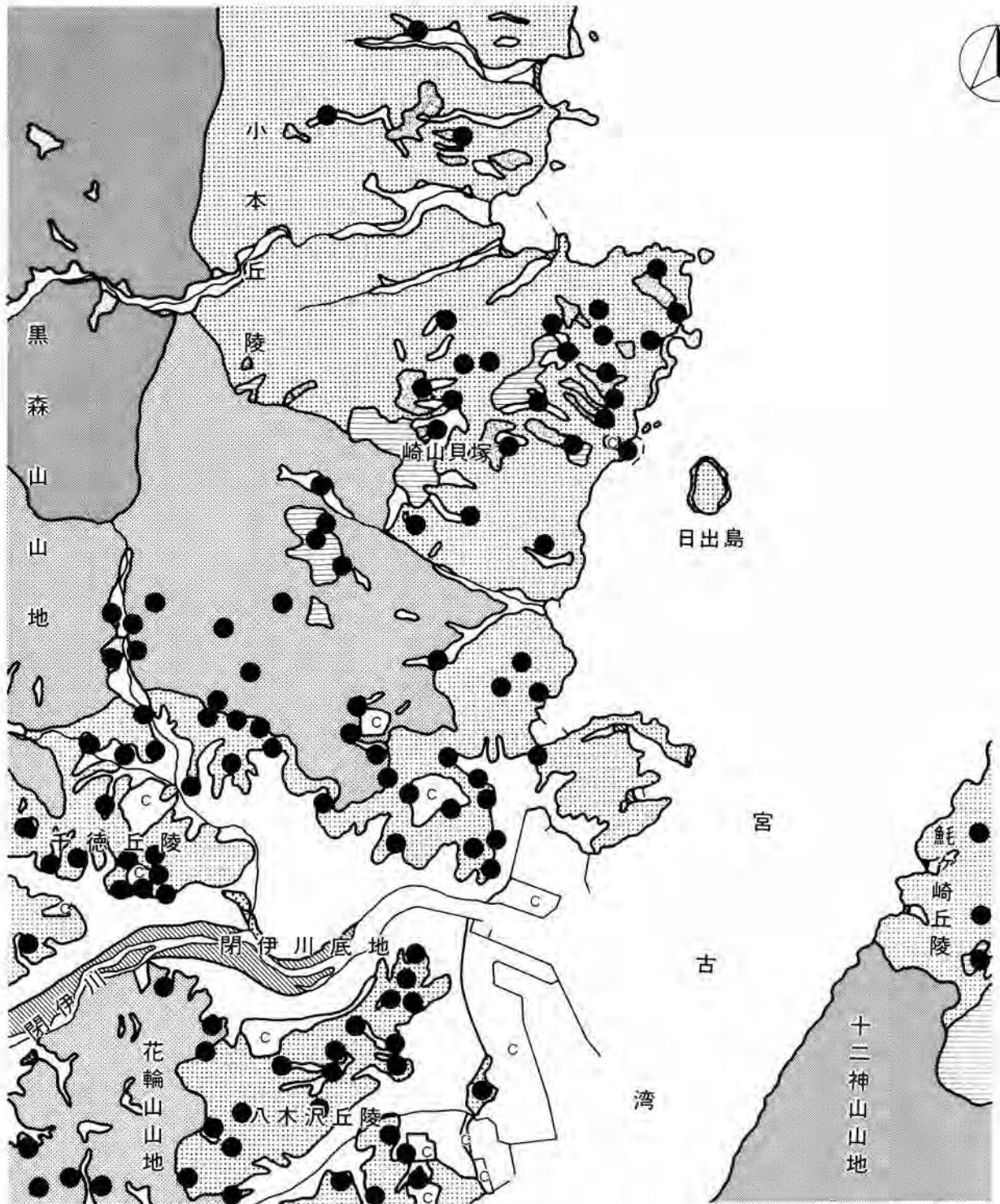
小本丘陵は本図幅外の岩泉町付近まで広がる丘陵地であり、本図幅内では海岸線付近で約100m、西側の山地寄りでは約130mもの高度を有している。これは更新世の海岸段丘（海食台地）が開析されて生じたもので、段丘面の保存状態が極めて悪く、崎山・女遊戸地区などにわずかに残されている。この海岸段丘は三陸沿岸北部の九戸段丘に相当するものであるが、九戸段丘は久慈地方で240～180mの高度を持つに対し、宮古市周辺の南端部ではかなり高度を感じている。

小本丘陵の基盤岩は田老花崗岩体と、デイサイト質火砕岩などを主体とする原地山層を中心

黒森山山地

小本丘陵

田老花崗岩体
原地山層



第5図 崎山貝塚周辺地形分類図

宮古層群

とするが、原地山層は花崗岩の貫入により変成作用を受けている。これらの基盤岩類は前述したとおり段丘面の保存状態が悪いことから露出している箇所が多く、特に表層での風化が著しく粘土化しているところが多い。

また、海岸線に沿って中生代に堆積した宮古層群の露頭が点在している。これらは砂岩、シルト岩、泥岩などを主体とし、多くの化石を含むところで有名であるが、このうち砂岩は縄文時代には石皿や砥石といった石器の素材として活用されている、また、浄土ヶ浜を構成している浄土ヶ浜酸性火山岩（流紋岩）も遺跡に持ち込まれている。

重茂半島の鮫ヶ崎丘陵も小本丘陵とほぼ同様であるが、小本丘陵よりさらに高度を減じているように思われる。また、これ以南の地区では海岸段丘が不明瞭となる。

閉伊川とその流域にはややまとまった低地が形成されている。また、本図幅外の津軽石川周辺も同様である。

ボーリング調査によると閉伊川低地の下には、海拔-65m~-55m付近に更新世の削剥面があり基盤の花崗岩が露出している。また、この面を覆い部分的に安山岩を主体とした崖錐性堆積物が認められる。

これらの上部には更新世末期～完新世の海進（所謂縄文海進）に伴う未固結の堆積物が認められ、下層から下部砂礫層・中部シルト層（沈泥）・上部砂礫層に大別される。これらのうち、中部シルト層は所々に貝殻片を含んでおり、内湾性の堆積物と考えることができる。

また、閉伊川支流の山口川流域もほぼ同様であるが、上部砂礫層があまり発達せずに泥炭層が厚く堆積している。これは海進の盛期以降、山口川流域が湖沼化し次第に泥炭層を発達させていったものと思われる。

これら以外の地形は、閉伊川流域に点在する自然堤防や、津軽石川河口部の三角州などがある。また、閉伊川や津軽石川などの支流河谷や小溪流の谷中に分布する崖錐性扇状地が認められる。

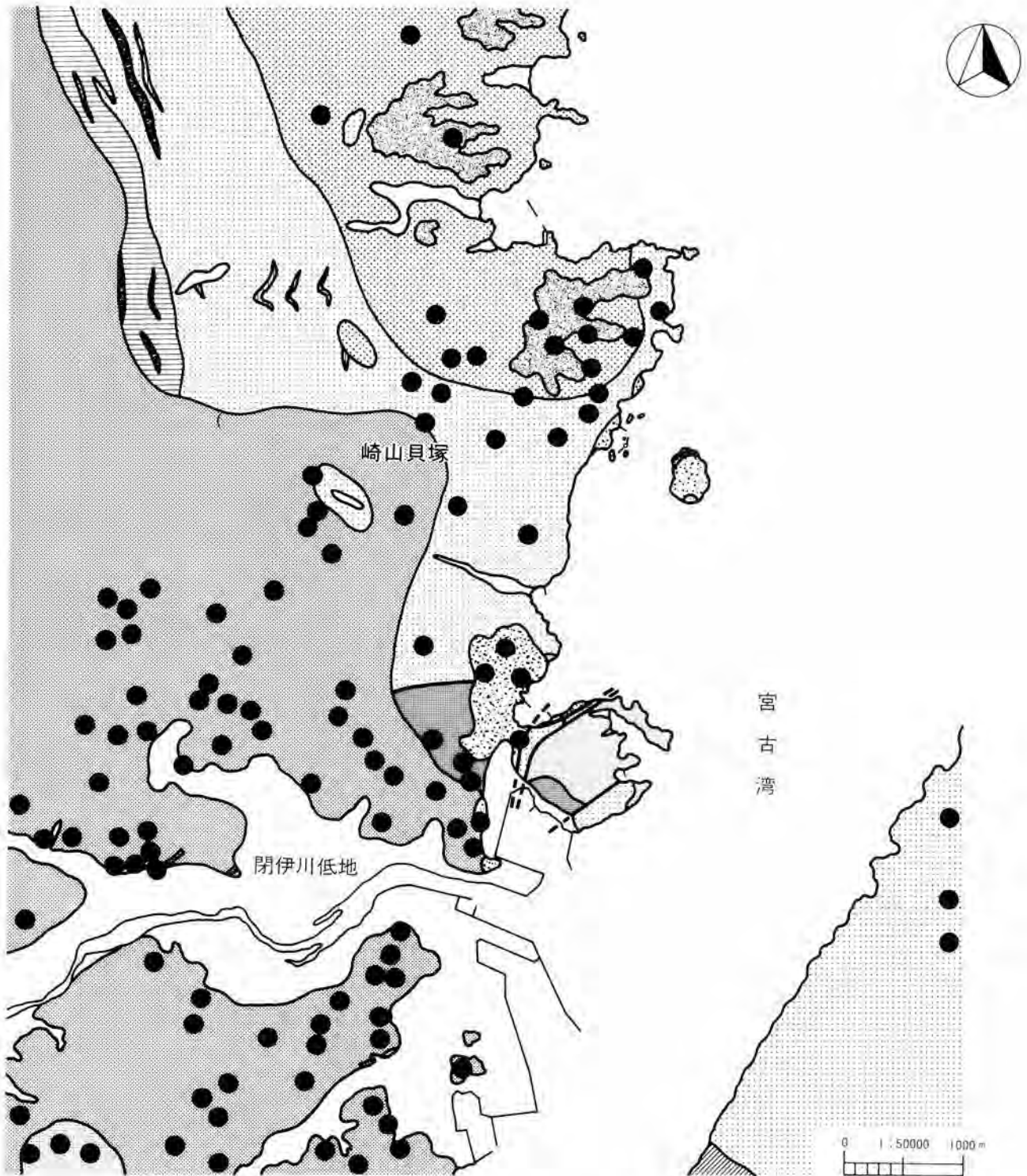
宮古湾沿の縄文遺跡は一般に小起伏山地や丘陵地上の平坦面や緩斜面上に立地するものが多い。また、閉伊川流域などでは低地に面した緩斜面部や小河川により開析された谷底平野周辺に立地するものも認められる。

縄文遺跡の多くは前期～後期を主体としており、草創期～早期に伴うものや一時的に海水準の低下があったとされる晩期に伴うものは著しく少ない。

古期と新期の縄文遺跡の絶対数自体が少ない可能性は当然考えられるが、場合によっては低地内に堆積する沖積層の中に埋没している可能性もあり、今後この方面での資料収集が急務となろう。

〈参考・引用文献〉

- 岩手県 1973 『北上山系開発地域土地分類基本調査 宮古、鮫ヶ崎』
- 岩手県 1973 『北上山系開発地域土地分類基本調査 田老』
- 島津光夫・田中啓策・吉田尚 『田老地域の地質』 通商産業省工業技術院地質調査所
- 吉田尚・片田正人 『宮古地域の地質』 通商産業省工業技術院地質調査所
- 経済企画庁総合開発局国土調査課 1958 『全国深井地質資料台帳 北海道・東北(1)地方篇』
- 宮城県 1963 『全国地下水（深井戸）資料台帳 東北編』
- 宮古市 1979 『宮古市の自然』
- 工藤一 1977 『宮古市における深井戸の研究』『史潮 第13号』 岩手県沿岸史談会



- | | | |
|--|-------------------------------|------------------------|
| 礫、砂及び粘土沖積層 (新生代) | 角閃石黒雲母花崗閃緑岩—トーナール岩宮古花崗岩 (中生代) | 泥岩シルト岩五層小本層 (中生代) |
| 段丘面 (九戸面) | 角閃石黒雲母アタメロ岩大浦花崗岩 (中生代) | 安山岩、陸中層群 (原地山層) (中生代) |
| 黒雲母流紋岩—黒雲母角閃石デイサイト浄土ヶ浜及び門神岩酸性火山岩 (新生代) | 閃雲花崗閃緑岩田老花崗岩類 (中生代) | チャート、陸中層群 (原地山層) (中生代) |
| 宮古層群 (中生代) | デイサイト質火砕岩、泥岩薄層を伴う原地山層 (中生代) | 頁岩、陸中層群 (原地山層) (中生代) |

第6図 崎山貝塚周辺表層地質図

(2) 崎山貝塚と周辺の遺跡

崎山貝塚の所在する崎山地区は縄文時代の遺跡が多く分布し、崎山貝塚のほか大付貝塚・白石遺跡・わたのは遺跡など古くから知られた遺跡もある。また、近年の宅地化に伴い緊急調査が実施される件数も増加している。

崎山地区には現在30ヶ所程の縄文遺跡を確認しており、これらを崎山遺跡群と総称している。これらの遺跡の多くは、わずかに残った段丘面（九戸段丘）やこれに連続する緩斜面上に立地しており、トロノ木Ⅰ遺跡・白石遺跡・大付遺跡・古里Ⅰ遺跡・大崎山遺跡・姉ヶ崎遺跡・潮吹Ⅰ・Ⅱ遺跡・わたのは遺跡などがこれに相当する。その他のものは、トロノ木Ⅲ・Ⅳ遺跡などのようにさらに開析の進んだ狭い尾根上に立地している。

崎山貝塚は黒森山山地東縁の館ヶ森（標高248m）から北東へ延びる舌状台地上に立地している。これまでの調査により台地上の平坦面には立石を伴う集落跡が形成され、これに続く斜面部には貝塚や遺物包含層が形成されていることを確認した。また、遺跡の南・北・東の三方は小川を伴う低湿地にとり囲まれており、現在は水田等として活用されている。

遺跡群内で比較的大規模な遺跡だけひろってみると、崎山貝塚（前期初頭～後期前葉）→ 白石遺跡（中期末葉～後期前葉）→ わたのは遺跡（後期）→ 大付遺跡（後期～晩期）という変遷が想定される。この中で中核を成すのはやはり崎山貝塚であり極めて長期間にわたり存続している。

しかし、中期いっぱいでの衰退期を迎えたころから隣接する白石遺跡に大規模な集落が形成され、やがてわたのは遺跡や大付遺跡へと受け継がれていく。これらの遺跡は崎山地区において各々の時期の拠点集落である可能性が大きい。

一方、他の遺跡の多くは中～小規模であり、存続時期も土器型式で1～2型式程度のものが主体となる。例えば、トロノ木Ⅰ遺跡（大木8b式）、トロノ木Ⅳ遺跡（大木8b式）、千束長根遺跡（大木10式）、トロノ木Ⅱ遺跡（時期不詳）などがこれに相当し、検出される遺跡数も少ない。このような遺跡は、比較的短い間だけ拠点的な遺跡から派生して出現した遺跡（例えばキャンプサイトなど）として捉えることもできよう。

崎山地区以外に目を向けると、鉾ヶ崎地区の鉾ヶ崎館山貝塚（前期～晩期主体？）、小沢・山口地区の小沢貝塚（前期・後期）・高根遺跡（中期）、小山田地区のラサ工業用地内遺跡（後期・晩期、注1）、磯鶏地区の上村貝塚（中期）、磯鶏蝦夷森貝塚（中期）、小沢田貝塚（中期）早坂遺跡（中期）、近内地区の近内中村遺跡（後期・晩期）、高浜地区の高浜Ⅳ地神遺跡・高浜Ⅴ下地神遺跡（いずれも中期主体か）、重茂地区北部の赤なしが沢遺跡（前期）・同中央部の重茂館遺跡群（中期～晩期）、同南部の千鷲Ⅲ遺跡（中期）などの貝塚や大規模遺跡を上げることができる。

これらの遺跡は崎山貝塚同様にそれぞれの地区で中核的な性格を有していたものと思われる。

因みに、これらのうちでほぼ同時代と思われるもの同志の距離を計るとほぼ3km以上となる。

しかし、閉伊川河口部周辺では鉾ヶ崎館山貝塚・小沢貝塚・磯鶏地区の貝塚群の距離がそれぞれ1.5km程度となっている。これは、周辺地域での生態系の豊かさに起因するものと思われ、おそらくは、内湾性魚貝類の豊富さが遺跡間の集中を助長したと考えるべきであろう。

〈註〉

註1 この遺跡は工場造成時にほぼ全滅したと見られるため『分布図86』には記載されていない。



第7図 崎山貝塚と崎山遺跡群

Ⅱ 調査経過

1 調査経過

(1) 調査に至る経過

宮古市では昭和57年度から昭和60年度にかけて、市内に存在する遺跡の詳細分布調査を実施し、その内容を『分布調査1～4』の報告書および『分布図86』の遺跡台帳として刊行してきた。

分布調査の結果、崎山貝塚は市内に分布する貝塚の中では奇跡的とも言える良好な保存状態を保っており、しかも、立石を中心とした集落跡や豊富な動物遺存体の検出も見込まれるなど極めて重要な遺跡であることを再確認した。

しかし、前述したとおり崎山貝塚は、その名はかなり広く知られてはいたものの本格的な発掘調査はほとんど実施されず、わずかに実施された調査でもその調査結果は公表されていなかったために、遺跡の内容は全く不明のままとなっていた。

こうした中で、昭和59年に遺跡南西部にて宅地造成の届出が出された。この後、岩手県教育委員会・届出者・当市教育委員会3者により事前協議を重ねたが、止むを得ず緊急調査を実施することとし、昭和59年度～昭和60年度にこの地点の発掘調査を行った。

また、周辺部でも宅地化に伴い遺跡の事前調査件数が増加しており、将来にわたり崎山貝塚が保存される可能性は極めて小さいものとなった。

そこで、宮古市では崎山貝塚の保存を前提とし、その内容を把握するために昭和61年度から国庫補助事業による範囲確認調査を実施することとした。

(2) 調査の経過

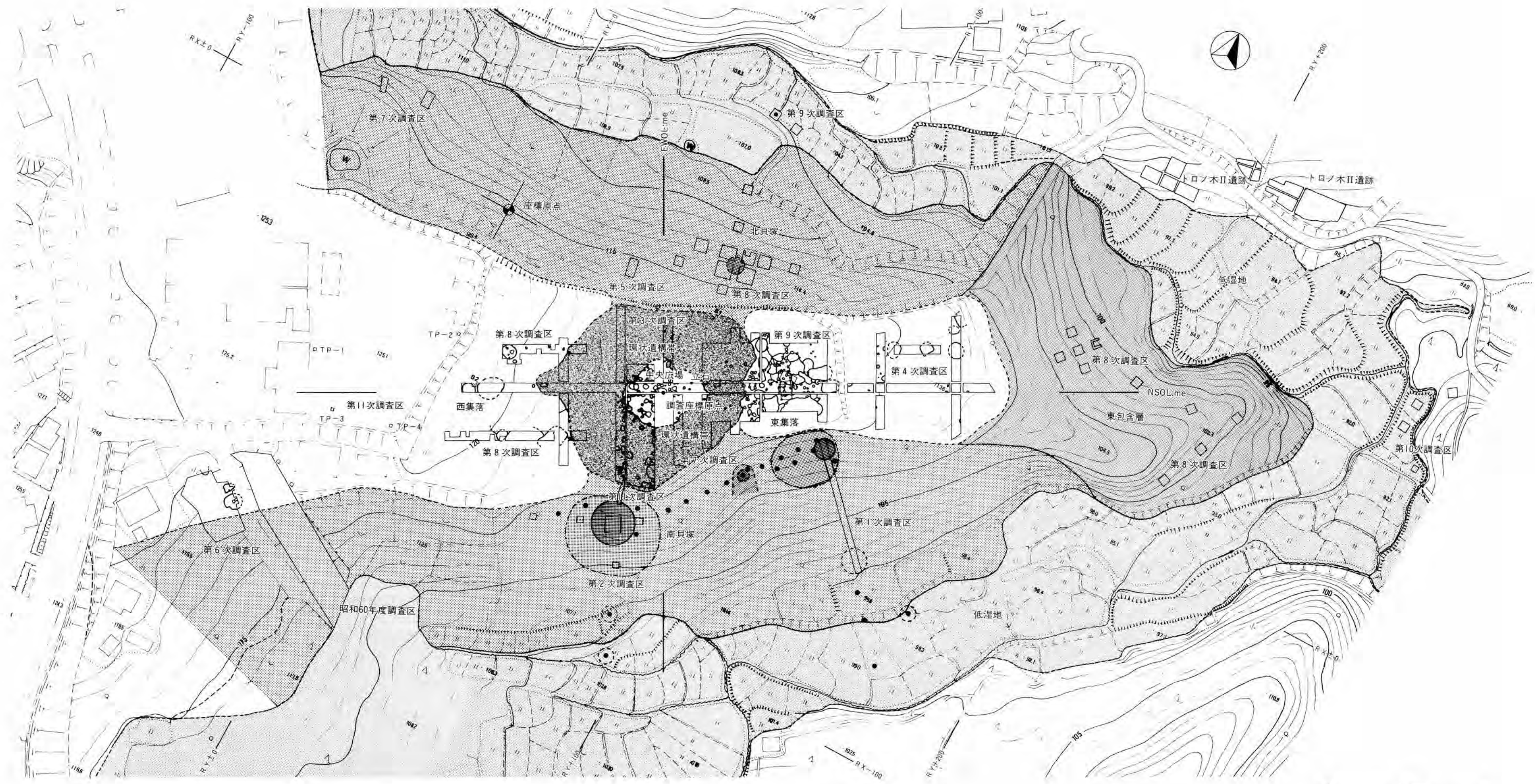
崎山貝塚の範囲確認調査は当初昭和61年度から平成2年度までの5ヶ年計画として実施した(第Ⅰ期)が、遺跡の規模も大きく調査の及ばない地点もあり、また各地点毎の内容も複雑であったために遺跡の全体像を把握するまでには至らなかった。このため、文化庁、岩手県教育委員会の指導のもとに平成3年度から平成5年度までを第Ⅱ期として範囲確認調査を継続することとした。これによりひとつおりの地点での調査が実施され遺跡の範囲をほぼ把握することができた。

さらに、平成6年度からは文化庁、岩手県教育委員会の指導により崎山貝塚調査指導委員会を発足させ、委員会の指導のもとに、平成6年度から平成7年度までを第Ⅲ期として調査地点を絞った内容確認調査を実施している。

各年度毎の発掘調査概要は次のとおりである。

〈第Ⅰ期範囲確認調査、昭和61年度～平成2年度〉

○昭和61年度—第1次調査、昭和61年11月5日～11月22日、88㎡(うち5㎡を精査)



第8図 崎山貝塚地形図及び調査区設定図

貝塚の南斜面を調査し、前期に伴う獣骨含層、貝の廃棄ブロック、遺物包含層（土器捨場などを検出している。多量の獣・魚骨のほか人骨も検出している。

○昭和62年度－第2次調査、昭和62年9月10日～10月30日、90m²

貝塚の南斜面中央部を調査し、前期を主体とした貝層や魚骨層を検出している。表土及び貝層上部からは多数の土器片、石器、骨角器や獣骨、魚骨、貝殻などの動物遺存体が出土している。

○昭和63年度－第3次調査 昭和63年10月17日～12月2日、837m²

遺跡の中央部に相当する台地上を調査し中央部から外側にかけて立石を伴う土域、地山の落込み、居住域を検出した、土坑跡3基を断ち割ったところ、1基からはムラサキインコガイなどにより構成される貝層を検出し、もう1基からはマグロの椎骨11個の集積を検出している。

○平成元年度－第4次調査 平成元年10月16日～11月22日、363m²

遺跡の中央部に相当する台地上で第3次調査区の北東に隣接する地点を調査し、中期の竪穴住居跡や土坑跡および平安時代の竪穴住居跡等を検出した。中期の竪穴住居跡の中には粉碎された貝殻片や焼骨片などを伴うものもあり特筆される。

○平成2年度－第5次調査 平成2年9月3日～10月9日、105m²

台地中央部と貝塚北斜面を調査した。前者は第3次調査区のトレンチの一部を精査したもので、地山の落込みが人為的なものであることを確認した。また、後者は北斜面のほぼ中央部にて中期を主体とする自然遺物包含層を検出している。

〈第Ⅱ期範囲確認調査 平成3年度～平成5年度〉

○平成3年度－第6次調査 平成3年9月17日～12月7日、290m²

本調査は個人住宅建築に先立つ緊急調査である。遺跡の南西部に位置し、中期中葉～末葉の竪穴住居跡を3棟検出したほか中期末葉の遺物包含層を検出している。

○平成3年度－第7次調査 平成3年9月26日～12月7日、230m²

台地中央部と北斜面(北貝塚)北西部を調査した。前者では中央広場の範囲を確定させた上、これを環状の掘込み(地山の落込み)が取り囲むことを再度確認した。また、後者では中期を主体とする遺物が得られたものの、包含層の発達状況が悪く、縁辺部の様相を呈している。

○平成4年度－第8次調査 平成4年9月30日～12月25日、484m²

台地中央部(西集落)、北斜面部(北貝塚)、台地東端部(東包含層)の3地点にて調査を実施した。

台地中央部(西集落)

中期中葉～後葉を主体とする竪穴住居跡を6棟検出し、このうち1棟の精査を実施した。

また、環状の掘込みの西側プランを確認したほかに、配石遺構1基、土坑跡2基、焼土遺構1基を検出している。

北斜面部（北貝塚）

北斜面部のほぼ中央部に中期に伴う貝層を検出した。貝層の周囲には、ほぼ同時期の遺物包含層（土器捨場）が広範囲に形成されている。

台地東端部（東包含層）

台地の先端部で前期に伴う小規模な遺物包含層を検出している。

○平成5年度—第9次調査 平成5年10月21日～12月27日

台地中央部（東集落）と低湿地にて調査を実施した。

台地中央部（東集落）

中央広場東縁部～東集落西半部にやや広範囲の調査区を設定した。環状の掘込み東半部のプランを確認したほか、東集落西半部にて夥しい量の竪穴住居跡・土坑跡・柱穴などを検出した。また、石棒の出土量が多く、立ったままの状態で検出したものもあり特筆される。

低湿地

北側の水田面に調査区を設定したところ比較的新しい時期の堆積層が厚く、ボーリング調査も併行させたが、縄文期の泥炭層等は検出できなかった。南側の水田面も同様である。

○平成5年度—第10次調査 平成5年11月9日～12月27日

本調査は市農林課の農道敷設に伴うものである。当初は東包含層周辺をルートとする計画案が提示されたが、岩手県教育委員会の指導により遺跡東端部（水田面）を通るルートとし、破壊する面積を最小限度とすることで緊急調査を実施した。

発掘調査は盛土工事により現状変更される部分を対象とし、調査経費は市単独事業にて市農林課が負担した。

調査の結果、古代以降と思われる植物遺体包含層を検出し、土器片、フイゴ羽口片等のほか杭やちゅう木など多量の木製品を検出している。

なお、本調査については別途報告する予定であり、本書では概要を記すのみに留めた。

〈第Ⅲ期内容確認調査 平成6年度～平成7年度〉

○平成6年度—第11次調査 平成6年9月 日～12月20日

崎山貝塚調査指導委員会により選定された台地中央部、台地西半部、南貝塚にて調査を実施した。

台地中央部

中央広場とその周辺部の性格把握を目的とし調査区を設定したところ、前期初頭～後期前半にわたる竪穴住居跡・土坑跡・墓壇跡・配石遺構などが多数検出されたほか、中期中葉以降の土木工事の痕跡（盛土層など）を確認した。

出土遺物は、第9次調査とは対照的に石皿の多出が特筆される。

台地西半部（西集落）

現在工場用地として利用されている地点に小規模なテストピットを設定し、遺跡の保存状態を確認した。

南貝塚

台地南辺部分と南貝塚の関係を探るために第2次調査区の一部を再度調査した。

平成5年度までの調査内容については、各年度毎に調査概報を作成し報告している（『崎山遺跡群 I～Ⅷ』）。この他に、昭和63年度と平成4年度には岩手考古学会研究大会にて、平成3年度には北奥古代文化研究会研究大会にて、範囲確認調査に基づく中間報告を実施している。

周知事業としては、現地説明会・地権者説明会・地域住民説明会を随時実施しているほか、展示会（ふるさとの歴史展）での資料展示、講演会の開催、広報紙上での遺跡紹介等を実施している。

また、宮古市長からは既に崎山貝塚について、史跡指定をめざし、将来は史跡公園として整備する旨の発表があり（広報「みやこ」平成6年1月1日号ほか）。この後崎山貝塚調査指導委員会を発足させるなどの事業の推進を計っている。

2 調査の体制

崎山貝塚の調査にあたって、平成6年度から崎山貝塚調査指導委員会を設置し、調査全般にわたってご指導を受けている。指導委員の先生方は次のとおりである。

崎山貝塚調査指導委員会

委員長	鈴木 公雄	（慶応義塾大学）
職務代理者	西本 豊弘	（国立歴史民俗博物館）
委員	武井 則道	（横浜市埋蔵文化財センター）
委員	工藤 竹久	（八戸市教育委員会文化課）
委員	三浦 謙一	（岩手県埋蔵文化財センター）
助言	文化庁、岩手県教育委員会	

昭和61年度から平成6年度にわたる崎山貝塚発掘調査の体制は次のとおりである。

調査主体 宮古市教育委員会

教育長 小野寺聰（昭和61年度～昭和63年度）、保坂純三（平成元年度）

々 佐藤勇逸（平成元年度～平成6年度）

調査総括 宮古市教育委員会社会教育課長

北山浩（昭和61年度～昭和62年度）、吉田昌義（昭和63年度）、摂待保典（平成元年度）、大森翼（平成2年度～平成3年度）、岩田善弘（平成4年度～平成5年度）、浦野光廣（平成6年度）

事務担当 宮古市教育委員会社会教育係長

佐々木孝夫（昭和61年度～昭和62年度）、小本哲（昭和63年度～平成2年度）

山崎吉章（平成3年度～平成5年度）、田鎖春雄（平成6年度）

佐藤広昭（主事～昭和63年度～平成元年度）、坂下昇（社会教育主事補～庶務主査）

調査員 竹下（旧姓武田）将男（主事～主任～昭和61年度・平成6年度）、高橋憲太郎

(主事～主任－昭和61年度～平成6年度)、鎌田祐二(埋蔵文化財調査員～主任－昭和61年度～平成6年度)、盛合義信(主事－昭和62年度～平成元年度)、鶴田均(主事～主任－平成2年度～平成4年度)、橋本晃一(主事－平成5年度～平成6年度)、三浦千秋(主事－平成6年度)、阿部豊(埋蔵文化財調査員－平成2年度～平成6年度)、工藤剛司(埋蔵文化財調査員－平成5年度～平成6年度)
調査補助員 石田充(期限付臨時職員－平成4年度)

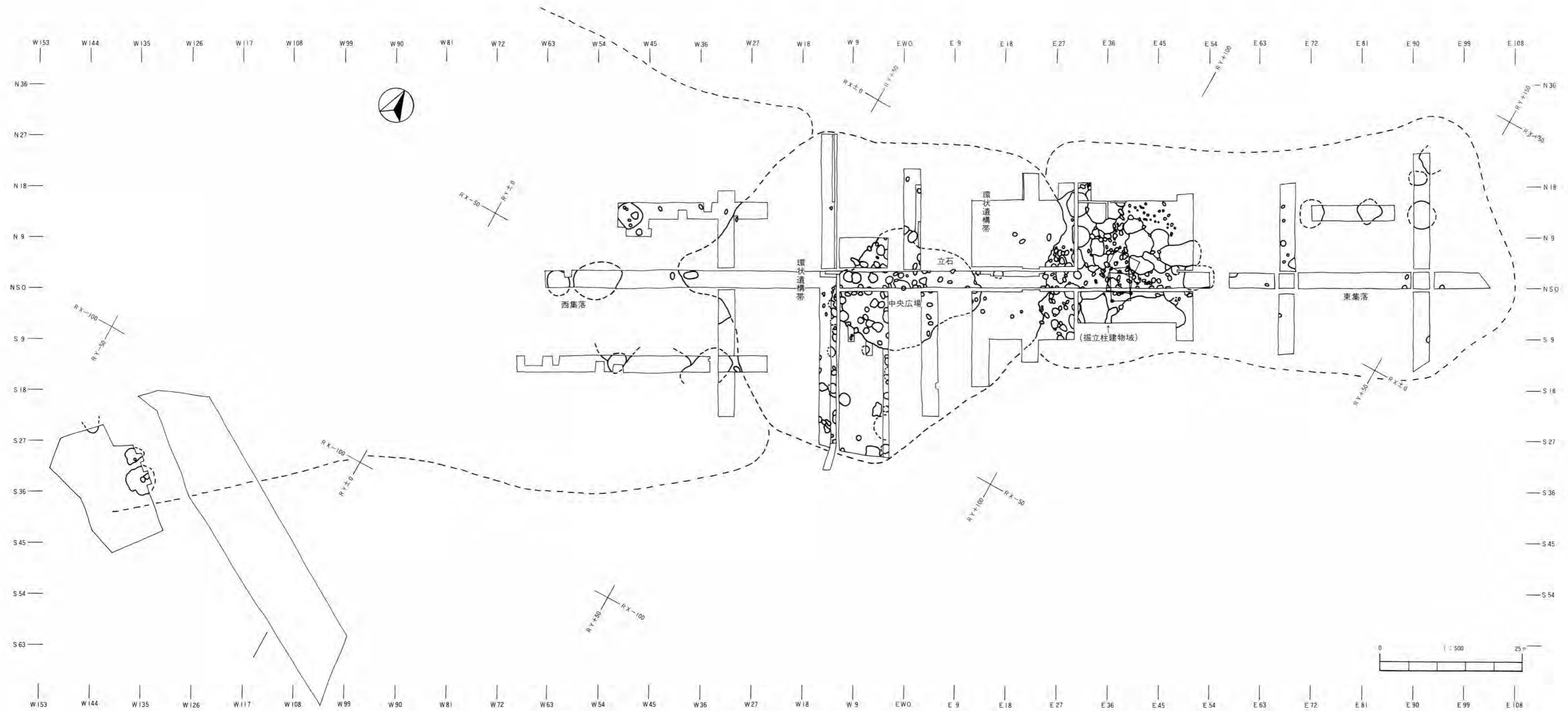
発掘調査および遺物整理本書の執筆に際しては次の方々、機関からご指導、ご協力を賜った。(敬称略、所属は当時のもの)

文化庁、岩手県教育委員会、岩手県埋蔵文化センター、岩手県立博物館、陸前高田市立博物館、盛岡市教育委員会、北上市教育委員会、一戸市教育委員会

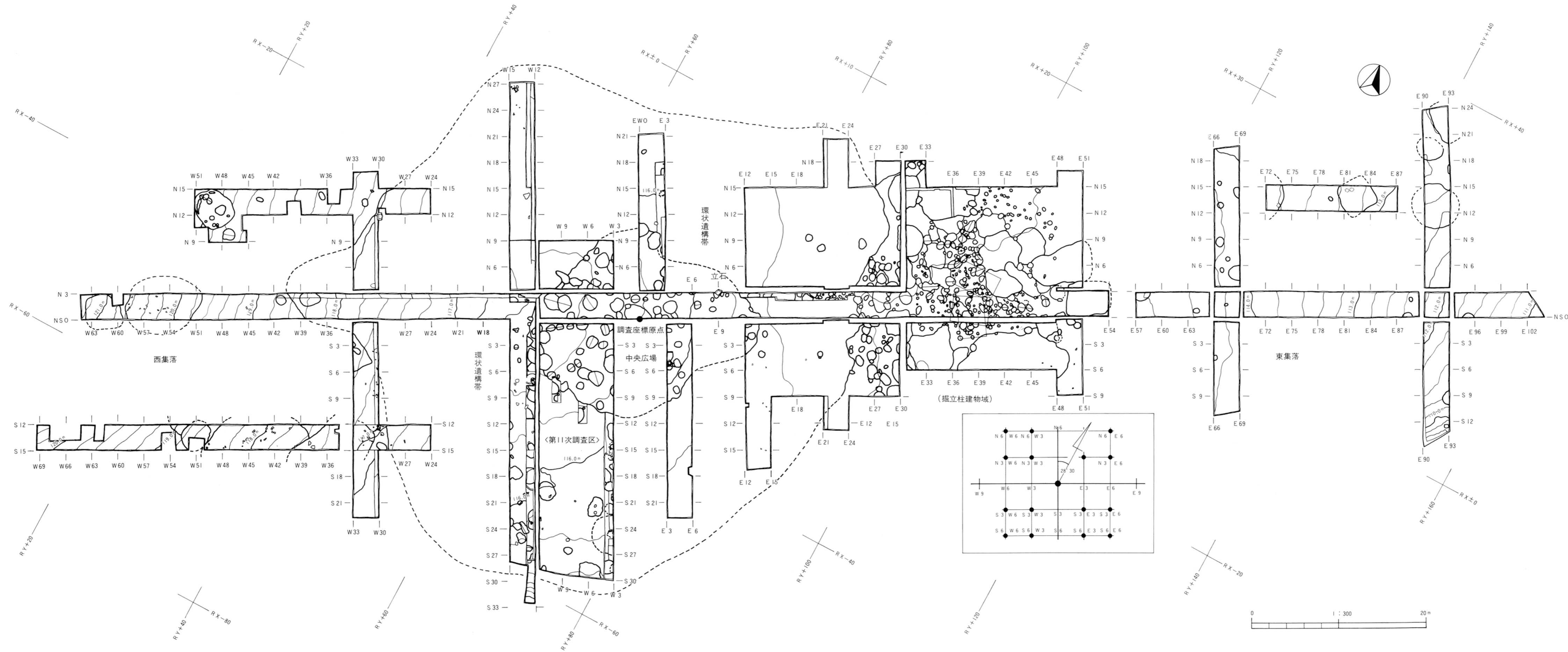
岡村道雄・井上和人(文化庁記念物課)、桜井清彦(早稲田大学)、渡辺誠(名古屋大学)、工藤雅樹(福島大学)、林謙作(北海道大学)、藤沼邦彦(東北歴史資料館)、菊池啓治郎(岩手県文化財保護審議会委員)、相原康二・小野田哲憲・熊谷常正・中村英俊・佐藤嘉彦・佐々木勝(岩手県教育委員会)、高橋信雄・佐々木清文・赤沼英雄(岩手県立博物館)、高橋興右衛門・斎藤邦雄・酒井宗孝・金子昭彦(岩手県埋蔵文化センター)、名久井文明(岩手県立宮古高等学校定時制教頭)、瀬川司男(崎山中学校校長)、高田和徳(一戸町教育委員会)、八木光則・千田和文・室野秀文(盛岡市教育委員会)、中村良幸(大迫町教育委員会)、高橋文明(北上市教育委員会)、佐藤正彦(陸前高田市立博物館)、千葉啓蔵(久慈市教育委員会)、熊谷賢(岩手考古学会員)、佐藤二郎(長内水源K.K.)、高橋一成(東北大学学生)、斎藤英樹(宮古市文化財保護審議会委員)、中嶋隆(宮古市在住)

調査の実施にあたり、次の各位から多大の御協力をいただいた。

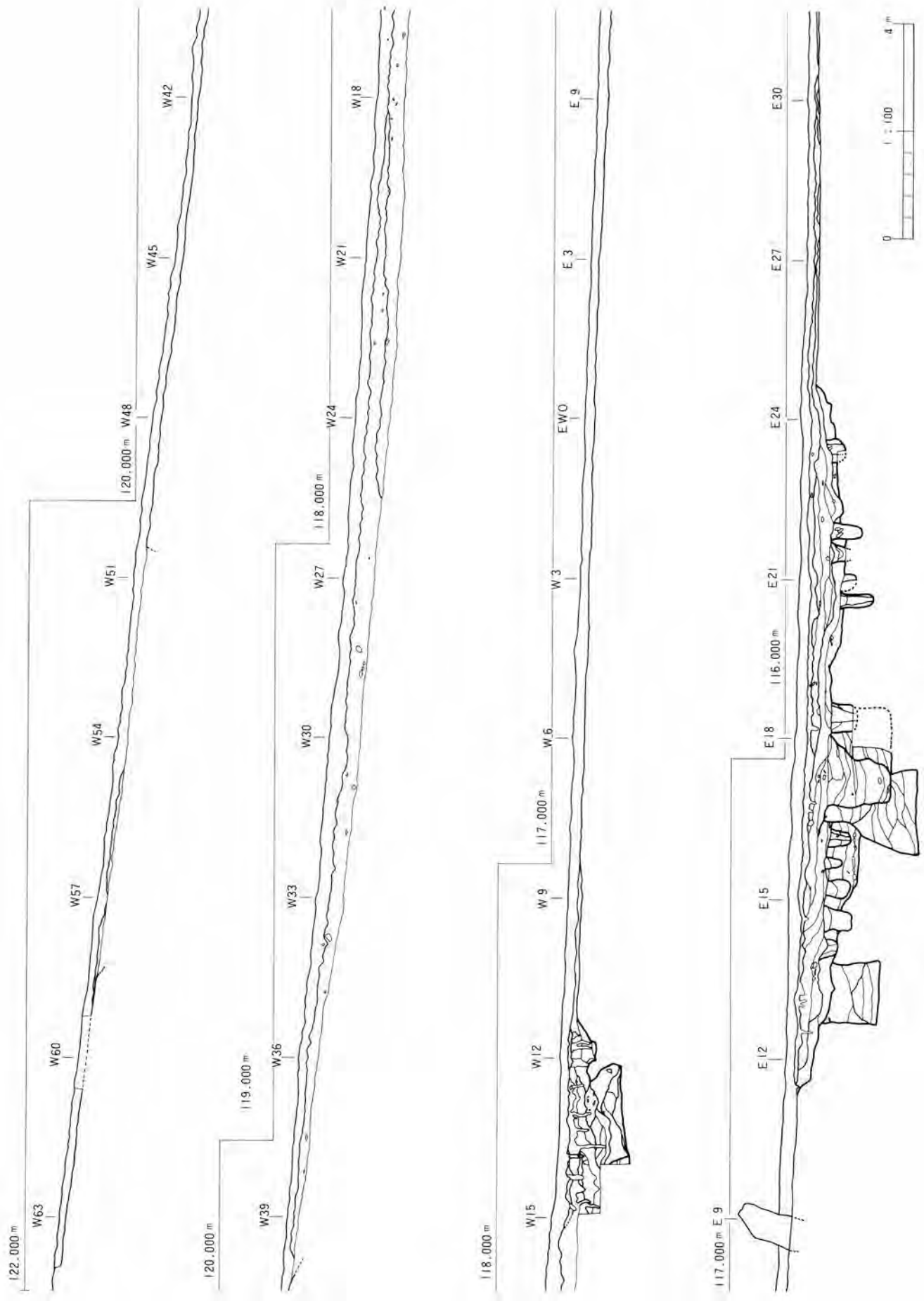
- 〈地権者等〉 後藤正吉、前川孫八、前川啓三、大越貞蔵、米沢由美、高田義勝、佐々木福司、工藤武、前川克夫、下平伊三郎、後藤敏、工藤敏雄、鹿島道路宮古作業所
- 〈発掘調査〉 村岡憲一、大森洋、吉田昭、竹田末人、木村秀男、佐伯裕則、前川友宏、山口勉、坂本卓己、瀬波正昭、大沢卓雄、松登文吾、田崎昭吾、佐伯裕則、北村忠治、大越貞蔵、小島貞一、森田隆、佐々木茂、木村博、古館友三、山本寛、中居磯雄、伊藤晴男、前川軍治、前川静江、工藤イネ、小林茂、佐々木清、藤谷晶子、菅原テルミ、斉藤貞子、菊地清八、榊林信吉、山内専太郎、佐々木茂実、前川広治、小野寺清治郎、館崎礼子、今津東一、刈谷昭三、中嶋隆、佐々木健鈴木いそ子、
- 〈整理作業〉 佐々木順子、斉藤薫、八木由美子、佐々木ヨシ子、味噌作宣子、竹原昌江、前川友宏、山野目崇子、成田寿美江、越田真理子、菊池菊子、吉田昭、田中初子
- 〈資料借用・資料提供〉 中嶋隆、山根勝男
- 〈石質鑑定〉 佐藤二郎



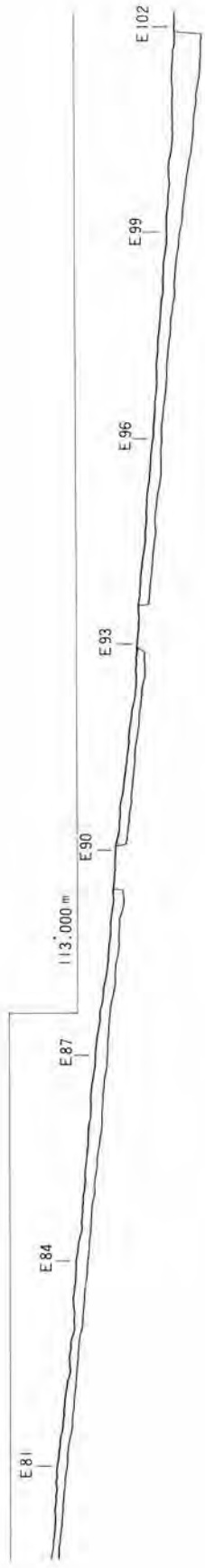
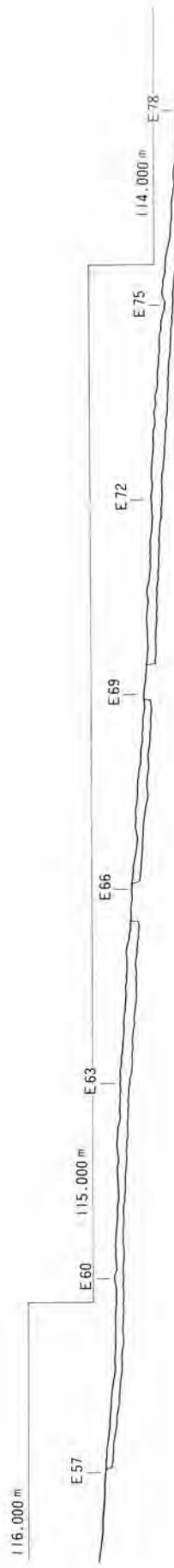
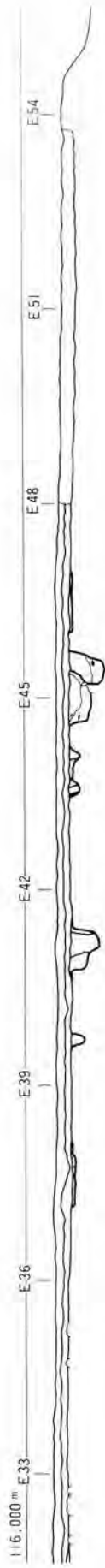
第9図 崎山貝塚検出遺構配置図



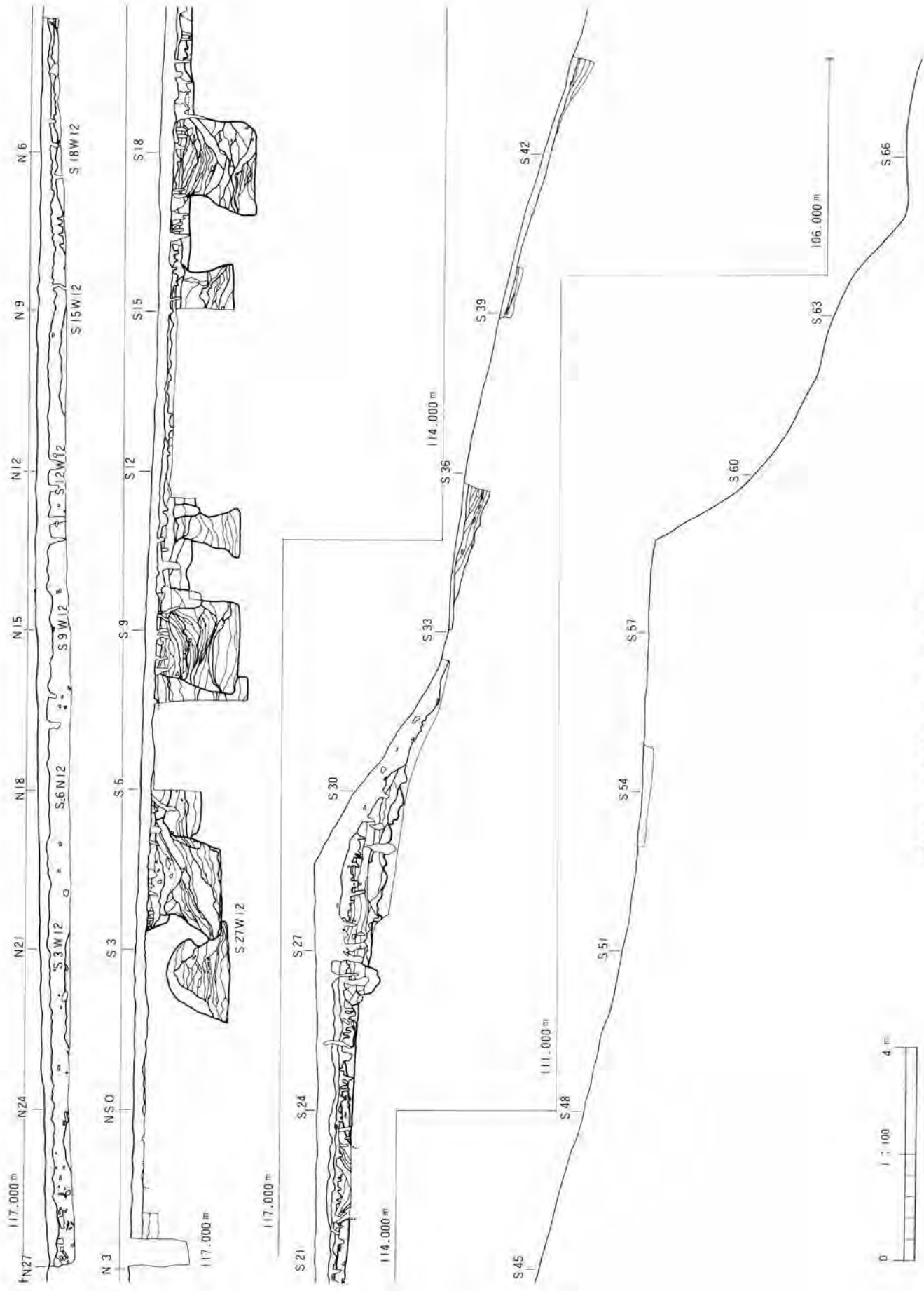
第10図 崎山貝塚集落跡中央部検出遺構配置図



第11図 集落跡土層断面図(1)



第12图 集落跡土層断面图(2)



第13図 集落跡・南貝塚土層断面図

Ⅲ 調査の結果

1 崎山貝塚の構造

これまでの調査によれば崎山貝塚は、台地上の平坦面に縄文中期を主体とし後期前葉まで営まれた集落跡が確認されている。

また、台地に連続する斜面部には貝塚や遺物包含層（土器捨場）が形成されている。南斜面には前期初頭～中期前葉の魚骨層・獣骨層などと遺物包含層が形成されており「南貝塚」と呼称している。同様に北斜面には中期を主体とする貝層と前期～中期に伴う遺物包含層が形成されており「北貝塚」と呼称している。台地先端部の東斜面については貝層が伴わず、前期の遺物包含層のみが形成されており「東包含層」と呼称している。

さらに、斜面部の外側には小さな沢に伴い低湿地が形成されており、これが遺物の外縁部を形成している。

2 集落跡

(1) 基本層序

集落跡が形成された台地頂部の基本層序は次のとおりである。

- I a 層 台地全体を覆う耕作土（表土）で、やや粘性のある暗褐色土を基本土とする。やや固いがしまりが無い。
- I b 層 I a 層に類似するがやや暗い。N27W15グリッド付近では自然礫や礫石器などを多量に含む。N18E93～N24E93グリッド周辺では褐色粘質土を基本土とし暗褐色土塊などを含む。本層は耕作時の盛土層（整地層）と思われる。
- II 層 粘性のあるやや暗い暗褐色土を基本土とし、黒褐色土を含む。固さやしまり具合は中程度である。旧耕作土（旧表土）であり近世以降と思われる陶磁器片や鉄片等が出土している。
- III 層 環状遺構帯の上面を覆う堆積層で、やや粘性のある黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を比較的多く含む。固さやしまり具合は中程度である。
- IV層～VII層 環状遺構帯の埋土および、この外縁盛土層であり後述する。
- XIII 層 地山層（基盤層）である。地点により花崗岩類（田老花崗岩体）や安山岩類（原地山層）を基盤岩としており、いずれも風化が著しい。後者では風化が進み粘土化している部分と基盤岩の礫を多く含む部分がある。

(2) 検出された遺構と遺物

台地上に形成された集落跡は、中心部より立石を伴う中央広場・環状遺構帯・居住域（東集落・西集落）と重層的な構造を呈することが判明している。ただし、地点毎の遺構変遷には差異がみられる。

a) 中央広場

台地中央部のN12～S12、E15～W15の範囲に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸26.7m、短軸21m、面積およそ350 を計る。

この地点は、I aの層直下に地山面（Ⅻ層）が現われるために、遺構はⅫ層上面で検出している。検出された遺構は、立石・墓壇・土坑・焼土遺構で総数は80基以上である。このうち精査したものを中心に記述する。

i) 立石

N3E9-1号立石

中央広場東端のN3E9グリットに位置する。検出面からの高さは1m程で、やや東に傾いている。立石は径0.8m程の土坑跡に埋設されているが、検出のみに留めており埋設部の深さや伴出遺物などは不明である。しかし、立石の規模からすれば土 跡は墓壇跡ではなく掘り方と考えるのが妥当と思われる。

また、土地の人々の話によると、かつては中央広場の西端付近にもう1基の立石があったとのことである。

ii) 墓壇跡・土坑跡

中央広場で精査した土坑跡は24基であり次の3類に分類される。

a類 平面形が長方形や楕円形を呈し、墓壇跡に相当すると思われるもの。

b類 平面形が円形～楕円形を呈し、断面形が皿状～摺鉢状を呈するもの。a類より浅く小形である。

c類 平面形が円形を呈し、断面形がフラスコ形やピーカー形を呈するもの。a類やb類に比べ著しく掘り込みが深い。貯蔵穴に相当するものと思われる。

a類

S9E6-2号墓壇跡（第14図）

中央広場の南縁部で環状遺構帯との境界付近に検出した。検出面は地山面（Ⅻ層）である。重複する遺構は無い。

開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.75m、深さ0.5mを計る。

主軸方向はW20° 10′ Nではほぼ中央広場の中心部を向いている。また、北西部の検出面からA1層にかけて、長軸0.5m、短軸0.3mとやや大き目の扁平亜角礫が含まれていた。

埋土はA層とB層に大別される。

A1層は、やや暗い褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むほか炭化粒をわずかに含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

B層は、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を少量含むほか炭化物粒をわずかに含む。B2層はB1層より混入土の量が少ない。いずれの層もやや固くしまり具合は中程度である。

A層、B層ともに人為堆積と思われる。出土遺物は無い。

第Ⅶ群

S 3 W 6 - 1号墓壙跡 (第17図)

中央広場西半部に検出した。S 3 W 6 - 4号土坑跡 (未精査) を切る。開口部の平面形は不整形を呈し、長軸1,3 m、短軸0,8 m、深さ0,15mを計る。

主軸方向はN42° 30' Wである。

埋土はA層とB層に大別され、A 1層は黄褐色土を、B 1層は明黄褐色土を基本土とし、いずれも混入土をやや多く含む。両層ともに固さ、しまり具合は中程度である。

A層、B層ともに人為堆積と思われる。A 1層から大木8 a式に伴う浅鉢の破片が出土している (第20図13)。

S 3 W 6 - 2号墓壙跡 (第18図)

S 3 W 6 - 1号墓壙跡に隣接する。開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸1,1 m、短軸0,85 m、深さ0,15mを計る。

主軸方向はN45° Eである。

埋土はA層のみで、褐色土を基本土とし塊状の黄褐色土や明褐色土を少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。人為堆積と思われる。

出土遺物は縄文土器片が少量したが図示できるものは無い。

S 3 W 6 - 3号墓壙跡 (第18図)

S 3 W 6 - 2号墓壙跡の西に隣接する。開口部の平面形は不整形を呈し、長軸1,4m、短軸1,2m、深さ0,3mを計る。

主軸方向はN12° 30' Eである。

埋土はA層とB層に大別される。A層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊や明褐色土塊などを含むが、A 2層はやや混入量が少ない。A層はいずれもやや固く、しまり具合は中程度である。B層は明褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や褐色土塊を含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。A、B層ともに人為的堆積と思われる。

出土遺物は、大木8 b式に伴う深鉢の破片が上層から出土している (第20図14)。

第Ⅸ群

N 3 W 9 - 2号墓壙跡 (第17図)

中央広場の西寄りに検出した。N 3 W 6 - 1号土坑跡に切られるために平面形や規模は不明確である。現存部の平面形は半円形を呈し、規模は、南北0,4m以上、東西0,66m、深さ0,28 mを計る。

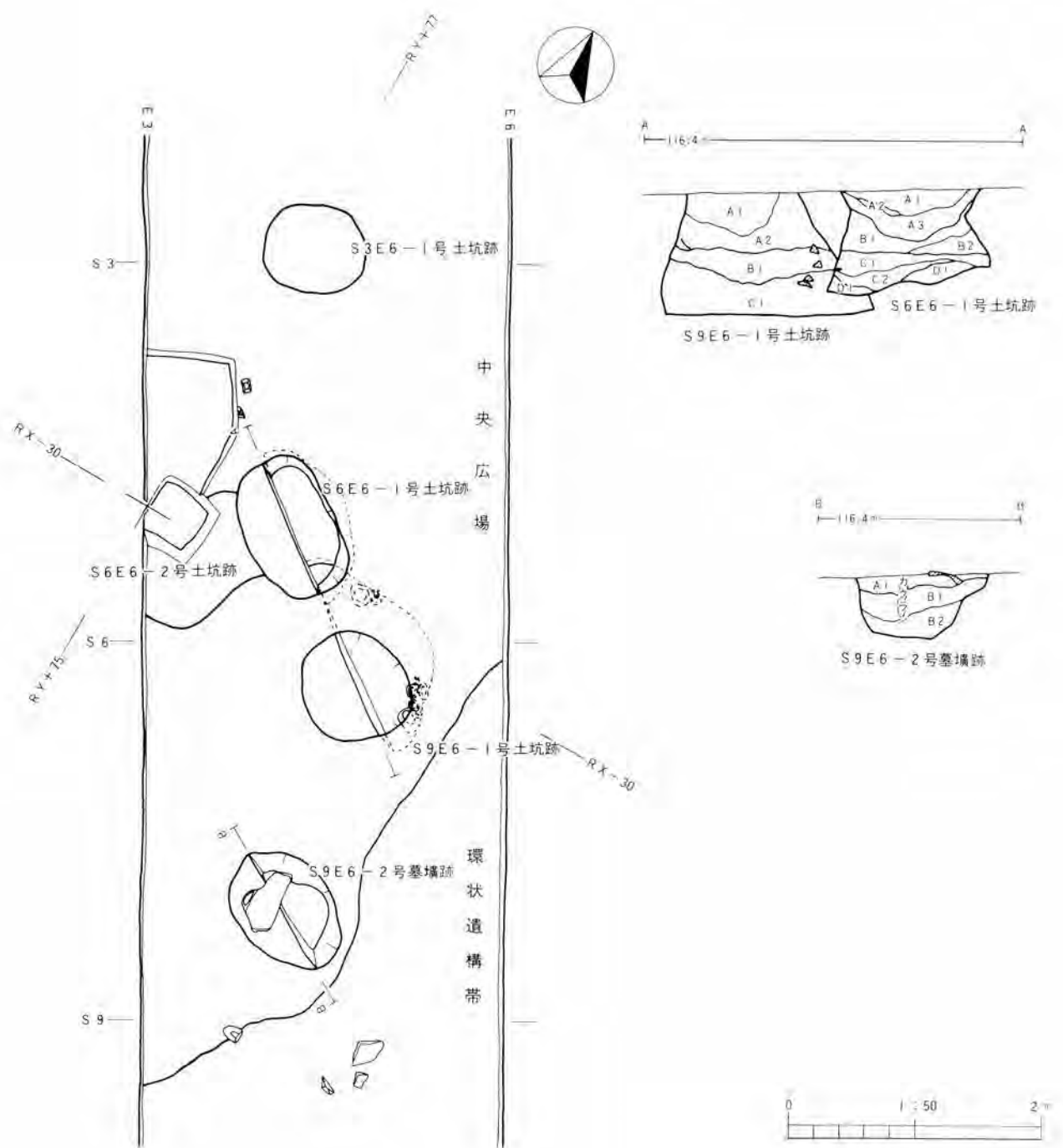
主軸方向は不明である。

埋土はA層のみで、黄褐色土を基本土とし、明褐色土塊を少量含む。やや固く、ややしまりがある。

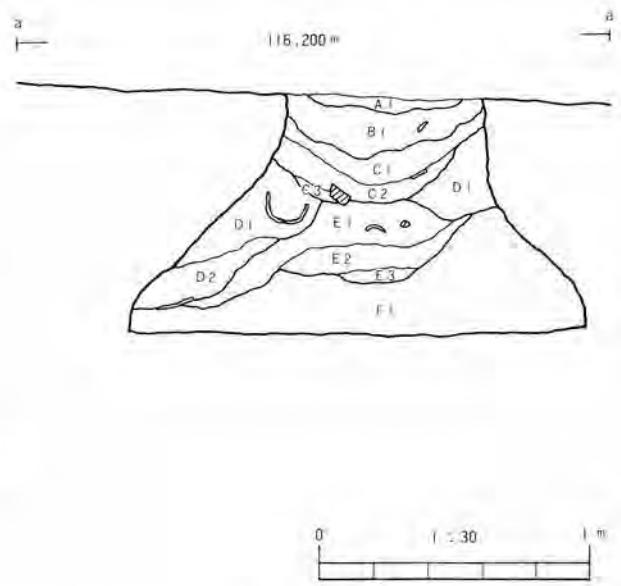
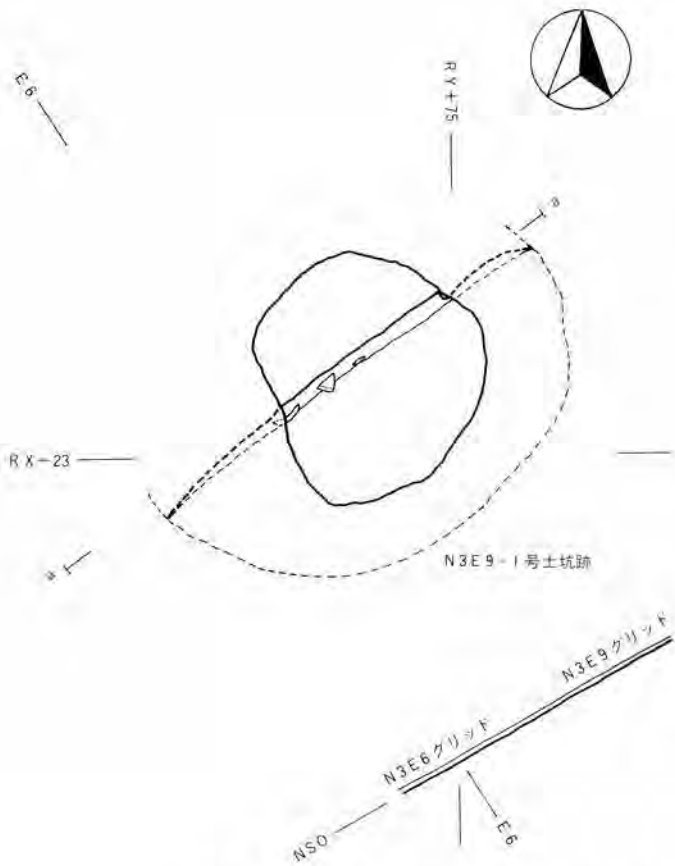
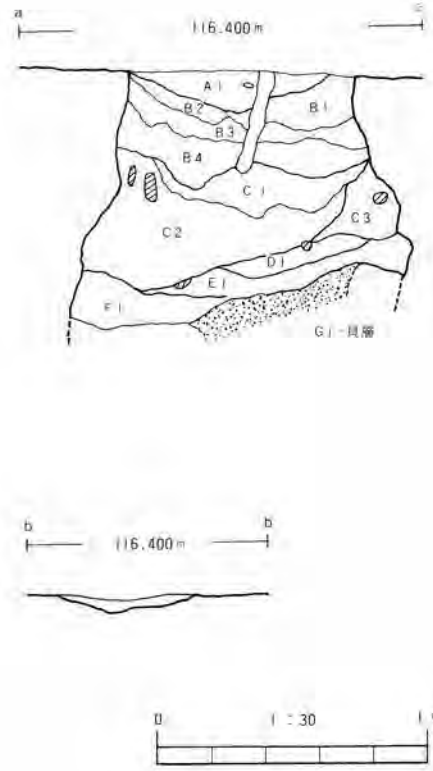
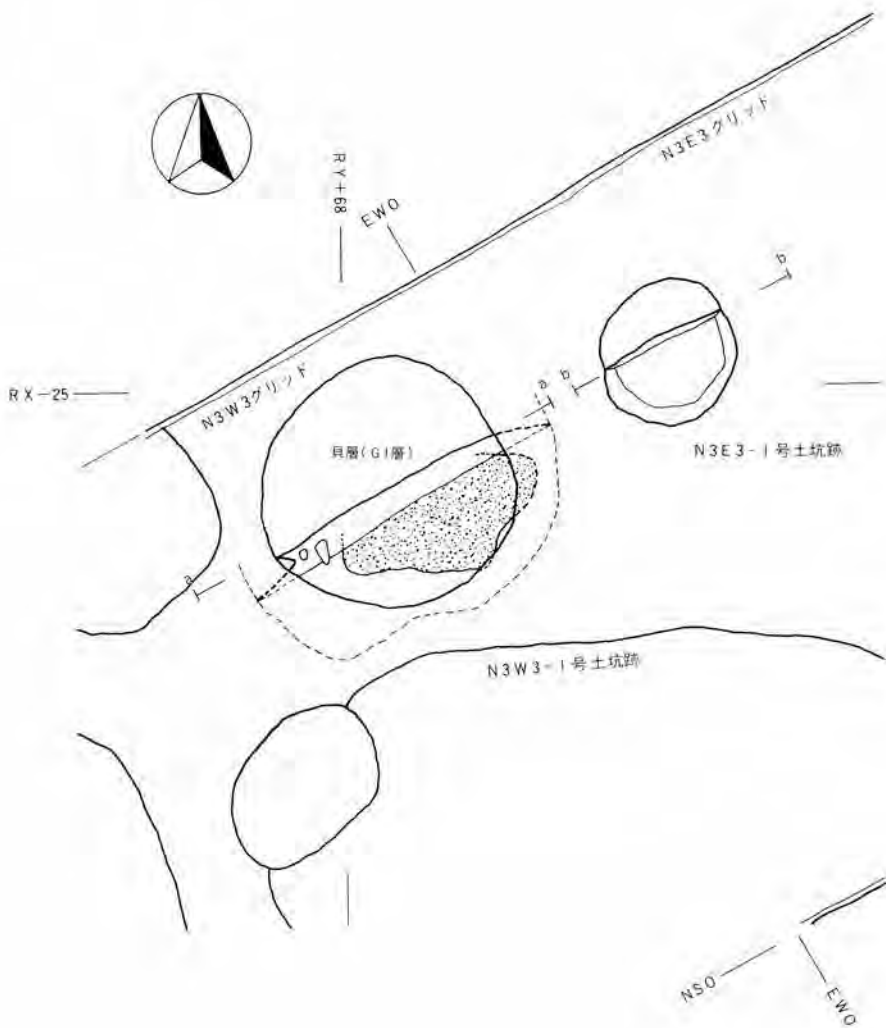
出土遺物は、大木8 b式に伴う深鉢の破片が出土している (第20図15・16)。

第Ⅸ群

b類 断面形が皿形を呈するものをb 1類、摺鉢形を呈するものをb 2類とする。中央広場で精査したものはいずれもb 1類に相当する。



第14図 中央広場検出遺構(1) S3E6~S9E6グリッド



第15図 中央広場検出遺構(2) N3W3~N3E3グリッドN3E9グリッド

N 3 E 3-1号土坑跡（第15図）

中央広場のほぼ中央部にて検出した。平面形はほぼ円形で径0.5m、深さ0.05mを計る。

埋土は単層で、暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。柔らかくしまりが無い。遺物は出土していない。

S 3 W 9-2号土坑跡（第17図）

中央広場の西端部に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.75m、短軸0.62m、深さ0.12mを計る。

埋土は単層で、やや粘性のある黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりが無い。遺物は出土していない。

S 3 W12-1号土坑跡（第17図）

S 3 W 9-2号土坑跡の西に隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.13mを計る。埋土は単層で、やや粘性のある黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。遺物は出土していない。

S 3 W12-2号土坑跡（第17図）

S 3 W12-1号土坑跡の西に隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、長軸1.05m、短軸0.8mを計る。断面形は攪乱を受け凸凹がみられる。埋土はA層とB層に大別される。A層は褐色粘質土を基本とし、橙色土塊を少量含む。固さは中程度でややしまりが無い。B層は橙色粘質土を基本土とし、明褐色土塊や褐色土塊を多く含む。固さ、しまりともに中程度である。遺物は出土していない。

c類 断面形がフラスコ形を呈するものをc1類、ピーカー形呈するものをc2類とする。

c1類

N 3 W 3-1号土坑跡（第15図）

中央広場のほぼ中央部に位置する。開口部の平面形は大略円形を呈し、開口部径0.94mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。南東側半分を断ち割ったところ埋土中にムラサキインコガイなどにより構成される貝層を検出している。貝層上面で精査を中止したため底面の状況などは不明である。

埋土はA層～F層およびG層（貝層）の7層に大別される。

A1層は粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。土器片や炭化物粒なども含むがあまり多くない。

B層は粘性のあるやや明るい褐色土（地山に類似）を基本土とし、黄褐色土塊や褐色土塊などを多く含むが、炭化物粒はほとんど含まない。全体にやや柔らかくあまりしまりが無い。混入土の状況などにより4層に細分した。

B1層は黄褐色土の混入が最も多く、土器片や炭化物粒をわずかに含む。B2層はB1層に類似するが全体的にやや暗い。B4層は黄褐色土を含まず暗褐色土などを含み、B層中最も暗い。

C層は粘性のある暗褐色土～褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や黄褐色土塊などを含む。全体に柔らかくしまりが無い。混入土や混入物の状況により3層に細分した。

C1層は暗褐色土を基本土とし、炭化物を多量に含む。C3層は暗褐色土を基本土とし、炭化物粒はほとんど含まない。

D1層は粘性のある褐色土（地山に類似）を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。柔らかくしまりが無い。

E1層は粘性のあるやや暗い暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをわずかに含む。柔らかくしまりが無い。

F1層はシルト質のやや明るい褐色土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を含む。柔らかくしまりが無い。

G1層はムラサキインコガイなどにより構成される貝層である。貝の間にはしまりのないやや明るい暗褐色土などを含むほか多量の炭化物粒を含む。上面を検出したのみで、層厚や以下の層の堆積状況は不明である。

出土遺物（第16図1～5）

1は鱗状隆帯の両側に連続する円形刺突文を施すもの。2は頸部に横位に施した沈線より上を擦り消すもの。5は磨消技法によるものである。これら3点は大木10式に伴う。

3・4は隆沈線により施文され、大木8b式に伴う。4は口縁部把手の破片である。

第XI群

動物遺存体

G1層上面をクリーニングした土壌サンプルを1mmメッシュの篩で水洗選別して得られた動物遺存体を次のとおり同した。

タマキビガイ	イガイ	ムラサキインコガイ	チンマフジツボ
1	L1	R7 R6	殻板(+)

貝層の主体を成す種はムラサキインコガイで、イガイがこれに次ぐようである。ただし、このデータが実際の組成比率を反映しているかどうかはサンプル数が少なく疑わしい。他の種は極めて少ないようである。

また、C2層からD層にかけても微量の貝殻片を含むが、サンプリングの際に混入した可能性もある。

第1表、G1層出土動物遺存体

植物遺存体

C1層からG1層にかけて、クルミ（*Juglas sp.*）の殻が出土している。最も破片数が多いのはC1層とC2層であるが、小片が多く個体数の算定はできなかった。

S6E6-1号土坑跡（第14図）

中央広場南東部に位置する。検出面でS6E6-2号土坑跡を切るほか、底面付近でS9E6-1号土坑跡を切る。開口部の平面形は楕円形を呈し、長軸1.1m、短軸0.7m、深さ0.8mを

計る。底面も楕円形を呈するようで、長軸1.3m、短軸0.5m以上（1.0m程度か）を計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面はやや凸凹がある。

埋土はA層～D層に大別されるが、明るい層と暗い層が互層となり堆積している。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、A1層とA3層は黒褐色土塊を含むほか、炭化物粒を含む。A2層は黒褐色土塊を含まず炭化物粒の混入量も少ない。いずれの層も固さ、しまり具合ともに中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むほか、炭化物粒をわずかに含む。B2層はB1層よりやや明るく混入土の量も少ない。いずれの層もやや固く、しまり具合は中程度である。

C層は暗褐色粘質土を基本土とする。C1層は褐色土塊などを少量含むが、C2層は黒褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も炭化物粒を含み、固さ、しまり具合ともに中程度である。

D層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などを多く含むほか、炭化物粒をわずかに含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

出土遺物（第16図）

出土遺物は極めて少ない。縄文土器片はわずかに出土しているが、いずれも器面が著しく磨滅しており図示できなかった。

10は埋土から出土した石鏃で、わずかに凹んだ平基の三角鏃である。両面ともに主要剥離面を残すが、特に裏面で著しく、先端部でバルブを取り除くように剥離させたほかは、周縁を小さな剥離で調整しただけである。

S9E6-1号土坑跡（第14図）

中央広場の南東部に位置する。底面付近でS6E6-1号土坑跡に切られる。開口部の平面形は不整形円形を呈し、直径0.8m～0.9m、深さ0.95を計る。底面は不整形楕円形を呈するようで、長軸1.65m、短軸0.65m以上（1.4m程度か）を計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層～C層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。A2層はA1層よりやや暗く、やや固い。しまりは両層ともに中程度である。

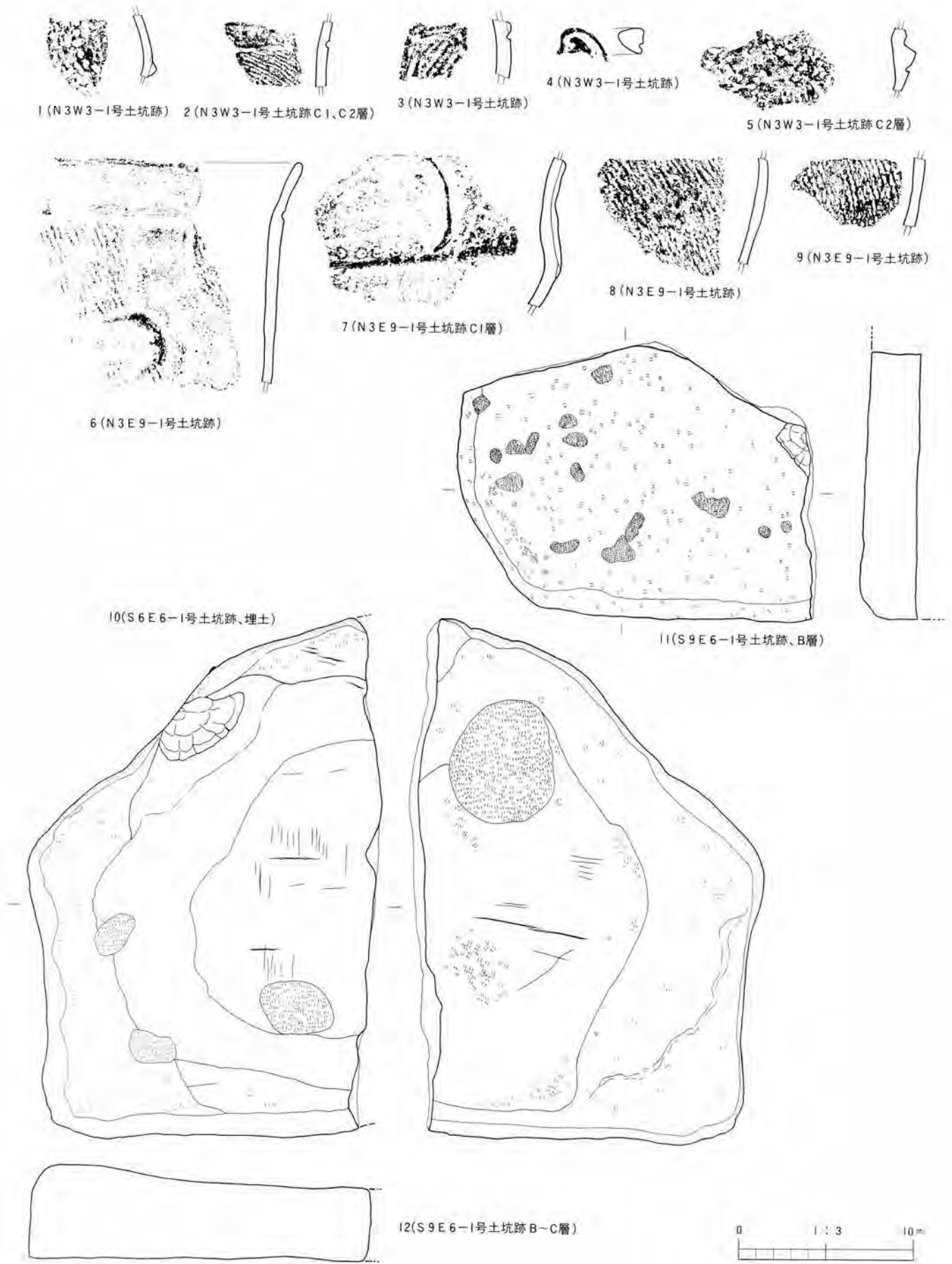
B1層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。壁際に礫の集積がみられた。

C1層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒をわずかに含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。B層に連続して壁際に礫の集積がみられた。

出土遺物（第16図）

やはり出土遺物は極めて少ない。縄文土器片はいずれも磨滅しており図示できなかった。

11・12はB層～C層の礫が集積したところに含まれていたものである。



第16図 中央広場出土遺物(1)

46は石皿で、良く使い込まれ両面に凹んだ磨面を有する。磨面には擦痕と敲打痕の集中するところが認められる。47も石皿であり、一方の面に磨面があり、全面的にまばらな敲打痕が認められるが、部分的に敲打痕が集中するところも認められる。擦痕はほとんど認められない。

N 3 E 9 - 1号土坑跡（第15図）

中央広場の東半部に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は開口部径0.8m、底面径1.7m、深さ0.9mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦であり、柱穴等の付属施設は検出されなかった。

埋土はA層～F層の6層に大別される。

A 1層は粘性のある暗褐色土を基本土とし、わずかに黄褐色土塊などを含むほか炭化物粒を少量含む。やや柔らかくしまりがいい。

B 1層は粘性のある褐色土を基本土とし、わずかに黄褐色土塊などを含むほか炭化物粒を少量含む。やや柔らかくしまりがいい。

C層は粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む柔らかくしまりのない層である。3層に細分されるが、C 2層が最も明るい。また、全層ともに炭化物粒を多く含むがC 3層が最も多い。

D層は粘性のあるやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む柔らかくしまりのない層である。炭化物粒を多く含む。2層に細分されるがD 2層は混入土を多く含む。

E層は粘性のある暗褐色土～褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを含むやや柔らかくしまりのない層である。3層に細分され、上層から下層へ次第に明るくなる。また、炭化物粒の含有量はE 1層が最も多いが下層へ次第に少なくなる。

F 1層は底面に堆積する厚い層である。粘性のある黄褐色土（地山に類似）を基本土とし、褐色土塊を微量含む。固さやしまり具合は中程度である。

出土遺物（第16図6～9）

6は口縁がわずかに外反する深鉢で、体部に磨消し技法によりL字文(?)を施文する。無文帯の端部には鱗状隆帯が施されている。7は勁部から体部にかけて屈曲する深鉢である。口縁部文様帯にはノ字状の鱗状隆帯が施される。また、口縁部文様帯の下端には円形の連続刺突文を伴う隆帯が横位に施される。8・9は体部の破片で、いずれもRの撚糸文を地文としている。これらはおおむね大木10式に伴うものと思われる。

第XI群

N 3 W 12 - 1号土坑跡（第17図）

中央広場の西端部に位置し、N 3 W 9 - 1号土坑跡に切られる。平面形は不整円形を呈し、規模は、開口部径1.8m、底面径1.75m以上、深さ0.65mを計る。

埋土はA層～E層の5層に大別される。

A層は明褐色～黄褐色土を基本土とし、褐色土塊や橙色土塊などをやや多く含む。A 1層はやや暗く焼土粒を微量含む。両層とも固さ、しまりともに中程であるが、A 1層はややしまりがいい。

B1層は明褐色粘質土を基本土とし、橙色土塊や褐色土塊などを多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は5層に細分される。C1層・C4層は黄褐色土を、C2層は明褐色土を基本土とし、混入土を多く含むが、C1層のみは極めて少ない。いずれも固さ、しまり具合は中程度である。C2層とC4層の層位付近に多くの土器片を含むほか、C2層に炭化物粒を比較的多く含む。

D層は5層に細分される。D1層～D3層は黄褐色粘質土を、D4層は褐色土を、D5層は明褐色土を基本土とし、いずれも混入土を多く含む。D2層・D4層がやや柔らかいほかはいずれも固さ、しまり具合ともに中程度である。D1層上部に多量の土器片を含む。

E層は底面を覆う層で、褐色土を基本土とし、明褐色土塊、明褐色土塊、黄橙色塊を含む。固さは中程度でややしまっている。

出土遺物は大半をとり上げていないものの平行沈線にて施文する深鉢（大木8b式）などがややまとまって出土している（第20図 17～30）。

第IX群

N3W9-1号土坑跡（第17図）

中央広場の西端部に位置し、N3W12-1号土坑跡を切る。平面形は不整形円形を呈し、規模は、開口部径1.4m、底面径1.75m、深さ1.0mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層～E層の5層に大別される。

A1層は明褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊などを多く含む。固さしまり具合ともに中程度である。

B層は明褐色土～黄褐色土を基本土とし、橙色土塊などをやや多く含む。4層に細分したがB3層のみは褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は3層に細分され、C1層は褐色粘質土を、C2層は明黄褐色粘質土を、C3層は黄褐色土を基本土とする。C1層は混入土が少なく、固さ、しまりともに中程度であるが、C2層とC3層は混入土が多く、やや固い。

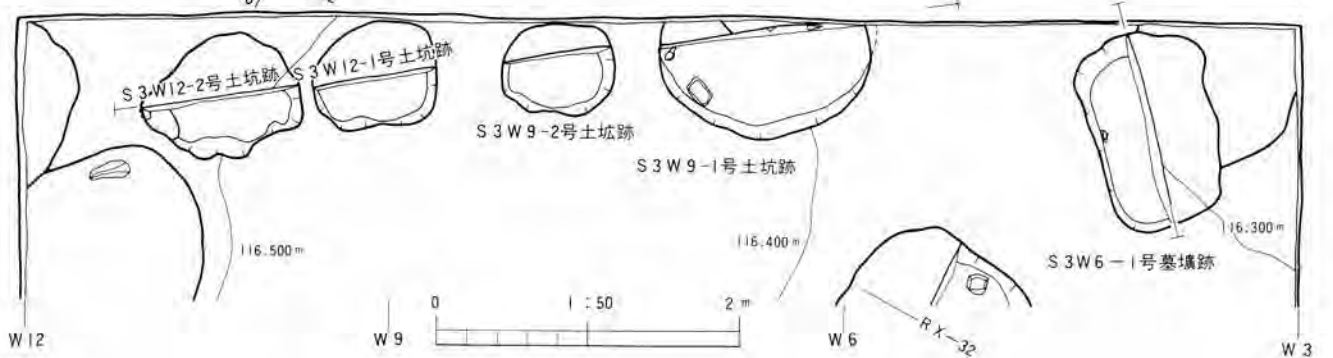
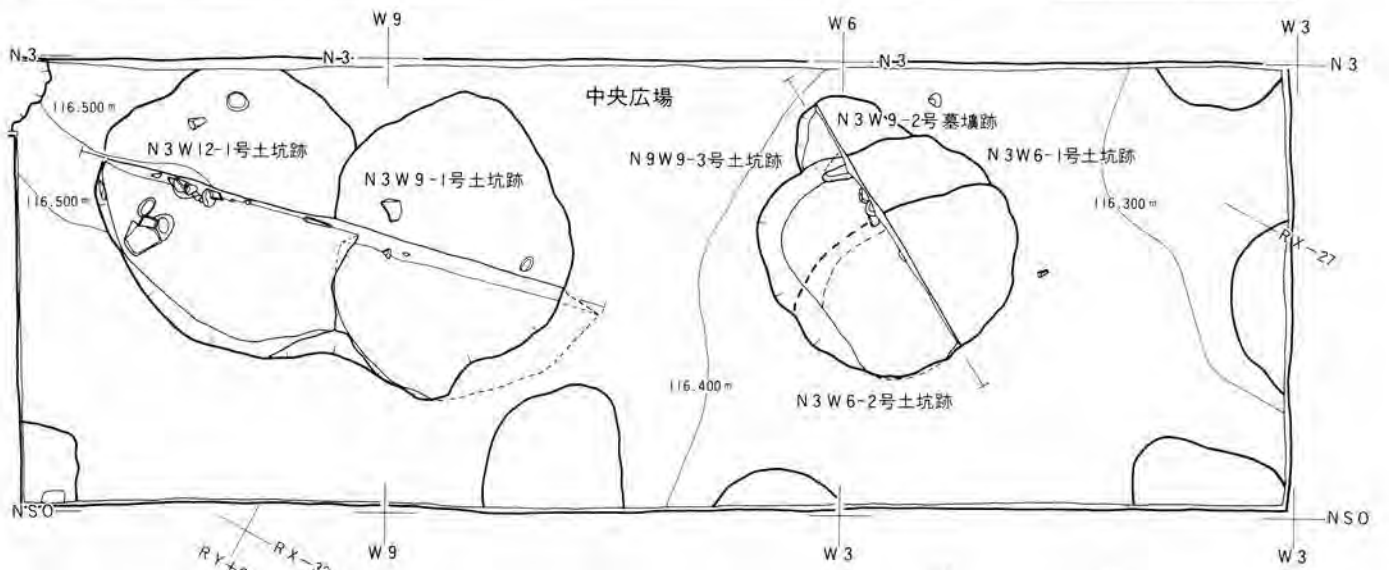
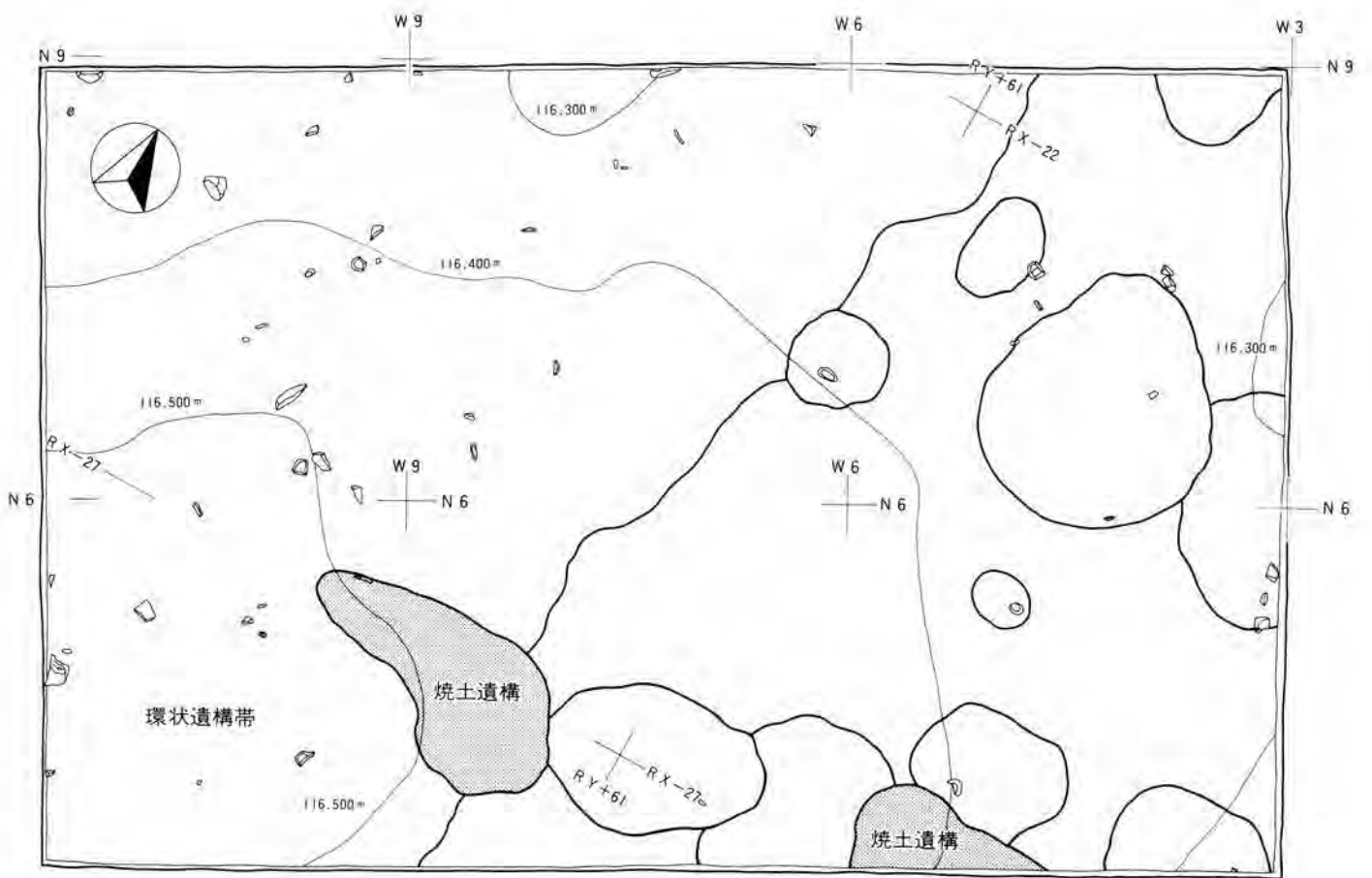
D層は8層に細分され、黄褐色土層と褐色土層が交互に堆積する。D1層・D2層・D6層・D8層が前者に、D3層～D5層・D7層が後者に相当する。D3層・D6層以外は混入土を多く含む。いずれの層も固さ、しまり具合ともに中程度である。

E層は7層に細分され、E1層・E2層・E4層～E6層が粘性のある暗褐色土、橙色土、黄褐色土を基本土とし、E3層・E7層が褐色粘質土を基本土とする。いずれの層も混入土を比較的多く含む。E1層～E4層は固さ、しまり具合ともに中程度で、E5層～E7層はやや柔らかく、ややしまりが無い。

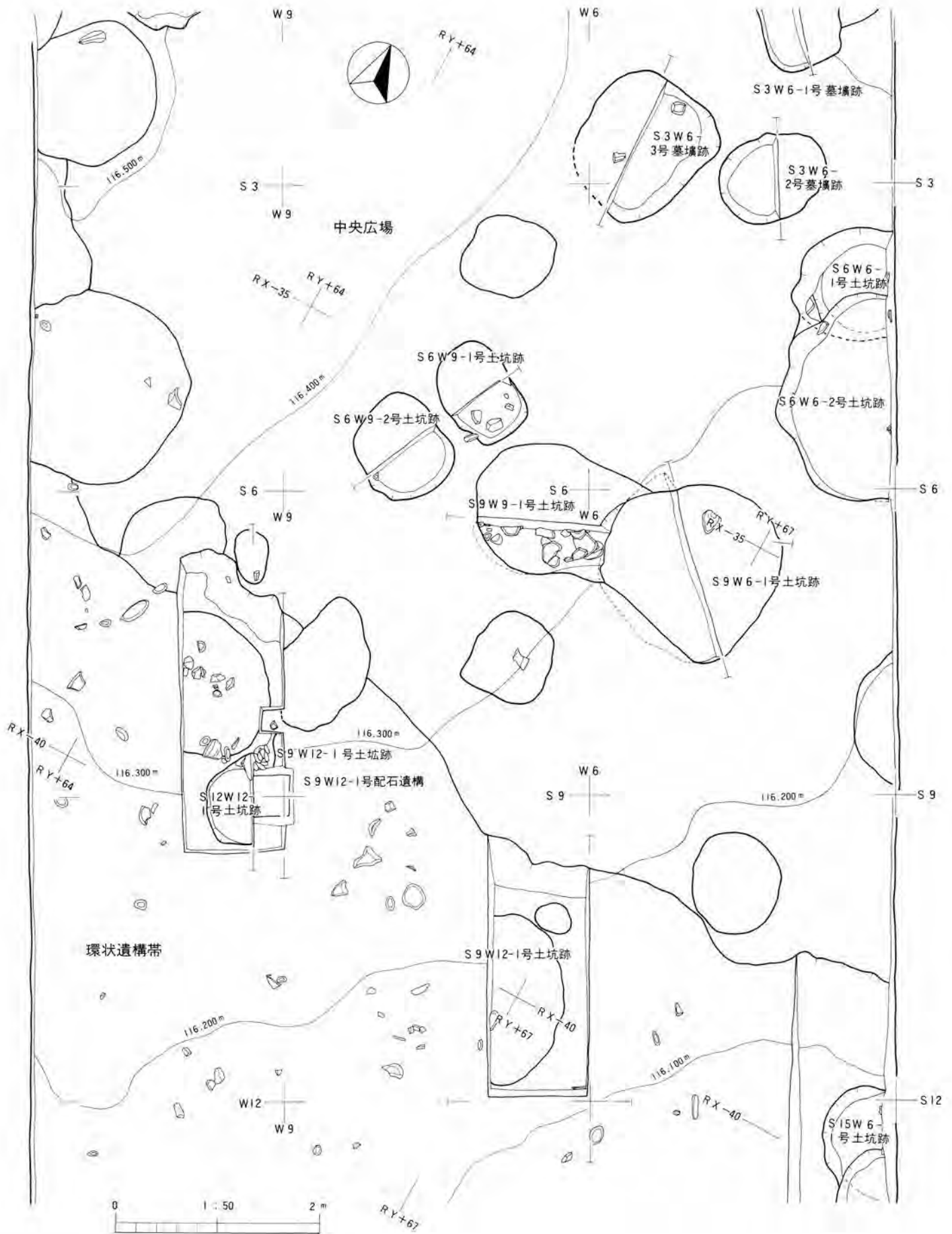
F1層は底面を覆う薄い層で、明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や黄橙色土塊を含む。固さは中程度で、ややしまっている。

第XI群

出土遺物は磨消し技法により施文される深鉢片が出土しており、大木10式に伴うものと思われる（第20図 31・32）。



第17図 中央広場検出遺構(3) N 9 E 6 ~ S 6 W 12グリッド



第18図 中央広場検出遺構(4) S 6 W 6 ~ S 15 W 12グリッド



第19図 中央広場検出遺構土層断面図

N 3 W 9 - 3号土坑跡 (第17図)

中央広場の西端部に位置し、N 3 W 6 - 1号土坑跡を切る。部分的にしか掘っていないために全体の平面形や規模は不明である。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層で3層に細分される。いずれも明褐色～黄褐色粘質土を基本土とし、基本土と同質の混入土を含む。やや柔らかく、しまり具合は中程度である。

出土遺物はない。

S 3 W 9 - 1号土坑跡 (第17図)

中央広場の西半部に位置する。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.35m、底面径1.45m、深さ1.1mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層～E層の5層に大別される。

A層は6層に細分され、黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。A 3層のみはやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊を含む。いずれも固さ、しまり具合ともに中程度である。

B層は7層に細分され、A層より明るい黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や明褐色土塊などをやや多く含む。B 2層のみは明黄褐色粘質土を基本土とし、橙色土塊や褐色土塊を少量含む。いずれも固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は3層に細分される。C 1層・C 2層は橙色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や黄褐色土塊などを多く含む。C 3層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や橙色土塊をやや多く含む。いずれの層も固さ、しまりともに中程度である。

D層は3層に細分される。D 1層・D 2層は黄褐色土を基本土とし、明褐色土塊や橙色土塊などを多く含むほか、炭化物粒を多量に含む。D 1層はD 2層よりも明るく混入土も多い。D 3層は橙色土を基本土とし、明褐色土塊を多く含むが、炭化物粒はほとんど含まない。固さ、しまり具合はほぼ中程度であるが、C 2層がやや柔らかく、ややしまりがない。

E 1層は底面を覆う薄い層で、黄褐色粘質土を基本土とし、橙色土塊を含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

第XI群

出土遺物は大木10式に伴う深鉢片のほか、C 1層から両面に使用痕を持つ凹石が出土している(第20図 33・第21図 34～38)。

S 9 W 6 - 1号土坑跡 (第18図)

中央広場南西部に位置する。第7次調査にてB 1層上部まで下げた状態で報告したが、第11次調査にて再調査したところ掘り足りなかったことが判明した。S 9 W 9 - 1号土坑跡に切られる。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.53m、底面径1.9m、深さ1.0mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層～F層の6層に大別される。

A層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊などをやや多く含むが、A 3層・A 6層・A 8層はこれらのほかに褐色土塊を含む。また、A 4層・A 5層は明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。A 1層・A 2層はやや固いが、他の層は固さ、しまり具合ともに中程度である。

B層は10層に細分される。B1層・B2層は地山起源の橙色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。B4層も同様であるが、混入土が極めて少ない。B3層は明褐色粘質土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊などを多く含む。B5層・B6層・B8層は明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を少量含む。B7層・B9層・B10層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や明褐色土塊などを含む。B7層・B8層がやや柔らかいほかは固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は7層に細分される。C1層・C4層・C5層が明黄褐色土を、C2層・C6層・C7層が黄褐色土を、C3層が褐色土を基本土とし、いずれも混入土を多量に含む。C2層がやや柔らかいほかは固さ、しまり具合ともに中程度である。

D層は9層に細分される。D1層・D5層・D6層は褐色土を、D2層～D4層・D7層・D9層は黄褐色土を、D8層は明黄褐色土を基本土とし、いずれも混入土を多量に含むが、C層よりはやや少ない。D1層・D7層～D9層はやや柔らかく、固さは中程度であり、他の層は固さ、しまり具合は中程度である。

E1層はほぼ地山起源の土壌のみで構成され、明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含むほか褐色土塊をわずかに含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

F1層は底面を覆う層で、黄褐色土を基本土とし、やや暗い黄褐色土を含む。やや柔らかく固さは中程度である。

出土遺物は小片のみであるが、磨消し技法により施文される土器片が出土しており、大木10式に伴うものであろう(第21図 41)。

第XI群

C2類

N3W6-2号土坑跡(第17図)

中央広場西半部に位置し、N3W6-1号土坑跡を切る。平面形は不整形を呈し、規模は、開口部径1.03m、底面径0.9m、深さ0.98mを計る。

埋土はA層～D層の4層に大別される。

A1層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や橙色土塊などを含む。やや固く、しまり具合は中程度である。炭化物粒を少量含む。

B層は9層に細分される。B1層・B4層～B9層は黄褐色土を、B2層・B3層は褐色土を基本土とし、混入土を少量含むが、B7層で特に多い。B4層以下はやや明るい層とやや暗い層が交互に堆積している。B7層・B9層以外は炭化物粒を微量～少量含む。B1層～B6層はやや固く、しまり具合は中程度で、B7層～B9層は固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は2層に細分される。C1層は明褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊を含む。C2層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。いずれも固さ、しまり具合ともに中程度である。炭化物粒を含むが、C1層でやや多い。

D層は明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊、褐色土塊、橙色土塊などを多量に含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

出土遺物は、大木9式に伴う深鉢片などがある。

第X群

N 3 W 6 - 1号土坑跡 (第17図)

中央広場の西半部に位置し、N 3 W 6 - 2号土坑跡・N 3 W 9 - 3号土坑跡に切られ、N 3 W 9 - 2号墓坑跡を切る。平面形は不整形円形を呈し、規模は開口部径1.5m程度、底面径1.4m程度、深さ0.95mを計る。

埋土はA層・B層の2層に大別される。

A層は黄褐色土～明褐色土を基本土とする。A 1層・A 2層は褐色土塊などを含み、A 3層・A 4層は明黄褐色を含む。いずれの層も炭化物粒を少量含むが、A 2層でやや少ない。やや固く、しまり具合は中程度である。

B層は3層に細分される。B 1層・B 3層は明黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊などを多量に含む。B 2層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。いずれの層も固さ、しまり具合ともに中程度である。

第Ⅸ群～第Ⅹ群

出土遺物は大木 8 b 式～大木 9 式に伴う深鉢片などがある (第21図 48～50)。

S 6 W 6 - 1号土坑跡 (第18図)

中央広場の西半部に位置し、S 6 W 6 - 2号土坑跡を切る。平面形は不整形円形を呈し、規模は開口部径1.05m、底面径0.8m、深さ0.9mを計る。

埋土はA層～D層の4層に細分される。

A 1層は北壁付近のみに堆積し、地山起源の明黄褐色土を基本土とし、橙色土塊や黄褐色土塊を多く含む。やや固く、ややしまっている。

B層は6層に細分される。B 1層・B 4層が明黄褐色土を、B 2層・B 3層・B 6層が黄褐色土を、B 5層が明褐色土を基本土とし、混入土を含むがあまり多くはない。B 1層・B 2層がやや固いほかは固さ、しまり具合ともに中程度である。各層ともに炭化物粒をやや多く含むが、B 5層・B 6で特に多い。

C 1層は黄褐色土を基本土とし、黄橙色土塊や明黄褐色土塊を多量に含む。やや固く、ややしまっている。炭化物粒を少量含む。

D 1層は底面を覆う薄い層で、明黄褐色土を基本土とし、黄橙色土塊などをやや多く含む。固さは中程度で、ややしまっている。

第Ⅹ群

出土遺物は大木 9 式に伴う深鉢片などがある。

S 6 W 6 - 2号土坑跡 (第18図)

中央広場の西半部に位置し、S 6 W 6 - 1号土坑跡に切られる。平面形は不整形円形を呈し、規模は開口部径2.0m程度、底面径2.0m、深さ1.1mを計る。

埋土はA層～F層の6層に大別される。

A 1層は明褐色土を基本土とし、橙色土塊・黄褐色土塊・褐色土塊を多く含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。

B層は12層に細分される。B 5層・B 6層・B 8層が明黄褐色土を基本土とするほかは黄褐色土を基本土とする。混入土はB 7層以上に明黄褐色土塊・橙色土塊・褐色土塊なども多量に含むものの、上層は比較的少ない。また、各層ともに炭化物粒を含み、B 2層・B 4層で特に

多く、B10層・B11層でやや多い。さらに、B2層は石鏃や土器片などの遺物をやや多く含む。B1層・B2層・B5層・B8層がやや固く、B11層・B12層がやや柔らかいほかは固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は5層に細分される。C1層が橙色土を、C2層・C5層が褐色粘質土を、C3層・C4層が黄褐色土を基本土と混入土を多く含む。C2層・C5層は炭化物粒を多く含むが、C2層で特に多い。C1層がやや柔らかく、C3層がやや固いほかは固さ、しまり具合ともに中程度である。

D層は6層に細分される。D2層が褐色土を基本土とするほかは黄褐色土を基本土とする。微妙な色調の違いによる明るい層と暗い層が交互に堆積しており、前者がD1層・D3層・D5層・後者がD2層・D4層・D5層となる。混入土はD1層で少ないほかは多量に含まれている。D6層を除き炭化物粒を微量含む。D3層・D4層・D6層がやや柔らかいほかは固さ、しまり具合ともに中程度である（第21図 42～47）。

E層は3層に細分される。E1層・E3層は明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊・黄褐色土塊・褐色土塊などを多量に含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。E2層は明褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や黄褐色土塊などを含む。やや柔らかく、しまり具合は中程度である。F1層は底面を覆う薄い層で、黄褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や橙色土塊をやや多く含む。固さは中程度でややしまりがある。

出土遺物は大木9式～10式に伴う深鉢片などがある（第21図 42～47）。

第X群～第XI群

S9W9-1号土坑跡（第18図）

中央広場南西部に位置し、S9W6-1号土坑跡を切る。平面形は不整楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.75m以上、短軸1.3m、底面長軸1.35m以上、深さ0.85mを計る。断面形は部分的にわずかにオーバーハングする部分も認められるが、直壁～外傾する部分が多く、本類に含めた。

埋土はA層・D層の4層に大別される。

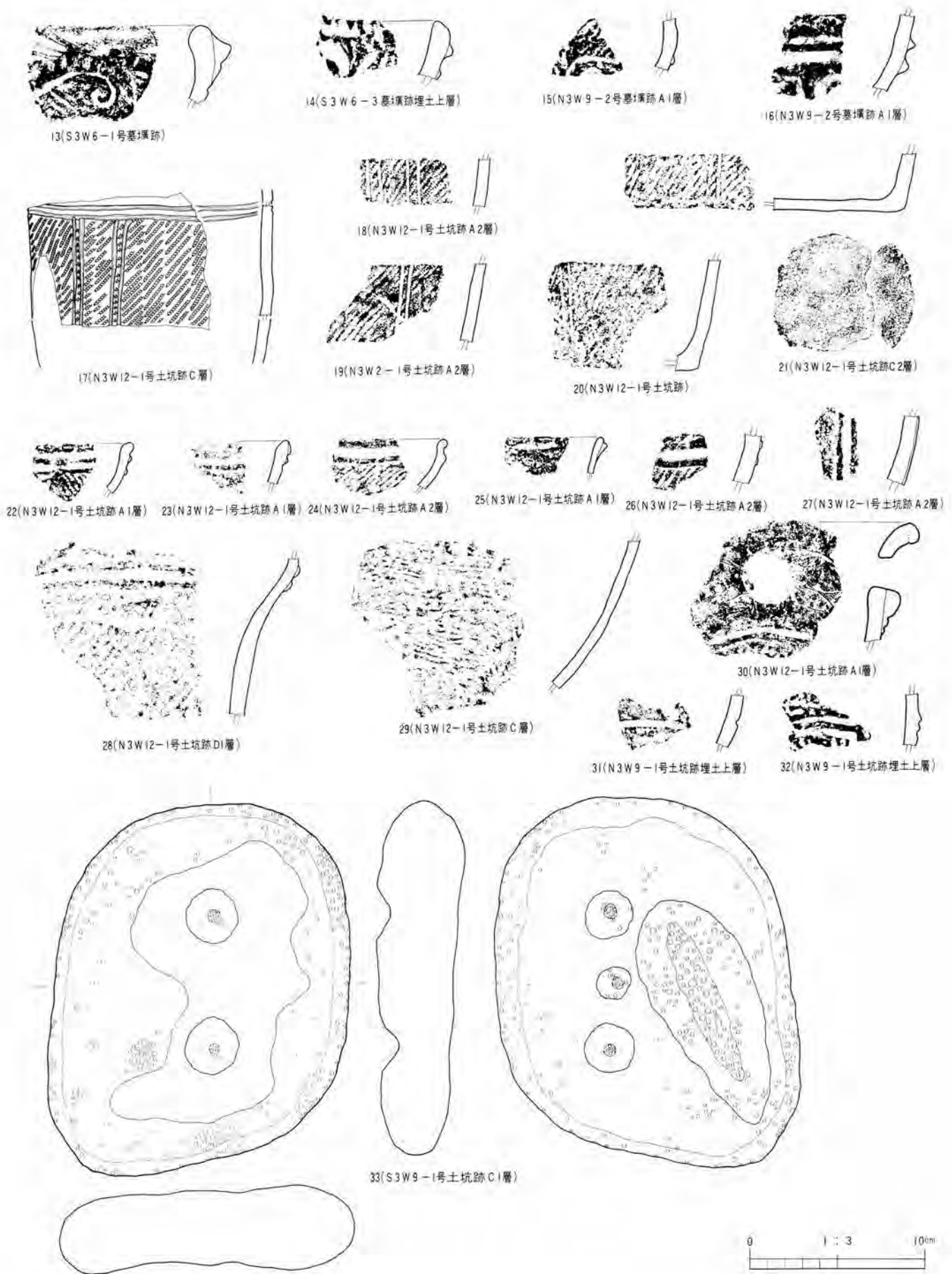
A1層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊などを含む。やや固く、ややしまりがない。B層は8層に細分される。B1層・B3層・B5層・B6層・B8層が黄褐色土を、B2層・B4層・B7層が明黄褐色土を基本土とし、ほぼ暗い層と明るい層が交互に堆積する。いずれの層も混入土をやや多く含む。B7層・B8層がやや柔らかいほかは固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は3層に細分される。C1層・C2層は黄褐色土を、C3層は明褐色土を、基本土とし、いずれも明黄褐色土塊などを含む。C3層には石皿片や礫などが多量に含まれていた。いずれの層も固さ、しまり具合ともに中程度である。

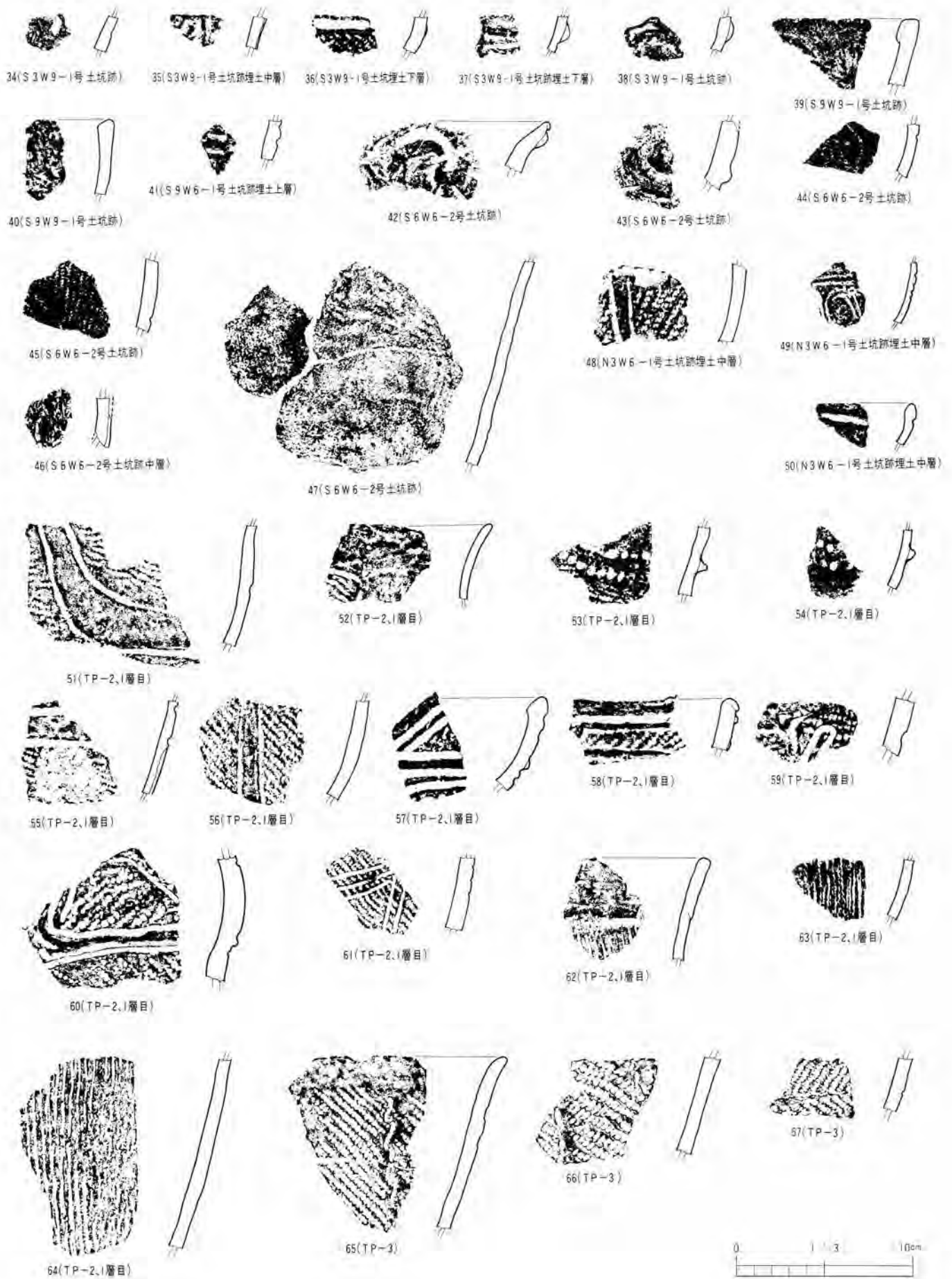
D1層は底面を覆う薄い層で、明黄褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊をわずかに含む。やや柔らかいがややしまっている。

出土遺物は石皿片や土器片などがあるものの時期を特定できるものはない。ただし重複関係からは大木9式以降に伴うことになる（第21図 39・40）。

C類 上端部の精査のみ実施したもので、断面形は不明であるが、相当な深さがある。



第20図 中央広場出土遺物(2)



第21図 中央広場出土遺物(3)・西集落西部テストピット出土遺物

S 6 W 9 - 1 号土坑跡 (第18図)

中央広場の南西部に位置し、S 9 W 9 - 1 号土坑跡に隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.0m、短軸0.7mを計る。

確認した埋土はA 1層のみである。A 1層は黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を少量含むほか、径20cm以下の角礫を含む。やや柔らかく、しまり具合は中程度である。

出土遺物は土器の細片などがあるものの時期は不明である。

S 6 W 9 - 2 号土坑跡 (第18図)

中央広場の南西部に位置し、S 6 W 9 - 1 号土坑跡に隣接する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は開口部長軸1.0m、短軸0.85mを計る。

確認した埋土はA 1層のみである。A 1層は褐色土を基本土とし、橙色土塊・明褐色土塊・暗褐色土塊などを多量に含む。

出土遺物は無い。

b) 環状遺構帯

中央広場の外側は、これを取り囲むように地山が落込み暗褐色土などが堆積している。当初は「地山の落込み」、「環状の落込み」などと呼称し、平成3年度からは東側に設定したトレンチでの断面形態や埋土の堆積状況から人為的な遺構であると判断し、中央広場を区画する施設であるとの想定のもとに「環壕」の名称を用いてきた。

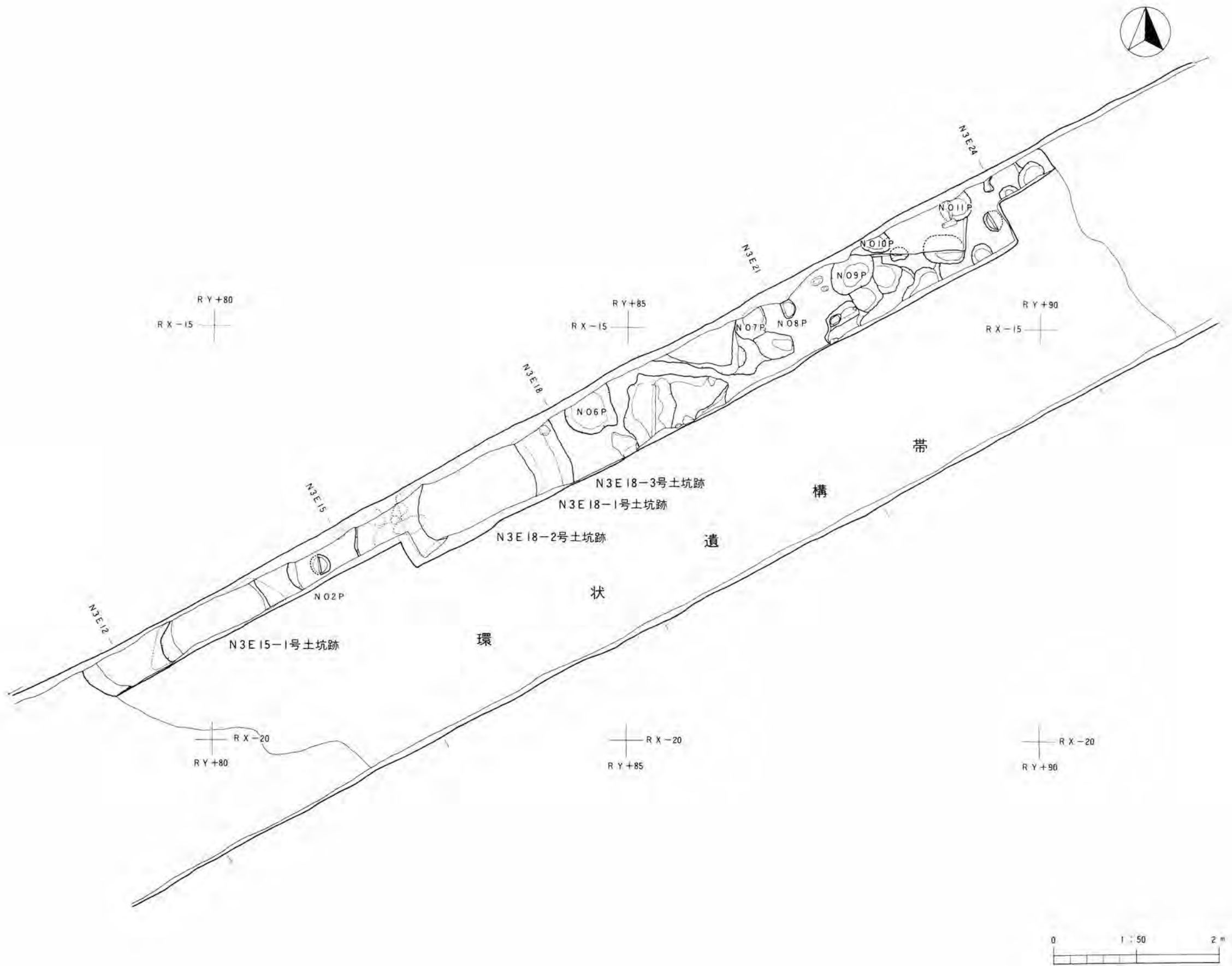
しかし、平成6年度に実施した第11次調査では内側（中央広場側）の立ち上がりは確認したものの、外側（南側）の立ち上がりが認められなかったことと、この埋土中に墓塚跡・土坑跡・柱穴跡のほか竪穴住居跡などの遺構が多数検出されることを確認した。

これらの調査内容を、崎山貝塚調査指導委員会にて検討していただいたところ、この地点は基本的には日常的な居住空間ではなく、極めて長期間にわたり複合的に利用されてきた場であるとの指摘を受けた。また、名称についても区画施設としての「環壕」というような単一的性格のみを限定した名称を用いるのは不適格であり、「環状遺構帯」という名称を用いるべきであるとの指導をいただいた。このため今後はこの名称を使用することとしたい。

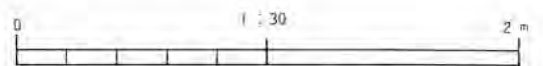
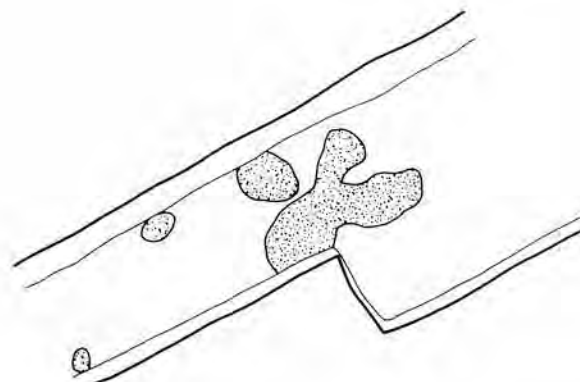
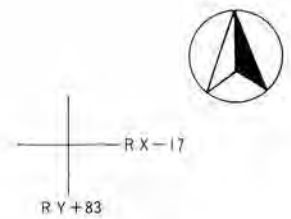
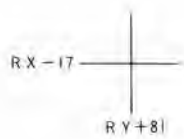
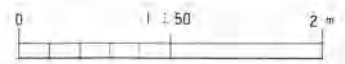
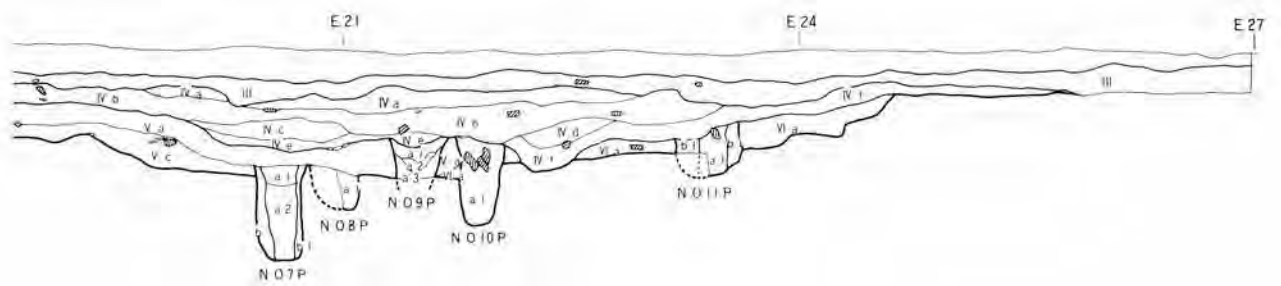
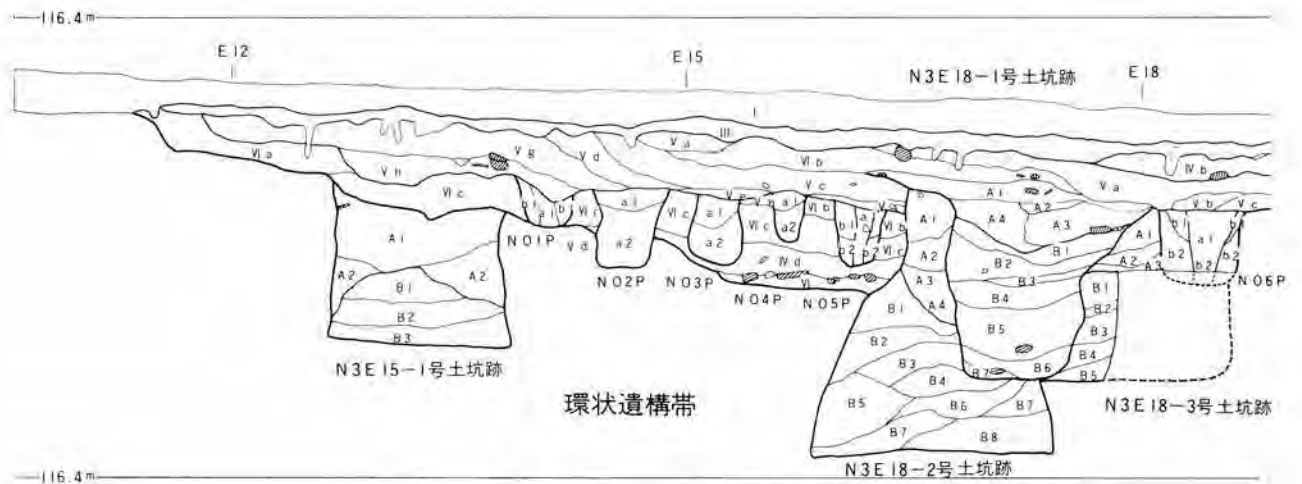
環状遺構帯は中央広場を環状にとり囲む人為的な遺構であり、東側はN 3 E 9グリッドからN 3 E 27グリッドにかけて、南側はS 9 E 6グリッドからS 30 E 6グリッドにかけてとS 3 W 15グリッドからS 33 W 15グリッドにかけてサブトレンチを設定し、断面形や堆積状況の観察を実施している。ここではこれら3本のトレンチをそれぞれEトレンチ・SCトレンチ・SWトレンチと仮称する。

環状遺構帯の規模はEトレンチで幅13.2m、SCトレンチで幅19m以上となる。また、西側での検出面幅は25m程度、北側での検出面幅は17m以上となる。

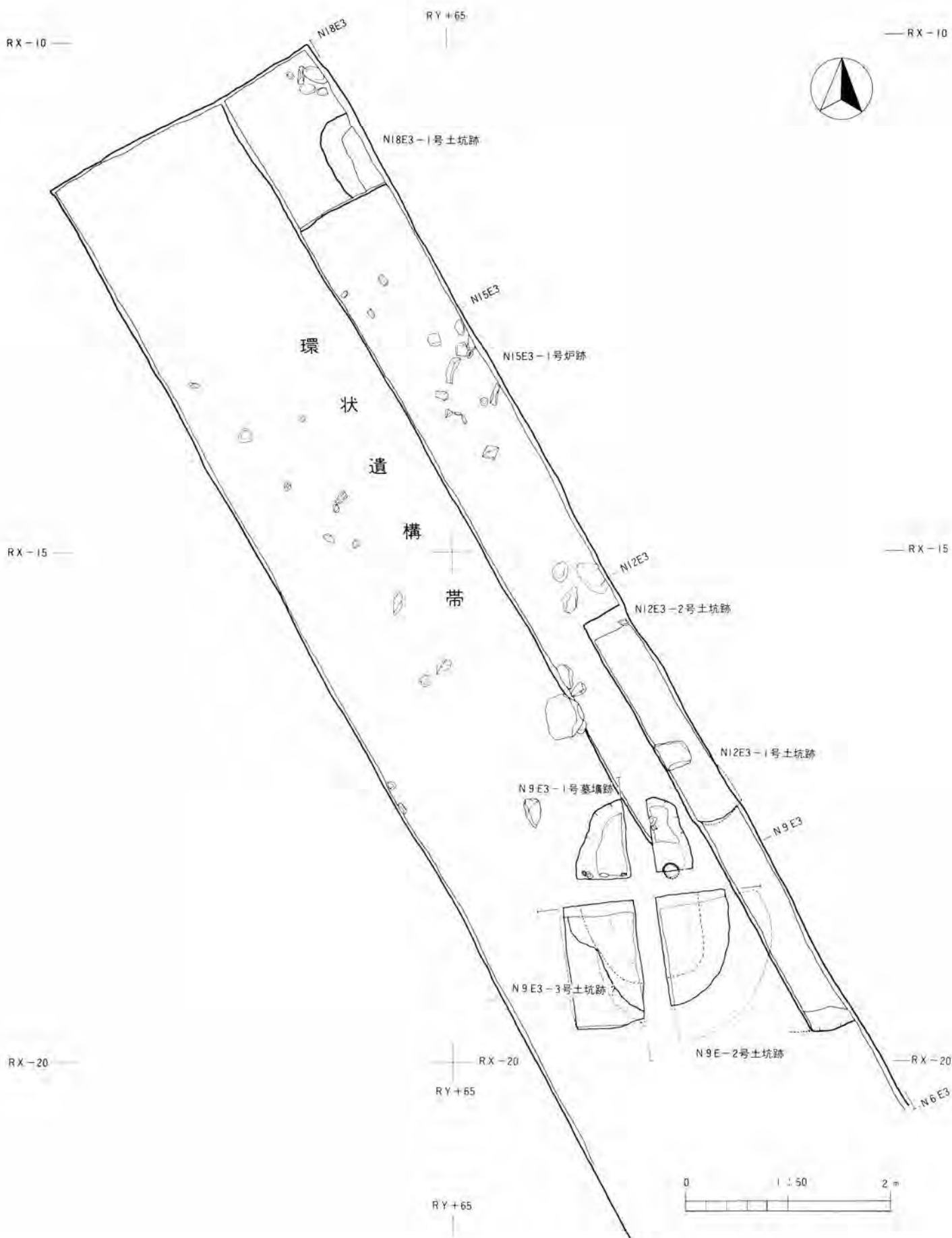
Eトレンチでの断面形はゆるやかな溝状に掘り込まれ、内外両面の壁が約45°の角度で立ち上がり、壁高は0.2mほどとなる。ここから中央部にかけてゆるやかに落込み、最深部の深さは検出面から1.0mとなる。底面は土坑跡などとの重複により不明瞭であるもののやや凸凹が



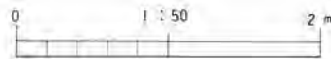
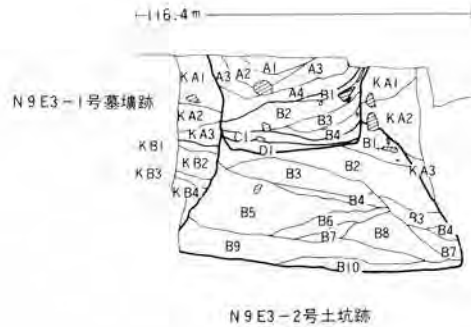
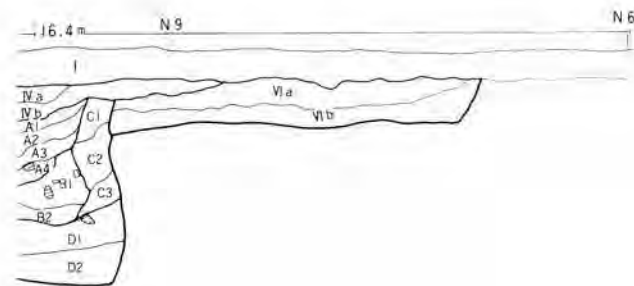
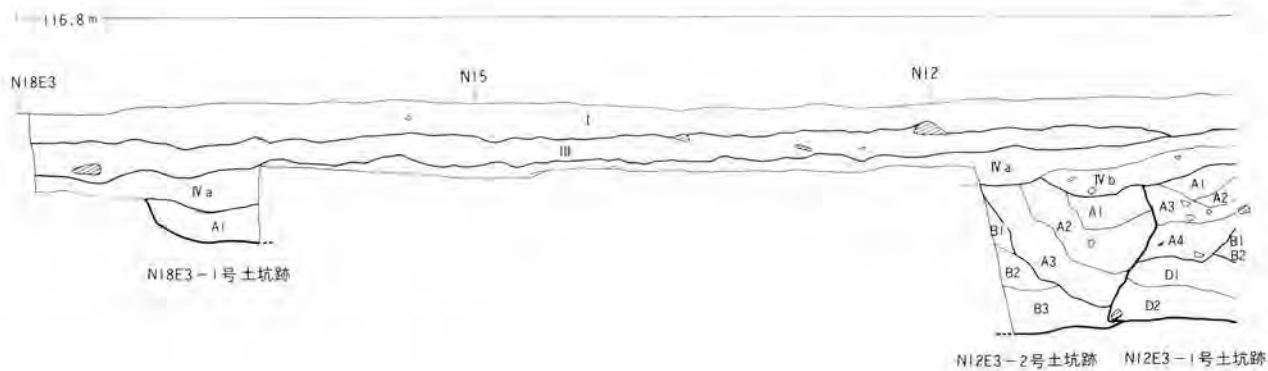
第22図 環状遺構帯平面図(1) N3E12~N3E27グリッド (Eトレンチ)



第23図 環状遺構帯土層断面図(1) N3E12~N3E27グリッド (Eトレンチ)・ドングリブロック堆積状況



第24図 環状遺構帯平面図(2) N18E3~N9E3グリッド



第25図 環状遺構帯土層断面図(2) N18E3～N9E3グリッド

ある。

一方、SC・SW両トレンチでの断面形は溝状とならずに段状となり、外側では、明瞭な立上がりが見られない。SCトレンチでは内側の壁が約45°の角度で掘り込まれ、壁高は0.7mほどとなり、最深部の深さは0.9mほどとなる。底面はやはり土坑跡などとの重複により不明瞭ではあるが、ゆるやかな凸凹を持ちながらも標高115.3m～115.5mの間でほぼ平坦となり、外縁付近に形成された盛土層上面（標高115.7m）へ続くものと思われる。SWトレンチでもほぼこれと同様な形態となる。

環状遺構帯を覆う埋土はIV層～VII層で、底面の構築土がVIII層・南外縁付近に形成された盛土層の堆積層がIX層～XII層である。3本のトレンチ間では大別層がほぼ同様な堆積状況を呈しているものの、細分層の照合は不可能であったためにトレンチ間の対応関係は把握できていない。このため各トレンチから確認された細別層のすべてに個別の名称を付した。

IV層は暗褐色～褐色土を基本土とし15層に細分される。IV a層～IV f層はEトレンチの堆積層で東半部を中心に堆積する。IV a層～IV c層はやや明るい暗褐色土粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を少量含むほか褐色土塊を少量含む。IV c層は炭化物粒や焼土粒を含み。IV b層は炭化物粒を少量含む。IV b層とIV c層から大木10式に伴う土器片が出土している。

IV d層は地山ブロック層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をやや多く含む。

IV e層～IV f層は暗褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を含む。前者は全体にやや赤みを帯び、やや明るい暗褐色土塊と黒褐色土塊を多く含むのに対し、後者はやや明るい暗褐色土塊を多く含み、褐色土塊を少量含んでいる。

IV g層～IV k層はSCトレンチの堆積層であり、北端～南端付近まで広く堆積している。IV g層・IV i層・IV k層は暗褐色土を、他の層は褐色土を基本土とし、いずれも混入土はやや少ない。IV j層は多量の炭化物粒と少量の焼土粒を含む。また、IV i層・IV k層も少量の炭化物粒を含む。

IV l層～IV o層はSWトレンチの堆積層であり、中央部付近にのみ堆積する。IV m層が褐色土を基本土とするほかは暗褐色土を基本土とする。いずれも混入土や炭化物粒の混入は少ないが、IV o層ではやや多い。

V層は主に褐色土を基本土とし、14層に細分される。IVに比べ大分明るい。

V a層～V h層はEトレンチの堆積層であり、ほぼ全域に広く堆積している。V a層～V d層は上層より褐色土層と暗褐色土層が交互に堆積する。いずれも褐色土塊や暗褐色土塊を多く含み、特にV c層に多い。

V e層～V f層はやや明るい暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。特に炭化物粒の混入が著しい層で、V e層中には酸化したドングリ類の集積がみられた（第23図）。土壌ごと持ち帰り篩分けを実施したところ、ドングリ類のほか焼骨片が検出されたものの同定できるものはなかった。

V g層～V h層は褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。

V i層～V j層はSCトレンチの堆積層であり、北寄りにわずかな堆積がみられる。いずれ

もやや明るい褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むが、V i層でやや多くV j層で極めて少ない。両層ともに炭化物粒を少量含む。

V k層～V n層はS Wトレンチの堆積層であり、やはり北寄りにのみ堆積している。いずれもやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などのほか炭化物粒を少量含む。

VI層はやや明るい褐色土～黄褐色土を基本土とし21層に細分される。V層に比べ明るい。

VI a層～VI e層はEトレンチの堆積層であり、底面を覆い広く堆積している。いずれもやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。IV d層のみは混入土の割合が少ない。また、VI b層・VI d層・VI e層は少量の炭化物粒を含む。

VI f層～VI q層はS Cトレンチの堆積層であり、南端部を除き広く堆積している。VI f層～VI h層・VI k層・VI o層が黄褐色土を、VI i層・VI j層・VI l層～VI n層・VI q層が褐色土をVI k層が暗褐色土を基本土とし、やや暗い褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も炭化物粒を少量～微量含むが、VI p層とVI q層では著しく多い。VI j層は焼土まじり層である。

VI r層～VI u層はS Wトレンチの堆積層であり、北半部から中央部にかけて堆積する。いずれも黄褐色土を基本土とする。VI r層・VI s層は明黄褐色土塊などを少量含む。また、VI t層・VI u層は褐色土塊などを多く含むほか炭化物粒を少量含む。

VII層は土坑跡の底面に堆積する層に類似するもので、環状遺構帯使用時～使用直後に堆積したものである。S Cトレンチのみに堆積し、3層に細分される。いずれも褐色粘質土を基本土とし、明黄褐色土塊などを少量含む。固く、ややしまっている。

VIII層は環状遺構帯を構築する際に土 跡を埋めた粘土層でS Cトレンチでのみ確認した。3層に細分され、いずれも黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。いずれも固く、締め具合は中程度である。VIII a層とVIII b層は炭化物粒をやや多く含む。

IX層～XI層は環状遺構帯南側の外縁に堆積する盛土層であり、S CトレンチとS Wトレンチでのみ確認している。

IX層は暗褐色～褐色盛土層群であり14層に細分される。IX a層～IX g層はS Cトレンチでの堆積層で、X層堆積後の緩斜面（X層上面）を覆うように盛土され、最上面はほぼ平坦になっている。上層より暗褐色土層と褐色土層がほぼ交互に堆積しており、褐色土塊などの混入土を中～少量含む。IX a層・IX c層・IX e層・IX g層に炭化物粒をやや多く含むが、IX g層で特に多い。いずれの層もやや固く、しまり具合は中程度である。

IX h層～IX i層はS Wトレンチでの堆積層である。S Cトレンチに類似するが、色調がやや暗く、いずれも暗褐色土を基本土とし、上層より暗い層と明るい層が交互に堆積する。最上部のIX h層とIX i層は竪穴住居跡の貼床層にみられるような構築面となっている。IX l層・IX m層に炭化物粒をやや多く含む。いずれの層も固く、しまり具合は中程度である。

X層は地山ブロックなどの混入土を多く含む暗褐色盛土層群であり8層に細分される。S CトレンチではIX a層～IX e層が約30°～45°の傾斜で、北側（内側）から南側（外側）へ積み上げる様に盛土している。いずれもやや固く、しまり具合は中程度である。

一方S Wトレンチでは（IX f層～IX h層）、南側（外側）から北側（内側）へ積み上げており、やや柔らかくややしまりが少ない点などの差異がみられる。

XI層はS Wトレンチのみの褐色盛土層群で2層に細分される。トレンチ南半分に堆積するが、

他の盛土層と堆積する地点が異なり、やや内側（北側）にのみ分布する。

いずれもやや明るい褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊などを少量含む。固く、しまり具合は中程度である。

XII層は褐色盛土層群であり炭化物粒をやや多く含み、9層に細分される。XII a層～XII e層はSCトレンチでの堆積層で、XII a層のみはやや明るい暗褐色土を、他の層は褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含むがあまり多くはない。いずれも炭化物粒をやや多く含むが、特にXII a層で多い。いずれの層も固く、しまり具合は中程度である。

XII f層～XII i層はSWトレンチの堆積層であり、SCトレンチにはほぼ類似するが、XII f層がやや暗い点と、全体的に柔らかくややしまりが少ない点でも差異がある。

XIII層以下は地山層～基盤岩層である。

以上であるが、他のサブトレンチも基本的にはこれらに対応しているために詳述を避ける。

出土遺物

Eトレンチ（第26図～第30図）

Eトレンチでの遺物の出土量は比較的多かったものの、破片が多かった。また、土坑跡等の重複が著しく、出土層の不明なものもあったが、これは図示するのをひかえた。

第26図68はIV層から出土したもので、いずれも縄文のみを施す。器形、地文に特徴があり、中期末葉に伴うものかと思われる。

68・76・78はV層から出土したものである。76・78はVa層から出土したもので、隆沈線により渦巻文等を施し、大木8b式に伴う。69はVh層から出土したもので、体部に縄文のみを施す。

70はVI層から出土したもので縄文のみを施す。

石器については各層から出土したものを一括して説明する。

第27図90は縦長の剥片を素材とする削器で、側縁部に比較的丁寧な調整を施し刃部としている。89も削器と思われ、側縁部を中心に刃部の調整がみられる。

93は下辺に両面からの調整を施し刃部としたもので、搔器かと思われる。側縁部にも使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。94はやや小形の剥片を素材とする搔器で、下辺に角度の大きい刃部を有している。

97は削器かと思われるもので、両側部に調整が施される。石鏃とも考えられたが、基部に打面を残すなど調整が粗雑で、着柄には向かないと思われる。

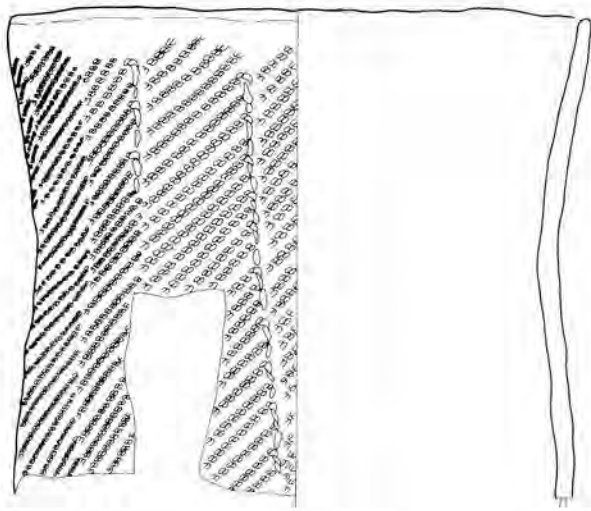
第28図100・101は磨製石斧で、いずれも刃部欠損後に施された剥離に伴う。再利用を目的としたものか。器面はいずれも丁寧に整形されている。102は全面に敲打痕のみられるもので、磨製石斧の敲打成形時のものと思われる。

103は打製石斧で、楕円形礫に大きめの剥離により調整を施している。両面ともに自然面を残している。側縁部に弱い敲打痕が認められるものの、ここを刃部としたかは疑わしい。

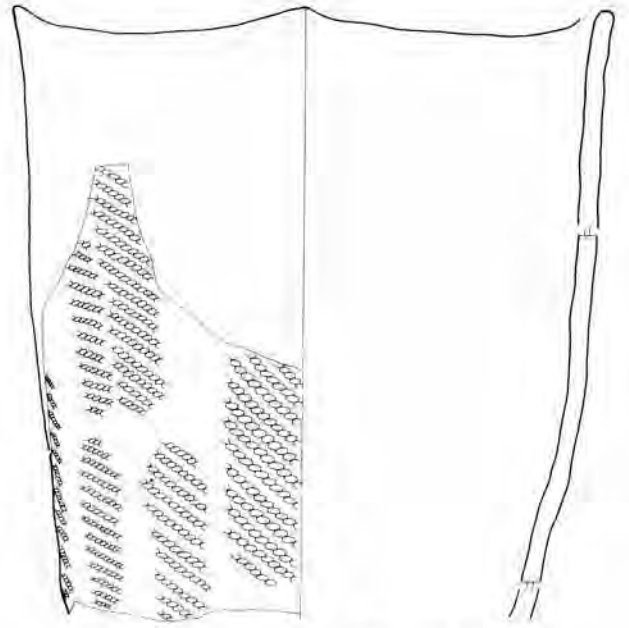
104・106～108は敲打磨石で、104・106は楕円形扁平礫の側縁部に機能磨面を有している。106はやや小形であり機能磨面の幅も狭い。また、端部に敲打痕が伴っている。

107～108は扁平円礫を使用し、周縁を機能磨面とするもので、面取りされた様な状態となる。

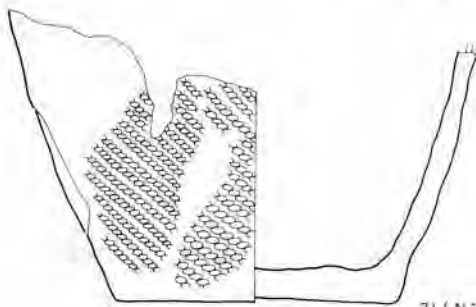
第IX群



68 (N3E18、IV層)



69 (N3E15、V h層)



70 (N3E18、VI層)



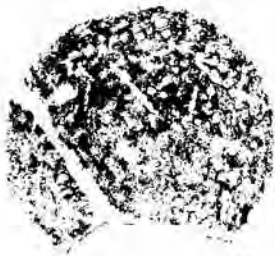
71 (N3E18-1号土坑跡、B2層)



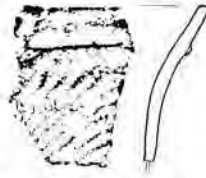
72 (N3E18-1号土坑跡、A3層)



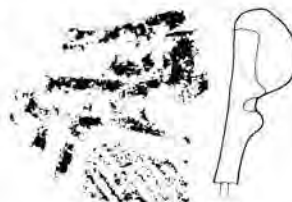
73 (N3E18-1号土坑跡、A3層)



74 (N3E18-1号土坑跡、A3層)



75 (N3E18-1号土坑跡)



76 (N3E21、V a層)



77 (N3E18-3号土坑跡、A3層)



78 (N3E21、V a層)



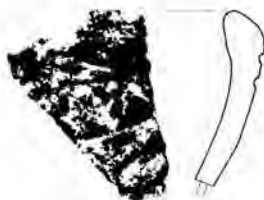
79 (N3E18-3号土坑跡、A1層)



80 (N3E18-1号土坑跡、A層)



81 (N3E18-1号土坑跡、B3層)



82 (N3E18)



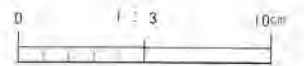
83 (N3E18)

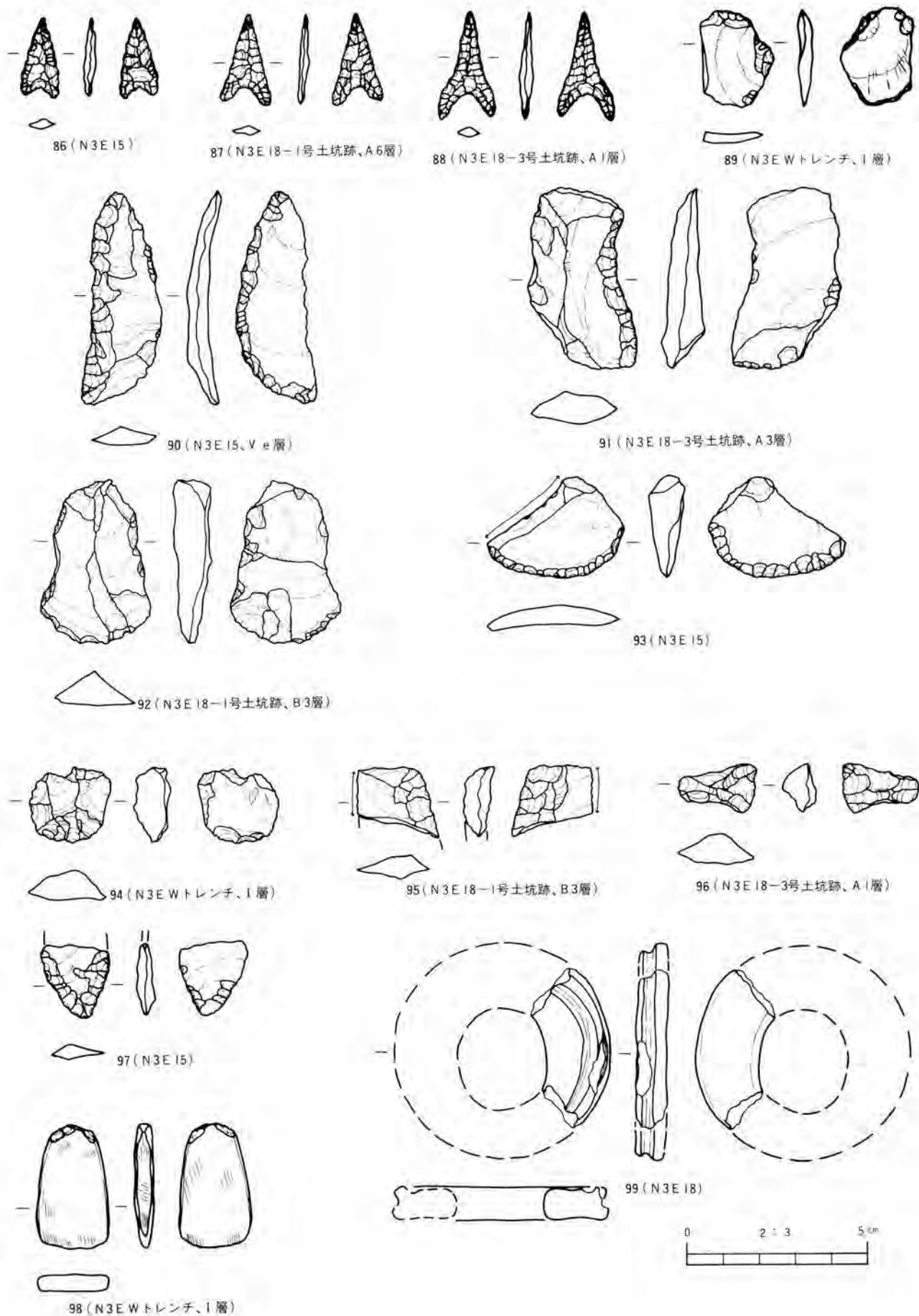


84 (N3E18-1号土坑跡、B2層)

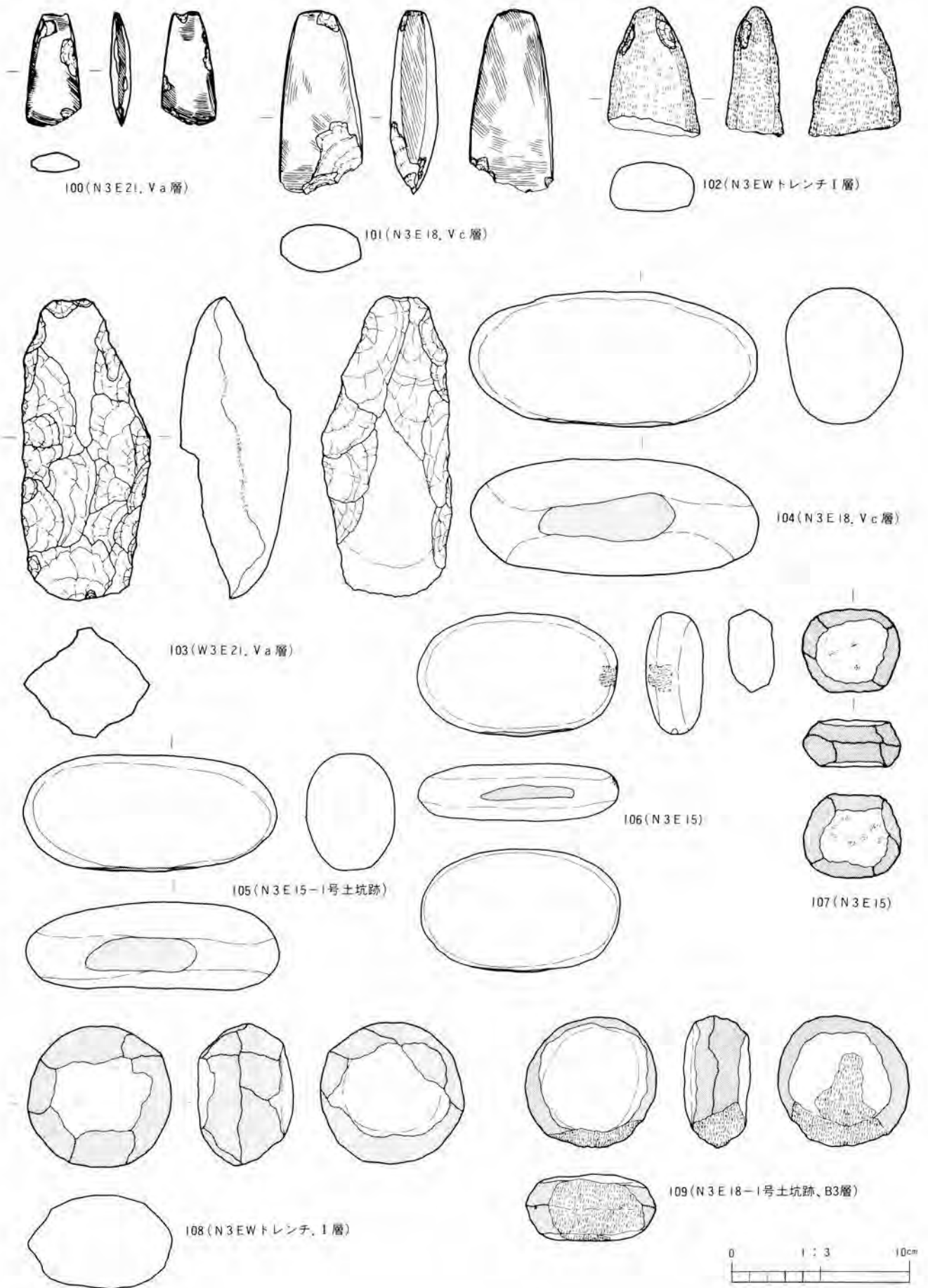


85 (N3E18-1号土坑跡、A層)

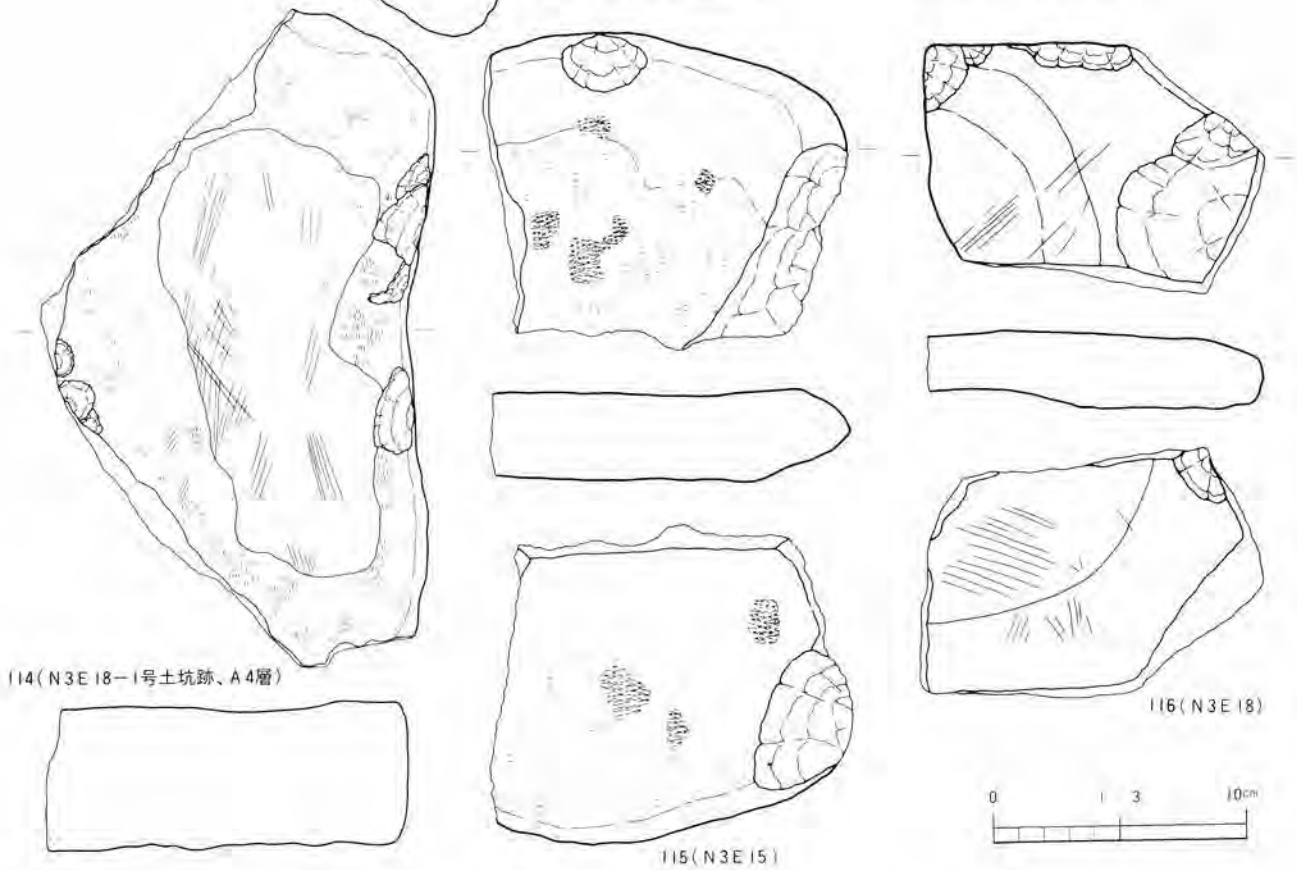
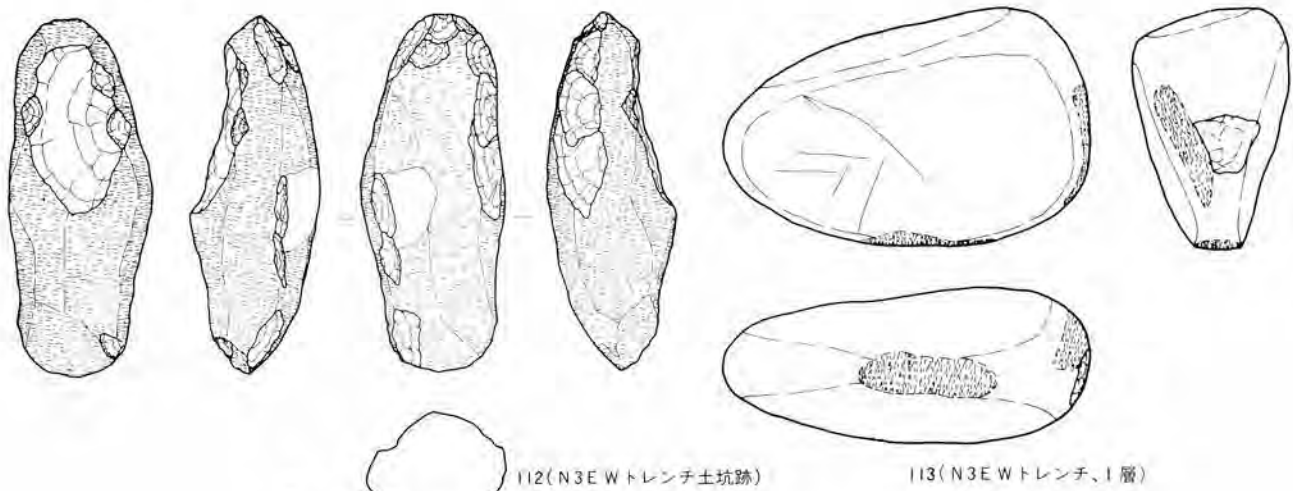
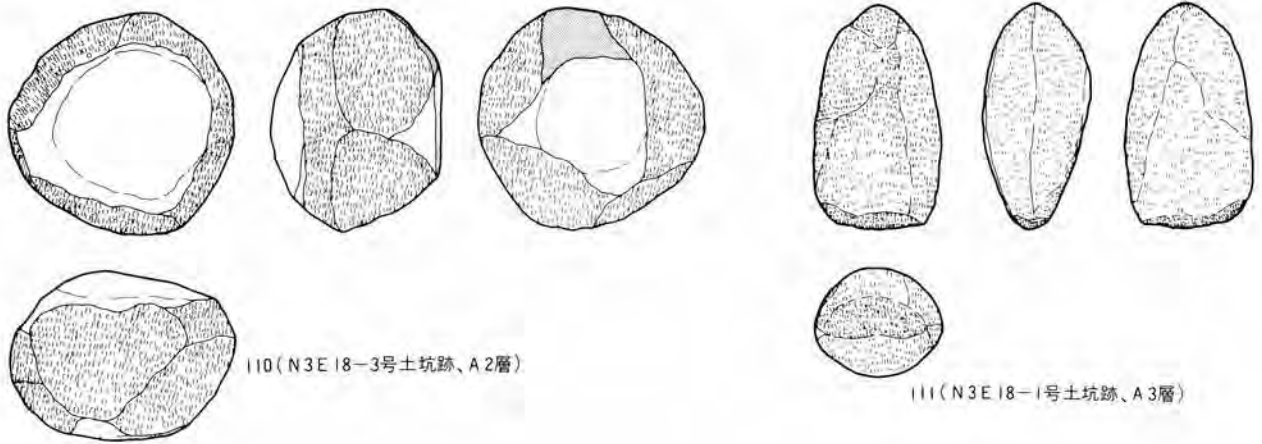




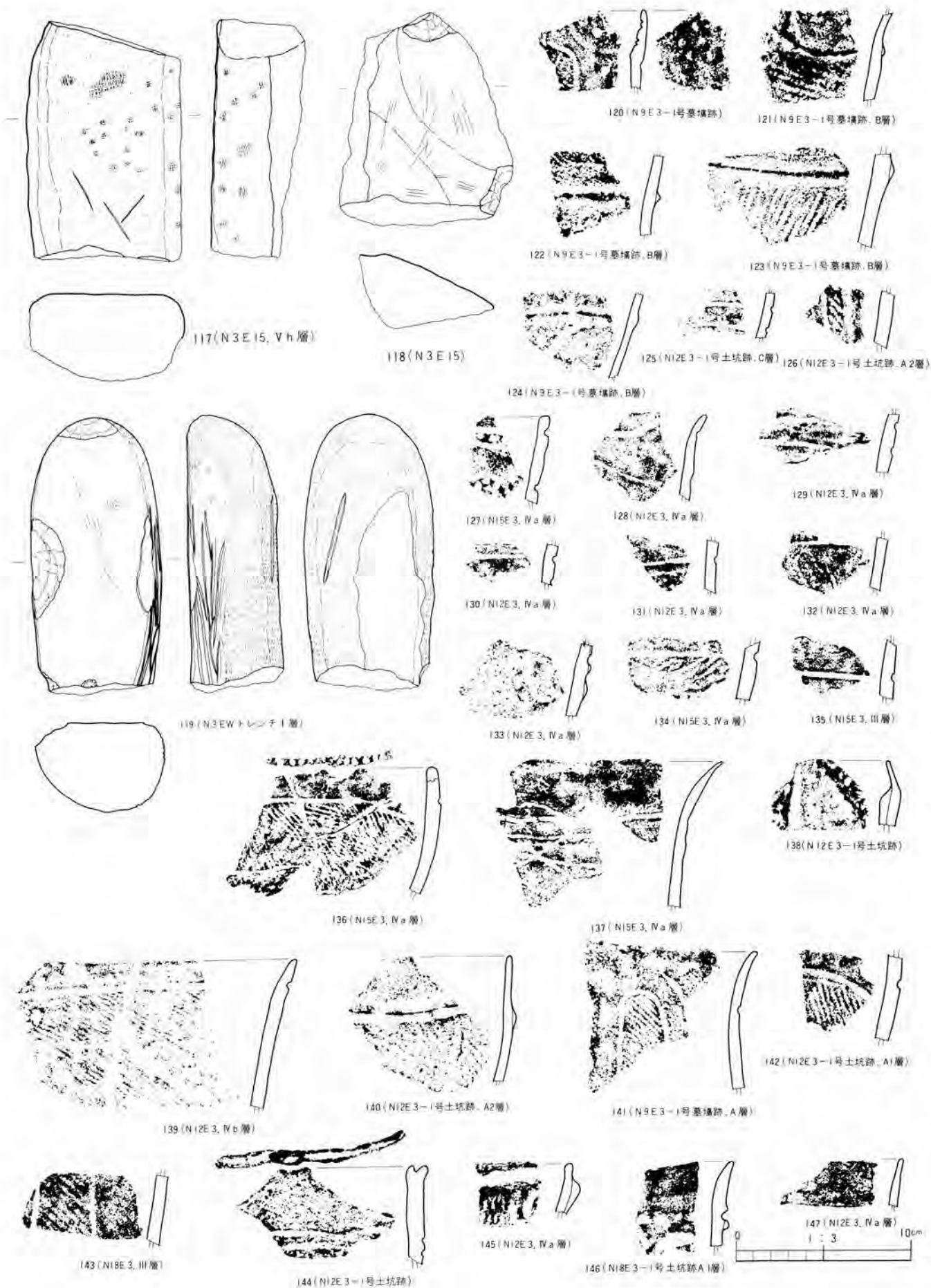
第27図 環状遺構帯出土遺物(2) Eトレンチ



第28図 環状遺構帯出土遺物(3) Eトレンチ



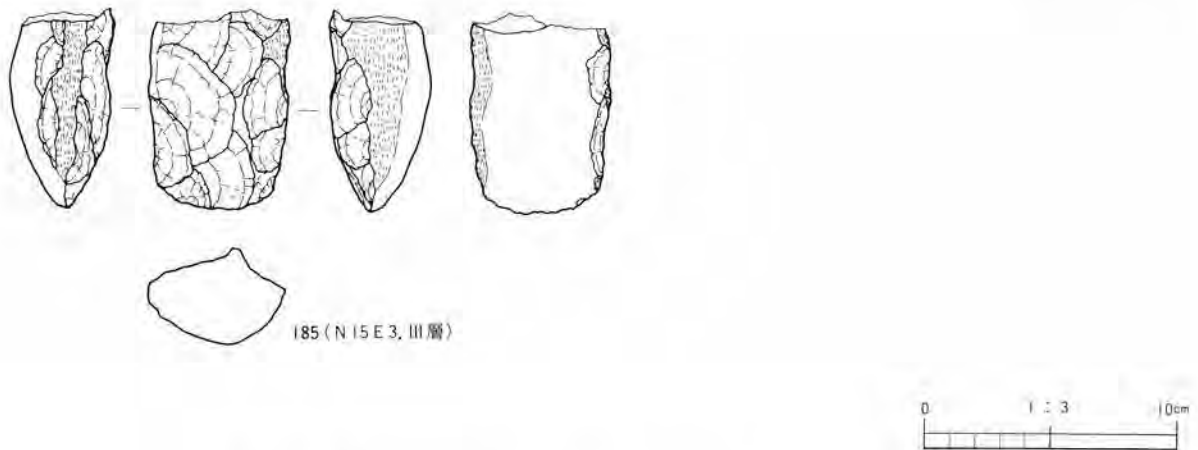
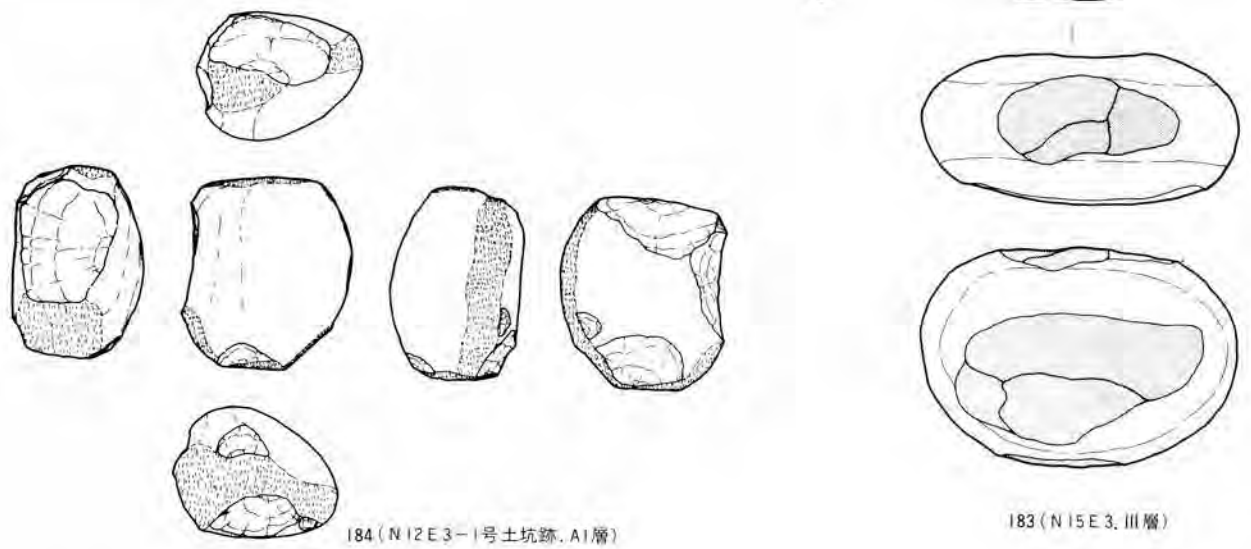
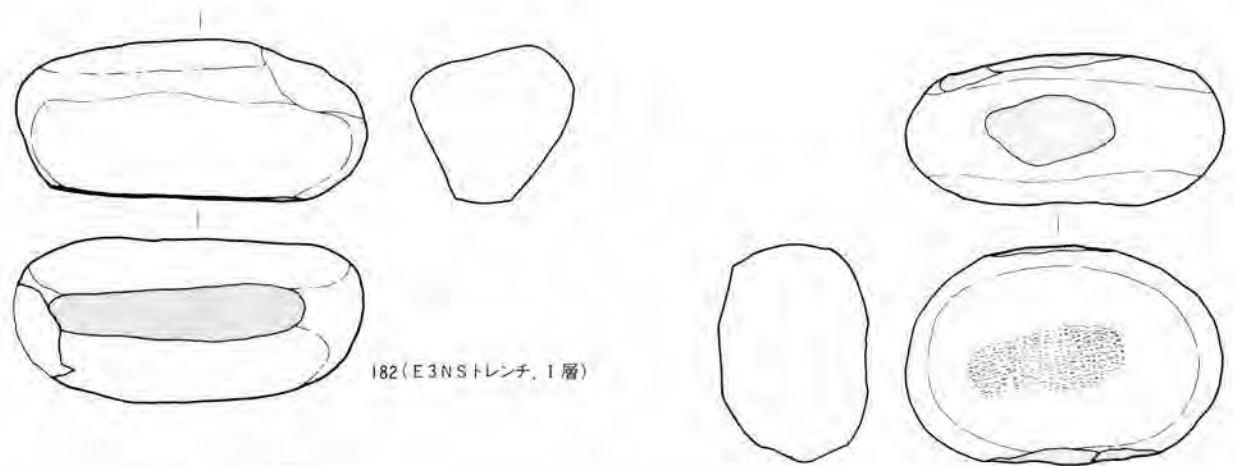
第29図 環状遺構帯出土遺物(4) Eトレンチ



第30図 環状遺構帯出土遺物(5) Eトレンチ・N18E3～N9E3グリッド



第31図 環状遺構帯出土遺物(6) N18E3～N9E3グリッド



第32図 環状遺構帯出土遺物(7) N18E3~N9E3グリッド

断面形は算盤玉状を呈する。

第29図113は敲石で、楕円形自然礫の側縁部と端部に敲打痕を有する。素材の形態や機能部の位置は敲打磨石のそれと酷似している。

116は石皿で、両面に凹んだ磨面を有する。擦痕は認められるものの敲打痕は伴わない。

第30図118も石皿片で、1面に磨面を有する。やはり擦痕は認められる敲打痕は伴わない。

117は縦長の自然礫を用いるもので、両端部を欠く。平坦面に台石状の敲打痕と擦痕などが伴う。幅が狭く十分な磨面をとれないもので、石皿というよりは台石に相当すると思われる。

119は両面に磨面を有し、この間にやや密な敲打痕が認められる。側縁部には溝状の擦痕が多く認められる。大きさや使用痕から、磨石や敲石といった手に持って使用する用途が想定される。

第27図98は小形の磨製石斧であり、基部には使用時のものと思われる小剥離が伴う。器面は丁寧に整形されている。

99は環状の土製品で、推定される直径は6 cmほどとなる。正面と側面にそれぞれ1条ずつの沈線が施され、結果的には隆沈線状となる。背面は平坦で施文されていない。

N18E3～N9E3グリッド（第30図～第32図）

上記グリッドのサブトレンチではIV a層・IV b層・IV a層・IV b層に対応する堆積層を確認している。

第30図127～134・136・137・145・147・第31図154・155・177がIV a層から出土した土器片である。

127～134・136・137は磨消技法により施文されるものである。127は刺突文が伴うもの。133は隆起線上に連続刺突文を施すもの。137は曲線的なモチーフを施文するものなどである。

第XI群～第XII群

ほぼ中期末葉の大木10式～後期初頭に伴うものであろう。

145・154・155は隆沈線により渦巻文等を施文するもので大木8 b式に伴う。

147は口縁部片、177は縄文のみを施すもので前述したもののどれかに伴うものであろう。

139・175はIV b層から出土したもので、139は口縁部に無文帯を有するもの。175は無文の土器で把手を有するものである。いずれも大木10式に伴うものであろうか。

第X群～第XI群

135・143・150・153はIII層から出土したもので、135は磨消技法により施文され、大木9式～大木10式に伴うものであろう。143も同様であるが、縦位の区画文を施すと思われ、大木9式に伴うものである。他のものは隆沈線により施文されるもので大木8 b式に伴う。

第32図181は一方の側縁に刃部を有し、削器かと思われる。もう一方の側縁にも使用時のものと思われる微細な剥離が認められる。

182・183は敲打磨石である。182は断面三角形の自然礫の1側縁に機能磨面を有する。183は平坦面にやや密な敲打痕が伴う。

185は敲石と思われ、両側面に敲打痕が伴う。やや大き目の剥離は機能部の幅を調整したものであろうと思われる。

SCトレンチ・SWトレンチ（第33図～第35図）

186～195はⅫ層から出土した土器である。190は隆沈により流麗な渦巻文を施すものである。191は隆沈線で192・193は沈線で施文されるものであるこれらはいずれも大木8 b式に伴う。他のものはこれ以前の形式に伴う。

Ⅻ層
第Ⅸ群

196～201はⅫ a層～Ⅹ a層から出土した土器である197・198はキャリパー形深鉢で隆沈線により施文される196は口縁部の内湾する深鉢で隆沈線により施文される199は口縁部の外反する深鉢で沈線により施文される他のものもこれらに類似するものでいずれも大木8式に伴う

Ⅻ a層～Ⅹ a層
第Ⅸ群

202～228はⅩ層～Ⅸ層から出土した土器である。202～207・211・212はキャリパー形深鉢でいずれも隆沈線を主体とした施文が認められる。208は口縁部の内湾するもの、209は口縁部の外傾するものでいずれも隆沈線により施文される。

Ⅹ層～Ⅸ層

221～228は口縁部の内湾する大形の深鉢で口縁部に隆沈線による渦巻文等を施すが体部は地文のみを施す。213・214・216～218は隆沈線により、219は沈線により施文されるものである。以上の土器は大木8 b式に伴う。他のものはこれ以前の形式に伴う。

第Ⅸ群

229～259はⅨ層から出土した土器である。241～244・253はキャリパー形深鉢で隆沈線により施文される。229・240・245は口縁部の外反するもの、236～239は口縁部の内湾するものでいずれも隆沈線により施文される。

Ⅸ層

235は頸部に把手を有するもの、246～252は隆沈線により施文されるもの、230～234・254～258は沈線により施文されるものである。

以上の土器は大木8 b式に伴う。他のものはこれ以前の形式に伴う。

第Ⅸ群

260～264はⅧ層から出土した土器である。260・261は大形の深鉢で沈線により有棘文や渦巻文を施す。262・263は隆沈線により施文されるものである。これらはいずれも大木8 b式に伴う。他のものはこれ以前の型式に伴う。

Ⅷ層
第Ⅸ群

265～273はⅤ層から出土した土器である。265・269は磨消技法により施文されるもので、大木10式に伴うものであろう。266～268・270は隆沈線により施文されるが266は大木9式に、他のものは大木8 b式に伴う。他のものはこれ以前の型式に伴う。

Ⅴ層
第Ⅺ群

274～284はⅣ層から出土した土器である。274・275・278は磨消技法により幅の狭い縄文帯を施すもので後期前葉に伴うものである。227は連鎖状文を施すもので門前式に類似する。276は隆帯上にも縄文を施すもので、やはり後期前葉に伴うものであろう。

Ⅳ層
第Ⅻ群

279～283は磨消技法により施文されるもので大木10式～後期前葉に伴う。284は磨消技法により縦位楕円形区画文を施すもので大木9式に伴う。尚、これらよりも古い土器片も多数出土しているが省略した。

環状遺構帯周辺出土土器ほか

第35図は第11次調査時に、第36図・第37図は第3次調査時に出土したものであるが、いずれも遺構外の出土である。尚、礫石器の大半は省略した。

288・289は柳葉形を呈する石槍である。

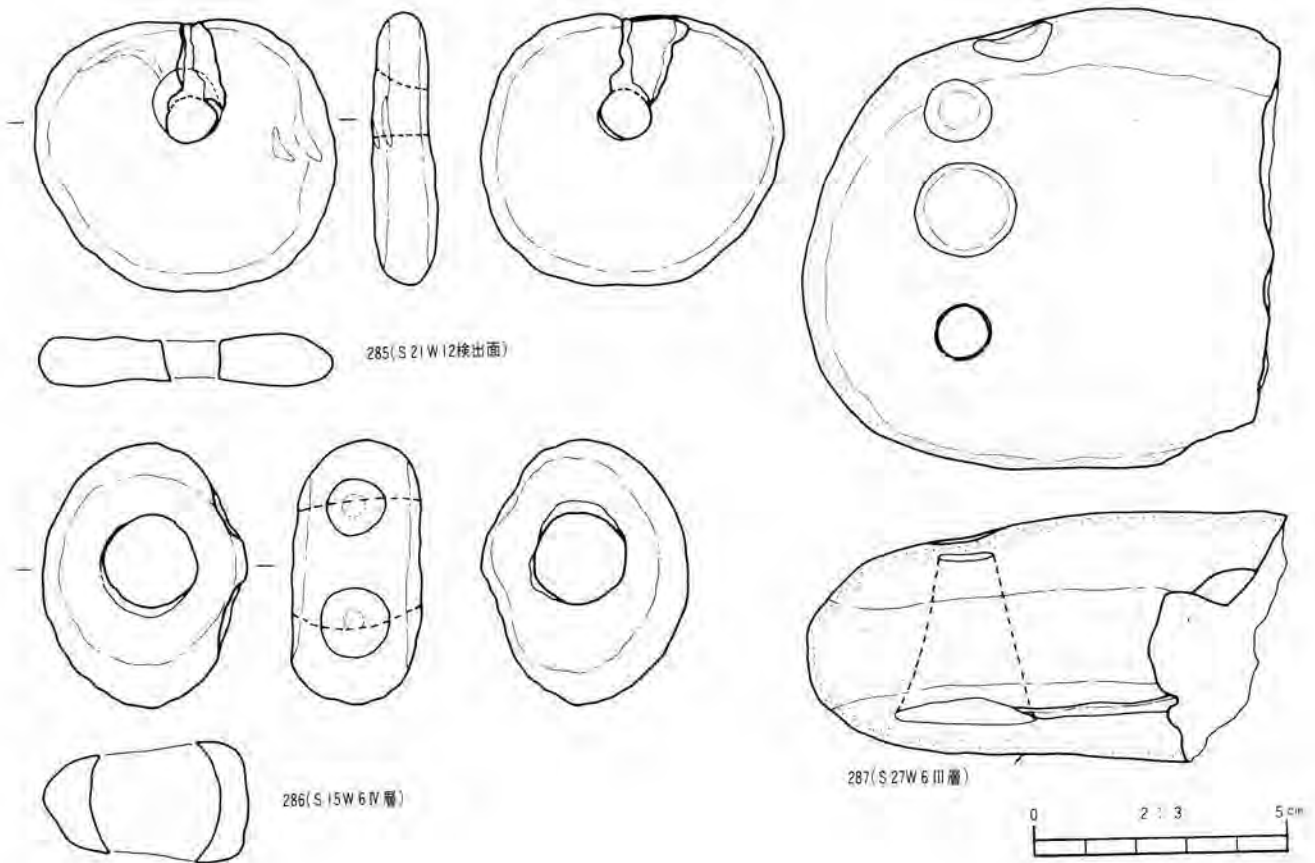
290～297は石鏃である。290～293は無柄凹基で292は著しくわたくりの深いものである。



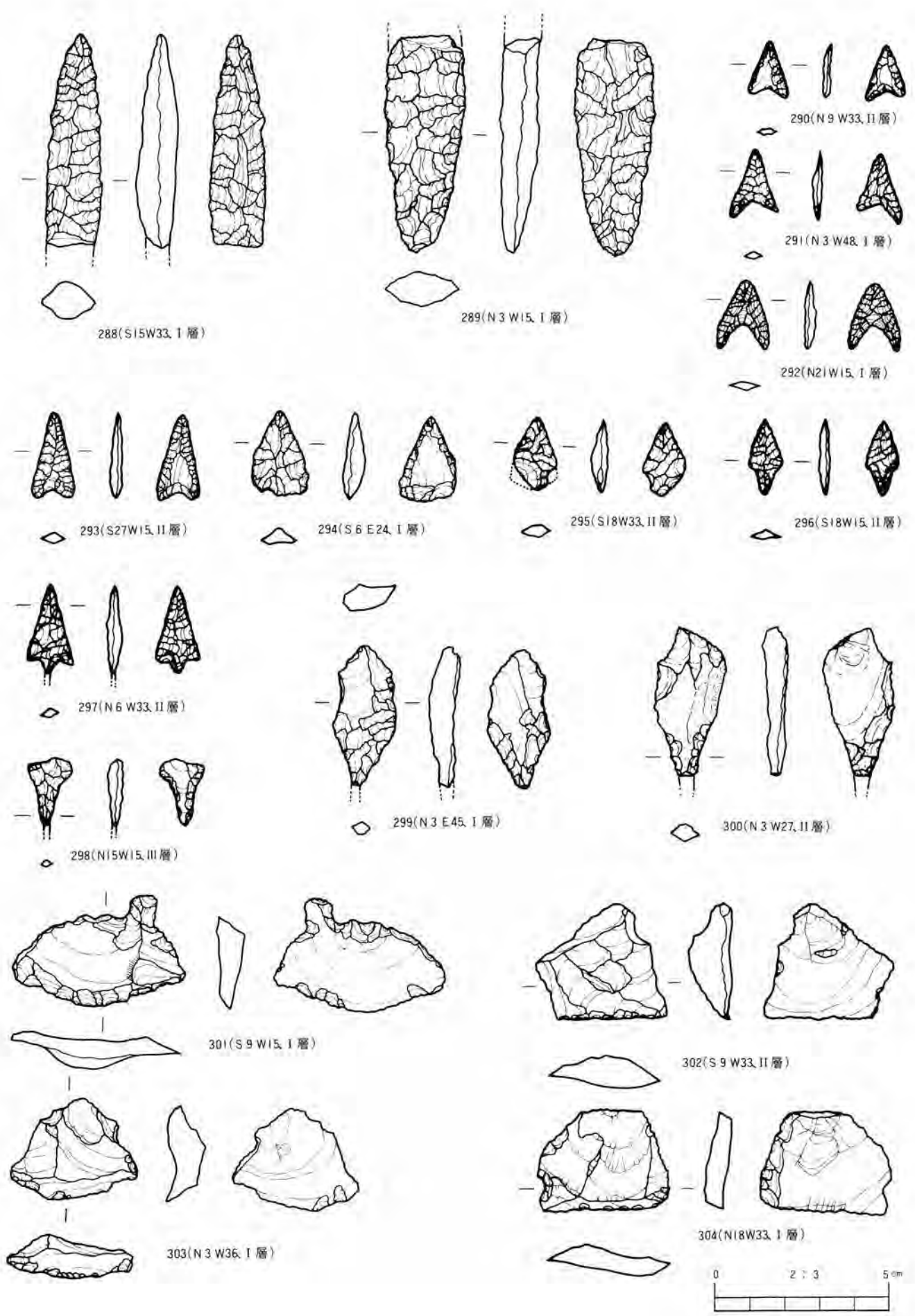
第33図 環状遺構帯出土遺物(8) SCトレンチ・SWトレンチ



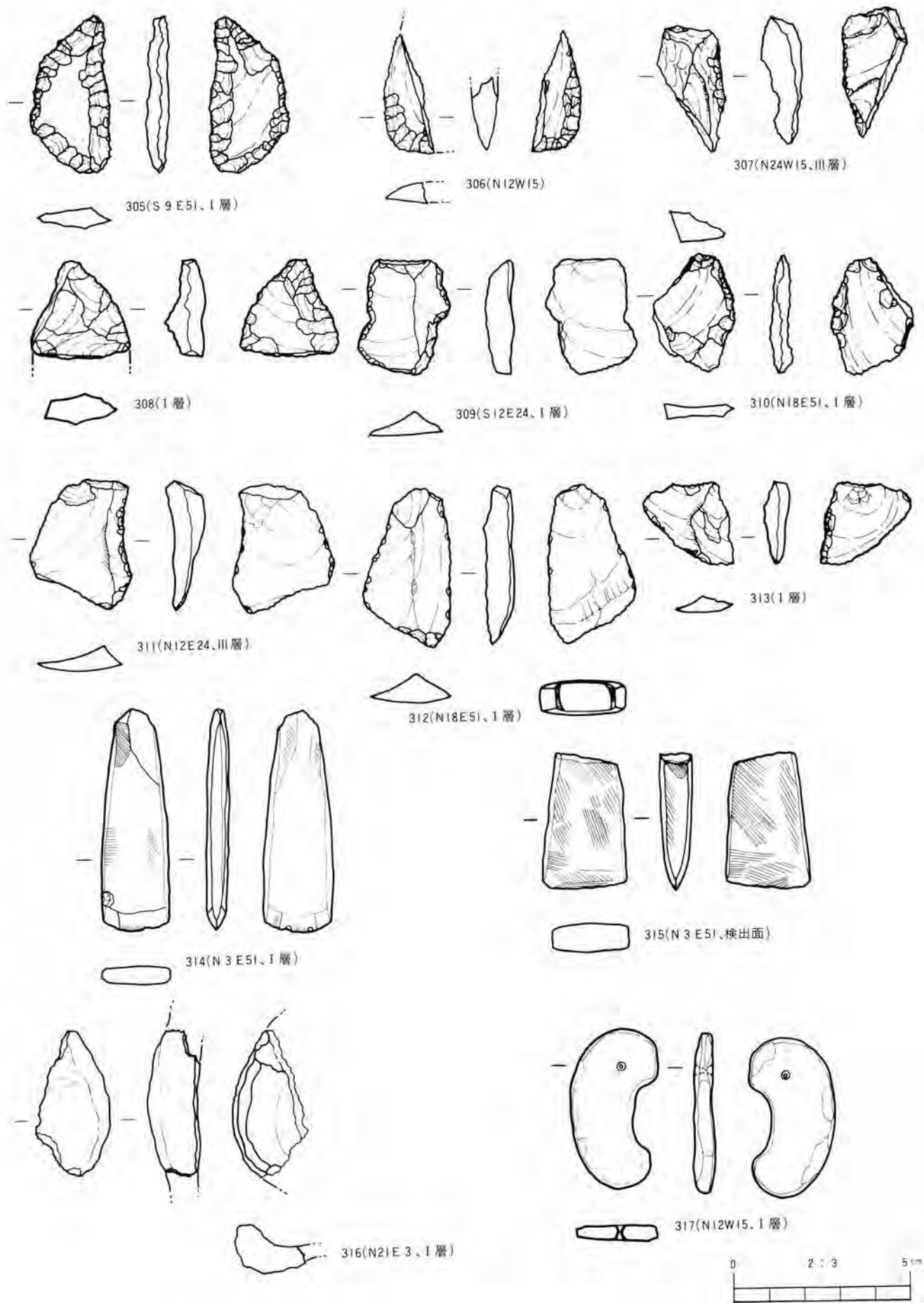
第34図 環状遺構帯出土遺物(9) SCトレンチ・SWトレンチ



第35図 環状遺構帯出土遺物(10) SCトレンチ・SWトレンチ



第36図 環状遺構帯出土遺物(1) 第3次調査区



第37図 環状遺構帯出土遺物(12) 第3次調査区

294は無柄平基295は無柄凸基である。296・297は有柄のものである。

298～300は石錘である。298は小形であるが基部付近も調整している。

301は横形石匙である。

302～304は不定形の搔器である。

305～310・313は削器であるが、305・306は比較的定形的なもので、他は不定形である。

311・312は使用痕のある剥片で、いずれも断面三角形の剥片の側縁部を使用している。

314・312は小形の磨製石斧である。

316は土製品であるが手づくねにより皿状の器形をつくり出している。

317は勾玉であるが極めて薄く玉というよりは板状の垂飾品といった感じである。

285は扁平円礫を穿孔した石製垂飾品である。

286・287は有孔礫である。穿孔自体は自然の営力によるものであるが、286は側面に凹石状の凹部を有し、287は背面に沈線が伴うなど2次的な加工が認められるもので、垂飾品や石錘として使用されたものであろう。

c) 環状遺構帯内検出遺構

環状遺構帯の埋土中～底面からは極めて多数の遺構が検出されており、複雑に重複している。これまでサブトレンチ等により精査した遺構は、竪穴式住居跡1棟（他に検出のみ3棟）・炉跡2基・配石遺構7基・墓塚跡5基・土坑跡40基・柱穴跡1基以上であるが、精査した地点が極めて限定されており、その総数は計り知れない。

i) 竪穴住居跡

S27W6-1号竪穴住居跡（第40図）

環状遺構帯南端寄りに検出した。S24W6-1号土坑跡とわずかに重複し、これに切られる様である。掘込み面はⅥ層上面だと思われ、住居跡埋土をⅣ層が覆っている。部分的な調査のため全体の規模や平面形は不明であるが、南北幅は4.8mとなる。底面はやや凸凹があり、北側で低く南側で高い。北端と南端に柱穴状のピットをそれぞれ1基ずつ検出したほか、中央やや南寄りに円形の石囲炉を検出している。

埋土はA層とK層に大別される。A層は3層に細分され、A1層が褐色土を、A2層・A3層が暗褐色土を基本土とする。また、A1層・A2層は黄褐色土塊などを、A3層は暗褐色土塊などを含むがあまり多くはない。いずれもやや固く、しまり具合は中程度である。

K層は床面の構築土層で3層に細分される。K1層・K3層は黄褐色土を、A2層は褐色土を基本土とし、混入土を多量に含んでいる。また、K1層は多量の炭化物粒を含む。いずれの層も固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は少ないが、磨削技法により深鉢片が出土しており大木10式に伴う。また、構築土層（K1層）からは内外面ともにウルシ様の皮膜を持つもの（318）があり特筆される。

第XI群

S24W6-1号竪穴住居跡（第39図）

環状遺構帯南寄りのⅣ層上面で検出した。東西1.7m、南北2.2mの範囲で不整形を呈する貼

床状の褐色土の広がりがあり、中央部に柱穴状のピットを、南寄りに焼土を確認している。削平により全体の規模や平面形は不明である。

S30W6-1号竪穴住居跡（第40図）

環状遺構帯南端のIV層上面で検出した。平面形は不整形を呈し、規模は東西2.5m、南北1.6m以上を計る。検出のみに留めたため詳細は不明である。このほかにS21W12グリットでも同様の落ち込みを検出している。

N15E3-1号炉跡（第24図）

環状遺構帯北寄りのIV層上面に検出した石囲炉と思われる遺構である。炉石の一部を検出したのみで、掘り下げていないために炉床の状態や構築方法は不明である。規模は東西で0.55m、南北で0.55m以上を計る。伴出遺物はない。

S21W15-1号炉跡（第44図）

環状遺構帯西部の層上面で検出した石囲炉と思われる遺構である。床面は明瞭ではないものの、南側に土器を埋設したピットが伴っており、竪穴住居跡である可能性が大きい。

炉の規模は東西で0.7m、南北で0.5mを計り、炉床は比較的焼成を受けている。炉の内部から土器片が出土したものの時期は特定できなかった。

ii) 墓壇跡・土坑跡

環状遺構帯で精査した土坑跡や墓壇跡は基であり、中央広場での分類に従いa類～c類とする。

a類（墓壇跡）

N9E3-1号墓壇跡（第24図）

環状遺構帯北部の南端部のVI層上面に検出し、N9E3-2号土坑跡を切る。平面形はほぼ隅丸方形を呈し、開口部径は長軸方向1.7m、短軸方向1.05m、深さ0.7mを計る。壁は直壁であり、床面はほぼ平坦であるが北から南へ傾斜している。主軸方向はN7°30'Wである。

埋土はA層～D層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などをやや多く含む。いずれも固くしまり具合は中程度である。炭化物粒を含むが、A1層はA2層より少ない。

B層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。B3層のみは褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を少量含む。やや固くしまり具合は中程度である。他の層は炭化物粒を多く含む、やや柔らかくしまり具合は中程度である。

C層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色～暗褐色粘質土塊をやや多く含む。やや固くしまり具合は中程度である。炭化物粒を少量含む。

D層は暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色～褐色土塊を含むほか、炭化物粒をやや多く含む。固くしまり具合ともに中程度である。

出土遺物（第30図120～124・141、第31図148・156～158・164・165・170・173・174・176・178）

120は磨消技法によるもので、口縁部の内外面に刺突文がみられる。121～124は隆起線を施すがやはり磨消技法が伴う。これらはいずれも大木10式に伴う。

141は口縁部のやや外反する深鉢で、体部に磨消技法による縦位楕円形の区画文が施されるもので大木9式に伴う。

148は口縁部のやや外反する深鉢で、体部に隆沈線による懸垂文や渦巻文を施す。156は沈線により平行沈線文や波状文を施す。157も沈線により渦巻文等を施す。これらはいずれも大木8b式に伴う。

158・164は同一個体片と思われる深鉢で、口縁部に隆起線による横位楕円形区画文を施し、体部に沈線による波状文等の施文がみられる。170はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯を有するが文様帯内部は施文されない。これらは大木8a式に伴う。

165もキャリパー形深鉢で、2条の平行隆起線による施文がみられる。大木8b式の古手であろうか。105は口縁部がわずかに内湾する深鉢で、やはり2条の平行隆起線による渦巻文を施す。大木8b式の古手に伴うものかと思われる。174は隆起線と平行沈線により施文されるもので、大木8a式～大木8b式に伴う。

176は撚糸文（r）を地文とする深鉢で、178はR・L単節斜縄文を地文とする深鉢である。

S24W15-1号墓壇跡（第44図）

環状遺構帯南西部のIV層上面～VI層上面に検出した。大半が調査区外に延びるため、全体の形状や規模は不明である。調査区内の平面形は半円形を呈し、規模は南北で0.95m、東西で3.5m、深さ0.3mを計る。

埋土はA層～B層に大別される。A1層は南壁付近にのみ堆積し褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。やや固くしまり具合は中程度である。

B層は4層に細分される。いずれも暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。上層より暗い色調の層と明い色調の層が交互に堆積する。B3層がやや固いほか、やや柔らかい。B3層からB4層にかけて縄文時代後期前葉に伴う土器（323）が出土している。

S27W15-1号墓壇跡（第44図）

S24W15-1号墓壇跡の東側に隣接し、IV層上面～VI層上面に検出した。平面形は不整形を呈し、規模は長軸1.55m、短軸0.65m、深さ0.15mを計る。主軸方向はW31°30'Nである。

長軸方向の両端部に不整形の小ピットをそれぞれ1基ずつ確認している。北端部のものは底面から掘り込まれたものであるが、南端部のものは埋土と土色が異なり、墓壇を切るものと思われるが、土層断面での立上がりは明瞭ではなかった

埋土はA層とB層に大別される。A1層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

B1層は黄暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を多く含むやや固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物はA1層を中心に大木9式に伴う深鉢片が出土している。

第XI群

第XII群

第IX群

b類（皿状～擂鉢状土坑跡）

b1類（断面形が皿状を呈する土坑跡）

N21E3-1号土坑跡（第38図）

環状遺構帯北端部のIV層上面に検出した。平面形は楕円形を呈する浅い皿状の土坑跡で、規模は南北で0.6m、東西で0.45m、深さ0.1mを計る。

埋土はA1層のみである。A1層は粘性のある暗褐色土を基本土とし、少量の黒褐色土塊などを含む。やや柔らかくしまりのない層である。

動物遺存体

埋土中から縄文土器片が出土しているが磨滅しており時期を特定できなかった。

また、埋土の北半部を中心に保存状態の良いマグロ属椎骨の集積がみられた。このため土坑跡内の土壌をすべて持帰り、篩分けを行った。

マグロ属（*Thunnus* sp.）は大形の個体で、腹椎骨が1点、尾椎骨が10点出土しているが何個体分なのかは不明である。

尾椎骨のなかには何らかの刺突具による径4mmほどの貫通孔を有するものが6個あり、他のものもすべて欠損している。貫通孔は椎骨の臼部を貫通するものと、側面を貫通するものの2種がみられる。これらは解体後に穿たれたものと思われる。

タイ属（*Pagrus* sp.）は右主上顎骨が1点出土している。マダイかと思われるが端部を欠くので不明である。これら2種の他は貝殻片、骨片など一切出土していない。

この土坑跡を覆うⅢ層も一部篩分けを行ってみたところ、骨片や貝殻片を微量含んでいたが同定のできるものは無かった。

b2類（断面形が擂鉢状を呈する土坑跡）

N18E3-1号土坑跡（第24図）

環状遺構帯北部のIVa層下面より掘り込まれる。全体の1/4程度を精査したものと思われるが、全体の平面形や規模は不明である。形態からはa類（墓壇跡）に含まれる可能性も考えられるが、全体の形態が不明瞭であり、ここに分類した。壁はややゆるやかに立ち上がり壁高は0.2mを計る。

埋土はA1層のみで、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固さしまりともに中程度である。

出土遺物は146・151がある。146は隆沈線による施文がみられる。また、体部文様帯の上端には連続刺突文がみられる。大木8b式に伴う。151も同様であろう。しかし、本土坑跡の時期は掘り込み面より見るとさらに新しい時期に伴う可能性も考えられる。

S18W6-1号土坑跡（第39図）

環状遺構帯南部のSCトレンチ北半に位置する。S18W6-2号土坑跡を切り、S15W6-3号土坑跡とS18W6-3号土坑跡に切られる。掘込面は不明で、S15W6-3号土坑跡及びS18W6-3号土坑跡の底面にて検出した。

平面形は不整形円形を呈する様で、規模は開口部径1.25m、深さ0.5mを計る。底面には凸凹がある。C類の下半部のみが残ったものの可能性は考えられる。

埋土はA層で2層に細分される。いずれも明褐色土を基本土とし、褐色土塊を含むがA1層でやや多い。やや固くしまり具合は中程度である。

S18W6-2号土坑跡 (第39図)

SCトレンチ北半の層上面に検出した。S18W6-1号・3号土坑跡に切られ全体の平面形や規模は不明である。深さは0.4mを計る。

埋土はA層のみで褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を多く含む。固くしまり具合は中程度である。

S18W6-3号土坑跡 (第39図)

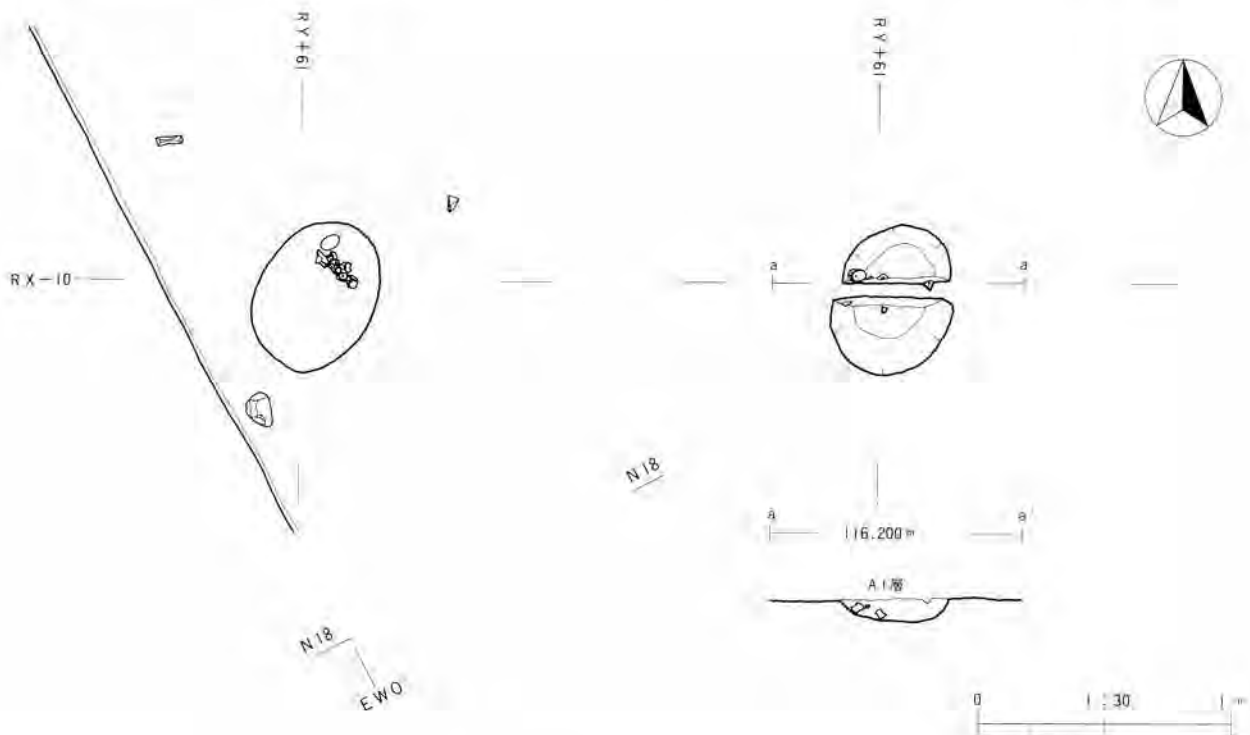
SCトレンチ北半のVI層上面に検出した。S15W6-3号土坑跡に切られ、S18W6-1号・2号土坑跡切る。平面形、規模等は不明であるが、深さ0.4mを計る。

埋土はA層とB層に大別される。A1層は暗褐色焼土を基本土とし、赤褐色焼土塊や褐色土塊などを多量に含むほか炭化物粒をやや多く含む。固く、しまり具合は中程度である。本層の焼土は2次的堆積物である。

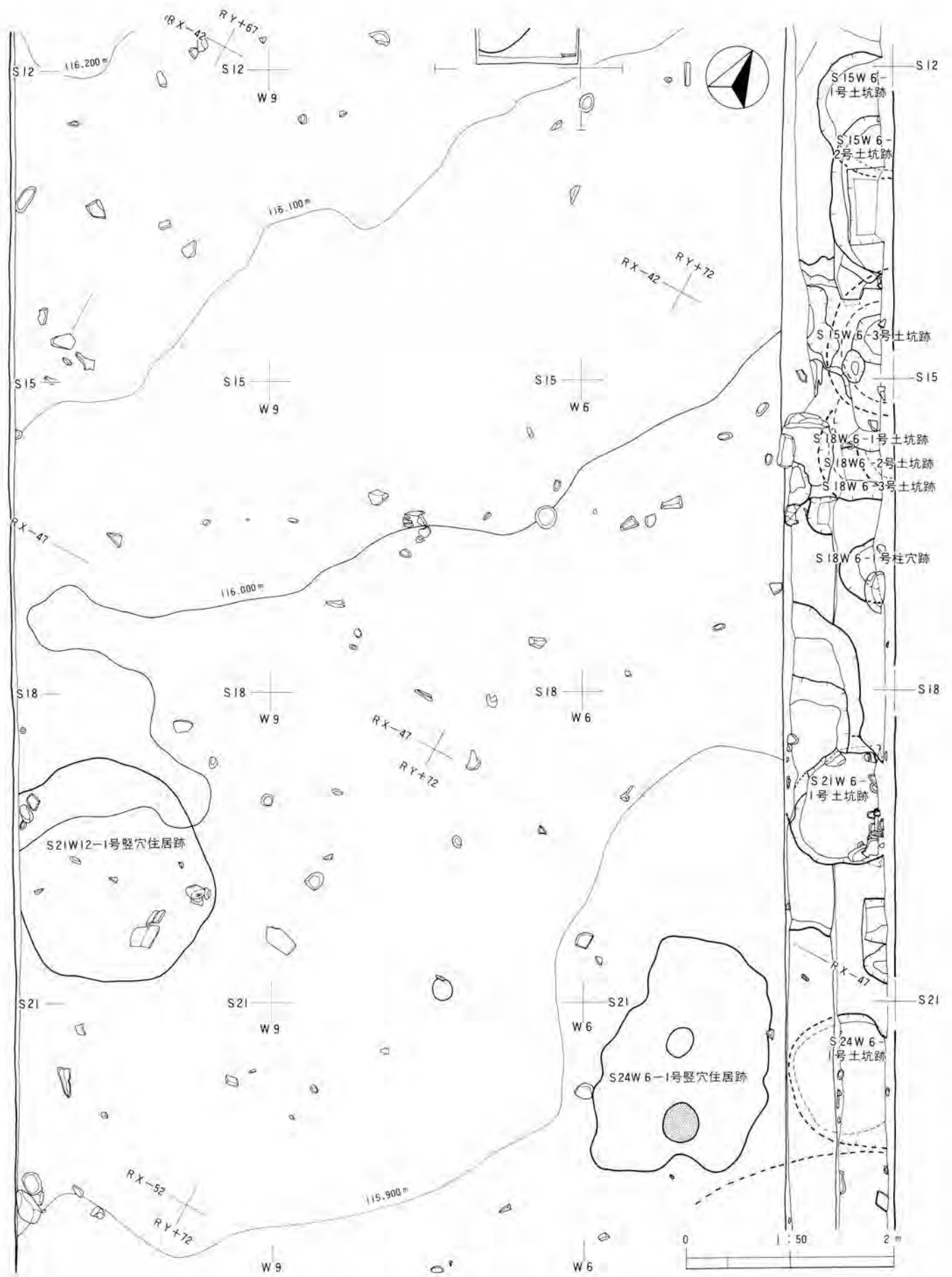
B層は3層に細分される。B1層・B3層は褐色土を、B2層は暗褐色土を基本土とする。B1層は炭化物粒をやや多く含む、B3層は黄褐色土塊などを多く含む。いずれも固く、しまり具合は中程度である。

調査中にS18W6-1~3号土坑跡の出土遺物を遺構毎に分離し得なかったが、これから、大木10式に伴う深鉢片が出土している。

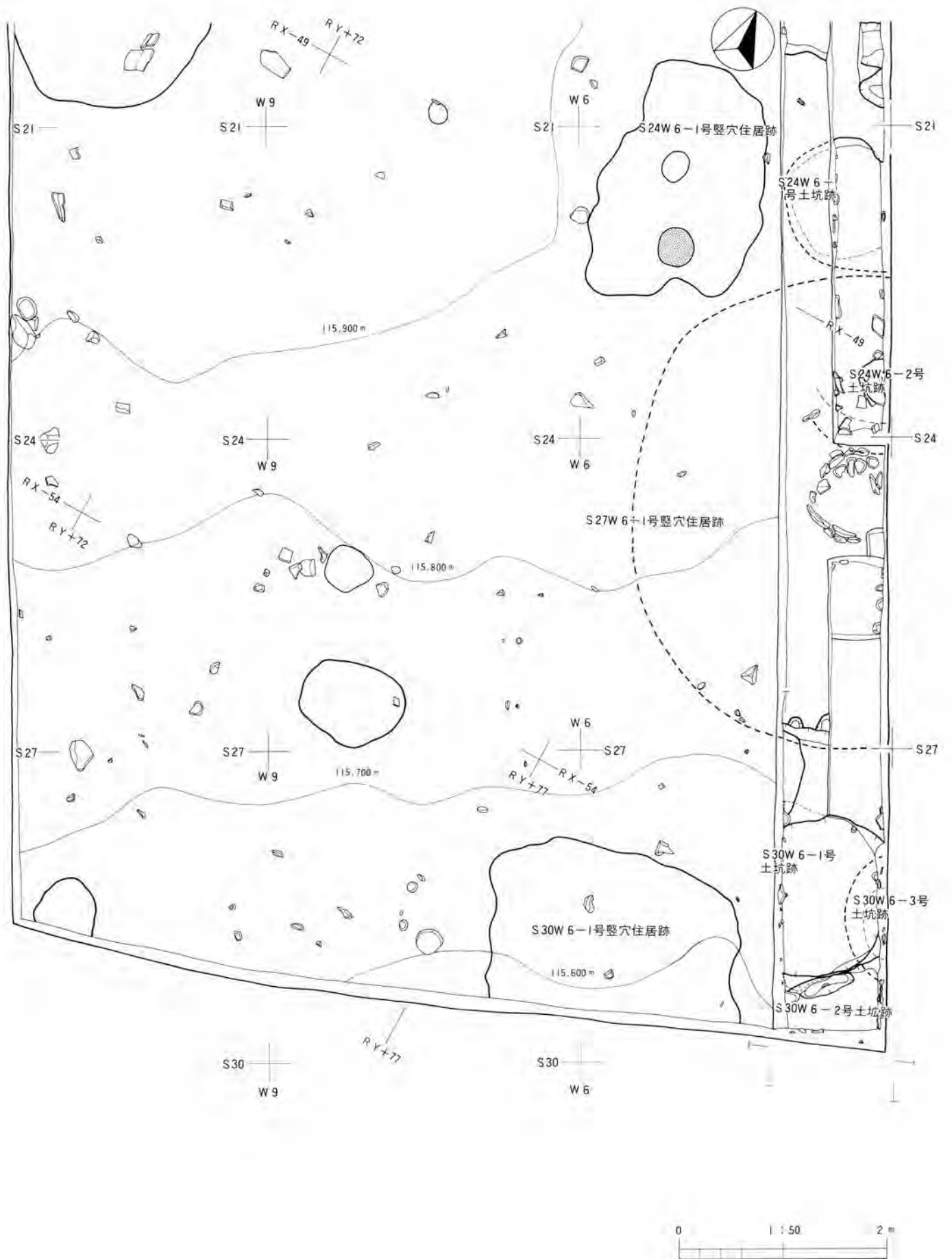
第VI群



第38図 環状遺構帯平面図(3) N21E3-1号土坑跡

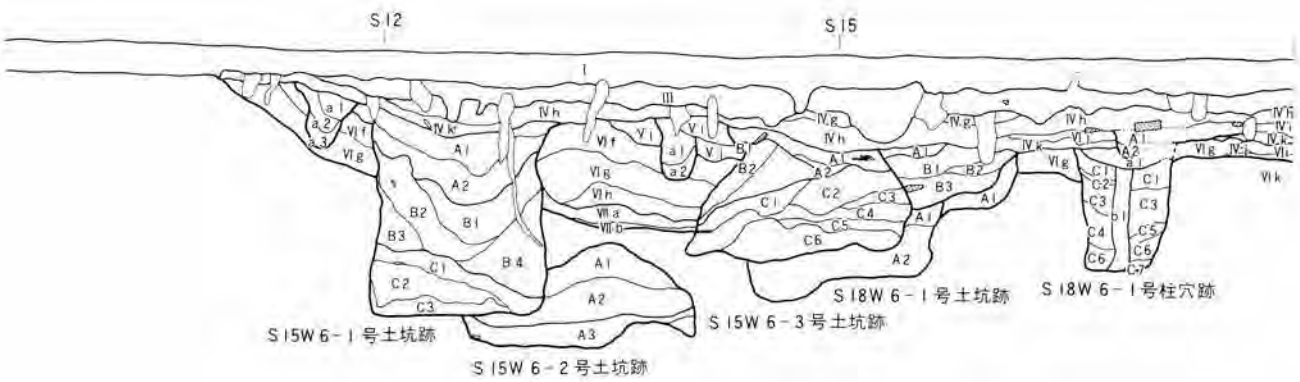


第39図 環状遺構帯平面図(4) S12W6～S24W12グリッド

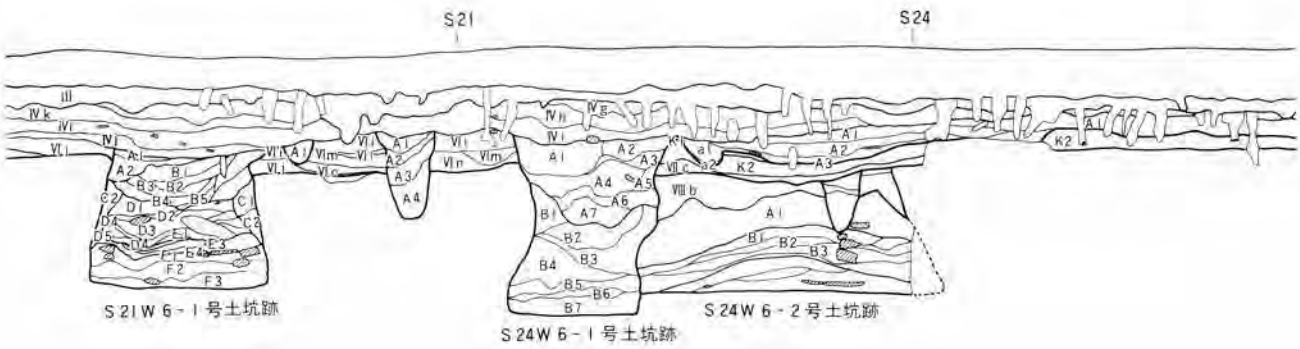


第40図 環状遺構帯平面図(5) S21W6～S30W12グリッド

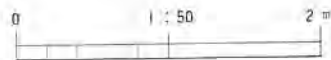
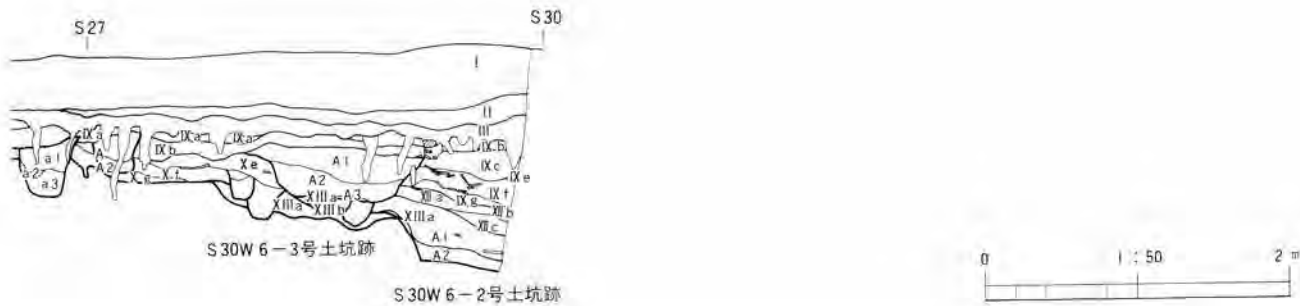
117,000 m



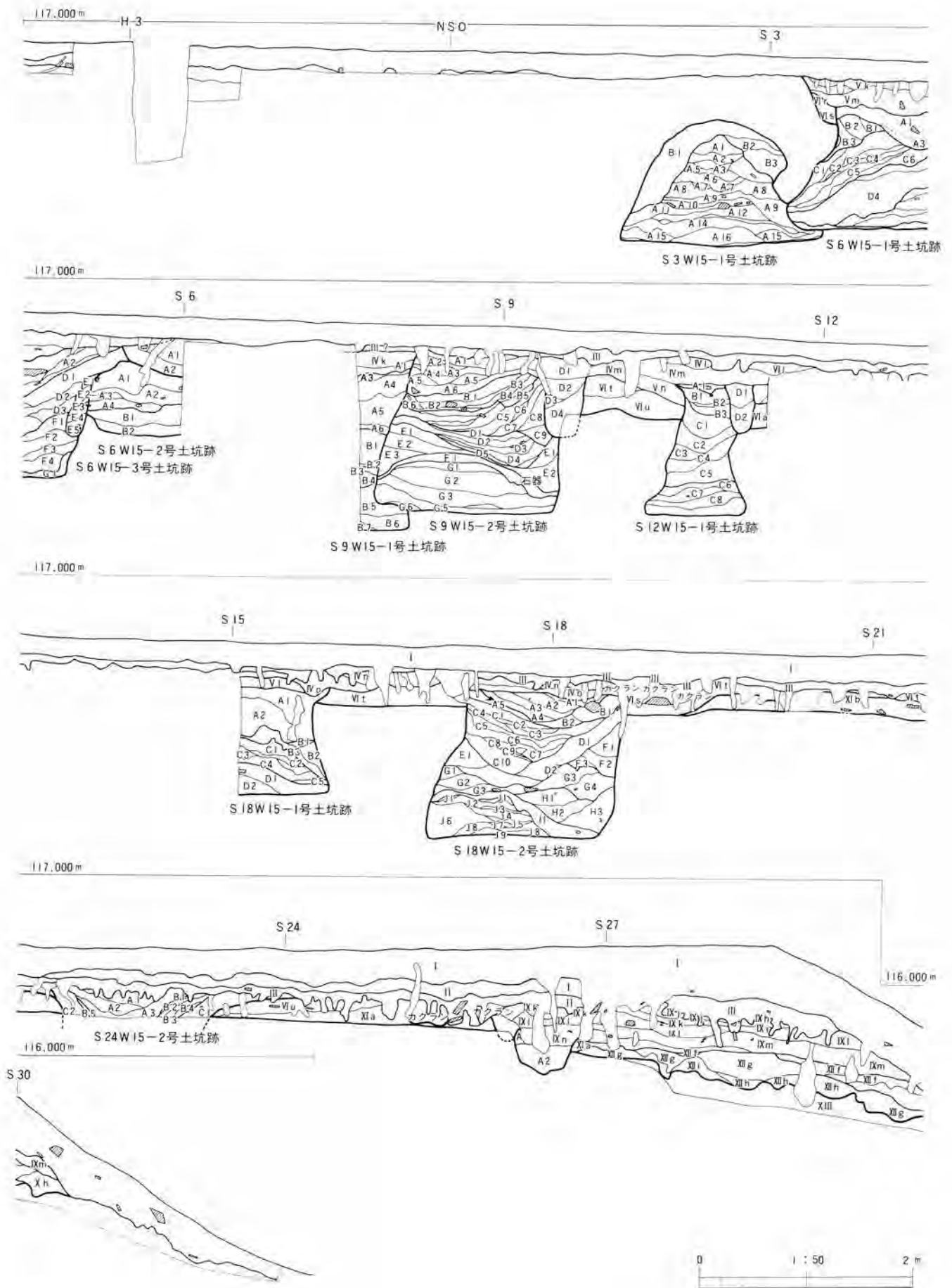
117,000 m



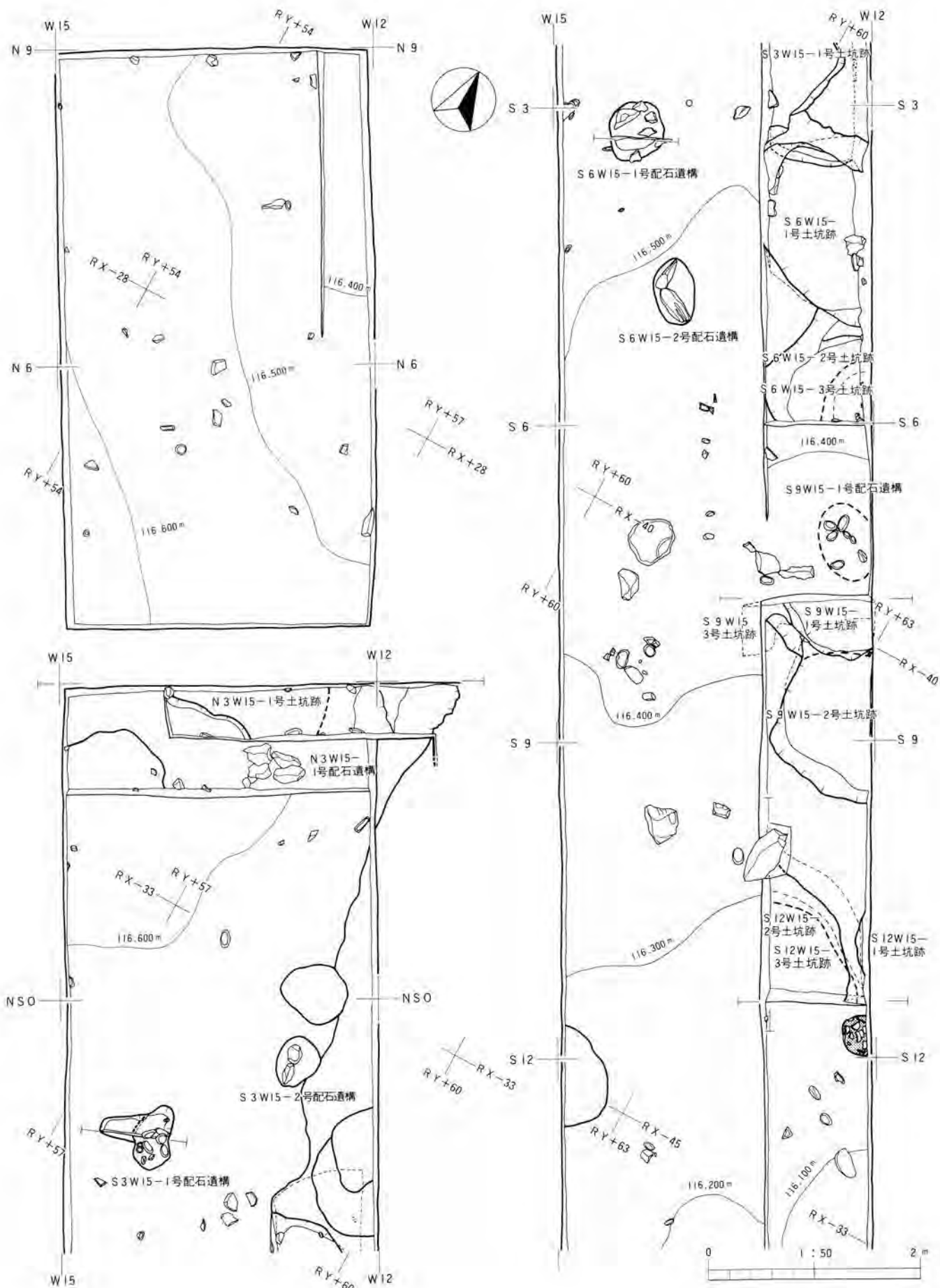
117,000 m



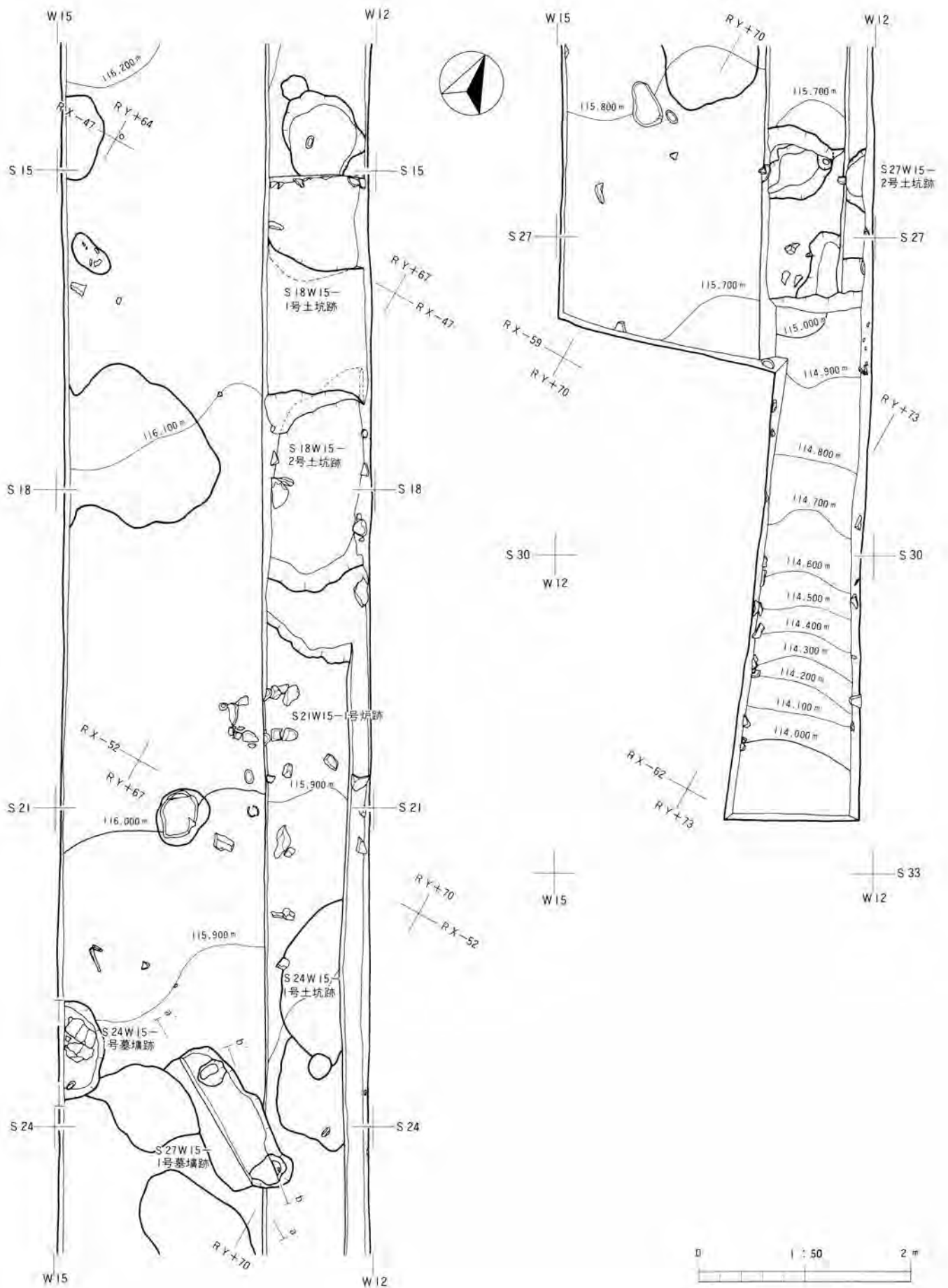
第41図 環状遺構帯土層断面図(3) S Cトレンチ



第42図 環状遺構帯土層断面図(4) SWトレンチ



第43図 環状遺構帯土層平面図(6) N9W15~S15W15グリッド



第44図 環状遺構帯平面図(7) S15W15～S30W15グリッド

第Ⅸ群

S 30W 6-3号土坑跡(第40図)

環状遺構帯南部のSCトレンチ南端部のⅨc層上面盛土層中で検出した。平面形は不整形を呈する様で、規模は開口部径1.2m以上、深さ0.35mを計る。

埋土はA層で3層に細分される。いずれも暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含むが、A1層・A3層で極めて少なく、A2層が多い。また、A1層・A2層は少量の炭化物粒を含むものの、A3層では多量の炭化物粒を含む。A1層・A2層は固さは中程度でややしまりがなく、A3層はやや柔らかい。出土遺物は大木8b式に伴う深鉢片などが出土している。

S 30W 6-2号土坑跡(第40図)

SCトレンチ最南端に位置する。地山面(Ⅹ層)で検出し、盛土層(Ⅹ層)に覆われる。平面形、規模等は不明であるが、深さ0.3mを計る。

埋土はA層で2層に細分される。いずれも褐色土を基本土とし、A1層はやや明るい褐色土塊を多量に、A2層は少量含む。しまりは両層ともに中程度で、A1層は固い。出土遺物はない。

S 6W15-2号土坑跡(第43図)

環状遺構帯南西部のSCトレンチ北半部に位置する。掘込面は不明であるがV層~VI層上面だと思われ、VI層に覆われている。S 6W15-1号・3号土坑跡に切られる。平面形、規模等は不明であるが、深さ0.35mを計る。

埋土はA層で2層に細分される。いずれも褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を含むが、A1層で特に多い。いずれもしまり具合は中程度で、A1層はやや柔らかい。出土遺物は大木9式に伴う深鉢片などが出土している。

第Ⅹ群

C類(断面形がフラスコ状~ピーカ状を呈する土坑跡)

C 1類(断面形がフラスコ状を呈する土坑跡)

N 3E 18-2号土坑跡(第22図)

環状遺構帯東部のEトレンチ中央部のVc層上面で検出した。N 3E 18-1号土坑跡に切れ、N 3E 18-3号土坑跡を切る。開口部径は不明で、底面径1.6m、深さ1.7mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ形を呈する。

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。A1層にのみ少量の炭化物粒を含む。A1層・A2層は固さ、しまり具合ともに中程度で、A3層・A4層はやや柔らかくややしまりが無い。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。B7層のみはやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を多く含む。B1層は固さ、しまり具合ともに中程度でB2層~B5層はやや柔らかくややしまりが無い。B6層~B8層は柔らかく締まりが無い。

出土遺物は縄文土器片などがあるもののいずれも細片で図示できなかった。

N 12E 3-1号土坑跡(第24図)

環状遺構帯北部の南寄りに位置し、VIa層上面で検出した。IVb層に覆われている。N 12E

3-2号土坑跡を切る。開口部径1.2m、底面径1.45m、深さ1.25mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層～D層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。A4層は黒褐色土塊や炭化物粒を多く含む。やや柔らかくしまりが無い。A1層～A3層は固さ、しまり具合ともに中程度である。いずれの層も南から北へ流れ込むように堆積する。

B層も暗褐色粘質土を基本土とするが、A層とは堆積状況が異なる。B2層はA4層に類似し、黒褐色土塊や炭化物粒を多く含む、柔らかくしまりが無い。

C層は壁の崩壊土でやや明るい褐色土を基本土とし、褐色～暗褐色土塊を含む。

D層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。柔らかくしまりが無い。
出土遺物（第30図125・126・138・140・142・144・第31図149・152・172・第32図179・180・184）

126は磨消技法によりやや幅の狭い縄文帯を施すもので、後期前葉に伴う。

125・138・140は磨消技法による曲線的な施文などがみられるもので、大木10式に伴う。

144は平行沈線を施すもので、口唇部に隆沈線状の施文がみられる。大木8b式に伴う。

149・152・172は隆沈線により渦巻文等を施すもので、大木8b式に伴う。104はやや古手である。

179は無柄平基の石鏃で、両面に自然面を残す。

180は削器かと思われ、側縁に刃部を有する。

184は敲石で、側縁の全周に敲打痕がみられる。また、使用時のものと思われる剥離も伴う。

第Ⅳ群

N9E3-2号土坑跡（第24図）

環状遺構帯北部の南寄りに位置し、VI層上面で検出した。N9E3-1号土坑跡に切られる。

また、N12E3-1号土坑跡に隣接するが重複関係は不明である。平面形は不整形を呈するものと見られ、規模は開口部径が不明で、底面径約2.0m、深さ1.4mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ形を呈する。

埋土はA層・B層に大別される。A層は壁際に堆積し、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや固く、しまり具合は中程度である。A4層のみは褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。

B層は暗褐色～褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や、やや明るい褐色土塊を多く含む。やや柔らかくしまりが無いものの、B3層とB5層はやや固くしまり具合は中程度である。出土遺物は少量の縄文土器片などがあるものの図示できるものはなかった。

S15W6-2号土坑跡（第39図）

環状遺構帯南部のSCトレンチ北端部に位置する。土層断面で確認したもので掘り込み面が不明である。S15W6-1号土坑跡に切られる。平面形は不整形を呈するものと思われる。規模は開口部径が不明で、底面径約1.5m、深さ0.65m以上を計る。底面には著しい凸凹がある。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層・B層に大別される。A層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。

第IX群

固く、しまり具合は中程度である。

B層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。やや柔らかくしまりが少ない。

出土遺物は隆沈線により施文される深鉢片(346・347)などがあり、大木8b式に伴うものと思われる。

S15W6-3号土坑跡(第39図)

SCトレンチ北端部に位置し、S15W6-2号土坑跡の南に隣接するが重複しない。また、S18W6-1号・3号土坑跡を切る。検出面はV層上面で、IV層に覆われる。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.0m、底面径1.45m、深さ0.9mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。

埋土はA層～C層に大別される。A層はやや暗い褐色土～暗褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。A2層は炭化物粒を多量に含む。固く、しまり具合は中程度である。

B層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や褐色土塊などを含むが、B1層で極めて少なく、B2層で極めて多い。また、B2層は炭化物粒をやや多く含む。いずれも固く、しまり具合は中程度である。

C層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。上層より明るい層と暗い層が交互に堆積しており、C1層・C2層・C4層・C6層が明るく、他の層が暗い。C5層がやや柔らかいほかは固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は後期前葉に伴う深鉢片(343～345)などが出土している。

第X群

S21W6-1号土坑跡(第39図)

SCトレンチ中央部に位置し、VI層上面で検出したものでIV層に覆われる。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.0m、底面径1.2m、深さ0.9mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈し、底面はほぼ平坦である。

埋土はA層～F層に大別される。A層は2層に細分され、A1層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。A2層は褐色土を基本土とし暗褐色土塊などを少量含む。いずれも固くしまり具合は中程度である。A1層は地山ブロック層で、本土坑跡が埋没した後に層上面に連続する面を構築したものと思われる。

B層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含む。B3層のみは暗褐色土を基本土とし、混入土がやや少ない。いずれの層も固いが、B1層・B5層～B7層はやや締まりがない。

C層は壁際にもみ堆積し、やや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含む。やや固く、しまりが少ない。

D層はC層に類似し、褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、C層より混入量は半分少ない。上層ほど固いが、下層はやや柔らかく、ややしまりが少ない。

E層は4層に細分される。E1層は黒褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含むほか、粉状の炭化物を多量に含む。E2層・E3層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、E2層は極めて混入量が多く、E3層は少ない。E4層は褐色の焼土を基本土とし、暗赤褐色焼土塊や赤褐色焼土塊を含むが、いずれも2次の堆積物である。

いずれの層もやや柔らかくややしまりが無い。

F層は3層に細分される。F1層は褐色土を基本土とし、明褐色土塊などを多量に含むほか焼土粒を少量含む。F2層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊と黄褐色土塊を含む。両者は固さが中程度でややしまりが無い。F3層は明褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は磨消技法により施文される深鉢片などが出土しており、後期初頭の称名寺式(349~351)に伴うものと大木10式(352~355)に伴うものの2者がある。

第Ⅹ群

S24W6-1号土坑跡(第40図)

SCトレンチ中央部に位置し、Ⅵ層上面で検出したものでⅣ層に覆われる。S24W6-2号土坑跡を切るほかS27W6-1号堅穴住居跡をわずかに重複し、これを切る様である。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.05m、底面径1.85m、深さ1.2mを計る。断面形は不整形ではあるが、わずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層・B層に大別される。A層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や黄褐色土塊などを含むが、A1層で特に多く、A3層で少ないほかは中程度の混入量である。いずれの層も固く、しまり具合は中程度~ややしまりが無い。

B層は明るい層と暗い層が交互に堆積している。B1層・B3層・B5層・B7層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。B2層・B4層・B6層は暗褐色土~褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。いずれの層も固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は磨消技法により施文される深鉢片など(365~372)が出土しており、大木10式に伴う。

第Ⅺ群

S24W6-2号土坑跡(第40図)

SCトレンチ中央部に位置し、環状遺構帯の底面に検出した。S24W6-1号土坑跡に切られる。平面形は不明である。規模は開口部径1.6m以上、底面径1.8m以上、深さ0.85mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はⅧ層・A層~C層に大別される。Ⅷ層は環状遺構帯の底面を構築するために本土坑跡の最上部を埋めた粘土層であり前述した。

A1層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含む。やや固くややしまりが無い。また、炭化物粒を少量含む。

B層はB5層が黄褐色土を基本土とするほかは褐色土を基本土とするが、B1層・B2層がやや暗い。混入土は黄褐色土塊など含むが、B1層・B3層・B4層・B7層でやや多く、B2層で著しく少ない。また、B1層・B2層・B7層は極めて多量の炭化物粒を含み、やや柔らかくしまりが無い。他の層も少量の炭化物粒を含み、固くしまり具合は中程度である。

C層は明るい層と暗い層が交互に堆積している。C1層・C2層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。C2層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を少量含む。いずれの層も炭化物粒を少量含む。C1層はやや固くしまり具合が中程度であり、C2層・C3層はやや柔らかくしまりが無い。

第Ⅷ群

出土遺物(373~379)は口縁部文様帯に隆沈線による波状文を施す小形のキャリパー形深鉢(373)や、口縁部文様帯に隆起線による小波状文を施す浅鉢(374)などがあり、いずれも大木8a式に伴う。

S30W6-1号土坑跡(第40図)

SCトレンチ南端部に位置し、地山面(XII層上面)に検出した。環状遺構帯外縁の盛土層(IX層~XII層)に覆われる。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.4m、底面径1.8m、深さ0.95mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層~D層に大別される。A層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、A1層で少なく、A2層で極めて多い。A1層はやや固く、しまり具合は中程度であるが、A2層は固さは中程度でややしまりが少ない。

B層は暗い層と明るい層が交互に堆積しており、B1層・B3層は褐色土を、B2層は黄褐色土を、B4層はやや明るい褐色粘質土を基本土としている。混入土は黄褐色土塊や褐色土塊などを含み、B1層・B2層で少なくB3層・B4層で著しく多い。いずれも固さは中程度でややしまりが少ない。

C層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。いずれの層も炭化物粒を含むがC1層で著しく多い。C1層・C4層はやや柔らかくややしまりが少ない。他の層は固さ、しまり具合ともに中程度であるが、C3層は固い。

D1層は黄褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は前期初頭の大木1式に伴う深鉢片がややまとまって出土している(380~388)。

第Ⅰ群

S3W15-1号土坑跡(第43図)

環状遺構帯南西部のSWトレンチ北端に位置する。検出面は中央広場の地山面~環状遺構帯埋土中(VI層上面か)である。平面形は不整形を呈するものと思われ、規模は開口部径1.1m程度、底面径2.0m、深さ1.6mを計る。断面形は一部不整ではあるが大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は中央部がやや凹むがほぼ平坦である。

埋土はA層とB層に大別される。A層は黄褐色土~明黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりが少ない。

B層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含むが、B5層・B9層で著しく少ない。また、B12層・B15層・B17層は黄褐色土~明黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。ほとんどの層に炭化物粒を含むが、B2層・B6層・B8層でやや多く、B7層・B13層で著しく多い。いずれもの層も柔らかくしまりが少ない。B17層は底面を覆う薄い層である。

第Ⅹ群

出土遺物は、磨消技法による深鉢片など(389~393)が出土しており大木10式に伴う。

S6W15-1号土坑跡(第43図)

SWトレンチ北端に位置し、VI層上面で検出したもので、V層に覆われる。S6W15-2号土坑跡に切られ、S3W15-1号土坑跡・S6W15-3号土坑跡を切る。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.8m、底面径1.55m、深さ1.2mを計る。断面形は南壁の一部がゆるや

かに外斜するほかは大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層～G層に大別される。A層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含む。いずれの層も固さは中程度で、ややしまりがない。

B層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土などをやや多く含む。B4層のみは明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を少量含む。いずれの層も固さ、しまり具合ともに中程度である。

C層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などをやや多く含む。C1層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりがない。

D層も褐色土を基本土とし、やや暗い褐色土塊や黄褐色土塊などを多量に含むもので、混入土の量はC層より著しく多い。D4層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊を多量に含む。D4層は炭化物粒をやや多く含む。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりがない。

E層は壁際にのみ堆積する。褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、E1層・E2層・E4層で著しく少なく、他の層で著しく多い。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりがない。

F層は暗い層と明るい層が交互に堆積している。F1層・F3層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、F1層で著しく多く、F3層で著しく少ない。F2層・F4層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や褐色土塊などを多量に含む。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりがない。

G1層は底面を覆う薄い層で、褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などをやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

出土遺物は少なく磨削技法により施文される深鉢片など(396～398)が出土しており大木10式に伴う。

第IX群

S 9 W15-1号土坑跡(第43図)

SWトレンチ北半部に位置する。検出面はVI層上面で、IV層に覆われる。S 9 W15-2号土坑跡に切られ、S 9 W15-3号土坑跡を切る。平面形は不整形円形を呈するものと思われ、規模は開口部径、底面径が不明で、深さが1.55mを計る。断面形はゆるやかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層・B層に大別される。A層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含むが、A2層～A4層はやや少ない。A6層は炭化物粒を多量に含み、やや柔らかくややしまりがない。他の層は炭化物粒を少量含み、やや固くややしまりがない。

B層は明るい層と暗い層が交互に堆積している。B1層・B2層・B5層・B7層は明黄褐色土～明褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。B3層・B4層・B6層・B8層は褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や黄褐色土塊などを含むが、前述した層より混入量が少ない。また、B3層・B4層は炭化物粒をやや多く含む。いずれの層もやや柔らかくややしまりがない。

出土遺物は、隆沈線により施文される深鉢片(399・400)などがあり、大木8b式に伴う。

第IX群

S 9 W15-2号土坑跡(第43図)

SWトレンチ北半部に位置する。検出面はVI層上面で、IV層に覆われる。柱穴状のピットに

切られ、S 9 W15-1号土坑跡を切る。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.45m以上、底面径1.65m、深さ1.5mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

埋土はA層～G層に大別される。A層はやや暗い褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などを含む。A 6層は炭化物粒を多く含みほか、焼土粒を少量含む。A 3層がやや柔らかいほかは固さは中程度で、ややしまりがいい。

B層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、B 1層・B 2層でやや混入量が多いほかは少ない。また、B 1層は黄褐色土を、B 7層は暗褐色土を基本土とする。また、B 7層は多量の炭化物粒を含む。いずれも固さは中程度で、ややしまりがいい。

C層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含むが、C 6層が著しく少ないほかは、C 3層・C 8層でやや少ない。C 1層～C 5層はやや柔らかくややしまりがなく、C 6層～C 9層は固さが中程度で、ややしまりがいい。

D層は褐色土を基本土とし、上層から暗い層と明るい層が交互に堆積する。D 1層・D 2層は暗褐色土塊や焼土塊を含み柔らかくしまりがいい。また、D 1層は多量の炭化物粒を多く含む。D 2層・D 4層は黄褐色土塊などを多く含みやや柔らかくしまりがいい。

E層はE 1層・E 2層がやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含み、固さは中程度で、ややしまりがいい。E 3層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや柔らかく、ややしまりがいい。

F 1層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や焼土塊などをやや多く含むほか、多量の炭化物粒を含む。やや柔らかくしまりがいい。

G層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。G 2層は焼土塊を含む。G 4層は明黄褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や褐色土塊を含む。G 6層は褐色土と明黄褐色土の混合土層である。G 2層・G 5層がやや柔らかいほかは固さは中程度で、ややしまりがいい。

出土遺物は磨削技法により施文される深鉢片(401～410)などがあり大木10式～後期前葉に伴う。

第XI群～第XII群

S 12W15-1号土坑跡(第43図)

SWトレンチの北半部に位置し、V層上面で検出したものでIV層に覆われる。柱穴状のピットに切られ、S12W15-2号土坑跡を切る。大半がサブトレンチ外に延びるために平面形や規模は不明であるが深さは1.25mを計る。断面部はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層～D層に大別される。A 1層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を含むほか炭化物粒を多量に含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

B層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。B 2層は焼土粒を含む。B 1層はやや固く、しまり具合は中程度であり、B 2層・B 3層は固さが中程度で、ややしまりがいい。

C層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などをやや多く含む。C 4層に極めて多量に炭化物粒を含むほか、C 1層・C 5層にやや多く含む。C 1層・C 2層は固さが中程度で、C 3層～C 5層はやや柔らかく、いずれの層もややしまりがいい。

D層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、C層より混入量は少ない。D1層・D2層は炭化物粒をやや多く含む。いずれの層も柔らかくしまりが無い。

出土遺物は、平行沈線を施すもの(405)などがあるが、重複関係から後期前葉に伴うものである。

S12W15-2号土坑跡(第43図)

SWトレンチ北半部に位置し、VI層上面で検出したものでIV層に覆われる。S12W15-1号土坑跡に切られ、S12W15-3号土坑跡を切る。全体の1/4程度しか精査していないために平面形や規模は不明であるが、深さは2.0mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層～M層に大別される。A層は上層より明るい層と暗い層が交互に堆積している。A1層・A3層・A5層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊などをやや多く含む。いずれも固く、しまり具合は中程度である。A2層・A6層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか多量の炭化物粒を含む。やや固く、しまり具合は中程度である。A4層は黒色土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を多量に含むほか多量の炭化物粒を含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。

B層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含むが、B1層はやや少ない。いずれも固く、しまり具合は中程度である。

C層は上層より暗い層と明るい層が交互に堆積している。C1層・C3層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。C2層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊などを多量に含む。C1層は固さは中程度で、C2層・C3層はやや柔らかく、いずれの層もややしまりが無い。

D層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多量に含む。D2層は焼土塊を多く含む。いずれの層も固さは中程度で、ややしまりが無い。

E層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含むが、混入量はやや少ない。E1層は焼土粒を少量含み、E2層は炭化物粒を多量に含む。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりが無い。

F層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを含むが、混入量はE層より少ない。F2層は炭化物粒をやや多く含む。いずれの層もやや柔らかく、ややしまりが無い。

G層は壁際にのみ堆積し、やや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。G1層はやや固く、しまり具合は中程度であるが、G2層はやや柔らかく、ややしまりが無い。

H層はH1層・H3層が褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。H3層は焼土塊も含む。H2層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか粒状の炭化物を多量に含む。いずれの層も柔らかく、しまりが無い。

I層は上層より明るい層と暗い層が交互に堆積している。I1層・C3層・I4層・C6層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含む。また、I4層は炭化物粒をやや多く含むほか焼土粒を少量含み、I6層は焼土粒を少量含む。I2層・C5層・I7層はやや暗い褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含むが、I2層で混入量が極めて多いほかは少ない。

I 1層～I 4層はやや柔らかく、I 5層～I 7層は柔らかく、いずれの層もしまりがない。

J層も褐色土を基本土とし、上層より明るい層と暗い層が交互に堆積している。J 1層・J 3層はやや明るい褐色土を基本土とし、基本土より暗い褐色土を含む。J 2層・J 4層・J 5層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊などを含むがJ 4層で混入量が著しく多い。いずれの層も柔らかく、しまりが無い。

K層も褐色土を基本土とし、上層より明るい層と暗い層が交互に堆積している。いずれの層も暗褐色土塊などを多量に含み柔らかく、しまりが無い。

L層はやや暗い褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。柔らかくしまりが無い。

M層はM 1層がやや明るい褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊や暗褐色土塊などを多量に含む。M 2層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。いずれの層も柔らかくしまりが無い。

出土遺物は磨消技法により施文される深鉢片（406・408～410）などがあり、後期前葉に伴う。

S 12W15-3号土坑跡（第43図）

環状遺構帯南西部のSWトレンチ北東部に位置する。N12W15-1・2号坑跡に切られるために不明瞭ではあるが検出面はIV層だと思われIV層に覆われる。平面形規模ともに不明であるが、深さは1.7mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層・B層に大別される。A層はA 1層が暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。柔らかくしまりが無い。A 2層は明褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。やや柔らかくややしまりが無い。他の層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などをやや多く含む。A 3層は固さは中程度で、A 4～A 6層はやや柔らかい。いずれもややしまりが無い。

B層はB 1層～B 2層が褐色土を基本土とし、明黄褐色土や暗褐色土を含む。いずれも固さが中程度でややしまりが無い。B 4層は明黄褐色土を基本土とし、褐色土塊・暗褐色土塊・黄褐色土塊を多量に含む。柔らかくしまりが無い。

出土遺物は本土跡とS12W15-2号土坑跡をまとめて取り上げた中に後期前葉に伴うものがあるが明確な時期は決定し得ない。

S 18W15-1号土坑跡（第44図）

SWトレンチのほぼ中央部に位置し、VI層上面で検出したものでIV層に覆われる。平面形は不整形を呈し、規模は不明であるが深さは1.0mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層～D層に大別される。A層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。固くしまり具合は中程度である。

B層はB 1層・B 2層が褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊などを多く含む。B 3層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。B 1層は固さが中程度で、B 2層・B 3層はやや柔らかい。いずれもしまりがない。

C層は上層から明るい層と暗い層が交互に堆積している。C1層・C3層・C5層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などを多く含む。C2層・C4層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含むほか炭化物粒を多く含む。C1層はやや固くしまり具合は中程度、C3層は固さが中程度でややしまりがなく、C2層・C4層・C5層は柔らかくしまりがなく。

D層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。D2層は混入量がやや少ない。いずれも固くややしまりがなく。

出土遺物は磨削技法により施文された深鉢片(417～421)などがあり大木10式～後期初頭に伴う。

S18W15-2号土坑跡(第44図)

SWトレンチのほぼ中央部に位置し、VI層上面で検出したものでIV層に覆われる。平面形は不整形円形を呈し、規模は開口部径2.0m、底面径2.1m、深さ1.35mを計る。断面形は南壁がほぼ直壁に近く、北壁がオーバーハングする。底面は平坦である。

埋土はA層～J層に大別される。これらは暗褐色土層と褐色土層の互層からなる上層部(A層～D層)と褐色土層と黄褐色土層の互層からなる下層部(E層～J層)に2大別されるが、これらの中での堆積状況の違い、特に不整合面の有無などにより層相を細分したものである。

A層はA1層・A3層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを含み、A2層・A4層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。混入土の量はA3層・A4層で特に多い。いずれの層もやや固く、しまり具合は中程度である。

B層はいずれも暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含むが、B2層で特に多い。いずれも固くややしまりがなく。

C層はC1層・C2層・C5層・C8層・C9層・C11層が褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。C3層・C4層・C6層・C7層・C10層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。C10層は粉状の炭化物を多量に含む。C1層・C2層・C6層・C7層は水成堆積層の2次堆積層と思われ、砂やシルトが多く含まれる。C1層・C6層・C7層は固く、C9層～C11層は柔らかい。他の層は固さは中程度でややしまりがなく。

D層はD1層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊などを多く含む。固さは中程度でややしまりがなく。D2層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。やや柔らかくしまり具合は中程度である。

E層は北壁付近にのみ堆積し、E1層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を多く含む。やや固くややしまりがなく。E2層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。固さは中程度でややしまりがなく。

F層は南壁付近にのみ堆積し、E層に対応するものであろう。F1層・F3層が黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を多く含むがF3層は混入量が少ない。F2層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を含む。いずれの層もやや固くややしまりがなく。

G層はG1層～G3層がやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や明黄褐色土塊などを多く含む。やや柔らかくしまりがなく。G4層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。やや固くしまり具合は中程度である。

H層はH1層・H2層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。固さは中程度でややしまりがいい。H3層は黄褐色土を基本土とし、明黄褐色土塊を少量含む。やや固くしまり具合は中程度である。

I1層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりがいい。

J層はJ1層・J3層・J7層・J9層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含むが、J7層以外は混入量はあまり多くない。J2層・J4層・J6層・J8層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。また、J5層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。J1層～J3層は柔らかくしまりがなく、J5層～J7層・J9層はやや柔らかくややしまりがいい。J4層・J8層は固さは中程度でややしまりがいい。

出土遺物は磨消技法により施文される深鉢片(422～426)などがあり後期初頭に伴う。

N3W15-1号土坑跡(第43図)

環状遺構帯西部の東端に位置する。環状遺構帯底面で検出したもので、VI層に覆われる。N3W15-2号土坑跡に切られる。平面形、規模は不明であるが、深さは0.65mを計る。断面形は大きくオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面はほぼ平坦である。

埋土はA層～E層に大別される。A1層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多量に含むほか、こぶし大の亜角礫を多量に含む。固くややしまりがいい。

B層はB1層・B3層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。B2層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色土塊などを多く含む。いずれも固く、しまり具合は中程度である。

C1層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。固く、しまり具合は中程度である。

D層はD1層・D2層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。D1層はやや固く、しまり具合は中程度である。D2層は固さが中程度でややしまりがいい。D3層は明黄褐色砂質土を基本土とし、褐色土塊を含む。やや柔らかくややしまりがいい。

E層はいずれもやや明るい褐色土を基本土とし、やや暗い褐色土塊などを含む。E1層は粉状の炭化物を多量に含む、やや柔らかくややしまりがいい。E2層はやや固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物はない。

N3W15-2号土坑跡(第43図)

N3W15-1号土坑跡の西に位置し、これを切る。検出面は地山面かと思われ、V層に覆われる。平面形は規模は不明であるが、深さは0.55mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするフラスコ状を呈する。底面は平坦である。

埋土はA層のみで、A1層・A3層がやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含む。A2層は褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。A1層はやや固く、しまり具合は中程度で、A2層・A3層は固さが中程度でややしまりがいい。

出土遺物はない。

C 2 類 (断面形がピーカー状を呈する土坑跡)

N 3 E 15-1 号土坑跡 (第22図)

環状遺構帯東部のEトレンチ西端部に位置する。環状遺構帯の底面に検出したものでVI層に覆われる。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.14m、底面径1.7m、深さ1.0mを計る。断面形はわずかにオーバーハングするがほぼ直壁である。底面はほぼ平坦である。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。A 1層は混入土が少ない地山ブロック層で、やや柔らかくしまりがいい。

B層は褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多く含む。いずれの層も炭化物粒を含む。

B 2層は柔らかくしまりがいい。

出土遺物は第28図105である。105は敲打磨石で、楕円形扁平礫の側縁に機能磨面を有する。

N 3 E 18-1 号土坑跡 (第22図)

Eトレンチ中央部に位置する。V c層上面に検出したもので、V b層に覆われる。N 3 E 18-2号・3号土坑跡を切る。平面形は不整形を呈するものと思われ、規模は開口部径1.35m、底面径0.6m、深さ1.15mを計る。壁は不整で、下半はほぼ直壁で上半部はやや外斜する。上半部についてはV c層の堆積状況に関係するものと思われる。底面は平坦である。

埋土はA層・B層に大別される。A層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色～やや明るい褐色土塊などを多く含む。A 2層は固いが、他の層は固さ、しまり具合ともに中程度である。A 4層は最も混入土の量が多い。

B層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。B 2層～B 5層に炭化物粒を含むが下層ほど多い。他の層には炭化物粒は含まれない。B 1層～B 3層・B 6層は固さ、しまり具合ともに中程度であり、B 5層・B 6層はやや柔らかくしまりがいい。また、B 7層は柔らかくしまりがいい。

出土遺物 (第26図～第29図 71・75・80・81・84・85・92・95・105・111・114)

71・72は磨消技法により縦位の縄文区画文を施すが、モチーフの全容は不明である。大木9式に伴うものであろうか。73は隆起線による磨消技法で渦巻文等を施すもので、大木9式に伴う。

75・80・81・84・85は隆沈線や平行沈線などにより施文されるもので、大木8 a式～8 b式に伴う。

92・95は削器で、側縁部を中心に刃部の調整が認められる。92は下辺にも調整がみられる。

105は敲打磨石で、楕円形扁平礫の1側縁に機能磨面を有する。

111は敲石で、全面に敲打痕が認められるが、特に下端部に著しい。

114は石皿で、1面に凹んだ磨面を有する。周辺には擦痕や敲打痕が認められる。

S 15W 6-1 号土坑跡 (第39図)

環状遺構帯東部のS Cトレンチ北端部に位置する。V層上面に検出したもので、IV層に覆わ

れる。S15W6-2号土坑跡を切る。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径1.25m、底面径1.1m、深さ1.3mを計る。

埋土はA層～C層に大別される。A層はA1層が暗褐色土を基本土とし、褐色土塊を少量含む。やや固くややしまりが無い。A2層はやや暗い褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊含むほか、炭化物粒をやや多く含む。固く、しまり具合は中程度である。

B層はB1層・B2層・B4層がやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などをやや多く含む。B2層・B4層は炭化物粒をやや多く含む。B3層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊を含む。B1層・B2層は固く、しまり具合は中程度で、B3層・B4層はやや柔らかくややしまりが無い。

C層はC1層・C3層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりが無い。C2層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は後期前葉に伴う深鉢片(427～430)などが出土している。

第Ⅳ群

S12W12-1号土坑跡(第18図)

環状遺構帯南西部の北端に位置する。環状遺構帯の底面に検出したものでVI層に覆われる。S9W12-2号配石遺構に切られる。平面形は不整形を呈し、規模は開口部径0.9m、底面径0.6m、深さ0.9mを計る。断面形はわずかに外反している。底面はほぼ平坦である。

埋土はA層～D層に大別される。A層はA1層が暗褐色土を基本土とし、褐色土塊や焼土塊を含む。A2層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。いずれも固さは中程度でややしまりが無い。

B層はB1層・B3層・B4層が褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を含む。B2層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊・黄褐色土塊・焼土塊を多量に含むほか、炭化物粒を多く含む。B1層・B4層は固さが中程度でややしまりが無い。B2層・B3層はやや柔らかくややしまりが無い。

C層は褐色土を基本土とし、黄褐色土塊や暗褐色土塊などを多く含む。C2層は他の層よりやや暗い。いずれの層も固さは中程度で、ややしまりが無い。

D1層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを少量含む。やや固くしまり具合は中程度である。

出土遺物はない。

C類(大形土坑跡であるが断面形がフラスコ状かピーカー状か不明なもの)

N3E18-3号土坑跡(第22図)

環状遺構帯東部のEトレンチ中央部に位置する。VC層下面から掘り込まれ、N3E18-1号・2号土坑跡および柱穴状ピット(Na6p)に切られる。平面形、規模、断面形ともに不明であるが、深さは1.15mを計る。

埋土はA層・B層に大別される。A層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色～暗褐色土塊を多く含む。A2層が最も明るい色調を呈している。いずれの層もやや柔らかくしまり

具合は中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊などを多く含む。B2層のみはやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊を多く含む。B1層～B3層はやや柔らかくしまりがいい。B4層～B5層は柔らかくしまりがいい。

出土遺物（第26図・第27図・第29図 77・79・88・91・96・110）

77・79は隆沈線により渦巻文を施すもので、大木8b式に伴う。

88は無柄凹基の石鏃で、基部が大きくえぐれている。また、側縁部も若干えぐれている。全面にわたり調整される。

91は削器で、側縁部にやや湾入する刃部を有している。29も小形ではあるが削器かと思われ、全面にわたり調整される。110は敲打磨石である。

第Ⅸ群

S30W6-2号土坑跡（第40図）

環状遺構帯南部のSCトレンチ南端部に位置する。地山面で検出したもので、盛土層（XI層）に覆われる。平面形、規模は不明であるが深さは0.3mを計る。断面形はわずかに外斜している。底面は平坦であり壁直下には周溝状の溝が部分的に認められる。全体の形態が不明であるため、当面はここに分類するが竪穴住居跡等である可能性も考えられる。

埋土はA層のみで褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を含むが、A1層で多く、A2層で少ない。いずれもしまり具合は中程度で、A1層は固く、A2層の固さは中程度である。

出土遺物は太木8b式に伴う深鉢片などがある。

第Ⅸ群

S30W6-3号土坑跡（第40図）

SCトレンチ南端部に位置する。盛土層（IX層～X層）上面で検出した。平面形、規模ともに不明である。全掘していないため断面形も不明であるが、壁の上部は外斜する。

埋土はA層のみで、A1層は褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊をわずかに含む。A2層も褐色土を基本土とするが、黄褐色土塊などを多量に含む。いずれも固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物はない。

S6W15-3号土坑跡（第43図）

環状遺構帯南西部のSWトレンチ北端部に位置する。S6W15-1号・2号土坑跡に切られ検出面はS6W15-2号土坑跡底面である。平面形、規模ともに不明であるが、現存部の深さは0.7mを計る。断面形も不明であるが、底面はほぼ平坦である。

埋土はA層・B層のみを確認した。A層はやや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊を含むが、A2層で著しく少ない。いずれの層もやや柔らかくしまり具合は中程度である。

B層は黄褐色土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色土塊を多く含む。いずれの層もやや柔らかくややしまりがいい。

出土遺物はない。

S 9 W15-3号土坑跡（第43図）

SWトレンチ中央部に位置し、S 9 W15-2号土坑跡に切られる。平面形・規模ともに不明であるが深さは1.5mを計する。

埋土はA層で12層に細分される。A 1層～A 5層は褐色土を基本としやや固い。A 6層～A 11層はやや明るい褐色土基本土としやや柔らかい。A 12層は明黄褐色土を基本土としやや柔らかい。出土遺物はない。

S 24W15-2号土坑跡（第44図）

SWトレンチ南端部に位置する。VI層上面で検出した。平面形は不整形円形を呈するものと思われる。規模・断面形は不明であるが壁はかなり外斜するようである。

埋土はA層～C層のみを確認した。A層は暗褐色土を基本土とし、A 1層が黒黄褐色土塊などを、A 2層・A 3層が褐色土塊などを含む。A 1層は固さが中程度で、A 2層・A 3層がやや柔らかく、いずれの層もややしまりが無い。

B層はB 2層・B 4層が褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを多く含む。B 3層・B 5層は暗褐色土を基本土とし、褐色土塊などを含む。B 1層は焼土の2次堆積層である。B 1層・B 3層はやや柔らかく他の層は中程度であり、いずれの層もややしまりが無い。

C層は暗褐色土を基本土とし、C 1層は褐色土塊などを、C 2層は黄褐色土塊などを含む。C 1層は固く、C 2層は中程度で、いずれの層もしまり具合は中程である。

出土遺物は大木9式に伴う深鉢片がある。

S 9 W12-1号土坑跡（第18図）

環状遺構帯南西部の北端に位置する。検出面はVI層上面である。平面形は不整形円形を呈するが、規模は断面形等は不明である。

埋土はA層のみを確認した。いずれも褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊などを少量含む。いずれの層も固く、しまりが無い。

出土遺物はない。

S 12W 9-1号土坑跡（第18図）

環状遺構帯南西部の北端に位置する。VI層上面で検出したもので、IV層に覆われる。平面形、規模、断面形ともに不明である。

埋土はA層～E層のみを確認した。A 1層は明黄褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊を含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。いずれも固さは中程度で、B 2層はややしまっている。

C 1層は黄褐色粘質土を基本土とし、明黄褐色土塊や黄橙色土塊などをやや多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

D 1層は明黄褐色粘質土を基本土とし、黄橙色土塊や褐色土塊を多く含む。固さは中程度で、ややしまっている。

E 1層は黄褐色粘質土を基本土とし、黄橙色土塊や褐色土塊などを多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

出土遺物はない。

iii)配石遺構

環状遺構帯南西部の内縁付近には小規模な配石遺構を7基検出した。このうち3基を断ち割ったところ下部に土坑跡状の掘り込みを確認している。未精査のものも同様であると思われる。

N 3 W15-1号配石遺構 (第43図・第45図)

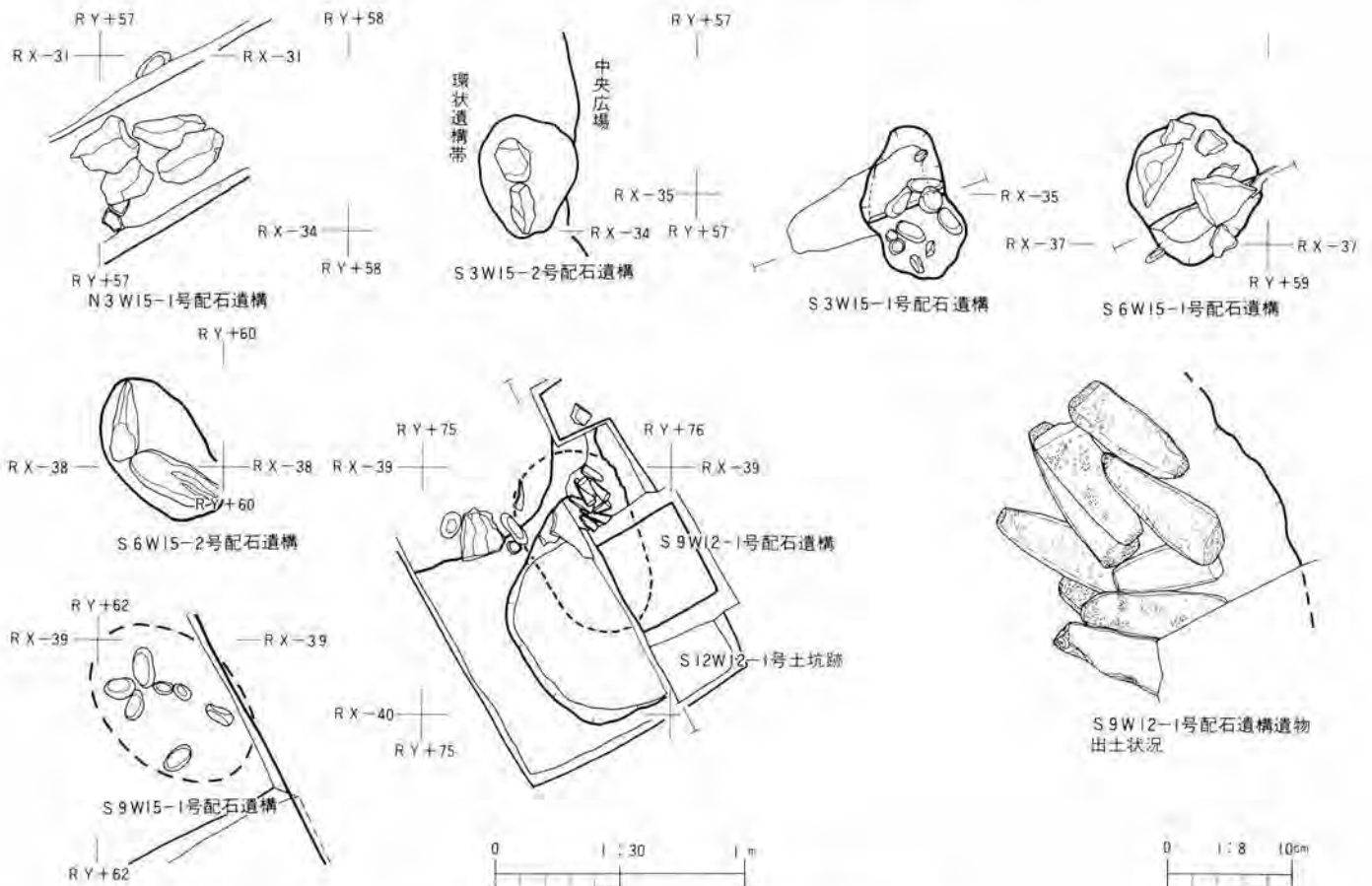
環状遺構帯西部のサブトレンチ内に位置する。検出面はV層上面(?)であるが掘込み面は不明である。長軸0.6m、短軸0.4mの範囲に長さ0.3m程の亜角礫5個以上が集積する。検出のみに留めたために下部構造は不明である。伴出遺物はない。

S 3 W15-1号配石遺構 (第43図・第45図)

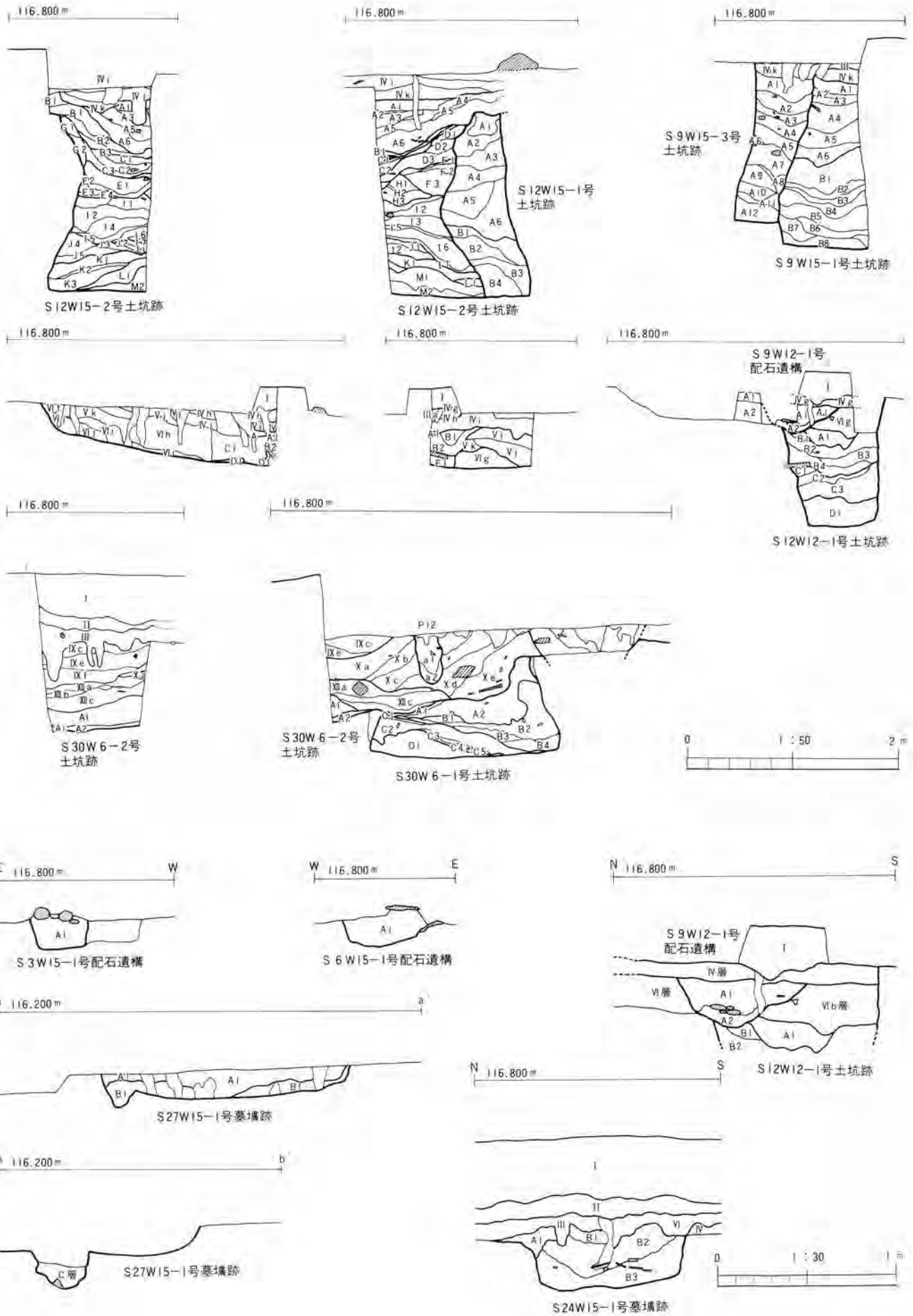
環状遺構帯西部で中央広場との境界線付近に位置する。検出面は環状遺構帯最上面(IV層上面か)である。長さ0.2m程の砂岩質の亜角礫2個が集積し、下部に長軸0.5m、短軸0.4mの土坑跡を検出している。伴出遺物はない。

S 3 W15-1号配石遺構 (第43図・第45図)

環状遺構帯西部に位置し、環状遺構帯最上面(IV層上面か)に検出した。こぶし大の扁平円



第45図 環状遺構帯検出配石遺構平面図



第46図 環状遺構帯検出配石遺構・土坑跡土層断面図

礫11個が集積しており、下部に長軸0.6m、短軸0.3m、深さ0.3mの不整楕円形を呈する土坑跡を確認している。土坑跡の埋土はA1層で、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

出土遺物はない。

S 6 W15-1号配石遺構（第43図・第45図）

環状遺構帯西部に位置し、環状遺構帯最上面（IV層上面か）に検出した。長さ0.3m以下の石皿片や凹石片のみが6個以上集積し、下部に長軸0.6m、短軸0.5m、深さ0.3mの不整楕円形を呈する土坑跡を検出している。土坑跡の埋土はA1層で、褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。

出土遺物は前述した石器類のみで土器片は出土していない。

S 6 W15-2号配石遺構（第43図・第45図）

環状遺構帯西部に位置し、環状遺構帯最上面（IV層上面か）に検出した。長さ0.4m以下の砂岩質亜円礫2個が集積し、下部に長軸0.6m、短軸0.4mの土坑跡を検出した。伴出遺物はない。

S 9 W15-1号配石遺構（第43図・第45図）

環状遺構帯南西部のS Wトレンチ北端部に位置し、環状遺構帯最上面のIV層上面で検出した。こぶし大の扁平円礫7個以上が集積し、下部に長軸0.8m、短軸0.5mの土坑跡を検出している。

S 9 W12-1号配石遺構（第43図・第45図）

環状遺構帯南西部の内縁付近に位置し、VI層中から掘り込まれる。土坑跡の平面形は不明であるが、不整楕円形を呈するものと思われ、規模は長軸0.7m、短軸0.3m以上、深さ0.3mを計る。埋土のA2層上面に9点の磨製石斧が集積するもので、“デボ”に相当する可能性も大きい。埋土はA層で、褐色土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や黄褐色土塊を含むが、A1層で少なく、A2層で極めて多い。A1層はやや固く、A2層は中程度で、いずれもややしまりがない。

磨製石斧はとり上げずに埋戻したが、丁寧に研磨したもののほかに敲打整形時のものや、剥離成形時のものを含んでおり、磨製石斧制作に係る一連の工程の各段階のものを含んでいる。

これ以外の出土遺物はない。

N 9 E27-1号配石遺構（第51図）

環状遺構帯西部のIV層上面で検出した。土坑跡の平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.2m、短軸0.9mを計る。検出面上に5個の礫が配されるが、このうち2点は石棒片であり、1点は敲打によって整形された勁部付近で、もう1点は磨擦によって整形された体部の破片である。両者は接合しないが、いずれも二次的に焼成を受けている。

N 9 E21-1号配石遺構（第51図）

環状遺構帯西部のIV層上面で検出した。土坑跡の平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.0

m、短軸0.7mを計る。検出面上に長さ0.6mの磔を配す。

N12E21-1号配石遺構（第51図）

環状遺構帯西部のIV層上面で検出した。土坑跡の平面形は不整形を呈し、規模は直径0.8mを計る。検出面上に7個の磔を配す。

N6E18-1号石棒埋設遺構（第51図）

環状遺構帯西部のIV層上面で検出した。周辺には土坑跡などの関連遺構が確認できなかったが石棒が立ったままの状態で検出されており、何らかの形で埋設したと思われる。石棒は一部欠損しているが、敲打により整形されており、明瞭な勁部を作出している。これについては、そのまま埋戻している。

iv) 柱穴状ピット

環状遺構帯埋土中に検出した柱穴や小ピット類を一括する。Eトレンチにて11基、SCトレンチにて8基、SWトレンチにて2基を確認した。

Eトレンチは掘り込まれた面によりいくつかのグループに分けられる。AグループはV層上面から掘り込まれたもので、Na9p・Na10pが相当する。BグループはVc層上面から掘り込まれたもので、Na7p・Na8pが相当する。CグループはVc層下面から掘り込まれたもので、Na6pが相当する。DグループはVI層上面から掘り込まれたもので、Na1p～Na5p・Na11pが相当する。また、VI層上面に堆積するVe層（酸化ドングリ類の集積）が直接Dグループのピットを覆っている。

柱痕跡を確認したものはNa1p・Na5～Na7p・Na11pがある。本痕跡にはいずれも掘り方より暗いややしまりのない土が堆積している。

出土遺物は第26図83・第27図86がある。83はNa3pから出土したもので、2条の平行隆起線により渦巻文等を施す。大木8a式～大木8b式に伴う。

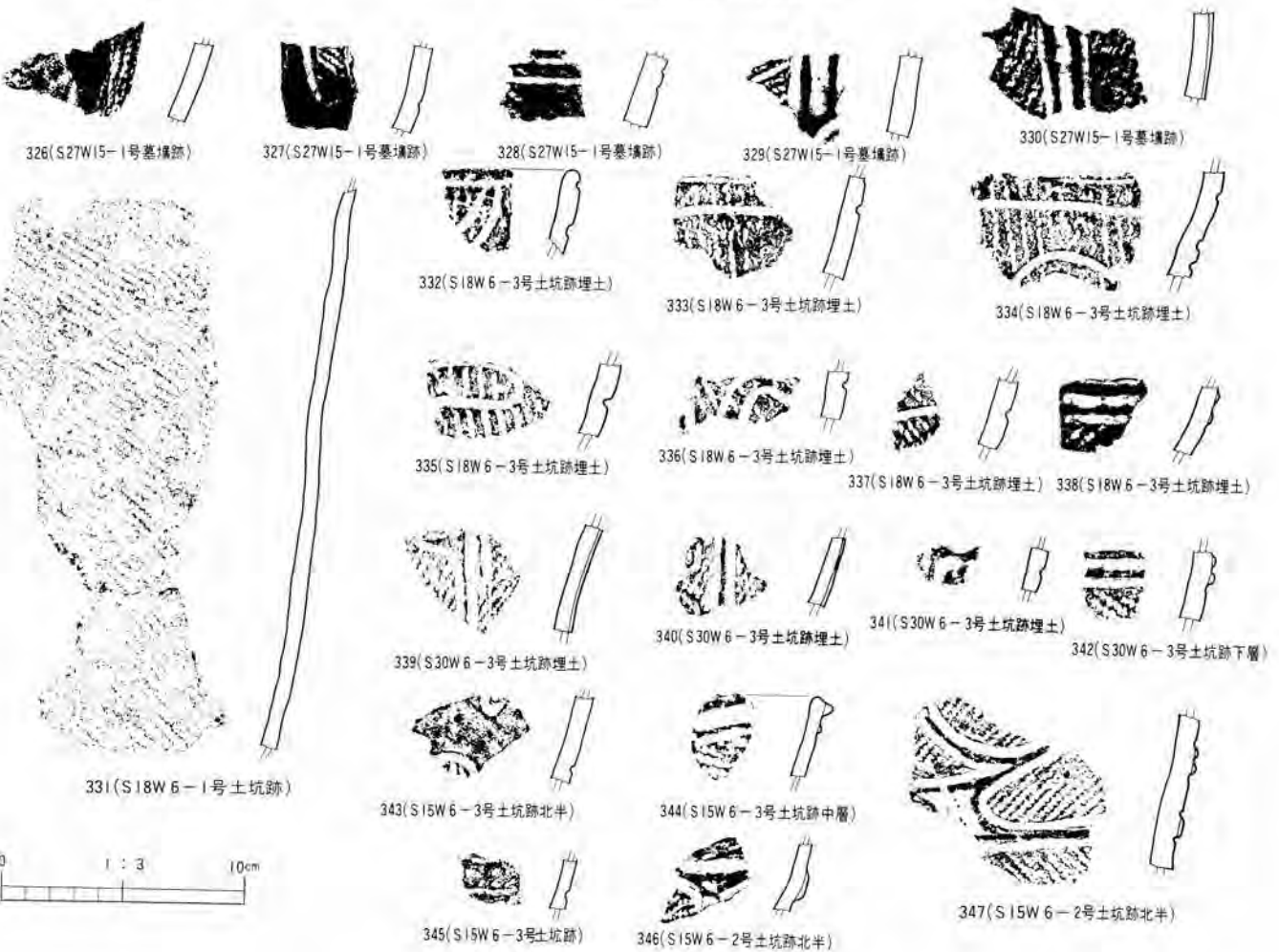
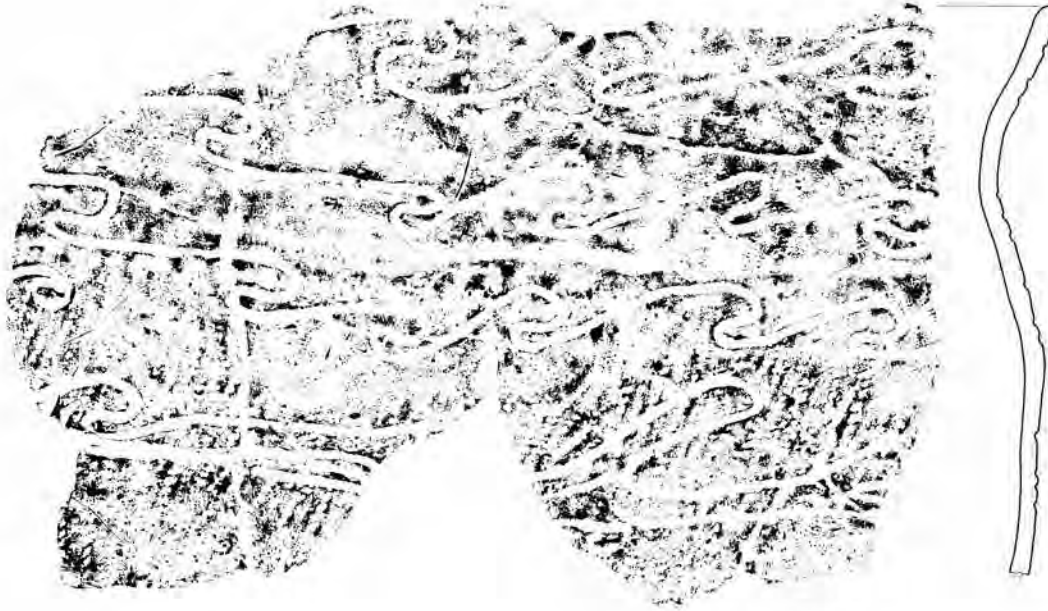
86はNa2pより出土した無柄凹基の石鏃である。両面にわずかではあるが主要剥離面を残す。

SCトレンチでは、EグループがVj層上面から掘り込まれたもので、Na13pが相当する。FグループはVI層上面から掘り込まれたもので、Na12p・Na14p～Na16pが相当する。Gグループは環状遺構帯底面のVIII層上面から掘り込まれたもので、Na17pが相当する。Hグループは盛土層のIXb層上面から掘り込まれたもので、Na18pが相当する。Iグループは盛土層のXI層上面から掘り込まれたもので、Na19p・Na20pが相当する。JグループはXIII層上面から掘り込まれたもので、Na21pが相当する。

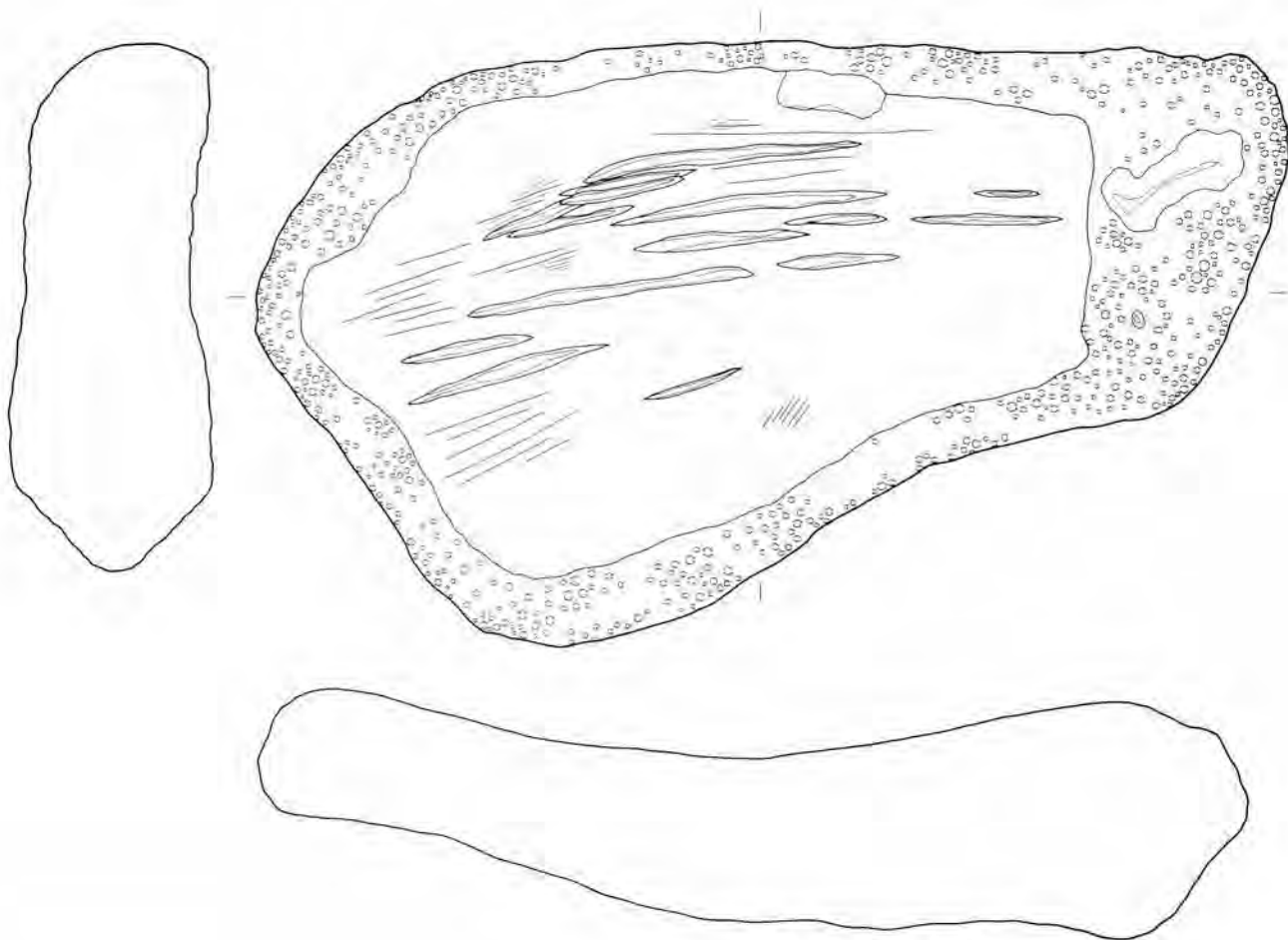
柱痕跡を確認したものはNa14pのみである。やや大きい柱穴跡で、開口部径0.65m、深さ0.83m、柱痕跡径0.12を計る。a1層は柱痕跡の埋土で褐色土を基本土とし、暗褐色土塊などを少量含む。やや固く、しまり具合は中程度である。下端部の両端に炭化物が残存しており、柱を焼いてから埋設したことが確認できた。b層は掘り方埋土で、やや明るい褐色土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。上層は固いが下層はやや柔らかい。

SWトレンチはKグループはIV層上面から掘り込まれたもので、Na22pが相当する。LグループはV層上面から掘り込まれたもので、Na23pが相当する。

これらのうち、AグループとLグループはV層上面から掘り込まれたものであり、同一のグループと見ることできる。また、同様にCグループ・Dグループ・FグループもV層下面～VI層上面から掘り込まれたものであり、同一のグループと見ることできる。



第47図 環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(1)



348(S18W6-3号土坑跡埋土上層)



349(S21W6-1号土坑跡最下層)



350(S21W6-1号土坑跡最下層)



351(S21W6-1号土坑跡最下層)



352(S21W6-1号土坑跡埋土最下層)



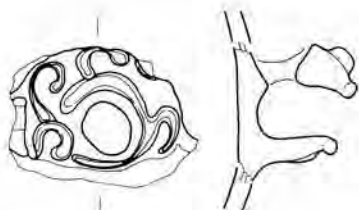
353(S21W6-1号土坑跡埋土最下層上)



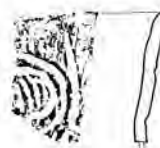
354(S21W6-1号土坑跡最下層下部)



355(S21W6-1号土坑跡埋土最下層)



356(S21W6-1号土坑跡埋土最下層)



357(S21W6-1号土坑跡埋土最下層)



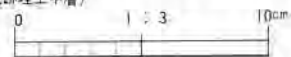
358(S21W6-1号土坑跡埋土下層)



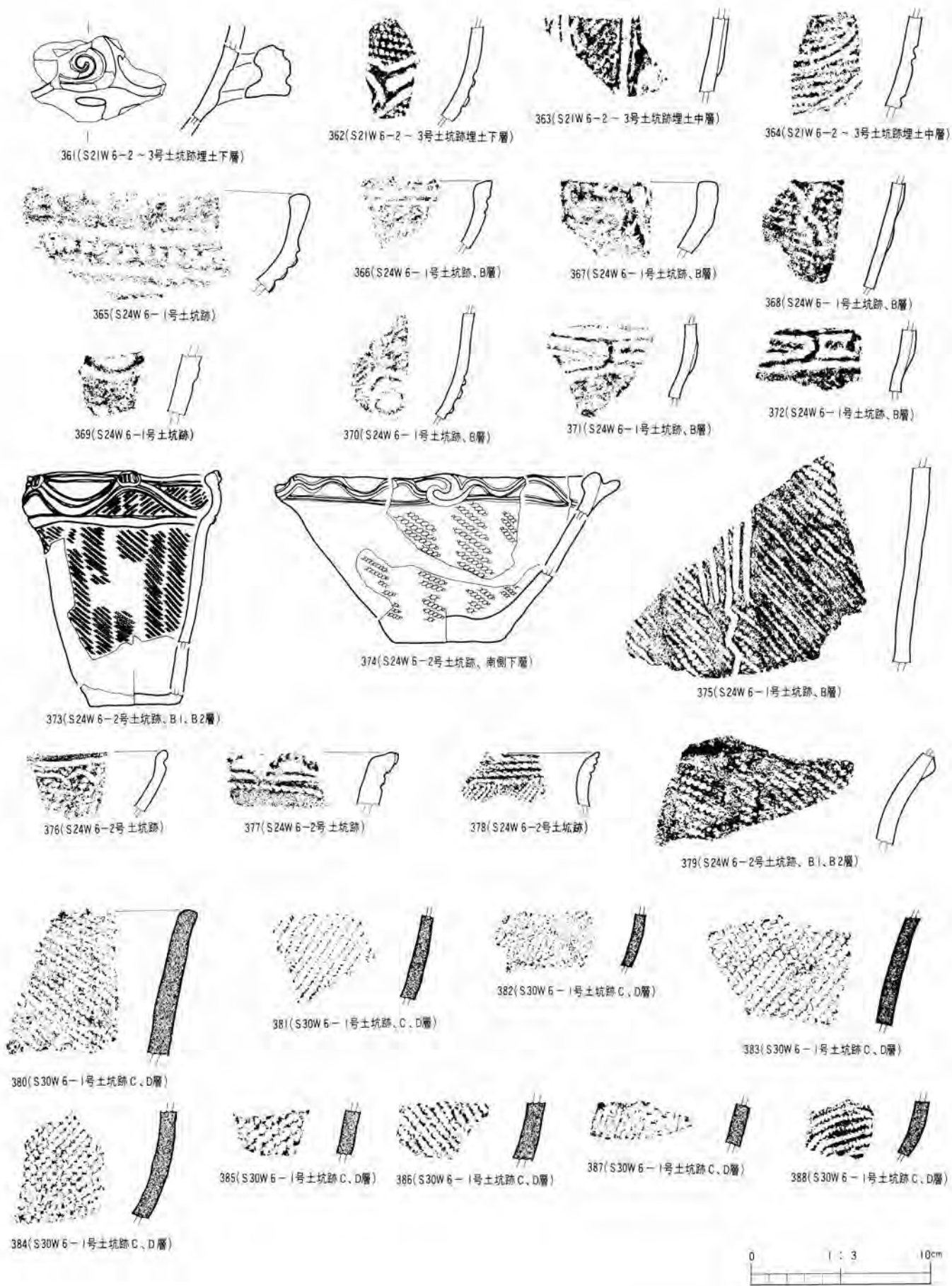
359(S21W6-1号土坑跡埋土中層)



360(S21W6-1号土坑跡埋土層)



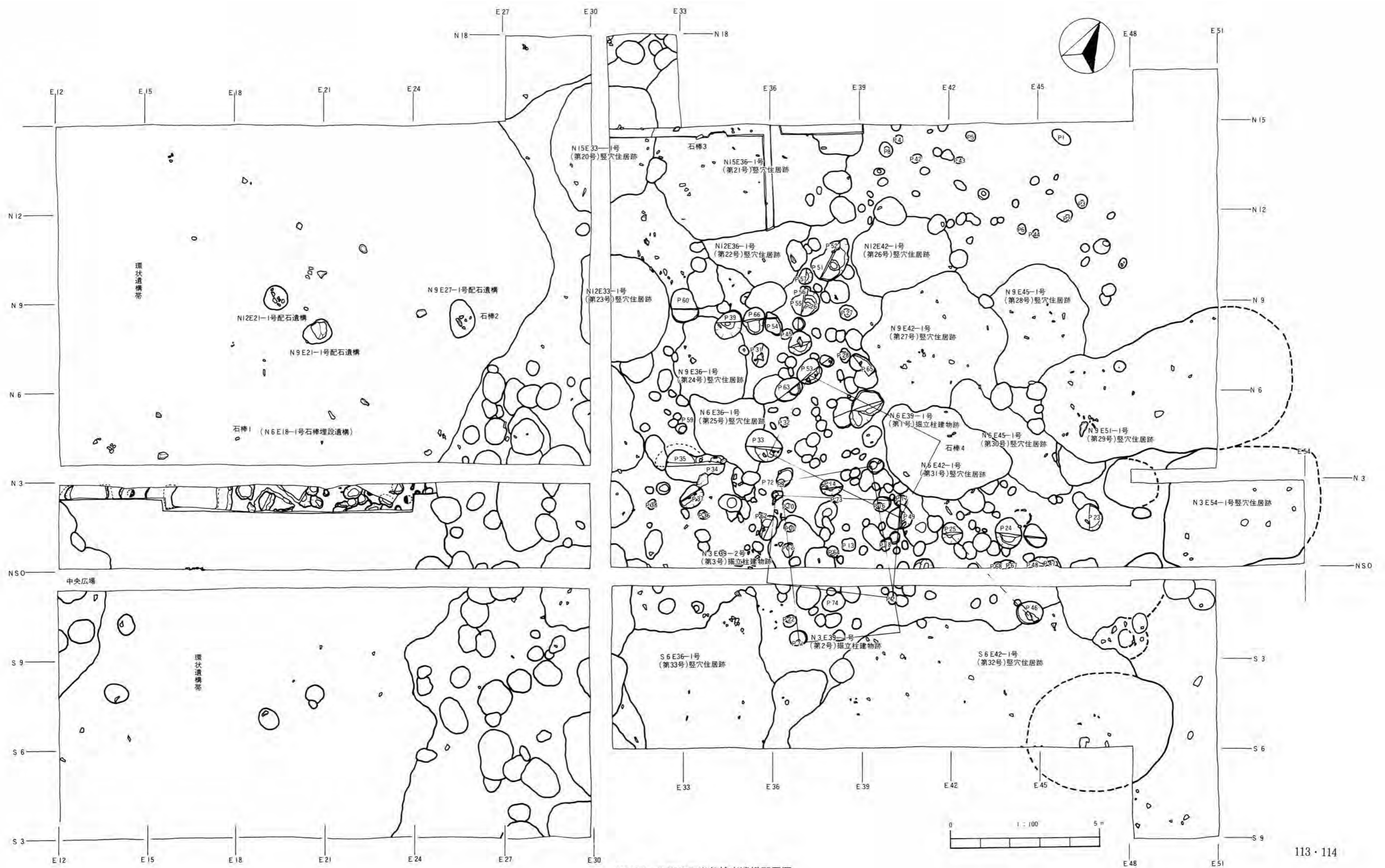
第48圖 環狀遺構帶内檢出土坑跡出土遺物(2)



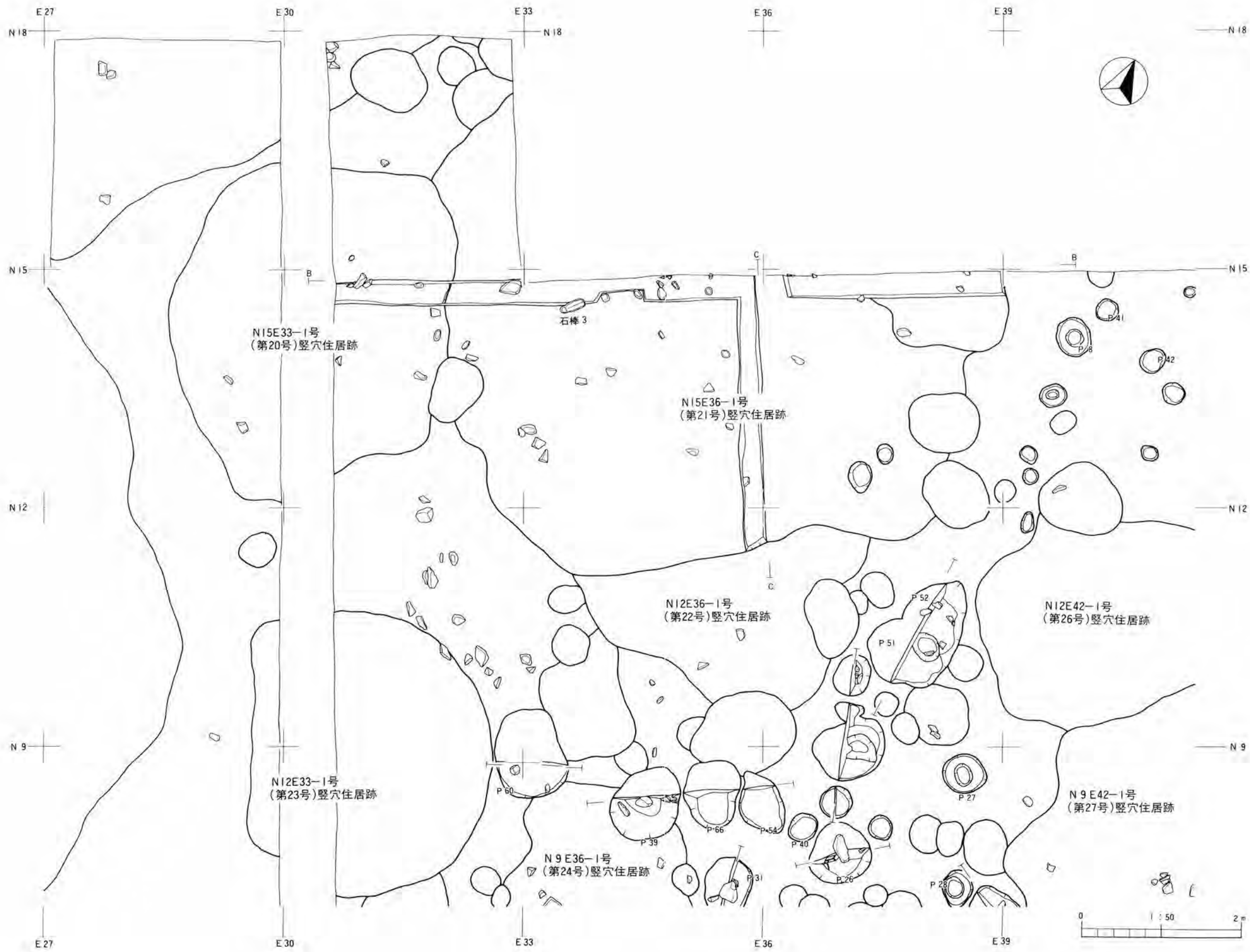
第49図 環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(3)



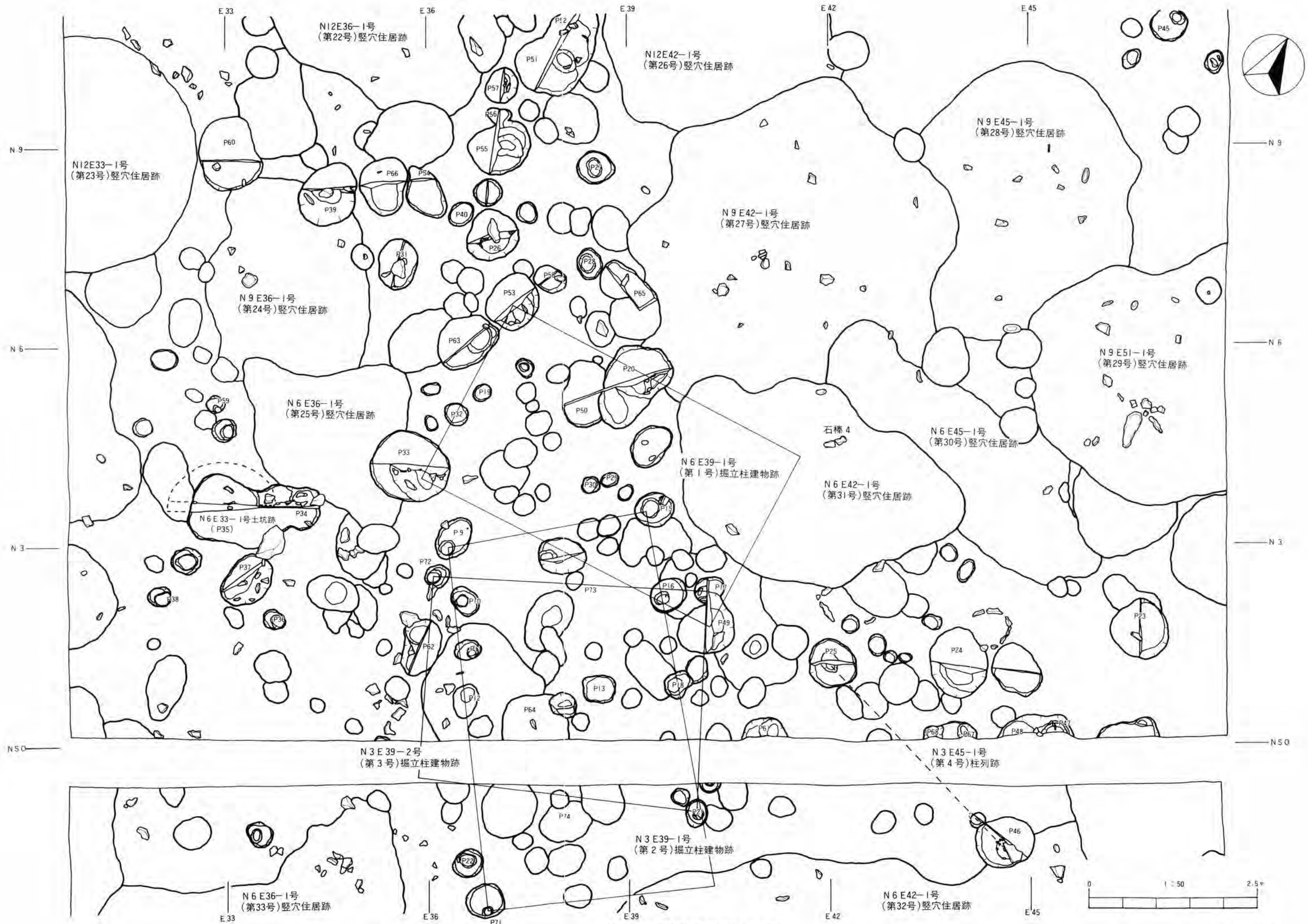
第50図 環状遺構帯内検出土坑跡出土遺物(4)



第51図 東集落西半部検出遺構配置図



第52図 東集落西半部検出遺構(1)



第53图 東集落西半部検出遺構(2)

d) 東集落跡

環状遺構帯の東西両側には居住域が形成されており、それぞれ「東集落」・「西集落」と呼称している。東集落はE24Lineから台地東端のE104Line付近まで広がっており、面積はおおよそ4,000㎡となっている。東集落の南東隅はやや傾斜があり、礫まじりの粘質土を地山とするが、他はほぼ平坦であり礫を含まない粘質土を地山としている。

東集落で検出した遺構は竪穴住居跡20棟、掘立柱建物跡3棟以上、土坑跡及び柱穴状ピット350基以上となる。遺構の多くはE57Line以西の西半部に集中する傾向がみられ、東半部はかなり少ない。これらの遺構はすべて地山面上で検出している。

西半部をもう少し詳細にみると環状遺構帯に接する西端部付近（おおよそE24～E33Line）には土坑跡と思われる遺構が集中しているが、これは環状遺構帯埋土中に形成された土坑群に連続するものであろう。

また、E33Line～E48Line、N12Line～S3Lineにかけて柱穴状のピットが密集しており、このなかで掘立柱建物跡3棟と柱列1基を確認した。同様にE39Line～E48Line、N9Line～N15Lineにかけても柱穴状ピットが集中するが掘立柱建物跡を確認できていない。

竪穴住居跡は土坑跡や柱穴状ピットと占地を異にし、4つのブロック状を呈している。各ブロック内では著しく重複するもののブロック間の重複は認められない。

東集落の遺構形跡時期は中期初頭の大木7a式期から平安時代にわたるが、主体となるのは中期後半の大木8b式期～大木10式期である。尚、未調査部分にも同程度の割合で竪穴住居跡が存在すると仮定すれば、その総数は90棟前後と予想される。

以下、検出した遺構の概要を記す。

i) 竪穴住居跡

N15E33-1号（第20号）竪穴住居跡（第52図）

N15E30・N18E30・N15E33・N18E33グリッドにかけて検出した。N15E36-1号竪穴住居跡を切る。サブトレンチでの精査のみに留めたため詳細は不明である。

平面形は不整の隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で4.4m、南西-北東方向で3.5m、深さ0.2mを計る。

トレンチ内の埋土は、A1層～A3層に細分される。いずれも黒褐色～暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。A1層はやや柔らかくしまりがなく、A2層・A3層はやや固く、しまり具合は中程度である。

出土遺物は少なく、59は地文を施す体部破片であり時期を特定できない。ただし、N15E36-1号竪穴住居跡を切ることから大木9式以降に伴うものと思われる。

第X群？

N15E36-1号（第21号）竪穴住居跡（第52図）

N15E33～N15E39・N12E33～N12E39グリッドにかけて検出した。N15E33-1号竪穴住居跡に切られ、N12E36-1号竪穴住居跡を切る。サブトレンチでの精査のみに留めたため詳細は不明である。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は北西-南東方向で6.0m、南西-北東方向で6.5m、深さ

0.2mを計る。

トレンチ内の埋土は、A層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含むが、A1層はやや明るい。しまり具合は両層ともに中程度である。

B層は褐色粘土質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや固く、しまりは中程度である。

出土遺物第64図(594~603)

594~597は磨消技法によるもので、縦位の区画文を施す。594は沈線により、595は隆起線により渦巻文を施す。これらはいずれも大木9式に伴う。

598・600~602は隆起線により渦巻文を施すもので大木8b式に伴う。

599は地文のみを施すものの、603は横位の沈線を施すものである。

このほか石棒(816)が出土しており、これについては後述する。

第X群

N12E36-1号(第22号) 竪穴住居跡(第52図)

N12E36・N12E39グリッドにかけて検出した。N12E36-1号竪穴住居跡に切られ、また、検出のみに留めたために詳細は不明である。規模は北西-南東方向で3.5m以上、南西-北東方向で2.0m以上である。出土遺物はない。

N12E33-1号(第23号) 竪穴住居跡(第52図)

N12E30・N9E30・N12E33・N9E30グリッドにかけて検出した。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で3.5m、南西-北東方向で3.0m計る。

出土遺物は極めて少なく図示できるものはない。

N9E36-1号(第24号) 竪穴住居跡(第53図)

N9E33・N9E36グリッドにかけて検出した。N9E36-1号竪穴住居跡に切られ、検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で2.8m、南西-北東方向で2.5mを計る。

出土遺物は極めて少なく図示できるものはない。

N6E36-1号(第25号) 竪穴住居跡(第53図)

N6E36グリッドに検出した。N9E36-1号竪穴住居跡に切る。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で2.5m、南西-北東方向で2.6mを計る。

出土遺物は621が磨消技法によるもので大木9式に伴うと思われる。622は隆沈線により施文されもので大木8b式に伴う。

第X群

N 12 E 42-1号(第26号)竪穴住居跡 (第52図)

N 12 E 39～N 12 E 45グリッドにかけて検出した。N 9 E 42-1号竪穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形を呈し、規模は北西-南東方向で2.7m、南西-北東方向で3.3mを計る。

出土遺物は610が横位の平行沈線文を施すもので大木8 b式に伴うと思われる。

第IX群

N 9 E 42-1号(第27号)竪穴住居跡 (第53図)

N 6 E 42～N 12 E 42、N 6 E 45～N 12 E 45グリッドにかけて検出した。N 12 E 42-1号竪穴住居跡・N 9 E 45-1号竪穴住居跡を切り、N 6 E 42-1号竪穴住居跡・N 6 E 45-1号竪穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整形を呈し、規模は北西-南東方向で4.7m、南西-北東方向で5.0mを計る。出土遺物は604が沈線による磨消技法により施文されるもので、605が隆起線による磨消技法により施文されるものである。これらは大木10式に伴う。

第XI群

N 9 E 45-1号(第28号)竪穴住居跡 (第53図)

N 6 E 45～N 12 E 45、N 9 E 48～N 12 E 48グリッドにかけて検出した。N 9 E 42-1号竪穴住居跡・N 9 E 51-1号竪穴住居跡に切られる。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整楕円形(?)を呈し、規模は北西-南東方向で4.0m、南西-北東方向で3.5mを計る。

出土遺物は78が隆沈線による渦巻文を施すもので大木8 b式に伴う。

第IX群

N 9 E 51-1号(第29号)竪穴住居跡 (第53図)

N 6 E 48、N 9 E 48N 9 E 51グリッドにかけて検出した。N 6 E 45-1号竪穴住居跡・N 9 E 45-1号竪穴住居跡を切る。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整楕円形を呈し、規模は北西-南東方向で3.8m、南西-北東方向で5.8m以上を計る。

出土遺物 (589～592)

589は底部を欠く浅鉢で、口縁部が強く内湾している。口縁部文様帯には横位1条の隆起線を施し、この上下に円形の連続刺突部を施す。体部文様帯には隆起線による波頭状のモチーフを6単位施し、この内部をL-R単節斜縄文にて充填している。また、隆起線に沿った部分は磨消されている。この土器は大木10式に伴う。

第XI群

590・591もほぼ同様なものであり、55と同一個体片である可能性が大きい。

592は縄文のみを施す浅鉢である。

N 6 E 45-1号(第30号)竪穴住居跡 (第53図)

N 3 E 45～N 6 E 45、N 3 E 48～N 6 E 48グリッドにかけて検出した。N 9 E 42-1号竪穴住居跡を切り、N 9 E 51-1号竪穴住居跡・N 6 E 42-1号竪穴住居跡に切られる。検出のみに

留めたために詳細は不明であるが、平面形が他の竪穴住居跡と著しく異なり竪穴住居跡ではない可能性も有る。

平面形は長楕円形を呈し、規模は東西5.3m、南北1.8mを計る。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

N 6 E 42-1号(第31号)竪穴住居跡 (第53図)

N 3 E 42・N 6 E 42・N 3 E 45・N 6 E 45グリッドにかけて検出した。N 9 E 42-1号竪穴住居跡・N 6 E 45-1号竪穴住居を切る。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整形を呈し、規模は北西-南東方向で3.0m、南西-北東方向で4.2mを計る。出土遺物は石棒(815)があるが後述する。

S 6 E 42-1号(第32号)竪穴住居跡 (第51図)

S 3 E 39~S 3 E 48、S 6 E 39~S 6 E 51グリッドにかけて検出した。かなり大規模な竪穴住居跡であるが、検出面での重複は確認できなかったのでひとつの竪穴住居跡として扱うこととする。

平面形は不明であり、規模は北西-南東方向で4.9m以上、南西-北東方向で13mを計る。

出土遺物(625~635)

第X群

625・634・635は磨消技法によるもので、大木9式に伴うと思われる。他のものはいずれも隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

S 6 E 36-1号(第33号)竪穴住居跡 (第51図)

S 3 E 33~S 3 E 36、S 6 E 33~S 6 E 36グリッドにかけて検出した。検出のみに留めたために詳細は不明である。

平面形は不整な隅丸方形(?)を呈し、規模は北西-南東方向で4.3m、南西-北東方向で4.4mを計る。

出土遺物(636~642)

第X群

637~641はいずれも磨消技法によるもので、モチーフは一樣ではないがおおむね大木9式を主体とするようである。

642はミニチュア土器の底部付近である。

N 3 E 54-1号竪穴住居跡 (第51図)

N 3 E 51グリッドからN 3 E 54グリッドにかけて、地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の南北方向で約4.0m、東西方向で4.8m以上を計る。N 9 E 51-1号竪穴住居跡と重複するが新旧関係は不明である。調査区内の表土中や検出面からは大木8b式~大木9式に伴う土器片が出土している。N 3 E 51グリッドから大木9式土器片が、N 3 E 54グリッドから大木8b式破片が出土しているようである(585~588)。

第X群

N15E75—1号竪穴住居跡（第10図）

N15E75グリッドに検出した。東西2mを検出したのみで、平面形、規模は不明である。

出土遺物は検出面から第60図515～517・521が出土している。521はキャリパー形深鉢で、口縁部に把手を有するが欠落している。口縁部文様帯には隆沈線により有棘渦卷文を施すが開放的である。体部文様体には平行沈線状により大渦卷文などを施すがやはり開放的である。515・517も同様にキャリパー形深鉢であり隆沈線による施文などがみられる。516は沈線上に連続刺突文を施す。これらは大木8b式に伴うがやや古手である。

第Ⅸ群

N15E84—1号竪穴住居跡（第10図）

N15E78～E84グリッドにかけて検出した竪穴住居跡と思われる遺構である。1辺が3.8～3.9mほどの隅丸方形を呈するものと思われる。

出土遺物はわずかである。第60図518は沈線により渦卷文を施す。このほかに木葉形で肉厚の石鏃が出土している。

N15E87—1号竪穴住居跡（第10図）

N15E87グリッドに検出した竪穴住居跡と思われる遺構である。平面形、規模ともに不明である。

出土遺物はわずかである。第60図519・520はいずれも隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

第Ⅸ群

N21E93—1号竪穴住居跡（第55図）

N21E93グリッドを中心に検出した遺構で、竪穴住居跡と思われる。平面形は不整楕円形を呈するものと思われる。調査座標の南北方向でおよそ2.6mほどを計り、やや小形である。埋土中に粉碎された貝殻や獣骨片などを含む。検出面から遺物がまとまって出土している。第59図497は体部上半が強く膨らむ深鉢で、口縁部上端の隆帯上に連続刺突文を施す。また、この隆帯上には粘土紐の貼付けによる円形文を4単位施すが、このうち1単位のみが大きく、小突起状となり、以下2条の隆帯が垂下する。他の円形文の下部には八字形の隆帯が垂下する。地文はL-R単節斜縄文を横方向に回転する。

493・495・496は497同様の連続刺突文を施す隆帯を張り付ける。495の地文には綾絡文を施文している。494は口縁部の隆帯上にも縄文を施すものである。498は波頂部破片、499はノ字形の隆帯を施すもの、505は沈線文を施すものである。503・504は網目状撚糸文を地文とするものである。他のものは地文のみであるが、501・506などは口縁部を折り返している。これらの遺物はいずれも大木7a式に伴う。

第Ⅵ群

第61図525は削器と思われる。先端部が尖り、尖頭器様でもあるが薄い。

N15E93—1号竪穴住居跡（第55図）

N15E93グリッドおよびN12E98グリッドにて検出した遺構で、竪穴住居跡と思われる。径

5.2mほどの不整形円形を呈するものと思われる。N15E98-2号炉跡に切られる。

検出面から第60図510~514が出土している。510は広口の壺形土器で、体部文様帯に磨消技法によりU字形の縄文区画を施す。また、これの間には円形の縄文区画と弧状の隆起線を交互に配す。口縁部は無文帯となり、体部との境界に3条の隆起線をめぐらす。大木9式に伴う。

511・512は隆沈線により施文され、大木8b式に伴う。513は胎土に植物繊維を含むもので、前期前半に伴う。514は体部下半~底部の破片である。

N15E93-2号炉跡 (第55図)

N18E93グリッドおよびN15E93グリッドにて検出した。N15E93-1号竪穴住居跡より新しい石囲炉で、東辺は炉石が欠落している。抜きとり穴は確認できなかった。南北0.5m、東西0.3mを計る。

N24E93-1号竪穴住居跡 (第55図)

N24E93グリッドを中心に検出した古代の竪穴住居跡である。埋土が他の遺構に比して極端に暗く遺構か谷などの自然地形か判断できなかったため、掘り下げることとした。

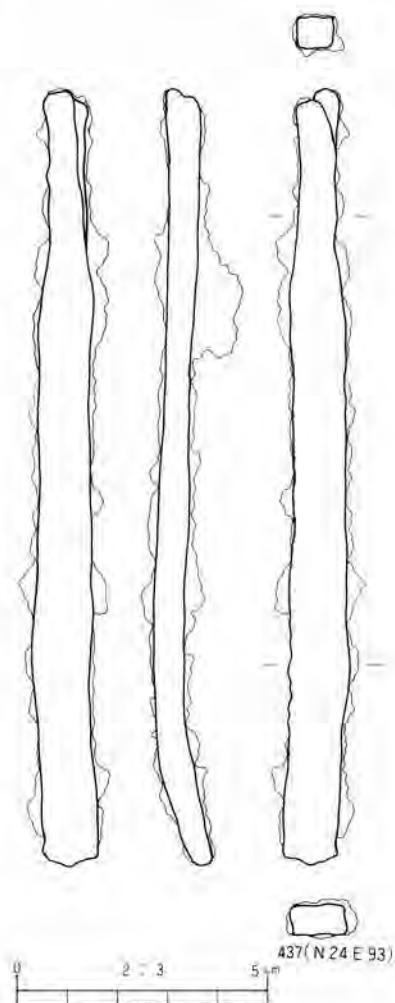
規模は、南西壁が4.7mほどであり隅丸方形を呈するようである。壁はほぼ直壁で、深さ0.55mほどを計る。

埋土はA層~C層に大別される。A層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかくしまりがいい。縄文時代中期の土器片を多量に含む。B層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊をやや多く含む。やや柔らかくしまりがいい。A層との層相面付近から第54図の鉄器が出土している。また、縄文時代中期の土器片を含むがA層ほど多くはない。C層は壁際だけに堆積する層で、やや明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊などを含む。固さ、しまりとも中程度である。

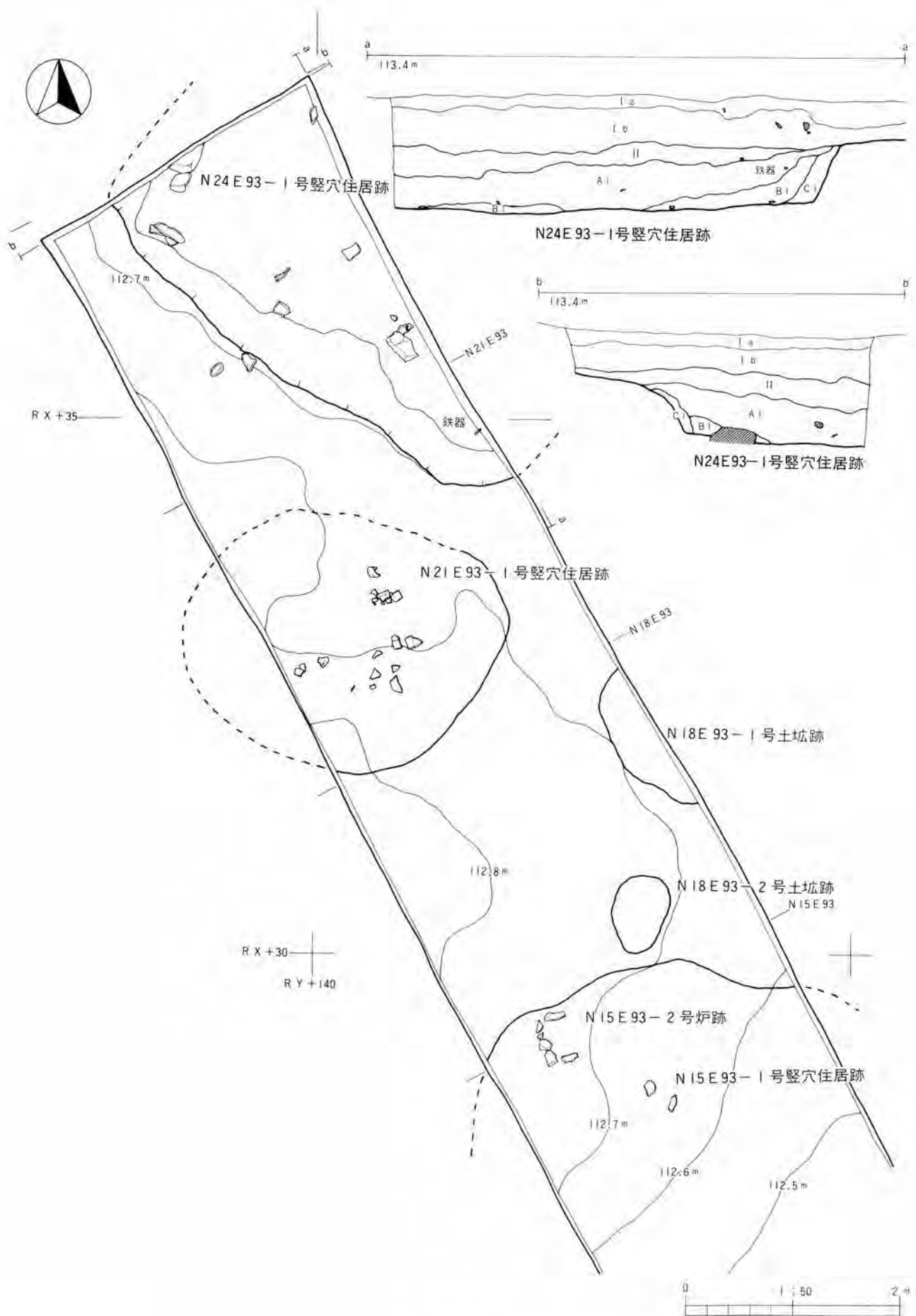
床は、平坦でやや固い。床面からC1層にかけてやや大きな亜角礫が出土している。柱穴、かまどは調査区にはない。

遺物はA層・B層から多くの縄文土器片が出土しているものの遺構に共伴するものではない。前述した鉄器のほか、埋土中から土師器がわずかに出土している。

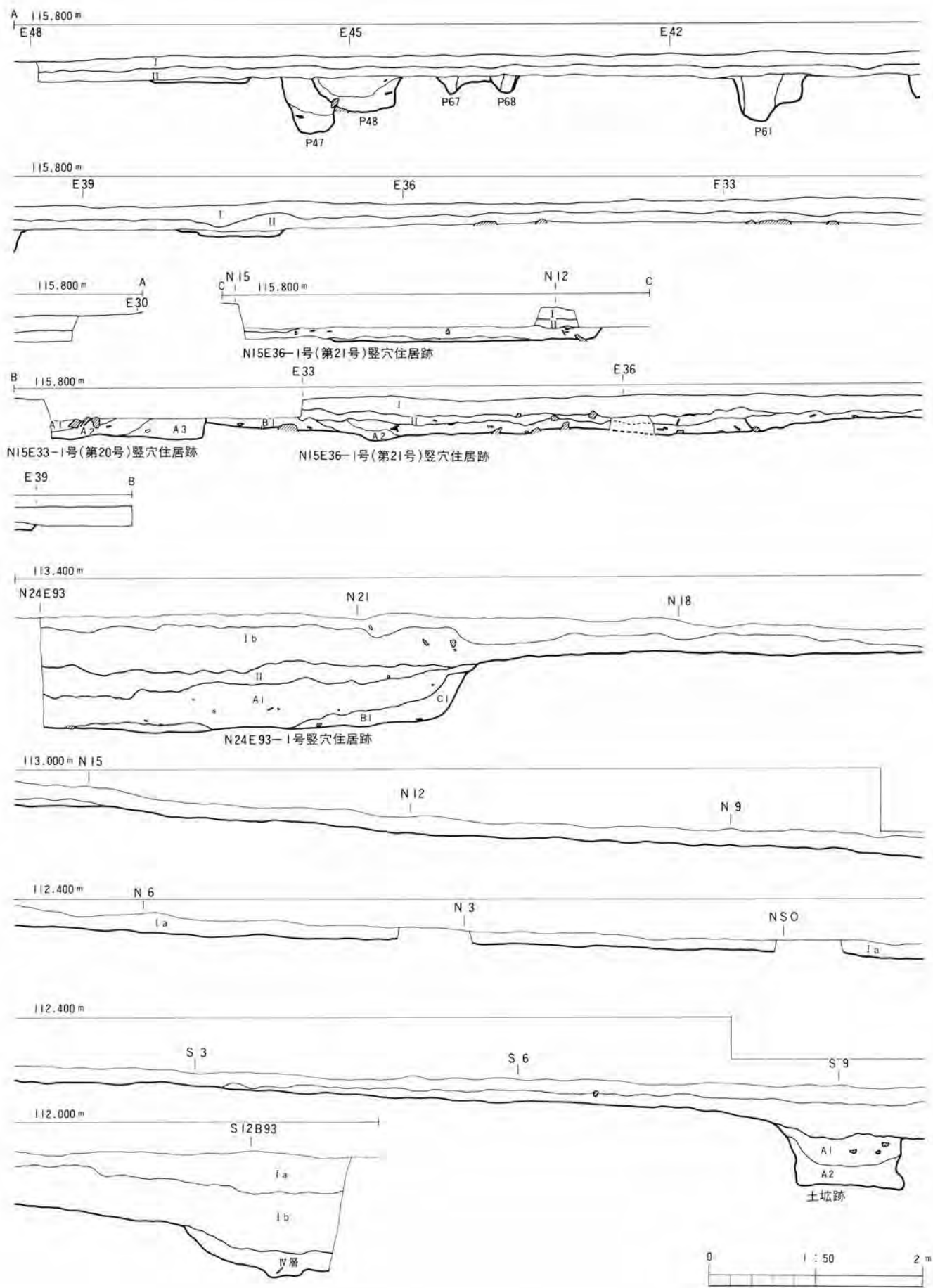
第54図437は棒状(板状)の鉄器で、一方の端部をやや細くし、茎部のように作り出すが、刃部も



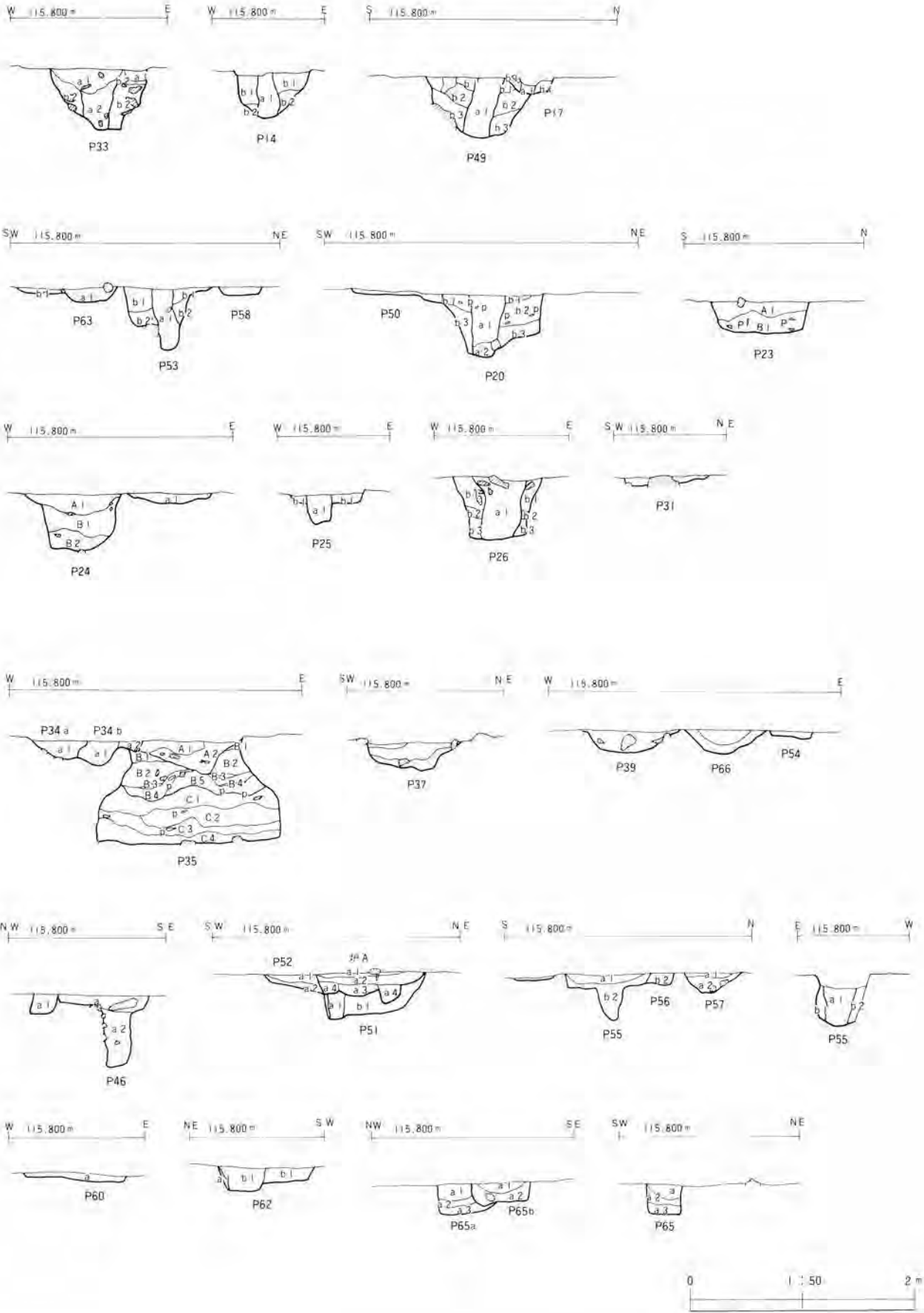
第54図 東集落出土遺物(1)



第55图 東集落東半部検出遺構



第56图 東集落土層断面图(1)



第57图 東集落土層断面图(2)

無く用途不明である。

第58図483は土師器甕で、口縁部が強く外反し、体部が強く張り出す。口縁部の内外を横ナデにより調整している。439～442は土師器甕の体部破片で、いずれも外面をヘラナデにより調整している。

第58図～第59図443～492はA層・B層から出土したものである。443～470・474～490は隆沈線文や沈線文により渦巻文や懸垂文を施すもので、太木8b式に伴う。

471は隆帯状に刻目(刺突)を有するもの、472は沈線文を網目状に施すもの、473、491は原体圧痕文を施すもので、いずれも中期初頭に伴うものか。492はやや細い隆帯状に原体圧痕文を施し、円筒上層d式に伴う。

第61図522は石槍である。524は石鏃の基部破片である。526と528石匙であるが、526は横形、528は縦形である。528は両面ともにピッチが付着している。527は削器で側縁を刃部とする。

529は磨製石斧であるが器面に敲打痕を残す。

ii) 掘立柱建物跡・柱穴跡

N 6 E 39-1号(第1号)掘立柱建物跡(第53図)

N 3 E 39・N 3 E 42・N 6 E 36～N 6 E 42・N 9 E 39グリッドにかけて検出した。

ほぼ東西棟で、主軸方向はW2°Sとなる。桁行は2間で、南側柱筋はP33とP14が2.2m、P14とP47が2.65m、北側柱筋はP53とP20が2.4mで、北東の妻柱はN 6 E 42-1号(第31号)竪穴住居跡に切られており検出できなかった。梁間は1間でP33とP53が2.95mとなる。

建物跡内部には炉跡等の付属施設は確認されていない。

柱穴は、いずれも柱痕跡を確認している。

P33はN 6 E 36-1号(第25号)竪穴住居跡を切る。開口部径0.86m、深さ0.55m、柱痕跡径0.25mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土粒や炭化物粒を微量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。a2層は柱痕跡で、掘り方(b層)より暗い褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。b層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固く、しまりは中程度である。

P14は開口部径0.7m、深さ0.43m、柱痕跡径0.2mとなる。埋土はa1層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、やや暗い暗褐色土を含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。b1層のほうがやや明るい。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

P49はP17に切られる。開口部径0.97m、深さ0.55m、柱痕跡径0.25mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や炭化物粒を微量含む。やや固く、しまりは中程度である。b層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や黄褐色土塊などをやや多く含むが、b3層はやや暗い。いずれも固く、しまりは中程度である。

P53は開口部径0.8m、深さ0.53m、柱痕跡径0.2mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b層も暗褐色粘質土を基本土とするが、褐色土塊などをやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。b1層はやや明るい。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

P20はN9E42-1号(第27号) 竪穴住居跡・P50を切る。開口部径0.9m、深さ0.55m、柱痕跡径0.32mとなる。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含むほか、炭化物粒を少量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。a2層は褐色粘質土を基本土とする地山ブロックである。b層はb1層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や炭化物粒を少量含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。b2層・b3層は褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を多く含むが、特にb3層に多い。両層ともしまりは中程度であるが、b3層がやや多い。

出土遺物は550がP14から出土したもので磨消技法により施文される。552~554はP20から出土したもので、553は磨消技法によるが、552は隆起線上に連続刺突文を施す。554は隆沈線により施文される。553はP49から出土したもので、隆沈線により施文される。583・584はP53から出土したもので、584は平行沈線間に円形の連続刺突文を施す。

これらの遺物はやや時間幅があるが、550・553・584が最も新しいもので大木10式に伴うと思われる。従って建物跡もこの時期に伴うものであると思われる。

第Ⅺ群

N3E39-1号(第2号) 掘立柱建物跡(第53図)

N3E39~N6E39・N3E42~N6E42グリッドにかけて検出した。

南北棟で、主軸方向はN35°Wとなる。桁行は2間で、南側柱筋はP9とP12が2.2m、P12とP71が3.25m、東側柱筋はP15とP18が2.66mで、南東の妻柱はS6E42-1号(第32号) 竪穴住居跡と重複し確認できなかった。梁間は1間で、P9とP15が3.03mとなる。

建物跡内部には炉跡等の付属施設は確認されていない。

柱穴は、N6E39-1号(第1号) 掘立柱建物跡に比して著しく小形であるもののいずれも柱痕跡を確認している。P12のみ断割っており、他のものは一段下げた状態で柱痕跡を確認した。P12は開口部径(長軸)0.55m、深さ0.2m、柱痕跡径0.22mを計る。埋土はa1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。b1層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

他のものは開口部径0.6~0.4m、柱痕跡径0.25~0.15m程度である。

出土遺物は極めて少なく図示できるものはない。

N3E39-2号(第3号) 掘立柱建物跡(第53図)

N3E39・N3E42・N3E42グリッドにかけて検出したが、一隅の柱穴が未確認であるため不確実ではあるが建物跡としておく。

東西棟で、主軸方向はW26°Sとなる。桁行は2間で、北側柱筋はP72とP73が2.1m、P73とP17が2.0m、南側柱筋はP74とP21が2.1mとなる。梁間は1間で、P17とP21が3.3mとなる。

建物跡内部には炉跡等の付属施設は確認されていない。

柱穴は、N6E39-1号(第1号) 掘立柱建物跡に比して著しく小形でありP72・P17・P21にて柱痕跡を確認している。断割ったのはP17のみである。P17はN6E39-1号(第1号) 掘立柱建物跡のP49を切る。開口部径0.45m、深さ0.1m、柱痕跡径0.15mである。埋土はa

1層がやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、やや暗い暗褐色土塊を含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b 1層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。

他のものは開口部径0.4～0.3m、柱痕跡径0.2～0.15mである。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

S 6 E 42-1号(第4号)柱列(?) (第14図)

N 3 E 42・N 3 E 45・N 3 E 45にかけて検出した。P 25とP 46の2つの柱穴に構造上の類似性が認められたためにこれらを一括しておく。しかし、周辺に同様な柱穴が認められず、建物跡として復元できなかったので柱列として仮称しておく。

P 25は掘り方が浅く柱痕跡が深い2段掘りになっており、開口部径0.7m、掘り方の深0.13m、柱痕跡の深さ0.27m、柱痕跡径0.23mとなる。埋土はa 1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。b 1層は褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。

P 46はP 25の東3.7mに位置し、P 25に類似した断面形を呈す、開口部径0.8m、掘り方の深さ0.13m、柱痕跡の深さ0.64m、柱痕跡径0.25mとなる。埋土はa 1層が暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊をやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。a 2層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含むほか、炭化物粒を少量含む。固さ、しまりともに中程度である。

出土遺物は極めて少なく図示できるものは無い。

柱穴跡(第12図)

今回の調査区東半部つまり東集落西端部には柱穴跡や土壙跡と思われるピット類が多数存在している。このうち建物跡を復元できたものは前述したとおりであるが、これら以外にも明らかに柱痕跡を有するものが存在する。例えばP 26はやや大形のもので、N 6 E 39-1号(第1号)掘立柱建物跡に匹敵する規模のものである。他のものはやや小形で、N 3 E 39-1号(第2次号)掘立柱建物跡・N 3 E 39-2号(第3号)掘立柱建物跡クラスのものである。

柱痕跡を有するものは平面図に図示してあるが、時間的制約によりすべてのピット類を精査したわけではないので、柱穴の実数は更に増すものと思われる。

iii)土坑跡

やや大形のピット類のうち明らかに柱痕跡を持たないものがある。貯蔵穴に相当するものであろう。

N 6 E 33-1号土坑跡(P 35)(第53図)

N 6 E 33、N 6 E 36グリッドにかけて検出した。P 34・P 37に切られる。断面形はフラスコ形を呈し、開口部径1.0m、頸部径1.0m、底面径1.63m、深さ0.92mとなる。

埋土はA層～C層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多

く含む。固さ、しまりともに中程度である。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含む。固さ、しまりともに中程度である。B3層は炭化物粒をやや多く含む。また、B4層とB5層は焼土層であるが、この地点で焼成を受けたものではなく二次的に堆積した層である。

C層も褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを多く含むがB層に比べて著しく固い。

また、やや暗い層と明るい層が互層になり堆積している。ややしまりが無い。

出土遺物 (531~547)

C2層~C4層にかけてややまとまって遺物が出土している。第62図中埋土遺物としたものはすべてこれらの層から出土したものである。また、図示した以外に自然礫(扁平円礫)も多数出土している。

531・535・546はキャリバー形深鉢で、口縁部文様帯に隆沈線による渦巻文と横位楕円形区画文を施す。535は地文として縄文を施すが、531は縦位の刻目を充填している。頸部は無文帯とし、体部文様帯には大渦巻文を施すが、他の施文要素との連結が集み閉鎖性の強い施文となる。

532~534は体部に弱い膨らみを有する深鉢である。532は体部中央に上下に貫通孔を有する小突起を2単位有する。体部文様帯は隆沈線により上半部に大渦巻文・下半部に小渦巻文と懸垂文を施すが、施文要素の連結が著しく縦位の区画文を作出す閉鎖的な施文となる。

533・534は平行沈線により懸垂文を施すが、やはり施文要素間の連結が著しく縦位の区画文を作出す。尚、沈線間は磨消されていない。

536・537は口縁部の内湾する深鉢で、隆沈線あるいは隆起線により施文される。

538~545は隆沈線により施文されるので、532に類似するであろう。

547は平行沈線により施文されるが、やはり沈線間を磨消さない。533・534に類似するものであろう。

以上、これらの遺物は型式的にもまとまりを有するもので、大木8b式の最終段階に伴う。

第IX群

P23 (第53図)

N3E48グリッドに検出したもので土坑跡と柱穴跡の両者の可能性が考えられる。開口部径0.9m、深さ0.3mで、壁はやや外斜している。

埋土はA層とB層に大別される。A1層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。やや柔らかく、ややしまりがない。B1層は褐色粘質土を基本土とし、黄褐色土塊をやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。いずれの層からも土器片が少量出土している。

出土遺物 (555~562)

555は縦位2条の隆起線上に連続刺突文を施すものである。556・557・560は磨消技法により区画文を施すものである。これらは、大木9式~大木10式に伴うものであろう。

第X群~第XI群

他のものはこれらよりやや古い段階のものである。。

P24 (第14図)

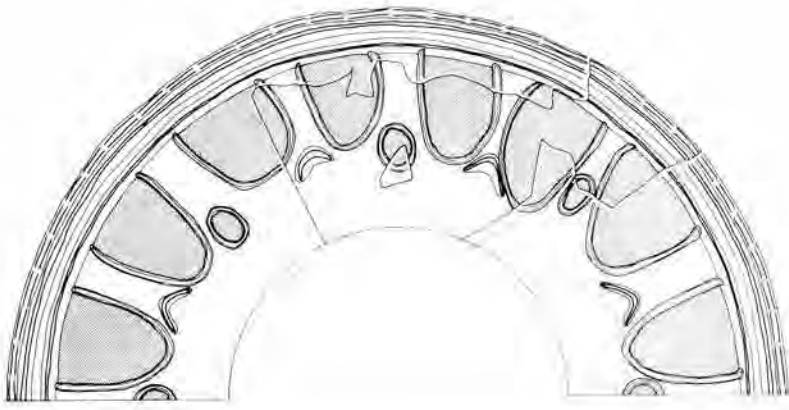
N3E45グリッドに検出したもので土坑跡と柱穴跡の両者の可能性が考えられる。N3E45-1号跡を切る。開口部径1.03m、深さ0.5mで、壁はゆるやかに外斜しながら立上り、開口



第58図 東集落出土遺物(2)



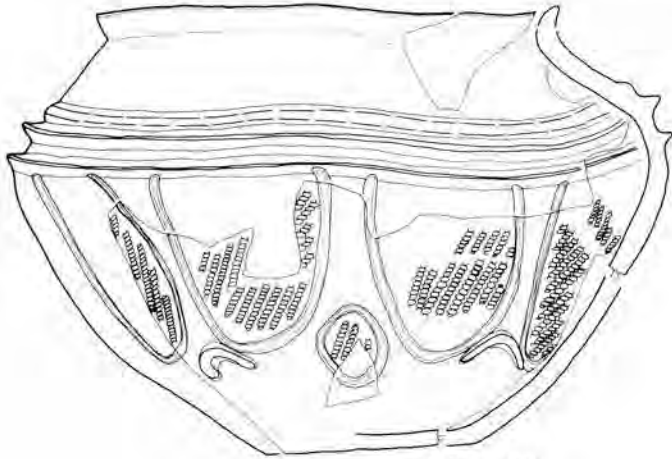
第59図 東集落出土遺物(3)



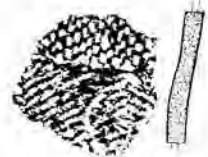
511 (N 18 E 93)



512 (N 15 E 93)



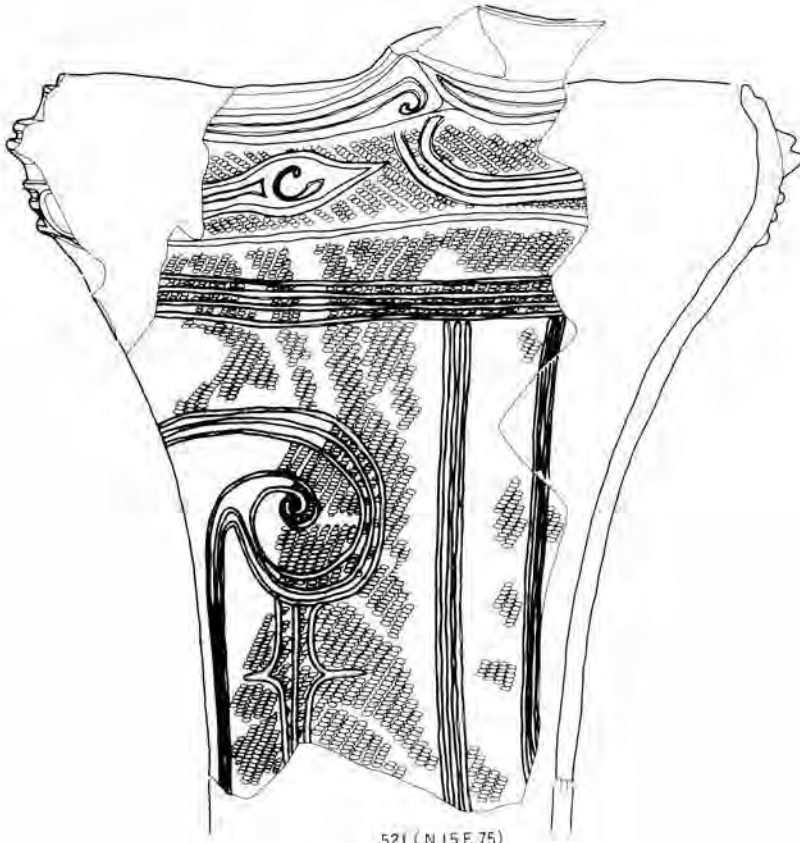
510 (N 12 E 93)



513 (N 15 E 93)



514 (N 15 E 93)



521 (N 15 E 75)



515 (N 15 E 75)



516 (N 15 E 75)



517 (N 15 E 75)



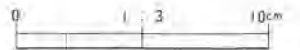
518 (N 15 E 84)



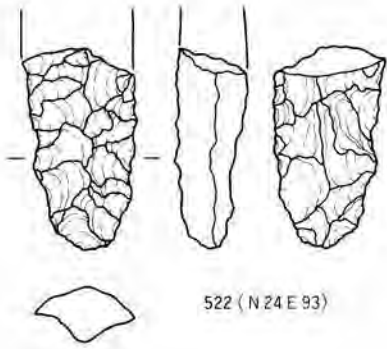
519 (N 15 E 87)



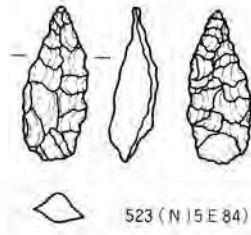
520 (N 15 E 87)



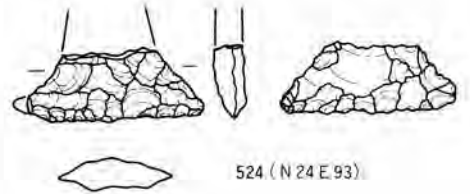
第60図 東集落出土遺物(4)



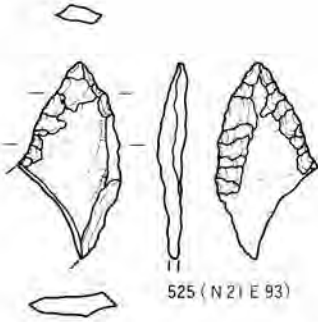
522 (N 24 E 93)



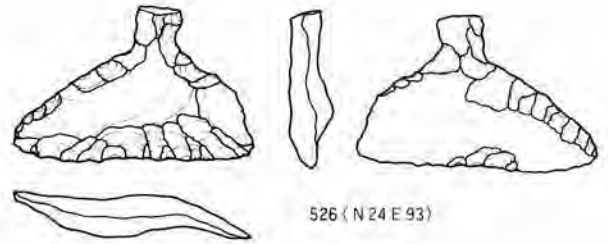
523 (N 15 E 84)



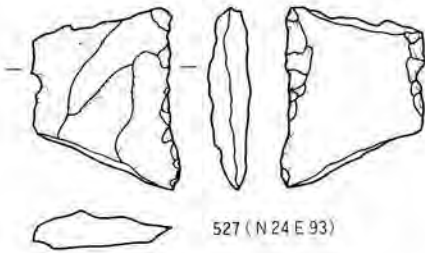
524 (N 24 E 93)



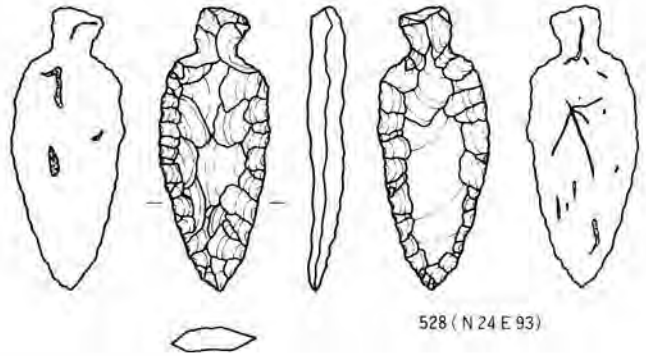
525 (N 21 E 93)



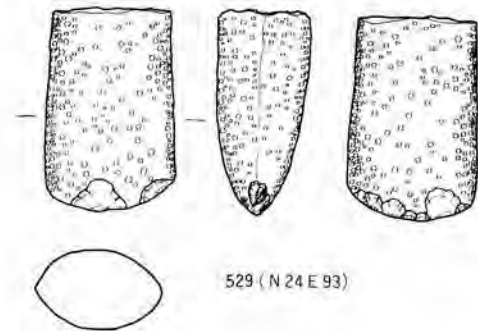
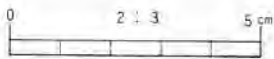
526 (N 24 E 93)



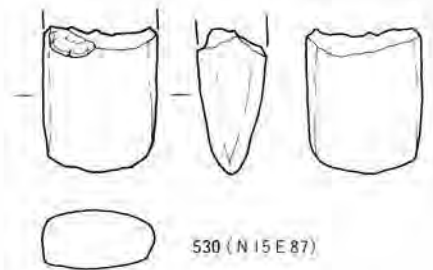
527 (N 24 E 93)



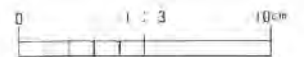
528 (N 24 E 93)



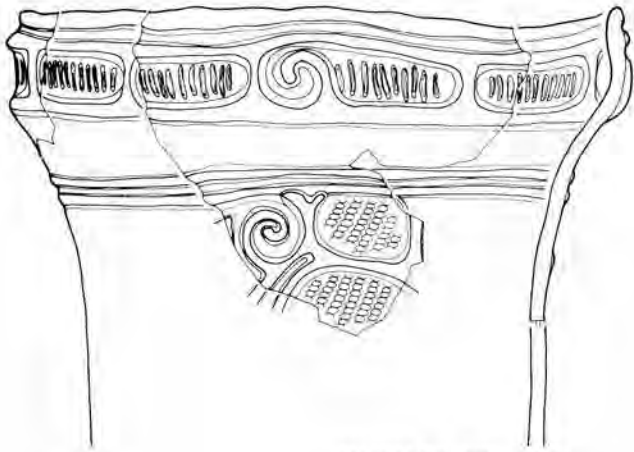
529 (N 24 E 93)



530 (N 15 E 87)



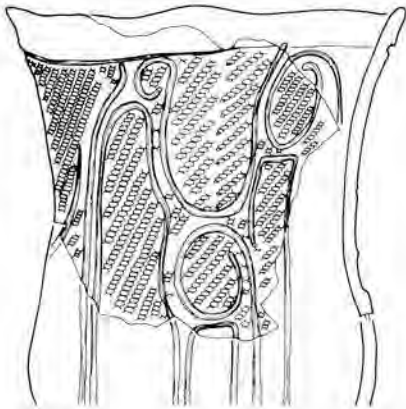
第61図 東集落出土遺物(5)



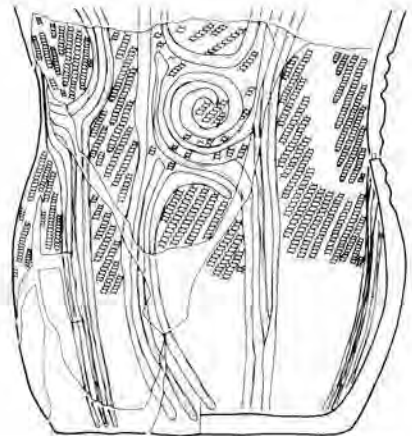
531 (N6E36G, P35-C 2層)



532 (N6E36G, P35-C 2層)



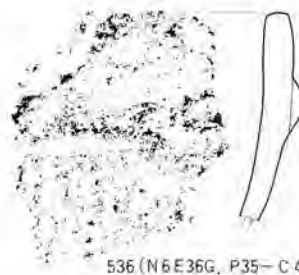
533 (N6E36G, P35埋土)



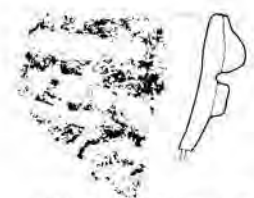
534 (N6E36G, P35埋土)



535 (N6E36G, P35埋土)



536 (N6E36G, P35-C 4層)



537 (N6E36G, P35-C 4層)



538 (N6E36G, P35-C 4層)



539 (N6E36G, P35埋土)



540 (N6E36G, P36埋土)



541 (N6E36G, P35埋土)



542 (N6E36G, P35埋土)



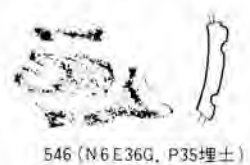
543 (N6E36G, P35埋土)



544 (N6E36G, P35埋土)



545 (N6E36G, P35埋土)



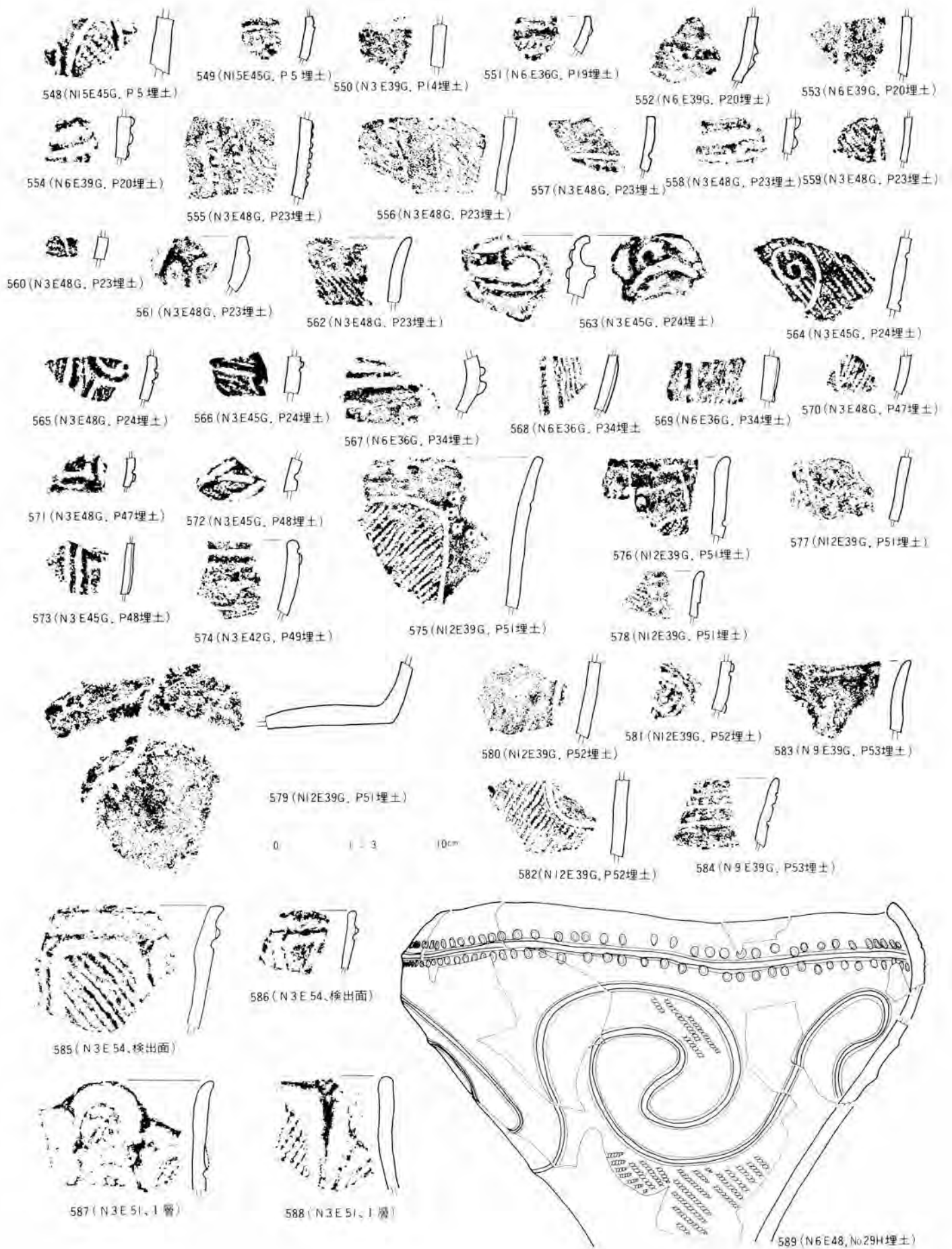
546 (N6E36G, P35埋土)



547 (N6E36G, P35埋土)



第62図 東集落出土遺物(6)



第63図 東集落出土遺物(7)



第64図 東集落出土遺物(8)



第65図 東集落出土遺物(9)

部付近で強く立上がる。

埋土はA層とB層に大別される。A層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や黄褐色土塊を含む。固さは中程度で、ややしまりが無い。

B層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含むが、B2層はやや混入量が少ない。固さ、しまりともに中程度である。

出土遺物（563～566）

564は沈線により渦巻文を施すものである。565・566は隆沈線により渦巻文等を施すものである。これらは、大木8b式に伴う。

第IX群

遺構外出土遺物（第64図～第70図）

粗掘り～遺構検出作業中に出土した遺物である。検出作業中に環状遺構帯上面から出土した遺物は、これに伴う可能性が大きい。他のものは遺構を特定できないものが大半である。このため、層位的にまとまりを持たない資料として一括して扱う。

土器（第64図～第67図）

790は無文の土器の底部付近で丸形を呈する。小片であり判然としないが、ロクロ使用以前の土師器かと思われる。

第X群

717は平行沈線により施文されるものであるが、縄文後期に伴うものかと思われる。

第XI群

607・652～656・671・715・744～757は磨消技法によるもので、モチーフは不明であるが、沈線を施すものと隆起線を施すものの2者がある。大木10式に伴うものと思われる。

第X群

674～676・683・685・693・762～768も磨消技法によるが、縦位の区画文を施すもので、大木9式に伴うものと思われる。

第VI群

615は口縁部に縦位2条の粘土紐を貼付け、この上面を篋状工具で刻むもので、大木7a式に伴うと思われる。

第IX群

他のものは隆沈線や平行沈線により施文されるもので、おおむね大木8b式に伴うと思われる。

石器（第68図～第69図）

剥片石器のうち定形的なものはほぼ図示したが、礫石器の大部分は時間的制約から図示できなかった。

792・793は石錐である。いずれもやや大きめの基部を有する。石材は両者ともに凝灰岩質粘板岩を使用している。

794は石槍でやや肉厚の菱形を呈する。石材はチャート質泥岩を使用している。

795～803は石鏃である。795はやや長身で、両側縁の基部付近にわずかな抉入がみられる。基部は無柄の凹基である。

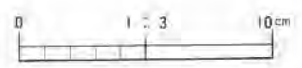
796・797は木葉形を呈する有柄鏃である。

798～803は三角鏃である。798～800は基部の抉入が比較的小さいもので、801・802は比較的深いものである。803はやや不整形であるが平基である。

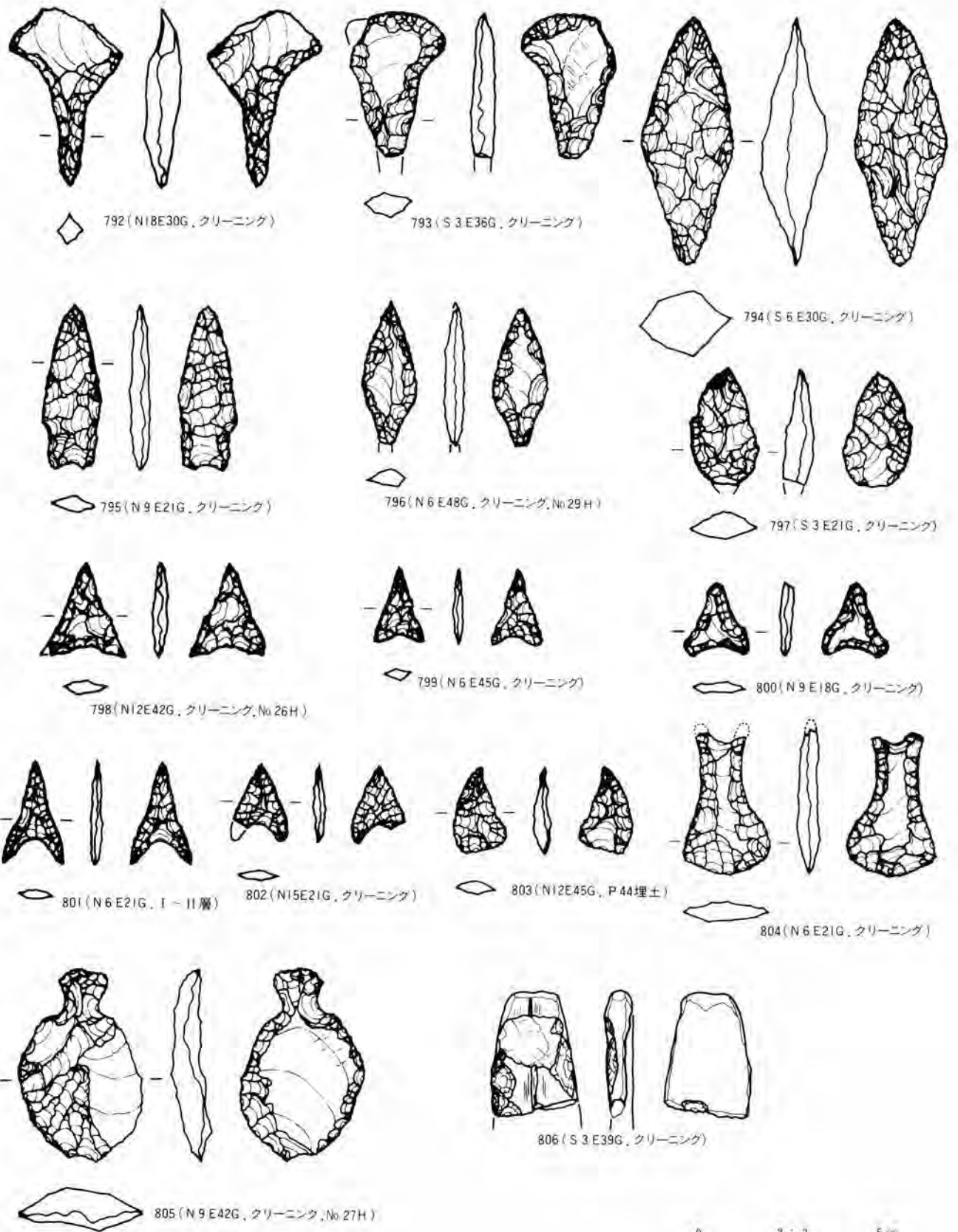
石材は795・799・801が粘板岩を、796・800がチャート質泥岩を、797・802・803がチャートを、798が凝灰岩質粘板岩を、それぞれ使用している。



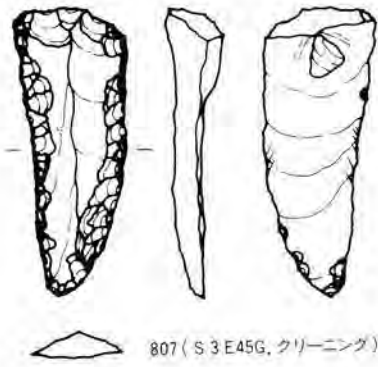
第66図 東集落出土遺物(10)



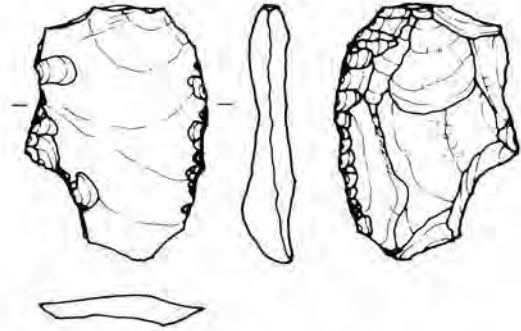
第67図 東集落出土遺物(II)



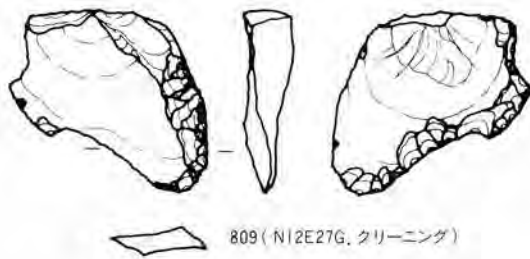
第68図 東集落出土遺物(12)



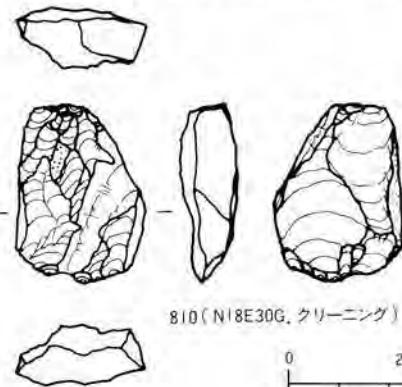
807 (S 3 E 45G, クリーニング)



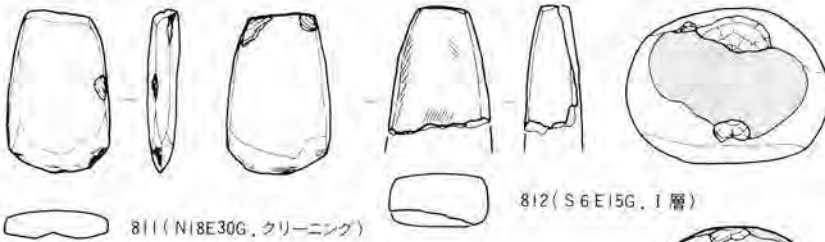
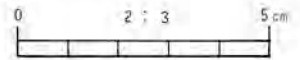
808 (N12E21G, クリーニング)



809 (N12E27G, クリーニング)

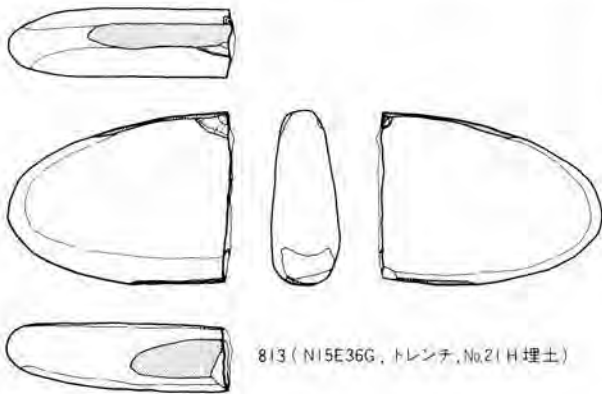


810 (N18E30G, クリーニング)



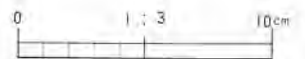
811 (N18E30G, クリーニング)

812 (S 6 E 15G, I層)



813 (N15E36G, トレンチ, No.2(H埋土))

814 (S 6 E 45G, クリーニング, No.33 H)



第69図 東集落出土遺物(13)

805は縦形石匙であるが、刃部形態は搔器的である。石材はチャート質泥岩を使用している。
804は基部に2つの小突起を有するもので、周縁を丁寧に調整している。主要な刃部は下辺であると思われ、搔器的な機能が想定される。石材はチャート質泥岩を使用している。

807～809は削器でありいずれも打面を残している。807は縦長のブレード状剥片の両側縁に片面からのみ調整を施すものである。両側縁には使用時の微細な剥離が認められる。808は不定形剥片の1側縁に刃部を有するものである。809も不定形剥片を用いているが、打面以外の周縁を調整する。一方の側縁部には抉入を有する。

石材は807・809がチャート質泥岩を、808が粘板岩を使用している。

810はピエス・エスキューイである。部分的に自然面を残しており、比較的小形の円磔を素材とするようである。上下両端からの加撃による剥離が認められる。

石材はチャートを使用している。

806・811・812は磨製石斧であり、いずれも丁寧に調整されている。806は小形で、正面中央部に縦位の沈線が施され、これを剥離が切っている。背面は大きく剥落している。おそらく擦切磨製によるもので、欠損後に再利用を企ったものと思われる。

811はやや薄手であるがほぼ完成品である。812は刃部付近を欠損するものである。

石材は806がやや細粒の安山質凝灰岩を、812はやや粗粒の安山質凝灰岩を、811が粘板岩を使用している。

813・814は敲打磨石類である。813は扁平の楕円形磔の両側縁に機能磨面を有するもので折損後に折損面の一部を擦って磨面を作出している。

814はやや肉厚の楕円形磔の上下両端に機能磨面を有している。

石材は813が安山質凝灰岩と、814が片麻岩を使用している。

石棒（第70図）

東集落周辺での出土遺物のうち最も特徴的な出土状況を呈している。

調査中に明らかに石棒であると判明したものについては第51図に平面位置を示しておいた。

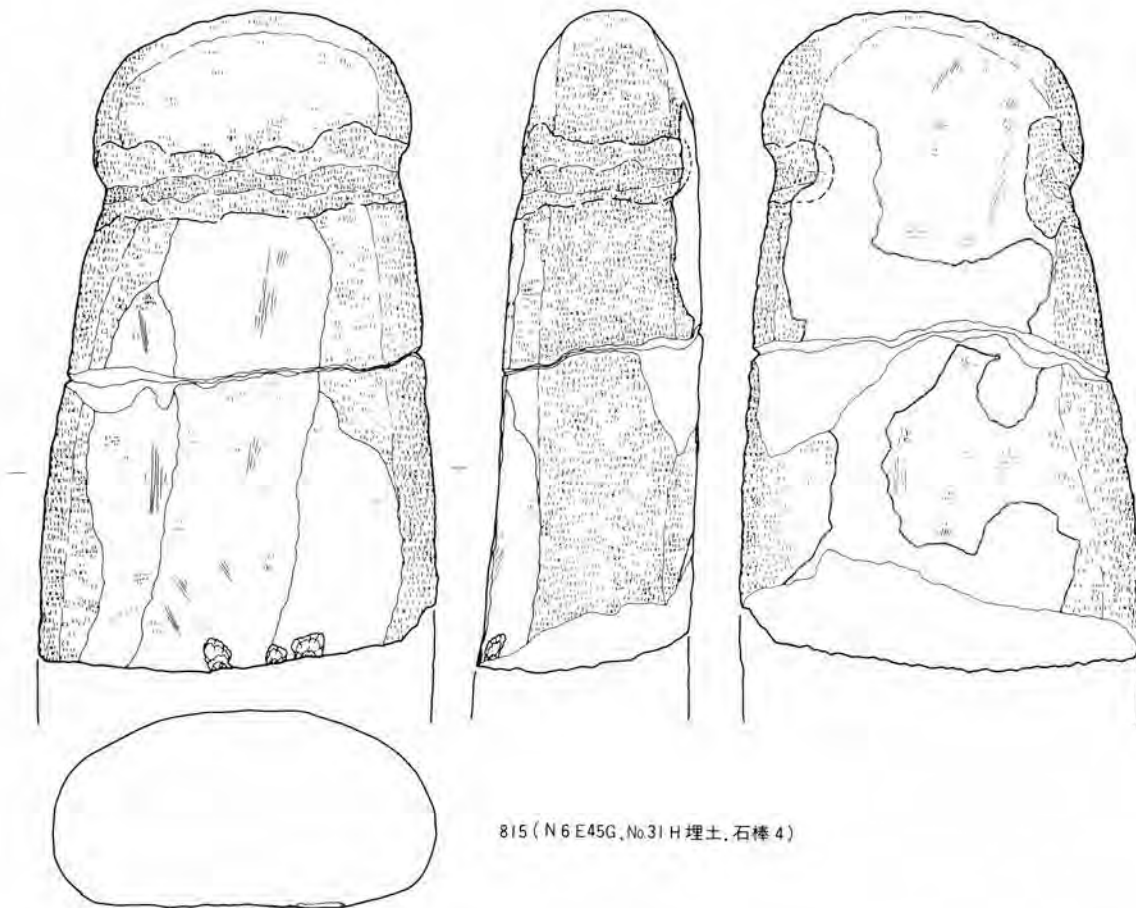
石棒1（第7図版）はN 6 E18グリッドに立ったままの状態を検出されており、一部欠損してはいるが、敲打により整形されており明瞭な頸部を作出している。これについては、そのまま埋戻している。

石棒2はN 9 E27-1号配石遺構の上面に配石状に置かれていたもので、敲打によって整形された頸部付近と、磨擦によって整形された体部の2片が出土している。両者は接合しないが、いずれも二次的に焼成を受けている。

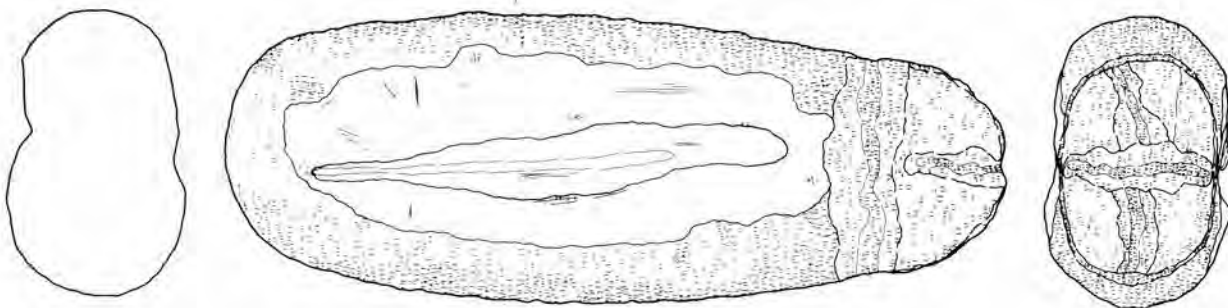
石棒3（第70図 816）はN15 E36-1号（第21号）竪穴住居跡埋土最上層から出土している。816は完成品で、敲打により頸部を作出し、頸部にはやはり敲打で十字形の溝を作出している。体部は周縁が敲打で整形され、正面と背面には磨面を有し、ここに両面ともに縦位の溝が作出される。形態的には他の石棒と異なるものである。石材は砂岩を使用している。

石棒4（第70図 815）はN 6 E42-1号（第31号）竪穴住居跡埋土最上層から出土している。

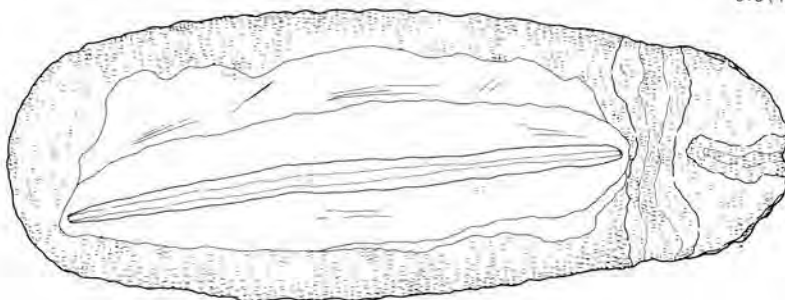
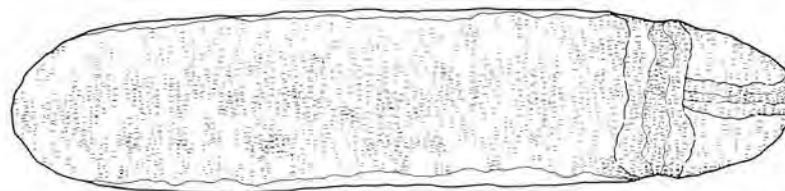
815は体部下半を欠くが、今回検出したもののうち最大である。敲打により頸部を作出すが、頸部の溝はない。体部は側縁部を敲打で、正面と背面には摩擦により整形する。石材は砂岩を使用する。



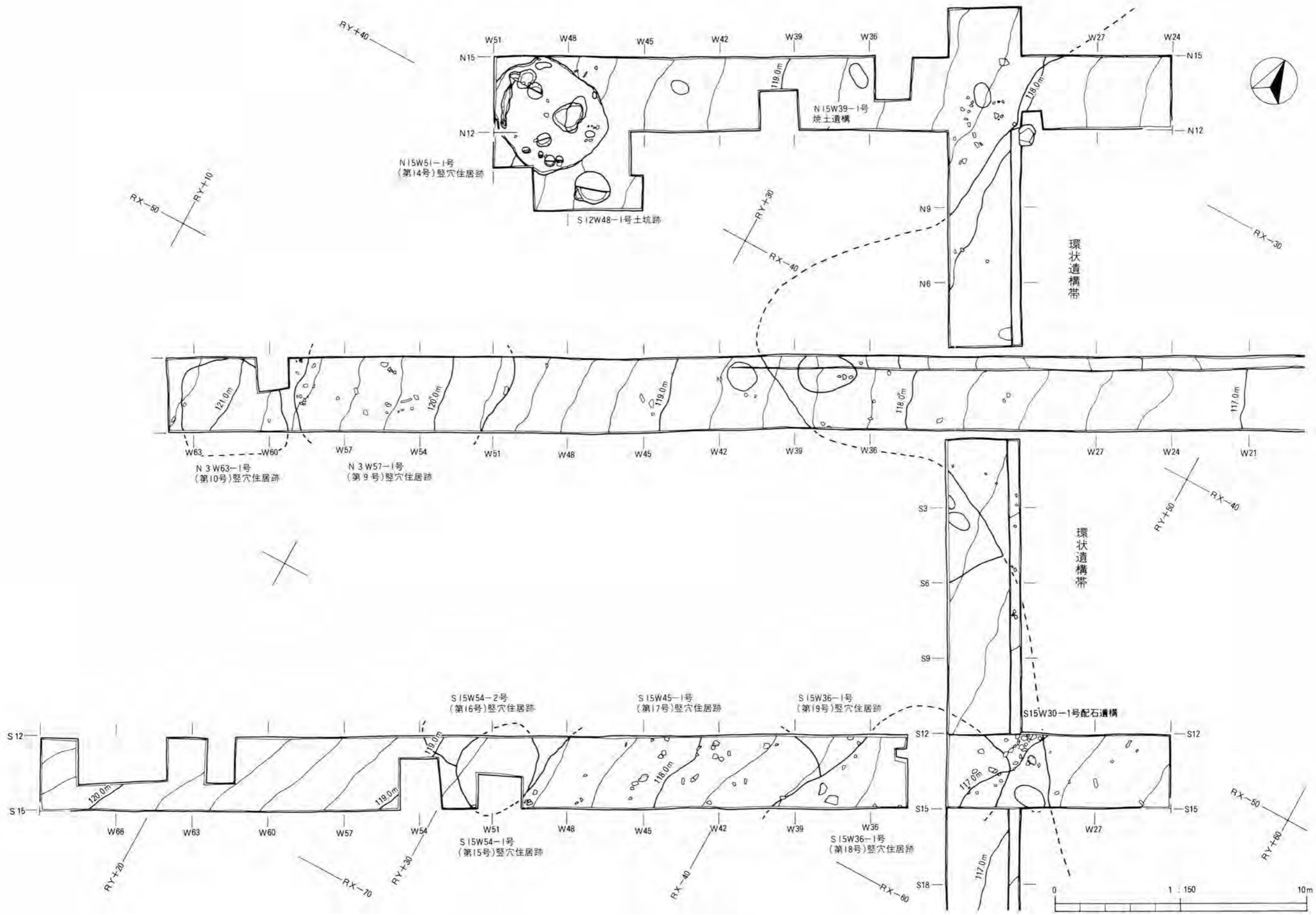
815 (N 6 E45G, No.31 H埋土, 石棒 4)



816 (N15E36G, No.21 H埋土, 石棒 3)



第70図 東集落出土遺物(14)



第71図 西集落東部検出遺構配置図

このほかにも N 6 E 30 グリッドからは砂岩製の角のとれた四角柱形の礫で、表面に擦痕や敲打痕を伴うものが出土している。頸部を作出さない点から石棒というより立石などとして利用されたものと思われる。

また、これに以外にも検出時にわずかに顔を出しただけで、取り上げなかったものもあり、総数は更に増えるものと思われる。

e) 西集落

西集落は W27 Line 付近以西に形成された居住域である。昭和36年の地形図では西集落の西縁部を旧国道45号線が走っており、西集落と西側の尾根との比高差が約 5 m 程であることが読み取れる。この後、昭和40年代に入り国道45号線は切替え工事が実施されるが、崎山貝塚周辺では西側の尾根部を削り拡幅されている。また、この頃西集落北西部の畑地が大規模に造成され、現在は工場用地等となっており、造成時には多量の遺物が出土したと伝えられている。

工場用地西半部はほぼ遺跡が壊滅したと思われるが、東半部については比較的保存状態が良い部分があり、平成6年度に実施した第11次調査では造成工事の際の盛土層下に遺構や旧地形が残されている西端のラインを確認した。

破壊された部分まで含めた西集落の規模は東西130m以上、南北100m以上で面積はおよそ14,000㎡程になるものと思われ、東集落の約3.5倍の規模を有することとなる。

西集落はやや傾斜があり、東部では粘土層を地山とするが、南部は崖錐性堆積物と思われる巨礫を含む粘土層が地山となる。

西集落で検出した遺構は竪穴住居跡11棟、土坑跡5基、焼土遺構1基、配石遺構1基であり、すべての遺構は地山面で検出している。

東集落で検出した掘立柱建物跡や柱穴状ピットは全く確認されていない。西集落での遺構形成時期は中期前葉の大木7b式期から中期末葉の大木10式にわたるが、主体となるのは中期後半の大木8b式期から大木9式期である。尚、未調査部分や破壊された部分にも同程度の割合で竪穴住居跡が存在すると仮定すれば、その総数は240棟前後と予想されるが調査地点はいずれも外縁部付近であり、また、東集落との比較からも総数は300棟前後と予想しておく。

以下、調査地点毎に東部と南部に分けて概要を記す。

e-1) 西集落東部

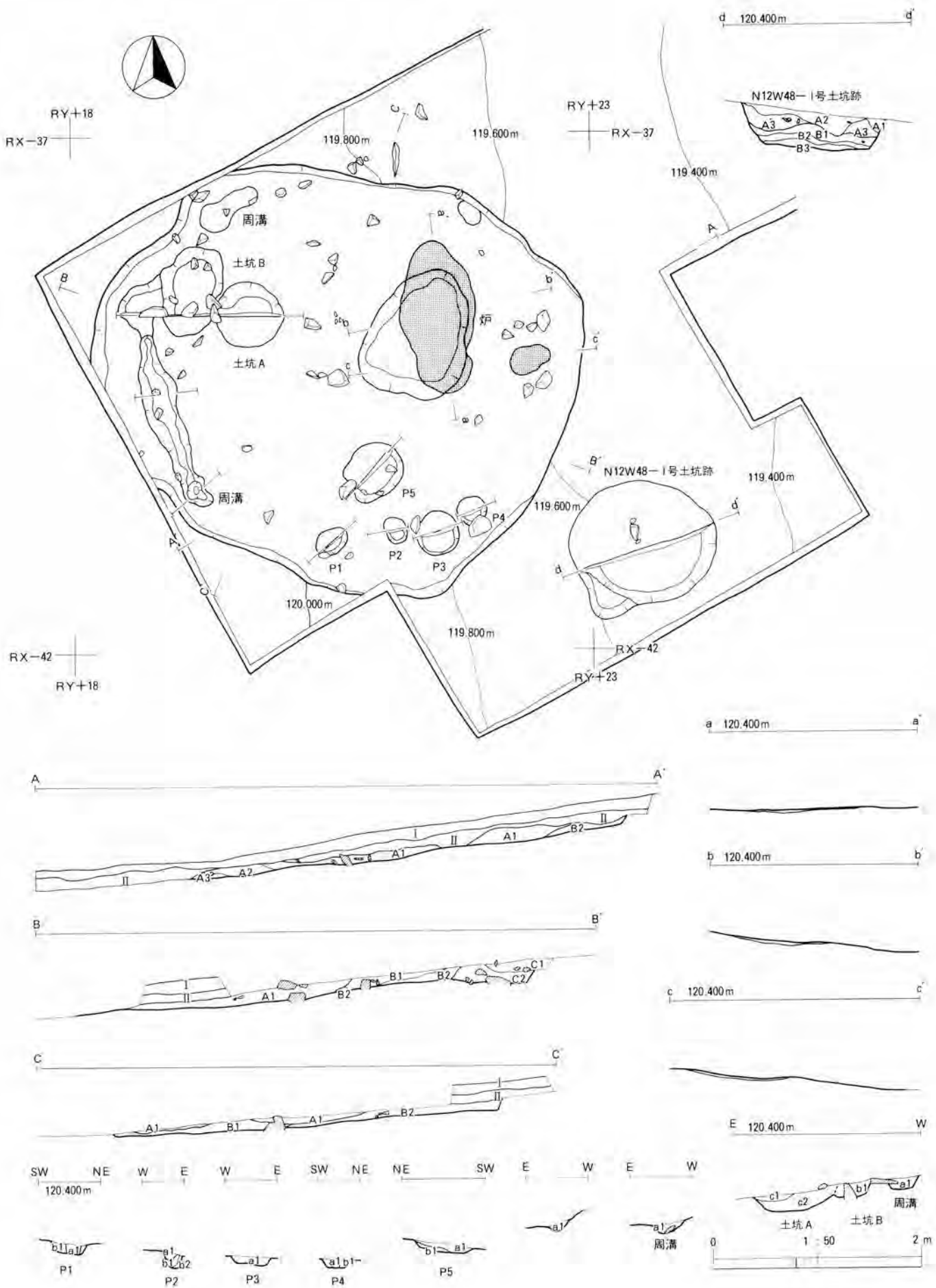
i) 竪穴住居跡

N15W51-1号(第14号)竪穴住居跡(第72図)

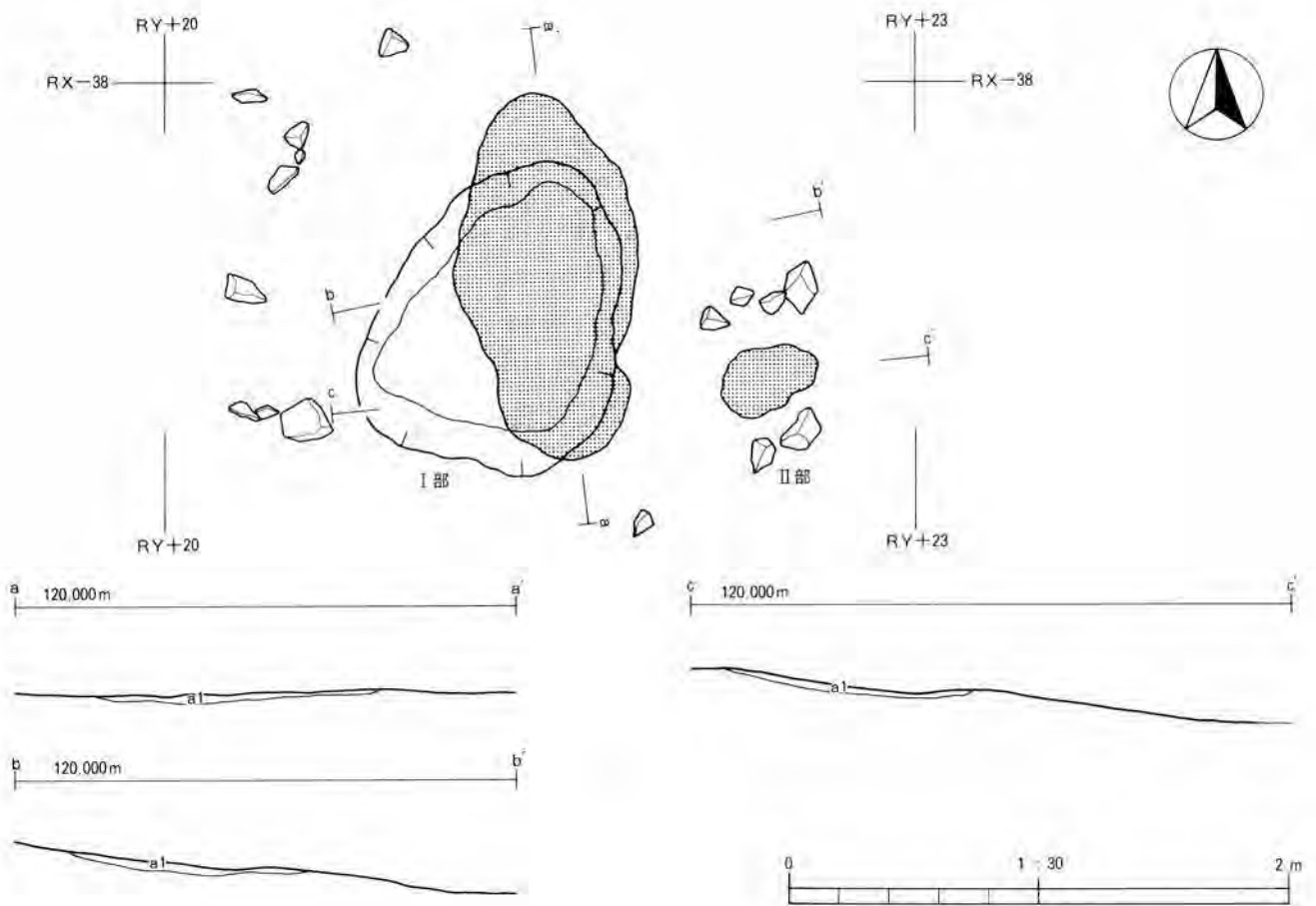
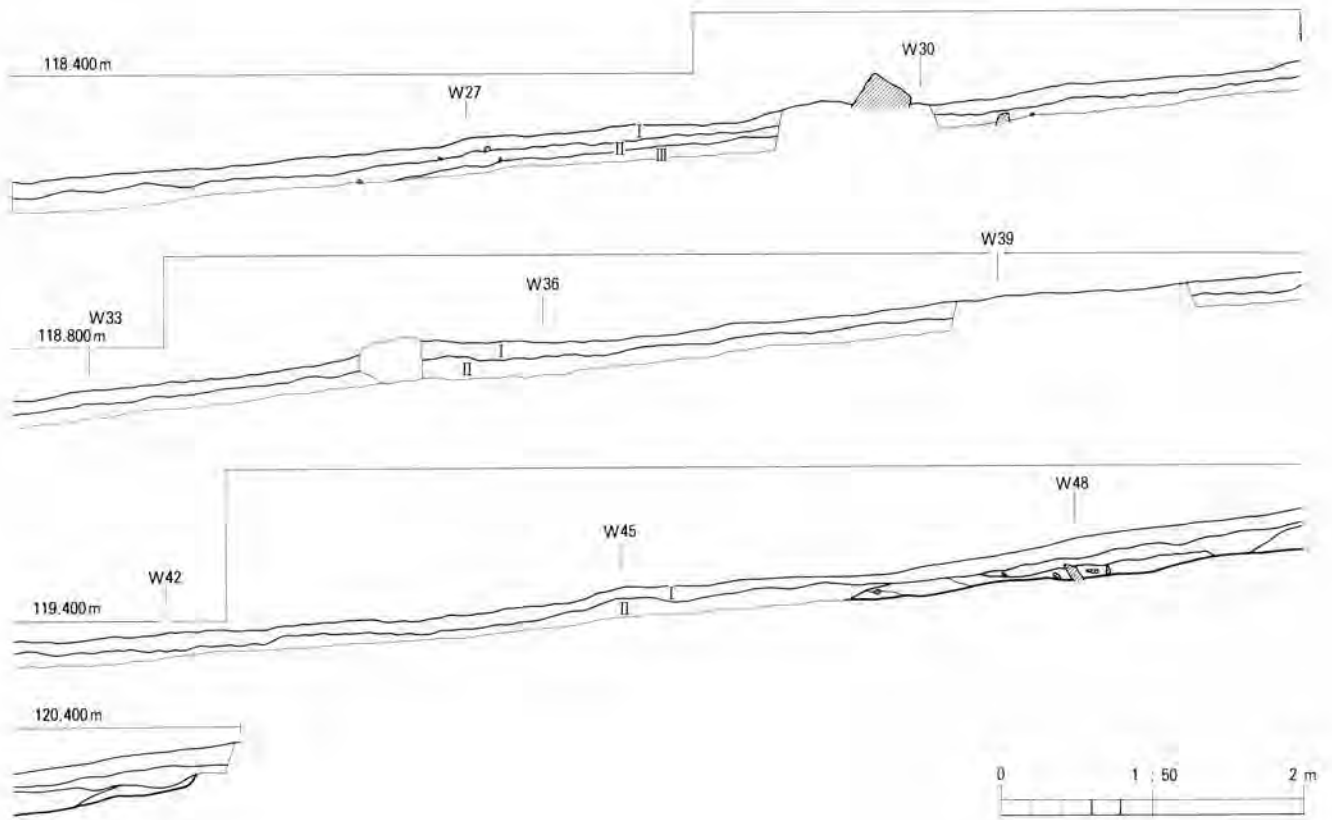
N15W51・N15W48・N12W51・N12W48グリッドにかけて検出した。ほぼ全体を検出したが、調査区内での重複はなかった。

平面形は不整の隅丸方形を呈し、規模は東西4.6m、南北3.8m、深さ0.2mを計る。主軸方向は、E15°30' Sでありほぼ遺跡の中央部を向いている。

埋土は、A層～C層に大別される。A層は3層に細分される。A1層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。固く、しまり具合は中程度である。炭化物粒をやや多く含む。A2層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや柔らかく、やや



第72图 N15W51-1号(第14号)竖穴住居迹·N12W48-1号土坑迹



第73図 西集落土層断面図・N15W51-1号(第14号)竪穴住居跡・炉

しまりが無い。A 3層は黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや固く、しまり具合は中程度である。

B層は2層に細分される。B 1層は褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや固く、しまり具合は中程度である。小礫、炭化物粒、焼土粒を少量含む。B 2層はB 1層より明るい褐色粘質土を基本土とし、黄褐色粘質土塊・暗褐色土塊などを含む。固く、しまり具合は中程度である。小礫、炭化物粒、焼土粒を少量含む。

C層は2層に細分される。C 1層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。固く、しまりは中程度である。炭化物粒を少量含む。C 2層は、褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや固く、しまりは中程度である。炭化物粒を少量含む。

床面は、やや凸凹があるが固い。貼床は認められない。西壁よりやや離れた地点に幅0.35m、深さ0.1mの周構が認められる。

柱穴 柱穴は、P 1、P 4に柱痕跡があり主柱穴に相当する。P 1とP 4の柱間寸法は芯々で1.4mを計る。これら以外に柱穴と思われるピットは認められず、柱穴配置は不明である。

炉 炉は石組複式炉で、床面中央より東に寄る。炉の各部をI部、II部として説明する。

I部は不整形の掘込炉で、東西1.1m、南北1.3m、深さ0.05mを計る。掘込の東半部から床面にかけて焼成を受けており、固く、赤変している。

II部は、石組炉で、炉石の大半は抜きとられている。推定される規模は、東西、南北ともに0.7m程度である。炉の中央部が焼成を受けて、固く、赤変している。

出土遺物（第74図・第83図）

埋土が浅いこともあり遺物の出土量は少ない。

土器 820・825・826は磨消技法によるもので、沈線による楕円形区画文を施し、大木9式に伴う。
第X群 824・828・829・831・832・835は隆沈線により懸垂文や渦巻文等を施すもので、大木8b式に伴う。

石器 817・819・822・833・834は平行沈線により施文されるもので、やはり大木8a式に伴う。

1088は、やや小形ではあるが周縁部を両面から比較的丁寧に調整している。欠損により判然としないが、石匙等の定形的な石器の残欠である可能性も考えられる。

1089～1091は不定形剥片の側縁部等を調整したものである。1089は下辺に搔器様の刃部を有する。また、1090・1091は側縁部に削器様の刃部を有する。

1093はやや肉厚の剥片を素材とするもので、湾入する側縁部に削器様の刃部を有する。

1092は小形の磨製石斧で、比較的緻密な石材を用いて丁寧に研磨される。

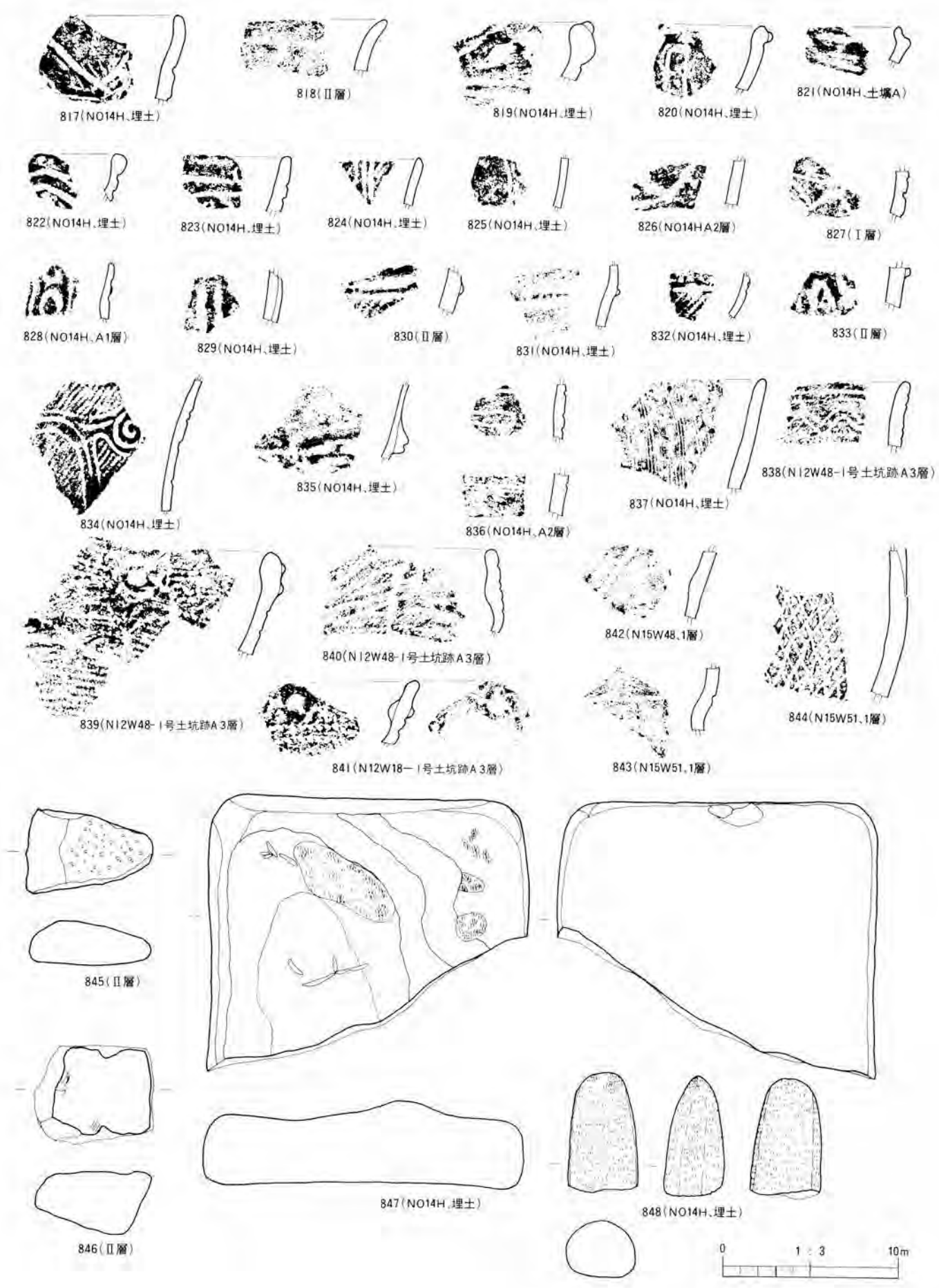
848は、やや粗い石材を用いるもので、現存部には成形時の敲打痕のみが認められる。

847は石皿であり、両面ともに使用するが、一方の面が良く使い込まれており、凹んだ使用面がみとめられる。

S 15W54-1号（第15号）竪穴住居跡（第71図）

S 15E Wトレンチのほぼ中央部に位置し、全体のほぼ2/3を検出した。S 15W54-2号（第16号）竪穴住居跡を切る。平面形は不整形を呈し、規模は直径3.4mほどである。

検出のみにとどめたため内容は不明である。



第74図 西集落出土遺物(1)

第Ⅸ群

遺構に伴う遺物で図示できるものは無かったが、周辺のⅡ層～Ⅲ層からは大木8b式の破片を得ており、この時期に伴う可能性が大きい。

S15W54-2号(第16号) 竪穴住居跡(第71図)

S15EWトレンチのほぼ中央部に位置する。S15W54-1号・S15W45-1号竪穴住居跡に切られ、平面形や規模は不明である。

第Ⅸ群

検出のみにとどめたため内容は不明である。

遺構に伴う遺物で図示できるものは無かったが、周辺のⅡ層～Ⅲ層からは大木8b式の破片を得ており、この時期に伴う可能性が大きい。

S15W45-1(第17号) 竪穴住居跡(第71図)

S15EWトレンチのほぼ中央部に位置する。S15W36-1号竪穴住居跡に切られる。

平面形は不明で、規模は東西11.8m以上である。

検出のみにとどめたため内容は不明であるが、比較的大形の住居跡かと思われる。

出土遺物は、861・863・955～957・961・969・971・973・981・984・989・1017が埋土層上層より取りあげたものである。

土器

第Ⅸ群

971・973・989は隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。

961・981・1017は平行沈線により施文されるもので、やはり大木8b式に伴う。

861は体部に強い膨らみを有する樽形土器の体部下半である。タガ状にめぐる隆起線の調整が比較的丁寧であり、大木8b式に伴うものと思われる。

957・969は口縁部に横位の隆起線を施すものであり、比較的丁寧に調整され隆沈線状となっている。大木8b式に伴うものであろう。

955・956はキャリパー形深鉢の口縁部である。隆沈線により渦巻文等の施文が認められるが、上下境界線との連絡がなく、やや開放的である。また、調整も比較的粗雑であり、大木8b式で古い段階に伴うものである。

他のものも前述したものとほぼ同時期かと思われる。

S15W36-1(第18号) 竪穴住居跡

S15EWトレンチの東半部に位置する。S15W45-1号・S15W36-1号竪穴住居跡を切る。

平面形は不明である。(隅丸方形か)。規模は東西9.3m以上である。

検出のみにとどめたため内容は不明であるが、比較的大形の住居跡かと思われる。

出土遺物は、866・913・934・939埋土層上層より取り上げたものである。

第Ⅹ群

934は半円形を呈する口縁部波頂の破片であり、磨消技法による楕円形(?)の区画文が施文され、大木9式に伴う。

939は隆沈線により渦巻文や区画文を施すもので、大木8b式に伴う。

913はキャリパー形深鉢の口縁部破片である。波状に展開すると思われるモチーフを施すもので大木8b式に伴う。

866は現存部が縄文のみの小形深鉢であり、頸部にわずかな屈曲を有する。所属時期は不明である。

S 15W36-1号(第19号) 竪穴住居跡(第71図)

S 15E Wトレンチの東半部に位置する。S 15W45-1号・S 15W36-1号竪穴住居跡に切られ、平面形、規模ともに不明であり、伴出遺物も無く、所属時期は不明である。

N 3 W63-1号竪穴住居跡(第71図)

N 3 W63グリッドを中心に地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の東西方向で約 4.0mを計る。

付近の表土からは第75図849~851などの土器片が出土しているが大木 8 b 式に伴うものが主体を占めるようである。

第Ⅸ群

N 3 W57-1号竪穴住居跡(第71図)

N 3 W60グリッドからN 3 W51グリッドにかけて地山面上に検出した遺構で竪穴住居跡かと思われる。調査座標の東西方向で約 8.5mを計る。調査区内の表土中や検出面から第75図854~860などの土器片が出土している。854~857は縄文時代前期に、858~860は中期(ほぼ大木 8 b 式)に伴うものと思われる。

第Ⅸ群



第75図 西集落出土遺物(2)

ii)土坑跡、焼土遺構

N 12W48-1号土坑跡(第72図)

N 15E WトレンチのN 15W51-1号(第14号) 竪穴住居跡の南側に隣接して検出された。

平面形は円形を呈し、断面形はピーカー状を呈する。規模は直径1.4m、深さ0.5mを計る。

B層は暗褐色~褐色粘質土を基本土とし比較的混入土を多く含む。

第Ⅶ群

埋土はA層とB層に大別される。A層は黒褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を多く含む。出土遺物は838～841であり、いずれもA3層から出土した。

839～841は口縁部が大波状を呈するもので、口縁部文様帯に原体圧痕による施文が認められる。また、波頂部や波頂間には隆起線による円文が伴うようである。これらは、大木7b式に伴う。

838は口縁部文様帯に竹管による波状文を施すもので、大木3式に伴うものと思われる。

N15W39-1号焼土遺構（第71図）

N15EWトレンチのN15W51-1号竪穴住居跡と環状遺構帯の間に検出した。平面形は不整楕円形である。伴出遺物が少なく、時期は不明である。

iii) 配石遺構

S15W30-1号配石遺構（第71図）

S15W36-1号竪穴住居跡東辺から環状遺構帯西辺にかけての東西南北ともに1.5mの範囲に、径30～50cmの垂角礫や円礫が集積していた。なかには径50cm程の石皿や浜石と思われる円礫なども含まれており、明らかに人為的な所産であると思われるものの、検出のみにとどめたために下部の掘り込みの有無は確認できていない。

伴出遺物は極めて少なく、876が配石の周辺から出土したものである。やや薄手で、沈線による施文があり、縄文後期に伴うものと思われる。

遺構外出土遺物（第76図～第87図）

N15EWトレンチからの出土遺物は極端に少なかったが、S15EWトレンチからはI層～III層にわたり極めて多量の遺物が出土している。

縄文後期

土器（第76図～第82図）

867～870・882～907・930・932・943・959は縄文後期に伴うものである。

868～870は磨消技法によるもので、やや幅の狭い沈線にて直線的なモチーフを施す。

867・882～903・930・932・943・959も磨消技法によるが、やや幅の広い沈線にて曲線的なモチーフを施す。

904～907は頸部に強い屈曲を有するもので、磨消技法により体部に縦位方向の区画文を施す。

922・923・926～929は縄文のみを施す深鉢であり、口縁部を折返し複合口縁としている。これらも縄文後期に伴う可能性が大きい。

大木10式

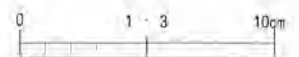
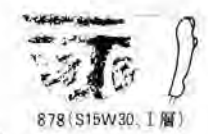
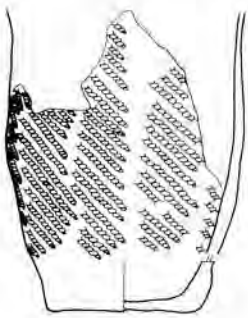
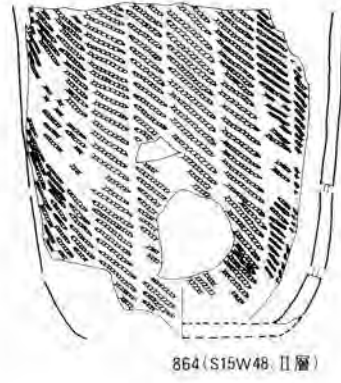
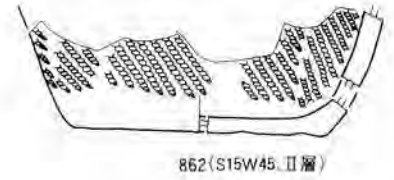
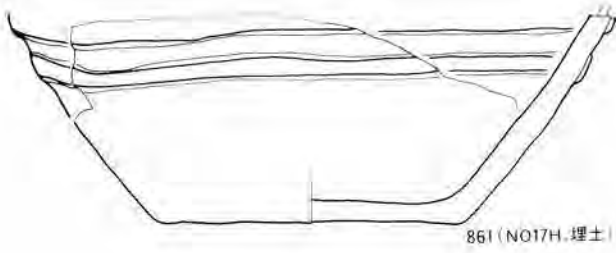
以上の土器はS15W27～S15W33グリッドに集中している。

第Ⅹ群

933・962・963・968・990～996は大木10式に伴うものである。いずれも磨消技法により施文される。

962・968・990～992は隆起線上に円形の連続刺突文を施すもので、大木10式～門前式に伴うものと思われる。

963は口縁部の内面に隆起線により「ノ」字状の貼付を有する。



第76図 西集落出土遺物(3)



第77図 西集落出土遺物(4)



第78図 西集落出土遺物(5)

993～995は沈線により曲線的なモチーフを施すものである。994は沈線の一部が連続刺突文状となる。

996は無文部に円形の連続刺突文を施す。

以上の土器はS15W36～S15W46グリッドに集中している。

大木9式
第X式

908・909・935・936・945～949・985・997・1079はいずれも磨消技法によるもので、大木9式に伴う。

949は隆沈線によるものであるが、隆起線の断面形が三角形に近く、沈線部もかなり幅が広くなっており、大木9式のなかでもやや古い部分に相当する。

他のものは、沈線により縦位楕円形区画文を施すものであるが、997はなかでもやや新しい可能性がある。

以上の土器はS15W36～S15W42に集中している。

871・872・875・879～881・910～912・914・915・937・938・940・941・944・950～954・964・966・967・970・972・974～980・986～988・998～1016・1021・1023～1040・1045・1046・1049～1057・1059～1076・1078・1080・1081・1084～1086は隆起線や平行沈線などにより懸垂文や渦巻文等を施すもので、大木8b式に伴う。

大木8b式
第IX群

974・999～1002・1004・1005・1010・1055・1059～1063などは隆起線の調整も比較的丁寧であり、また、モチーフも閉鎖性があることなどから大木8b式のなかでもやや新しい部分に相当する。

一方、1023～1040は隆沈線の調整がやや粗雑であり、モチーフも開放的である。また、1037・1038は横位波状の隆起線を施す。これらは大木8b式のなかでもやや古い部分に相当する。

以上の土器は主にS15W33～S15W54グリッドに分布するが、なかでも古手としたものはS15W54グリッドに集中する。

大木8a式
第VIII群

916・960・1019は大木8a式に伴うものである。

916は沈線により施文されるものである。960は口縁部に横位の貼付を有するものである。1019は浅鉢であるが、原体圧痕により施文されるもので、大木7b式に上る可能性もある。917～919・1018・1077・1082は大木7a式に伴うものであろう。

917～919は半截竹管により施文されるもので大木7a式に伴うものであろう。

1018・1077・1082は原体圧痕により施文されるものである。

958・1041・1043・1047・1048は縄文前期に伴うものである。

1041は頸部に屈曲を有する深鉢で、口唇部に円形の押捺を連続する。胎土に植物繊維を含まず大木3式に伴うものであろう。

他のものは、胎土に植物繊維を含むもので縄文前期初頭に伴う。

石器（第74図・第82図～第87図）

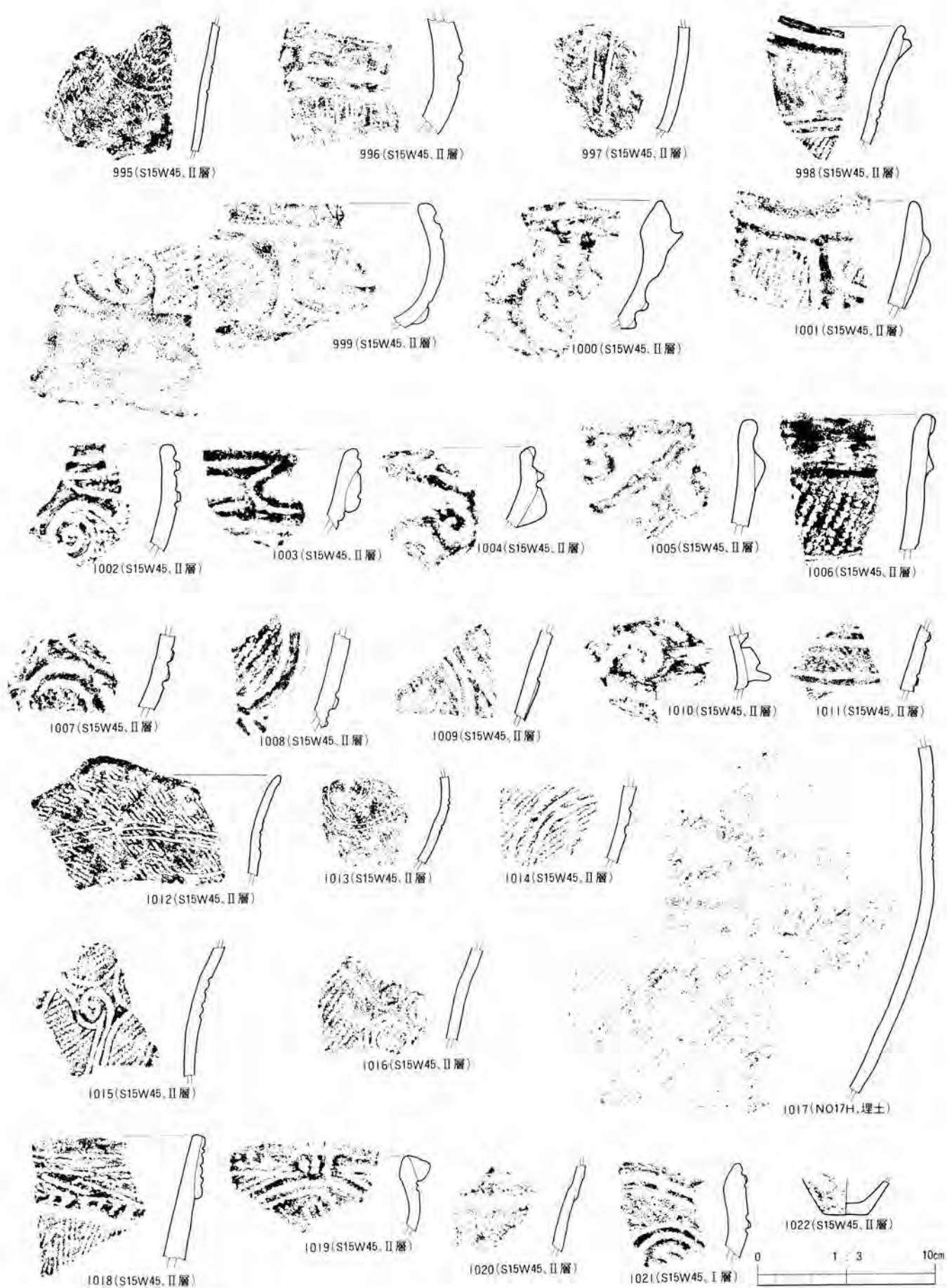
1094は石錐である。打点方向を機能部とするもので、機能部周辺のみを調整する。

1095～1098は石鏃である。いずれも三角鏃であるが、1095は凸基、他のものは凹基である。1097はやや長脚である。

1102は石鏃である。横長の剥片を素材とし、側縁部と背面の下端部に調整が認められるが、



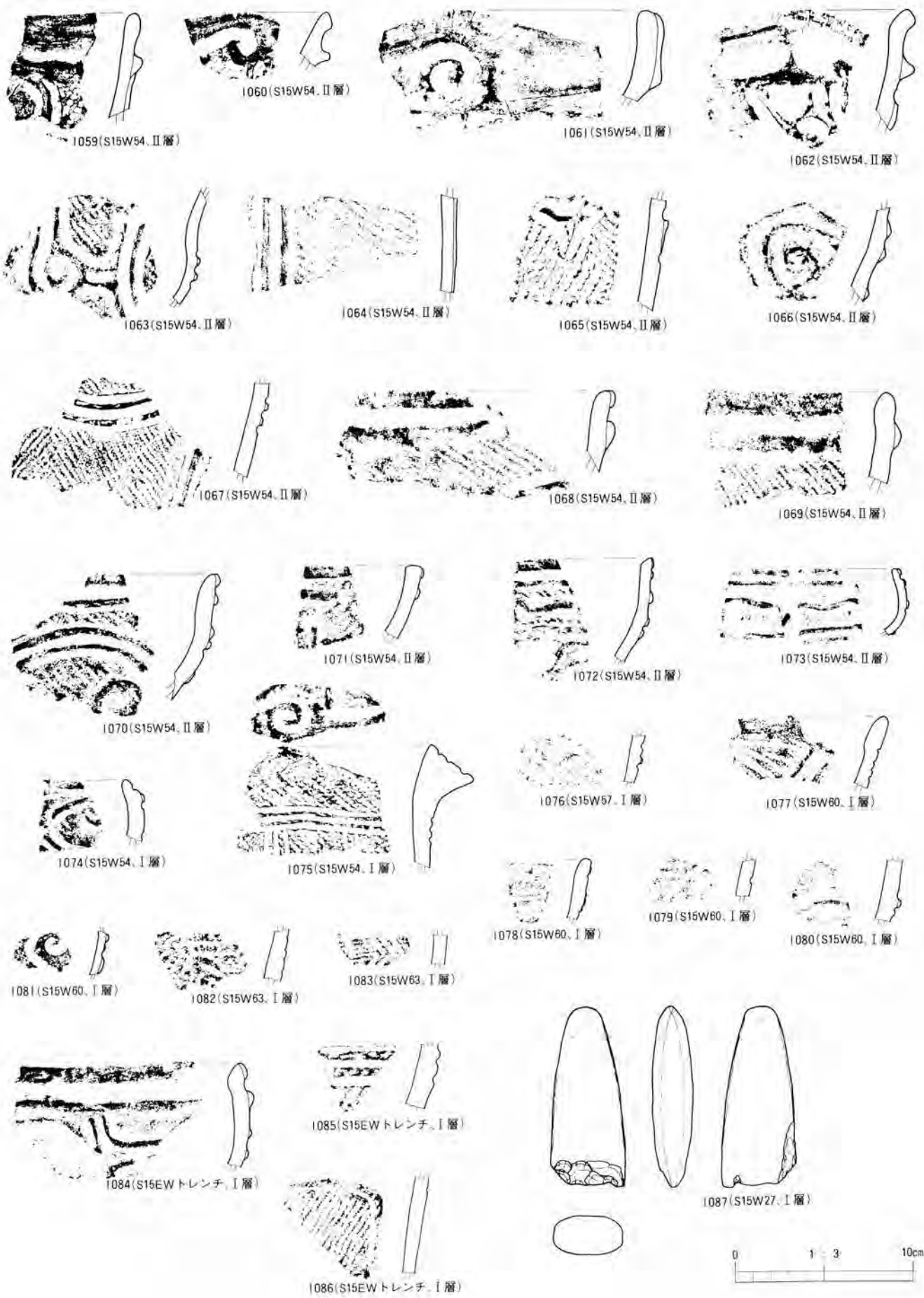
第79図 西集落出土遺物(6)



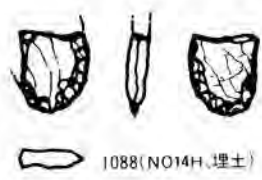
第80圖 西集落出土遺物(7)



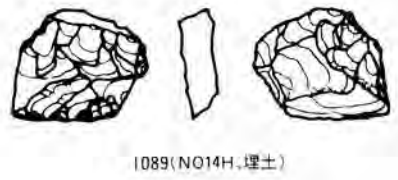
第81図 西集落出土遺物(8)



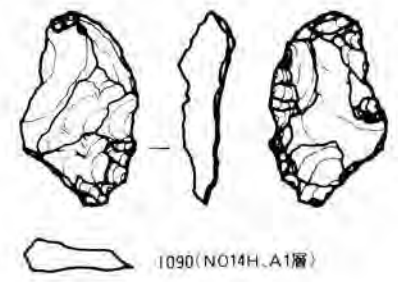
第82図 西集落出土遺物(9)



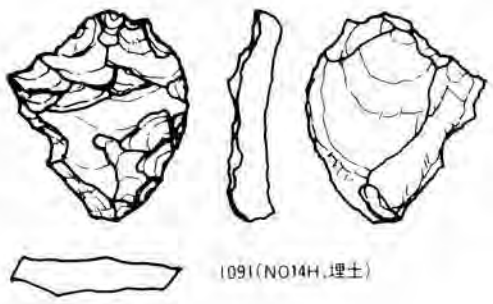
1088(N014H,埋土)



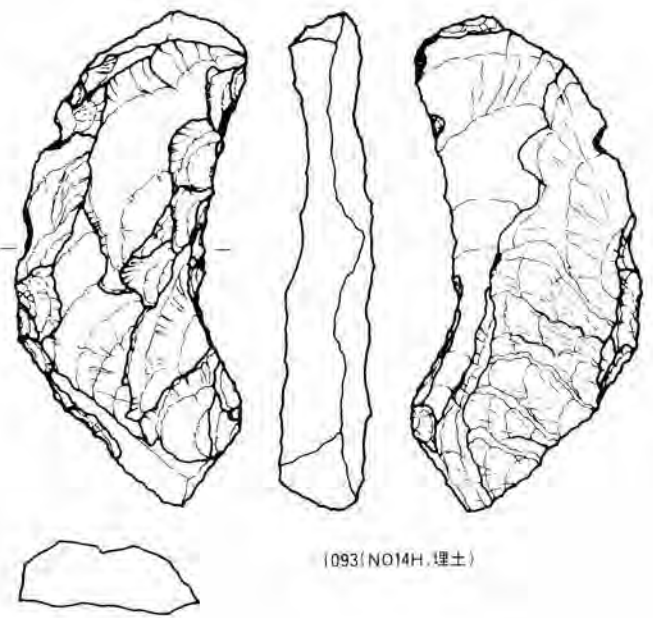
1089(N014H,埋土)



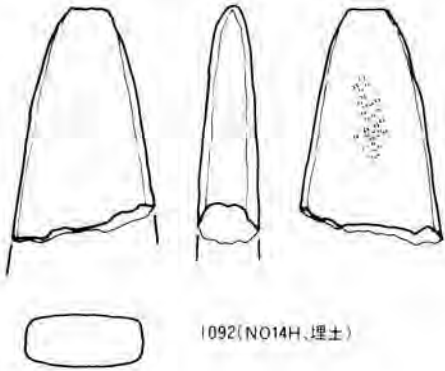
1090(N014H, A1層)



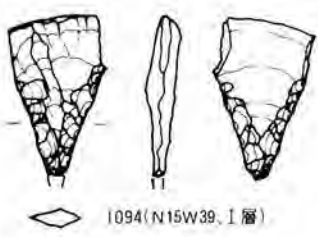
1091(N014H,埋土)



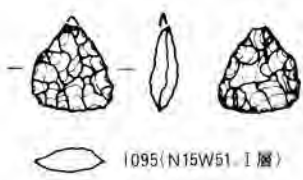
1093(N014H,埋土)



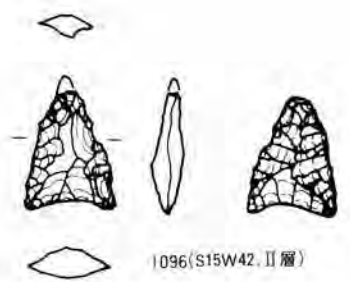
1092(N014H,埋土)



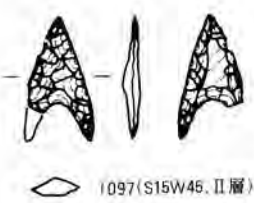
1094(N15W39, I層)



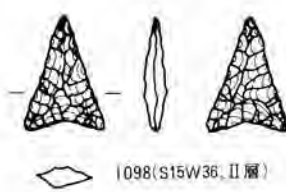
1095(N15W51, I層)



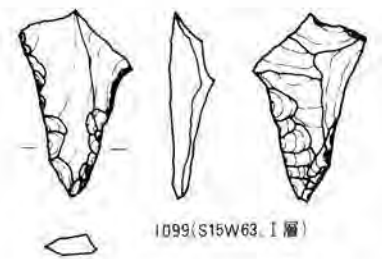
1096(S15W42, II層)



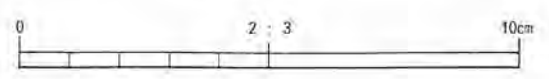
1097(S15W46, II層)



1098(S15W36, II層)



1099(S15W63, I層)



第83図 西集落出土遺物(10)

特に下端部の調整が著しく、刃部は搔器様となる。

1100は下端部のみの破片であるが、やはり石筥かと思われる。下端の刃部は搔器様となる。
1099・1101・1103・1105は不定形であるが、削器である。いずれも側縁部を中心に簡略的な刃部調整が認められる。

1106は使用痕のある剥片である。不定形剥片の側縁部に使用時のものと思われる微細な剥離が認められる。

1087・1109～1112は磨製石斧である。

1087は、やや緻密な石材を用いるもので、全面ともに良く研磨されている。刃部付近に剥離が認められ、欠損後に再利用されたものと思われる。

他のものは、やや軟質な石材を用いるもので、全面に成形時の敲打痕が認められる。1109は背面の刃部付近に自然面を残している。

いずれも体部中央にて折損したもので、この段階のまま使用されたものと思われる。

1113～1119は打製石斧である。

1113～1117は比較的定形的なものであり、扁平円礫の周縁を打ち欠いて調整し、自然面を大きく残す。1113の側縁部に敲打痕が認められることから、これらの石器の主要な機能部が側縁部であるのか、下端部であるのかには決めかねるが、形態や調整方法から下端部を刃部とする可能性が大きいものと思われる。

1118は前述したものと形態が異なり、側縁部を粗く打ち欠いた後に下端部を調整して刃部としている。

1119は扁平円礫の3辺を調整し、片刃の刃部を作り出すもので、礫器(chopper)の可能性もある。

1120・1121・1123～1129は敲打磨石である。

1120・1121・1123・1124は楕円形礫の側縁部を機能磨面とするものである。

1124は機能磨面に連続して両面に調整磨面が認められる。

1123は断面が三角形を呈し、一方の側縁に機能磨面(敲打磨石)を有し、もう一側縁に敲打痕が伴う。

1125も扁平楕円礫の一側縁を機能磨面とするが、端部と一側縁に敲打痕が伴う。

1126・128は楕円形礫の端部を使用するもので、1126は一方に側縁にのみ、1128は両端部に機能磨面を有する。

1127・1129は扁平円礫の周縁を機能磨面とするものである。

1130～1133は敲石である。

1130は全面に、1131は周縁に、1132は一方の端部に、1133は一側縁に、それぞれ敲打痕が認められるものである。

1122・1134・1135は砥石である。

1122・1134は平板的でやや硬質な砂岩を素材とするもので、使用時の擦痕等が認められる。

1135は、やや軟質な砂岩を素材とするもので、側縁部に整形時の敲打痕が認められる。機能面は平坦であり、中央部に幅1.4cmと0.9cmの溝状の使用痕がある。攻玉用の砥石である可能性も指摘できる。

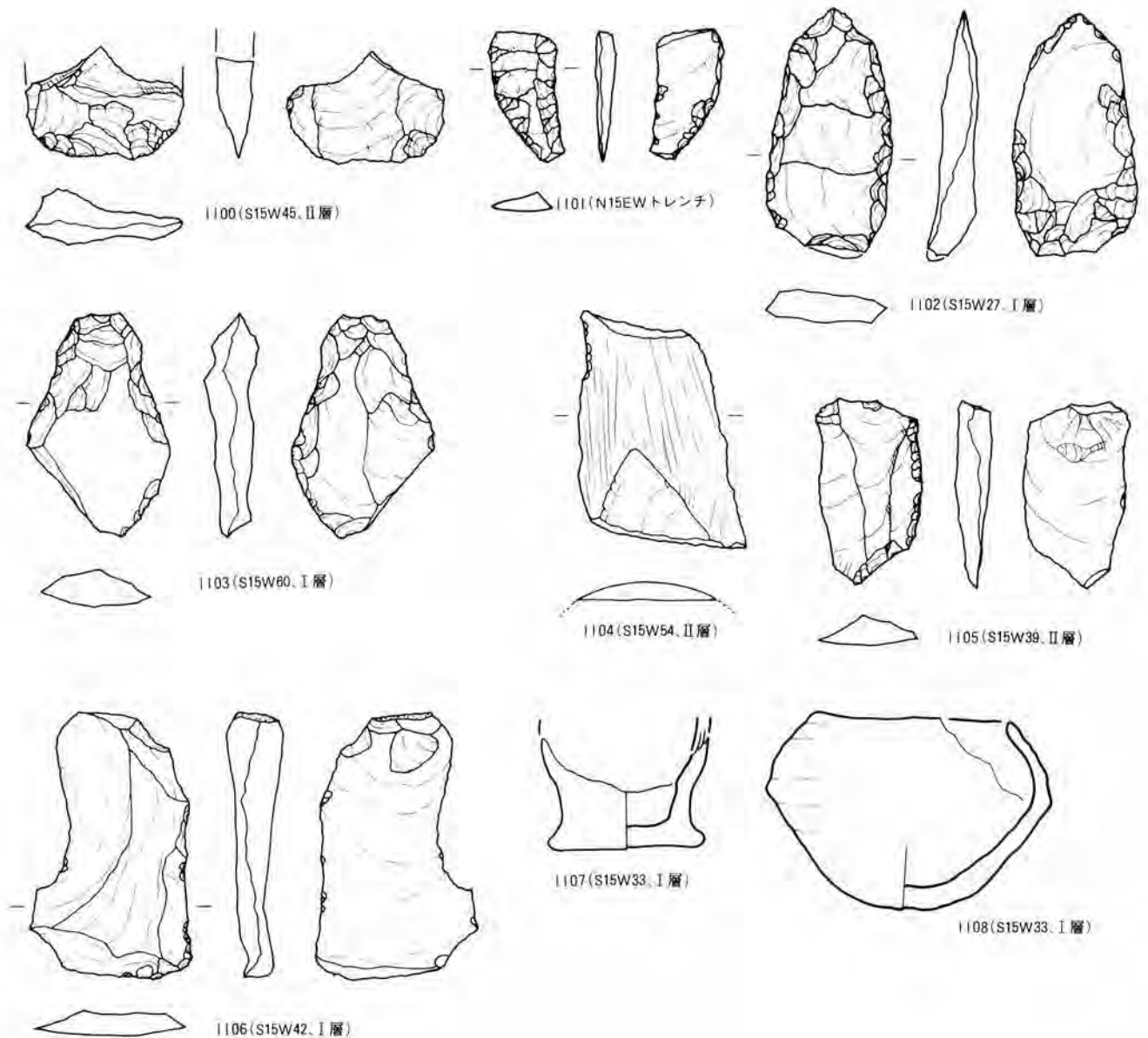
845・846は砥石または石皿の残欠であるが、破損が著しくいずれとも決めかねる。

土製品 (第84図)

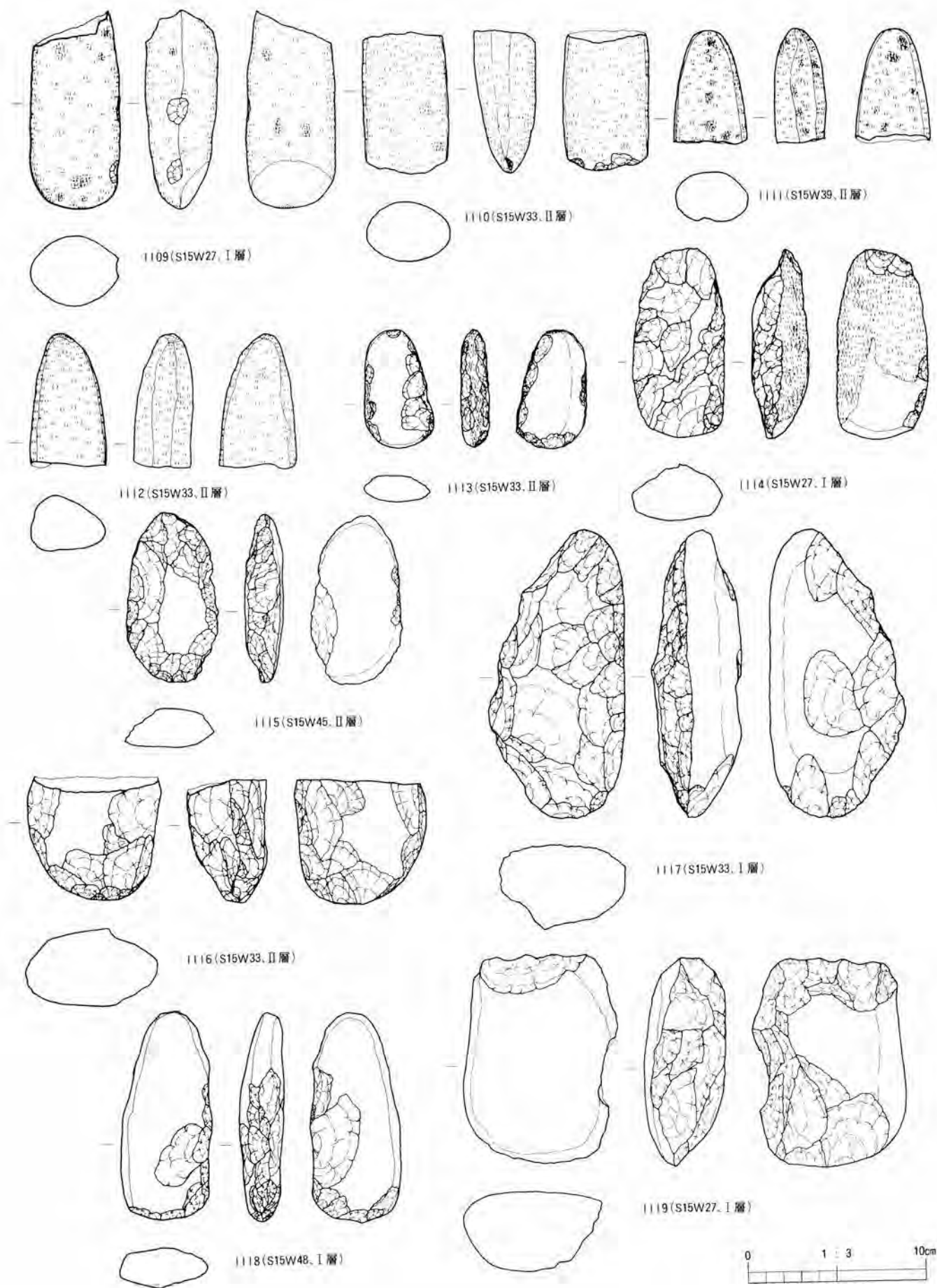
1107・1108はミニチュア土器である。1108はソロバン玉状を呈する浅鉢で、1107は底部の張り出す深鉢である。いずれも無文であり、時期は特定できない。

石製品 (第84図)

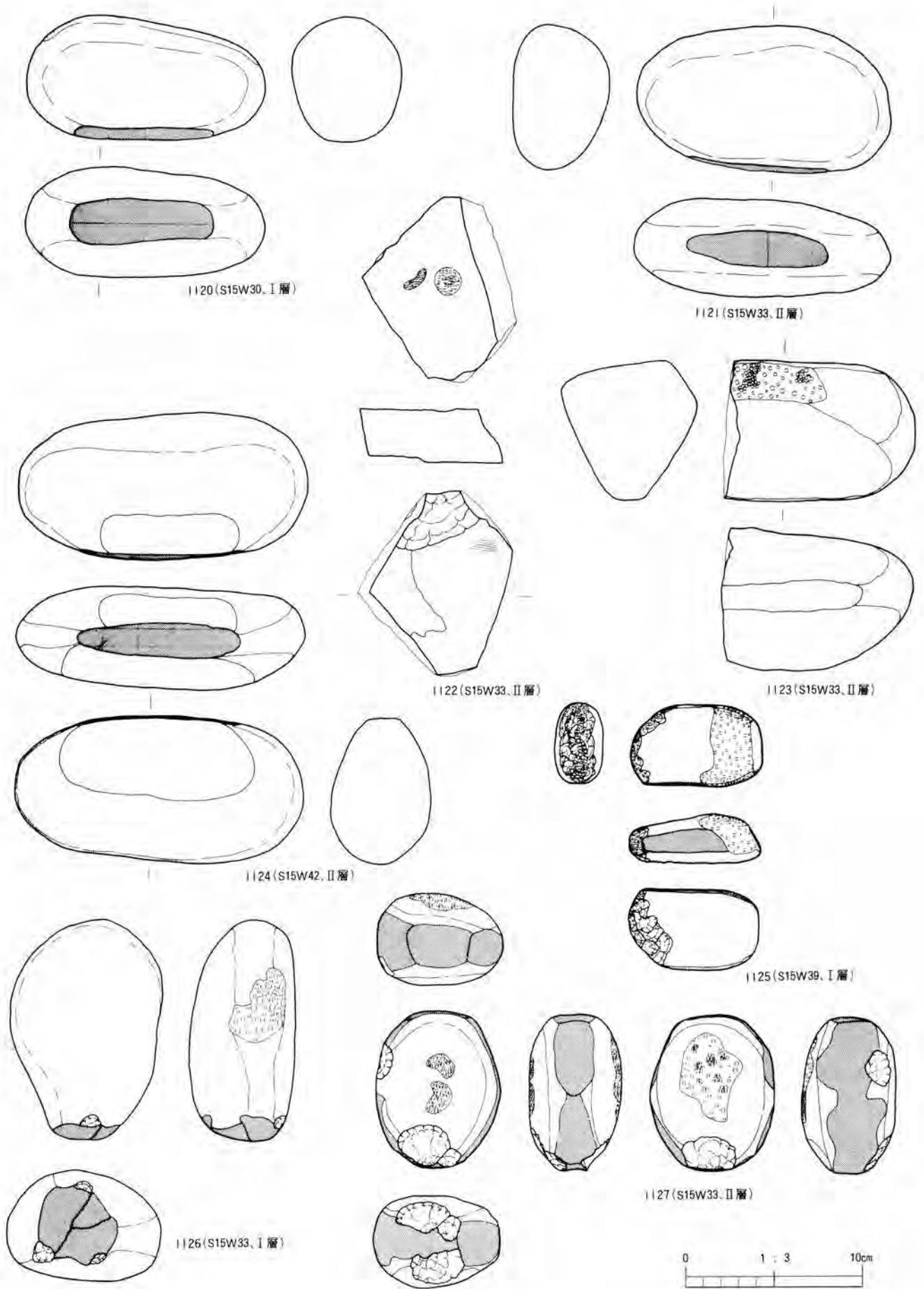
1104は石棒と思われるものの破片で、表面に擦痕が認められる。



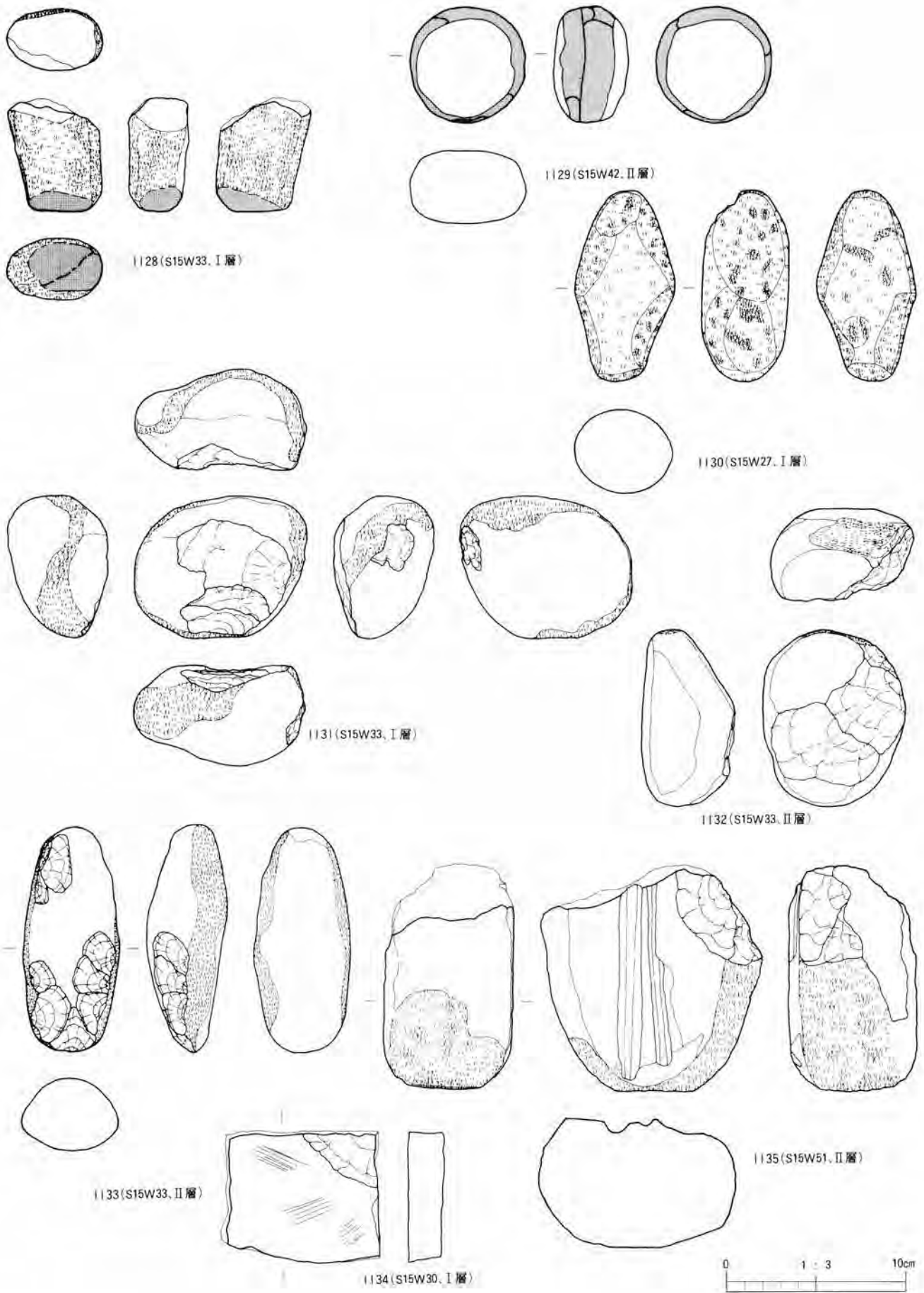
第84図 西集落出土遺物(11)



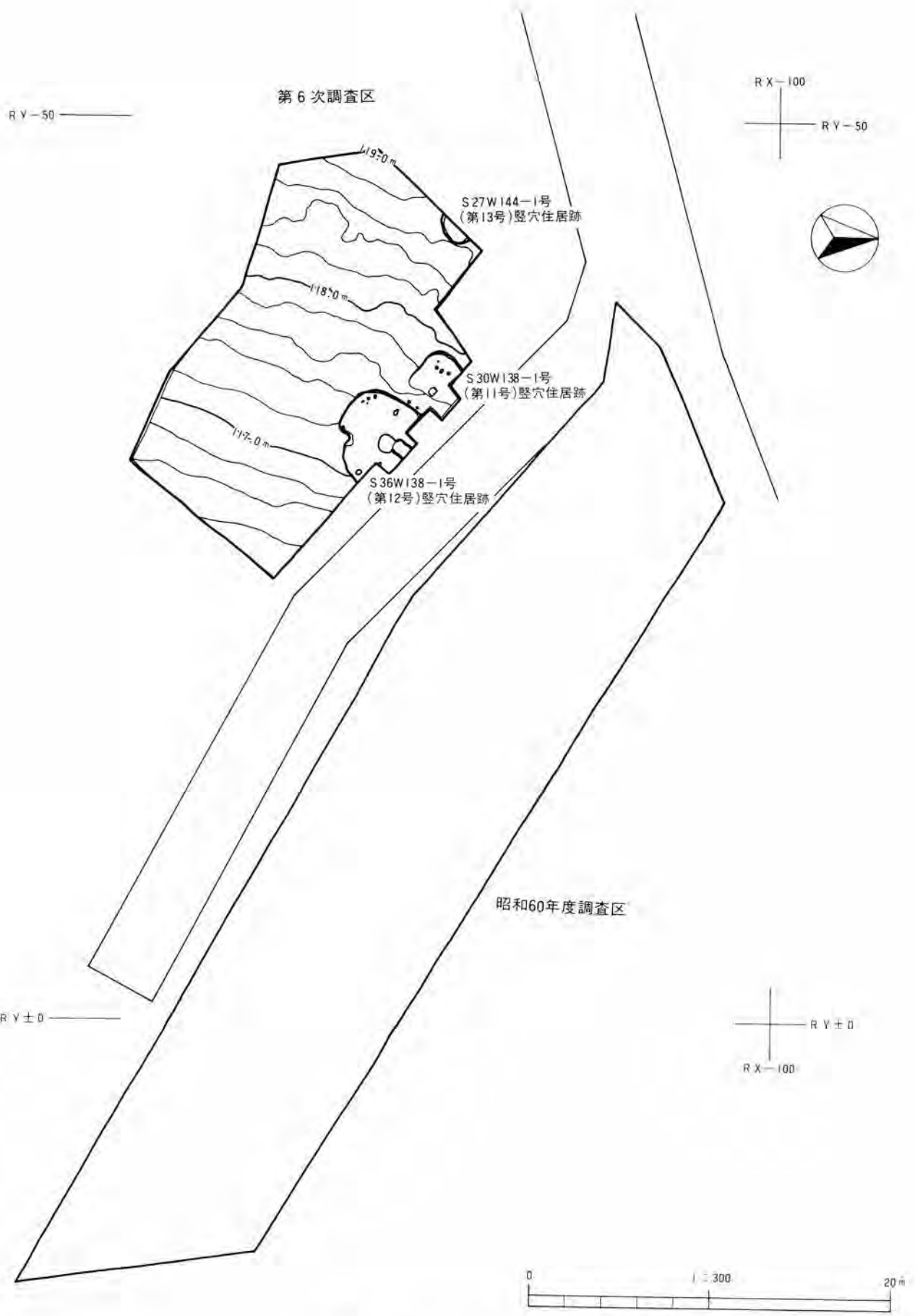
第85図 西集落出土遺物(12)



第86図 西集落出土遺物(13)



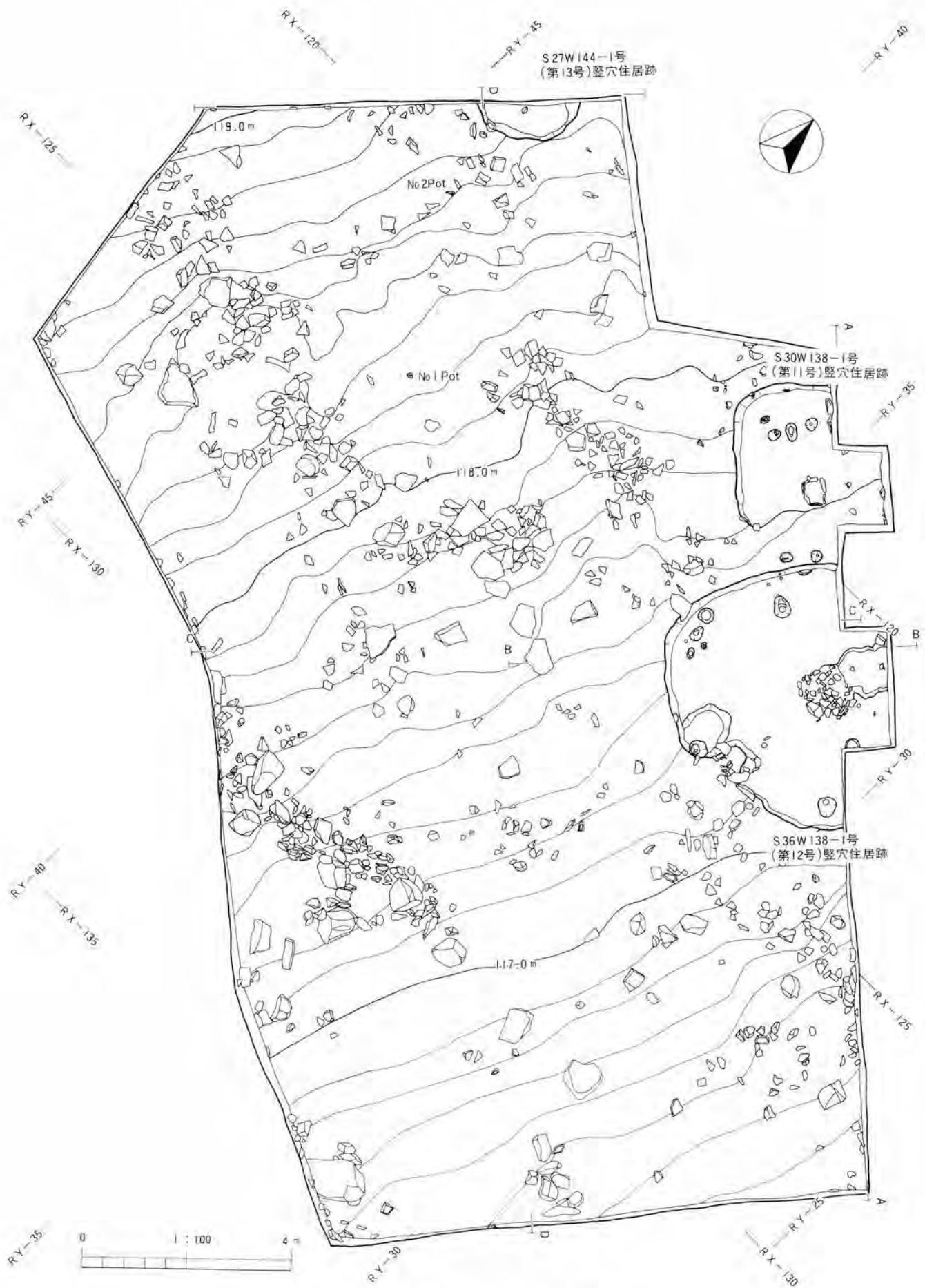
第87図 西集落出土遺物(14)



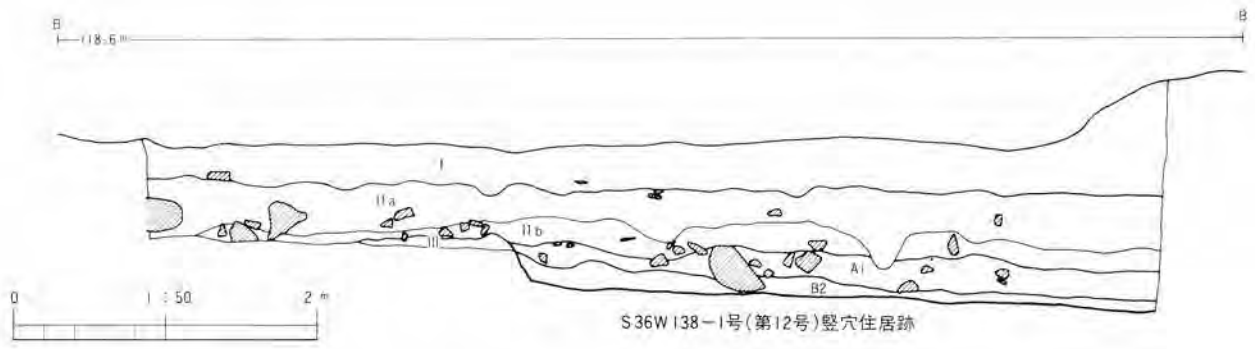
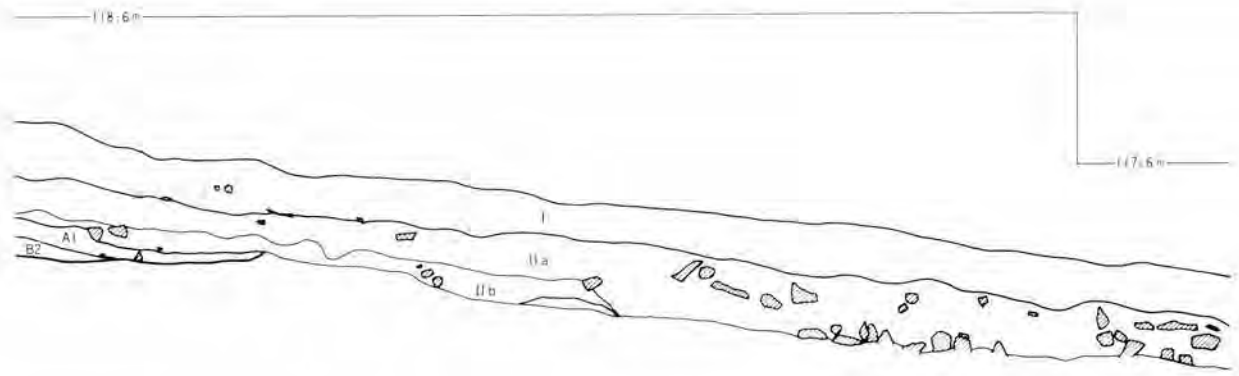
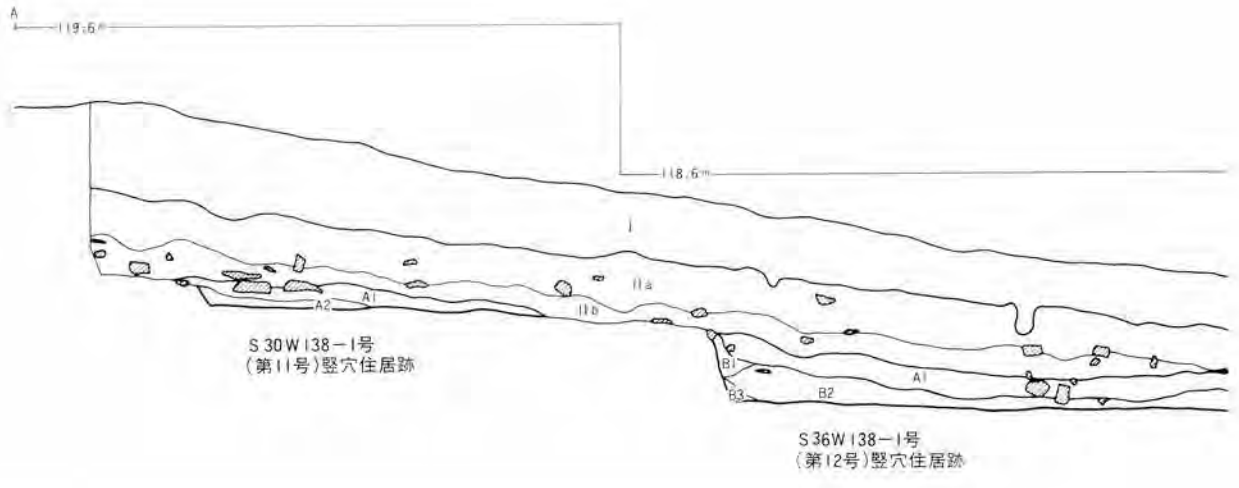
第88図 西集落西部調査区設定図



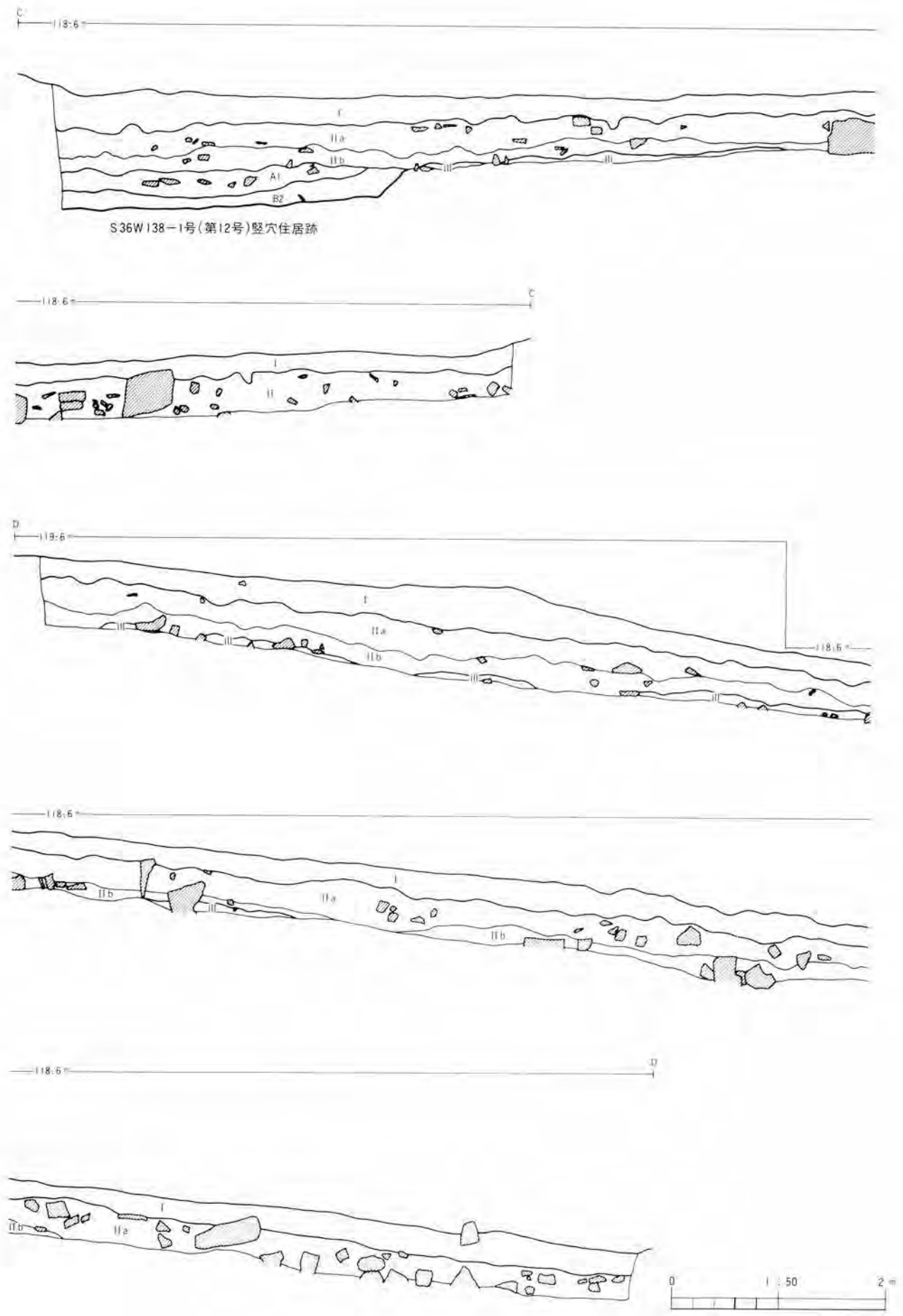
昭和60年度調査区と出土遺物



第89図 西集落西部検出遺構配置図



第90图 西集落西部土层断面图(1)



第91图 西集落西部土层断面图(2)

e-2) 西集落南部

この地点では範囲確認調査と並行して平成3年度に個人住宅建築に先立つ緊急調査(第6次調査)を実施している。また、これらの隣接地でも昭和59~60年度に宅地造成に先立つ緊急調査(以下「昭和60年度調査」とする)を実施している。昭和60年度調査の内容は『崎山報文87』に報告されているが、この記載内容に不明な点が多いため第6次調査区を中心に記述する。因みに昭和60年度調査区からは土坑跡3基と中期を主体とする遺物包含層が検出されている。

西集落南部の基本層序は台地上部とはやや異なり次のとおりとなっている。

- I層 やや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊や黒褐色土塊を含む。やや固いがしまり具合は中程度である。
- II層 黒褐色土層で、基本土の色調や混入土の状況により2層に細分される。
 - II a層 やや暗い黒褐色粘質土を基本土とし、黒色土塊などを多く含む。固さは中程度でややしまりがない。遺物を最も多く含む。
 - II b層 a層よりやや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やや柔らかくあまりしまりがない。遺物を多く含む。
- III層 やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。漸移層であり、下層のIV層へ漸移的に移行する。遺物はほとんど含まない。
- IV層 地山層であり褐色粘質土を基本土とする。遺物は含まない。

西集落南部は西から東へ下る比較的斜度のある傾斜面であるにもかかわらず、第6次調査区北半部を中心に縄文中期中葉~末葉の竪穴住居跡を3棟検出した。

これらはいずれもIII層上面で検出しておりII b層に覆われている。

第6次調査区内ではIV層中に角礫~亜角礫を多量に含んでおり、ここから遊離した礫がIII層~II層にかけても含まれている。

当初、配石や集石などの遺構となる可能性も想定して、部分的にはあるが礫群の下部を掘り下げてみたが特に掘り込み等はみられずIII層中に一様に礫が包含されている状況を確認することができた。

また、円礫~亜円礫などの異地性の礫も含まないことから、この礫群はIV層堆積時に後背山地である館ヶ森方面から供給された崖錐性堆積物であると判断した。

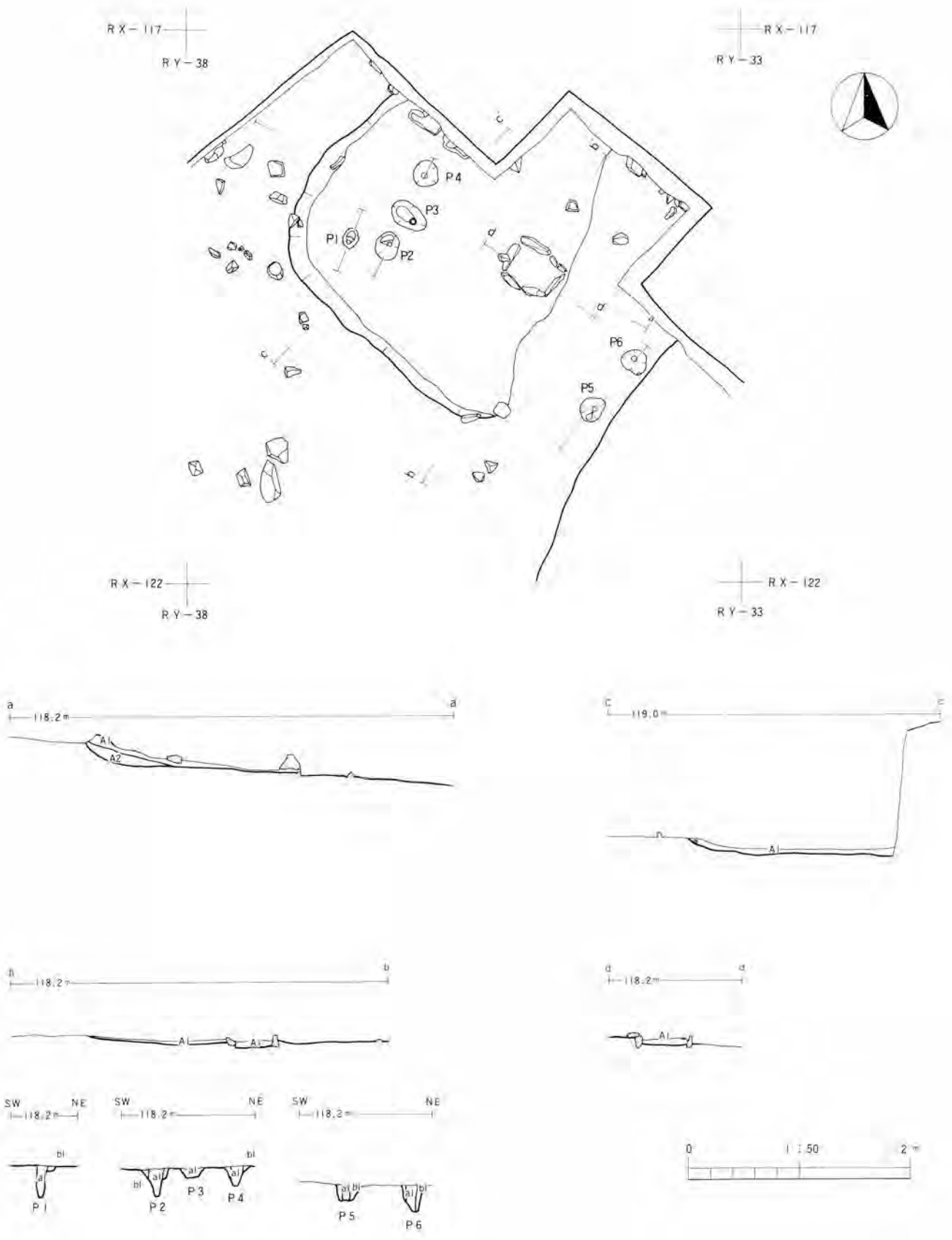
ところで、竪穴住居跡はこの礫群の比較的少ないところを選んで占地しているように見える。以下、検出した遺構について述べる。

i) 竪穴住居跡

S30W138-1号(第11号)竪穴住居跡(第92図)

調査区西端部に位置する。S36W138-1号竪穴住居跡に隣接するが重複はしていない。斜面下位の東半部は失われており、全体の1/2程度を精査した。

平面形は隅丸方形を呈し、規模は北東-南西方向で2.8m以上、北西-南東方向で2.5mを計る。壁はややなだらかに立ち上り、壁高は最深部(北壁)で0.2mを計る。主軸方向はN53°40' Wである。(これと直交したN36°20' Eとなる可能性も考えられる)。



第92図 S30W138-1号(第11号)竪穴住居跡

埋土はA層のみで、2層に細分される。A1層はやや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊を含む。A2層は暗褐色粘質土を基本土とし、やや明るい暗褐色土塊や褐色土塊を含むがA1層に比して褐色土塊の混入率が高い。

いずれの層も固さ、しまりともに中程度である。

床面はほぼ平坦で固いが、東端部（炉付近）でやや柔らかくなる。貼床は認められない。

柱穴はP2・P4～P6が主柱穴に相当し、いずれも柱痕跡を確認している。P4とP6を結ぶ線がほぼ中軸線と一致することから、調査区外に2口の柱穴が存在するものと思われ、柱穴配置は6本柱となる可能性が高い。

柱間寸法は各々芯々でP2とP4が0.7m、P5とP6が0.6m、P2とP5が2.38m、P4とP6が2.53mを計る。これら以外は、P1は柱穴であり柱痕跡がみられる。また、P3はやや浅いピットである。

炉は長方形の石囲炉で炉の長軸が住居跡の主軸方向にはほぼ一致する。規模は長軸で0.53m、短軸で0.46m、炉床までの深さ0.09mを計る。

炉の構築方向は、炉よりひとまわり大きい楕円形の掘り方にK1層をつめながら炉石を埋設している。炉石は、やや焼成を受けているものの炉床はやや柔らかくほとんど焼成を受けていない。

出土遺物（第94図）

埋土が浅いこともあり遺物の出土量は少ない。

1136はA1層から出土したもので、口縁部に4単位の大突起を持つキャリバー形深鉢である。

大突起間には山形の小突起を配する。施文は口縁部文様に集中し、大突起部に「C」字形の貼付文を施し、大突起間を波状の隆起線で連絡する。大突起下部には隆起線による渦巻文を施し、この間を横位長楕円形で連絡する。口縁部文様帯の最下部は横位1条の隆起線をめぐらせて区画している。地文はL-R単節斜縄文で、口縁部は横方向に、体部は縦方向に回転させる。

1137・1138は隆沈線および沈線により施文される深鉢の口縁部である。1139はキャリバー形深鉢の破片で、口縁部に隆起線による施文がみられる。1140～1143は沈線により施文されるものであるが、1143には楕円形の連続刺突文が伴う。1144は櫛目文を地文とする小形深鉢の口縁部破片である。

これらはいずれも大木8a式に伴う。

S36W138-1号（第12号）竪穴住居跡（第95図）

調査区北端部に位置する。S30W138-1号（第11号）竪穴住居跡部に隣接するが重複はしていない。全体の4/5程度を精査した。

平面形は隅丸の多角形（五角形か）を呈し、規模は北東～南西方向で4.1m以上、北西～南東方向で5.1mを計る。壁は直壁で、壁高は北壁で0.45m、南壁で0.05mを計る。主軸方向はN27°Eである。

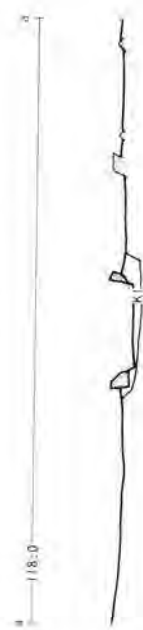
埋土はA層～C層に大別される。A1層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊をわずかに含む。固さは中程度でややしまりが無い。B層は3層に細分される。B1層とB3層はいずれも暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を多量に含む。固さは中程度であるが締まりが無い。

R X-118
R Y-36

R Y-34
R X-118



〈使用時〉



R X-120
R Y-36

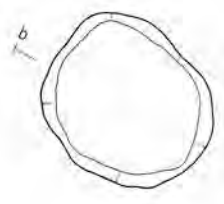
R X-120
R Y-34

a

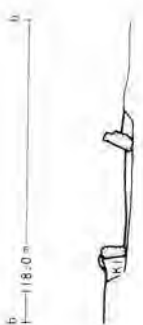
b

R X-118
R Y-36

R Y-34
R X-118



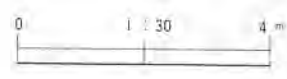
〈構築時〉



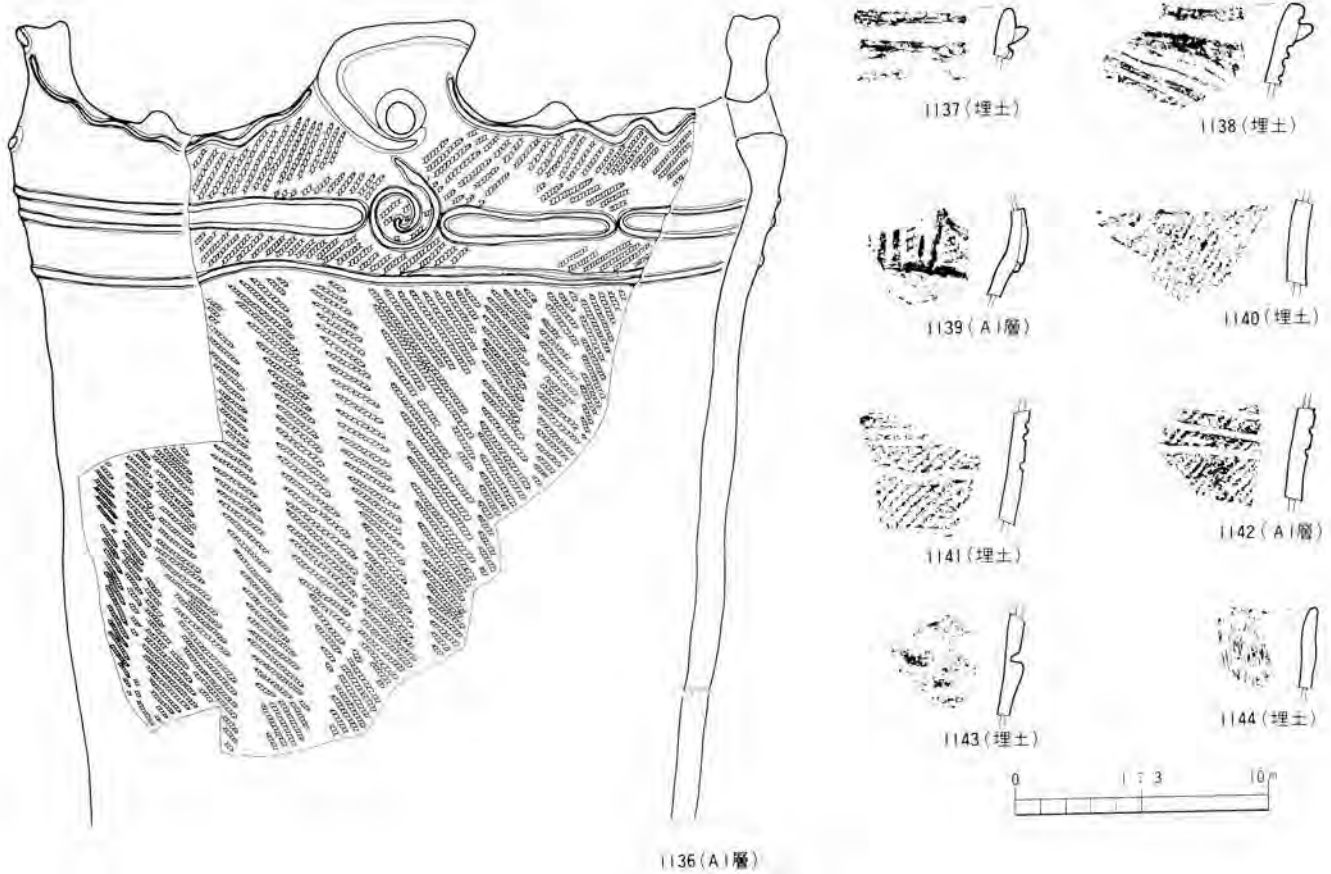
R X-120
R Y-36

R X-120
R Y-34

a



第93図 S 30W138-1号(第11号)竪穴住居跡・炉



第94図 S 30W138-1号(第11号) 竪穴住居跡出土遺物

両層とも北西部の壁際に堆積するが、一部南西部の壁寄りにも堆積している。壁の崩壊土と思われる。B 2層はやや暗い暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。固さは中程度でややしまりがない。C層は炉を覆う土層で、2層に細分される。C 1層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土粒をわずかに含むほか炭化物粒や焼土粒をわずかに含む。柔らかくしまりがない。床面はほぼ平坦で固く、貼床は認められない。

柱穴はP 2・P 6・P 7が主柱穴に相当する。いずれも柱痕跡を確認している。調査区外にも柱穴が存在する可能性があり、柱穴配置は不明である。

柱間寸法は、各々芯々でP 2とP 6が3.15m、P 6とP 7が2.7m、P 2とP 7が3.8mを計る。

これら以外は、P 1が周溝状のピットで、P 3～P 5・P 8は浅いピットである。

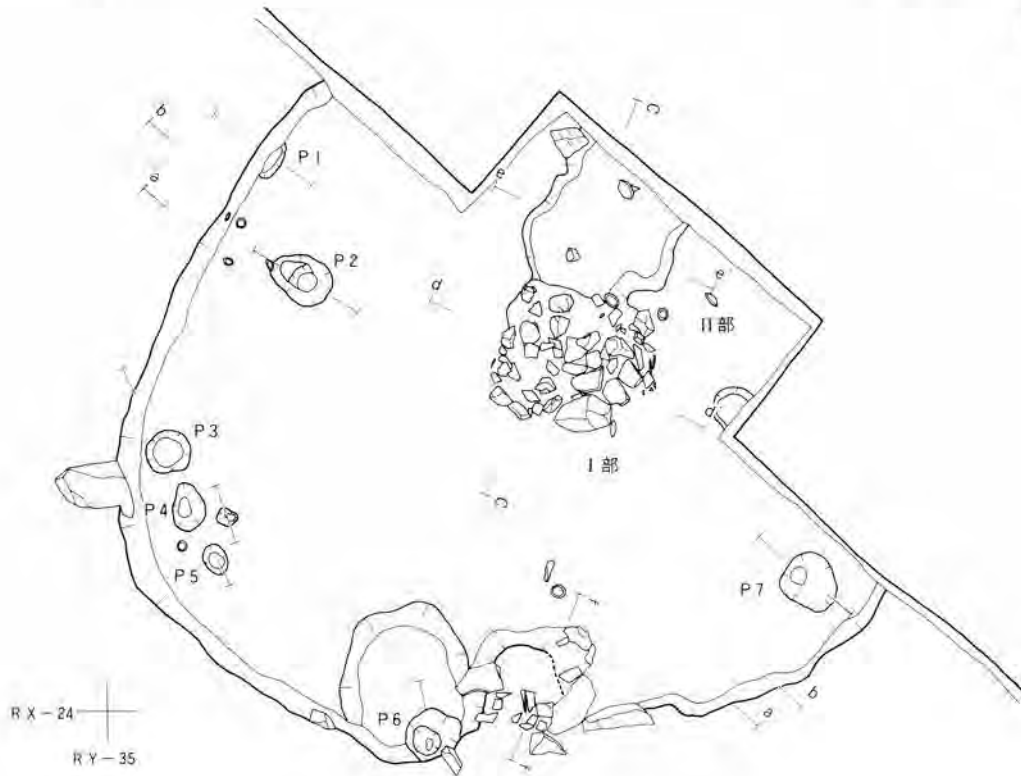
炉は石組複式炉で、床面中央から北東に寄る。柱穴による主軸方向と炉の主軸方向がほぼ一致している。炉の各部をI部、II部として説明する。

I部は不整形の石組炉で、径1.0mを計る。炉の壁際に炉石や土器片を埋設する。また、炉床にも敷石状の礫がみられるが、大半は原位置を留めていない。炉床はほとんど焼成を受けておらず、焼土層がみられない。II部は不整形の掘込みで、北東～南西方向で0.9m以上、北西～南東方向で1.0m、深さ0.12mを計る。底面はやや柔らかく焼成は受けていない。

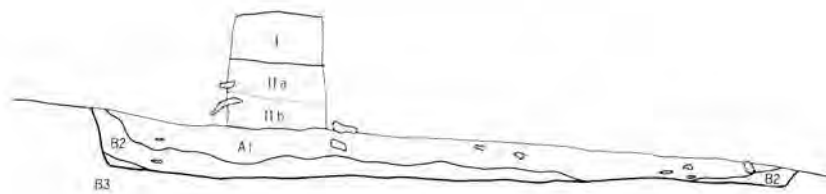
炉の構築方向は、I部を東西1.45m、南北1.1m、深さ0.5mの不整形楕円形に、II部を不整形に掘り下げた後、I部に、K 2層をつめ、さらに炉石をすえながらK 1層をつめている。K 1

R Y - 35
R X - 119

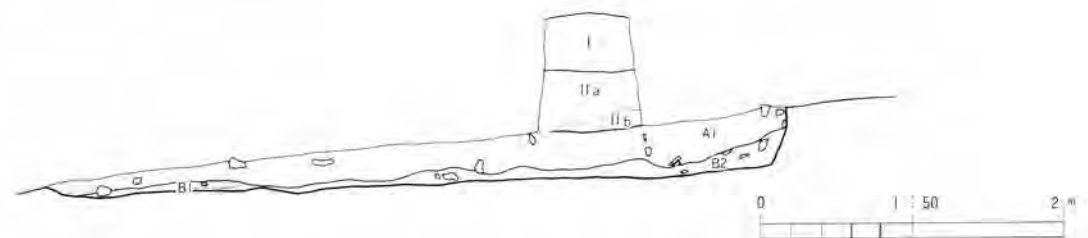
R Y - 30
R X - 119



a 19.0



b 19.0



第95図 S 36W138-1号(第12号) 竪穴住居跡(1)

層は黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。K 2層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを多量に含む。いずれも固さ、しまりともに中程度である。

出土遺物（第98図・第99図）

遺物の出土量はやや少ない。住居跡に伴うものとしては、1149が炉石とともに埋設されていた土器片であり、1198～1200は床面に密着して出土したものである。また、炉を覆うC層からの出土遺物は住居跡廃棄直後の遺物と思われる。埋土遺物はA 1層とB 1層からのみ出土しており、前者からのものがやや多い。

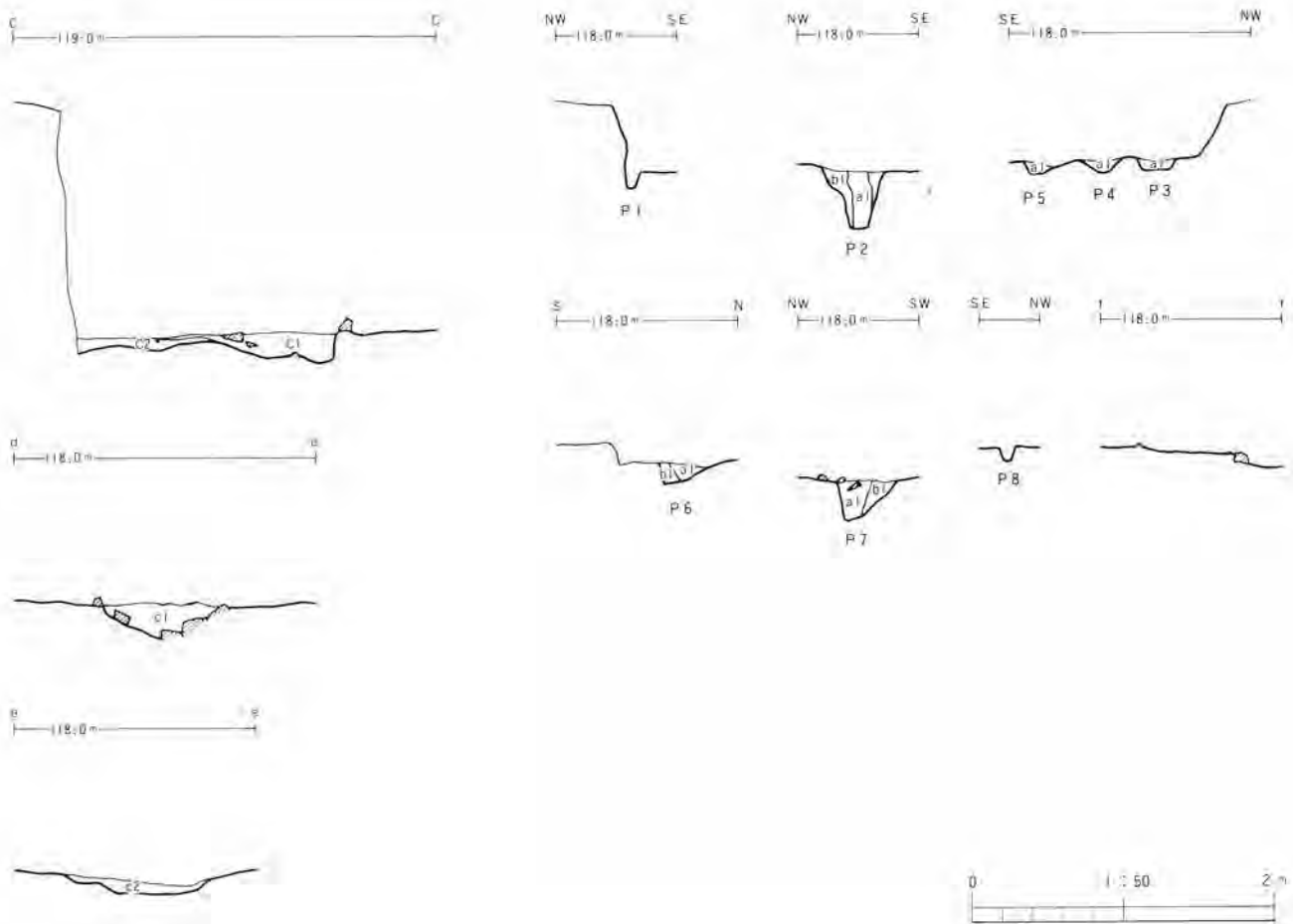
1149は炉に埋設されたもので、平行沈線による施文がみられる。

1145・1147・1148・1150はC 1層から出土したものである。1145は口縁部が内湾する小形深鉢で、口縁部に4単位の大波頂を有する。波頂には隆沈線による渦巻文を施す。波頂下と波頂間に隆沈線による懸垂文を施すことにより縦位の区画文を形成している。地文はL-R単節斜縄文を縦方向に回転させるが、隆沈線の施文以前に施されている。

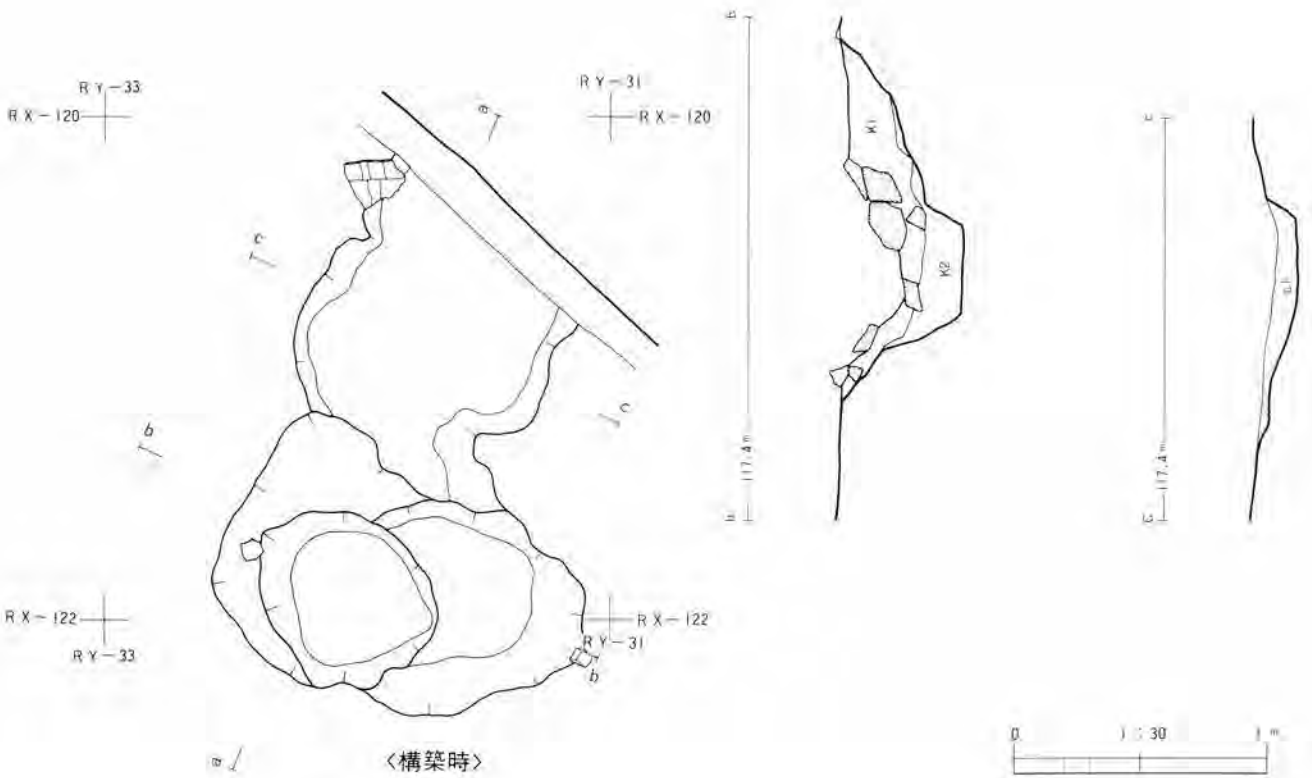
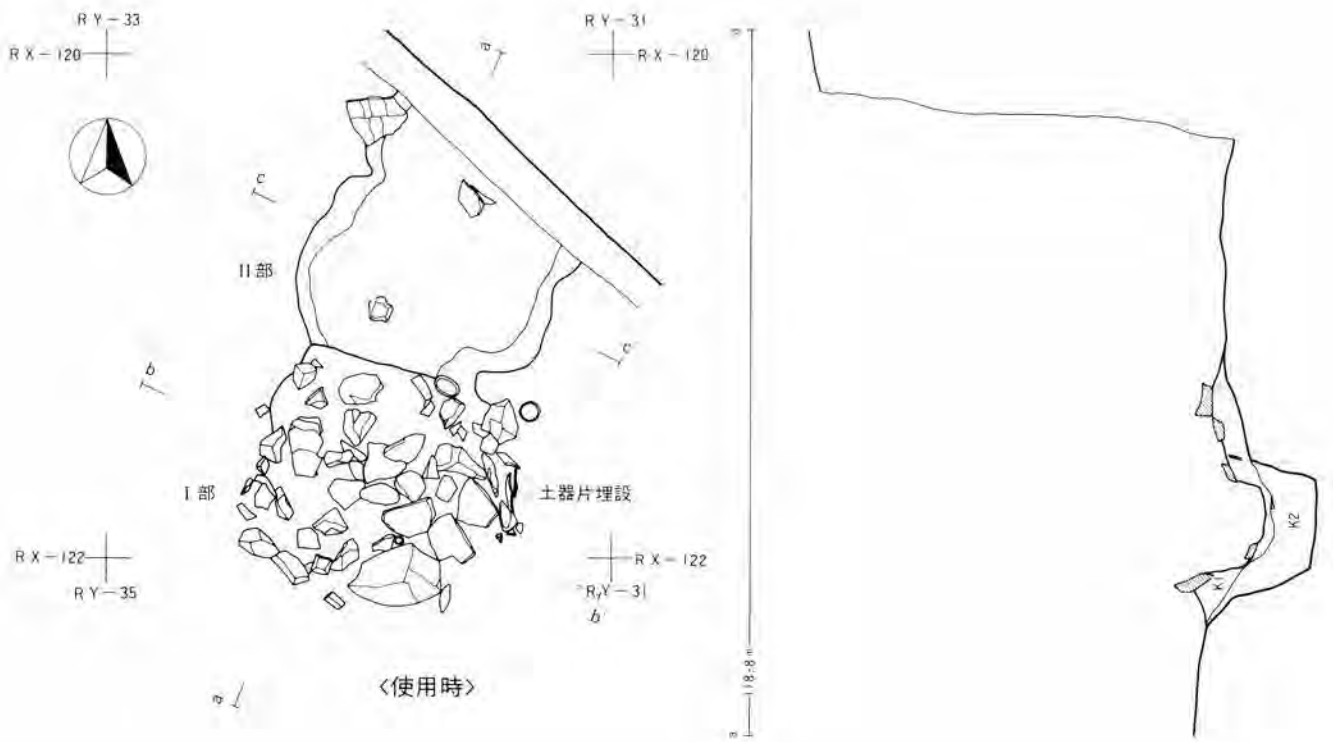
1147・1148・1150は口縁部に隆起線を施すもので、1147・1148は頸部以下に平行沈線文による施文がみられる。

1151～1160はB 2層出土遺物である。1152は磨消技法により施文される。内面の調整方向により横位の施文と考えたが、縦位楕円形区画文となる可能性も大きい。

1154は隆沈線により施文されるものである。



第96図 S 36W138—1号（第12号）竪穴住居跡(2)



第97図 S36W138-1号(第12号)竪穴住居跡・炉

1155～1157は調整の不十分な隆起線により施文されるもので、1155はキャリパー形深鉢となる。

1151は口縁部が外反し体部が膨らむ深鉢で、頸部に施された横位2条の平行沈線間を2段の連続刺突文で充填している。1153・1158・1159も平行沈線により施文されるものである。

1161～1169はA1層出土遺物である。1161は口縁部がわずかに外反する深鉢で、磨消技法により区画文を施す。

1163・1166は隆沈線により施文されるものである。

1162はキャリパー形深鉢で、口縁部上端に隆沈線による施文があり、その下位に横位の平行沈線による施文がみられる。

1165は頸部が強く屈曲する深鉢で、細い隆起線による施文がみられる。

1164・1167～1169は平行沈線により施文されるもので、1169は波状に懸垂し、他のものは横位に施文される。

1146・1170～1196は埋土出土遺物である。遺構検出時に出土したものが大半であるため、ほとんどがA1層から出土したものと思われる。

1146は磨消技法により曲線的な区画文を施すものである。

1170～1173も磨消技法により縦位の区画文を施すものである。1172は口縁部付近がわずかに外反する深鉢である。

1174～1173は隆沈線により施文されるものである。いずれも小破片であり全体のモチーフが不明ではあるが縦方向と横方向に展開する施文がみられる。1174・1175は口縁部がわずかに内湾する深鉢である。

1192～1196は主体的施文のないものである。1192は口縁部破片で良く整形されている。1193・1194はL-R単節斜縄文を地文とするものである。1195は綾絡文を地文とするものである。1196は網目状燃糸文を(?)を地文とするものである。

1197はA1層から出土した石製円盤で、扁平円盤の周縁を幅0.5cm程度に擦ったものである。部分的には擦痕は認められるものの両面ともに大きく自然面を残す。長径4.9cm、短径3.8cm、厚さ1.1cm、重量27.2gを計り、扁平円盤Aグループに含まれるサイズである。

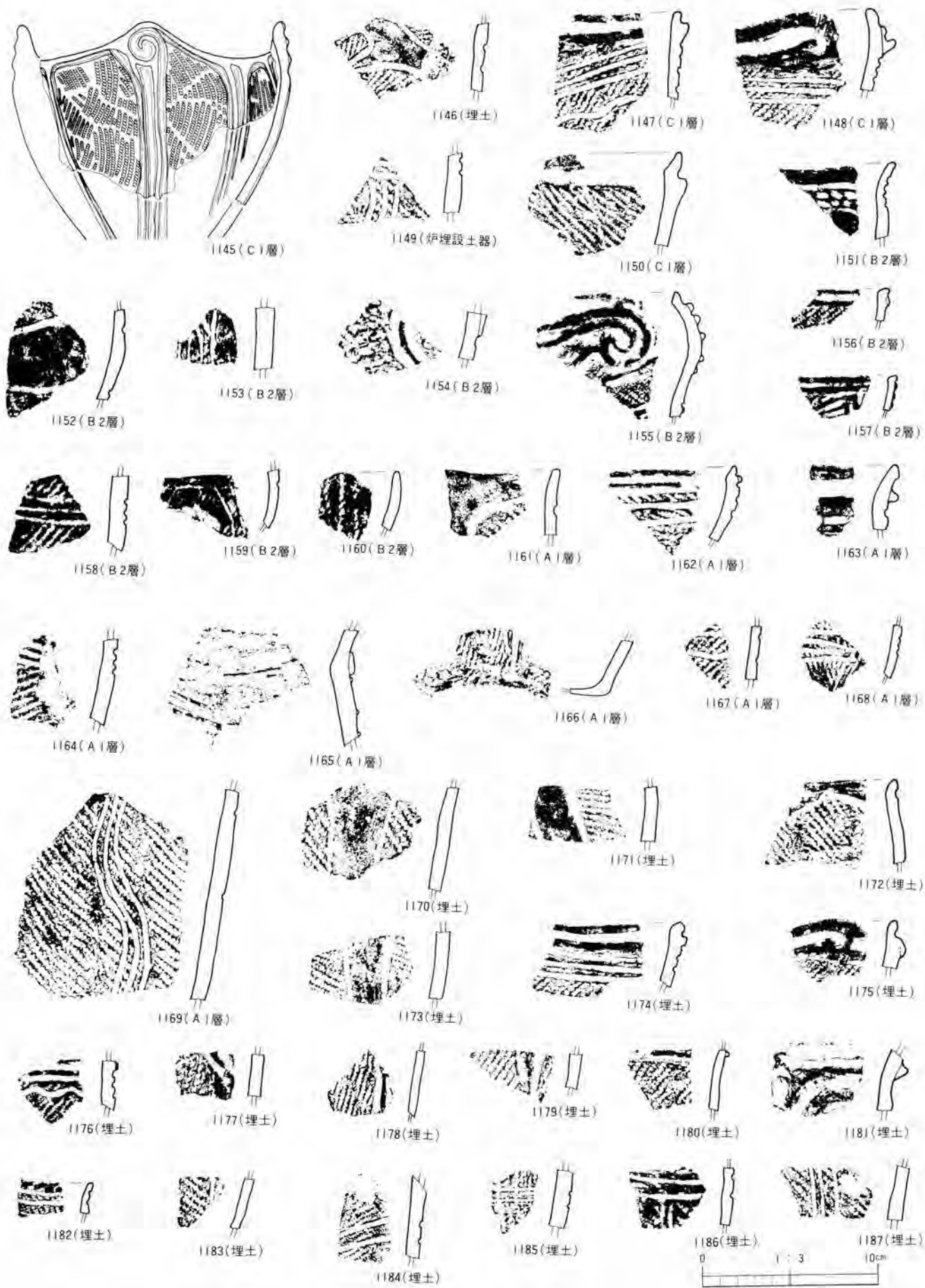
1198～1200は床面の西壁寄り出土したものである。

1198は石皿で、長さ18～19cm、推定幅9～10cmを計る不整楕円形の凹んだ使用痕を両面に有する。凹部の一端は抜けており、三方に縁を有する。長軸方向に使用したようで、この方向に擦痕が多くみられる。両面ともに凹部の周辺には、まばらな敲打痕を有する。1199も石皿かと思われ片面に磨面があり、まばらな敲打痕と敲打痕の集中する部分が認められる。明瞭な擦痕は認められない。

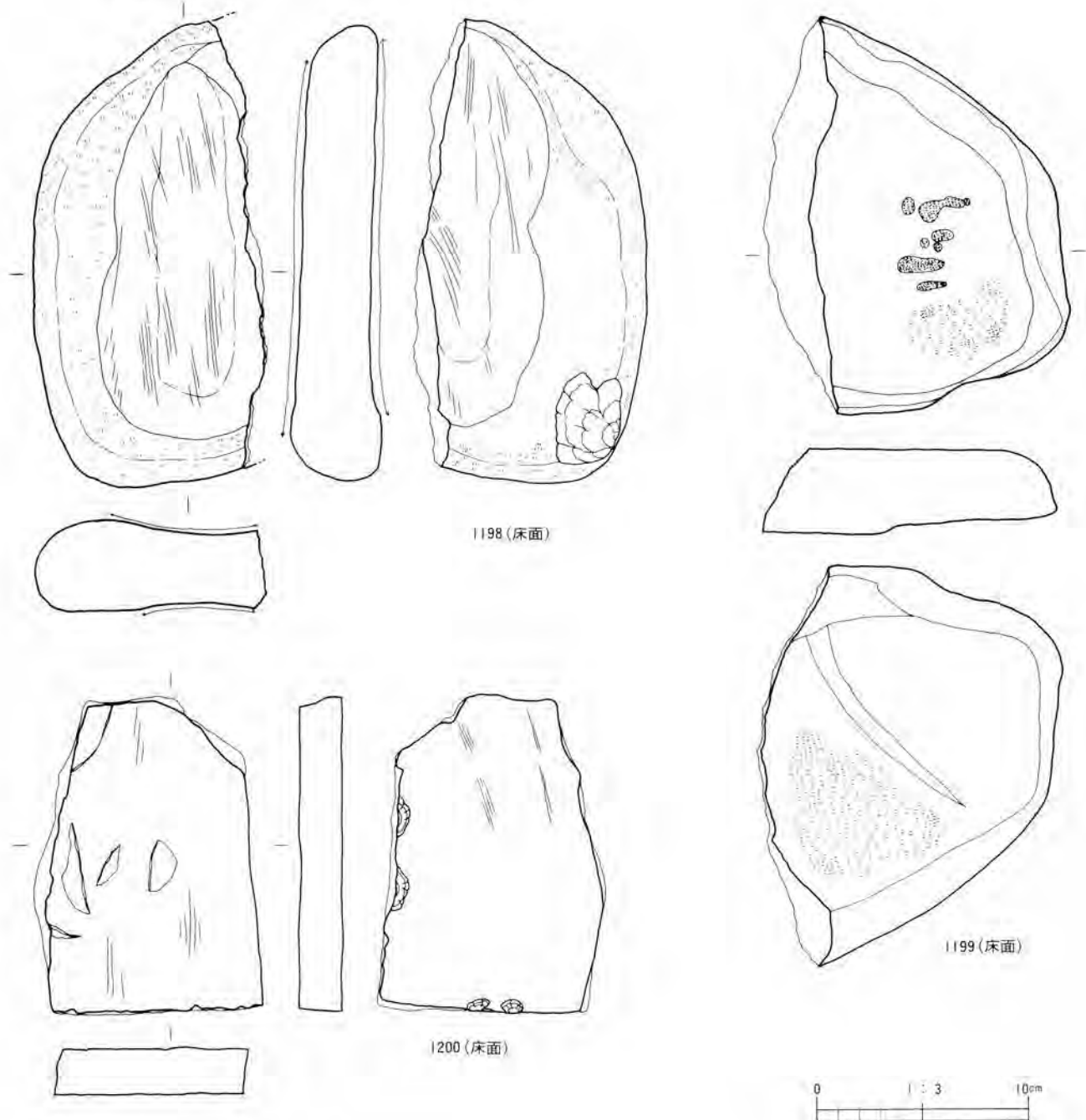
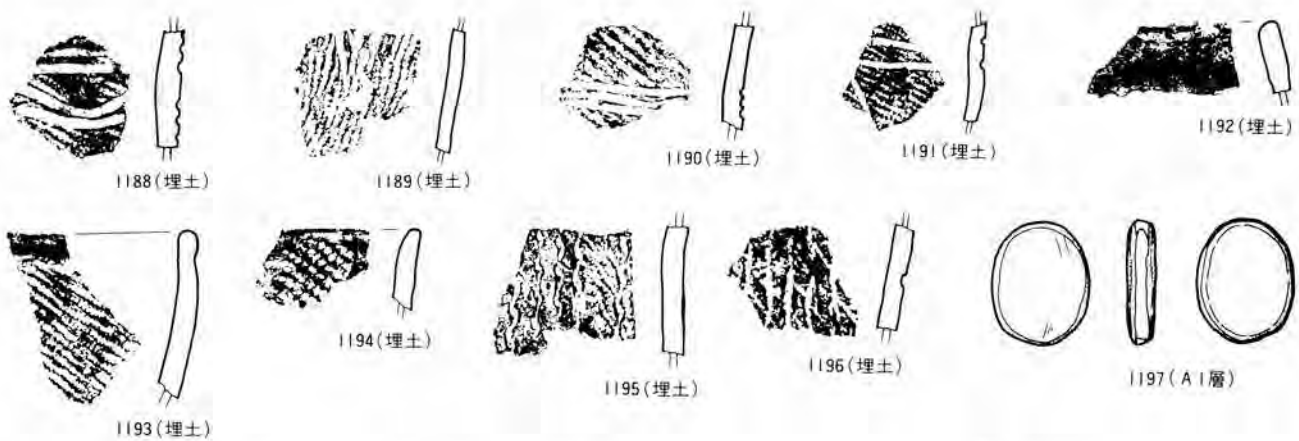
1200は砥石で、両面ともに平滑な磨面を有する。

第Ⅸ群

出土遺物のうち、床面やC1層から出土したものは大木8b式に伴うもので、本住居跡の所属時期を決めるものである。また、これより上層は大木8b式のほか磨消技法による大木9式～大木10式に伴うものが混在している。



第98图 S 36W138—1号 (第12号) 竖穴住居跡出土遺物(1)



第99図 S36W138-1号(第12号)竖穴住居跡出土遺物(2)

S 27W144-1号(第13号) 竪穴住居跡(?) (第100図)

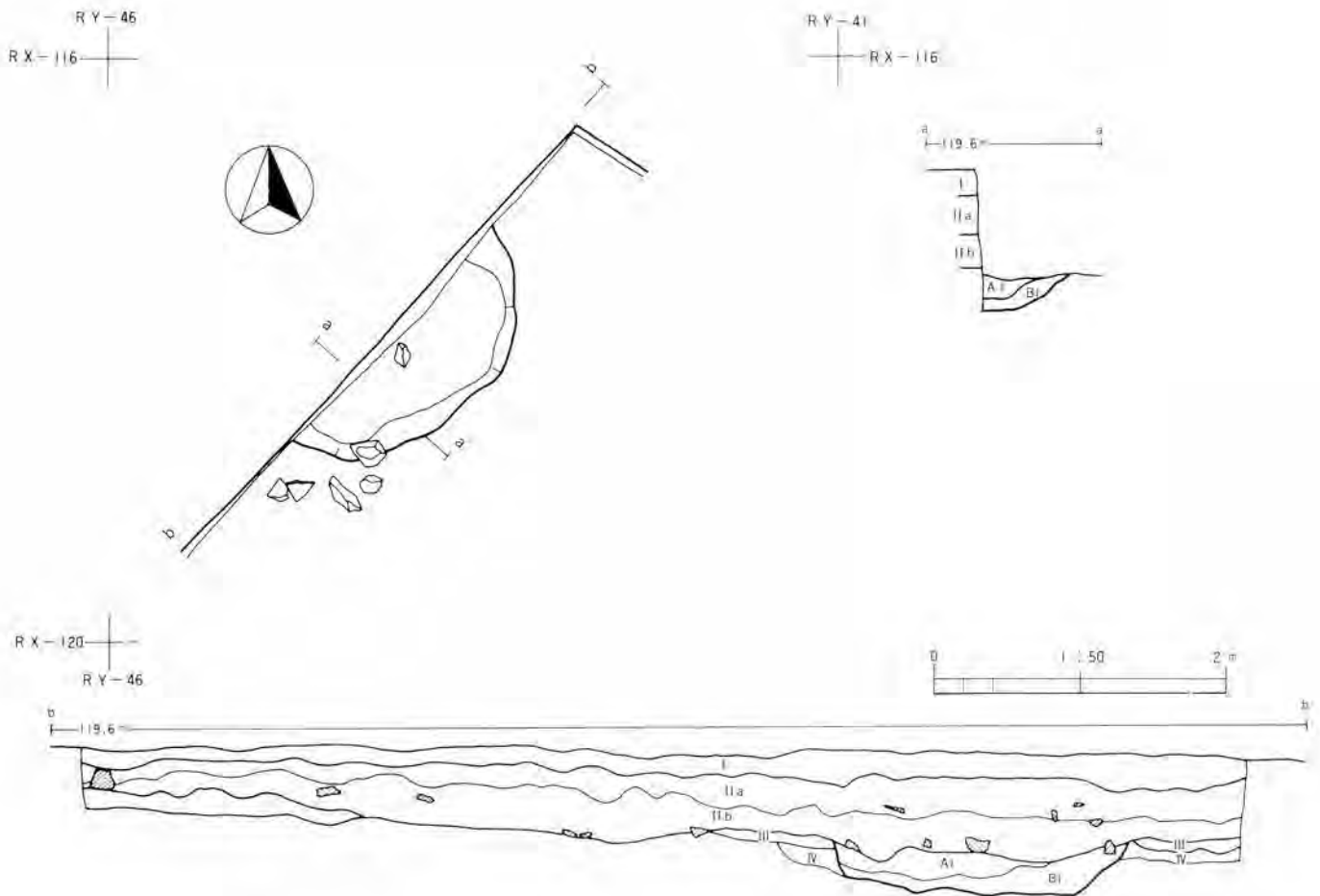
調査区北西部に位置し、他の住居跡からはやや離れている。調査区内に北東～南西方向に2.0m、北西～南東方向に0.65mを精査したのみで、柱跡や炉などの付属施設は検出されなかった。住居跡とする根拠は乏しいのではあるが、フラスコピット等の土坑跡とも考えづらいため、とりあえず住居跡とし、新しい所見があれば後日訂正することにした。

埋土はA層・B層に大別される。A1層は黒褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊を含む。B1層は暗褐色粘質土を基本土とし褐色土塊を多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

壁はやや外傾し、深さ0.35mを計る。床面はやや凸凹があるが、やや固い。

出土遺物(第101図)

1203はA1層から出土したもので、磨消技法による曲線的な区画文を施文する。大木10式に 第XI群 伴う。



第100図 S 27W144-1号(第13号) 竪穴住居跡

遺構外出土遺物（第101図～第107図）

調査区内で確認された土層は、前述したとおりⅠ層～Ⅳ層までである。Ⅰ層は表土層であり、縄文時代の遺物をやや多く含むが、陶磁器片や鉄器（釘等）などの中世以降の遺物も含まれている。近代～現代の遺物は図示しなかった。

Ⅱ層は縄文時代の遺物包含層で上下2層に細分される。縄文時代前期前葉から中期末葉にわたる遺物が出土しているため、Ⅱ層が堆積した時期は中期末葉となる。細分層に型式差があるかどうかは遺物量が少なく不明である。

Ⅲ層は漸移層であり遺物は含まれない。遺構はすべてⅢ層上面で検出している。ただし、昭和60年度調査区ではⅢ層に対応する層から相当量の遺物を検出している。

Ⅳ層は地山層であり遺物を含まない。

1201・1202・1204～1237はⅡb層出土遺物である。1201と1202はややまとまった状態で出土した。他のものは破片で出土し、接合したものはほとんどない。

1201は口縁部が直立し、体部中央が強く張り出すつぼ形の器形を呈する。口縁部を無文帯とし体部上半に主要な文様帯を有する。文様帯上下の境界を断面三角形の横位隆起線で区画し、内部に円形の縄文区画文と無文帯を施す。体部下半は地文帯となる。地文はR-L-R複節斜縄文を縦方向に回転する。大木10式に伴う。

1202は深鉢の底部付近で、L-R単節斜縄文を縦方向に回転する。

1204は体部の屈曲する深鉢で、体部に曲線的な縄文区画文を施す。大木10式に伴う。

1205～1215は隆沈線により施文されたものである。1205～1207は比較的丁寧に調整された隆沈線により懸垂文を施文する。1205はやや口縁部の内湾する小形の深い鉢である。これらは大木8b式の新しい部分に伴う。

1208～1215はやや調整が不十分な隆沈線により施文されるもので、文様が横方向へ展開するものが多い。1212はキャリパー形深鉢で口縁部文様帯に横位の波状隆起線や隆沈線などを施文する。頸部と体部文様帯上端にはいずれも横位4条の平行沈線がめぐり、体部文様帯へは懸垂文や横位波状文などが施文される。1208・1210・1211・1213・1214は口縁部が内湾気味の深鉢となるようである。これらはいずれも大木8b式に伴う。

1216～1225は平行沈線により施文されるもので、文様が縦方向に展開するもの横方向に展開するものの2者がみられる。いずれも大木8b式に伴う。

1227～1230は外面を調整した無文の土器である。いずれも同一個体片かと思われる。口縁部が強く内湾している。

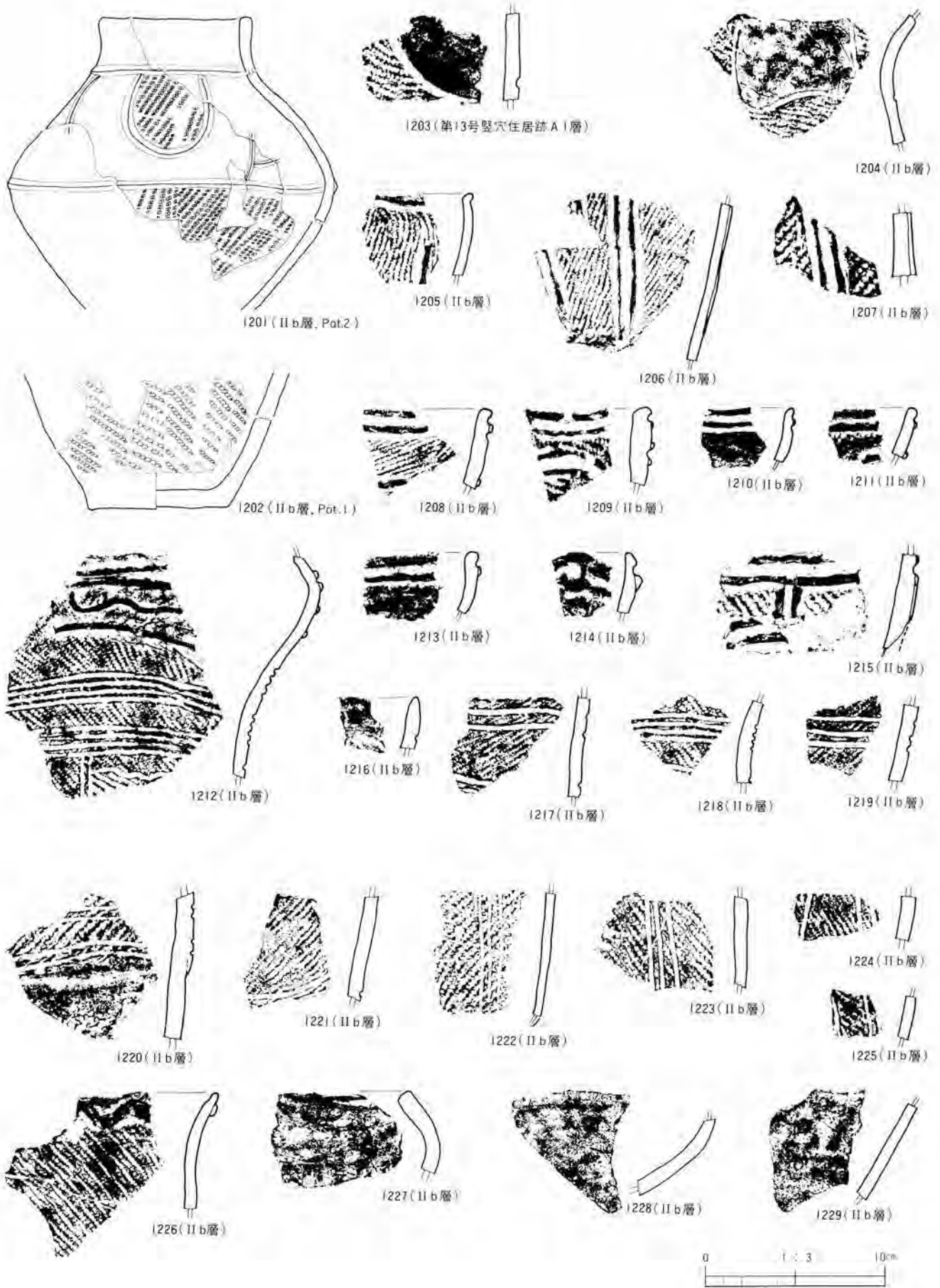
1226は口縁部が外反する深鉢で、刻み目を有する隆起線を口縁に沿って波状に施文している。縄文時代前期に伴う。

1231～1237は体部に主体的な施文がみられない土器である。1231～1232は単節斜縄文を縦方向に回転する。1233は縄文を横方向に回転するもので、横方向の綾絡文がみられる。縄文時代前期に伴うものか。1234～1236は綾絡文を縦方向に回転する。1237は木目状燃糸文を施文するものである。

1238～1239はⅡa層出土遺物で、いずれも破片である。

第Ⅺ群

第Ⅸ群



第101図 S27W144-1号(第13号)豎穴住居跡出土遺物・遺構外出土遺物(1)

第Ⅴ群

1238～1247は磨消技法により施文されるものである。1238は口縁部がやや外反する深鉢で、やや幅の広い山形の縄文区画文を有するが全体のモチーフは不明である。1239～1242・1245は縦位の縄文区画文を施すもので大木9式に伴う。1244も同様であるが縄文区画文の幅がやや狭く前述したものとは型式差があるかもしれない。

1248～1264は隆沈線により施文されるものである。1248は口縁部がやや外反する深鉢である。1249・1250は口縁部の内湾する深鉢で、連続刺突文が施文されたものである。1251・1264はキャリパー形深鉢である。1252～1254は口縁部が直立あるいは内湾気味に立ち上がるものである。これらはほぼ大木8b式に伴う。

1265・1267～1278は平行沈線により施文されるものである。1265は口縁部が外反し、体部に横位の平行沈線と懸垂文を施すものである。1267・1270・1272・1275・1276は横方向の平行沈線文を施すものである。1277・1273・1278は懸垂文を施すものである。これらはほぼ大木8b式に伴う。

第Ⅳ群

1266はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には隆沈線や沈線により波状に展開する施文がみられる。大木8a式に伴う。

1278・1280は無文の口縁部破片である。1279には連続刺突文が施される。

第Ⅲ群

1281・1282は半裁竹管により施文されるもので、1282は円形の貼付に沿った沈線と、小波状の沈線が施される。1281も小波状の沈線が施される。大木6式に伴うものである。

1283は胎土に植物繊維を含む土器で、口縁部がやや内湾する。破片の下端に楕円形の圧痕を伴う隆起線が施される。縄文時代前期前葉に伴う。

1284～1288は体部に主体的な施文がみられないものである。1284・1285・1288は単節斜縄文を地文とする。1286は横方向に綾絡文(?)を施すものである。1287は縦方向に綾絡文を施すものである。

1289は深鉢の底部破片で、網代痕に広葉樹の木葉痕が施される。

1292～1302・1308はI層出土遺物である。

1308は肥前染付碗で、外面に一重網目文を施すが、見込には施文されない。いわゆるくらわんか手で18世紀代に伴うものと思われる。

このほかに瀬戸美濃の灰釉丸皿で、16世紀代に伴うものと思われるものも出土している。
(註1)

1290～1292は縄文時代後期に伴うと思われるものを一括した。1290は磨消技法により区画文を施すものである。1291は調整された器面に沈線による文様を施すものである。1292は平行沈線による波状の施文がみられるものである。

1293・1294は磨消技法により施文されるもので、縄文時代中期後葉～末葉に伴う。

1295・1296は隆沈線により施文されるもので、大木8a式に伴う。

1297～1301は平行沈線により施文されるもので、大木8a式に伴う。

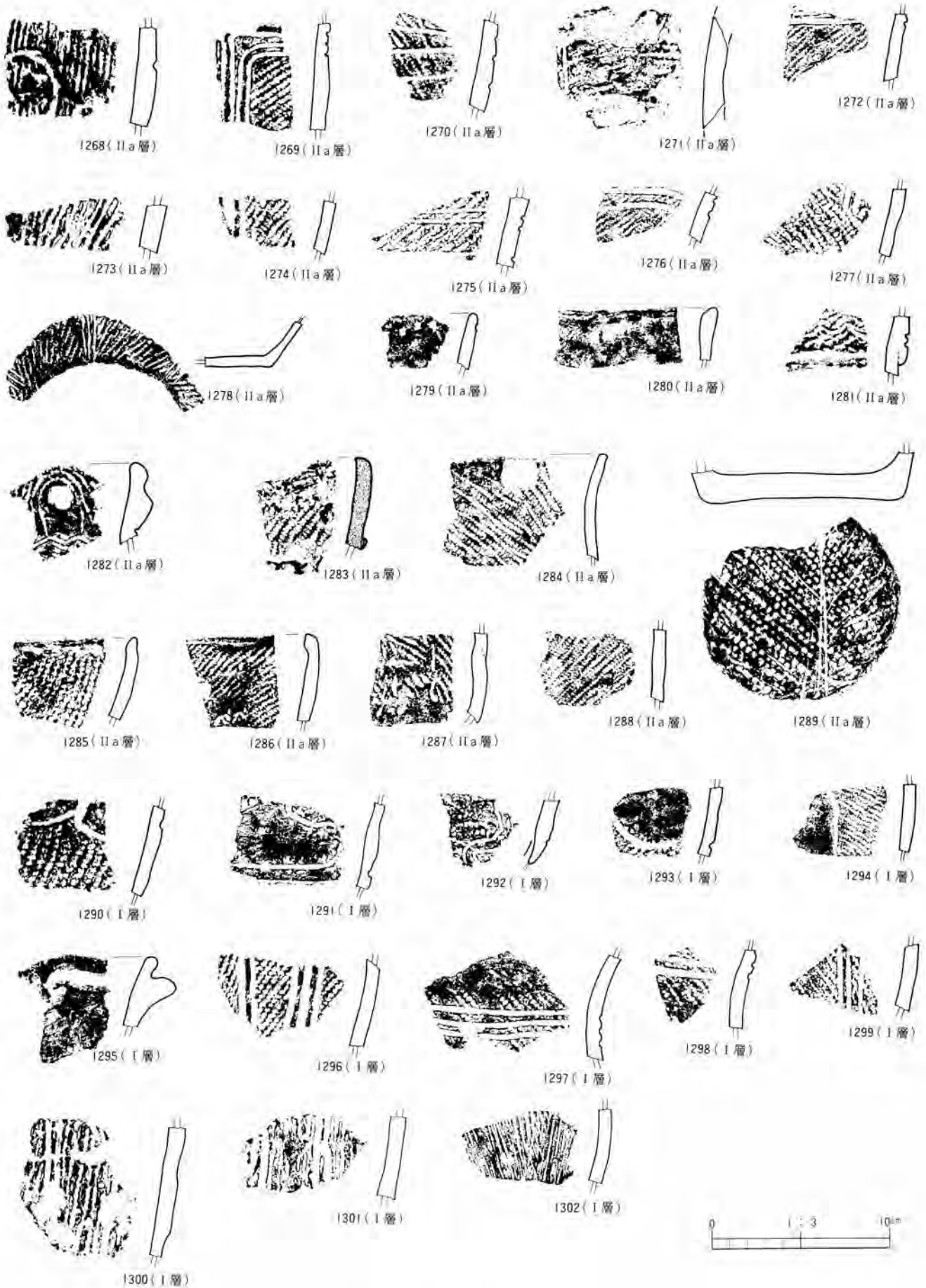
1302は櫛目文を地文とするものである。

1307は胎土に植物繊維を含む土器片を利用した土製円盤である。縄文時代前期初頭に伴う。

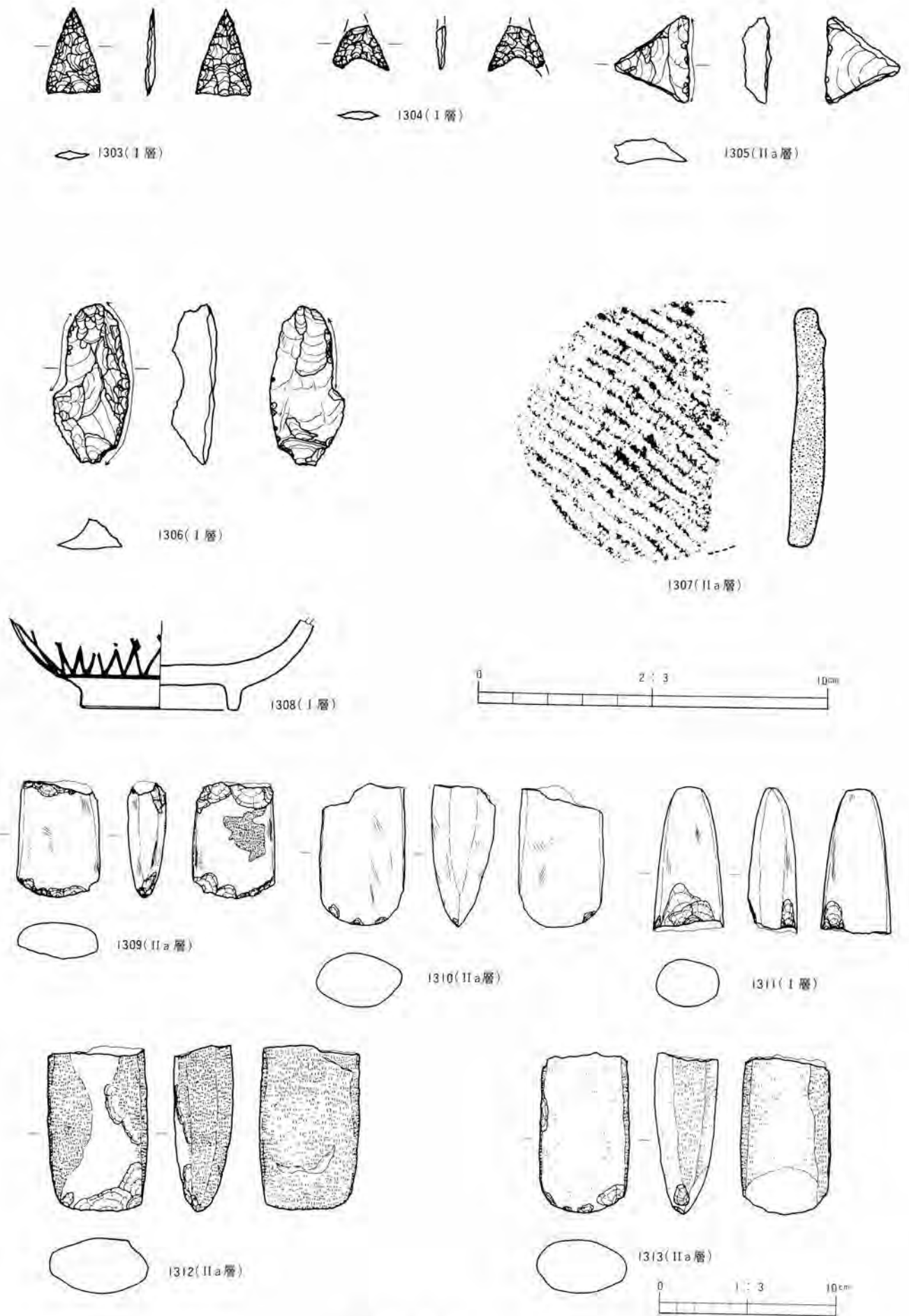
(註1) 陶磁器類は室野秀文氏に鑑定をお願いした。



第102図 遺構外出土遺物(2)

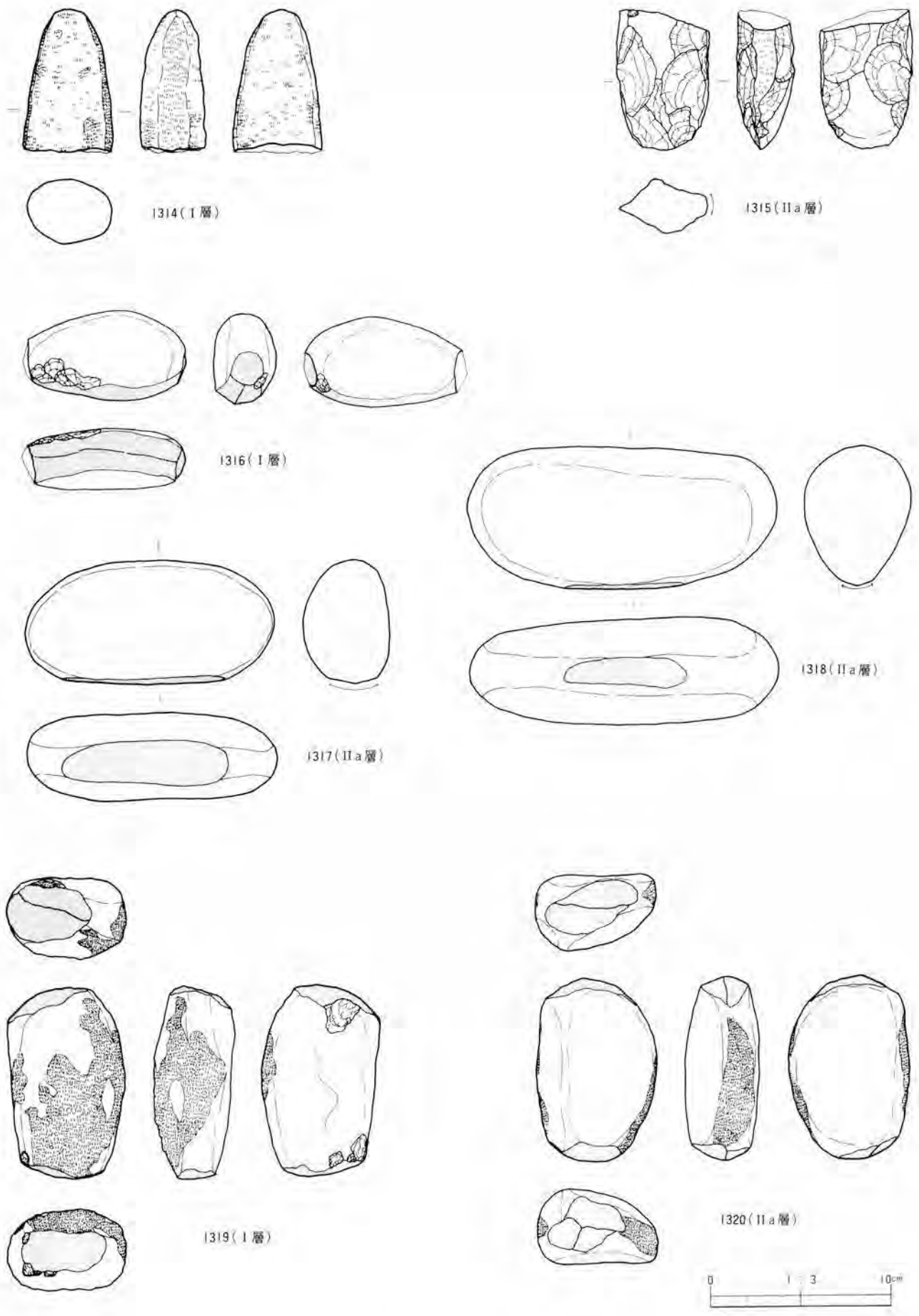


第103圖 遺構外出土遺物(3)

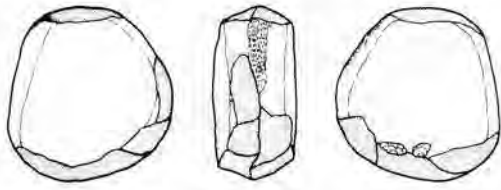


第104図 遺構外出土遺物(4)

石器	石器は土器同様にⅠ層～Ⅱb層の各層から出土している。各々の時期を確定できないので、器種毎に説明する。
石鏃	1303・1304は石鏃である。いずれも三角鏃で、1303は平基、1304は凹基である。
削器	1306は削器である。やや厚手の剥片を素材としており、表面に一部自然面を残す。裏面にも大きく主要剥離面を残すが、調整剥離によりバルブを取り除いている。一方の側縁に調整を施し、やや鈍角の刃部を作り出す。もう一方の側縁は、ほとんど調整されないが鋭角な刃部となっている。両側縁とともに微細な剥離がみられる。
使用痕のある剥片	1305は使用痕のある剥片である。特に刃部への調整は行わず、やや鋭角な側縁をそのまま刃部とし、使用時によると思われる微細な剥離がみられる。
磨製石斧	1309～1314は磨製石斧である。いずれも中央部で欠損している。 1309・1311はいずれも良く研磨されたものであるが、欠損後の剥離がみられる。1309は成形時の敲打痕を残している。
打製石斧	1310・1313も全面を研磨するがやや不十分であり、特に1313は成形時の敲打痕を大きく残す。1312・1314は表面をほとんど研磨しないもので、成形時の敲打痕や自然面を残している。
敲打磨石	1315は打製石斧である。両面ともやや大きめの剥離にて調整するが自然面を残している。一方の側縁はやや鋭角であるものの、もう一方の側縁には幅1.2cmの敲打痕を有する。 1316～1326は敲打磨石である。いずれも機能磨面には剥離などの調整が伴わないものが多い。機能磨面の部位により次の3者に分類される。
敲石	① 1316～1318は長楕円形扁平礫の側縁を使用するもので、1316には剥離が伴う。機能磨面の幅は1316が2.2cm、1317が2.5cmであるが、1318は1.5cmとやや狭い。 ② 1319～1321は長楕円形扁平礫の両端部を使用するもので、側縁部には敲打痕を伴っている。1319下端の機能磨面幅は2.1cmであり、これ以上広い機能磨面を有するものは中央に稜をつくることにより幅を二分している。 ③ 1322～1325はやや厚みのある扁平礫の周縁を使用するもので、機能磨面の中央に稜をつくることにより幅を2～3cm程度としている。1325は幅は1.3cmの機能磨面を有している。 1322は機能磨面に隣接して敲打痕が伴っている。 1326も同様な扁平礫を使用するものの、機能磨面は全周せずに敲打痕が伴っている。 1327～1333は敲石である。敲打磨石に類似した素材を用いており、やはり敲打される部位により3者に分類される。 ① 1327は長楕円形扁平礫の側縁を使用するもので、敲打痕の最大幅は3.5cmを計る。敲打痕に隣接して小さな磨面が伴い、擦痕が観察される。 ② 1328・1329は長楕円形扁平礫の両端部を使用するものである。1329は両端ともに敲打痕の最大幅は2.5cmほどである。1328は両端部に幅1.7cmほどの敲打痕を有するほか側縁部にも敲打痕を有している。 1330～1333も端部に敲打痕に有するものであるが、前述したものより小さな扁平礫を使用している。敲打痕の幅は、いずれも2～3cmを計る。敲打痕の周辺には使用時の剥離が伴っている。 ③ 1333はやや厚みのある扁平礫を使用するもので、周縁に幅2.5cmほどの敲打痕を有す



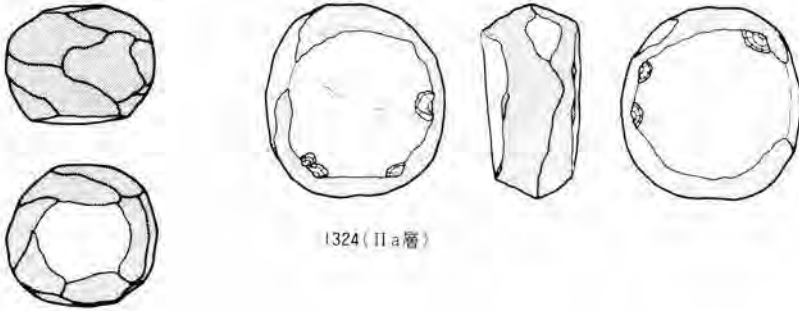
第105図 遺構外出土遺物(5)



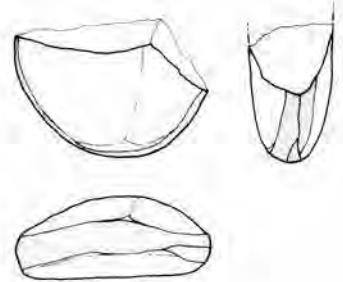
1321 (II a層)



1322 (I層)

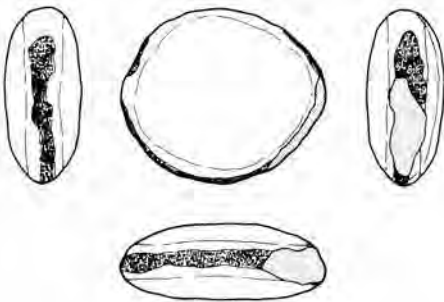


1324 (II a層)

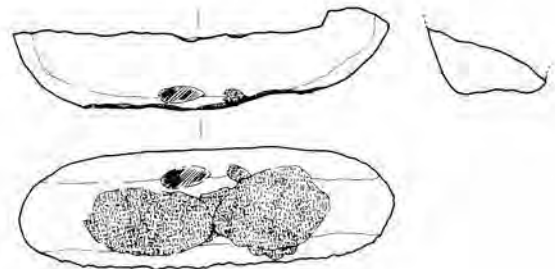


1325 (II b層)

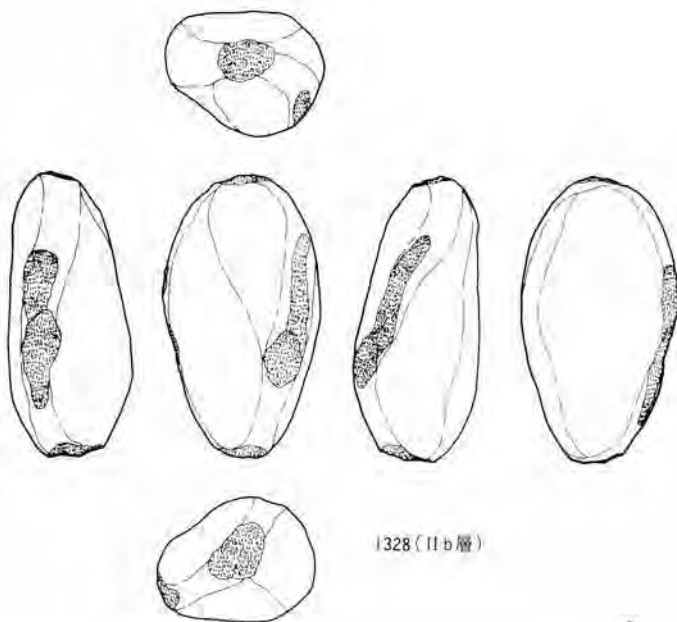
1323 (I層)



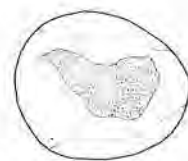
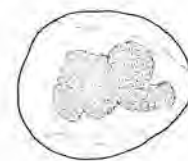
1326 (II a層)



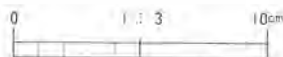
1327 (II b層)



1328 (II b層)



1329 (II a層)



第106図 遺構外出土遺物(6)

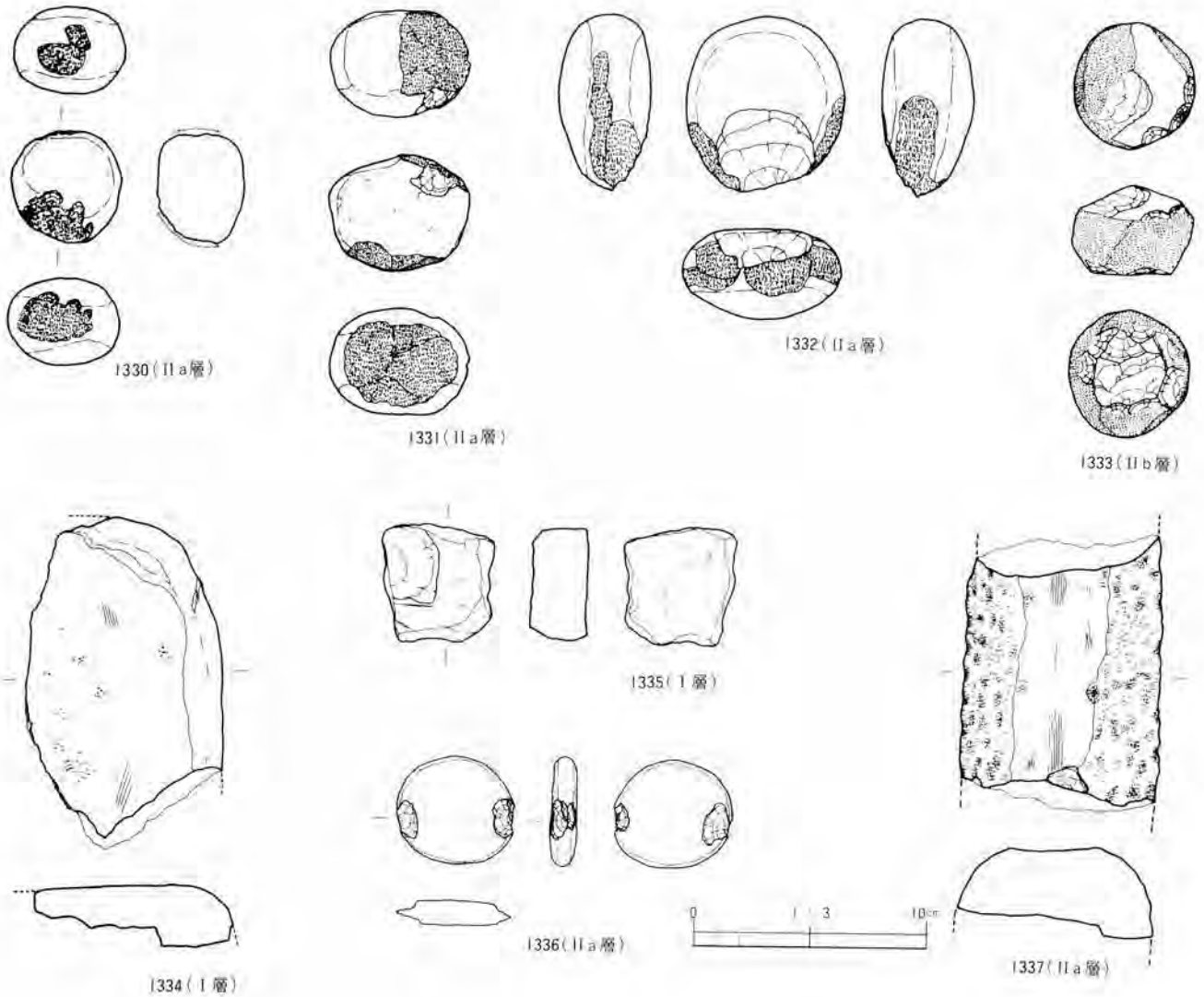
る。両面ともに使用時の剥離が伴う。

1334は石皿の破片である。平坦な面を磨面とただけで縁を作り出さない。磨面には敲打痕や擦痕が伴う。

1335は小さな亜角礫をそのまま使用するもので、一方の面に磨面を有し擦痕が伴うほかわずかな敲打痕が伴う。もう一方の面は剥離を伴う自然面であるが、この面も使用されており擦痕が認められる。

1336は扁平円礫を使用する石錘で、長軸の両端部を両面から剥離させている。長径5.0cm、短径4.6cm、幅1.1cm、重量47.2gで、扁平円礫のAグループに含まれるサイズである。

1337は石棒の体部片である。上下両端を欠くほか裏面も剥離している。表面中央部に幅3.5cmの凹んだ磨面を有し、擦痕が伴う。この両側には形成時の敲打痕が比較的密に施されている。



第107図 遺構外出土遺物(7)

3 貝塚及び遺物包含層

集落跡が形成された台地の南・東・北側の斜面部には貝塚や遺物包含層が形成されている。大正13年の柴田・小田島両氏による発掘調査により貝塚と確認されて以来、若干の採集資料紹介があったものの本格的な発掘調査は実施されておらず、実態は全く不明なままであった。

このため、各地点での貝層等の形成時期・内容物・堆積範囲といった具体的な情報をつかむために範囲確認調査を実施したが、調査の結果、南北両斜面には良好な動物遺存体の集積と遺物包含層が確認され、それぞれ「南貝塚」・「北貝塚」と呼称することとした。また、東斜面では貝層が確認されず、遺物包含層のみが形成されていたために「東包含層」と呼称することとした。

尚、斜面部では台地上の調査座標や公共座標にて調査区を設定することは無理であったので地点毎の地形に合わせて任意に設定している。また、範囲確認調査という制約上堆積層の精査は最底限に留めている。

(1) 南貝塚

南貝塚では中央部を中心に2次にわたり発掘調査を実施したほか、補足調査としてハンドオーガーによるボーリング調査を実施している。この結果、3地点で縄文前期に伴う貝塚を確認しているほか斜面部全体に前期～中期初頭の遺物包含層が形成されていることが判明した。以下、調査地点毎に内容を記述する。

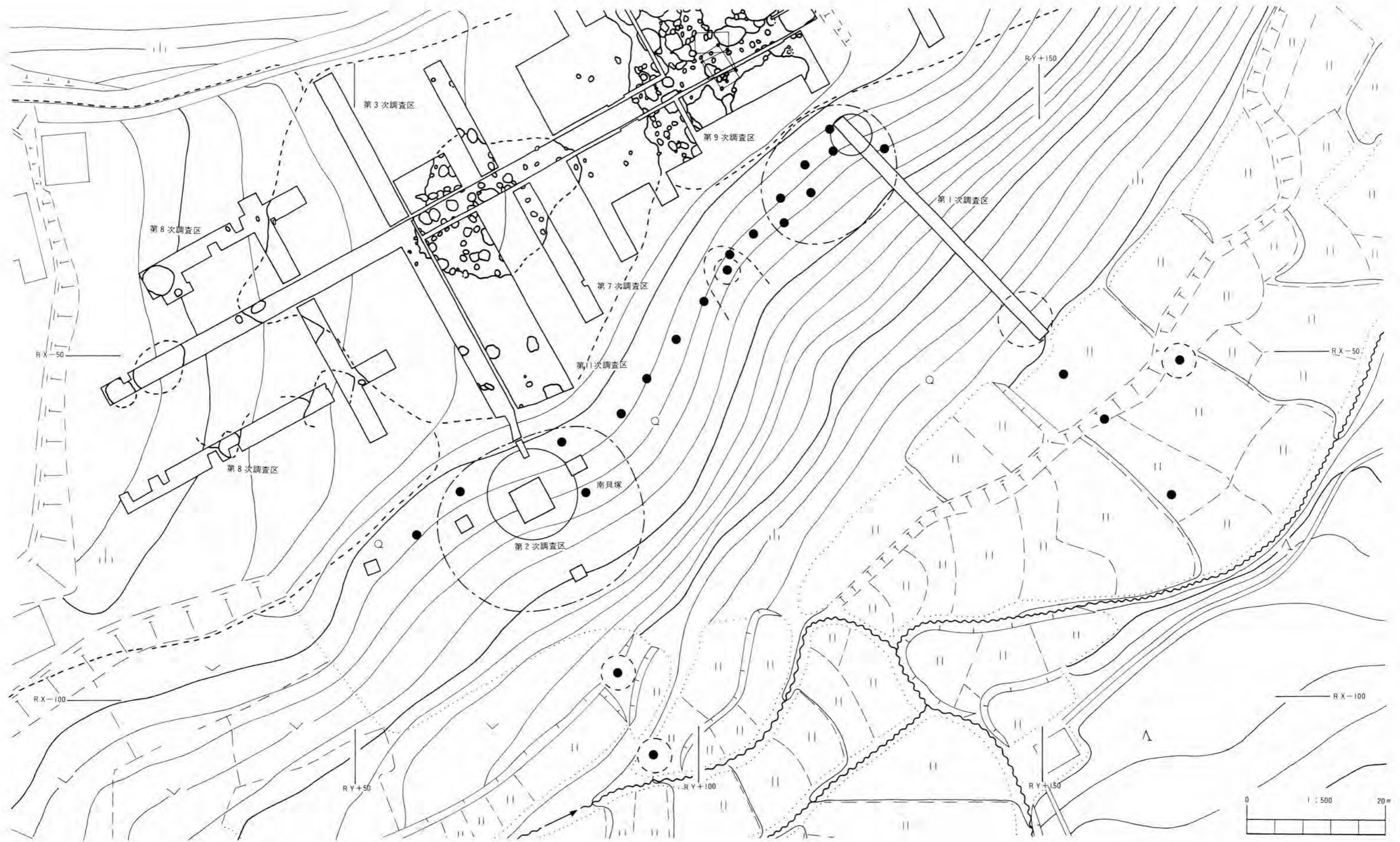
a) 第1次調査区

南貝塚中央部よりやや東寄り（RX-17～-48付近、RX+120～+153付近）に等高線と直交する幅2mのトレンチを設定し、トレンチ南部部から2m毎に区切り、南からNa1グリッド～Na21グリッドとした。トレンチ内の表土、旧表土を剥ぎ、遺構の有無を確認した後、Na1グリッド～Na3グリッドとNa15グリッド～Na22グリッドを幅1mで掘り下げて土層の堆積状況を確認した。

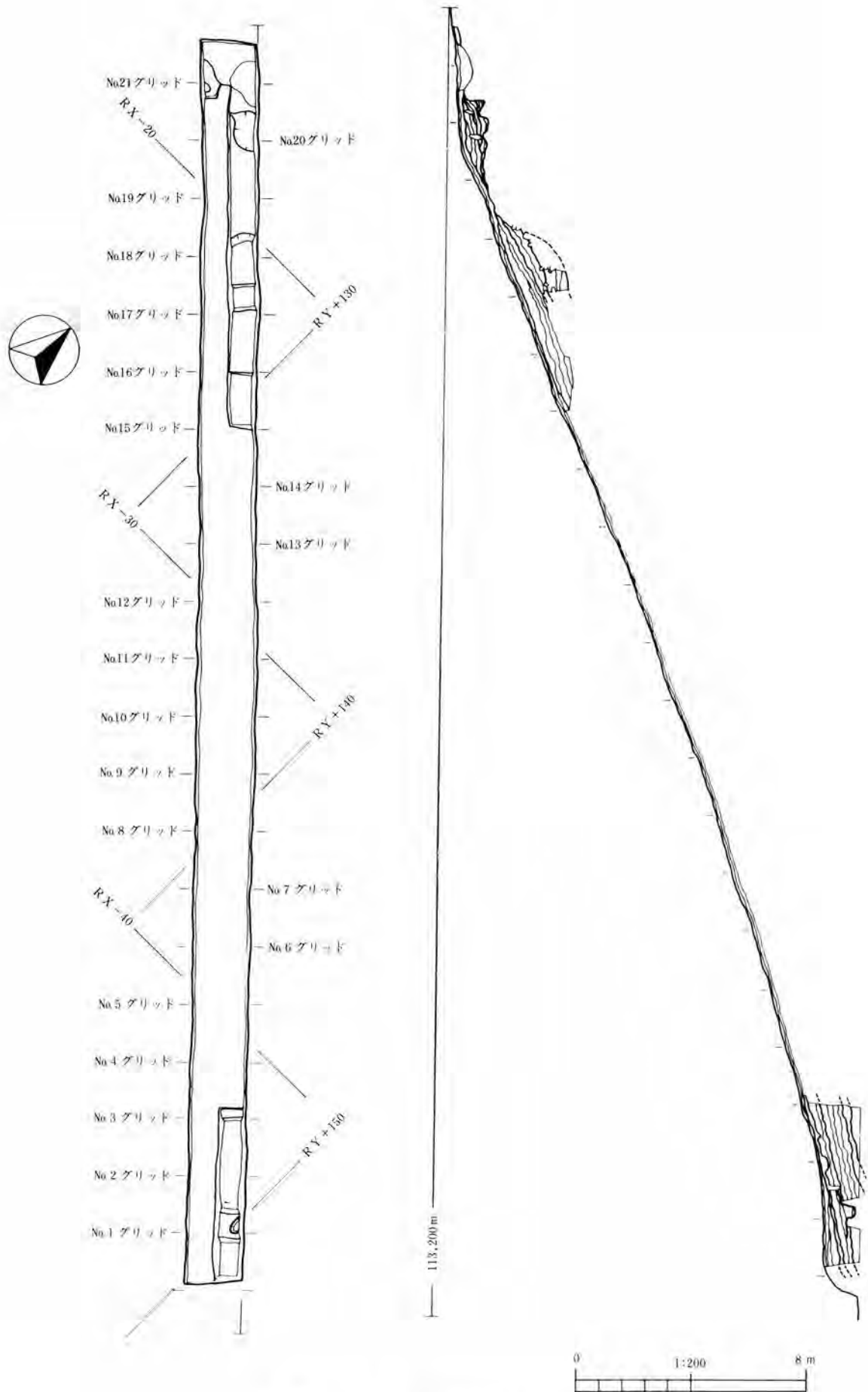
i) 基本層序

幅1mのサブトレンチをほぼ完掘できたのはNa1～3グリッドとNa15～22グリッドのみであり、各々の層位を対応させることができなかつたので、各地点毎に層名を使いわけた。

Na1～3グリッドはトレンチの下端部でI層が表土および旧表土。2層暗褐色粘質土を基本土とし、褐色～黄褐色粘質土を多く含む。3層は暗褐色～褐色土のやや粘性のあるシルト質土を基本土とする。全体に混入土は少ないが、3d層・3b層は金雲母を多く含む。3b層下面で楕円形の小ピットp1を検出している。4層は暗褐色～褐色の粘質土を基本土とするが、混入土はさらに少なくなる。全体に炭化物粒を多く含むが特に4a層と4b層に多い。なお4a層から獣骨片が出土している。5層は黒褐色土を基本土とする。全体にややシルト質となる。6層は褐色粘質土層で漸移層である。7層は地山層であるが、固くしまった粘土層である。2～4層は遺物を多く含むが5層になると少なくなり6層に至っては皆無となる。なお、これらの遺物包含層は水田面下（低湿地）へゆるやかにもぐり込んでいる。



第108図 南貝塚調査区設定図



第109図 第1次調査区全体図

No.15～19グリッドはNo.20～21グリッドに比較的類似した堆積状況を呈するが後述するように遺物（土器型式）はこれと対応しない。

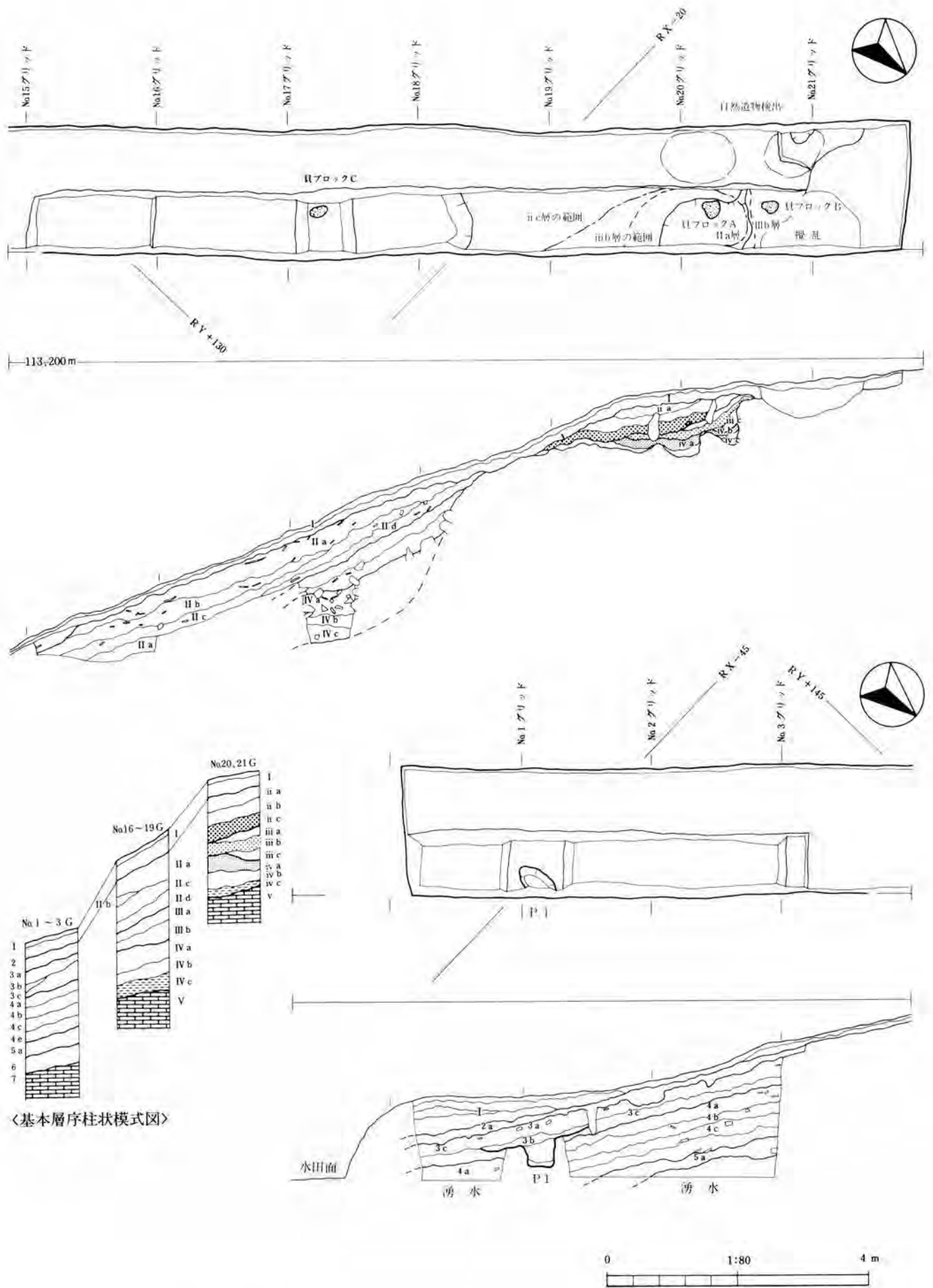
I層は表土および旧表土。II層は暗褐色～褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を多く含む。非常に固くしまっている。III層はややシルト質の褐色土を基本土とし少量の炭化物粒を含む。II層、III層ともに多量の遺物を包含している。

IV層はシルト質土を基本土とする。IV a層はやや暗い褐色土を基本土とし、角礫を多く含む。IV b層は最も明るい層である。IV c層はやや暗い褐色土を基本土とするがIV a層に比べてやや粘性がある。IV c層の最下層から貝ブロックを検出しており、貝ブロックCと呼称した。これは破碎されたイガイを主体とし、タイ・カサゴ類・カツオなどの動物遺存体を含む。

II層～IV層上部は動物遺存体を検出できなかったがふるい分けを行っていないので微細なものに関しては含まれていた可能性もある。

No.20～22グリッドはトレンチの上端部であるが、耕作のために削平されており特にNo.22グリッドは表土の直下が地山となっている。I層は表土および旧表土。ii層は褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を多く含む。ii c層は自然遺物を多く含む層でシカ・イノシシ・オットセイなどの獣骨やカツオ・ブリの魚骨などを検出している。またiia・b層中からも少量ではあるがシカ・イノシシ・カツオなどの獣、魚骨を検出している。iii層はii層より明るい褐色土を基本土とするが、粘性は少なくややシルト質である。やはり炭化物粒を多く含む。iii a層は iii層中最も明るくややシルト質であるが遺物をほとんど含まない。iii b層はやや暗い褐色土を基本土とし、炭化物粒を多く含む。この層も動物遺存体を多く含む層で、人骨をはじめシカ・タヌキ・イヌ・カツオなどの獣、魚骨を検出している。iii c層は地山の崩壊した層で部分的に堆積する。

iv層は明るい褐色のシルト質土を基本土とする。iv a層は炭化物粒を含むが、やはりシカなどの獣骨を検出している。iv b層はシルト～砂質土を基本土とする。土器や礫などを多く含むが動物遺存体は認められない。iv c層は続くv層（地山）上面の凹部にのみ堆積する層である。シルトを基本土とし、下面に水成堆積様のきめの細かいシルト～粘土層が薄く堆積する。この層にはイガイを主体とした貝ブロックを2ヶ所検出し、貝ブロックA、貝ブロックBと呼称した。貝ブロックAは破碎されたイガイを主体とするブロックで、他にフジツボ科の一種・ムラサキウニ・アイナメ・マグロ・シカなどの動物遺存体を含む。また種の同定はできなかったが魚の棘を多く含んでいる。貝ブロックBもやはり破碎されたイガイを主体とするブロックで、魚の棘を含むが種の同定はできなかった。v層は地山であるが、基盤岩が風化レシルト～砂質となっている。凸凹が著しく断面北端の立ち上がりなどは人為的かとも思われたが調査の結果自然地形であると判断した。また、サブトレンチ外に粉碎された貝殻や獣骨片などを含むブロックを2ヶ所検出している。



第110図 第1次調査区 No.1~No.4グリッド・No.15~No.22グリッド

ii) 出土遺物

① 土器 (第111~121図)

前述したようにトレンチ内の3地点での土層の対応ができていないので、地点毎に記述することにする。なお、挿図は基本的には同一層中で新しいものから古いものへと大まかに分類しているが、このうち最も新しい型式がその層位の時期を決定する資料と理解した。

No.1~3グリッド (第111~114図)

5 a層 (1338~1348)

第I群

口縁部の外傾する深鉢である。体部は単節斜縄文を横方向に回転する。口唇部に楕円形の圧痕を有するものとそうでないものの2種がある。胎土にはいずれも繊維を含む。大木1式に相当するものと思われる。

4 d層 (1349~1368)

第II b群

いずれも胎土に繊維を含む。1349は口縁部の外反する深鉢であり口唇部とその下位に刻目を有する。ほぼ大木2 b式に相当するものと思われる。1350~1354・1366は口縁部に不整撚糸文を施すもので、大木2 a式を主体とするが一部大木2 b式を含むかもしれない。1357・1358は結束のない羽状縄文を施すもの。1355・1356は横回転の単節斜縄文を施すものである。これらは大木1式に相当すると思われる。

4 c層 (1369~1400)

第III群

胎土に繊維を含むものとそうでないものの2種がある。1369~1371は円形の刺突文(竹管文)を施すもので大木3式に相当するものと思われる。1372・1373・1378は口唇部に刻目を有するもの。さらに、網目状撚糸文を施すもの(1374)や横位S字状連鎖沈文を施すもの(1376)や器面全体に不整撚糸文を施すもの(1377)などは、ほぼ大木2 b式に相当すると思われる。口縁部付近にのみ不整撚糸文を施すもの(1382)や羽状縄文を施すもの(1385)およびこれ以外のものもほぼ大木1式~大木2 b式に含まれると思われる。

4 b層 (1401~1420・1690)

第III群

1401~1403は平行沈線文(竹管文)を施すもの、1404・1405は刻目を有する隆線を施すもので大木3式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴うものであるが、1406は器面全体に不整撚糸文を施すもの(大木2 b式)で、1413は複節の羽状縄文を施す尖底深鉢(大木1式)である。

4 a層 (1421~1442)

第IV群

1421は幅の広い沈線で鋸歯状文を施すもの、1422は刻目のない隆線を貼り付けるもので大木4式に相当する。1425は沈線による施文でやはり大木4式に相当するものか。1432は大木3式に伴うもので、他の繊維を含まない地文のみのものおよそ大木3~4式に伴うものが主体であると思われる。他のものはこれ以前の型式に伴うものである。

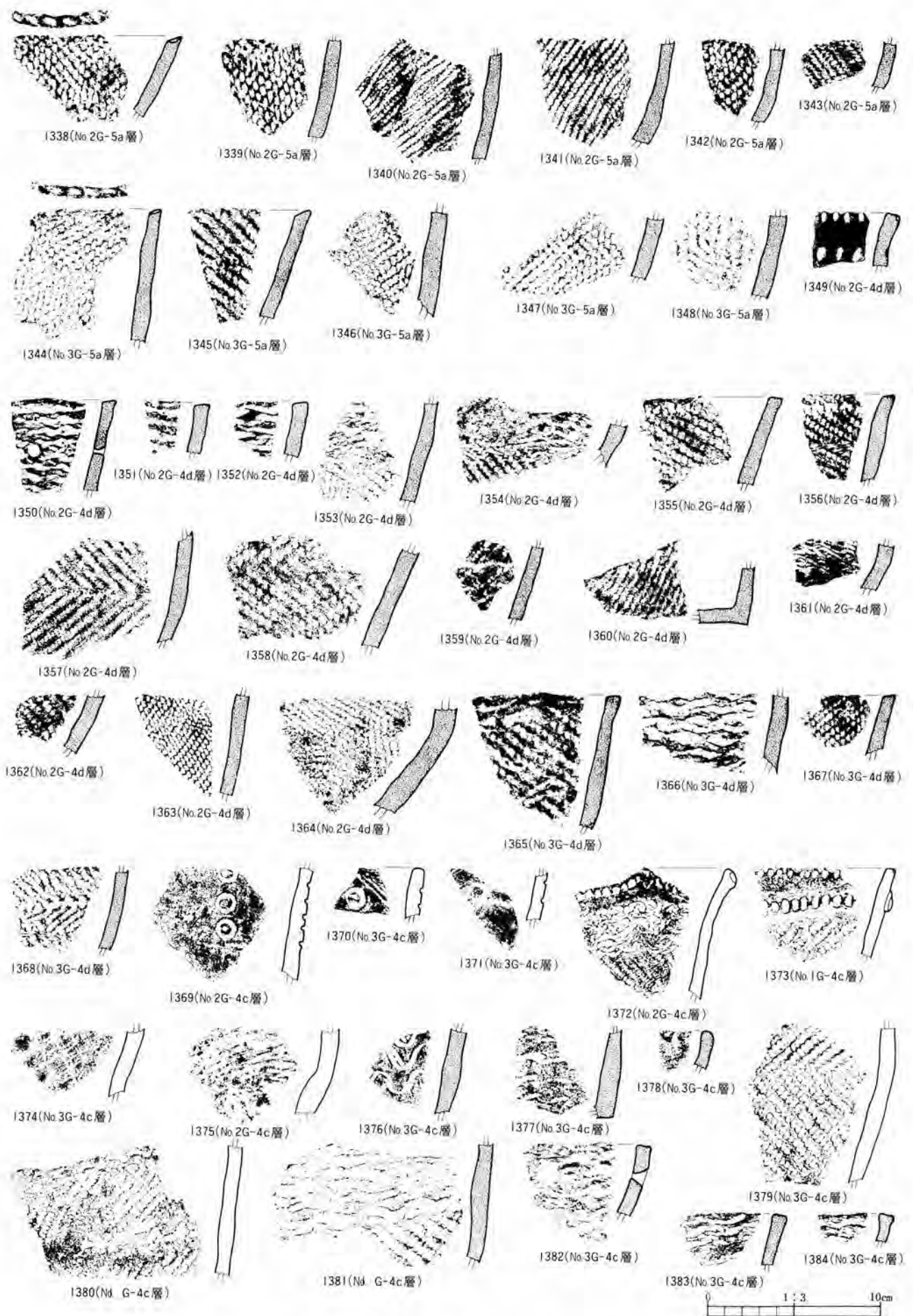
3 c層 (1443~1454)

第IV群

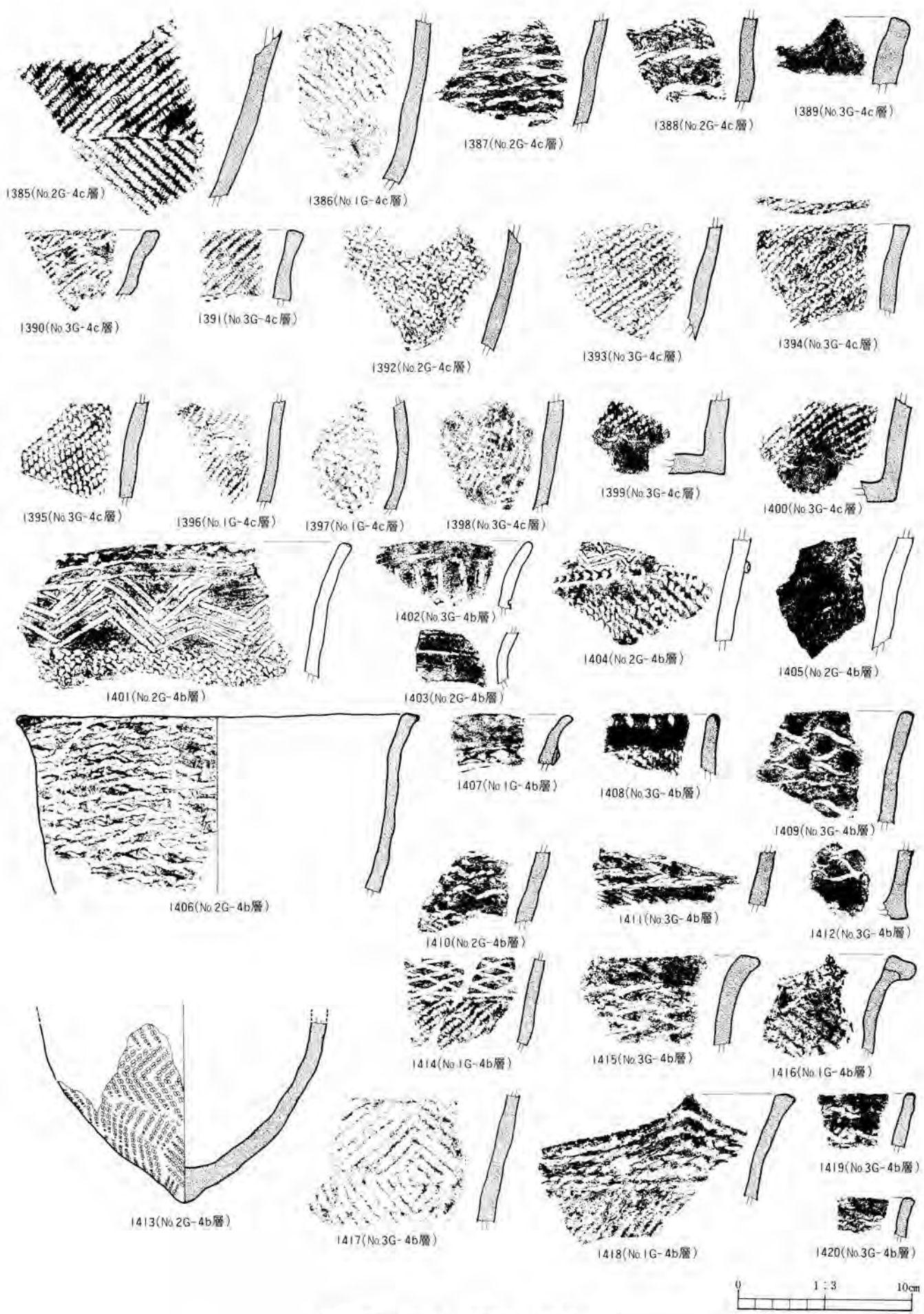
1443は隆線により渦巻文や鋸歯状文を施すもので大木4式に相当する。1444~1446はほぼ大木3~4式に伴うと思われる。これ以外は以前の型式に伴うものと思われる。

3 b層はほとんど遺物を含まず、図示できるものはない。

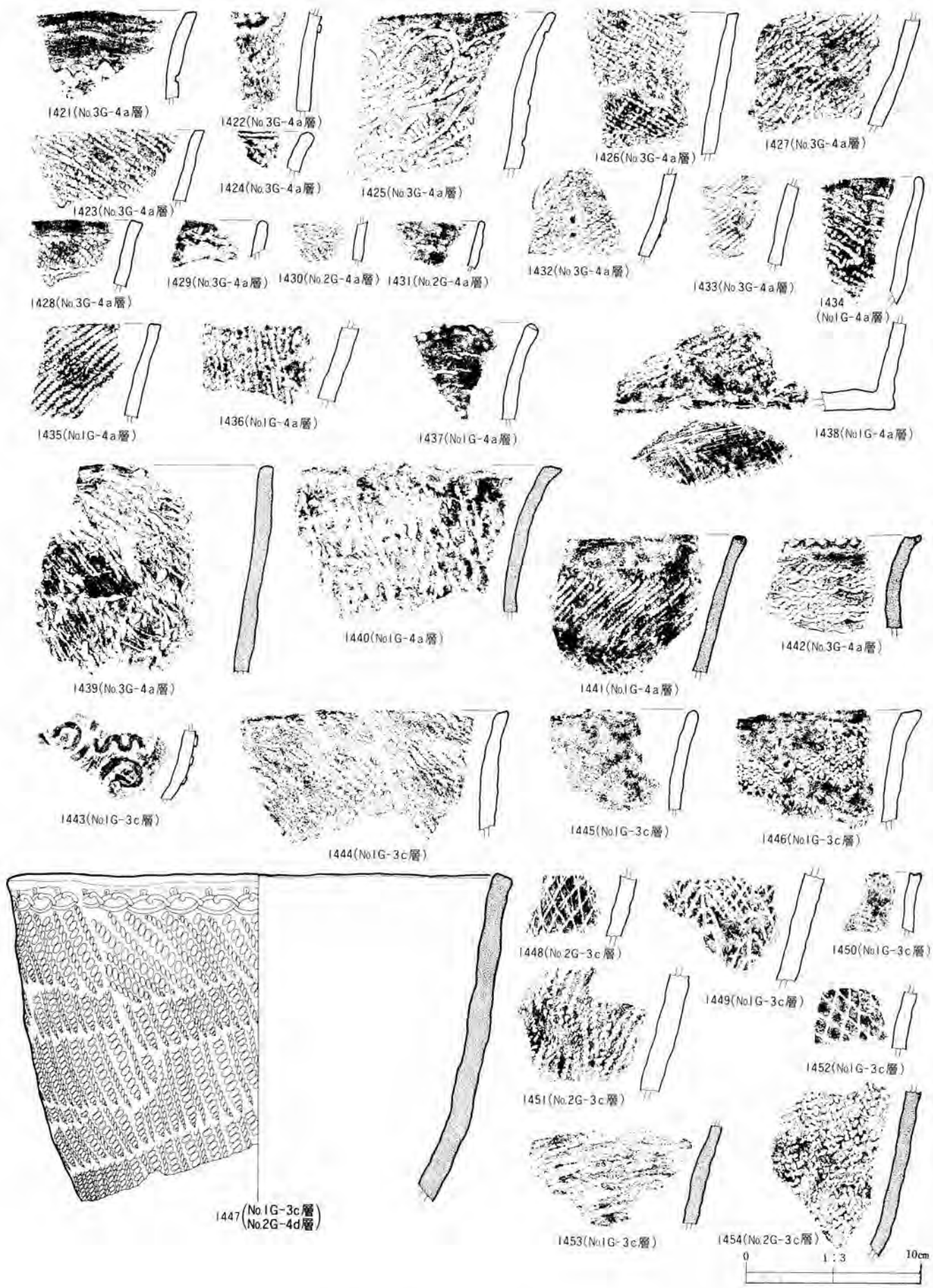
3 a層 (1455~1473・1479・1484・1699)



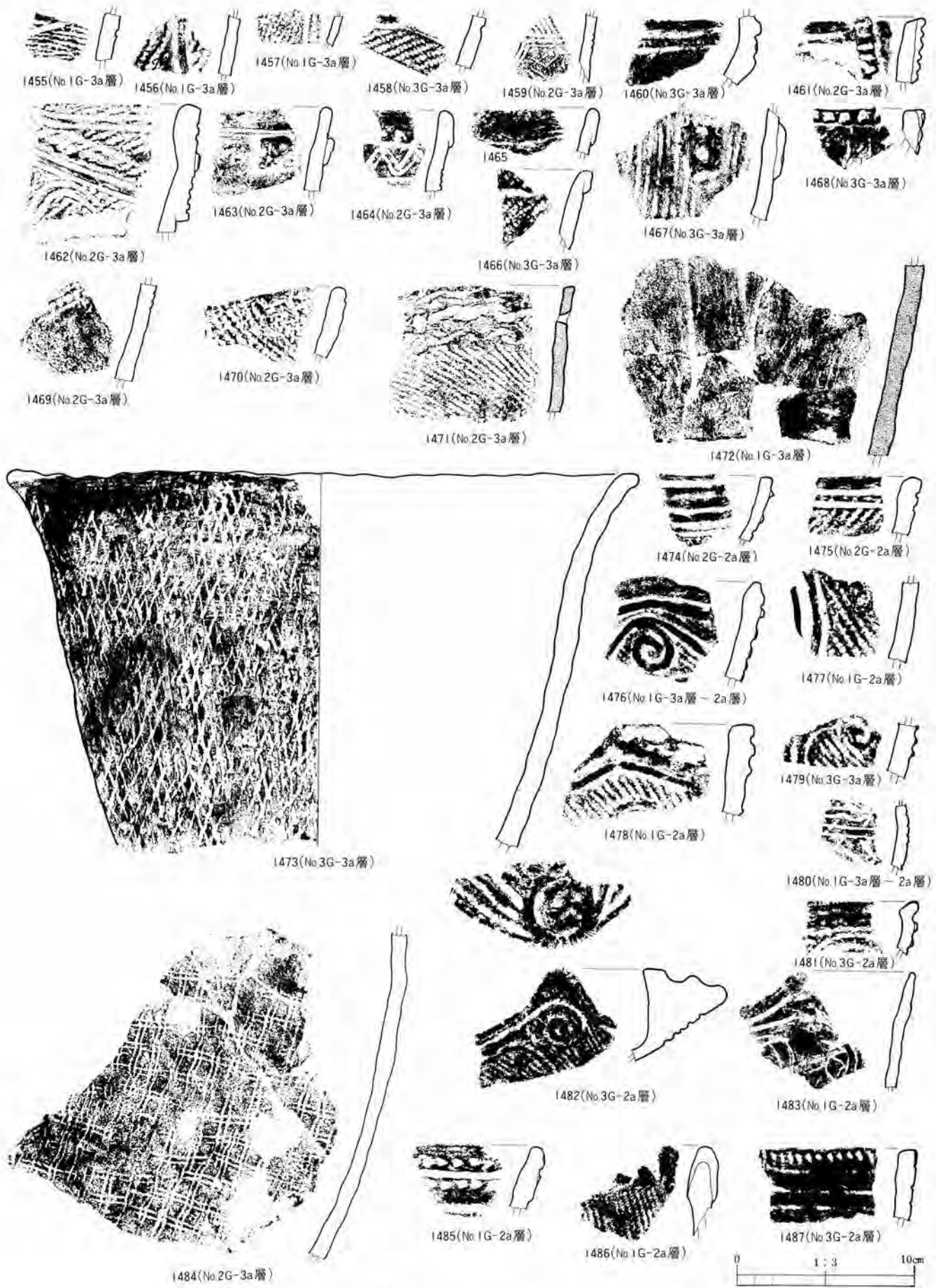
第111図 第1次調査区出土遺物 (1)



第112図 第1次調査区出土遺物 (2)

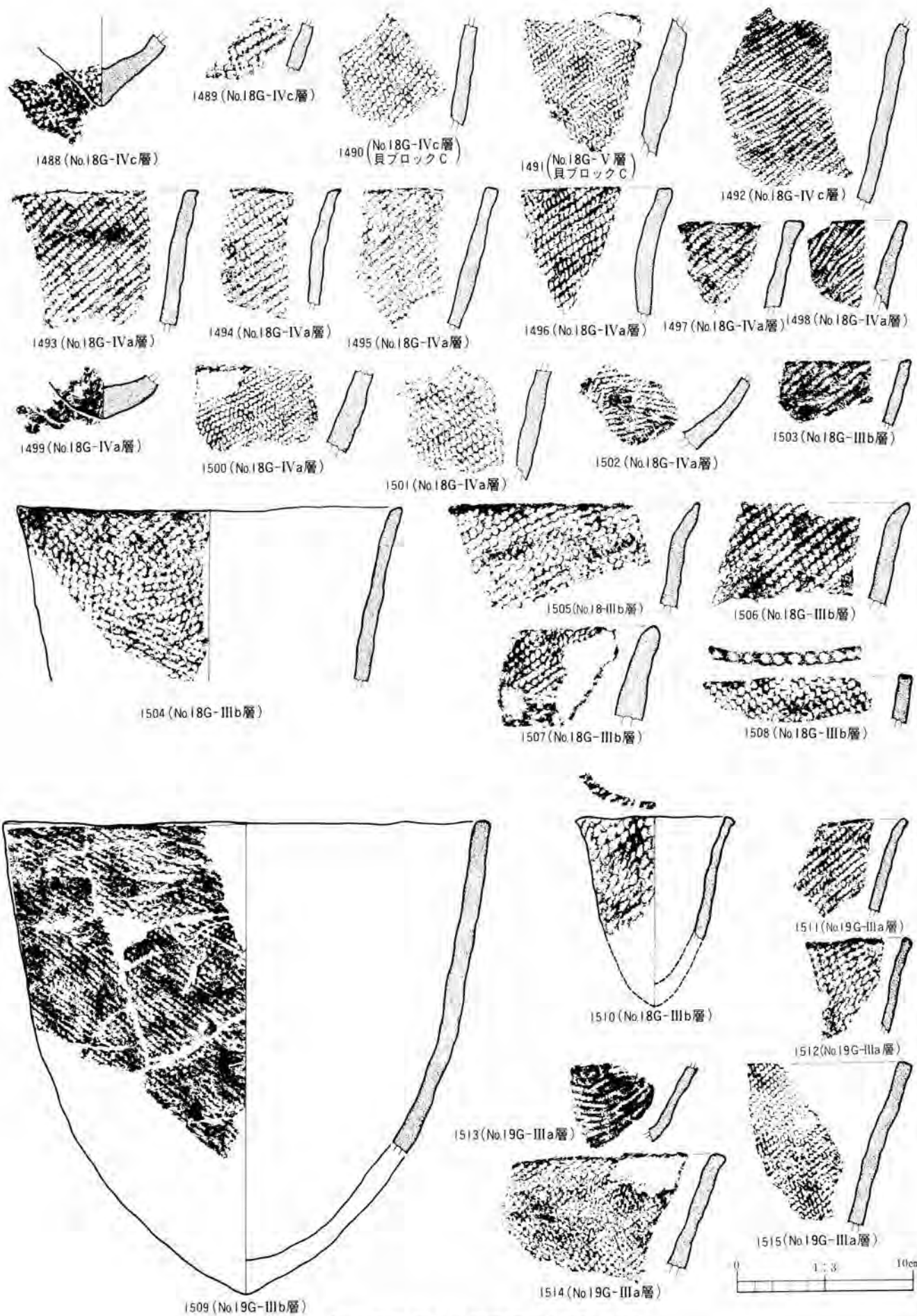


第113図 第1次調査区出土遺物 (3)

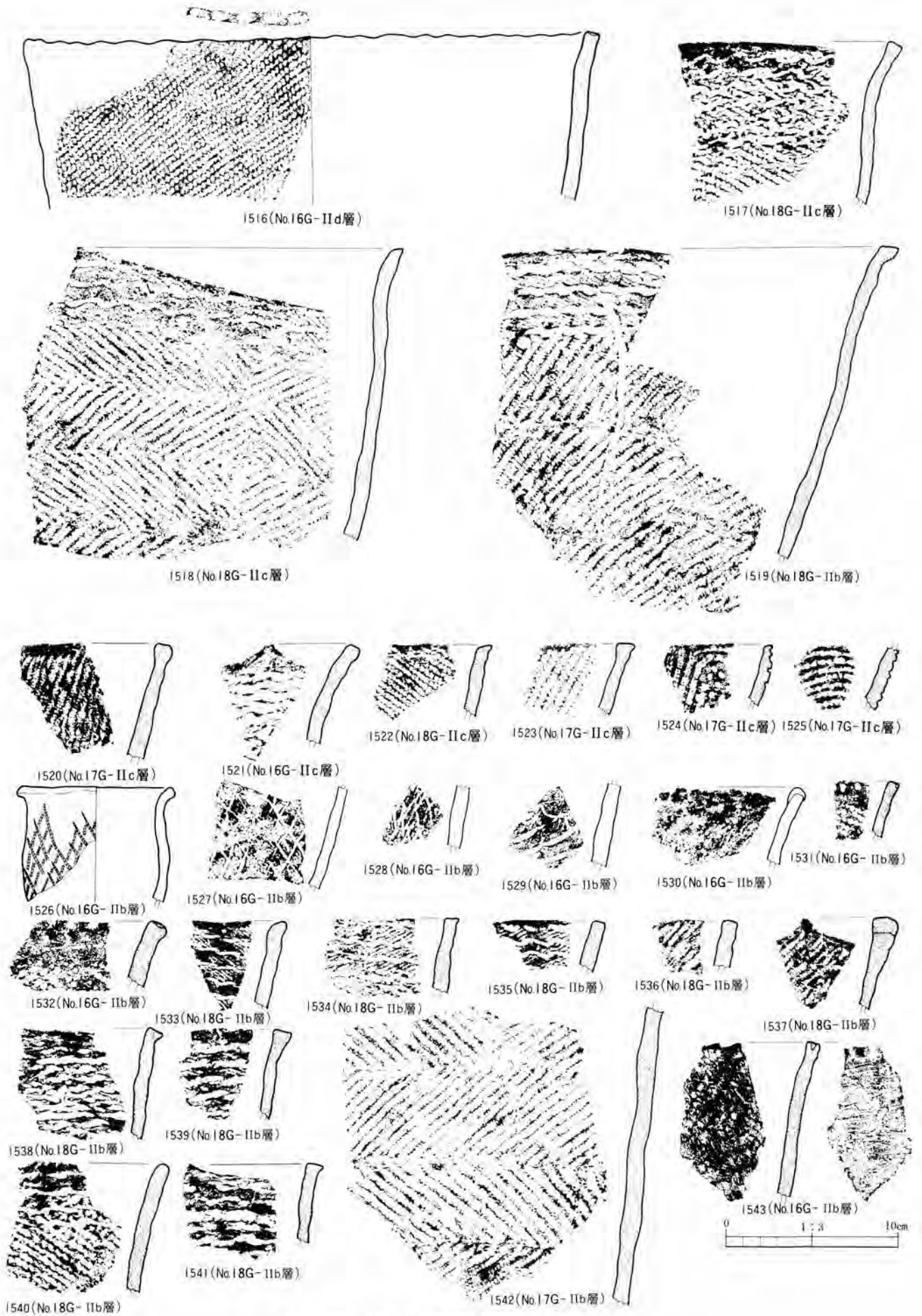


第114図 第1次調査区出土遺物 (4)

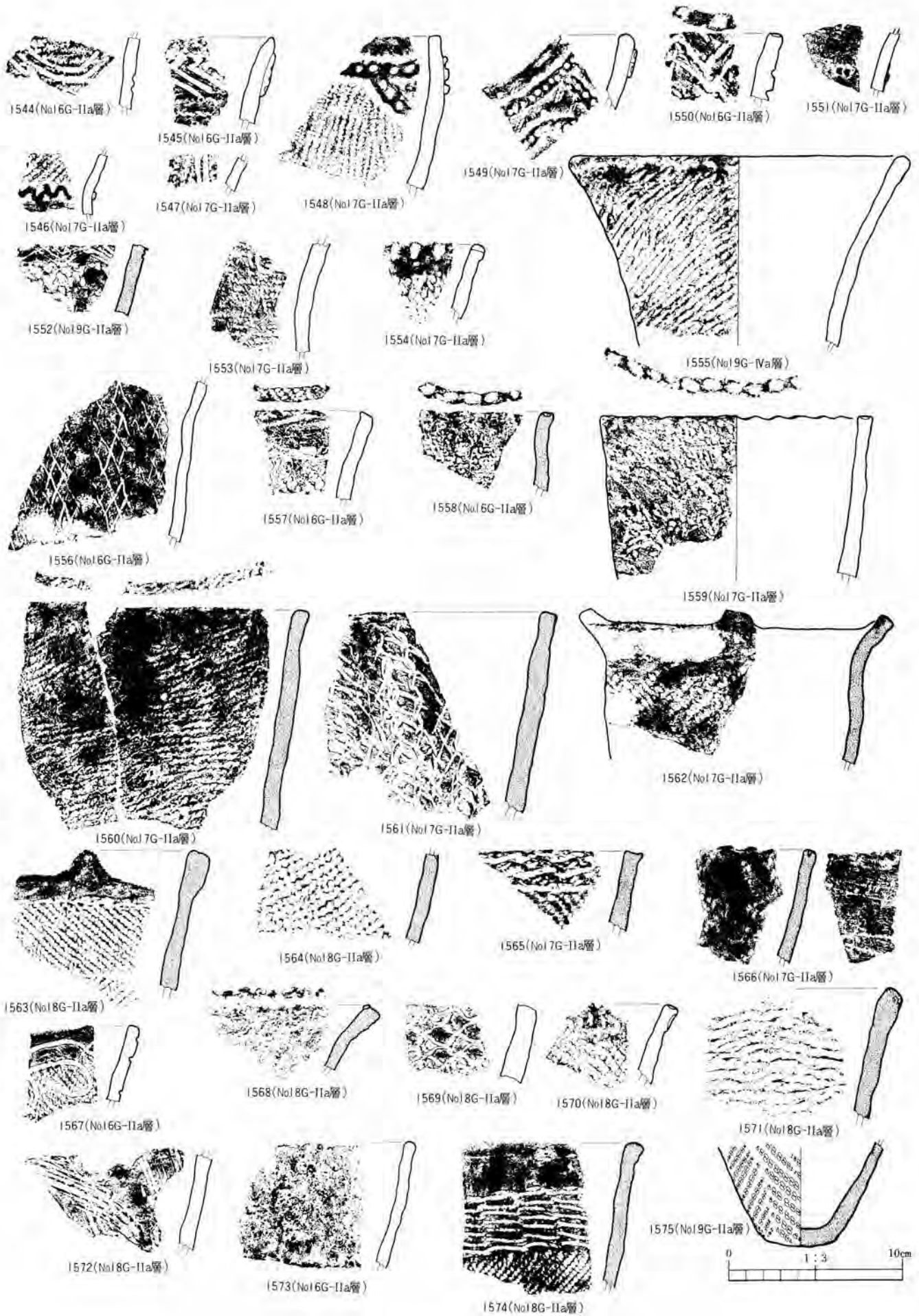
1455～1458・1460は沈線・隆沈線などで施文され、大木8 b式に相当する。1461～1463は大木7 a式に相当するが、他のものもこれ以前の型式に伴う。	第Ⅸ群
2 a層 (1474・1475・1477・1478・1481・1485～1487・1652～1658)	
1474・1475・1477・1478・1652～1658は沈線・隆沈線などにより渦巻文や懸垂文を施すもので大木8 b式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴う。	第Ⅸ群
3 a層～2 a層としたもの (1476・1480) も大木8 b式に相当するものようである。	
No16～19グリッド (第115～117図)	
貝ブロックC (1490・1491)	
IV c層の最下面に形成された貝ブロックCに伴うものであるが、いずれも胎土に繊維を含み組縄縄文を地文とする。	第Ⅰ群
IV c層 (1488・1489・1492)	
1488は尖底部、1489は羽状縄文を施すもので大木1式に相当するものである。	第Ⅰ群
IV b層は遺物の量が少なく図示できるものはない。	
IV a層 (1493～1502・1555)	
口唇部のわずかに外反する深鉢で、尖底を呈すると思われる。いずれも地文のみの施文であるが、大木1式に相当するものである。	第Ⅰ群
Ⅲ b層 (1503～1510)	
b縁部の直立～外反する尖底深鉢が主体で、組縄縄文と不整な斜行縄文の2者が見られる。また、1510のようにかなり小形のものを含む。1508・1510は口唇部にも施文が認められる。これらはいずれも大木1式に伴う。	第Ⅰ群
Ⅲ a層 (1511～1515)	
いずれも地文のみであるが大木1式に相当する。	第Ⅰ群
Ⅱ d層 (1516)	
1516は口縁のわずかに外反する深鉢で、口唇部は楕円形の押圧を連続して施すことにより小波状を呈する。体部は単節斜縄文を横回転で施す。大木1式に相当する。	第Ⅰ群
Ⅱ c層 (1517・1518・1520～1525)	
1517・1518は口縁部に不整撚糸文を施す。1518は大波口縁を呈し、体部に羽状縄文を施す。これらは大木2 a式に相当する。1524・1525は押し引き沈線で施文するものであり、大木2 a式より古い型式に伴う。	第Ⅱ a群
Ⅱ b層 (1519・1526～1543・1695・1696)	
1526・1527は網目状撚糸文を施すが、胎土に繊維を含まない。1531・1532は口唇部に刻目を施す。1533～1535は不整撚糸文を施す。いずれも大木2 b式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴うが、1543は内面に条痕文を施すものである。	第Ⅱ b群
Ⅱ a層 (1544～1554・1556～1575)	
1544・1547は沈線により施文され、大木8 b式に相当する。1545は矢羽根状の沈線を施すもので大木7 a式に相当するものか。1548・1549は円形の刺突を伴う隆帯を施すが大木5式に相当する。1546は隆線による連続山形文(竹管文)を施すもので大木3式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴うが、1575は丸底風の深鉢で複節斜縄文を施し大木1式より古い型式に	



第115図 第1次調査区出土遺物 (5)



第116図 第1次調査区出土遺物 (6)



第117図 第1次調査区出土遺物 (7)

相当する。

20～21グリッド（第118図～第120図）

貝ブロックA（1576）

iv c 層下面の貝ブロックAに伴う。1576は繊維を含む深鉢で、羽状縄文を施す。大木1式に相当するものかと思われる。 第I群

iv c 層(1577)

綾絡文に伴う羽状縄文を施す。大木1式に相当するものかと思われる。 第I群

iv b 層(1578～1584・1586)

1578・1579は胎土に繊維を含まず、口唇部に刻目を有する。1578は横位S字状連鎖沈文を施す。いずれも大木2 b 式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴う。 第II b 群

iv a 層(1585・1587～1594・1639)

1589は端部に細かい撚りの原体を巻きつけた単節斜縄文R-LとL-Rを回転させ羽状に施した後、S字状連鎖沈文的な撚りのない不整撚糸文を施す。1585はS字状連鎖沈文を施す。これらは大木2 b 式に相当する。1587は沈線により山形文（竹管文）を施し、大木2 b 式あるいは大木3 式に相当する。1591・1593・1639は口縁部に不整撚糸文を施し大木2 a 式に相当する。1592・1594は大木1 式に伴うものである。 第II b 群

iiic層は地山ブロック（間層）で遺物を含まない。

iiib層(1595～1609)

1595・1602は沈線により山形文（竹管文）などを施す。1596は口縁部に刻目のある隆線を施す。

これらは大木3 式に相当するが、他のものはこれより古い型式に伴う。 第III群

iiia層(1610～1614)

この層も間層で遺物は少ない。1610は沈線による山形文（竹管文）を施し大木3 式に相当するが、他のものはこれ以前の型式に伴う。 第III群

ii c 層(1615～1618・1623～1629)

1615・1616は刻目を有する隆線を施す。1617は沈線により山形文（竹管文）などを施す。これらは大木3 式に相当するが、他のものはこれ以前の型式に伴う。 第III群

ii b 層(1619～1622)

小片であるため判然としないが、やはり大木3 式以前に相当するものかと思われる。

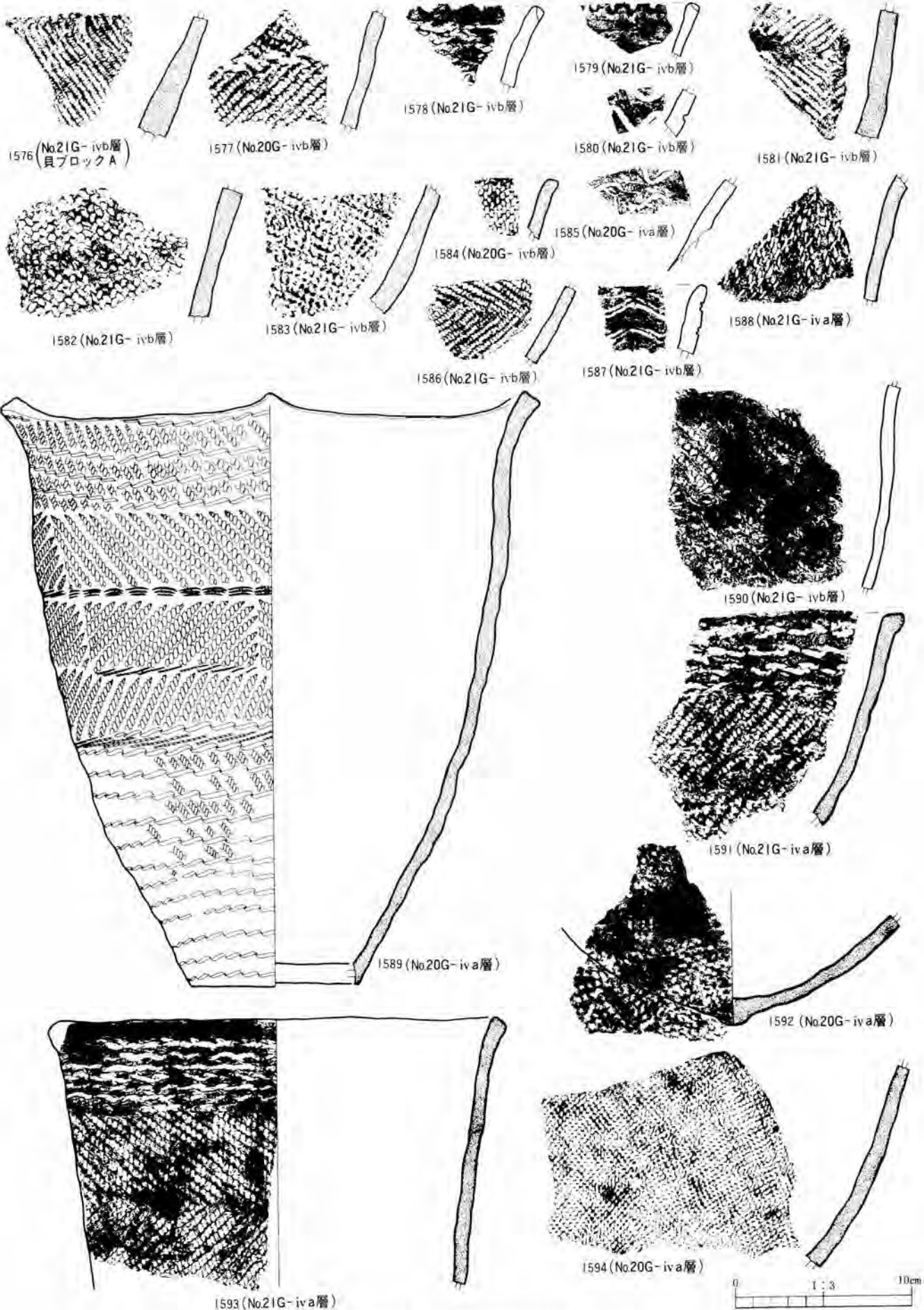
ii a 層(1630～1638)

1630～1633は沈線により山形文（竹管文）を施し大木3 式に相当するが、他のものはこれ以前の型式に伴う。 第III群

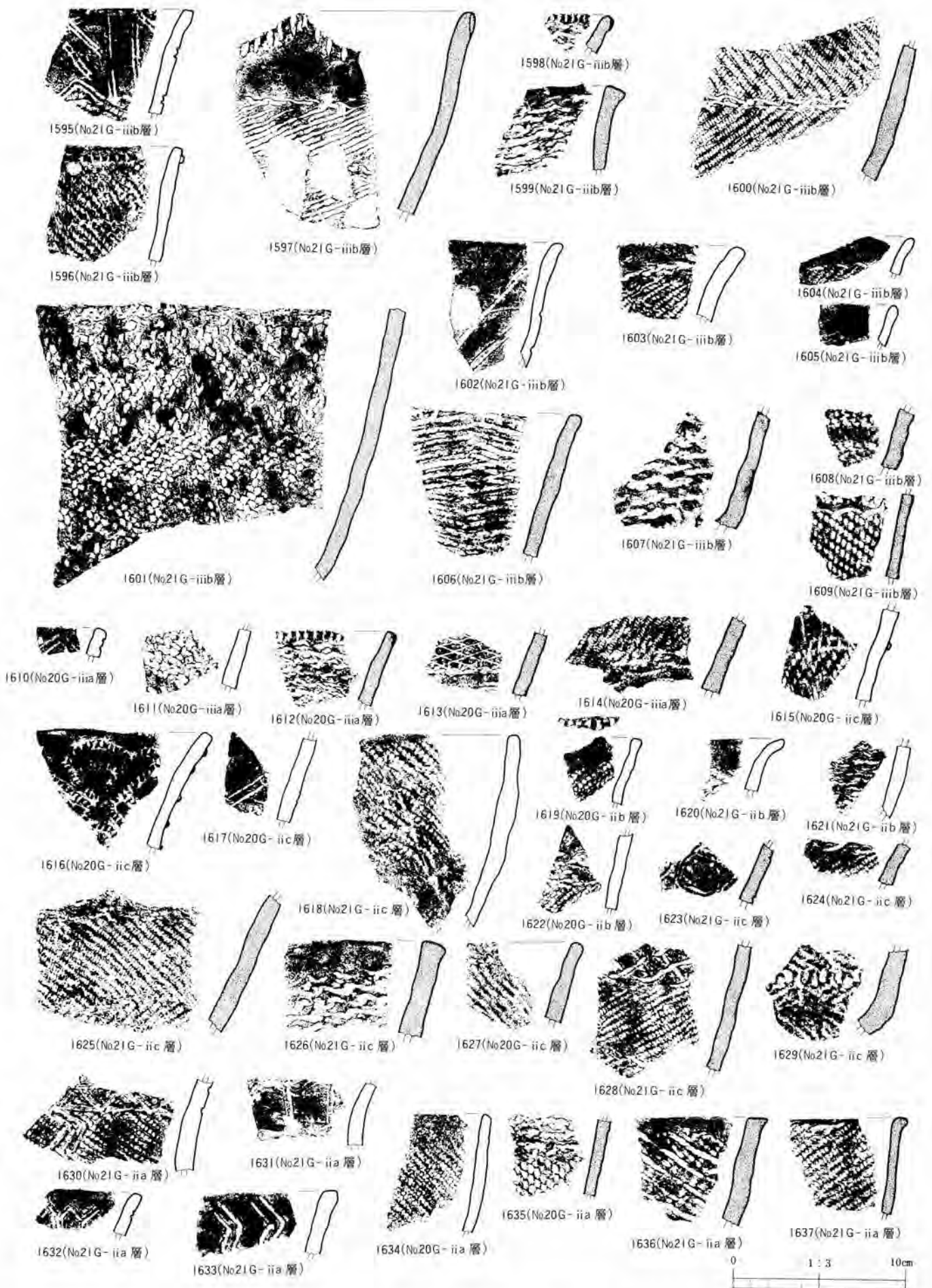
〈表土など〉(1640～1651・1659～1680・1682・1684～1689・1692～1694・1700・1701)

1641～1651は隆沈線や沈線などで施文されるもので大木8 b 式に相当する。1659～1662は原体圧痕文を施し大木7 b～8 a 式に相当する。1640・1663～1670・1676は口縁部を折り返すものや竹管文を施すもので大木7 a 式に相当する。1672～1675は隆帯状に円形の押捺を連続させ

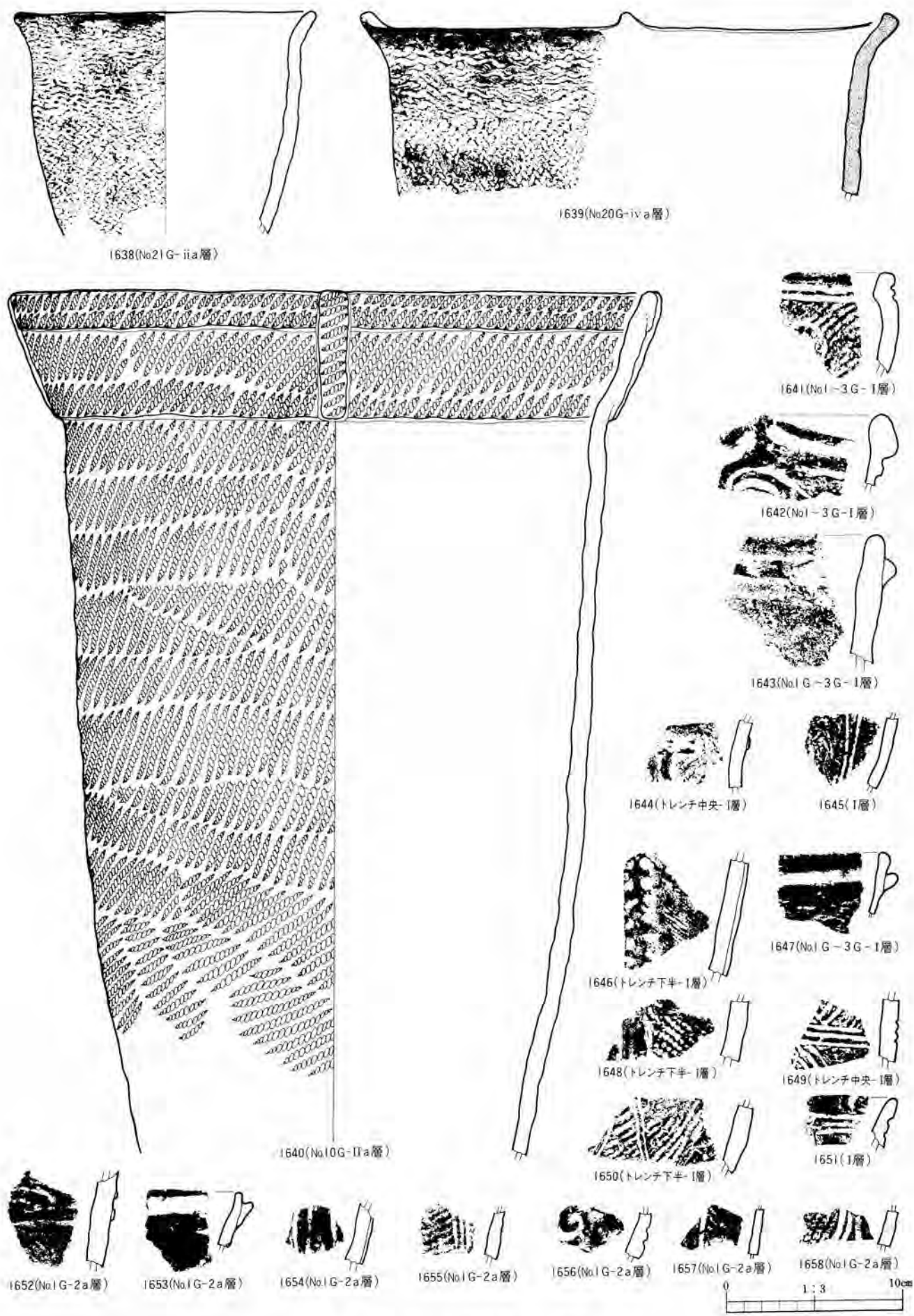
<参考文献> 奥野 義一 「大木氏木戸器理解のためにI～VI」『考古学ジャーナル13、16、18、24、32、48』1967～1970
熊谷 常正 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立」『岩手県立博物館研究報告第1号』1983



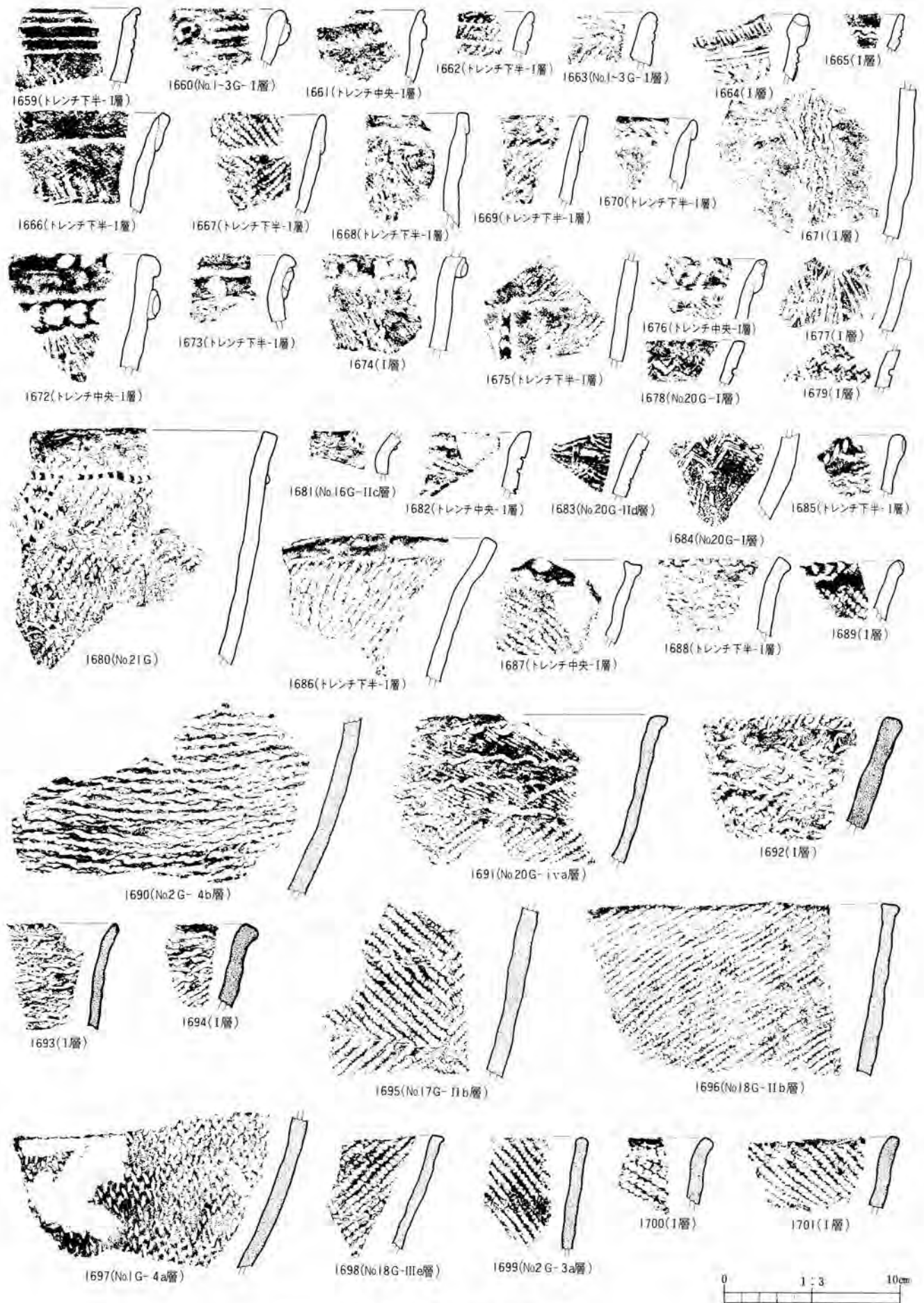
第118図 第1次調査区出土遺物 (8)



第119図 第1次調査区出土遺物 (9)



第120図 第1次調査区出土遺物 (10)



第121図 第1次調査区出土遺物 (11)

るもので、前期末～中期初頭に伴うものか。1678・1679は沈線による連続山形文を施し大木3～4式に相当する。1680～1684は大木3式に相当する。他のものはこれ以前の型式に伴う。

② 石器（第122図～第128図）

土器の項で記述したとおり、各層ともその層が堆積する以前の遺物が多く含まれており、石器も各層位毎の組み合わせが必ずしも有意ではないので、ここでは剥片石器と礫石器に大別して器種毎に記述する。（主体となる時期はおよそ大木1式～大木3式となる。）

剥片石器（1702～1745）

出土した剥片石器は44点で刺突器・切削器・搔器類・その他の石器などにより構成されるが、定形化した石器のほかに第1次剥離面を大きく残す不定形石器もみられる。なお、着柄剤の付着したものはみられなかった。

刺突器類（1702～1714）

対象物の第1次獲得手段として用いられた利器で、ここでは石鏃が13点出土している。すべて無茎鏃で、基部形態は平基と凹基の2種がある。抉入率（長さに対する抉入の深さ）は最も大きいもの（1706）が12%ほどであり、基部幅は13～18mmに集中する。側縁形態は基部付近にやや平行な両側縁をもち、ここから直線的に先端部に至るものが多い。

切削器類、搔器類

(1) つまみを有するもの（石匙）（1715～1724）

形態は、つまみ部の縦軸線に対して直交する刃部をもつもの（1715）が1点あり、この他は縦軸線に平行した刃部をもつ。刃部は、角度が大きく剥搔機能を意図したもの（1715～1717）と、これらより刃部角度が小さく切削機能が主要素となるもの（1718～1724）の2種がある。剥片の両面から刃部を作り出しているものは少なく、大半は片面加工で裏面に第1次剥離面を大きく残す。

(2) 搔器（1731～1738）

両面に大きく第1次剥離面を残し、剥離自体のウエーブをそのまま利用して下端部（刃部）に剥搔機能をもたせているものである。形態は不定形なものが多く、1731・1733・1736～1738は打面をそのまま残している。1736・1737は剥搔機能に適した下端部をもつ剥片をそのまま石器として使用しており、刃部には使用によるマイクロフレーキングがみられる。この他のものも剥片に簡単な片面加工を施して、角度の大きな刃部を作り出している。

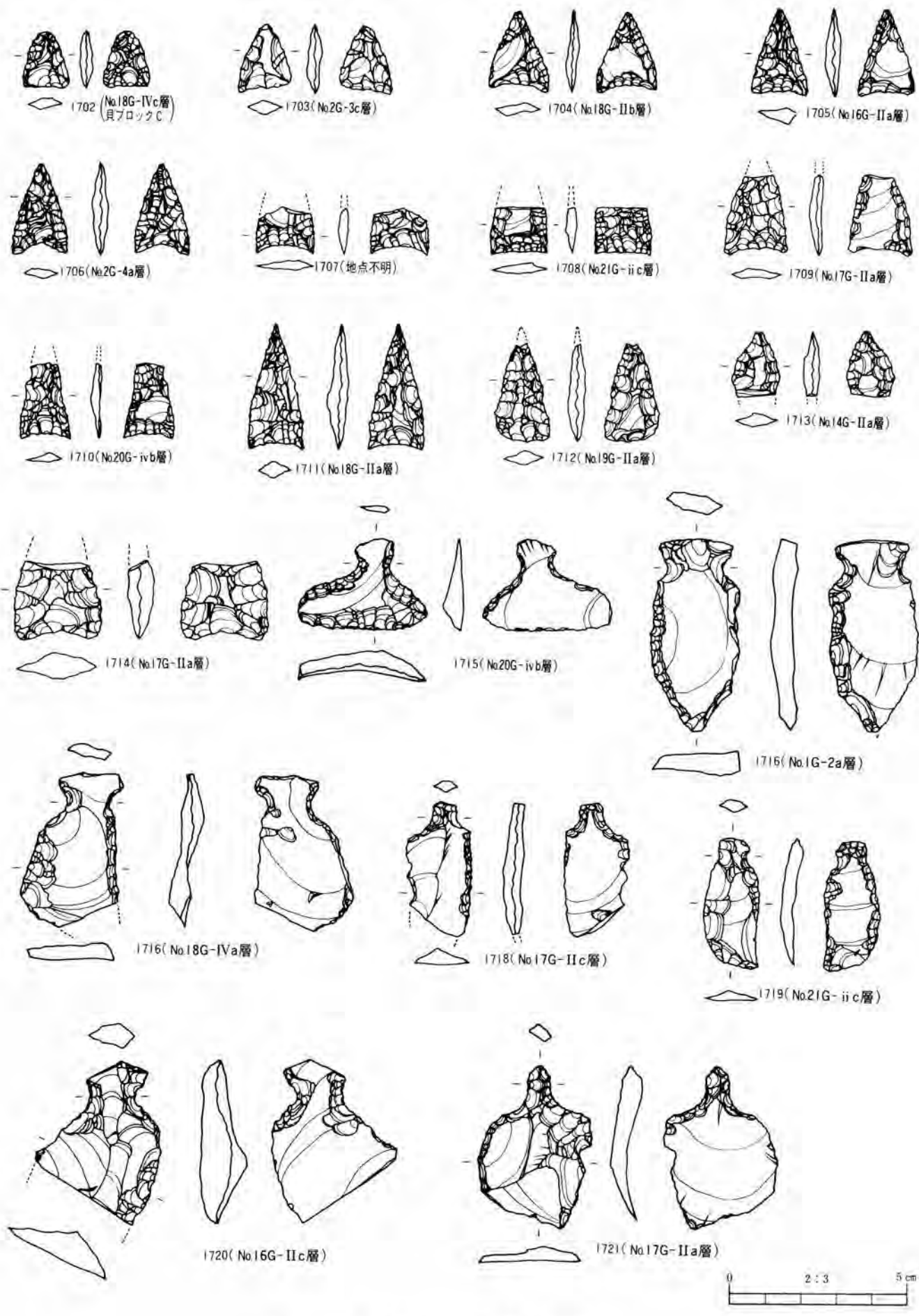
(3) 切削器（1725～1728・1739～1745）

切削機能に適した刃部をもつもので、定形化したもの(a)、と第1次剥離面を大きく残し側縁に刃部を作り出したもの(b)およびその他のもの(c)に分けられる。

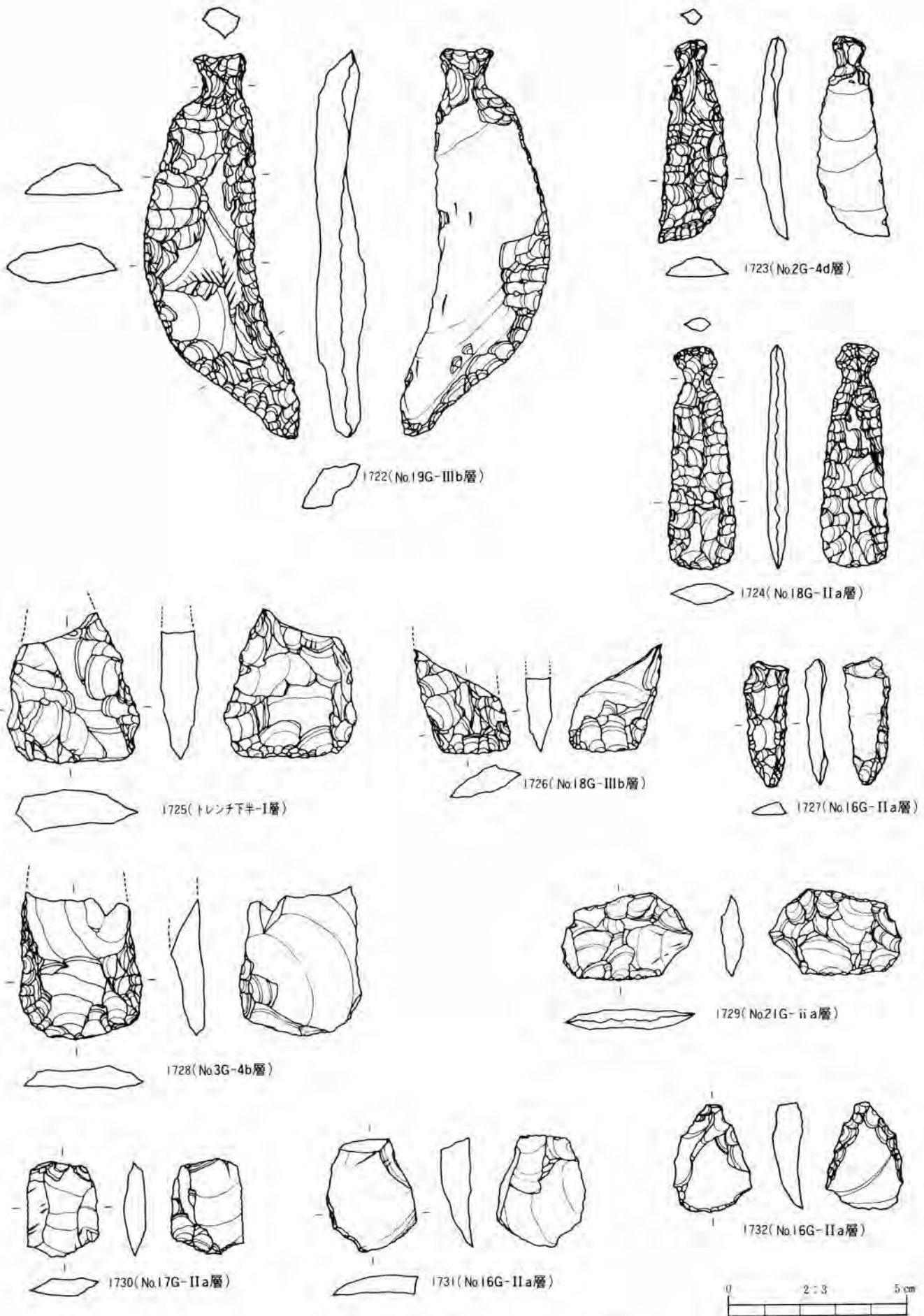
a（1725～1727） いわゆる篋状石器で、いずれも基部欠損品である。

b（1739～1745） 剥片の側縁に片面加工の刃部をもつもので、1740・1742・1743には打面が残されており、二次加工による剥片形状の変化は小さい。1739・1742・1743は剥片の一部に刃部加工をしており、1740・1741・1744・1745は平行する両側縁に加工がみられる。

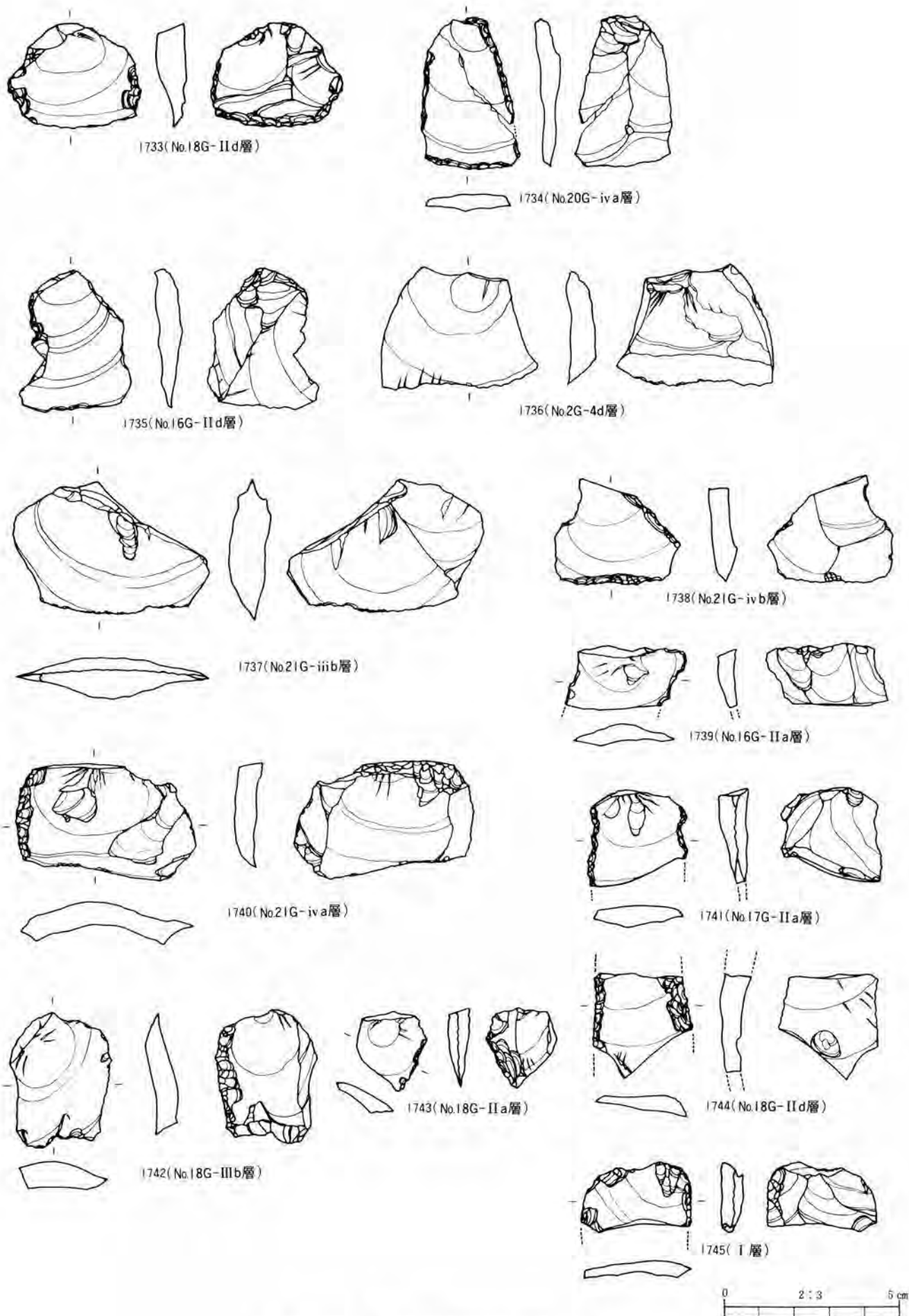
c（1728） 刃部角度が大きく、剥離の新旧が明瞭に判別される。器面が風化後再び二次加工されたものである。



第122図 第1次調査区出土遺物 (12)



第123図 第1次調査区出土遺物 (13)



第124図 第1次調査区出土遺物 (14)

その他の石器

(1) ピエス・エスキューイ(1729・1730)

1729は上下両側縁に使用による小剥離がみられ、機能刃部は直状で、上縁20mm、下縁22mmである。

1730は下縁が機能部とみられ、刃部は大きく楔として使用された可能性が考えられる。

礫石器(1746~1784)

図示したものは39点である。第1次調査では礫器・特殊磨石・石皿・砥石の出土が特徴的であるが、これとは対比的に石錘類は欠落している。

石斧(1746~1752)

いずれも欠損品である。刃部には両刃のもの(1749)と片刃のもの(1751)の2種がある。1750は敲打成形時のものである。1749は調整が粗雑であり成形時の敲打痕がみられ、刃部も鈍い。

礫器(1753~1758)

およそ楕円形に近い自然礫を打ち欠いて片刃の刃部を作り出している。1755~1757のように比較的鋭い刃部をもつものは少なく、1754・1758のように鈍いものや1753のように刃部の不鮮明なものの方が多い。後二者については製作途中の未製品である可能性も考えられる。1755・1757の刃部には使用による敲打痕がみられるが、1756については刃部以外のところに敲打痕がみられる。刃部の形態や使用痕よりチョッパー的な機能が想定される。図示した以外に約40点の出土がある。

敲打磨石(1759~1769) (註1)

(1) 特殊磨石(1759~1768)

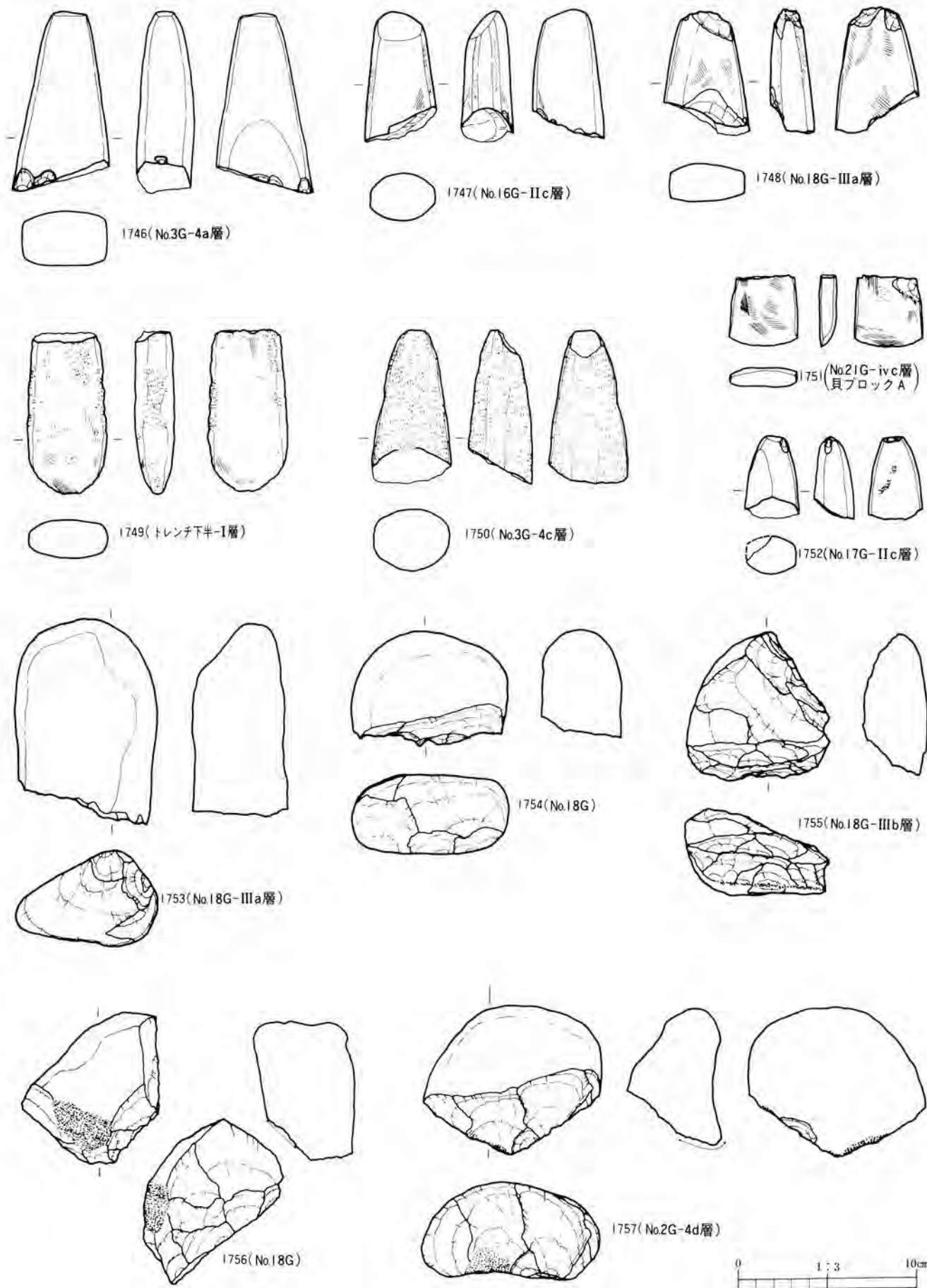
断面三角形の自然礫の側縁部を使用する石器である。機能磨面自体は、後述する敲打磨石と同様であるが、素材の選択や機能磨面の作り出し方に差異があり区別される。今回出土したものはすべて1側縁を機能磨面(A面)とし、これに隣接する面を磨き、調整磨面(B面)としている。機能磨面は1761のように幅の狭いもの(10mm)から1759のように広いもの(25mm)とややばらつきがあるが、20mmくらいに集中する。機能磨面はざらざらしており、磨り潰しなどの機能が考えられる。調整磨面は滑らかであるが、使用によるものではなく、機能磨面の幅を一定に保つ調整が行われたものと考えられる。1759・1761は礫器的刃部をもち、欠損後に再利用されたもの。1765は先端部に敲打痕を有するもの。1767は調整磨面の端部に敲打痕を有するもの。1766は使用時の剥離痕が伴うものである。

(2) 敲打磨石(1769)

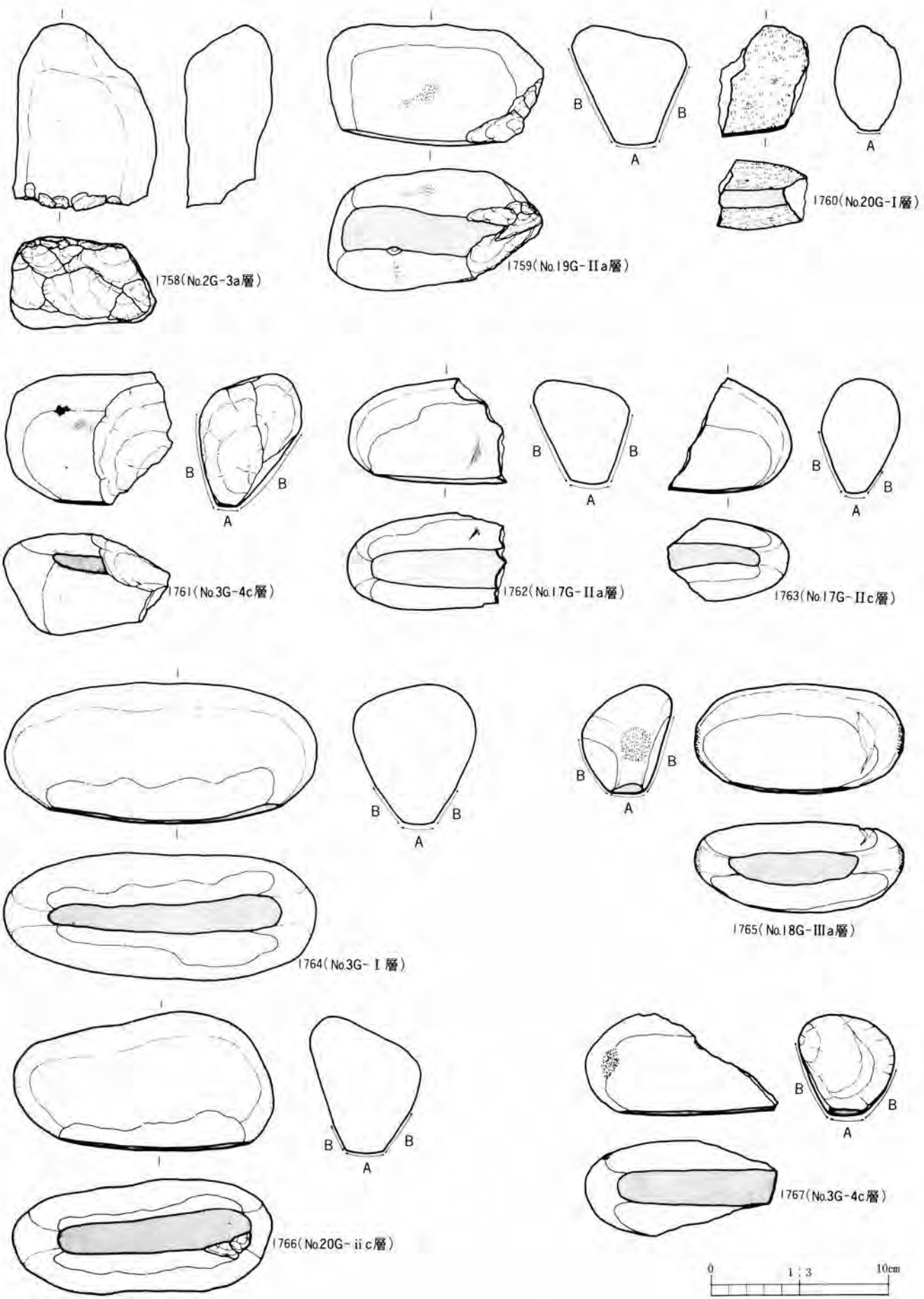
1点のみである。扁平の楕円礫を使用し、上下両側縁を機能磨面としている。実測図下端の機能磨面には調整剥離がみられるが、上端にはない。半欠した後に再利用され、割れ口にも磨面(調整磨面?)がみられる。両側面にある大きな剥離は欠損後のものである。

敲石(1770・1771・1773・1774)

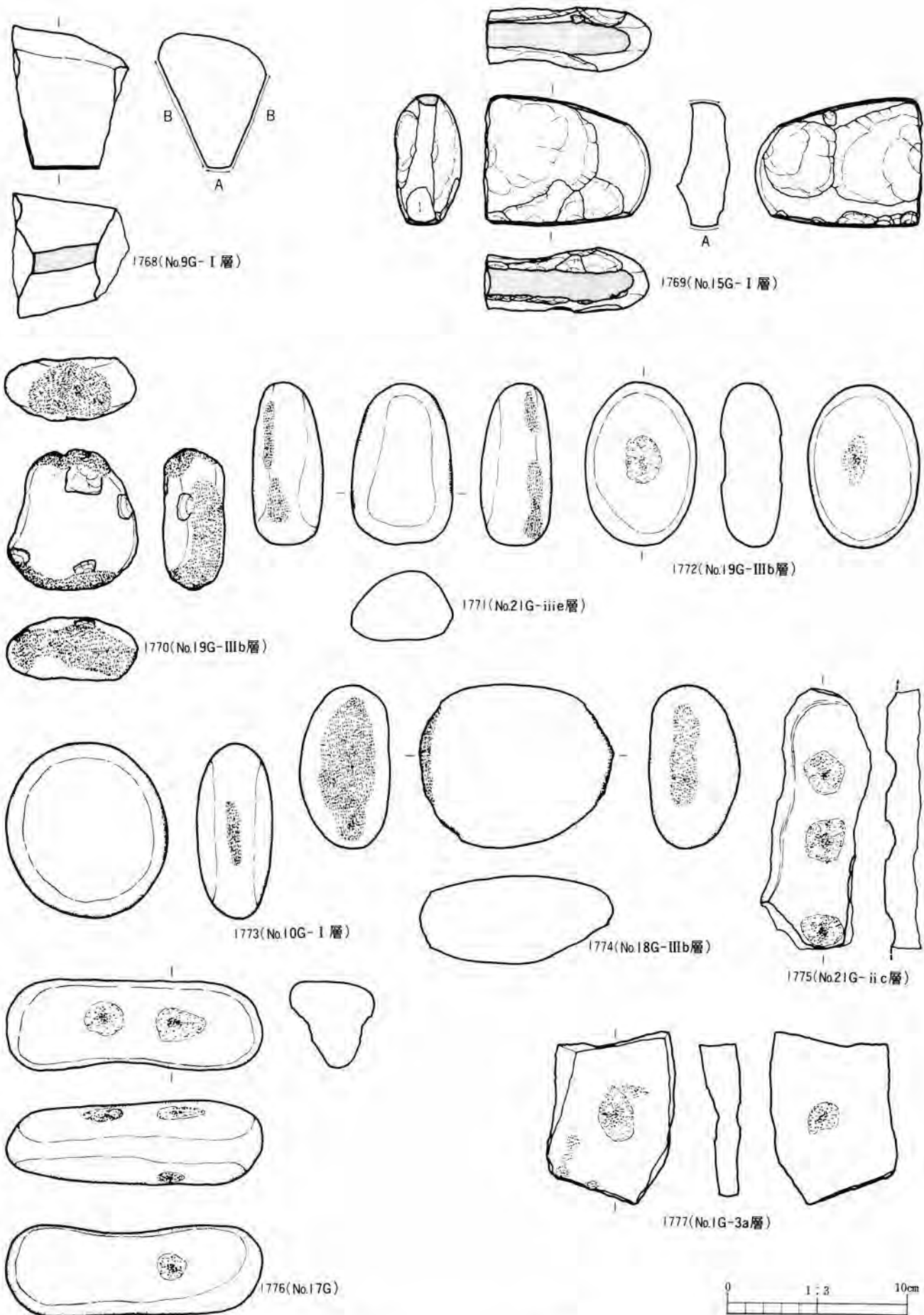
註1 (参考文献) 八木 光則 「いわゆる「特殊磨石」について—中部地方における縄文早期の石器研究への問題提起—」『信濃』28-4 1976
武田 将男 ほか 「大館町遺跡—縄文中期集落址1976年度調査報告—」岩手大学考古学研究会編 1978



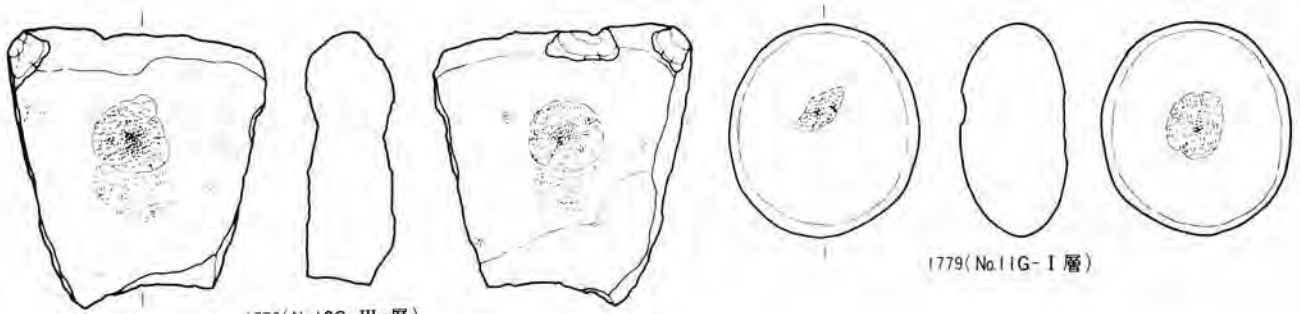
第125図 第1次調査区出土遺物 (15)



第126図 第1次調査区出土遺物 (16)

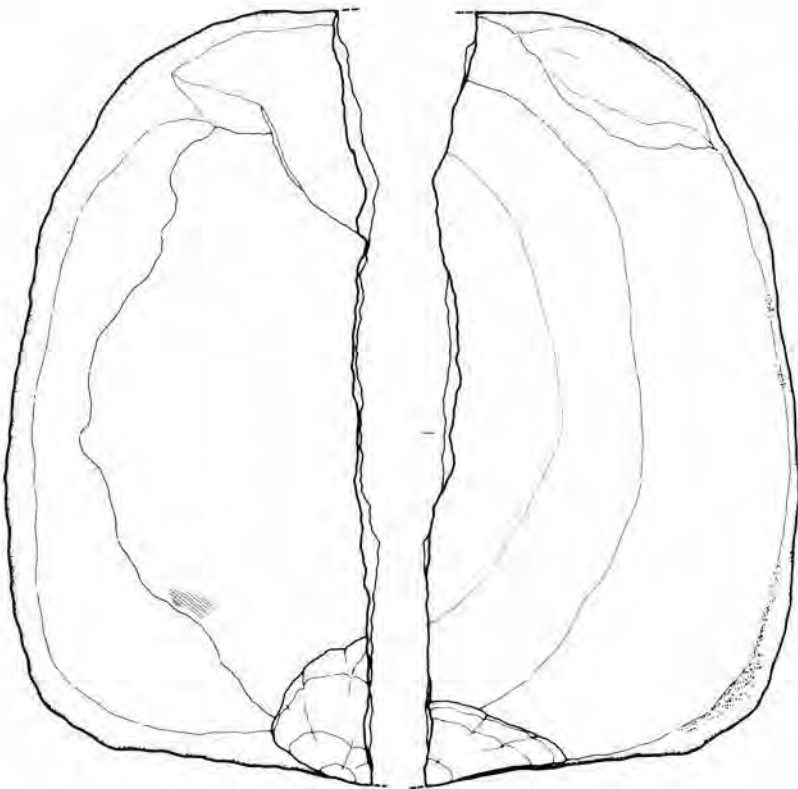


第127図 第1次調査区出土遺物 (17)



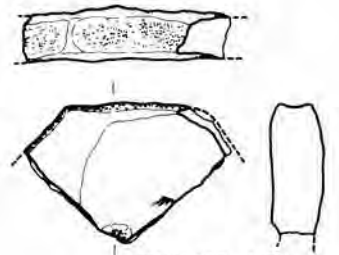
1778(No.19G-IIIe層)

1779(No.11G-I層)



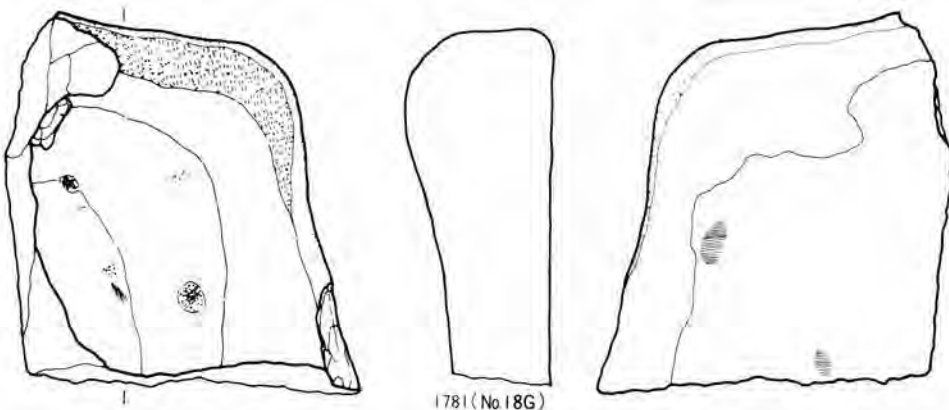
1780(No.18G-IIIb層)

1782(No.20G-iv a層)

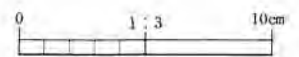


1783(No.20G-I層)

1784(No.3G-I層)



1781(No.18G)



第128図 第1次調査区出土遺物 (18)

いずれも自然礫をそのまま利用する。1770・1774は長軸方向の両端部を中心に使用する。1771は両側縁を使用するもの、1773は円形礫の側縁を使用するものである。

凹石（1772・1775～1779）

素材の選択には一貫性がみられないが、いずれもよく使い込まれた凹部が数ヶ所みられる。

石皿（1780・1781）

比較的ち密な砂岩質の素材を用いる。敲打により調整するが、使用面は平滑である。

砥石（1782～1784）

石皿と同様な素材を用いるため判別しにくいものもある。使用面は平滑であるが、1784は溝状の磨面を有する。石皿・砥石とも図示した以外に小片が多数出土している。

③ 土製品・石製品（第129図）

第1次調査では出土量が少なく、図示したものがすべてである。

1785は動物形石製品で、チャートを用い打製（押圧剥離）により製作している。人あるいは他の動物を模したものと思われる。

1786は磨製石斧のミニチュアで、器面は整形時に小さく面取りされ、これに伴う擦痕が観察される。基部には使用時のものと思われる剥離が伴う。

1787は焼成された粘土塊。1788は滑石製の珧状耳飾。1789は有孔礫である。穿孔は自然であるが、後面には沈線、擦痕が伴う。

④ 骨角器（第129～第130図）

ここでは動物の骨、角、歯、牙などを用いて製作した利器、工具、装飾品などの製品と加工痕を有する素材を一括して記述する。

第1次調査で出土したものはすべて斜面上端のNo20～21グリッドから出土したものである。層位は、貝ブロックやiii c層、iii b層、iic層などの動物遺存体包含層から他の動物遺存体と共に出土したもので、特徴的な出土状況を示すものではない。

1790は棒状の刺突具（骨針など）の一部である。器面は磨製により面取りされている。焼成を受けている。

1791はイノシシ（オス）の左下顎犬歯製の刺突具である。舌側のエナメル質を用いるが、基部と先端部を欠く。後面には製作時の擦痕が見られる。

1792はイノシシの右距骨であるが、側面に3面の磨面が認められる。1793はシカの角で左角座付近（第1角叉）である。角座・第1枝基部・角幹の三方を打ち折る。切断面には、緻密質部を石器により打ち削り（chop）、溝状にして海綿質部で折られている。

1794はシカの右中手骨近位部（奇形骨）である。側面に楔状の石器（おそらくはピエス・エスキューイ）を髓孔に達するまで打ち込み、縦に半裁している。後面にはこの打込みに伴う剥離痕が観察される。

1795はヒトの左上腕骨遠位端であるが、人為的に打ち割られたものか自然なのか不明である。

1796はヒトの右尺骨である。遠位端を欠く。近位部の粗面には石器によると思われる切り傷が認められる。（巻末に分析結果を掲載したので参照されたい）

⑤ 動物遺存体

第1次調査では動物遺存体の他に炭化物が出土したが、炭化物は細片が多く同定不可能であるために動物遺存体を中心に述べる。動物遺存体は哺乳類や魚類などの骨・貝殻・棘皮動物などからなるが全体に保存状態があまり良くない。No.20~21グリッドに集中する動物遺存体包含層から出土したものと貝ブロックから出土したものが主体を占めるが、前者の量が多い。なお、動物遺存体包含層は間層をはさみながら下層からiv a層、iii b層、ii c層と続くが、ii b・a層にもわずかに動物遺存体が含まれる。なお、得られた資料は発掘中に現場で取り上げたものと、調査中に採取したサンプルを1.5mmメッシュのふるいで選別したものの両者がある。以下同定できたものの種名を記すが、前述したものも再掲している。

これらのうち、イガイは貝ブロックA~Cで破碎あるいは粉碎された状態で多く検出された。また、No.20~21グリッドのii層中にもわずかに粉碎された貝殻が含まれていた。なお、貝ブロックからは魚骨（棘）が多く出土しているが種の同定はできていない。フジツボ科の一種とムラサキウニ（殻・棘）は貝ブロックAからのみ出土している。

マクロ類は棘（2点）が貝ブロックAから出土している。カツオは貝ブロックCから右左上顎骨が、No.21グリッド-iii b層から腹椎1点が、同-ii c層から腹椎3点が、同-ii b層から腹椎1点が出土している。また、同-層位不明の第一脊椎骨が1点出土している。ブリはNo.21グリッド-ii c層から腹椎1点が出土している。マダイは貝ブロックCから歯1点が、No.21グリッド-ii c層から尾椎1点が出土している。カサゴ類は貝ブロックCから尾椎1点が出土している。アイナメは貝ブロックAから尾椎1点が出土している。

ヒトはNo.21グリッド-iii b層から左上腕骨遠位端と右尺骨（遠位端を欠く）が出土している。

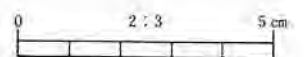
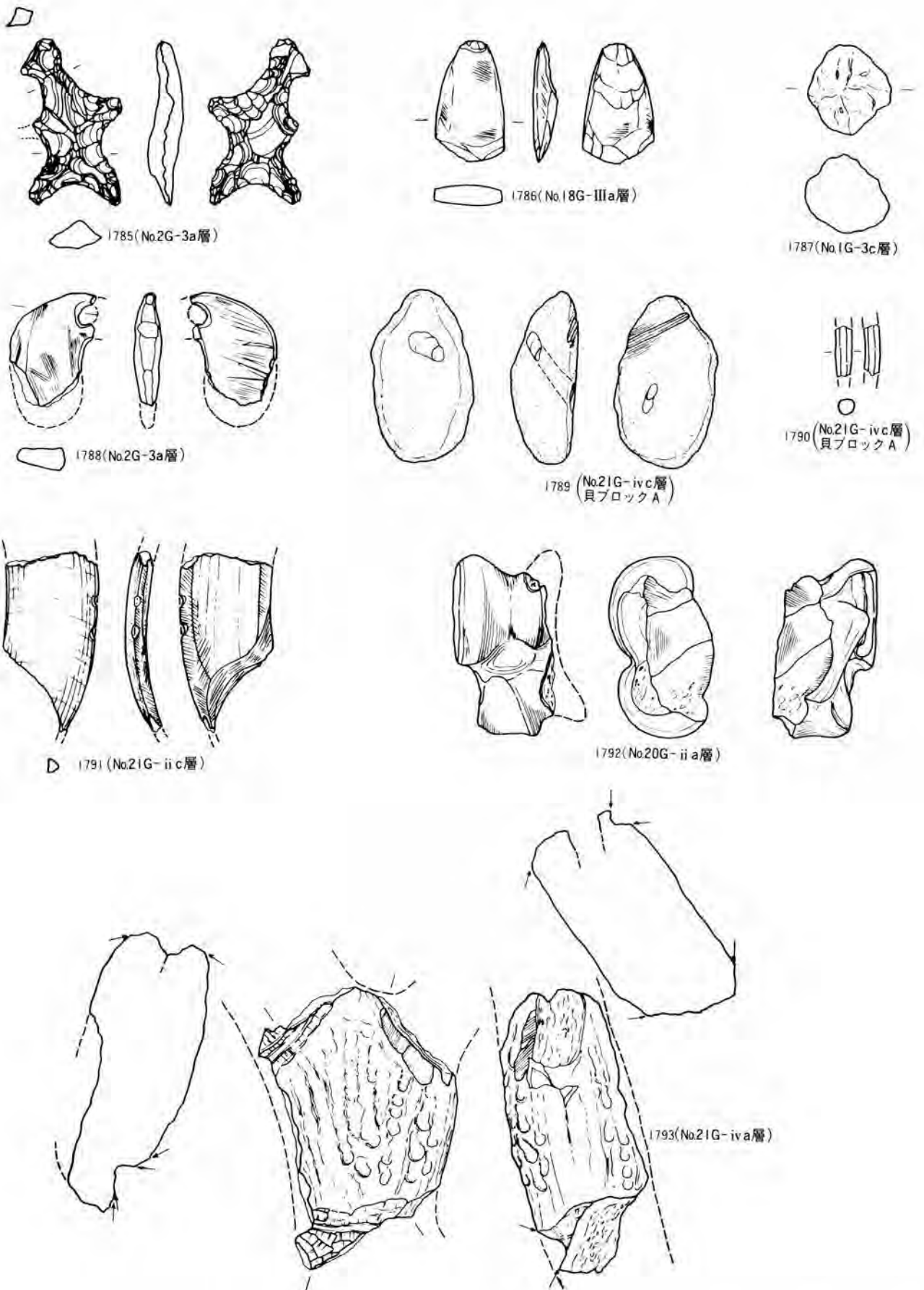
タヌキはNo.21グリッド-iii b層から左上顎骨が出土している。イヌはNo.21グリッド-iii b層から右上顎第1大臼歯が出土している。

イノシシはNo.21グリッド-ii c層から左肩甲骨1点と腰椎骨1点およびオスの左下顎犬歯1点が同-ii b層から左第1指骨（基節骨）1点がNo.20グリッド-ii a層から右距骨1点が、No.21グリッド（層位不明）から右踵骨が出土している。

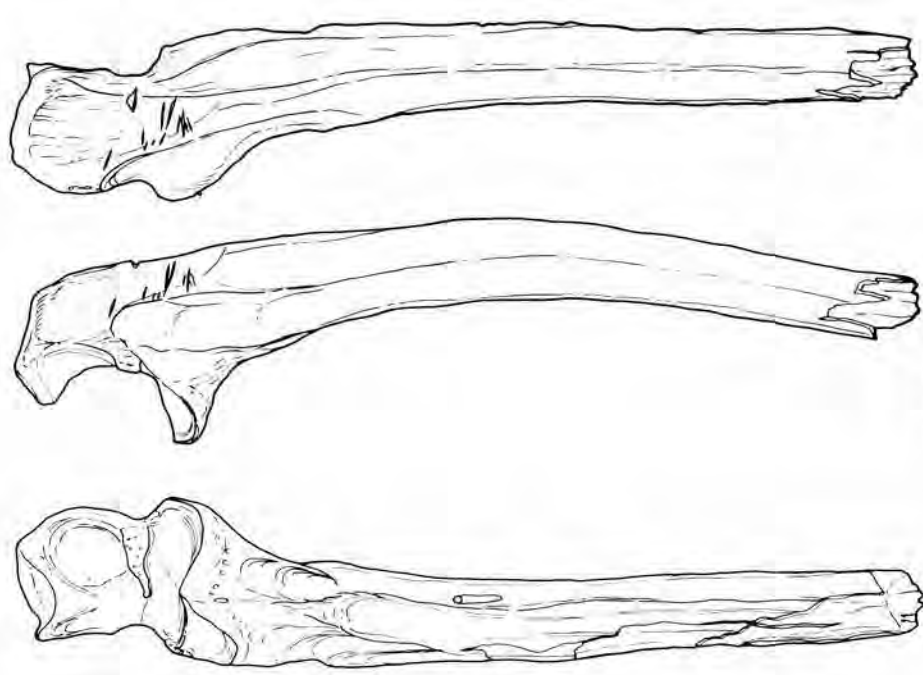
シカは最も出土点数が多く、貝ブロックAから右第3指骨（末節骨）1点が、No.21グリッドiv a層から右脛骨遠位端1点・右距骨1点・左鹿角（角座付近）1点・鹿角片1点・歯数点が出土している。同-iii b層からは左肩甲骨1点・歯数点が出土している。同-ii c層からは右中手骨近位部（奇形骨）1点・右肩甲骨1点・脛椎骨（C-6）1点・歯数点が出土している。No.20グリッド-ii a層から右第2指骨（中節骨）1点、No.21グリッドii a層から右上腕骨遠位端1点が出土している。

鱈脚類の一種は 21グリッドii c層から右大腿骨1点が出土しているが、オットセイかと思われる。

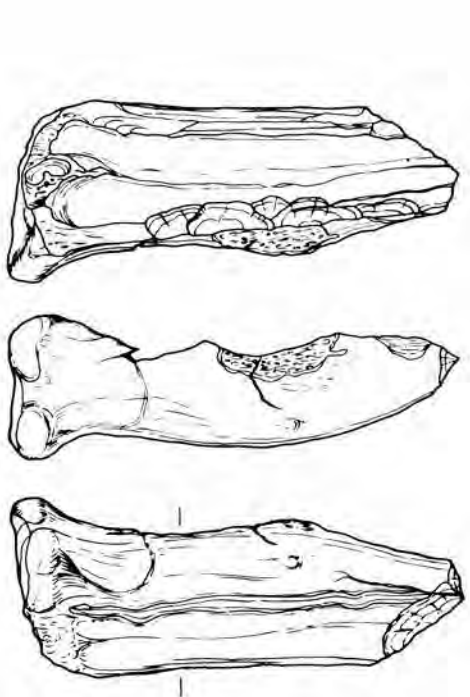
その他、四肢骨や肋骨を中心とした骨片が多数出土しており、大半がシカやイノシシなどの大形獣のものと思われるが同定はできなかった



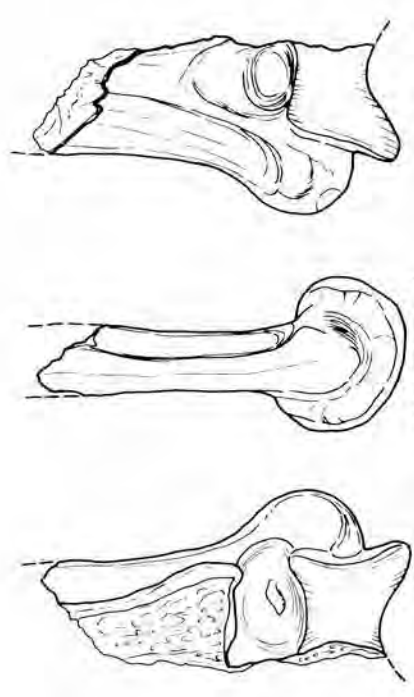
第129図 第1次調査区出土遺物 (19)



1796 (No.2 | G-iiib層)

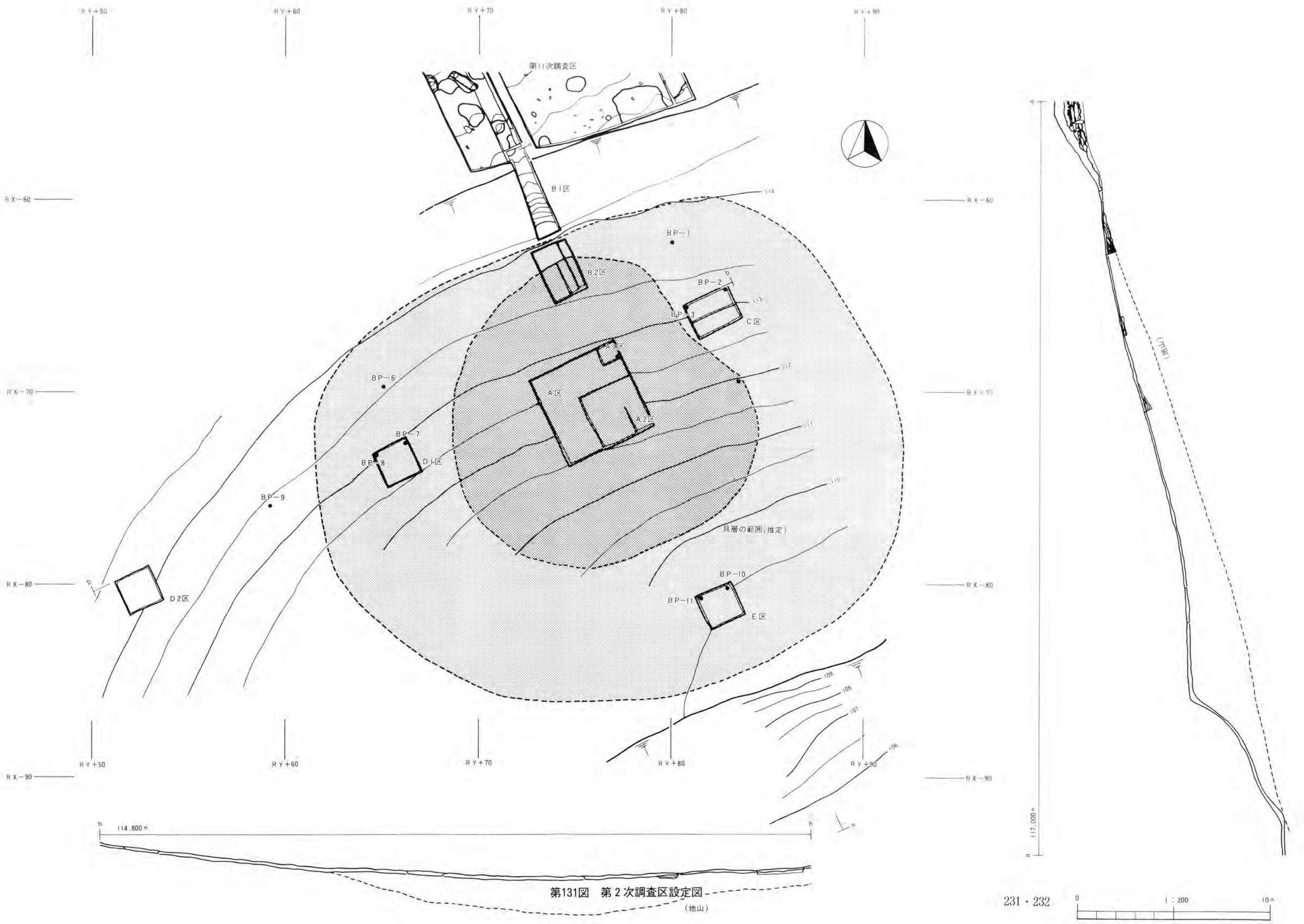


1794 (No.2 | G-ii c層)



1795 (No.2 | G-iiib層)

第130図 第1次調査区出土遺物 (20)

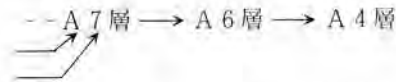


第131図 第2次調査区設定図

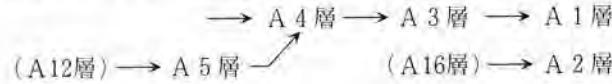
(地山)



〈第4グループ〉 第3段階の各層を覆い西から東へゆるやかな傾斜で堆積する。



〈第5グループ〉 A2区南東隅にできた凹みを北西から南東に下る傾斜で覆う。小規模な廃棄ブロックが伴う。



A1区 (第132図・第134図)

A101層～A104層の4層を確認し、以下の層をボーリング調査した。A101層～A104層はいずれも混貝土層で破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻を少量含む。また、ボーリングは1回に複数の層を掘り下げているため、上層から下層へのおおまかな推移を示すに過ぎないが、ボーリング3～ボーリング6は良好な混貝土層となっている。ボーリング4の下部にはほとんどウニだけで構成される層がみられ、ボーリング5・ボーリング6はイワシをはじめとする多くの魚骨が含まれていた。ボーリング10以下は、地山層である。わずかに含まれた動物遺存体はハンドオーガーを挿入する際に上層のものが混入したためと思われる。

B2区 (第135図)

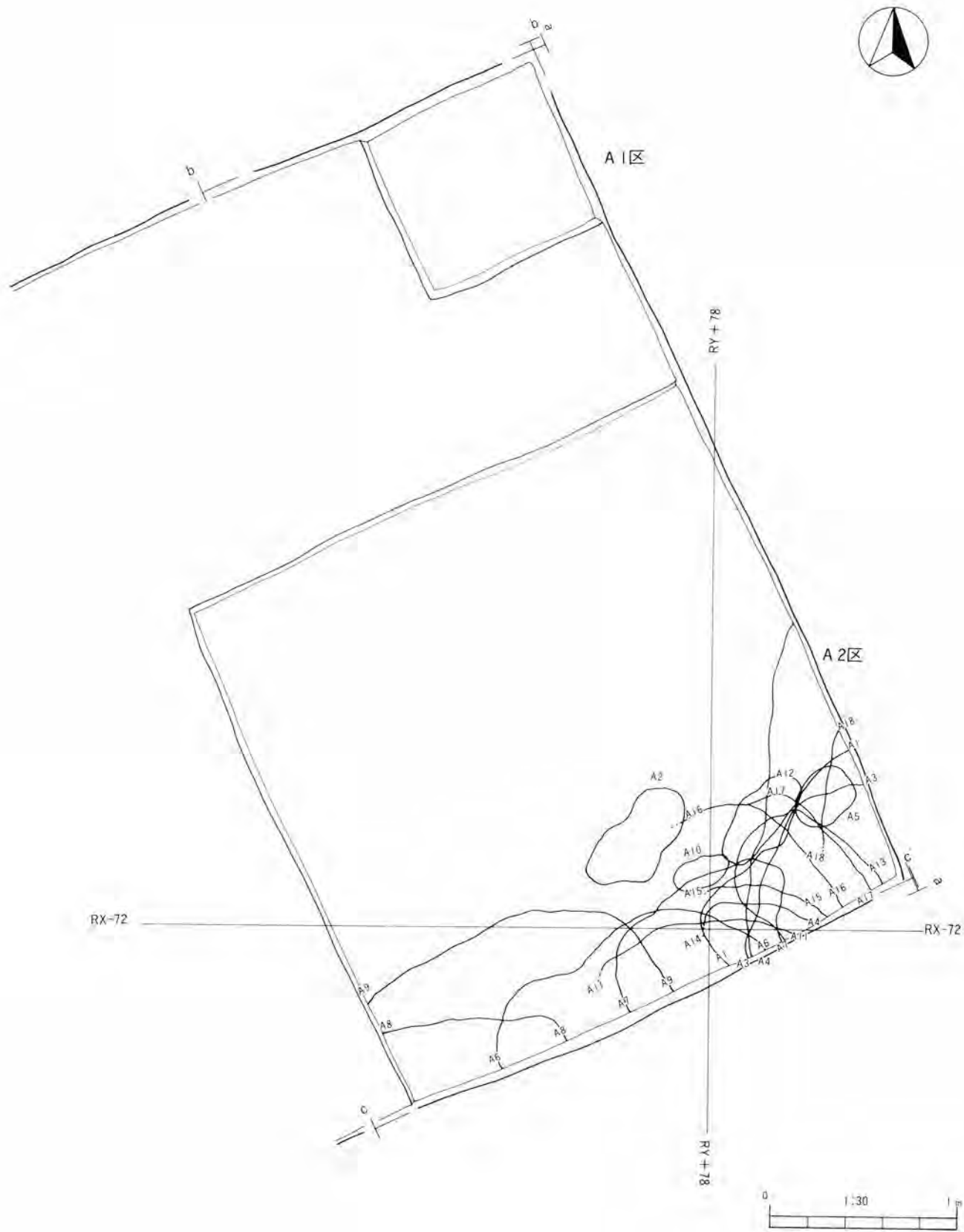
畑として使用された際に斜面を切ったものと思われ、かなり傾斜がゆるくなっている。貝層の上端部に相当する。B1層～B8層の8層を確認している。B1層・B2層は破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻を少量含む混貝土層である。B3層・B4層は破碎～粉碎されたイガイなどの貝殻をやや多く含む混貝土層で、層位面付近から完存率の高い獣骨を多く出土している。B5層は灰まじり層である。B6層・B7層は貝類を全く含まない土層であるが、イワシなどの魚骨をやや多く含む。B8層も土層であるが、イワシを含むほかは、魚骨、貝類を微量含む。B8層下面は地山へ漸移的に推移する。

C区 (第131図)

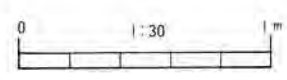
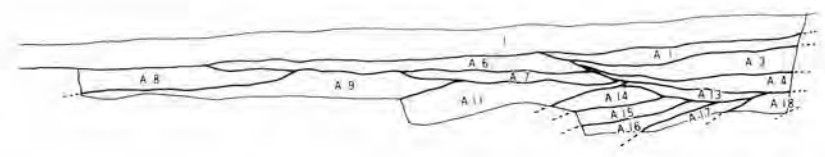
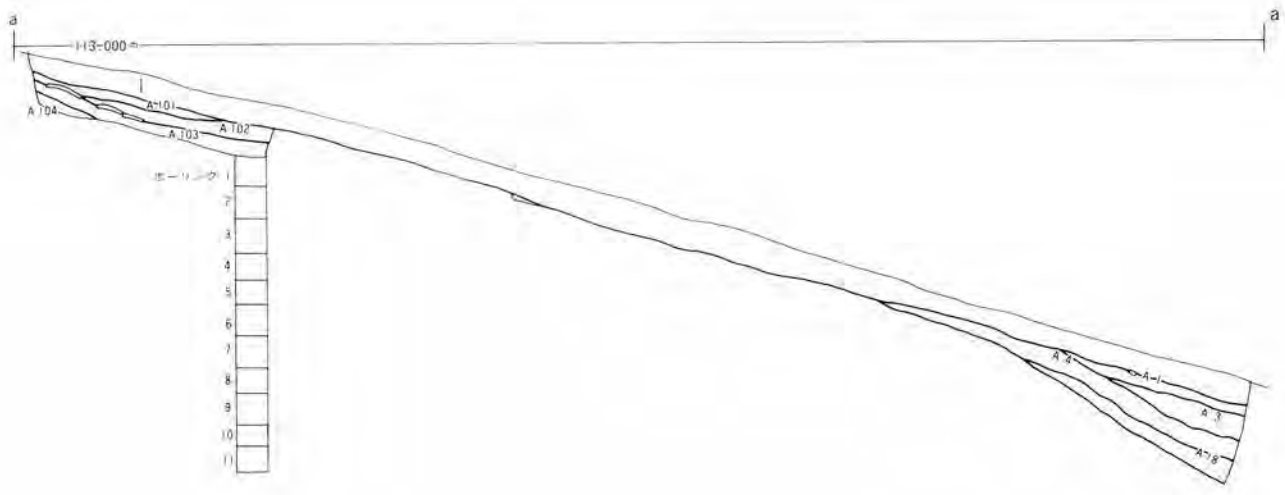
最上層のみを精査したところ縄文時代中期前葉の土器片を比較的多く検出した。

C1層は暗褐色土層であるが炭化物粒を比較的多く含む。層厚は16cmほどである。焼骨がわずかに含まれるが貝殻は見られなかった。水洗選別が完了していないので詳細は不明である。

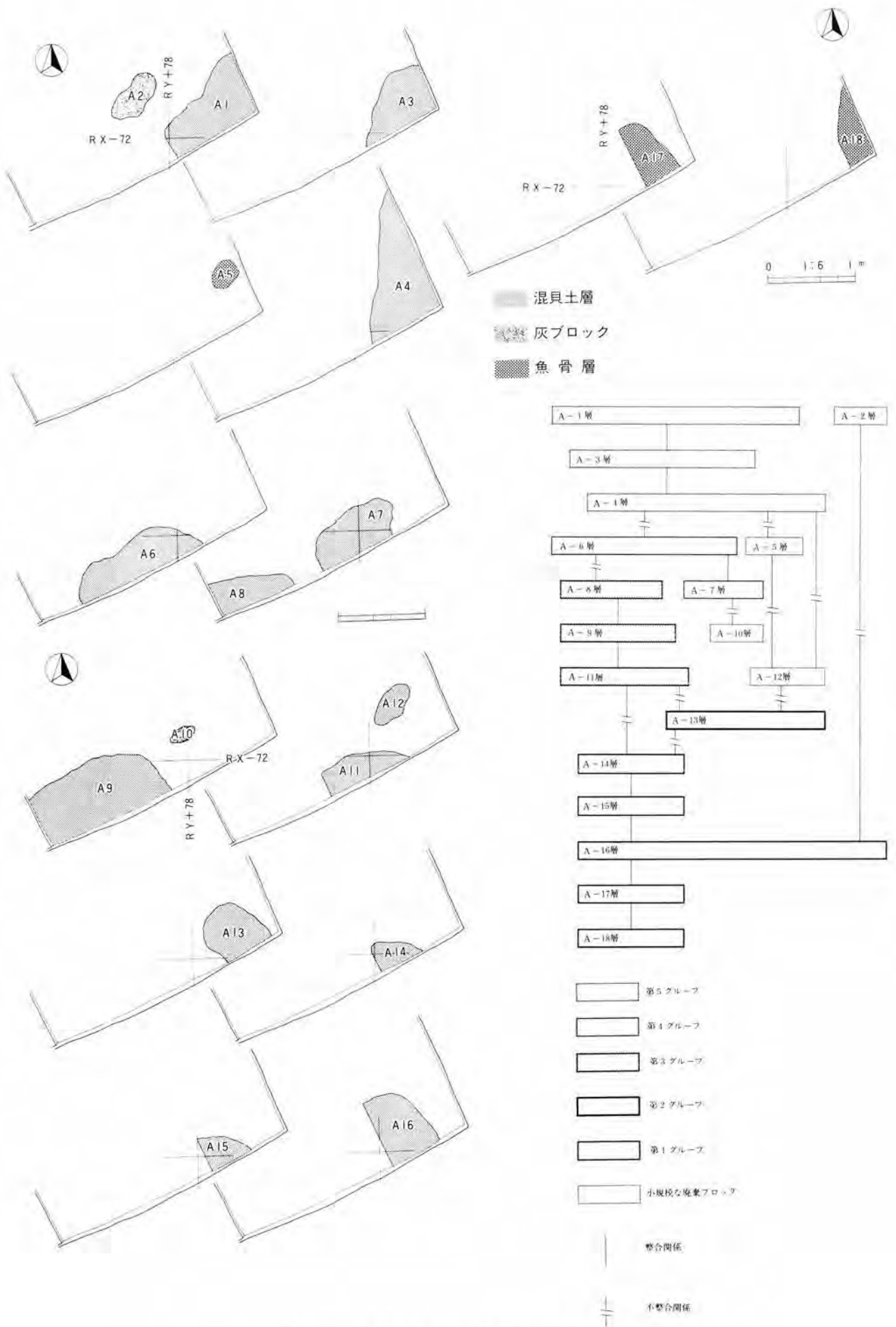
精査を行った層の概略は以上である。これに周辺のボーリング調査の成果をあわせて第131図に貝層の範囲を示した。中心部の濃いアミは魚骨層や貝層などの堆積する範囲であり、この周辺の薄いアミは混貝土層の堆積する範囲である。



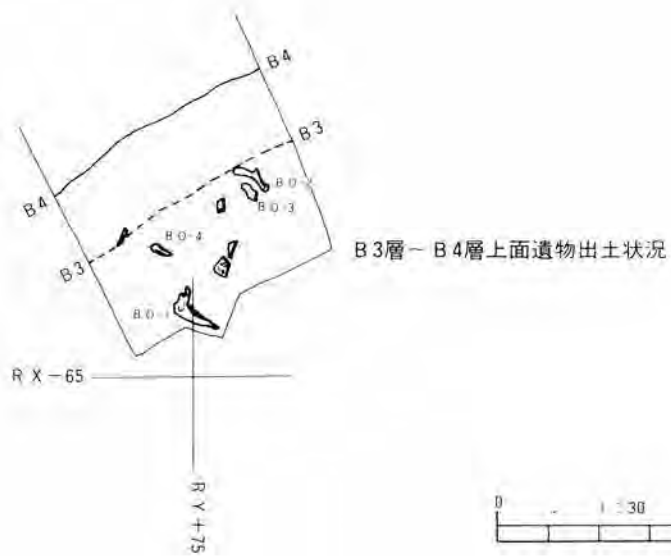
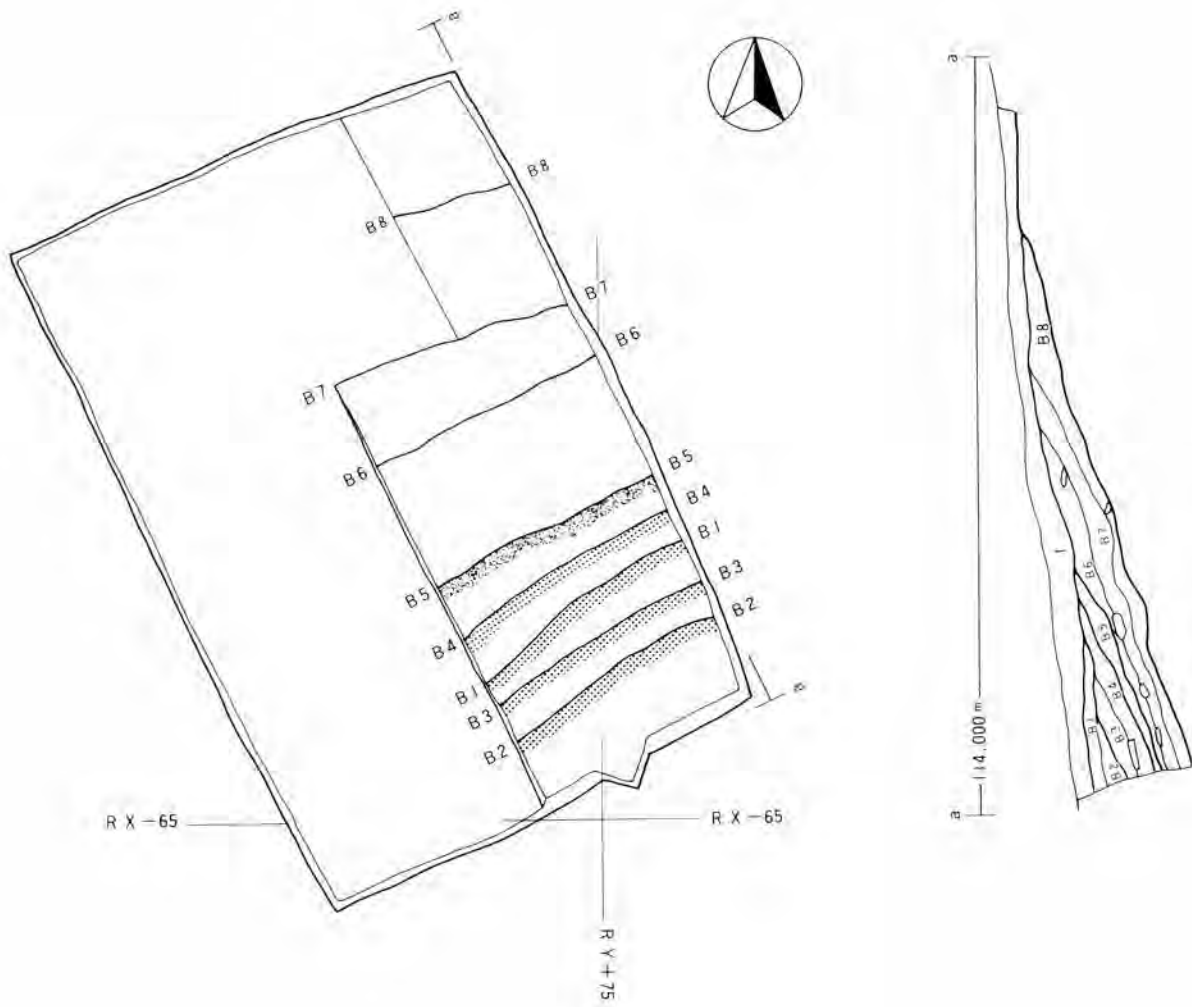
第132図 第2次調査A区平面図



第133図 第2次調査A区土層断面図



第134図 第2次調査A2区貝層平面図



B3層～B4層上面遺物出土状況

第135図 第2次調査B区平面図・土層断面図

項目 層名	層区分	層厚 (cm)	掘り上げた土の		特記事項(伴出遺物等)
			総重量(g)	総体積(cc)	
A1層	暗褐色 混貝土層	6	15,140	17,830	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少
A2層	にぶい黄褐色底アロック	3	6,520	7,400	小規模な硬質アロック・定盤・イガイ中・フジツボ・ウニ少・カサゴ科多
A3層	暗褐色 混貝土層	10	30,360	35,670	イガイ・フジツボ・ウニ少 巻貝
A4層	暗褐色 混貝土層	8	31,335	36,600	イガイ中・フジツボ・ウニ少・ウツメ科・ヤシ
A5層	暗褐色 魚骨アロック	4	2,580	2,980	小規模な硬質アロック・定盤・イガイ中一少・フジツボ・ウニ少・カサゴ科多
A6層	暗褐色 混貝土層	7	26,200	31,750	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少
A7層	暗褐色 混貝土層	7	17,545	21,730	イガイ中・フジツボ・ウニ少
A8層	褐色 混貝土層	10	11,445	13,400	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少 へビ科
A9層	暗褐色 混貝土層	10	56,230	66,150	イガイ中・フジツボ・ウニ少 へビ科・ネズミ科
A10層	にぶい黄褐色底アロック	3	1,060	1,400	小規模な硬質アロック・定盤 イガイ・フジツボ・ウニ少
A11層	暗褐色 混貝土層	15	6,445	7,600	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少 ウサギ
A12層	褐色 混貝土層	3	4,330	4,850	小規模な硬質アロック イガイ少・フジツボ・ウニ少・ニンジン
A13層	暗褐色 混貝土層	7	11,325	13,220	イガイ中・フジツボ・ウニ少 巻貝多・アサギ・ウサギ
A14層	暗褐色 混貝土層	7	14,480	17,600	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少
A15層	暗褐色 混貝土層	6	3,530	4,150	炭多・イガイ中・フジツボ・ウニ少 ウニ少
A16層	暗褐色 混貝土層	6	19,195	22,710	イガイ・フジツボ・ウニ少 巻貝・ヒラメ
A17層	褐色 混魚骨層	4	7,980	9,900	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少 カサゴ科多
A18層	褐色 混魚骨層	7	8,310	9,800	イガイ中一少・フジツボ・ウニ少 カサゴ科・ブリ多
A101層	暗褐色 混貝土層	4	42,345	41,250	イガイ・ウニ
A102層	暗褐色 混貝土層	6	18,620	21,100	イガイ・ウニ アサギ・カサゴ科やや多・クロダイ
A103層	暗褐色 混貝土層	6	10,155	11,850	イガイ・ウニ カサゴ科・やや多
A104層	暗褐色 混貝土層	6	3,700	4,620	イガイ・ウニ少 オニトセイ

第2表 第2次調査区土層一覽表 (1)

項目 層名	層区分	層厚 (cm)	掘り上げた土の		特記事項(伴出遺物等)
			総重量(g)	総体積(cc)	
Bor.1	(暗褐色土、暗)	14.1	3,275	3,900	イガイ・ウニ少・フジツボ・ウニ少 へビ科
Bor.2	(暗褐色土)	13.0	3,415	4,250	イガイ少・ウニ中一少 オニトセイ
Bor.3	(暗褐色土)	14.5	3,380	4,000	イガイ中一少・ウニ中 カサゴ科
Bor.4	(暗褐色土、明)	9.1	3,565	4,000	イガイ少・ウニ多 下部はウニ層
Bor.5	(暗褐色土、明)	10.7	3,480	4,000	イガイ・ウニ中一多・フジツボ少 イワシ 最大値・カサゴ多
Bor.6	(にぶい黄褐色土)	12.9	3,020	3,450	イガイ・ウニ中一少 イワシ 多
Bor.7	(暗褐色土)	11.5	3,665	4,000	イガイ・ウニ中一少
Bor.8	(にぶい黄褐色土)	10.7	3,695	4,050	イガイ・ウニ少 骨角器
Bor.9	(にぶい黄褐色土)	14.3	4,465	4,800	イガイ・ウニ少 魚骨少
Bor.10	(褐色土)	10.8	3,965	3,950	地山層・遺物は土層のもの
Bor.11	(褐色土)	6.5	2,480	2,550	地山層・遺物は土層のもの
C1層	暗褐色土層	16	(未)	(未)	炭化物粒多・魚骨少 大木7B式土器
B1層	暗褐色 混貝土層	5	15,680	18,500	イガイ・ウニ少
B2層	暗褐色 混貝土層	8	16,610	19,150	イガイ・ウニ少
B3層	暗褐色 混貝土層	8	24,770	29,080	イガイ中一少・ウニ少 オニトセイ・魚骨多
B4層	暗褐色 混貝土層	7	40,430	52,650	イガイ・ウニ少・白色土含 オニトセイ・魚骨多
B5層	暗褐色 混貝土層 (灰まじり層)	7	32,125	34,550	イガイ少・ウニ微・白色土含
B6層	暗褐色土層 (混骨土層)	7	40,090	44,900	イガイ・ウニ無
B7層	褐色土層 (混骨土層)	9	153,150	164,420	イガイ・ウニ無
B8層	褐色土層 (混骨土層)	12	14,975	16,800	イガイ・ウニ無

第3表 第2次調査区土層一覽表 (2)

ii) 出土遺物

遺物の出土状況を概観するとA2区は骨角器類を比較的多く出土しているが土器や石器はほとんど皆無に近い状態であった。A1区は土器や石器をわずかに出土している。また、ボーリング坑から骨角器2点が出土している。B区は土器・石器・骨角器が少量出土している。C区は土器・石器が比較的多く出土している。全体的な傾向としては混貝土層などの動物遺存体を多く含む層からは土器・石器の出土が極端に少なく骨角器が多く出土するが、動物遺存体を含まない層からは土器・石器が多く出土するようである。

① 土器 (第136図～第139図)

A2区 (第136図1797・1798)

混貝土層などからの出土量は極端に少なく図示できたのは2点のみである。1797はA4層から出土したが、口縁部外面に貼り付けを施し、内面を肥厚させるものである。1798はA2層から出土したが、口縁部の内湾する無文の深鉢である。

A1区 (第136図1804～1817)

出土量は少ない。1804～1811はボーリング坑より出土したものである。1804は口縁部破片で1805・1806は体部破片であるが胎土に植物繊維を含まずおそらく大木2式以降に伴うものと思われる。1807・1809は体部破片であるが胎土に植物繊維を含む。1810は燃糸文を施すもの。1811は綾絡文を施すもの。1812～1817はA104層～A101層より出土したものである。1813は燃糸文を施す土器の底部である。1814と1816は同一個体で体部がややふくらむ深鉢である。網目状燃糸文を施す。これらは大木3～4式に伴うものと思われる。21は口縁部にくぼみのある突起を2つ有する。

A区 (第136図1799～1803)

A1区・A2区以外から出土したものである。1800はA1区、A2区中間の貝層上面から出土した。口縁部突起上に幅の広い隆帯を貼り付けるまた、突起より垂下した2条の鋸歯状隆帯は端部を連結する。大木5式に相当する。

第V群

B2区 (第136図1818～1830・第137図1831～1838)

1818～1820はB8層・B7層から出土したものでいずれも地文のみを施し胎土に植物繊維を含む。1819は羽状縄文を施す。これらは大木1式に相当する。

第I群

1821～1826はB6層から出土したもので胎土に植物繊維を含むものが大半を占める。1823は羽状縄文を施す。1826は口縁部に不整燃糸文を施す。1825は底部付近の破片であるが胎土に植物繊維を含まない。これらはほぼ大木2式に相当するものであろう。

第II群?

1827～1830はB5層から出土したもので胎土に植物繊維を含むものが大半を占める。1829は木目状の燃糸文を施す。1827は口縁部に細い条痕状の沈線を施すが胎土に植物繊維を含まない。これらはほぼ大木2式～大木3式に相当する。

第II群～第III群

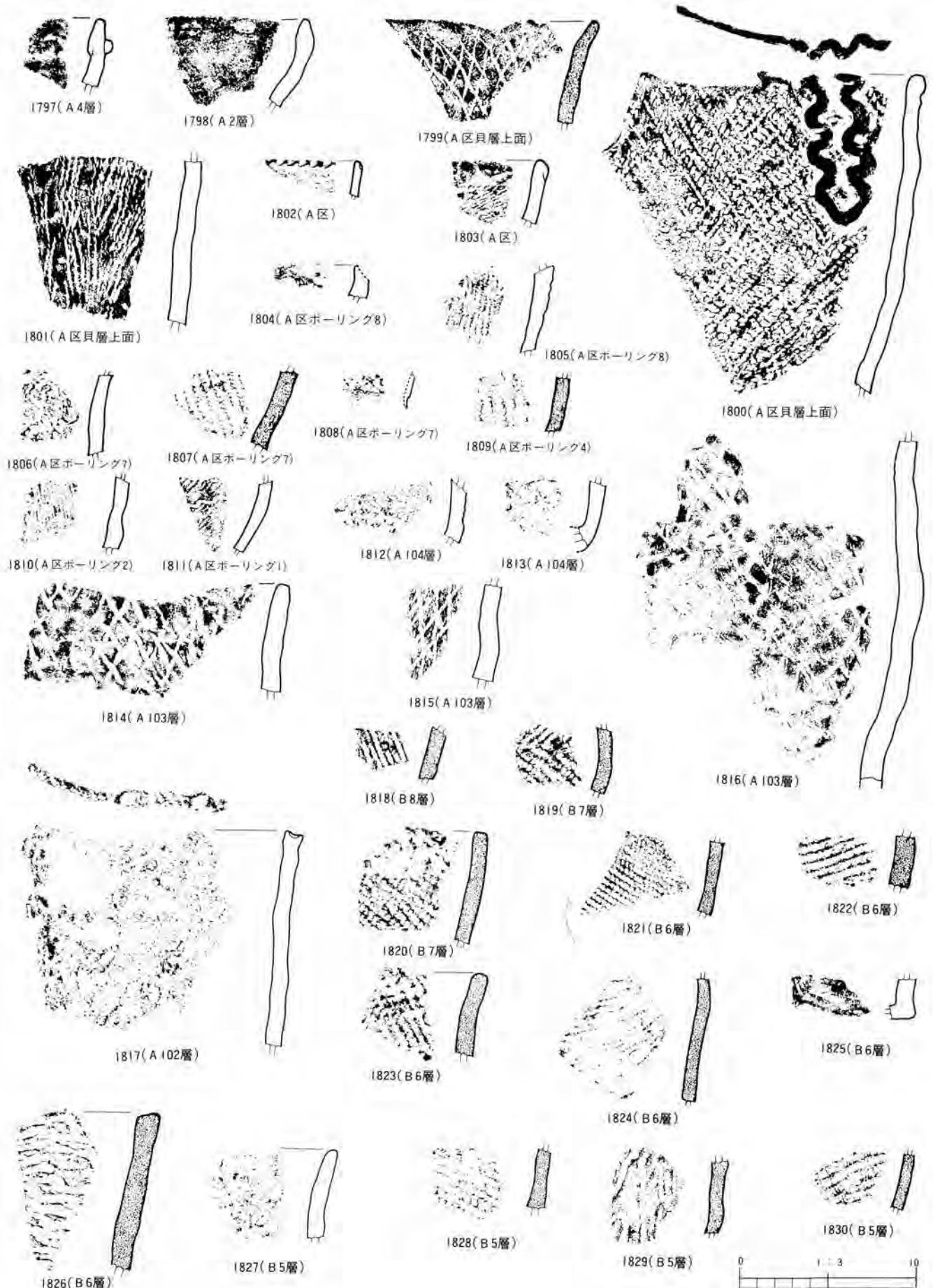
1831・1832はB4層から出土したもので、1831は口縁部に粘土紐を貼り付け、この上に刺突文を施す。大木3式に相当する。

第III群

1833・1834はB3層から出土したもので、1833は口縁部に半竹管により山形文を2段施文する。

第III群

大木3式に相当する。



第136図 第2次調査区出土遺物 (1)

第Ⅳ群

1835～1838はB 2層・B 1層から出土したものである。1835は口唇部に刺突を施すもので大木3式以降かと思われる。

C区(第137図1839～1849)

C 1層から一括して出土したものである。1839は体部がふくらみ口縁部が外反する深鉢である。口縁部文様帯は上端の隆線、下端の小波状隆線により区画され、更にC字および逆C字の隆線により4単位の楕円形区画に分割される。体部文様帯にはY字形の隆線を4単位、楕円形区画の間に垂下させる。地文は体部に羽状状文を縦方向に回転させるが、口縁部はR-L単節斜状文を横方向に回転させる。1840は円形の突起を有する深鉢である。口縁部文様帯はやはり楕円形区画文を施すが地文のかわりに縦位の刻目状沈線で充填する。体部文様帯にもY字形の隆線を施す。体部の地文は結節縄文を縦方向に回転する。1843～1846は1840と同様の地文を施すものであるが1846は体部が強く屈曲し内湾する。1841、1842も隆線を施文するがややモチーフを異にするようである。1847・1848は口縁部に刻目を有するもの、1849は無文の底部である。これらはいずれも大木7b式に相当する。

第Ⅶ群

表土(第137図～第139図1850～1950)

表土から出土したものを一括した。縄文時代早期末葉～中期末葉にわたる。

第Ⅺ群

1850は磨消し技法により曲線的な区画文を施し大木10式に相当する。1851～1853も磨消し技法によるが大木9式に相当する。1854、1855は平行沈線を施すものである。1856～1862は隆沈線

第Ⅹ群

や沈線により渦巻文、懸垂文を施すもので大木8b式に相当する。1863・1864はキャリパー形

第Ⅸ群

深鉢で沈線により施文される。大木8a式に相当する。1865～1871は原体圧痕文、隆線による

第Ⅷ群

楕円形区画文などを施すもので大木7b式に相当する。1872～1875は竹管文を施すもので大木

第Ⅶ群

7a式に相当する。1876は櫛目文?を施すものである。

第Ⅵ群

1877～1879も竹管文を施文するが円形突刺文などを併用するもので大木6～大木7a式に相当する。

第Ⅴ群

1889は突刺文を伴う幅広の隆帯と沈線による鋸歯状文を施し大木5式に相当する。1880～

第Ⅳ群

1885は隆線により小波状文などを施すもので大木4式に相当する。1886～1888も隆線によるもの

第Ⅲ群

で大木4～大木5式に相当するものか。1890～1899は刻目を有する隆線や山形沈線文、円形棘突文などを施すもので大木3式に相当する。1900～1907・1914は口唇部に刻目を有するものなどで大木2式～大木3式に相当する。1908～1913・1915～1922は胎土に植物繊維を含まないものを一括した。大木2式以降に伴うものと思われる。

第Ⅱb群

1923～1950は胎土に植物繊維を含むものである。1923～1925・1933～1934は網目状撚糸文や

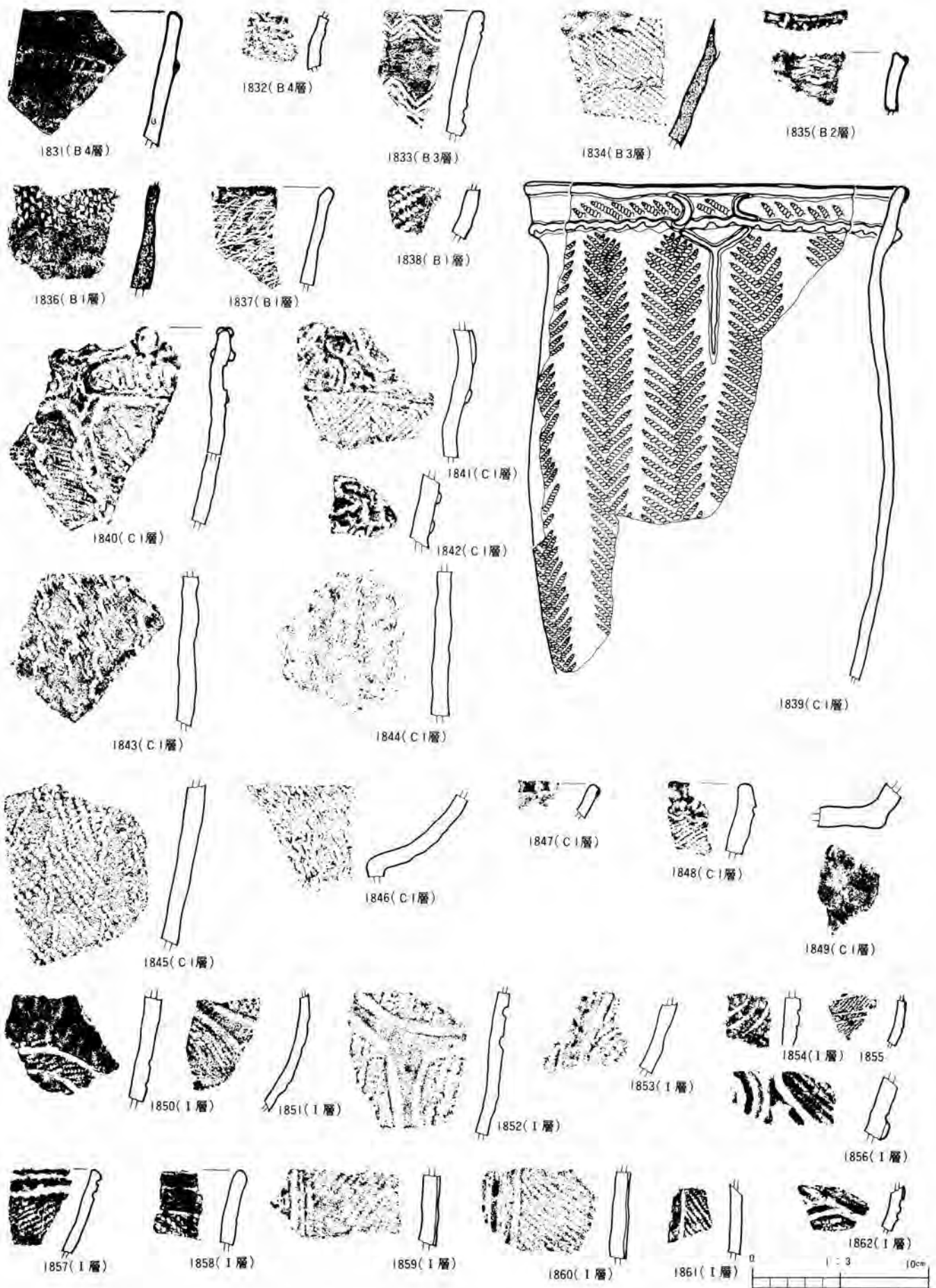
第Ⅱa群

S字状連鎖沈文を施すものなどで大木2b式に相当する。1926～1933は口縁部に不整撚糸文を

第Ⅰ群

施すものでほぼ大木2a式に相当する。1936～1939は羽状縄文を施すもので大木1式～大木2

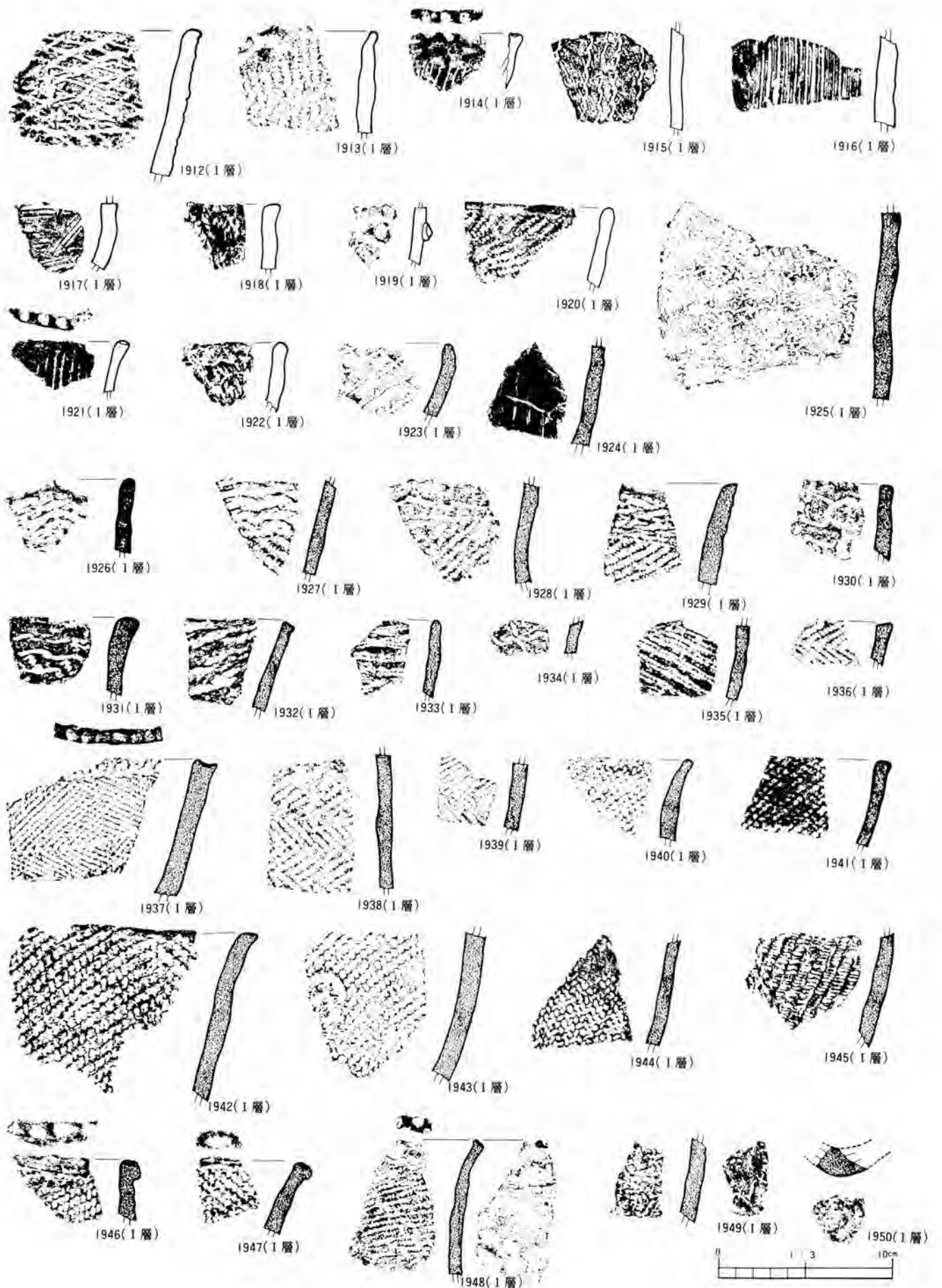
a式に相当する。1940～1947は地文のみを施すもので1946・1947は口唇部に楕円形の押捺がみられる。これらは大木1式に伴うものと思われる。1948は口唇部に円形の刺突を施し、内面に条痕の認められるものである。1949は内面にも縄文のような圧痕がみられるものである。1950は尖底部である。



第137図 第2次調査区出土遺物 (2)



第138図 第2次調査区出土遺物 (3)



第139図 第2次調査区出土遺物 (4)

② 石器（第140図～第142図）

A区・B区・C区から出土したものはすべて図示したが極めて少ない。また、表土から出土したものは主なものを図示したが、これ以外に石鏃約40点など多量に出土している。

剥片石器

石鏃（1951～1958） 大小があるが基本的にはすべて三角形の無茎鏃である。基部は平基と凹基の2種があるが基部幅は12～18mmにおさまる。

石錐（1959） 細長い剥片を使用するが、基能部だけではなく両側縁にまで調整剥離を施している。

石匙（1960～1963） 縦形と横形の2種がある。1960は縦形であるがほぼ全周を調整する。正面には自然面を残し、背面には主要剥離面を大きく残す。打面が残る。1962は縦形であるが先端部から側縁を調整する。つまみの作り出しは粗雑である。先端部の形状などから石槍や鈎頭などの機能も想定されたが、基部に打面（自然面）を残し調整されていないので着柄には不向きかと思われた。1961、1963は横形であるが打面を残し、刃部の調整やつまみの作り出しが粗雑である。

搔器（1964・1965） エンドスクレーパーである。下端に鈍角的な刃部を作り出すが1965は側縁の一部にも調整剥離が認められる。

石篋（1966、1967） 大略撥形を呈する。（1966は上下逆）。側縁部を中心に調整するが1967は粗雑である。側縁の刃部は削器的である。

ピエス・エスキューイ（1968・1969） 上下両端に剥離が見られるが、上下両方面からの打撃によるものと思われ、リングはややつまっている。

礫石器

礫器（1970・1971） 楕円形～円形の自然礫を打ち欠いて片刃の刃部を作り出している。1970は鈍い刃部を、1971は比較的鋭い刃部を持つ。チョッパー的な機能が想定される。

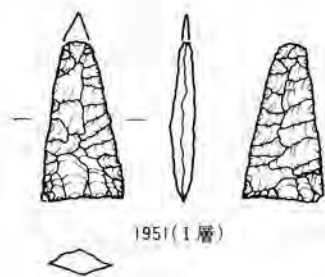
特殊磨石（1977・1978） 断面三角形の自然礫の側縁部を使用する石器である。1977は上下両側縁を、1978は一方の側縁のみを機能磨面（A面）としている。またこれに隣接する面を調整磨面（B面）としているが、1977には剥離が伴う。機能磨面は敲打磨石と同様であり磨り潰しなどの機能が想定される。

敲打石（1972・1973） 1972は扁平な円礫の側縁の一部を使用し、敲打痕が認められる。1973は扁平な円礫の平坦部に敲打痕が認められるがあまり使い込まれていない。

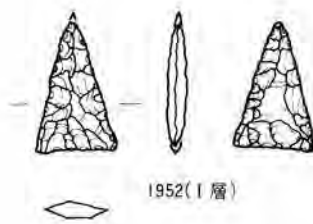
磨石（1975・1976） いずれも全面を磨る。1975は下面が平坦な磨面となるが側面は面取りをしたような小さな磨面が多数認められる。1976はそろばん玉状を呈し上面と下面は平坦な磨面となる。側面の磨面は横方向に磨ったようである。

石核石器

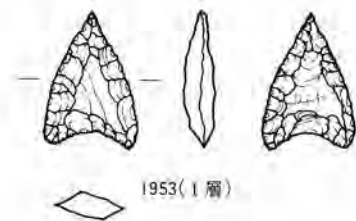
石核（1974） 自然礫を使用し上下両面を打点としている。



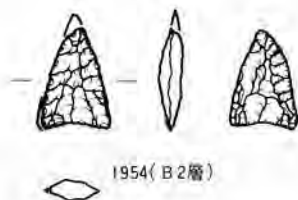
1951(1層)



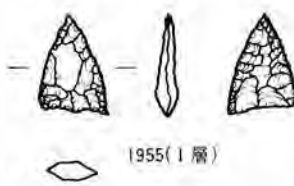
1952(1層)



1953(1層)



1954(B 2層)



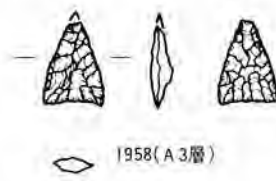
1955(1層)



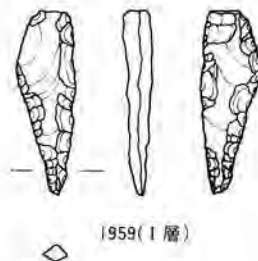
1956(1層)



1957(1層)



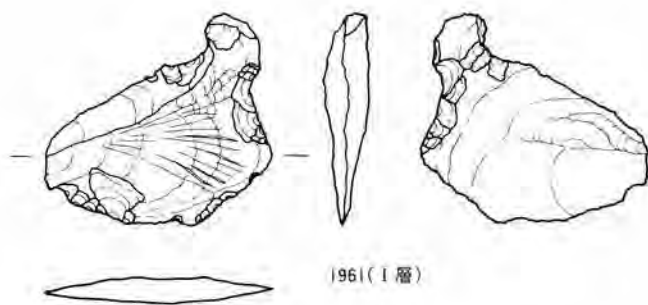
1958(A 3層)



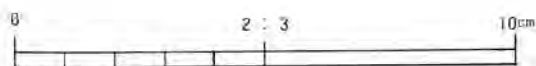
1959(1層)



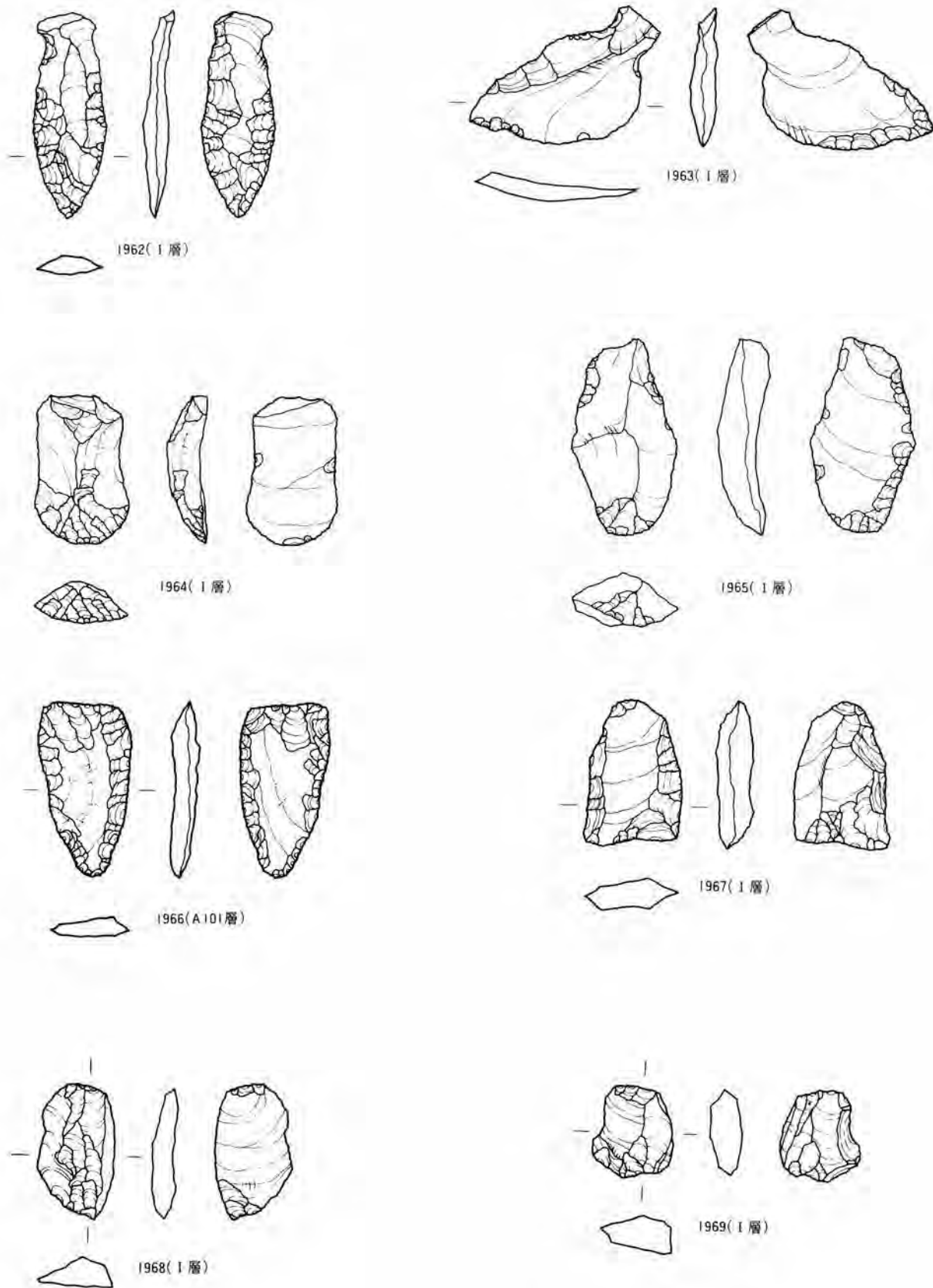
1960(1層)



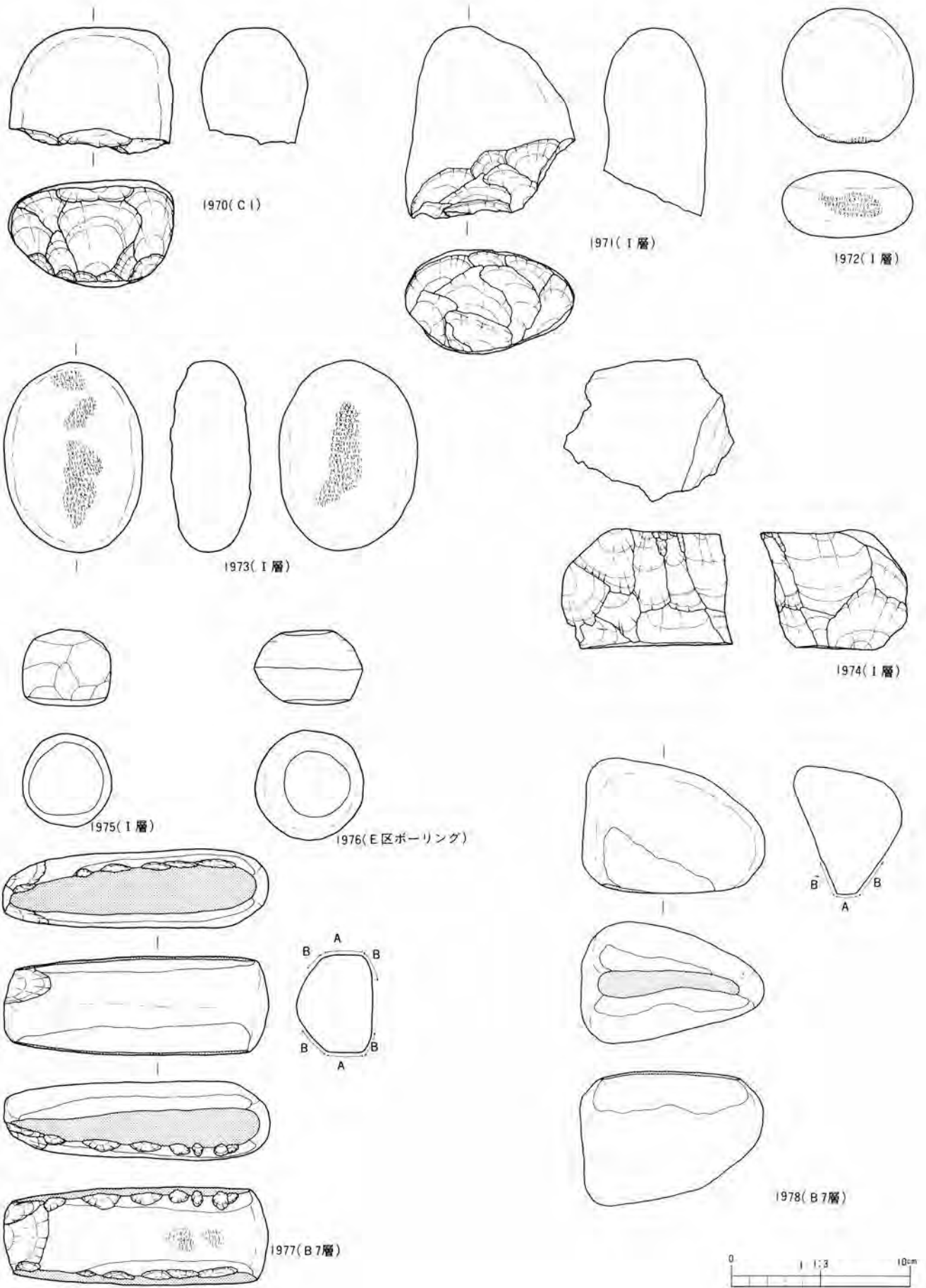
1961(1層)



第140図 第2次調査区出土遺物 (5)



第141図 第2次調査区出土遺物 (6)



第142図 第2次調査区出土遺物 (7)

③ 骨角器 (第143図～第145図) (註1)

骨・角などを加工した製品と未製品および加工痕を有するものを一括した。調査面積の割に比較的多く出土したが表土 (I層) から出土したものが最も多い。また、時間的なものを反映しているためか器種のバラエティーに富んでいるとは言い難いが今までに類例の少ないものも出土している。

釣針 (1979～1983・2005・2006) いずれも鹿角製で5点出土している。湾曲部の形態は基本的にはU字形を呈すると思われるが、なめらかに湾曲するものと角張るものの2種に分類される。1979は軸部がやや内傾し、湾曲部が角張りL字形に近い形態をとるものである。軸頂部は有頭状に作り出される。軸部は凸凹が著しく断面形はおおよそ八角形を呈する。実測図背面の湾曲部にわずかに海綿体組織が残る。湾曲部～針先部を欠くが軸長6.9cmとやや大形である。1980～1982は軸部が真直でなめらかに湾曲しU字形を呈するものである。いずれも軸頂部と湾曲部～針先部を欠くが軸部の整形は丁寧で断面形はほぼ円形を呈する。1980・1981は大形～中形で、実測図背面にわずかに海綿体組織が残る。1982は小形の湾曲部片である。1983は無鋸の針先部であるが、湾曲部はなめらかでU字形を呈するものと思われる。整形は丁寧で断面形は円形を呈する。

2006はU字形を呈する小形の釣針である。軸頂部は扁平な小突起が後方に張り出しており、上面は丁寧に研磨されている。

2005は他のものと全く異なった形態を持っている。軸部は太くほぼ真直であり、軸頂部には波線をめぐらせている。湾曲部を欠損するが、軸部に対してやや小さくなるものと思われる。

刺突具類 (1984・1985・1989・1990・1992・1993) 1984は大形獣の四肢骨 (おそらくは中手・中足骨) を打割し側縁を剥離させ整形した後に両端部を整形させ尖らせているが、先端部 (上) の整形がわずかに密である。器体部と茎部にわずかに段がつくがこれは整形の有無によって出来たものであろう。茎部には少量ではあるがアスファルト状の付着物がみられ、ヤスあるいは鎌のように着柄して使用される器種が想定される。実測図正面が骨幹部外面である。長さは6.3cmを計る。

1985は基部だけを残すが、幅1.6cmと比較的大形である。整形は丁寧である。

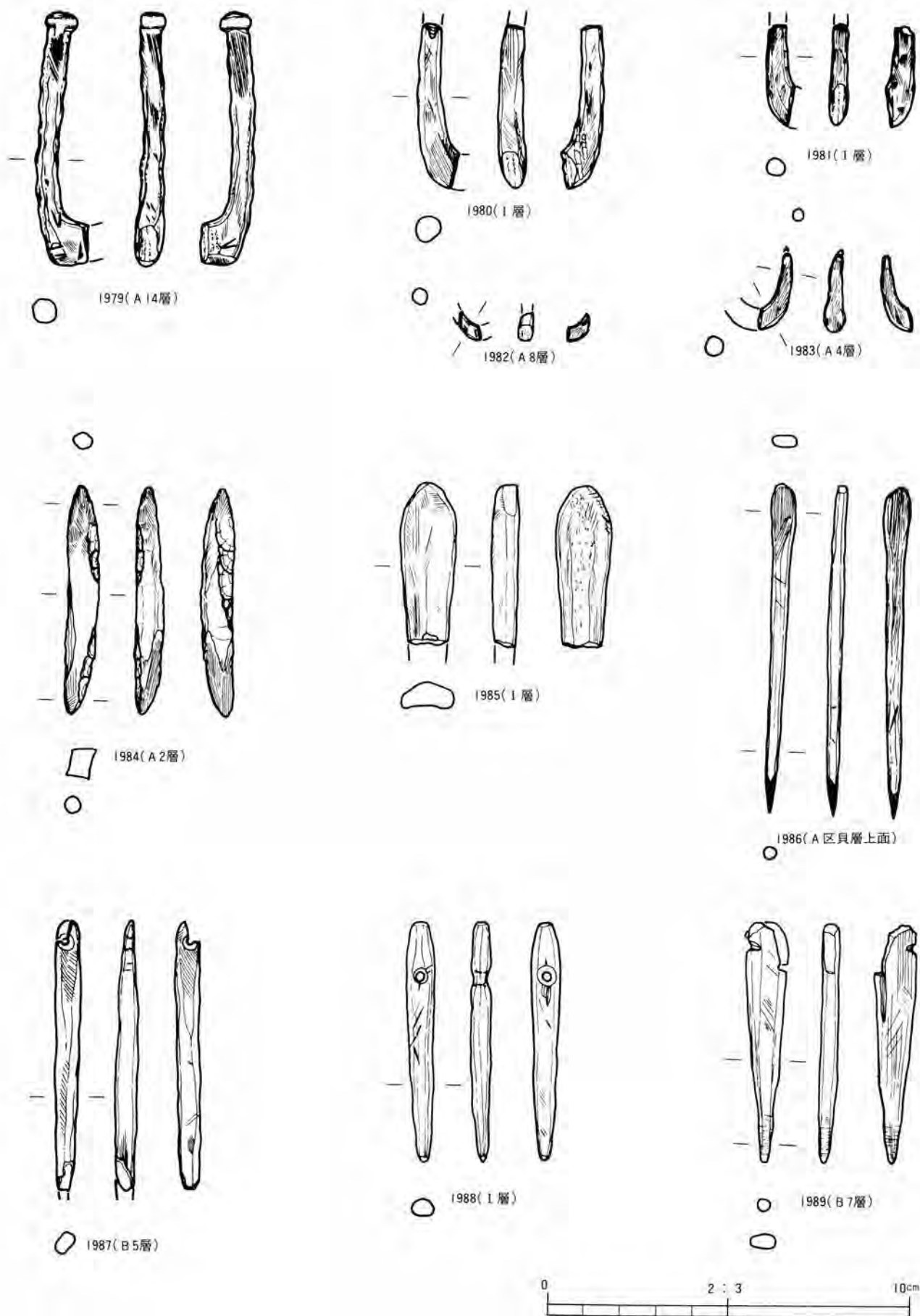
1989は基部から器体部にかけてはゆるやかに細くなり、先端部で一気に鋭くなる。基部には段違いに抉りがいれてある。先端部には回転方向につく鈍い擦痕がみられる。あまり固くない対象物に機能したと思われ、錐か骨針 (紐通し) のような器種が想定される。幅は1.1cm、長さは6.7cmである。

1990はイノシシの腓骨 (R) を素材とし、遠位端を基部とする。関節部はほとんど加工されていない。幅は1.9cm、長さは10.5cmであるがもとの長さからすれば比較的使い込まれたほうであろう。

1992・1993は先端部のみを残すものである。15は鳥骨製の刺突具であるが、四分割程度に打割した後に加工するものである。

骨針 (1987・1988) 先端部を尖らせ、基部を穿孔するもので2点出土している。基部の

(註1) 参考文献 1986、金子浩昌、忍沢成視、「骨角器の研究 縄文編Ⅰ、Ⅱ」考古民俗叢書<22、23> 慶友社



第143図 第2次調査区出土遺物 (8)

形態が各々やや異なる。1987は頂部付近に穿孔し軸部から基部にかけてゆるやかに薄くなる。軸部の整形は丁寧であるが基部は粗い。幅は0.7cmである。1988は頂部からやや離れたところに穿孔し、軸部から基部の厚さの変化がないものである。軸部から基部の整形の差はない。幅は0.8cm、長さは6.6cmである。

ヘラ（1994～1996） 1994は刃部破片であるが、外面のほぼ全域と内面の下端部にアスファルト状の付着物がみられる。1995はシカの脛骨（L）の近位部を素材とするが、大略縦方向に半截したものの外面を使用する。側縁を剥離させ整形する。刃部の内面にはわずかに擦痕がみられる。幅は3.4cm、長さは10.3cmである。1996は刃部破片であるが他のものに比して整形が丁寧すぎるので装飾品の欠損したものである可能性もある。

装飾品

装飾品（1986・2007～2013）

髪針（1986・2007） いずれも鹿角製である。1986は基部がやや平坦で完通孔を持たない。また、軸部がやや細味で全体に非常に丁寧に整形する。幅は0.7cm、長さは9.1cm、厚さ0.3cmである。

2007は整形が非常に丁寧に極端に薄い。幅0.8cm、長さ0.8cm、厚さ0.2cmである。いずれも形態的には骨針に類似するが、前述のような差異が有り別に分類した。

垂飾品（2008～2010） 2008・2009はシカの第2・第3手根骨（R）を素材とするもので、中手骨側、橈骨側の両側から穿孔される。2008は未製品であるが、刺突具により両側から大まかに孔を穿っている。2009はこの後に錐で孔を貫通させ周縁を整形したもののようである。

2010はサメ類の推骨を穿孔し、側縁の一部を擦ったものである。

環状垂飾品？（2011） 鹿角製で環状を呈し、周縁にも抉りを入れる精巧なものである。下端にももう一つすかしが有るようだが、これだけで独立するものかあるいは何らかの装飾品（例えば櫛等）頭部の飾りかは不明である。整形は非常に丁寧である。

礼状装飾品？（2012） 海獣骨を素材とするもので上下端部を欠くが礼状を呈する。両側縁の一部に抉りを入れて加飾している。素材の割には丁寧に整形されている。

又状角製品（2013） 鹿角の第1角枝（R）の上下を擦り切った後に内部（海綿体組織）をくり抜いている。実測図正面の擦痕は粗く、背面の擦痕は細かいが全体に良く整形され光沢を帯びている。

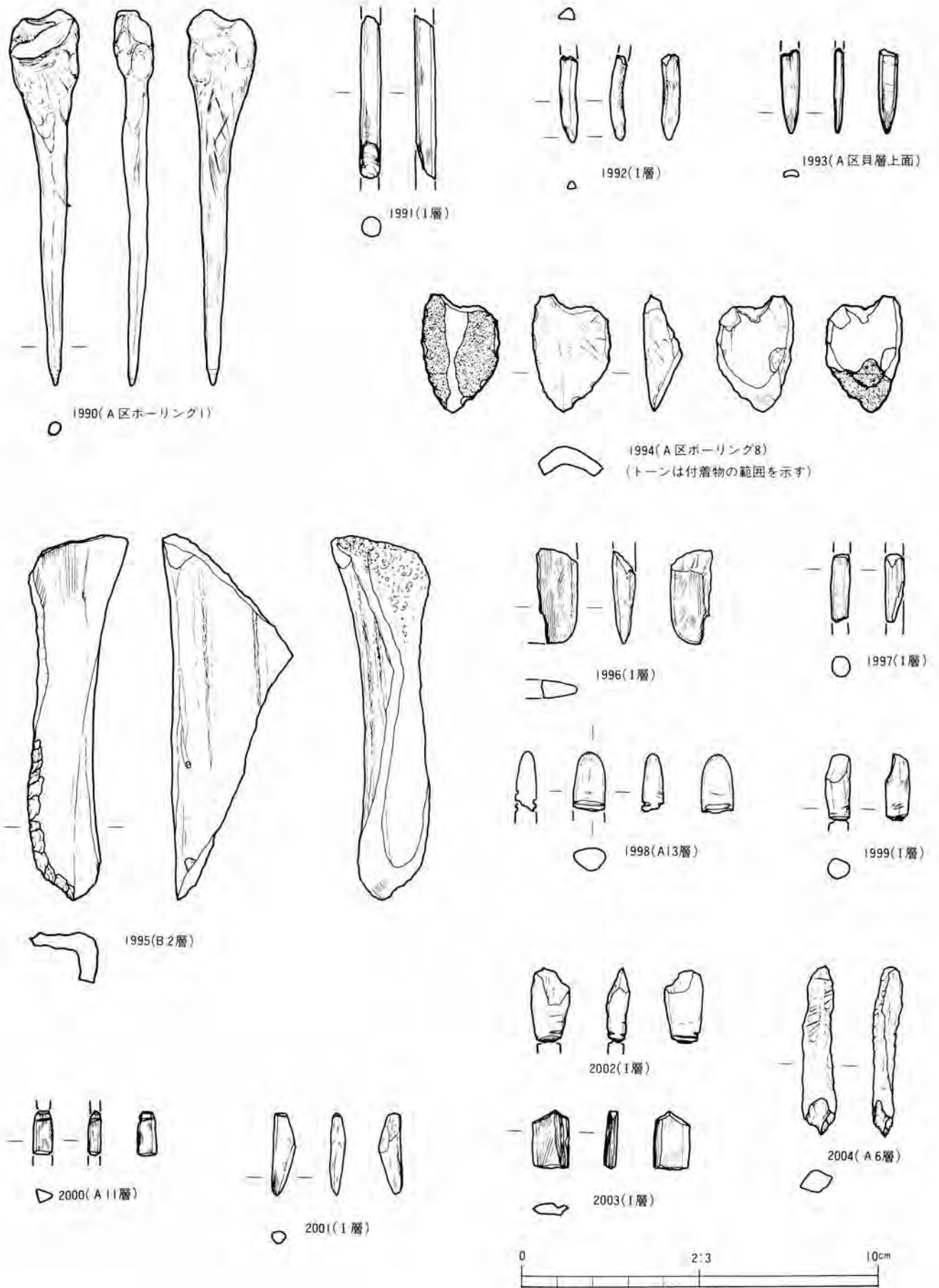
加工痕を残す素材

加工痕を残す素材（1991・1997～2004） 1991・1997は棒状の製品の軸部破片である。1991は整形が非常に丁寧である。

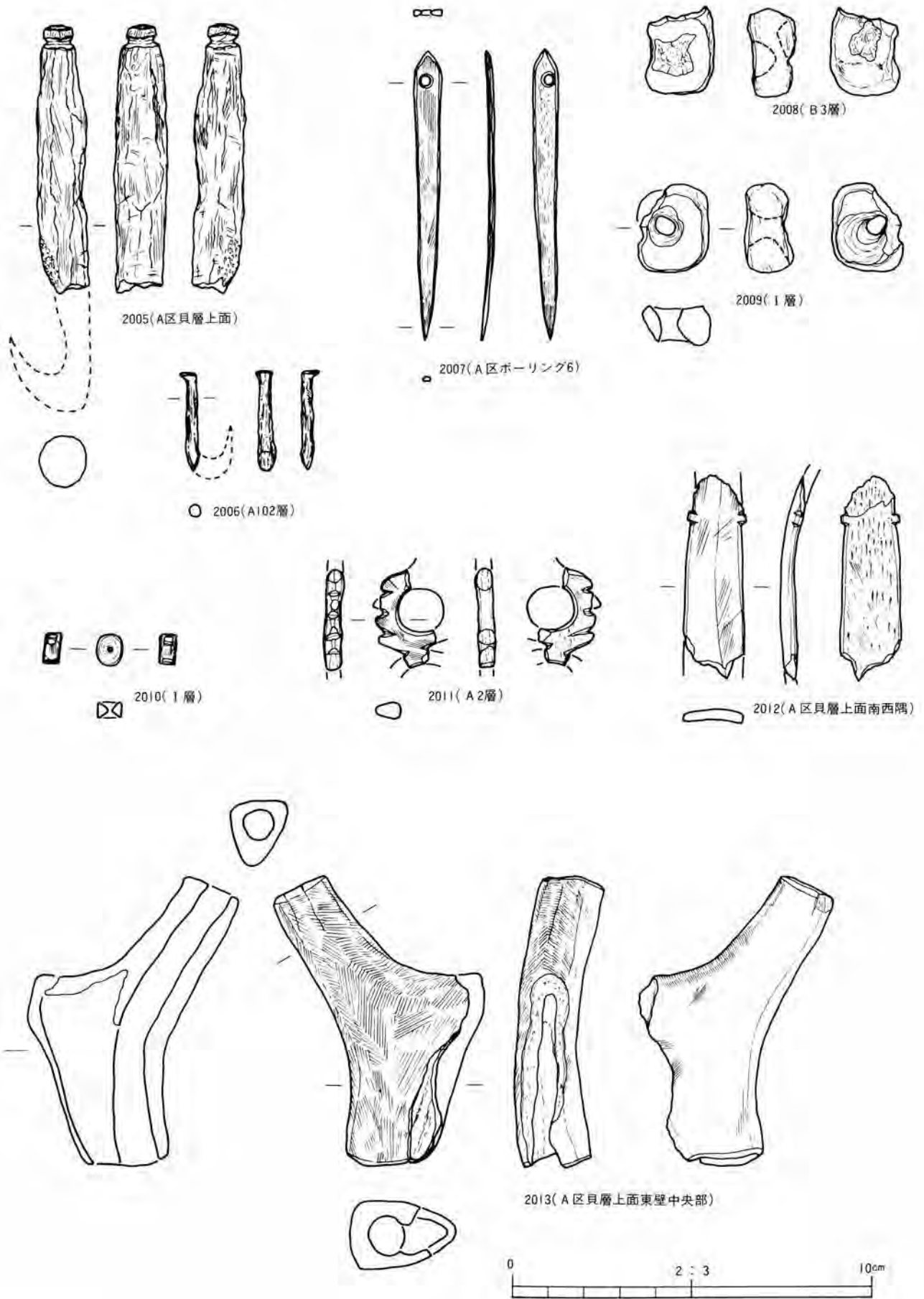
1998～2002は擦り切り痕を有するものを一括した。1998・2000は整形が丁寧であり装飾品等の欠損品である可能性が大きい。1999・2001～2003は擦り切り痕以外にはほとんど手が付けられていない。1999・2002はやや大形で、棒状の製品（例えば骨針等）の端部を整形せずに残し、最後に切り離したものと推定されたが類例を知らないので断定はできなかった。2003は縦に擦り切るものである。

2004は加工痕を有する鹿角片で外面の凸面をつぶすような擦痕がみられる。

次にこれらの骨角器と土器型式の関係について述べる。



第144図 第2次調査区出土遺物 (9)



第145図 第2次調査区出土遺物 (10)

1979・1982～1984・1998・2000・2004・2011はA2区から出土しており大木5式以降、およそ大木6式～大木7b式に伴うと思われる。2012もA2区の西側から出土しておりほぼ同時期かと思われる。2013は第136図1800とほぼ同じ地点から出土しており大木5式に伴うと思われる。

1986・1993はA1区とA2区の間でおよそ大木3式～大木6式に伴うと思われる。

1994・2007はボーリング坑の下部でおよそ大木3式に、1990はボーリング坑の最上部でおよそ大木3式～大木4式にそれぞれ伴うと思われる。

1987・1989・1995・2008はB区から出土したもので、1989は大木1式に、1987・2008は大木3式に、1995は大木4式にそれぞれ伴うと思われる。

このほか表土から出土したものの、時期は不詳であるが、おおむね前期～中期前葉に伴うものであろう。

④ 動物遺存体

第2次調査区から掘り上げた土壌は表土を除きすべてポリ袋に採集してあり、A区とB区は1mmメッシュの篩で水洗選別を終了した。A区についてはこれの同定作業が終了しており、これらを集計したものが第4表～第42表である。また、B区についてはあまりにも土量が多かったために各層から無作為に抽出した2袋分についてのみ同定を行った。動物遺存体はこれらのサンプル資料・調査中に現場で取上げた資料・表土を3mmメッシュの篩で選別した資料・表面採集資料からなり、腹足類・二枚貝類・節足動物・棘皮動物・魚類・爬虫類・鳥類・哺乳類により構成される。

なお、これらのほかにクルミなどの植物遺存体が微量出土しているが、同定が終了していないために割愛する。

貝類（腹足綱・二枚貝綱）

混貝土層などを構成する主要な貝類はイガイ及びエゾイガイであるが、両者の識別は極めて困難であったためにイガイ類として一括した。これらは破碎～粉碎されており個体数を算定できた層は極端に少なく、実際の出土量を反映していない様にも見受けられる。ムラサキイコガイは稀である。腹足綱はチヂミボラ・エゾチヂミボラ・タマキビガイが代表的な種でA13層・A18層には特に多く含まれていた。他の種は少ないがアワビの出現率が少ないのが以外であった。また、崎山地区の岩礁地帯に多数生息しているクボガイやコシダカガンガラなどは欠落している。

節足動物・棘皮動物

フジツボ科は混貝土層から微量ではあるが出土している。ウニは各層から少量～微量出土しているがムラサキウニが圧倒的に多いようである。A1区のボーリング4の下部にはほとんどウニだけで構成される層がみられた。

魚類（軟骨魚綱・硬骨魚綱）

板鰓亜綱は比較的少ないが、椎骨のタイプから4種くらいに分類できそうである。ニシンは稀である。イワシは当貝塚の主体を成す魚種の一つであり各層を通して最も個体数が多い。マ

イワシが大半であるがカタクチイワシも含んでいる。1,000ccあたりの個体数はほぼ0.3~1.0くらいに集中するがA1区ボーリング5で9.50、同6で6.09と他に比して以上とも思える高い値が得られており特筆される。また、イワシの出現率はカツオやマグロなどの大形回遊魚の出現率と必ずしも一致しないのでこれらの食餌とは考えづらく、むしろ当貝塚に於いて貴重な食料として捕食されていたとみるほうが自然であろう。

サケ科は現在の漁獲高に比べるとあまりにも少なすぎる。また、マアナゴ科・スズキ・カワハギ科・ホッケ・カジカ科・ヒラメ・カレイ科も少ない。

マグロ属は大形のもの小形のもの2種がある。大形のは大半がクロマグロであると思われるが、小形のは別種なのか幼魚なのか判別できなかった。両者とも少ないながら各層から出土している。表土からの資料には比較的出土量が多いが、大きな骨であるので目につき易いのか、別にマグロ類を多く含む層があるのかは不明である。

カツオも当貝塚の主体を成す魚種の一つであるが、出土点数が多い割は個体数に反映されていないようである。ソウダカツオ類としたものは大半がマルソウダと思われる。カツオに比してだいぶ少ない。サバ科は大小2種あり、小形のは幼魚かと思われる。各層から少量ずつ出土している。

ブリ属もやや出土量が多いが、特にA17層・A18層に多い。アジ科としたものは小形のものであり、おそらくはマアジなどの幼魚が主体となるようである。

マダイも当貝塚の主体を成す魚種の一つであるが、カツオよりは出土点数がだいぶ少ない。クロダイは極めて少ない。タイ類としたものは遊離歯・骨瘤・小さな椎骨などである。椎骨はマダイに極めて類似する。タイ類はほとんどの層から出土している。

ウミタナゴ属もわずかずつではあるが出土している。

中形~小形魚のなかで最も重要な魚種はフサカサゴ科であり混貝土層や魚骨層などの出土魚類のうち最も数が多い。現在貝塚周辺で捕獲されるフサカサゴ科はソイ類・カサゴ類・メバル類などであるが圧倒的にソイ類が多い。貝塚から出土したカサゴ類は属、種のレベルまで同定できていないのでこれに対応するかどうかは不明である。

アイナメ属はほとんどの層から出土しているが点数が少ない。春と秋に多く釣れ、フサカサゴ科よりは一般的な魚種であるが、意外な出土状況であった。またホッケは極めて少ない。

爬虫類

わずかにヘビ科のみを同定したが極めて少い。

鳥類

鳥類は極めて少く同定できたものはわずかに3科のみである。ただ、この中で、ミズナギドリ科が注目される。現在、崎山の日出島ではオオミズナギドリが繁殖しており、これとの関係も十分考えられる。

哺乳類

最も多いのはシカ・イノシシであるが前者がやや多い。B3層とB4層は獣骨を多く含む層で、比較的完存率の高いシカ下顎層などが多く出土している。

ウサギ・オットセイは少ないが複数の層から出土している。ムササビ・タヌキ・テンは少ない。ネズミ科はわずかに出土しているが当時捕食されたものかどうかは不明である。サル・ク

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	A	B	L	R			
板 鰓 亜 綱																					A	B	L		遊離歯 a 2	2	
マイワシ													1							4	8	127	180	3			9
カタクチイワシ													2							2		57	55				4
サケ科																						1	1				1
サケ科(小)																						2					1
ウグイ属																						7	3				1
マグロ属																							1				1
カツオ																1				1	5	10					1
カツオ(小)																							1				1
ソウダガツオ属																							1				1
サバ属																						2	6				1
アジ科																						2	1				1
ブリ属																						1					1
マダイ																				1			1			遊離歯	1
クロダイ	1																										1
ウミタナゴ属																					6	1					1
カワハギ科																						1					1
フサカサゴ科	1	2	2	1	1	2	1	1		1	1	1	1	1	1	2	1				3	6	1			2	
アイナメ属				1																1		7	9				1
カレイ科																							2				1

第4表 A1層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	A	B	E	L			
板 鰓 亜 綱																						A	B	E	L	遊離歯 a 1	2
マイワシ																				10	9	265	248	3	1		13
カタクチイワシ																				4	1	44	58				4
サケ科																						2					1
カツオ																						6	5				1
ソウダガツオ属																						1					1
サバ属																						2	4				1
アジ科																						1	3				1
ブリ属			1	1		2	1															2	1				2
マダイ													1										1			遊離歯	1
ウミタナゴ属																						1	1				1
フサカサゴ科		1				3	1			1							1	1	2			3	8	2			3
アイナメ属			1																			1	5				1

第5表 A2層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	A	B	C	1			
板鰓亜綱																					A	2	B	1		尾椎a4b1, 背鰓A1	2
マイワシ																				16	11	393	391	4			20
カタクチイワシ																				4	12	94	133	1			12
サケ科																											1
サケ科(小)																						1	3	1			1
ウグイ属																						7					1
アナゴ科																						1					1
マグロ属																								1			1
カツオ			1	1			1									1						10	22	1			2
サバ属																						9	16	2			2
アジ科																						6	9				1
ブリ属			1	2			1															1	1				2
マダイ	1					1	1										1						2	1		遊離歯	1
ウミタナゴ属																	2					7	1				2
ベラ科																										咽頭歯1	1
カワハギ科																										第1背鰓棘1	1
フサカサゴ科	1	2	2	2	4	3	1		2	7	2	1	3	6		1	2	6	1	3	2	10	13	5			7
アイナメ属		2	1				1									1				1	1	7	22	2			2
カジカ科																								1			1

第6表 A3層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数			
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	A	B	C	1					
板鰓亜綱																						A	6	B	1	C	1	尾椎b2 背鰓A1	3
マイワシ													3								21	16	309	308	14			21	
カタクチイワシ																					5		77	145				9	
サケ科																					1		1					1	
ウグイ属(小)																				1	1	1						1	
マグロ属																								1				1	
カツオ				1			1				1											12	14	1	1			1	
サバ属																						6	7					1	
アジ科																						2	5					1	
ブリ属				1				1	1													1						1	
マダイ		2										1					2						1	1				2	
クロダイ																							1					1	
タイ科	1																											1	
ウミタナゴ属																						5	1					1	
カワハギ科																						1	5					1	
フサカサゴ科	2	1	2	2	3	1	1		1	2	2	1	1	2		1	5		4	2	2	22	3	1		鳥口骨R1	5		
アイナメ属						1	1	1												2	1	3	30					2	

第7表 A4層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨		主上顎骨		齒骨	角骨	口蓋骨		方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L		
板鰓亜綱																												遊離齒 a 6	1
マイワシ																							4	35	31				4
カタクチイワシ																						2	2	11	13				2
カツオ								1																1	3				1
サバ属																								1	1				1
ブリ属					1																	1		1					1
マダイ																												遊離齒	1
フサカサゴ科	2	2	3	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1			1	1			1			2	2				3
アイナメ属																									6				1

第8表 A5層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨		主上顎骨		齒骨	角骨	口蓋骨		方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L			R
板鰓亜綱																								A3	B2	D1				3
マイワシ																23							41	52	545	527	17	1		52
カタクチイワシ																3							18	7	194	292	1			18
サケ科																									1	1				1
サケ科(小)																									5	2				1
ウグイ属																							1	1	1					1
マグロ属																									1					1
マグロ属(小)																								1						1
カツオ			1					1																14	25					2
ソウダガツオ属												1												3	2					1
サバ属	1		1																					8	3			小含む		1
アジ科																								6	5					1
ブリ属								1																1	1					1
マダイ	1	1				1	1					1									1					3		遊離齒 大含む		1
タイ科												1													1					1
ギンボ亜目																							1		1					1
ハゼ科																								1						1
ウミタナゴ属																								9	3					4
カワハギ科																									1					1
フサカサゴ科		2			1		1	2	3		1		1			1	1				2	1	1	5	11	13	2	小含む		1
アイナメ属							2																	2	16	1				1
カレイ科							1											1		1					1					1

第9表 A6層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
板鰓亜綱																					A 2					1
マイワシ																				12	15	241	172	2		15
カタクチイワシ																				2		52	85			5
サケ科																						1				1
マグロ属(小)																						1				1
カツオ																						7	15	2	2	2
サバ科																								1		1
サバ属																						7	10	1	1	1
アジ科																						2	2			1
ブリ属				1																1		1	1			1
マダイ			1			1					1	2												2		2
ウミタナゴ属																						3	3			1
フサカサゴ科	2	1	1			1	1	1	1		1						1	1	5	2	3	11	2	1	5	
アイナメ属			1				1															4	20			2
カレイ科								1																		1

第10表 A 7層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
板鰓亜綱																						C 1			遊離歯 a 2 b 1	1
マイワシ													3							6	3	151	147	1		8
カタクチイワシ																				2		31	39			3
サケ科																						3				1
ウグイ属																					1	1				1
カツオ			1																			5	9	3		3
ソウダガツオ属																						1				1
サバ属																						5	1			1
アジ科																						3	1			1
ブリ属																1										1
マダイ	1				1	2											1	2							遊離歯	2
ウミタナゴ属																						2				1
カワハギ科																					2	1	2			2
フサカサゴ科	1	2				2	1	1	1		1						1	2	1	3	1	2	12		3	
アイナメ属		2				1				1	1			1								5	8			2
カレイ科																								1		1

第11表 A 8層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数		
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R									
板鰓亜綱																					A	7	B	5	遊離歯 a 5	2		
マイワシ													1						45	39	837	459	11		45			
カタクチイワシ																			5		228	325			19			
サケ科																							3		1			
サケ科(小)																							9	3		1		
ウグイ属																							1			1		
マグロ属																						1	1			1		
カツオ			1	1	1	2				1			1		1						20	37			2			
ソウダガツオ属															1							6	5			1		
サバ属			1																	1	10	39			3			
スズキ										1																1		
ブリ属		2	1		1					1						1			1	1	2	3		小含む	2			
マダイ	1		1			2	1				1				1	1			5		1	5		遊離歯	5			
タイ科																						1			1			
ウミタナゴ属																						6	7			1		
ベラ科				1																						1		
カワハギ科																						2	6		第1背棘1	1		
フサカサゴ科	1	3	2	2	4	4	1	2		3	6	1	1	2	1		1	1	1	1	8	2	11	33	7	1	上耳骨R 1	8
アイナメ属	3		2				1			1									3		13	60	1			3		
カジカ科														1					1	1	1		1	1		1		
カレイ科																						2	1			1		

第12表 A 9層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
マイワシ																			1	2	32	30				2
カタクチイワシ																						10	7			1
カツオ																						1	2			1
アジ科																							2			1
マダイ			1	1																					遊離歯	1
フサカサゴ科	1						1																1			1
アイナメ属																						1				1

第13表 A 10層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
板鰓亜綱																					A	1				1
マイワシ																				3	4	62	81	1		5
カタクチイワシ																				4	7	39	50			7
カツオ																						4	6	1		1
サバ属																						3	11			1
アジ科							1														1					1
マダイ						1																	2		遊離歯	1
ウミタナゴ属	1																					3	1			1
フサカサゴ科		1									1						1					2	1			1
アイナメ属						1								1	1				1			3	11			1
カレイ科																							2			1

第14表 A11層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
ニ シ ン																						1				1
マイワシ																				3	3	117	64	1		5
カタクチイワシ																				1		12	15			1
サケ科																							1			1
カツオ																						2				1
サバ属																						1				1
ブリ属						1																				1
ウミタナゴ属																						1				1
フサカサゴ科									1	1	1										1	2	1	1		1
アイナメ属																							1			1

第15表 A12層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
板鰓亜綱																					A 3				遊離歯 a 1 b 2	1	
マイワシ																			5	8	247	289	5				15
カタクチイワシ																			1	8	62	68					8
サケ科																					3						1
サケ科(小)																					3						1
ウグイ属																				1							1
カツオ																					4	14	3				3
ソウダガツオ属																					1	2					1
サバ属																					8	13	1				1
アジ科								1													4	3					1
ブリ属			1																	1	1	1	1				1
マダイ																						2	1			遊離歯23	1
ウミタナゴ属																					11	4					3
カワハギ科																					1						1
フサカサゴ科	8	2	4	8	2	1	1	2	7	5	2	1	6	5	2	2					1	1					8
アイナメ属	1																				3	16	3				3
カレイ科																					2	3					1

第16表 A13層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
板鰓亜綱																					A 2 E 1					遊離歯 a 1 c 1 背鰭棘 A 1	2
マイワシ									1											17	5	235	179	2	1		17
カタクチイワシ																				3	1	53	36				3
サケ科																							1				1
カツオ			1																	2		13	17	1			2
ソウダガツオ属																						1	2				1
サバ科																							3				1
サバ属			1																			6	13				1
ブリ属			1																				2				1
マダイ				2	1		1				2	1	1		1							2	3			遊離歯	2
ウミタナゴ属														1			1					8	3				1
ベラ科																										咽頭歯 1	1
フサカサゴ科	1	1	2	1	1			1	1		1		1		1					3		5	4	3			3
アイナメ属																						9	11	2			2

第17表 A14層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
板鰓亞綱																									遊離歯 a 1	1	
マイワシ																				3	3	142	114	1			6
カタクチイワシ																						31	76				5
サケ科																						1					1
サケ科(小)																							1				1
カツオ							1			1												4	4	1	1		1
ソウダガツオ属																							1				1
サバ属																						1	5				1
アジ科																						1					1
ブリ属																1						1					1
マダイ										1		1	1														1
ウミタナゴ属																						2	1				1
フサカサゴ科	4	4	2	4	1	1	3	5	4	4	2	4	4	3	3							3	25	3	2		7
アイナメ属	1																			1		3	2				1

第20表 A17層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			
板鰓亞綱																						A 3			遊離歯 b 1	1	
マイワシ									1											5	3	148	94	3			6
カタクチイワシ																						34	82				5
サケ科																						1					1
ウグイ属																										咽頭骨 L 1	1
カツオ			1																			1	2				1
サバ属							1															3	3				1
アジ科																							3				1
ブリ属	1	2	1	1																			6				2
マダイ																										遊離歯	1
タイ科																										遊離歯	1
ウミタナゴ属																						1					1
ベラ科																										咽頭骨 1	1
フサカサゴ科	2	1	4	7	3	1	3	1	3	2	2	2	2	2	3	2	1										7
アイナメ属															3			1	5	1							1
カレイ科																							1				1

第21表 A18層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鱗骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R								
板 鰓 亜 綱																						1			遊離齒	1	
イワシ類																						106					3
サケ科																						2					1
マグロ属 (小)																						1					1
カツオ																						12					1
ソウダガツオ属																						2					1
サバ属																						7					1
ブリ属						1																					1
スズキ																						1					1
タイ科																										遊離齒	1
ウミタナゴ属	1																										1
フサカサゴ科		2	1			2	2										1						2				2
アイナメ属																						13					1

第22表 A 101層出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鱗骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R								
板 鰓 亜 綱																						A 1 B 2				遊離齒 b 1	2
マイワシ									1				10							15	11	108	111	2			15
カタクチイワシ												4								6	2	108	99				6
サケ科																						1					1
サケ科 (小)																						2	1				1
マグロ属																						3					1
ウグイ属																						2					1
カツオ		1							1											1	15	21					2
ソウダガツオ属																						1	2				1
サバ属		1																				14	15			小含む	2
アジ科																						2	6				1
スズキ																							1				1
マダイ	1	1						1		1	1	1											4			遊離齒	1
タイ科																							2				1
ウミタナゴ属																						1					1
カワハギ科																								2			1
フサカサゴ科			1					1														3	12				1
アイナメ属	1		1																	1		9	21				1

第23表 A 102層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
マイワシ	1		1						1	1			1				1		4	10	105	98	3			10
カタクチイワシ																					61	34				3
サケ科(小)																					1	1				1
マグロ属																							1			1
カツオ	1	1				1													1		15	18	2			2
ソウダガツオ属	1																				2					1
サバ属	1	1	1				1														9	9			小含む	1
アジ科																						2	1		小含む	1
タイ科									1				1								2	1			遊離歯	1
カワハギ科																							2			1
フサカサゴ科	1	1	1				1	2	1														6			2
アイナメ属																					1	2				1

第24表 A103層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
マイワシ													2							4	78	65	4			4
カタクチイワシ																					25	13				2
サケ科(小)																					1	1				1
カツオ			1		1				1												11	13	1			1
ソウダガツオ属			1				1																1			1
サバ属																					5	8			小含む	1
ブリ属																						1				1
マダイ												1											3	1	遊離歯	1
ウミタナゴ属																					1					1
カワハギ科																							1			1
フサカサゴ科	1		1						1														4			1
アイナメ属																							11			1

第25表 A104層出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
板鰓亜綱																					A	1				1
マイワシ													1							2	36	40	3			3
カタクチイワシ												4							4	4	73	40				4
サケ科																					1	1				1
サケ科(小)																						1				1
カツオ																					3	12				1
サバ属							1														3	7	1			1
アジ科																						2				1
ブリ属																1										1
マダイ	1								1		1					1			1			1		遊離歯	1	
カワハギ科																					1					1
フサカサゴ科			1			1										1	1		1		1	3				1
アイナメ属																					3	4				1

第26表 ボーリング1 出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
マイワシ													1						3	4	49	40	4			4
カタクチイワシ													5						11	8	268	145	2			12
サケ科																						1				1
カツオ			1													2					8	8				2
サバ属	1						1															2	4			1
アジ科																						2	4			1
マダイ											1								1						遊離歯	1
フサカサゴ科						1	2									1					3	3				2
アイナメ属																					5	11				1

第27表 ボーリング2 出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
マイワシ													8						17	23	75	31	8			23
カタクチイワシ													4						16	10	355	164				16
マグロ属																					1					1
カツオ		1	3	1	1											1	1			2	18	13	1			3
サバ属			2																		6	5				2
アジ科																					1	2				1
ブリ属																						2				1
マダイ		1									1											1		遊離歯		1
フサカサゴ科			1			1	1		1										1		2	3				1
アイナメ属													2							1	11	20	1			2

第28表 ボーリング3出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R		
板鰓亜綱																					A	1				1
マイワシ													1							4	3	35	37			4
カタクチイワシ																				7	5	216	97			9
アナゴ科																						1				1
マグロ属																						1				1
カツオ		1	1				1		1											2	8	7	1			2
ソウダガツオ属																						1				1
サバ属		2																		1	3	4				2
アジ科																					2	1				1
マダイ																						2		遊離歯		1
フサカサゴ科																					1					1
アイナメ属																					7	14				1

第29表 ボーリング4出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上頰鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			L	R	L	R									
マイワシ													3							3	45	48				3	
カタクチイワシ				3	10								21							75	58	1140	459				75
ニシン科																							32	4		32	
ウグイ属																			1				1			1	
マグロ属							2														4					2	
カツオ	1		2	1			1														9	15	1			2	
サバ科																					1					1	
サバ属																					4	2				1	
アジ科																					2					1	
ブリ属																					2					1	
マダイ	1	1															1								遊離歯	1	
タイ科																					1					1	
ウミタナゴ属																					2	2				1	
フサカサゴ科													1							2	7	7	2			2	
アイナメ属							1	1													2	5				1	

第30図 ポーリング5出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上頰鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数	
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R			L	R	L	R									
マイワシ				2									2							2	2	70	92				5
カタクチイワシ				2	4								10							29	22	549	171				29
ニシン科									1												1	1	10	6		10	
サケ科(小)																					8	6				1	
カツオ		1	1	1			1														1					1	
ソウダガツオ属	1	1																								1	
サバ属																						1	4			1	
アジ科		2	1				1						3							2	4	19	38	4		4	
ブリ属			1				1	1	1																	1	
マダイ																				1	1	1			遊離歯	1	
ウミタナゴ属																					2					1	
フサカサゴ科								1								1				1	2	8			小含む	1	
アイナメ属																	1						5			1	

第31表 ポーリング6出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最 少 個 体 数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
マイワシ																			1	3	46	34	1			3
カタクチイワシ													1						4	5	69	56				5
サケ科																						1				1
カツオ				1																	1	1				1
ソウダガツオ属																					1					1
サバ属																					1	2				1
アジ科																					1	3				1
マダイ												1													遊離歯	1
フサカサゴ科																					1	2	1			1
アイナメ属																					2	3				1

第32表 ボーリング7出土魚類集計表

部 位 種 名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上擬鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備 考	最 少 個 体 数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
板鰓亜綱																						A	2			1
マイワシ													1							2	1	25	22			2
カタクチイワシ																				4	3	45	26	1		4
カツオ																						2	1			1
サバ属																							2			1
アジ科																							2			1
マダイ																									遊離歯	1
アイナメ属																						1				1

第33表 ボーリング8出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上漿鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
マイワシ																				1	7	4				1
カタクチイワシ																				2	2	18	16	1		2
カツオ																							1			1
サバ属																				1						1
アジ科																							1			1
マダイ							1													1					遊離歯	1
ウミタナゴ属																				1						1

第34表 ポーリング9出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上漿鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
カタクチイワシ																							2			1
アジ科																							1			1
マダイ																									遊離歯	1

第35表 ポーリング10出土魚類集計表

部位 種名	前上顎骨	主上顎骨	齒骨	角骨	口蓋骨	方骨	舌顎骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	角舌骨	上舌骨	上後頭骨	基後頭骨	鋤骨	副蝶形骨	肩甲骨	後側頭骨	上漿鎖骨	第一脊椎骨	第二脊椎骨	腹椎	尾椎	尾部棒状骨	下尾軸骨	備考	最少個体数
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R				L	R	L	R							
マイワシ																					1	1	1			1
カタクチイワシ																				1		3	1			1
マダイ																									遊離歯	1
アイナメ属																							1			1

第36表 ポーリング11出土魚類集計表

種名	腹足綱 前鰓亜綱										腹足綱 有肺亜綱						二枚貝綱									
	エゾアワビ	ユキノカサガイ科	イシダタミガイ	コシタカガンガラ	タマキビガイ	クロタマキビガイ	オオウヨウラクガイ	チヂミボラ	エソチヂミボラ	レイシガイ	イボニシ	オカモノアラガイ科	ホソオカチヨウジガイ	マルオカチヨウジガイ	オカチヨウジガイ	オカチヨウジガイ科	バツラマイマイ	オオコハクガイ	コハクガイ科	オナジマイマイ科	ムラサキインコガイ	イガイ	チリハギガイ			
層位																					L	R	L	R	L	R
A 1層												2	7	3	2	4	1				2	1	1	1		
A 2層				1			1	2								4					1	1	1			
A 3層	1	1		7			2	2	1	1			3	7	8	13	4				4	1	5	1		
A 4層				8			9	2					3	14			5				5	3	1	1		
A 5層		2		2			1	1		1					3							1				
A 6層				1			1	1				10	5	2	3		3				1	1	2	1		
A 7層				2			11	1					3	5			1				1	1	1			
A 8層	1			1			3	1					3	2		2										
A 9層		1		1		1	4	1		3		2		2	1			1			2	2	6			
A 10層															1											
A 11層				1				1		1													1			
A 12層								1	1					1												
A 13層				16			5	2	1				3		5	52	1	7				1	1			
A 14層		1		2			1	3								1										
A 15層								1							1		1									
A 16層				1	1		7	2				3	2	7				6			3		1			
A 17層				1			4	1			1		2	3		1		4			3	2	1	1		
A 18層				4	2		1	2						2				4	1				1			

第37表 A 1層～A 18層出土貝類集計表

種名	腹足綱 前鰓亜綱										腹足綱 有肺亜綱						二枚貝綱									
	エゾアワビ	ユキノカサガイ科	イシダタミガイ	コシタカガンガラ	タマキビガイ	クロタマキビガイ	オオウヨウラクガイ	チヂミボラ	エソチヂミボラ	レイシガイ	イボニシ	オカモノアラガイ科	ホソオカチヨウジガイ	マルオカチヨウジガイ	オカチヨウジガイ	オカチヨウジガイ科	バツラマイマイ	オオコハクガイ	コハクガイ科	オナジマイマイ科	ムラサキインコガイ	イガイ	チリハギガイ			
層位																					L	R	L	R	L	R
Bor. 1																										
Bor. 2																										
Bor. 3																										
Bor. 4																										
Bor. 5																					1					
Bor. 6																										
Bor. 7																										
Bor. 8																										
Bor. 9																										
Bor. 10																										
Bor. 11																										
A 101層																										
A 102層								1																		
A 103層																1										
A 104層																										

第38表 ボーリング 1～11出土貝類集計表

マ・イヌ・イルカ科・ヒトは稀で、表土からわずかな量が出土しているにすぎない。

以上であるが、当貝塚の自然遺物は魚類と哺乳類を中心としたものであり、イワシ等の小魚・フサカサゴ科・マダイ等の岩礁につく魚。カツオ・マグロ属・ブリ属などの大型回遊魚の三者にシカ・イノシシを加えたものが基本的な構成要素となる点が特徴として指摘される。また、この他にそれぞれの個体数は少ないものの、ありとあらゆる種への捕食があったことは特筆されよう。

c) ボーリング調査 (第131図・第146図・第147図)

発掘調査と併行して南側斜面のボーリング調査を実施している。これは第1次調査・第2次調査で検出した貝層や動物遺存体包含層の広がりを確認するとともに、新たな貝層や動物遺存体包含層の検出を目的とした。

ボーリング坑の命名については第2次調査時に調査区周辺にBP-1～BP-10のボーリング坑を穿っていたため、これとの重複を避け、今回はBP-21～BP-37とした。

BP-1～BP-10は第2次調査区周辺の状況を探るために実施しているが、BP-21～BP-34は第1次調査区周辺の状況および第1次調査区と第2次調査区間の状況を探ることを目的とした。また、BP-35・BP-36は第2次調査区の斜面下部および水田面の状況を探るために実施した。同様にBP-37は第1次調査区下部の水田面の状況を探るために実施した。

これらのボーリングにより採集した土壌はすべて持ち帰り1mmメッシュの篩で水洗選別している。この結果南側斜面にはかなり広範囲に動物遺存体包含層が分布していることがわかった。

まず、D2区からBP-33までの横断面でみると、表土の直下に地山が現れる尾根部分と包含層などが発達する谷部分が交互に出現しているのが観察される。つまり、D2区～BP-9・BP-21・BP-23・BP-27～29・BP-31が尾根部分で、D1区～C区・BP-22・BP-24～BP-25・BP-31が谷部分になっている。

第2次調査区付近の谷部分は比較的規模も大きく幅30mほどである。A1区では良好な貝層を確認しているが、この両側のD1区やC区にも動物遺存体が包含されていた。

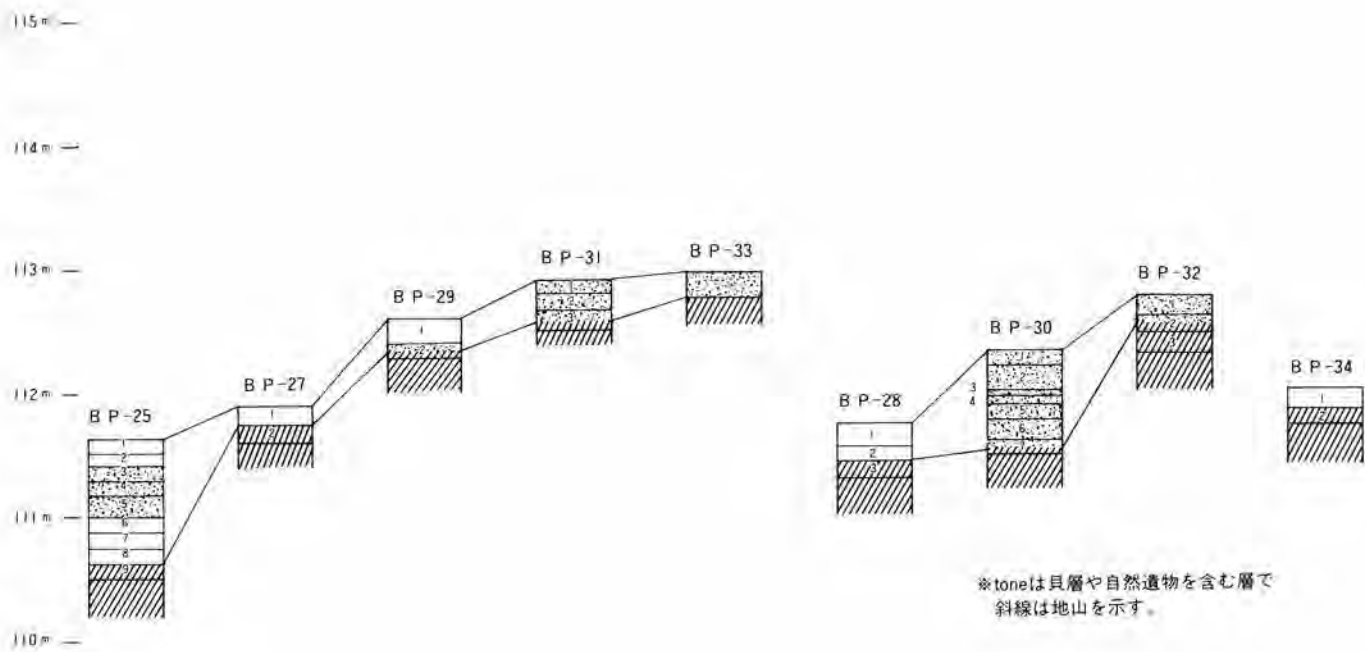
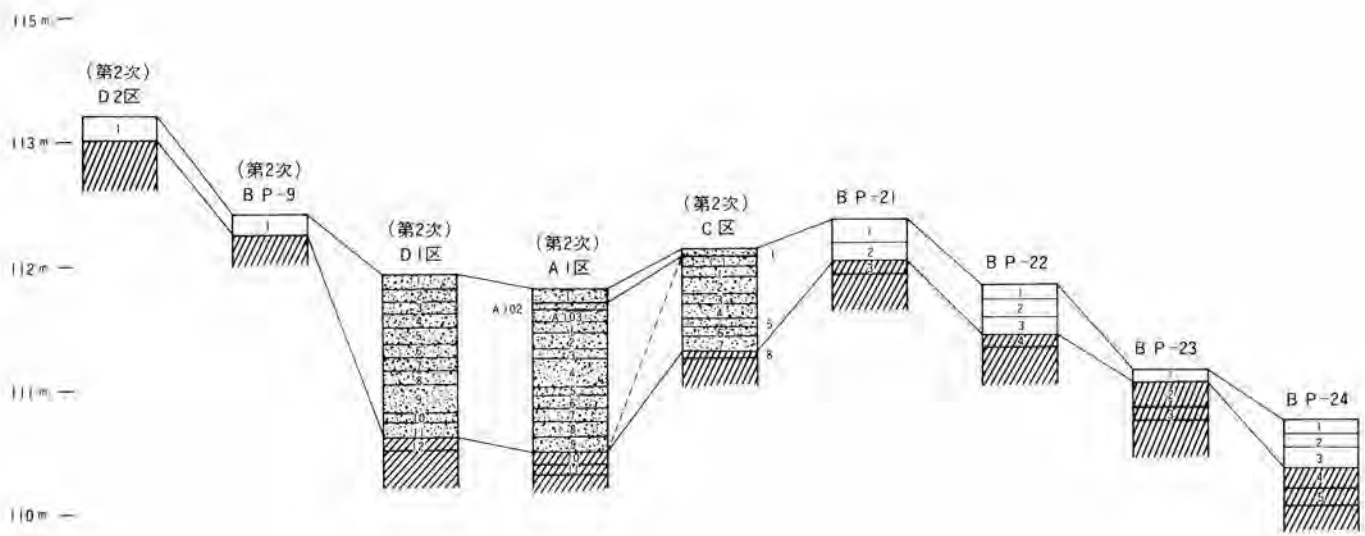
また、第1次調査区付近にも広く動物遺存体包含層が分布していることが確認された。特に、BP-30では約80cmの厚さにわたり動物遺存体が包含されていた。

両者の中間に存在する谷は規模が小さいこともあり、動物遺存体を包含する層も比較的薄く、包含量も少ない。

次に横断面でみると、第2次調査区周辺ではB区～A1区に貝層があり、E区、BP-30・BP-36にまで動物遺存体が包含されていた。E区の上層は黒褐色土～暗褐色土層で比較的新しい時期の堆積だと思われるが、下層は動物遺存体包含層となっている。また、水田面に設定したBP-36からも動物遺存体が検出されている。

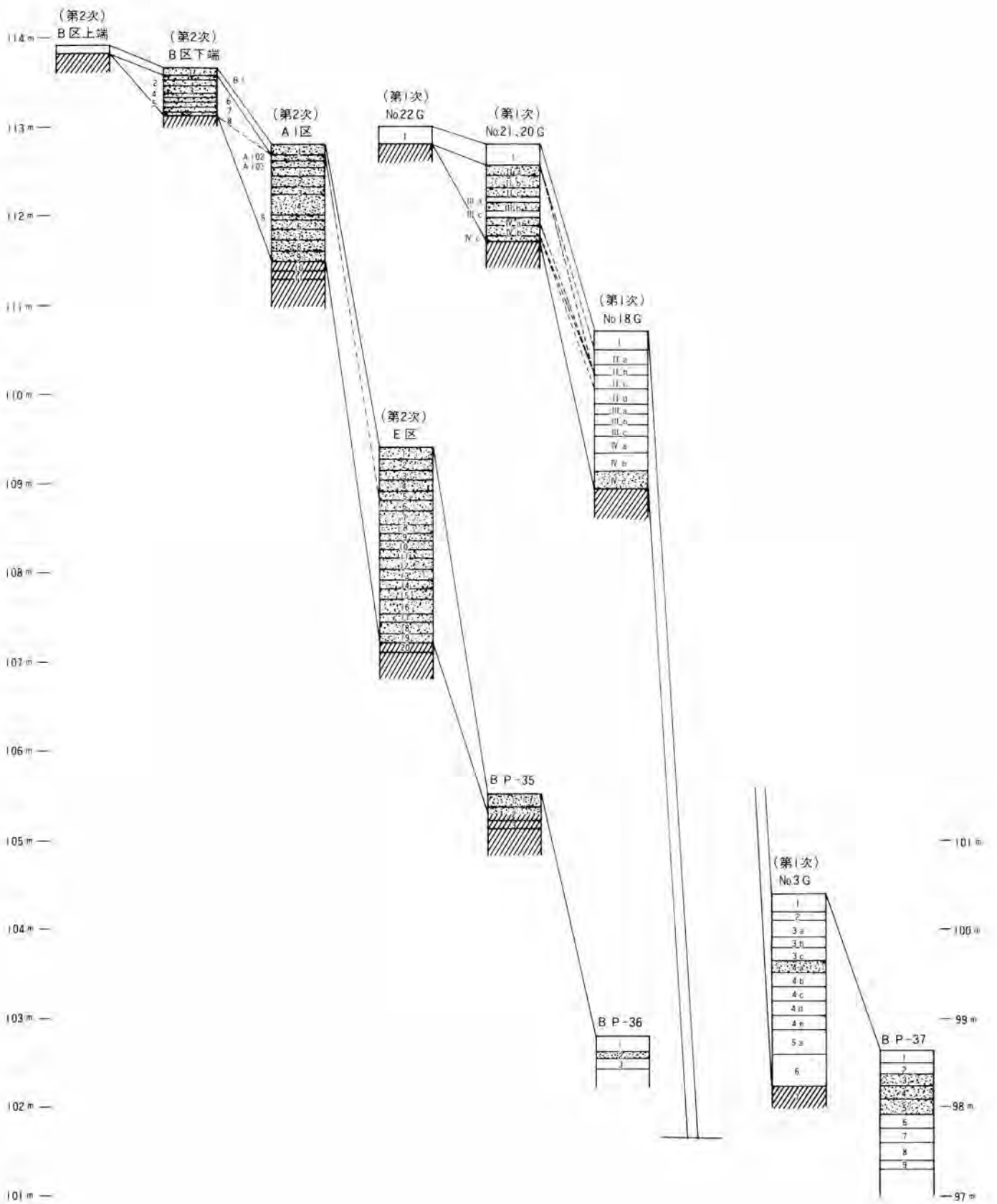
第1次調査区周辺では斜面の上端部を中心に動物遺存体包含層が形成されるが、斜面下端部の3Gの一部や、水田面に設定したBP-37からも動物遺存体が検出されている。

以上の成果を要約した模式図を第108図・第131図に示した。図の濃いtoneの部分が貝層や比較的包含量の多い動物遺存体包含層の範囲である。また、薄いtoneの部分は包含量の少ない動物遺存体包含層の範囲である。斜面の下端部や水田面下から検出された少量の動物遺存体は斜面上部の貝層や動物遺存体包含量から流れ落ちて二次的に堆積した可能性が大きい。しかし、



※toneは貝層や自然遺物を含む層で
 斜線は地山を示す。

第146図 南貝塚ボーリング柱状図 (1)



第147図 南貝塚ボーリング柱状図 (2)

このように少量の骨片や貝殻片が残るのはおそらく土壌などの周辺部の環境が良好な為で、今後獣骨などの集積が新たに発見される可能性が大きくなった。また、BP-4-3から平安時代と思われる土師器甕の破片が出土している。

(2) 北貝塚

北貝塚では第5次調査(第5次調査B区)・第7次調査(第7次調査B区)・第8次調査(第8次調査A・B区)にて範囲確認調査を実施している。

これらの調査を総合すると、北貝塚では第8次調査A・B区にまたがり直径10m程度の貝層が形成されていることが判明した。

また、この貝塚をとりまいて斜面部全体に遺物包含層が形成されており、第8次調査A区周辺では中期中葉の大木8b式以前の、第8次調査B4区及び第5次調査B区周辺では中期前葉の大木7b式以前の、第7次調査B区周辺では中期前葉の大木10式以前の堆積層がそれぞれ確認された。

さらに、貝塚の周辺部(第8次調査A7区や第5次調査B区)からは少量ではあるものの動物遺存体が検出されており、これらの下部に貝層等が形成されている可能性が大きい。

以下、地点毎の内容を記述する。

a) 第8次調査区

北貝塚の中央部に形成された貝層の範囲と周辺の状況を探るために調査区を設定したが、便義上西半部をA区、東半部をB区とした。

i) 基本層序

部分的に精査を実施したA7区によると、堆積層はI層～XVII層に大別される。III層以下は、遺物包含層であり、他の地点との整合性がないため層名に調査区名を冠した。

I層は表土層で、しまりのない暗褐色粘質土層を基本土とする。

II層は旧表土層で、I層より明るい暗褐色粘質土層を基本土とする。やはりしまりが無い。

7-III層は、グリッド全体を覆う遺物包含層である。やや明るい暗褐色粘質土層を基本土とし、黒褐色土塊や焼土塊をやや多く含む。やややわらかく、ややしまりが無い。炭化物粒を少量含む。

7-IV層は、遺物包含層である。南西方向から流れ込む形で堆積しており、III層とは不整合の関係となる。7-IV層は土層断面によると3層に細分されるが、精査時には判別できず一括した。

やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や焼土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。炭化物粒を少量含む。

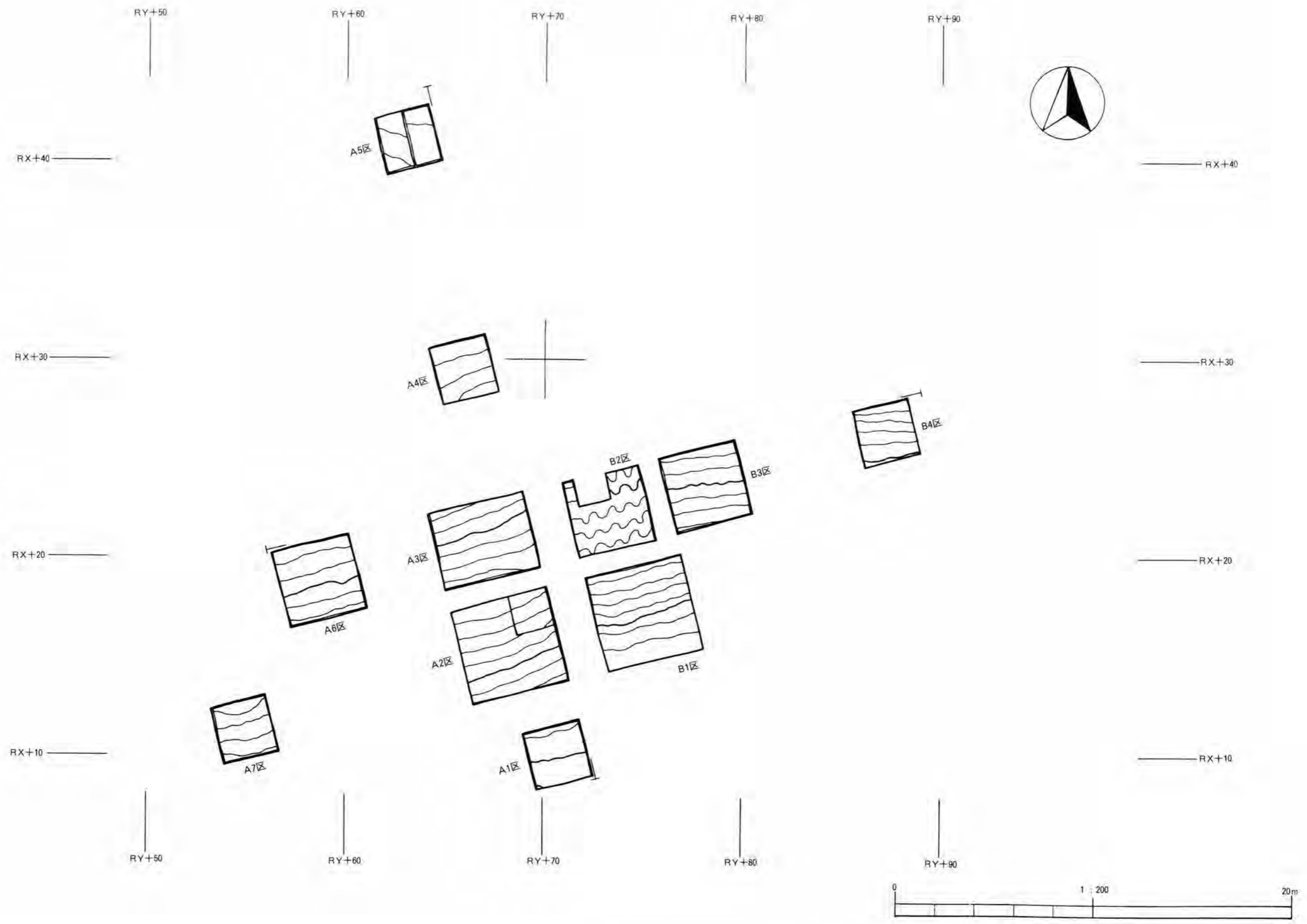
7-V層は、暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊や褐色土塊を含む。固さ、しまりともに中程度である。炭化物粒をやや多く含む。

7-VI層は、褐色シルト質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。炭化物粒を含む。

7-VII層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。固さ、しまりともに中程度である。炭化物粒をやや多く含む。



第148図 北貝塚調査区設定図



第149図 北貝塚第8次調査A区・B区平面図

掘り上げた堆積層は以上であるが、これらの下層にも遺物包含層が連続して堆積している。層相や各層位の詳細は不明であるが、仮に層名を付し、概要を記す。

7Ⅷ層は、やや明るい褐色シルト質土を基本土とし、炭化物粒を含む。

7-Ⅸ層と7-X層は未注記。

7-XⅠ層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を多量に含む。

7-XⅡ層は、黄褐色シルト質土を基本土とし、炭化物粒を少量含む。

7-XⅢ層は、暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊や地山ブロックおよび炭化物粒を多量に含む。

7-XⅣ層は、褐色粘質土を基本土とし、地山ブロックを含むほか、炭化物粒を少量含む。

7-XⅤ層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を含む。

7-XⅥ層は、暗褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を含む。

7-XⅦ層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、炭化物粒を少量含む。

斜面最下部に設定したA 5区でも部分的な精査を実施しており、7層の堆積層を確認している。

I層は表土層で、やや明るい黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やわらかく、しまりがない。A 7区のI層に対応する。

Ⅱ層は旧表土層で、黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊などを含む。やわらかく、しまりがない。A 7区のⅡ層に対応する。

5-Ⅲ層は、やや暗い黒褐色粘質土を基本土とし、黒色土塊・暗褐色土塊・褐色土塊を含む。やややわらかく、ややしまりがない。

5-Ⅳ層は、暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊や黒褐色土塊をやや多く含む。固さ、しまりともに中程度である。

5-Ⅴ層は、褐色粘質土を基本土とし暗褐色粘質土を少量含む。固く、しまりは中程度である。

5-Ⅵ層は、2層に細分される。5-Ⅵ a層はやや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。固く、しまりは中程度である。5-Ⅵ b層は暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。やや固く、しまりは中程度である。

5-Ⅳ層～5-Ⅵ層は、縄文時代の遺物包含層であるが、A 7区のどの層と対応するのかわからない。

B 4区でも遺物包含層を検出している。

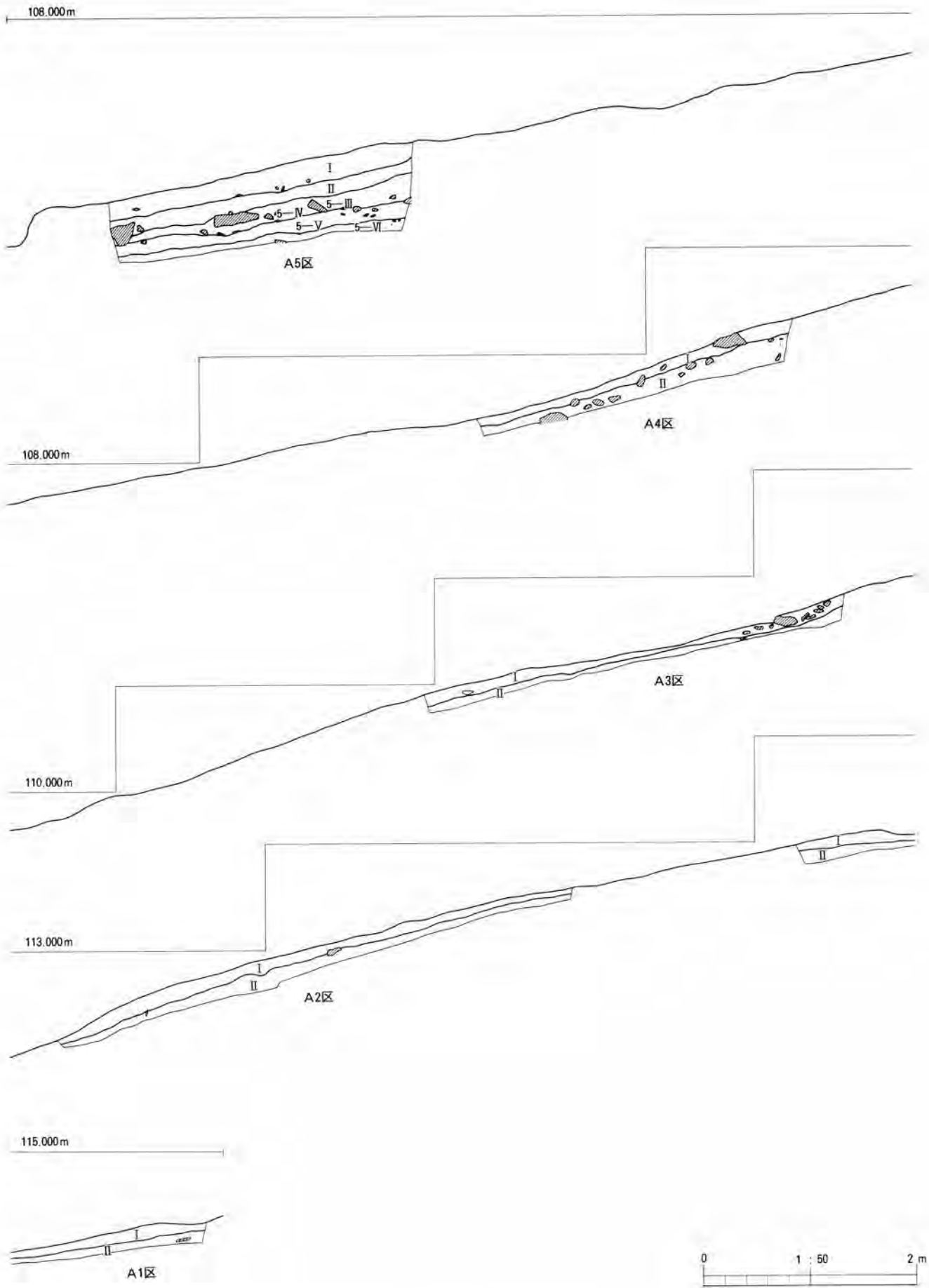
I層は表土層であり、他の調査区に対応するが、Ⅱ層は他の調査区とは異なり地山と同質の褐色粘質土を基本土とするが、ややしまりがない。

B Ⅲ層は、暗褐色粘質土を基本土とし、この層以下が遺物包含層となっている。

ii) 出土遺物

この地点での検出遺構はない。

A 2区・A 3区・B 1区・B 2区にまたがって貝層の分布が認められたが、主体となるのは



第150図 第8次調査区土層断面図 (1)

A 2 区・A 3 区・B 1 区であり、検出面での肉眼による分布範囲は、直径10mほどである。

貝層は検出のみにとどめたため、層厚や内容物についての詳細は不明であるが、攪乱穴での観察によると、破碎された貝殻を多量に含むものであった。

また、貝層の周辺の遺物包含層中にも獣骨等の動物遺存体を含む層があり、これらの層が貝層を広くとりまいているようである。

① 土器

貝層周辺出土土器

2024・2025・2027～2037・2040～2043・2049・2064～2072は貝層上面のクリーニング中に得られた遺物である。

2024・2025・2027は磨消技法によるもので、縦位の区画文を施す。大木9式に伴う。 第Ⅹ群

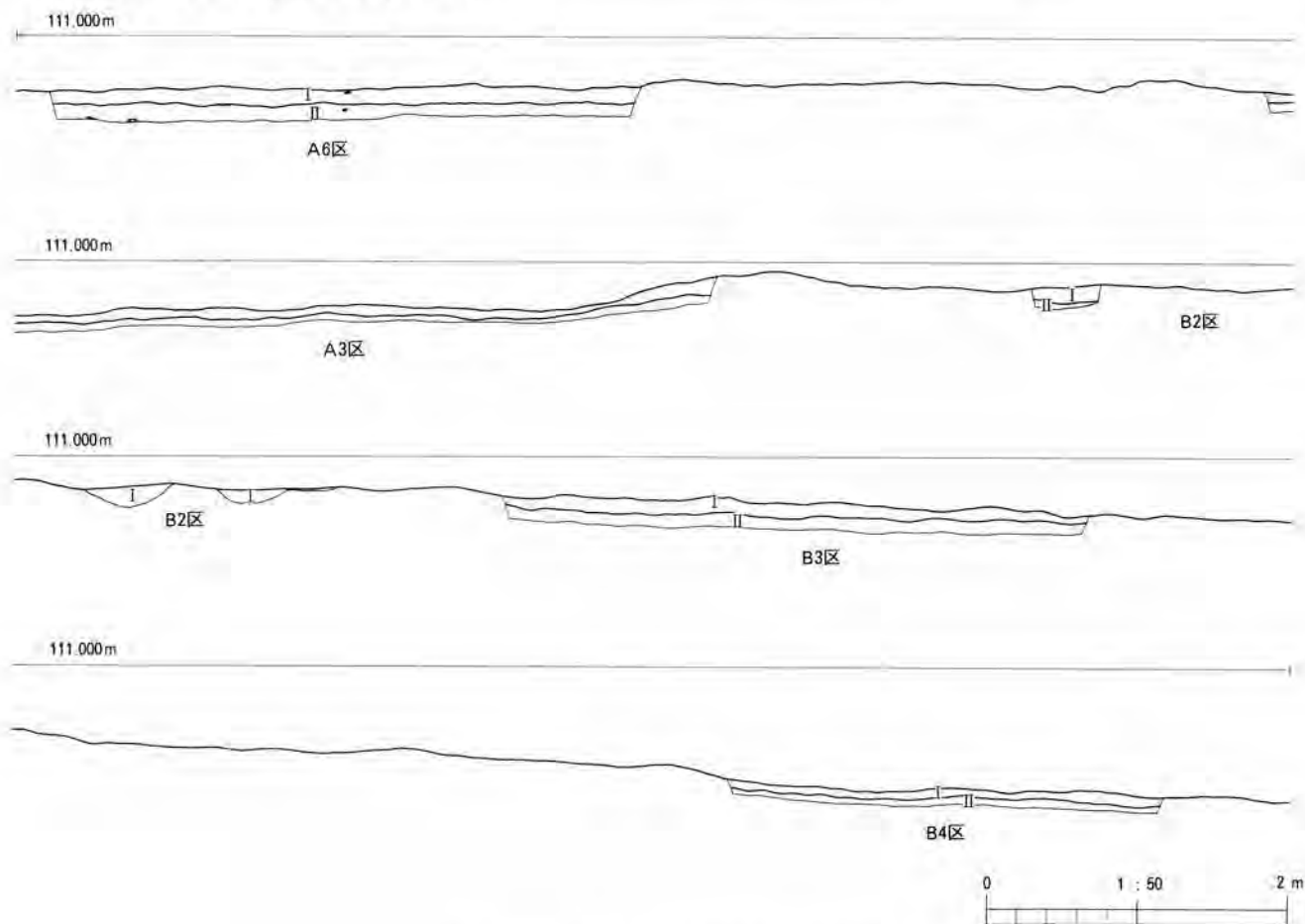
2066は波頂部に隆沈線を施すもので、大木8b式～大木9式に伴う。

2029～2037・2040・2064・2067・2069は隆沈線により渦巻文等を施すもので、大木8b式に伴う。 第Ⅸ群

2068はキャリパー形深鉢で、沈線を伴う隆起線にて波状のモチーフを施す。大木8a式に伴う。 第Ⅷ群

他のものはこれら以前の型式に伴うものである。

また、周辺部のⅠ層～Ⅱ層及び攪乱穴からの出土土器は直接貝層に伴うものではないが、2050が磨消技法によるもので、縄文中期末葉～縄文後期初頭に、2063が大木10式に伴うが、他のものは大木8b式～大木9式に伴う。



第151図 第8次調査区土層断面図 (2)

A 4区出土土器

4-Ⅲ層出土土器 (2101～2119)

第Ⅸ群

2101～2112は隆起線や平行沈線により渦巻文や懸垂文を施すもので、大木8 b式に伴う。

2113～2115はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯に隆起線による波状文等を施し、大木8 a式に伴う。

他のものは、これら以前の型式に伴う。

I層～II層は比較的新しい時期の堆積層で、出土遺物は型的なまとまりを持たない。

第Ⅹ群

3132は磨消技法により、横位のモチーフを施すもので、大木10式に伴う。

2120・2133も磨消技法によるが大木9式に伴う。

2121～2128・2135は隆沈線や平行沈線により施文されるもので、大木8 b式に伴う。

他のものはこれら以前の型式に伴う。

A 5区出土土器

5-VI層出土土器 (2138～2148)

第Ⅸ群

2138～2139は隆沈線などにより施文されるもので、大木8 b式の古い段階に伴う。

2140～2143は半截竹管などにより施文されるもので、縄文中期初頭に伴うものである。

2144～2148は縄文前期に伴うものである。

2144・2146は胎土に植物繊維を含まず、縄文前期中葉以降に伴うと思われる。

2145・2147・2148は胎土に植物繊維を含み、縄文前期前葉に伴うものと思われる。

5-V層出土土器 (2149～2157)

第Ⅸ群

2149～2152はいずれも隆沈線により施文されるもので、大木8 b式に伴う。

2153～2155はいずれも平行沈線により施文されるもので、大木8 a式に伴う。

2156は沈線による鋸歯状文を施すもので、大木3式に伴う。

2157は植物繊維を含むもので、縄文前期前葉に伴う。

5-Ⅳ層出土土器 (2158・2159)

第Ⅸ群

2158・2159は隆沈線や平行沈線により施文されるもので、大木8 b式に伴う。

5-Ⅲ層出土土器 (2160～2170)

第Ⅹ群

2160～2162は磨消技法により、縦位の区画文を施すもので、大木9式に伴う。

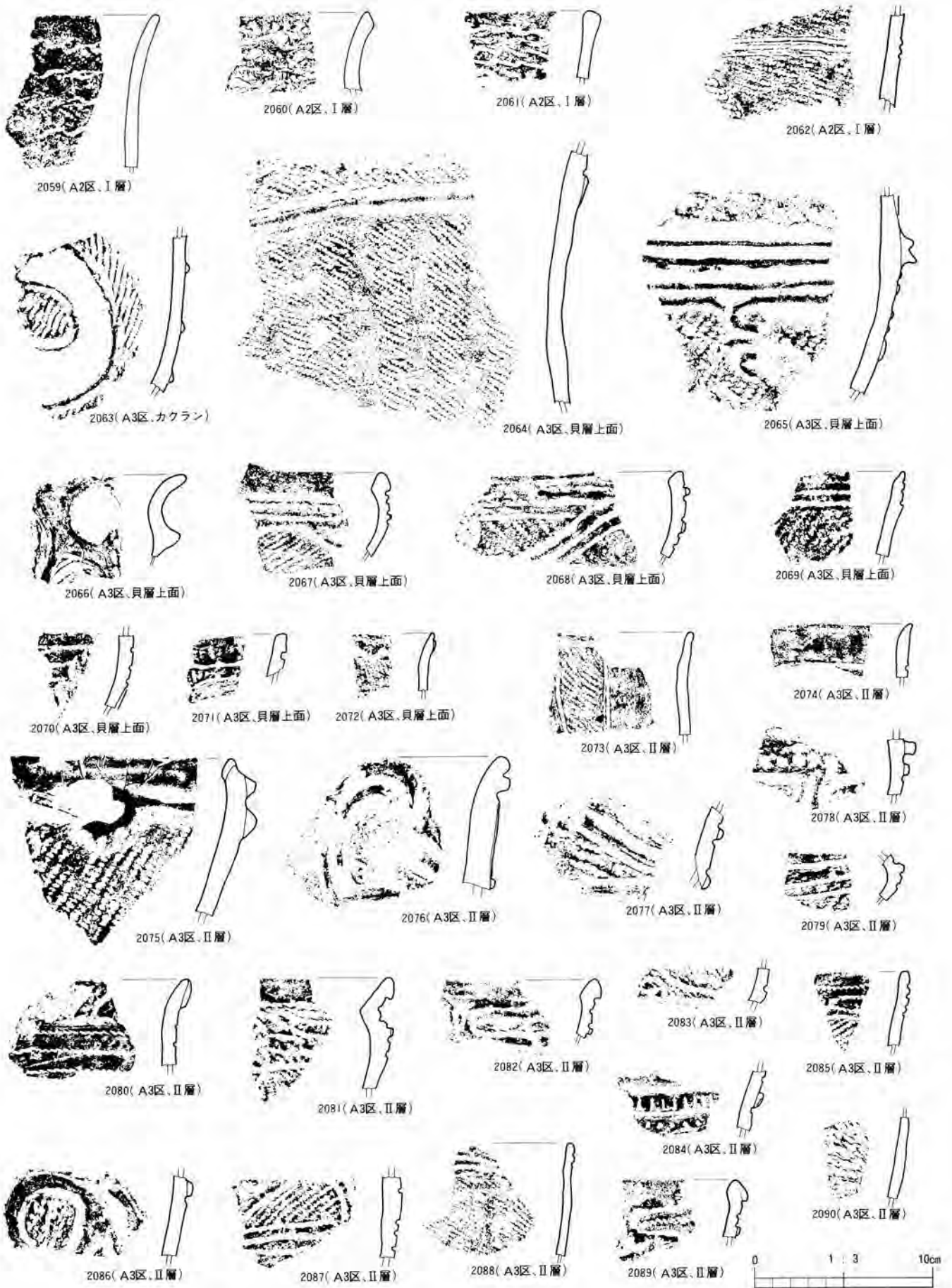
2163～2167は隆沈線により渦巻文等を施すもので、大木8 b式に伴う。2168・2169も大木8 b式に伴うものであるが、比較的古い段階のものである。

2170は胎土に植物繊維を含み、縄文前期前葉に伴う。

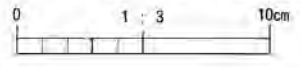
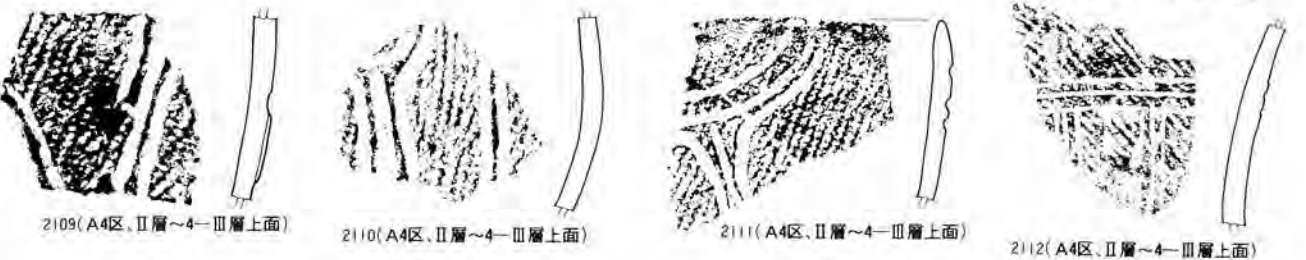
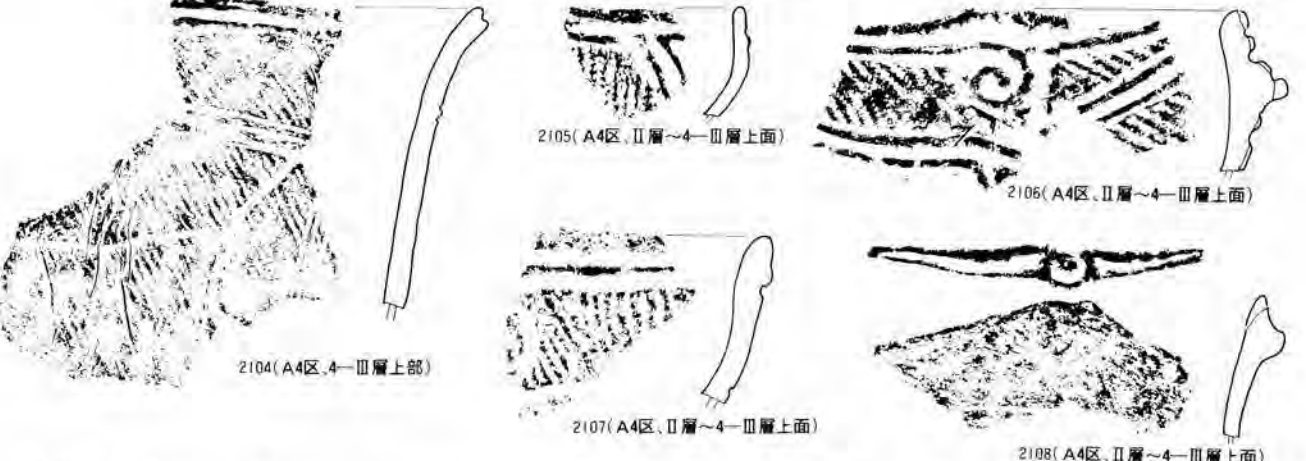
I層～II層は比較的新しい時期の堆積層であり、II層からは舟釘状の鉄製品(第175図2490)が出土している。他のものについては、詳述を避ける。



第152図 第8次調査区出土遺物 (1)



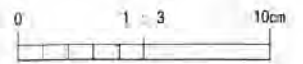
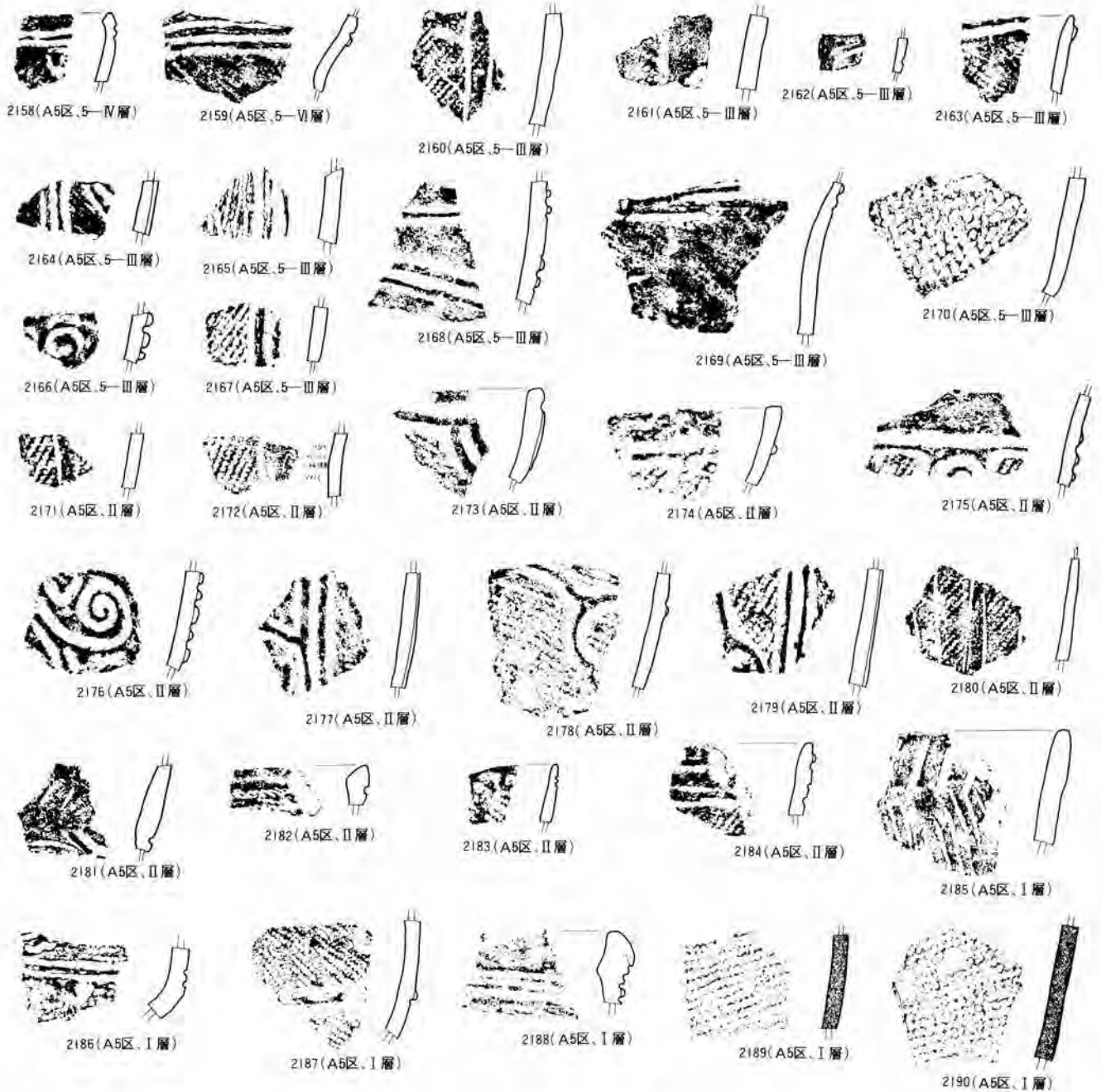
第153図 第8次調査区出土遺物 (2)



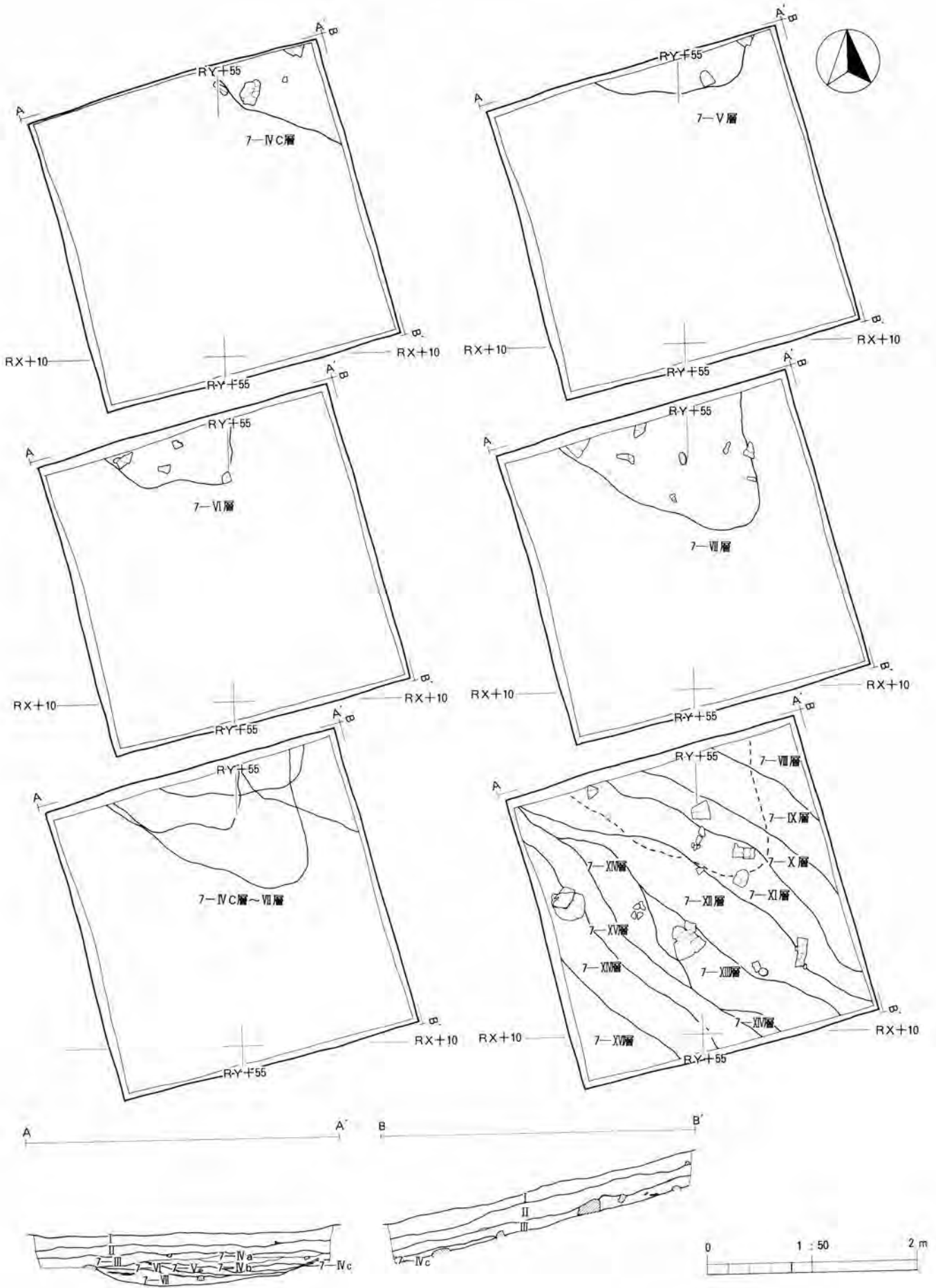
第154図 第8次調査区出土遺物 (3)



第155図 第8次調査区出土遺物 (4)



第156図 第8次調査区出土遺物 (5)



第157图 A 7区遺物包含層平面図・土層断面図

A 7 区出土土器

A 7 区からは合計17層の遺物包含層を確認した。大半を検出のみにとどめたために各層からの出土土器はさほど多くはないが、形式的にまとまりを有している。

7-X VII層出土土器 (2191~2196)

2191はやや大形のキャリパー形深鉢で、口縁部は4単位の波長を有する大波状口縁となる。波頂部には円孔を穿つ。口縁部文様帯には沈線を伴う隆起線にて波状に展開するモチーフが施されるが、波頭部に小渦巻文を施すことや、隆起線や沈線の端部を反転させることにより文様体内部を区画している。また、波頭部には刻目を有する小突起を配する。

2192・2193もキャリパー形深鉢であり、2191に類似するものであろう。

2194は口縁部に波状の隆起線と縦位の原体圧痕文を施すものである。

2195はやや小形の深鉢で口縁部に横位1条の沈線を施す。

2196は縄文のみを施す深鉢である。

7-X IV層出土土器 (2197~2201)

2197・2200はキャリパー形深鉢である。2197は口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線による波状のモチーフを施し、波頭部には刻目を有する小突起を配する。2191に類似している。

2198は体部に沈線により渦巻文や区画文を施す。

2199は口縁部の外反する小形の深鉢で、口縁部に横位2条の沈線を施す。

2201は頸部に屈曲を持つ深鉢で、体部に刻目を有する隆起線により施文が認められる。大木3式に伴う。

7-XII層出土土器 (2202~2204)

2202はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線により波状に展開するモチーフが施される。波頭部には渦巻文が伴う。

2203は浅鉢である。口唇部には渦巻文を配し、口縁部文様帯には刻目状の原体圧痕文が伴う。

7-XI~XIII層出土土器 (2205・2206)

2205はキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯に沈線による部分的な弧状の施文が認められる。

2206は体部に隆起線による施文が認められる。

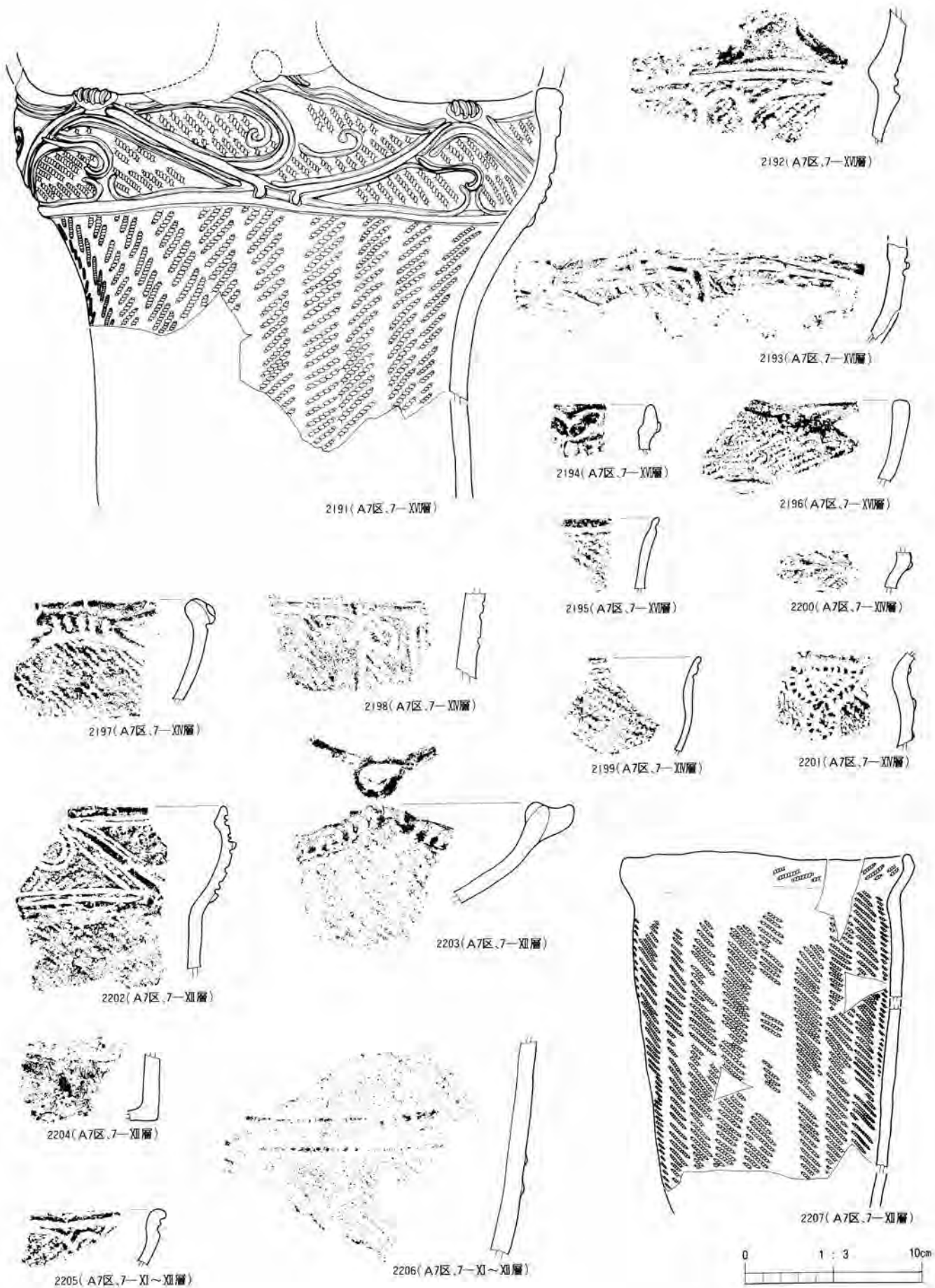
7-XI層出土土器 (2207・2208・2210~2216)

2207はキャリパー形深鉢であるが、縄文のみを施す。

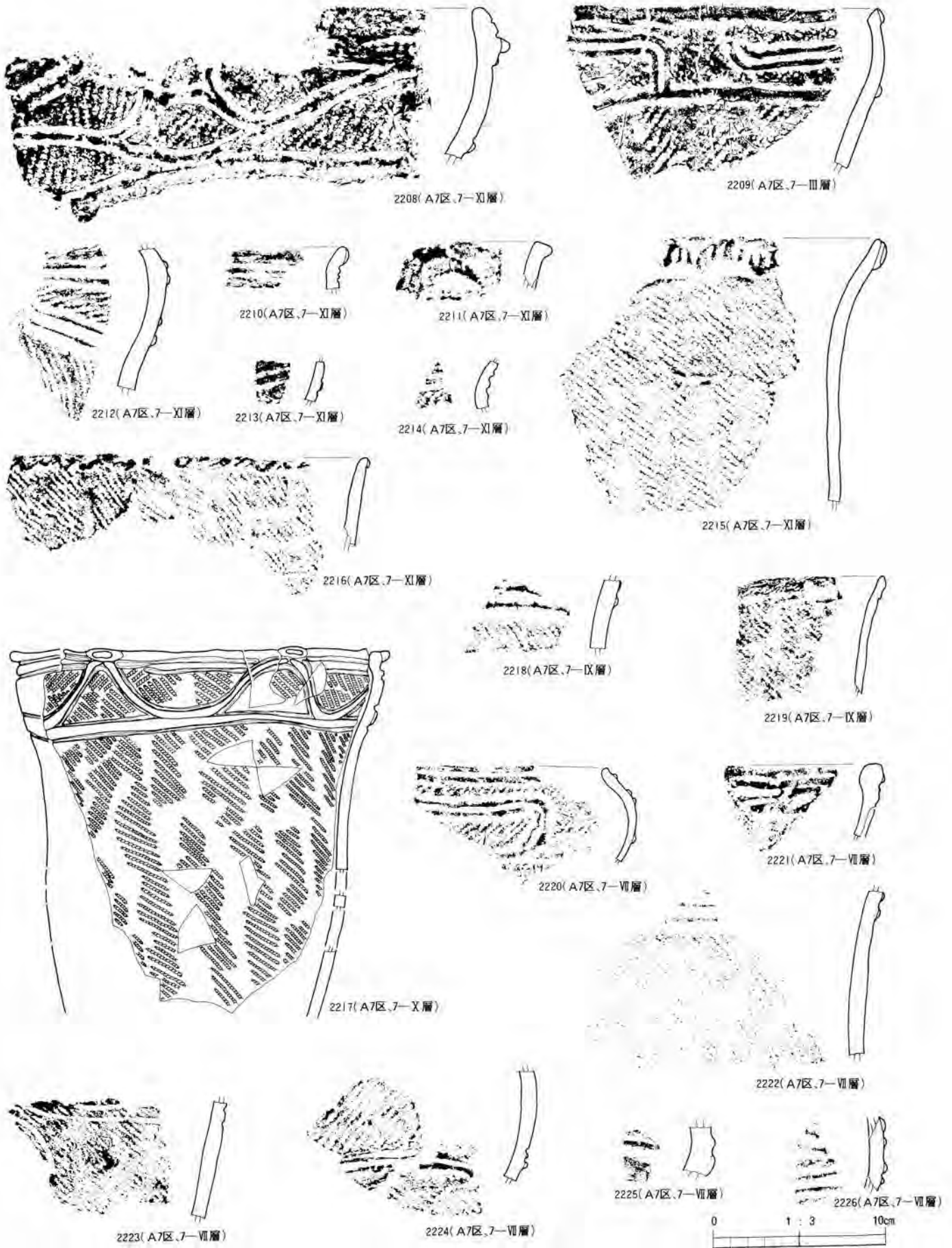
2208・2212もキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯に沈線を伴う隆起線による波状のモチーフを展開するが、端部の反転や他の文様要素との連絡により区画文を作出している。

2215・2216は口縁部が外反する深鉢で、口縁部文様帯に刻目を有する隆起線を波状に配す。

2211は波頂部の破片で、隆起線による施文が認められる。



第158図 第8次調査区出土遺物 (6)



第159図 第8次調査区出土遺物 (7)

第Ⅷ群

2210・2213・2214は沈線による施文が認められる。
以上、7-XI～XⅦ層は大木8 a式の古い段階に伴うものである。

7-X層出土土器 (2217)

2217はキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯は上下の境界線を沈線を伴う隆起線により区画し、内部に平行沈線による波状のモチーフが展開する。波頭部には刻目を持たない小突起を配す。

7-Ⅸ層出土土器 (2218・2219)

2218は体部に調整された隆起線による施文が認められるもので、2219は縄文のみを施す深鉢である。

7-Ⅷ層出土土器 (2220～2226)

2220・2221はキャリパー形深鉢である。いずれも調整された隆起線による施文される。2220はクランク文的な施文となる。

2222・2224～2226沈線を伴う隆起線により施文されるが、良く調整され隆起線状となる。
2223は沈線により施文される。

7-V層出土土器 (2227～2229)

2227は縄文のみの体部下半、2228は隆起線により施文される小形深鉢、2229は口縁部文様帯に原体圧痕による馬蹄形圧痕を施す浅鉢である。

7-Ⅳ層出土土器 (2230・2231)

2230・2231は大波状を呈する大形のキャリパー形深鉢である。波頂部には隆起線によるC字文等が伴う。

2230は口縁部文様帯に波状に展開するモチーフを施すものの区画文は作出されない。

2231は隆沈線による横方向の施文が認められる。

第Ⅷ群

以上、7-X層～Ⅳ層は大木8 a式の新しい段階に伴うものである。

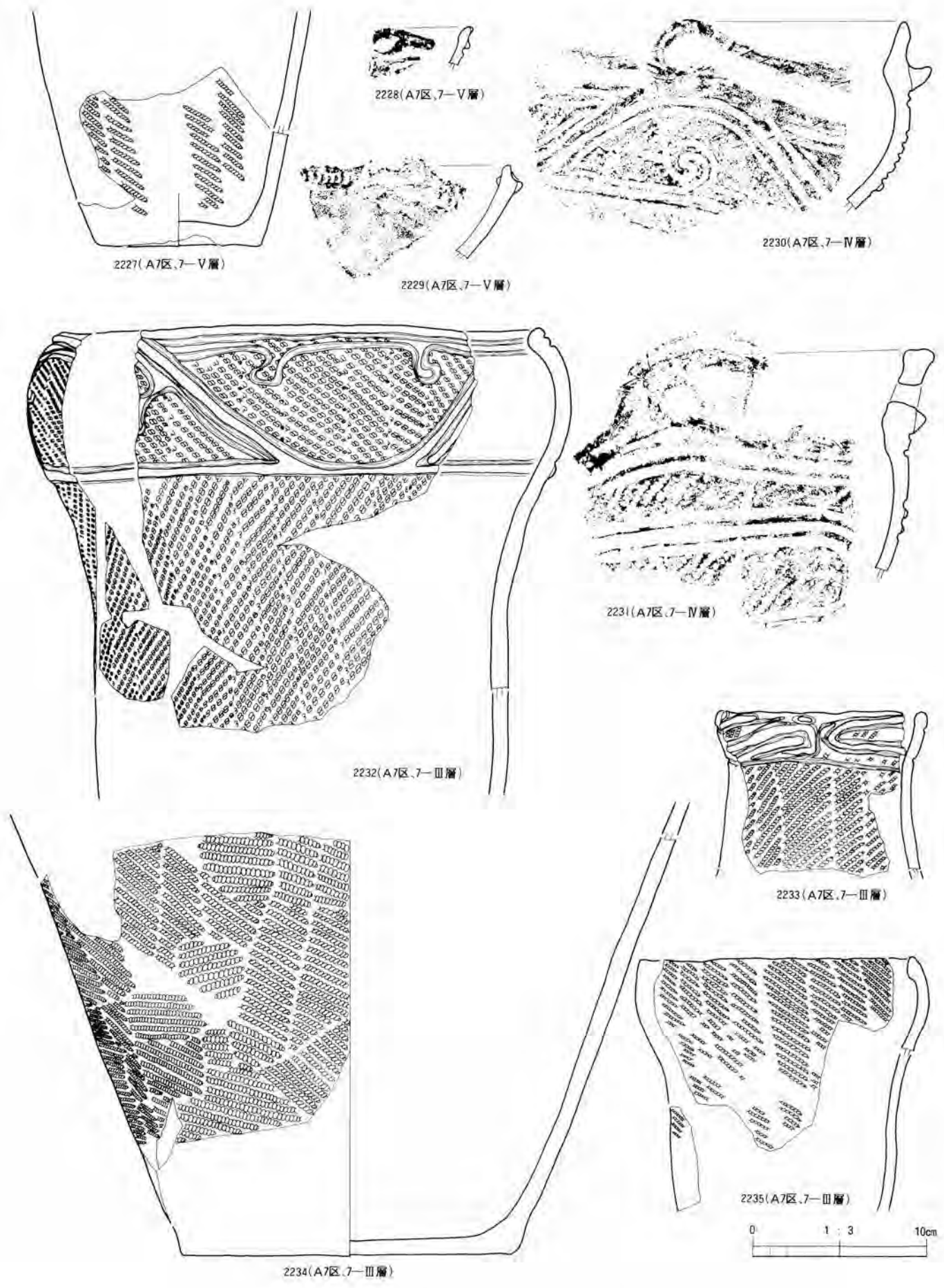
7-Ⅲ層は比較的層厚もあり、遺物の出土量も多かったため、精査中に上半と下半に分類して遺物を取り上げた。しかし、土層断面では、明瞭な層位面を確認することはできなかった。

7-Ⅲ層(下部)出土土器 (2209・2232～2284)

施文技法やモチーフから次の2つのグループに分類される。

A類 (2209・2232・2233・2250～2252・2272・2273)

2232は平縁のキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には沈線を伴う隆起線により波状のモチーフが展開し、外側の沈線は局部的に張り出し小渦巻文状となる。波頭部には小突起を伴わないようである。



第160図 第8次調査区出土遺物 (8)

2233は小形のキャリパー形深鉢であり、口縁部文様帯には沈線による区画文的な不整な施文が認められる。

2209は口縁部文様帯に調整された隆起線により、クランク状文を施す。

2250～2252は同一個体の可能性が強い。口縁部文様帯には平行沈線により波状文のくずれた山形文を連続させ、頂部間を一部弧状の沈線にて連絡している。

2272は口縁部の内湾する深鉢である。口縁部文様帯には横位S字状の貼付けを施し、これを横位波状等の隆起線により連絡する。

体部文様帯には隆起線による波状懸垂文や平行沈線による施文が認められる。

2273は口縁部に施された透しを有する立体的な把手部である。

2236～2238もキャリパー形深鉢である。口縁部は4単位ほどの大波状を呈し、2237は波頂部に横位S字状を施す。

口縁部文様帯にはいずれも沈線を伴う隆起線により波状のモチーフを展開する。2236は波頭部に小渦巻文を配すが、区画文は作出さない。

B類 (2239～2249・2253～2271・2274～2281)

いずれも破片であり、本来A類とすべきものを含んでいる可能性がある。

2239～2242はキャリパー形深鉢であり、沈線を伴う隆起線により区画文等を施す。

2260～2268・2278は原体圧痕により縦位の刻目を施すものを一括した。

2269・2270は隆起線上に円形の連続刺突文を施すものである。

上記以外のもの (2234・2235・2282～2284)

2234・2235は縄文のみを施すものであり時期を特定できない。

2282～2284は縄文前期に伴うものであろう。

7-Ⅲ層上部土器 (2285～2297)

いずれも前述したA類に類似するものである。

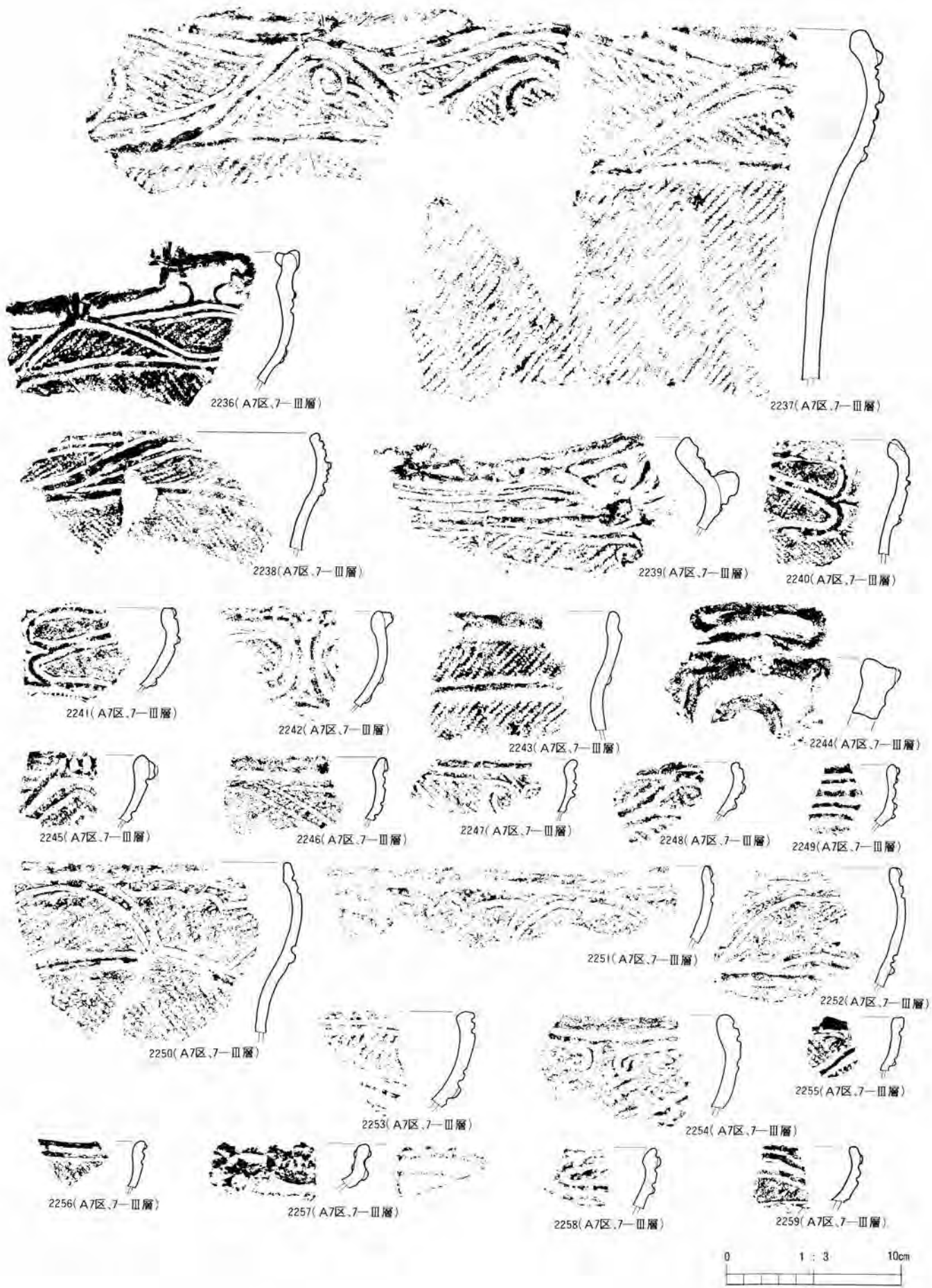
2285・2291～2293は大形のキャリパー形深鉢であり、大波状口縁を呈する。口縁部文様帯は2285・2293が横方向に、2291が波状に展開するモチーフを施すが、区画文は作出されない。

2296・2297は平縁のキャリパー形深鉢で、口縁部文様帯には2296が楕円形区画文を、2297が波状文を施す。

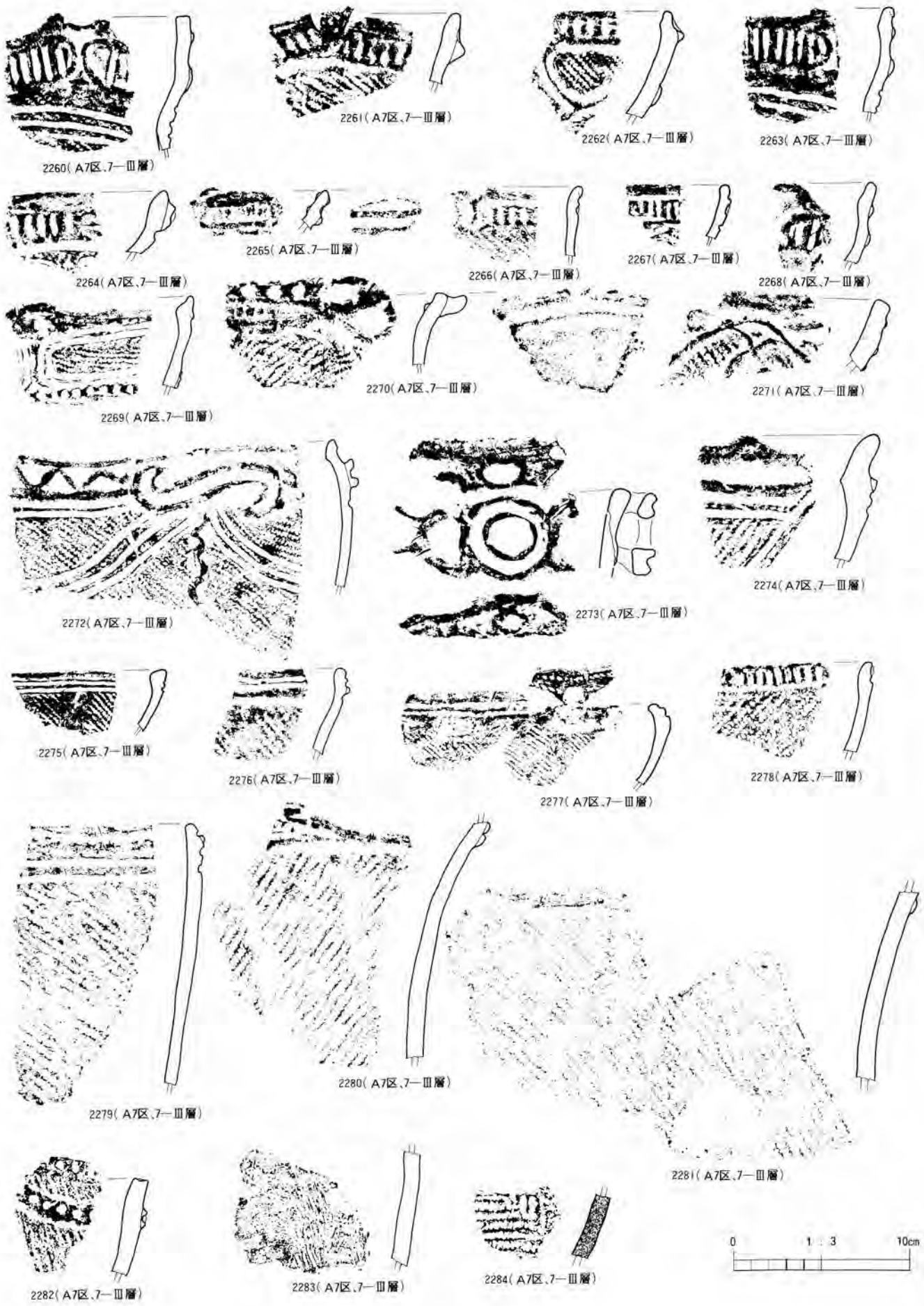
I層～II層は比較的新しい時期の堆積層であり、詳述を避ける。

第Ⅷ群 第Ⅸ群

以上、7-Ⅲ層のA類は大木8 a式の新しい段階に伴う。また、B類は大木8 b式の古い段階に伴う。



第161図 第8次調査区出土遺物 (9)



第162図 第8次調査区出土遺物 (10)



2285(A7区.7-Ⅲ層上部)



2286(A7区.7-Ⅲ層上部)



2287(A7区.7-Ⅲ層上部)



2288(A7区.7-Ⅲ層上部)



2289(A7区.7-Ⅲ層上部)



2290(A7区.7-Ⅲ層上部)



2291(A7区.7-Ⅲ層上部)



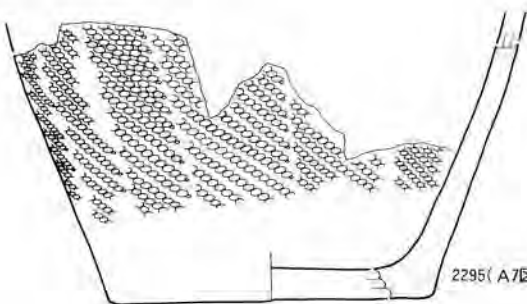
2292(A7区.7-Ⅲ層上部)



2293(A7区.7-Ⅲ層上部)



2294(A7区.7-Ⅲ層上部)



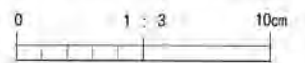
2295(A7区.7-Ⅲ層上部)

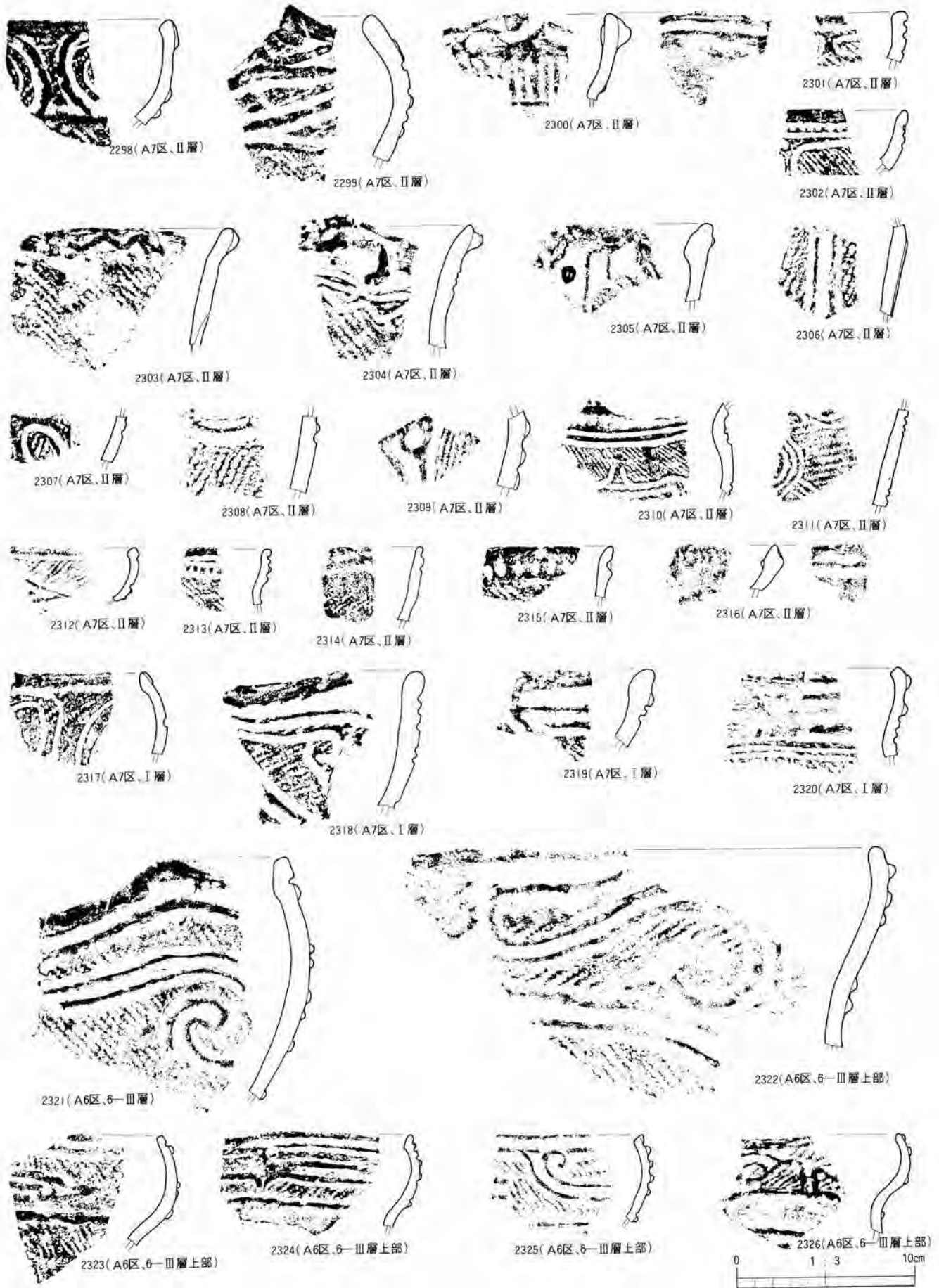


2297(A7区.7-Ⅲ層上部)

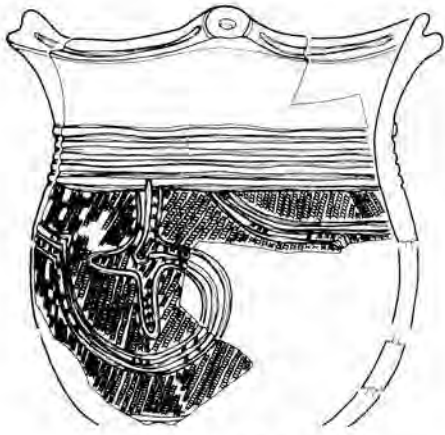


2297(A7区.7-Ⅲ層上部)

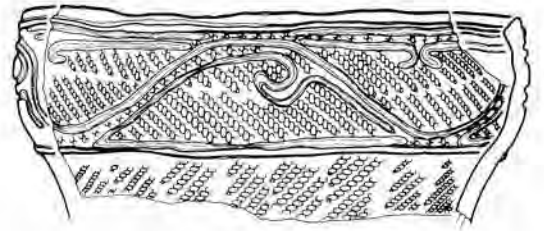




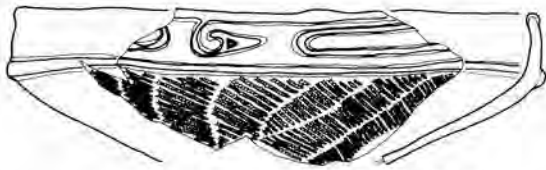
第164図 第8次調査区出土遺物 (12)



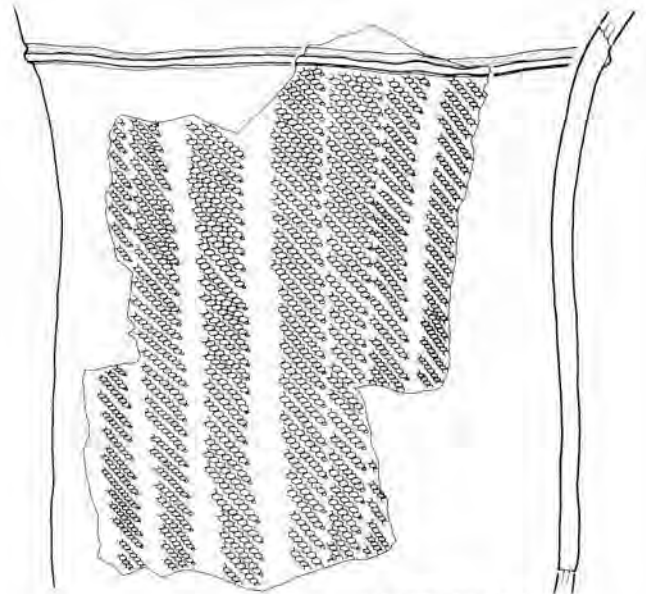
2327(A6区.6-Ⅲ層上部)



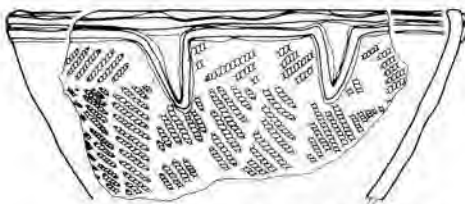
2328(A6区.6-Ⅲ層上部)



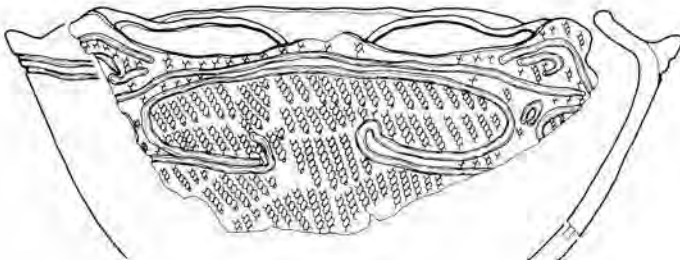
2329(A6区.6-Ⅲ層上部)



2332(A6区.6-Ⅲ層上部)



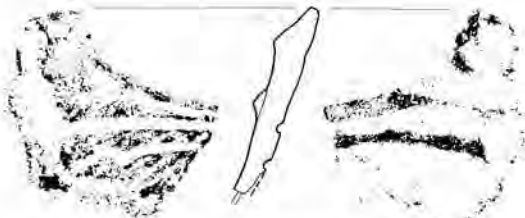
2330(A6区.6-Ⅲ層上部)



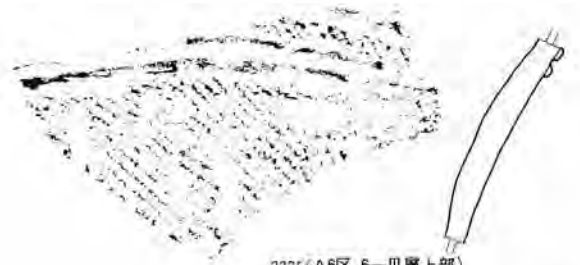
2331(A6区.6-Ⅲ層上部)



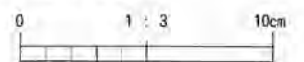
2333(A6区.6-Ⅲ層上部)



2334(A6区.6-Ⅲ層上部)



2335(A6区.6-Ⅲ層上部)



A 6区出土土器

A 6区は6-Ⅲ層以下に遺物包含層が形成されており、6-Ⅲ層上部（6-Ⅲ層を完掘していない）より比較的多くの土器を得ている。

6-Ⅲ層上部出土土器（2321～2358）

施文技法やモチーフから次のグループに分類される。

A類（2321～2327・2329・2330・2333・2335・2336～2342・2344～2346・2351～2357）

2321・2322・2333・2344～2346は大波状口縁を呈する大形のキャリパー形深鉢である。波頂部には小渦巻文や2単位の小渦巻文を連結したものの(2346)を施す。

口縁部文様帯はいずれも隆沈線や平行沈線による横位に展開する施文が認められ、波頂下には、やや大きな渦巻文を配す。上下境界線への連結が弱く開放的な施文となる。

2323～2326・2351～2353は平縁のキャリパー形深鉢である。いずれも隆起線や隆沈線により横方向に展開するモチーフが認められるが、やはり上下境界線との連結が弱く開放的である。

2323・2326は有棘渦巻文を伴う。

2327・2340は体部に強い膨らみを有する深鉢である。

2327は4単位の波頂を持つ大波状口縁を呈する。口縁部文様帯は波頂部の円文とこれらを連絡する隆沈線から成る。頸部文様帯は上部が無文帯、下部が横位の隆沈線と平行沈線がめぐる。体部文様帯は平行沈線により大渦巻文や有棘渦巻文等を施すが、多くの文様要素との連結が無く開放的である。

2336～2337は口縁部の外傾する深鉢で、いずれも大波状口縁となり、波頂部に渦巻文を施す。

2336は頸部文様帯に沈線により波状文を施し、体部文様帯には懸垂文等を施す。

2338は頸部を無文帯とし、体部文様帯には懸垂文等を施す。

2329は浅鉢である。口縁部文様帯に調整された隆起線により楕円形区画文と有棘渦巻文を施す。

2330・2358は鉢形土器である。2330は口縁部から三角形に垂下するモチーフが認められるが棘状文の変化したものであろう。2358は口縁部文様帯に横位の沈線のみを施す。

B類（2328・2331・2334・2343・2347～2360）

2334・2343・2348は大波状口縁を呈する大形のキャリパー形深鉢である。

2343・2348は波頂部にC字形の貼付文と円孔が伴う。口縁部文様帯には、沈線を伴う隆起線により波状に展開するモチーフが認められる。

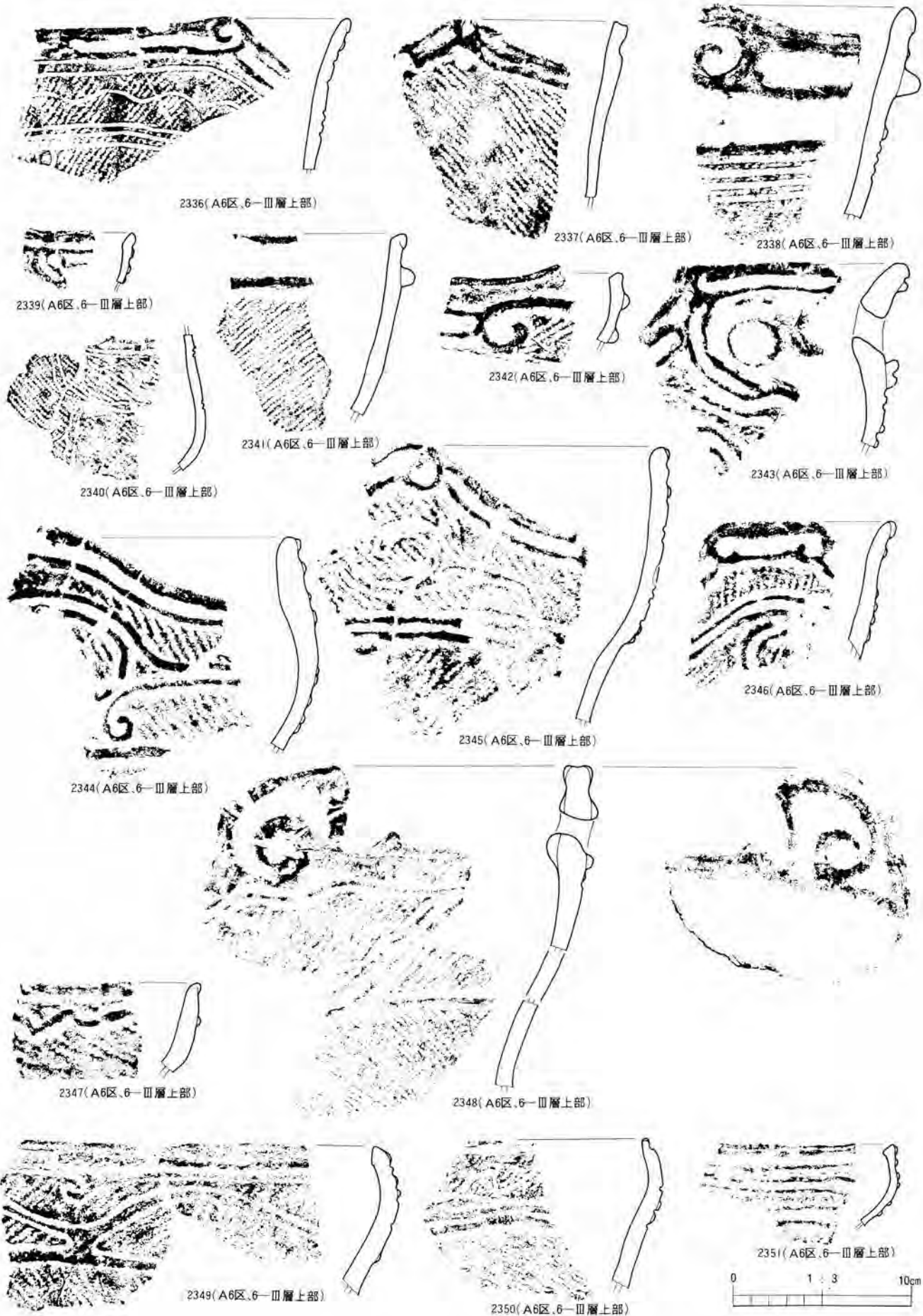
2328・2349・2350は平縁のキャリパー形深鉢である。2328・2349は口縁部文様帯に平行沈線により波状に展開するモチーフを施し、波頭部等には小渦巻文が伴う。

2331・2356は浅鉢である。口縁部文様帯には隆起線による楕円形区画文を施し、体部には沈線による施文が認められる。

2356は原体圧痕により施文される。

I層～II層は比較的新しい時期の堆積層であり詳述を避ける。

以上、6-Ⅲ層上部のA類は大木8 b式の古い段階に伴う。また、B類は大木8 a式の新しい段階に伴う。



第166図 第8次調査区出土遺物 (14)



第167図 第8次調査区出土遺物 (15)



第168図 第8次調査区出土遺物 (16)

B 4 区出土土器

B 4 区も B Ⅲ層以下に遺物包含層が形成されていた。また、B Ⅱ層は他の調査区と異なる堆積層が認められた。

B Ⅲ層出土土器 (2405~2413)

2405は平縁のキャリパー形深鉢である。口縁部文様帯には、平行沈線による波状に展開するモチーフが認められるが、端部を反転させ区画文を作出す。

2406は体部に沈線による施文が認められる。これらは大木 8 a 式に伴う。

2407~2408・2410~2412は原体圧痕により施文されるものである。

2407は口縁部文様帯に横位 3 条の原体圧痕文を施し、大木 7 b 式に伴う。

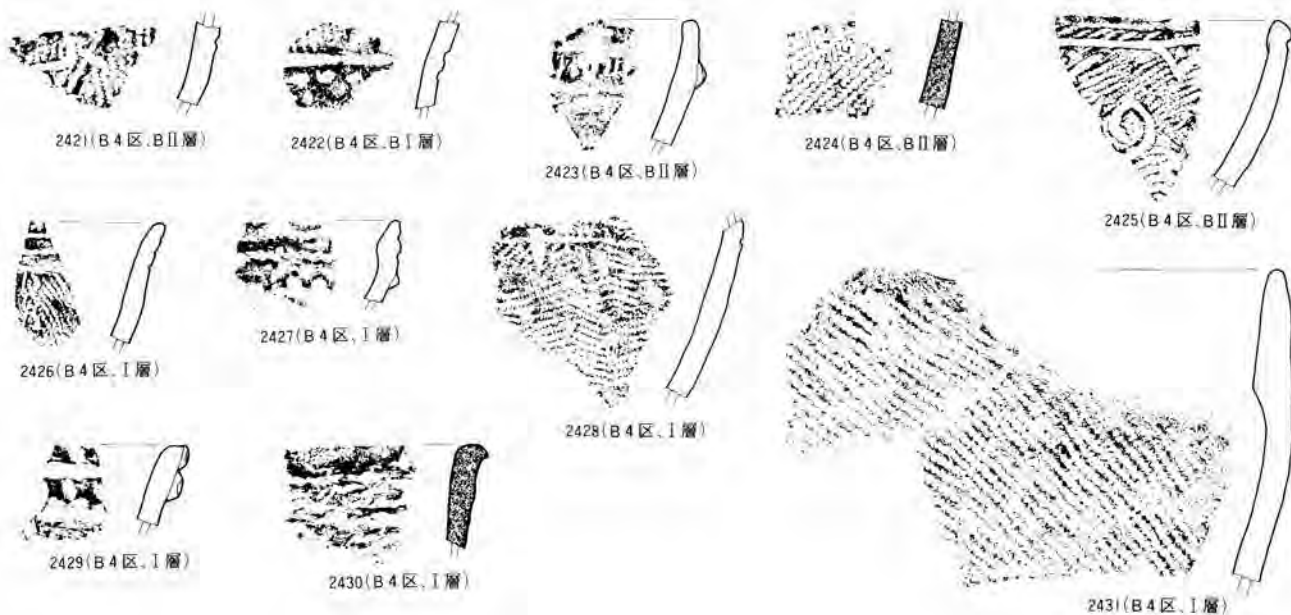
他のものはモチーフが不明であるが大木 7 b 式~大木 8 a 式に伴う。

2413は口縁部の内湾する深鉢であるが、体部に縄文のみを施す。

B Ⅱ層出土土器 (2421・2423~2425)

2421は隆起線と沈線により施文される。2423は隆起線上に刻目を有するものである。2424は胎土に植物繊維を含むものである。2425は沈線により鋸歯状文(?)や渦巻文を施す。

B Ⅱ~Ⅲ層としたもの及び、B Ⅰ層出土土器は詳述を避ける。



② 石器 (第170図～第175図)

北貝塚から出土した石器は大半がⅠ層～Ⅱ層などの遺物包含層以外の層から出土しているので一括して説明する。

2432～2434石錐である。2432は比較的定形的なもので、基部と機能部を明瞭に作り分けている。石錐

2433・2434は不定形剥片を素材とし、側縁部から先端部にかけて調整し、先端部を機能部としている。

2435～2437は石槍である。2435は木の葉形を呈するもので、2436は柳葉形を呈するものの基部である。2437は大略三角形を呈し、各辺に膨らみを有する。石槍

2438～2447は石鏃である。2438・2439は有柄である。2438の基部にはアスファルト状の付着物が認められる。石鏃

2440～2447は無柄で、2440～2445が凹基、2446が平基、2447が凸基である。いずれも三角形を基調とする。

2448～2451は縦形石匙であるが、形態は一樣ではない。側縁部を機能部とするようである。

2452はピエス・エスキューイである。やや肉厚であるが上下両方向からの加撃により剥離している。ピエス・エスキューイ

2453・2454は不定形剥片を素材とする搔器で、下辺部に鈍い角度の刃部を持つ。搔器

2455・2456は不定形剥片を素材とする削器で、側縁部に鋭い角度の刃部を持つ。削器

2457は断面六角形の水晶の先端部を打撃し剥離させた後に、下端に小剥離を施すものである。水晶

2458は黒耀石であり、正面に自然面を残す。推定される原石の直径は3～4 cm程であるが、こうしたものを母岩として剥片を得ていたものと思われる。黒耀石

2459～2463は磨製石斧である。2459・2460・2462は比較的緻密な石材を用い、良く研磨されるものである。いずれも欠損後の剥離が認められる。磨製石斧

2461・2463はやや粗い石材を用いるもので、全面に成形時の敲打痕が認められる。

2464・2465は打製石斧である。2465は比較的定形的なもので、背面に大きく自然面を残し、側縁部から先端部にかけて片刃の刃部を有する。先端部には使用時のものと思われる敲打痕が伴う。打製石斧

2464は扁平円礫の3側縁を調整し両刃の刃部を作出す。

2466～2470は敲打磨石である。2466・2467・2470は断面三角形の自然礫の側縁を機能磨面とする。2469は扁平な自然礫を使用するもので、機能磨面に隣接して調整磨面が伴う。敲打磨石

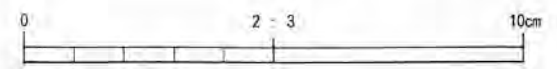
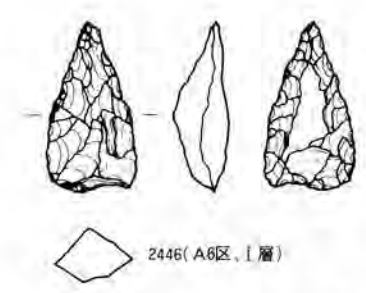
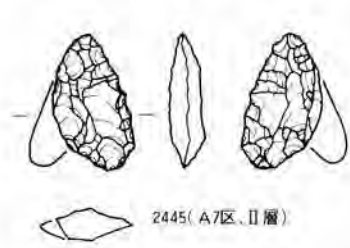
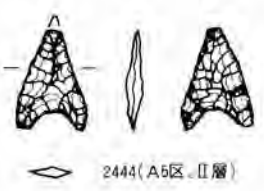
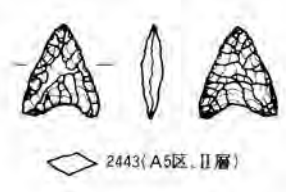
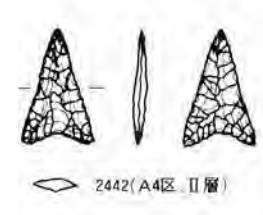
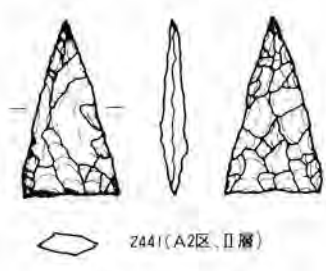
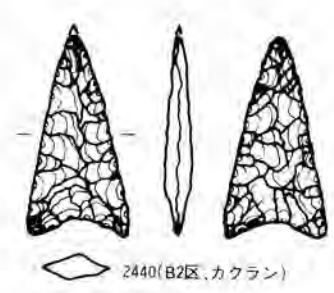
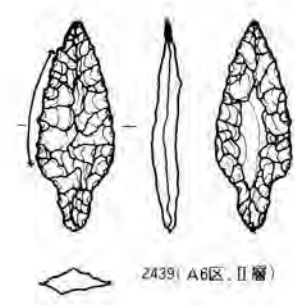
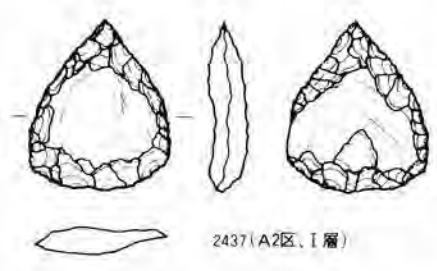
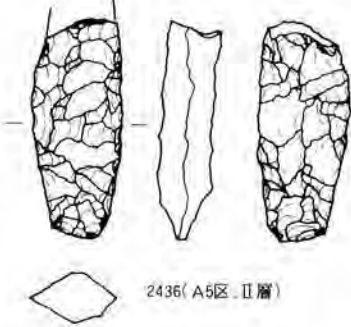
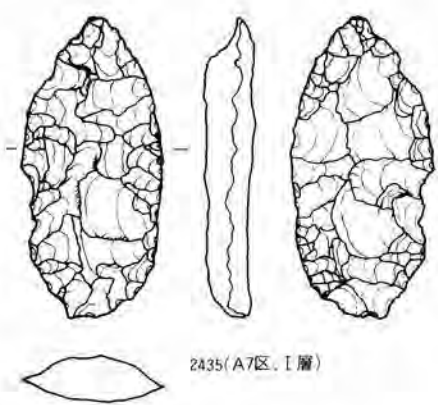
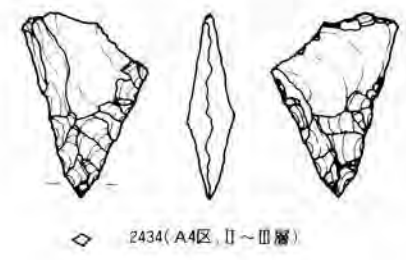
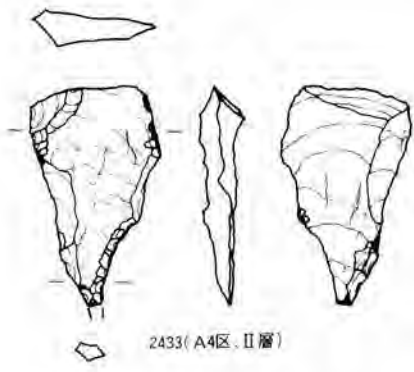
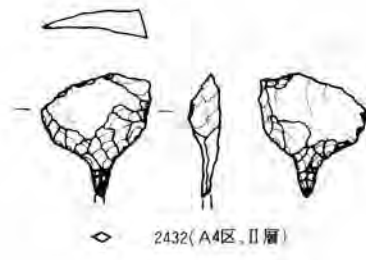
2471～2476は敲石である。2471はやや厚みのある縦長の礫を使用するもので、ほぼ全面にわたり敲打痕が認められるが、特に側縁部が中心となるようである。敲石

2473は下端部を使用するものである。

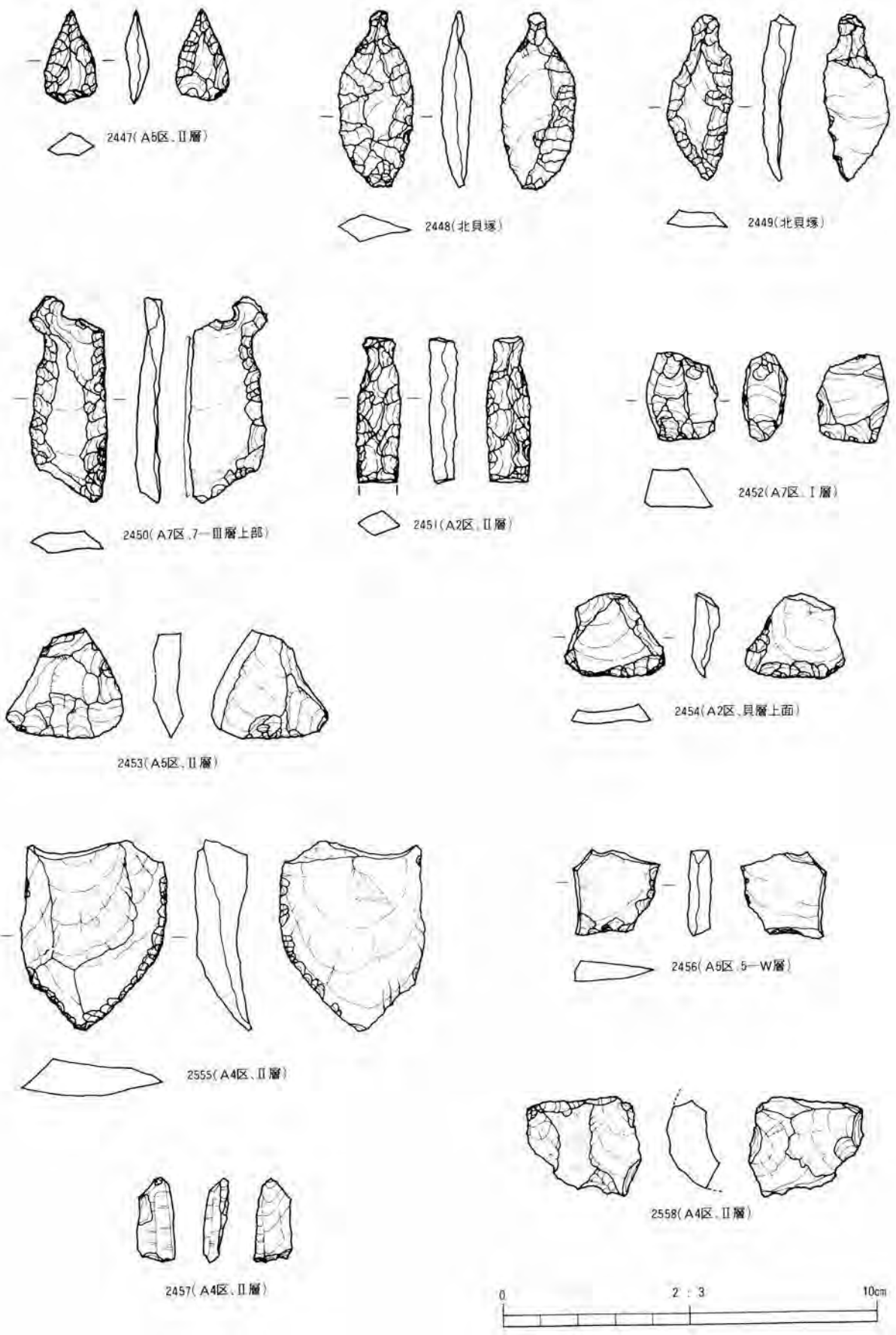
他のものは、扁平円礫の周辺を使用する。

2477・2478は凹石である。2478は良く使い込まれており播鉢状の深い使用跡を有する。2477は使用痕がやや浅く散漫であり、別器種かもしれない。凹石

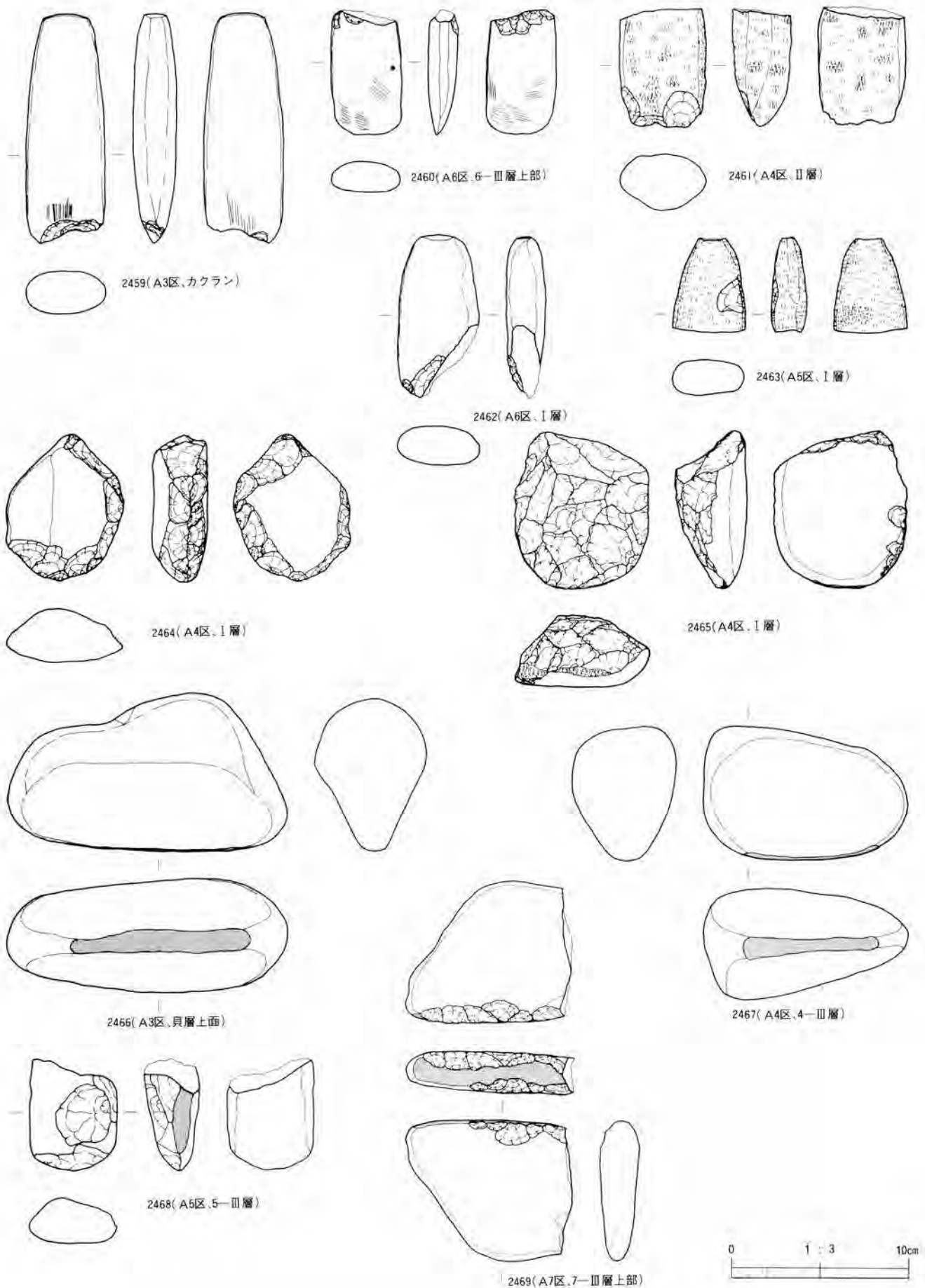
2479～2481・2483・2484は石皿である。いずれも欠損しているが、明瞭な縁を有するものは無い。石皿



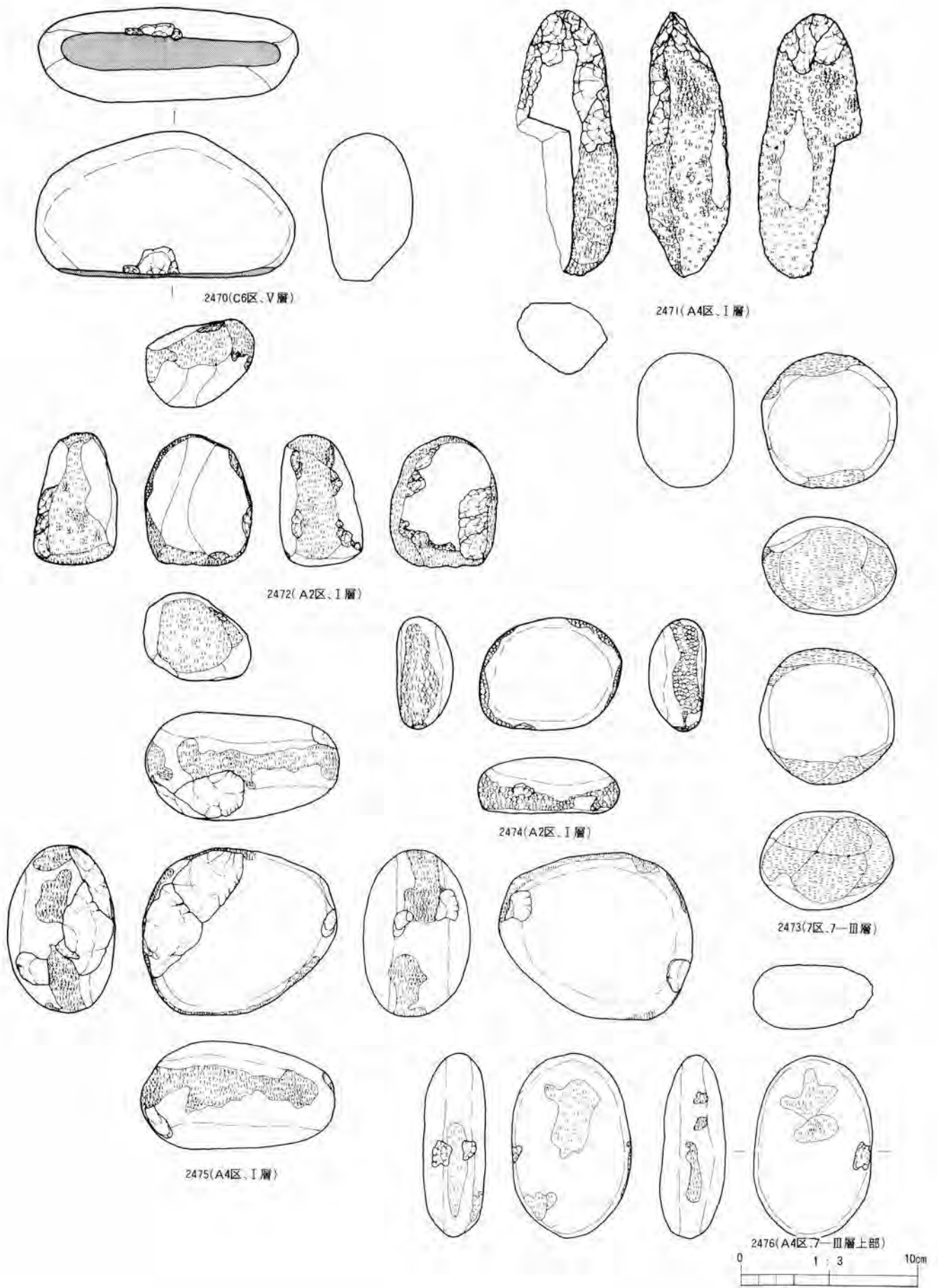
第170図 第8次調査区出土遺物 (18)



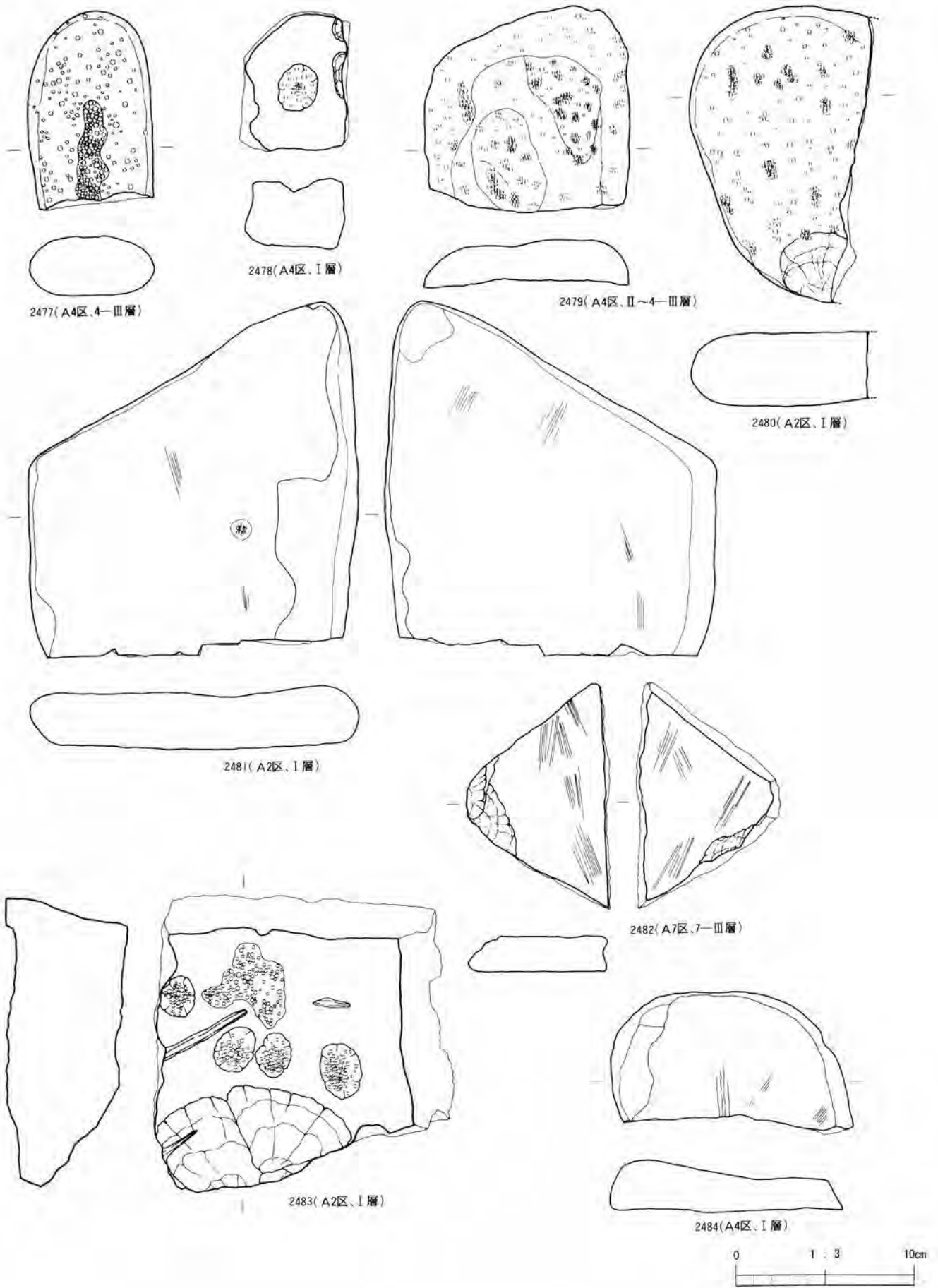
第171図 第8次調査区出土遺物 (19)



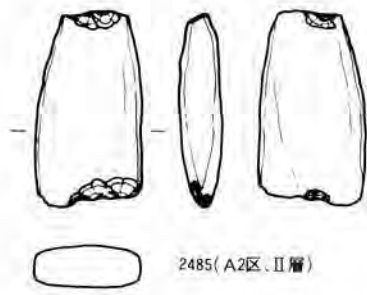
第172図 第8次調査区出土遺物 (20)



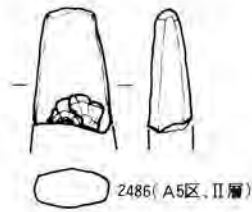
第173図 第8次調査区出土遺物 (21)



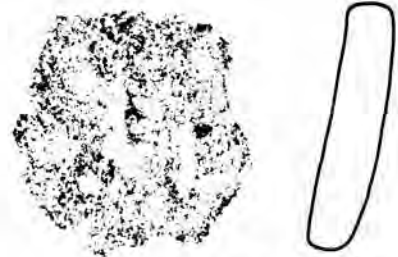
第174図 第8次調査区出土遺物 (22)



2485(A2区、II層)



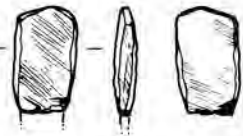
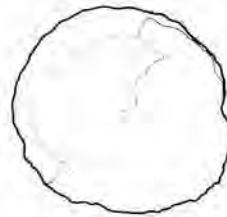
2486(A5区、II層)



2487(A7区、II層)



2488(A5区、II層)



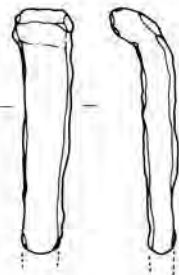
2492(A4区、II層)



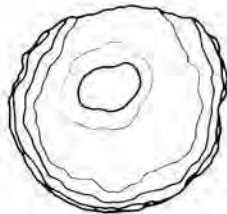
2489(A4区、II層)



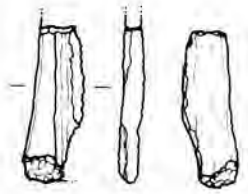
2489(A4区、II層)



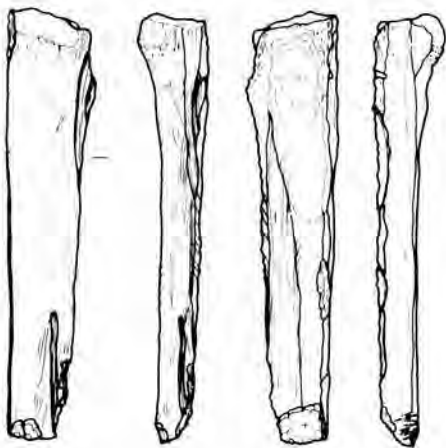
2490(A5区、II層)



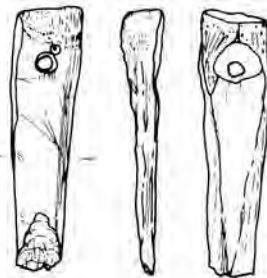
2491(A3区(SE)カクラン内)



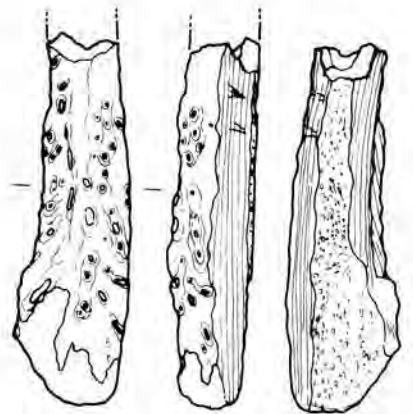
2493(A3区、クリーニング)



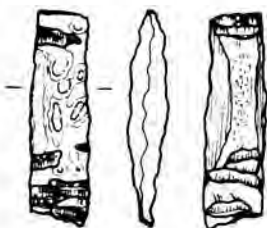
2494(A3区、貝層上面)



2495(A3区、カクラン)



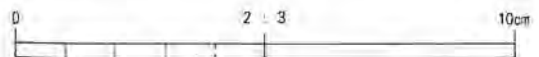
2496(2区、I層)



2497(A3区、貝層上面)



2498(A3区、貝層上面)



2483は凹状の使用痕が認められる。

2482は砥石であり、両面ともに使用時の擦痕が観察される。

③ 土製品・石製品（第175図）

2487は円盤状土製品である。

2491はキノコ形土製品である。傘は低い山形を呈し、柄はかなり短い。

2485・2486は小形の磨製石斧である。

④ 骨角器（第175図）

2494は骨ペラである。シカの左中足骨を4分割したものの前面左側を使用する。近位端を基部とし、遠位端は落してある。先端部に横方向の使用跡が認められる。

2495は骨針である。シカの右中手骨を4分割したものの前面右側を使用する。近位端を基部とし、基部上端に貫通孔を穿つ。先端部を欠くが丁寧に調整されている。

2492は小形で板状のものである。これ自体で機能したとは考えられず、何かの基部か、小さな製品作成時の際につまみとして残した後に折り取って本体を整形したものかと思われる。

他のものは鹿角等に加工痕を有するものである。

また、この外に第3次調査時に北貝塚から表面採集したものを第176図に図示したが、これ以外に2501に類似するものの小片1点とチヂミボラを穿孔した垂飾品と思われるものを採集している。

2499はシカの左側中足骨を使用する骨ペラで、素材を前後・左右に四分割したものの前面左側を使用している。素材の打割はクサビ状の工具を使用しているものと思われ剥離跡が観察される。近位端を基部とし、遠位端を刃部としているが、刃部はやや厚く両刃となる。刃部付近は丁寧に調整されており、また使用痕と思われる横方向の細かい線條痕が多数観察される。側縁の調整は粗雑である。

2500は鹿角製の角ペラであるが基部を欠損するために全体の形状は不明である。海綿体部分を除去し緻密質部分のみとした鹿角を内外両面から擦り切っている。器体部への整形はほとんど行われていない。先端部には弧状の刃部があり使用痕と思われる細かい線條痕が観察される。

刃部の調整は両面から成されているが、内面からの調整が強く片刃状を呈している。

2501は半分以上を欠くため全体の形状が不明であるが、鹿角製の叉状角製品である。外面は良く研磨されており非常に丁寧に作りであり、内面は海綿体部分がくり抜かれている。端部は幅1.5cmをタガ状に削り残し、器体部に沈線を施す。また、実測図左側に2個の貫通孔、右側に1個の貫通孔と径1.7cmほどの大きな孔が穿たれている。

⑤ 動物遺存体

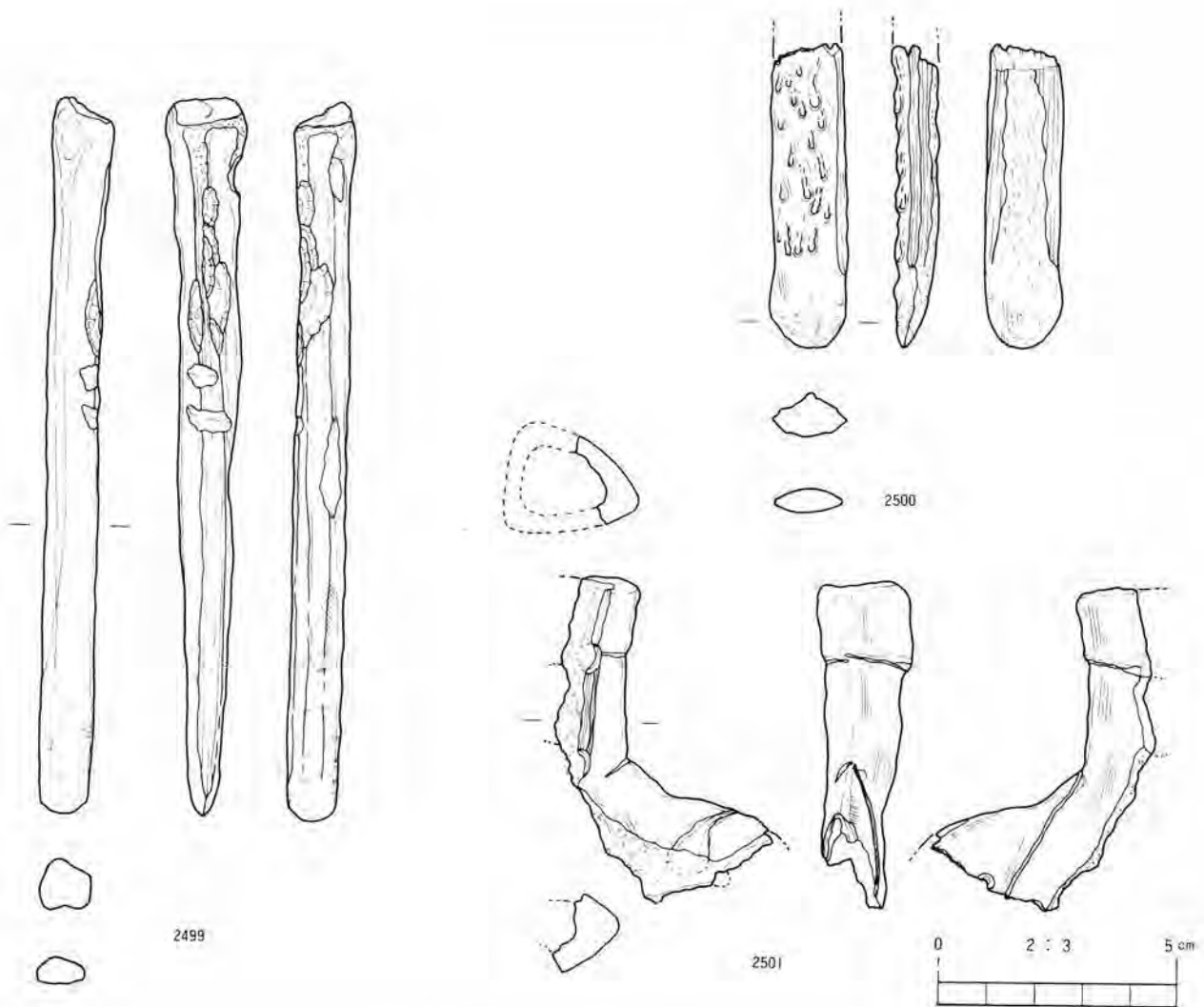
貝層の周辺部より出土した動物遺存体は、後世の攪乱により貝層から遊離しⅠ層～Ⅱ層中に混在したものと、貝層上面に掘られた攪乱穴から出土したもの、および貝層上面のクリーニング中に得られたものを一括した。従って貝層本来の構成物を網羅しているとはいえない。

貝類（腹足綱・二枚貝綱）

貝層を構成する基本的な種はイガイ・ムラサキインコガイ・マガキなどの岩礫性二枚貝類であるが、サンプリング資料では圧倒的にムラサキインコガイが多い。しかし、これらに伴ってわずかではあるが砂泥底性のアサリ・オオノガイ・シオサザナミガイ科や砂底性のコタマガイが出土している。シオサザナミガイ科としたものはNuttallia属でイソシジミと思われる。また、ムラサキインコガイの足糸に付着するチリハギガイもわずかではあるが出土している。

腹足綱は表採資料には比較的多かったもののサンプリング資料ではさほど多くなかった。最も多い種はチヂミボラで、エゾチヂミボラとタマキビがこれに続き、クボガイ亜科やレイシガイ・イボニシなどは極端に少なくなる。クボガイ亜科としたものはクボガイやコシダカガンガラなどであるが、いずれも殻頂部のみで種までは同定できなかった。これらはいずれも岩礫性巻貝である。

これらのほかに微小な陸産巻貝類がサンプリング資料から多数検出されている。パツラマイマイが、圧倒的に多く、ナタネガイ科・オオコハクガイ・ベッコウマイマイ科、ホソオカチョウジガイなどが続く。表土のサンプリング資料であるため現生種が混入している可能性がある。



第176図 北貝塚出土遺物（骨角器表採資料）

骨種	マイロン		カウチ		サス		フリ		アス		マ		イ		フサカサ		アイ		カ			
	椎骨	肋骨	胸椎	腰椎	尾椎	頸椎	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上
(A1区)	1層				1																	
(A2区)	1層				1																	
貝層上面サンプリング5mmメッシュ					2																	
※ 1mmメッシュ					1																	
(A3区) 貝層~貝層上面	1	6	8	9	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	2
貝層上面サンプリング5mmメッシュ					1																	
※ 1mmメッシュ					1																	
カタラシ貝層サンプリング5mmメッシュ					2	4	6	6	1	1												
※ 1mmメッシュ					1	7	10	2	1	1												
(A4区) 1層																						
2層																						
(B1区) 1層																						
2層																						
貝層上面																						
貝層上面サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
(B2区) 1層																						
2層																						
貝層上面サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
北貝塚表面採集																						

第47表 第8次調査区出土魚類集計表

骨種	カウチ		サス		フリ		アス		マ		イ		フサカサ		アイ		カ					
	椎骨	肋骨	胸椎	腰椎	尾椎	頸椎	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上	前上	後上				
(A1区) 1層																						
(A2区) 1層																						
貝層上面サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
(A3区) 貝層~貝層上面																						
貝層上面サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
カタラシ貝層サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
(A4区) 1層																						
2層																						
(B1区) 1層																						
2層																						
貝層上面																						
貝層上面サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
(B2区) 1層																						
2層																						
貝層上面サンプリング5mmメッシュ																						
※ 1mmメッシュ																						
北貝塚表面採集																						

第48表 第8次調査区出土爬虫類・哺乳類集計表

b) 第5次調査区(第177図～第179図)

北貝塚における遺物包含層や貝層の有り方を探るために斜面ほぼ中央に3m×6mの調査区を設定した。前述した第8次調査区の西側に位置する。

表土(I層)直下が遺物包含層となるが、検出面での肉眼による観察では動物遺存体の集積はみられなかった。経済的、時間的な制約から調査区北西隅に検出した最上層(N1層)から4層を掘り上げたのみで調査を中止した。尚、掘り上げた土壌はすべて持ち帰り1mmメッシュでの水洗選別を実施している。

i) 基本層序(第178図)

N₁層 やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、シルト質の褐色土塊を多く含むほか、暗褐色土塊を含む。また、少量の炭化物粒や骨片などを含む。やや柔らかく、しまりは中程度である。掘り上げた土の総重量は70,120g、総体積は81,300ccである。

N₂層 暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊を多く含むほか、褐色土塊を少量含む。また多量の炭化物粒と少量の骨片などを含む。やや柔らかくややしまりが無い。掘り上げた土の総重量は57,900g、総体積は72,650ccである。

N₃層 上層より明るい暗褐色粘質土を基本土とし、黒褐色土塊・暗褐色土塊・褐色土塊などを多く含む。また、少量の炭化物粒や骨片などを含む。やや柔らかくややしまりが無い。掘り上げた土の総重量は68,590g、総体積は88,340ccである。

N₄層 褐色粘質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊や暗褐色土塊を含む。また少量の骨片を含むものの炭化物粒は含まない。固さしまりともに中程度である。掘り上げた土の総重量は29,590g、総体積は35,700ccである。

また、N₅層は検出のみに留めたが、暗褐色粘質土を基本土とし、やや広範囲に堆積する層のようである。

ii) 出土遺物(第180図～第183図)

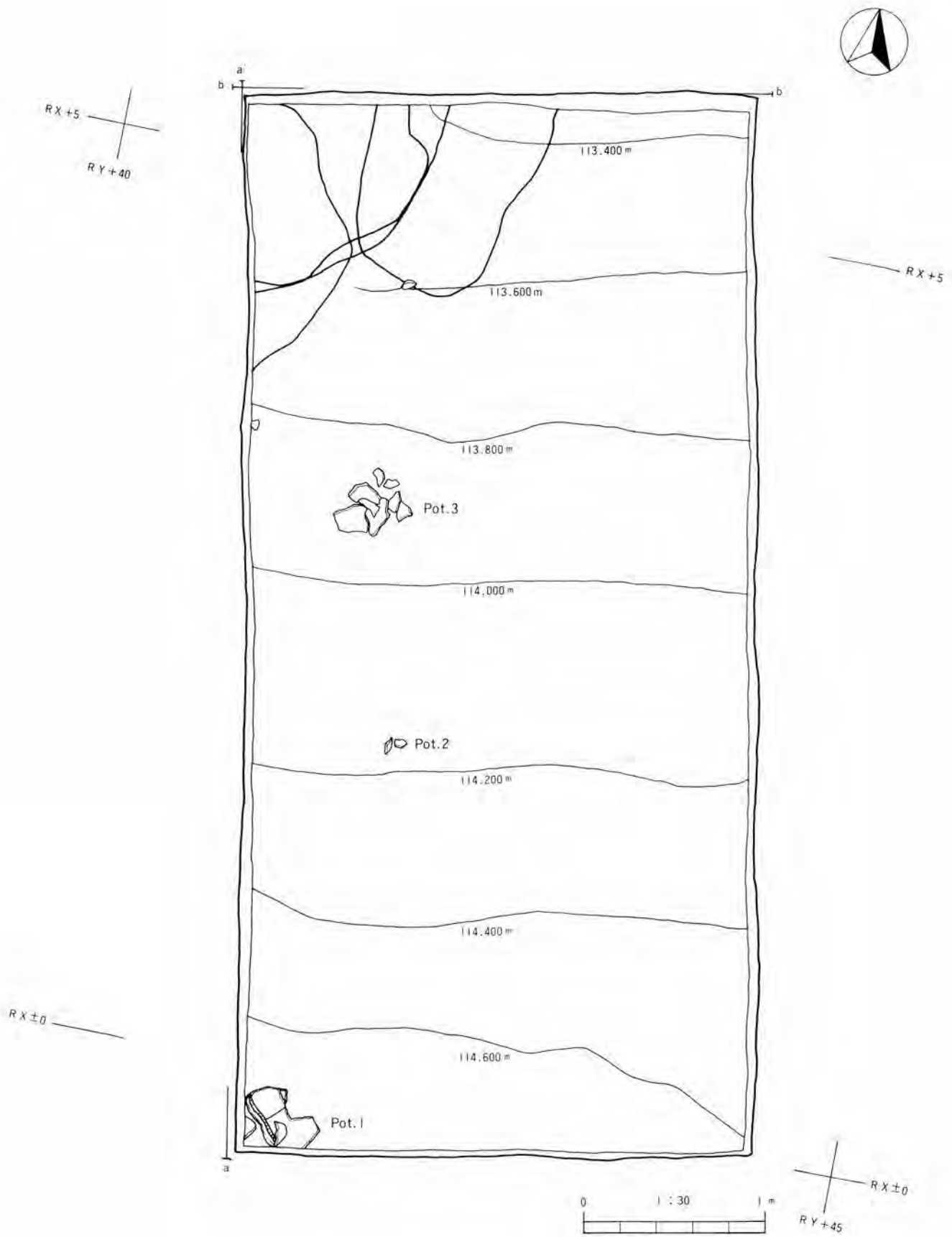
① 土器

N₄層から出土した土器は2503である。体部に膨らみを有する深鉢で、口縁部はやや外反する。頸部に横位3条の縄文原体圧痕文を施す。体部にはL-R単節斜縄文を横方向に回転するが、最上位のものは斜方向に回転させ、上記の原体圧痕文とともに装飾的效果をねらっている。大木7b式に伴う。

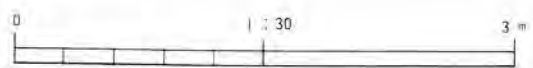
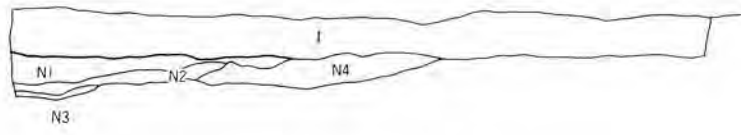
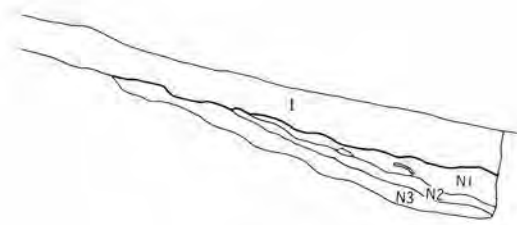
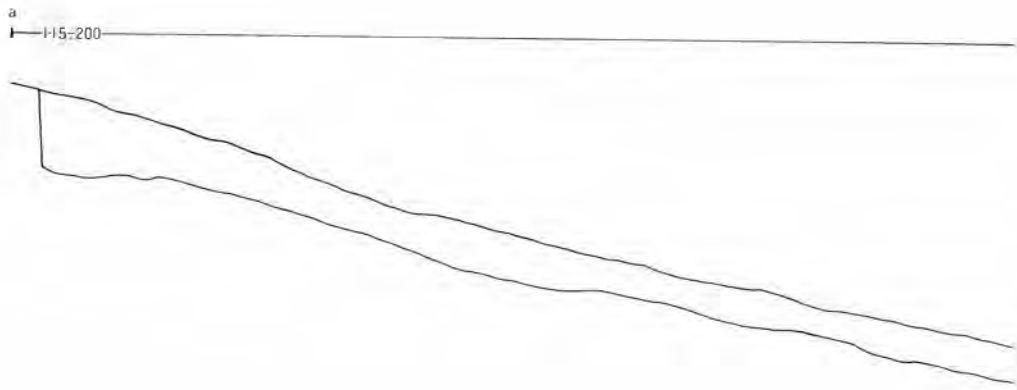
N₃層から出土したものは2505・2506で、いずれも体部破片である。2505は結節された原体を施し、2506は木目状撚糸文を施す。

N₂層から出土したものは2507～2512である。2507は几形を呈する把手の破片で中央部に円孔(すかし)を穿つ。頂部には横位3条の縄文原体圧痕文を施す。また、円孔の下部には同様

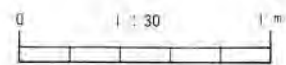
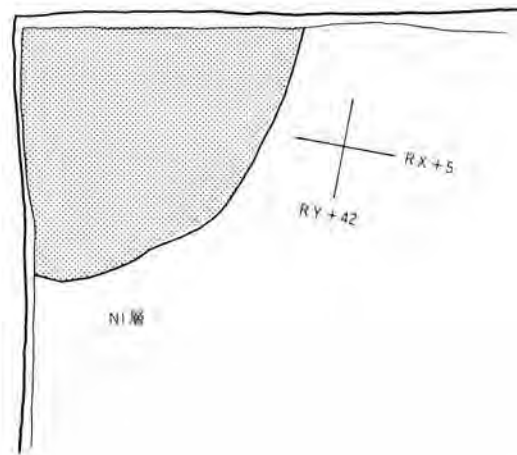
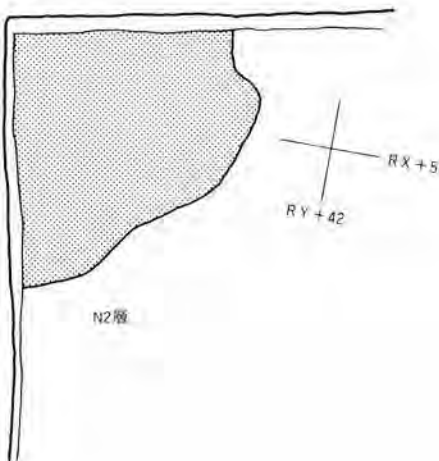
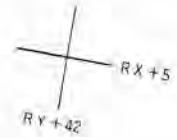
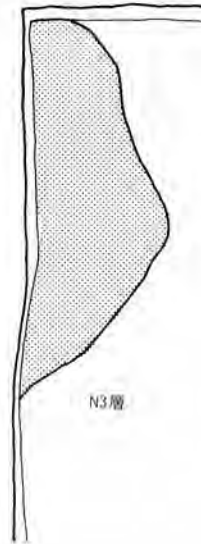
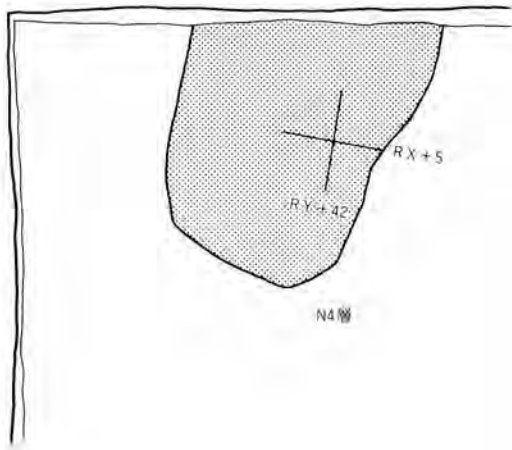
第Ⅶ群



第177図 第5次調査区設定図



第178図 第5次調査区土層断面図



第179図 第5次調査区堆積層平面図

技法による連続した円文あるいは弧状文が施される。2508も縄文原体圧痕による連続した弧状文を施す。これらは大木7b式に伴う。2510は沈線による鋸歯状文や渦巻文等を施し、一部に竹管による連続刺突文が伴う。大木7a式に伴う。

2509は隆帯状に縄文原体圧痕を施すもので、円筒上層B式に伴う。

2511は撚糸文を施すものである。2512は胎土に植物繊維を含むもので、口唇部に楕円形の圧痕を連続させる。体部には地文のみを施す。大木1式に相当する。

N1層から出土したものは2513～2519である。2513は口縁部文様帯に横位4条の縄文原体圧痕と同様技法による連続した弧状文を施すが、途中に隆起線による渦巻文等を配し、文様帯を区画している。2515は隆起線により楕円形に分割された文様帯内に横位2条の縄文原体圧痕を施す。これらも大木7b式に伴うが下層のものよりやや新しい可能性がある。

2516～2518はやや幅の広い沈線により施文されるものもある。2519は几形の把手で、下端に2条の縄文原体圧痕文を施す。2514は口縁部に蛇行する隆帯を配し、この上に縄文原体圧痕文を刻目状に施すものである。これらはいずれも大木7b式の新しい部分に伴うものと思われる。

検出面から出土したものは2502・2504・2520～2531である。2502・2504・2520・2524はそれぞれpot.1～3としたもので、本来は遺物包含層に包まれるものである。他のものは一部表土層（I層）のものを含んでいる可能性がある。

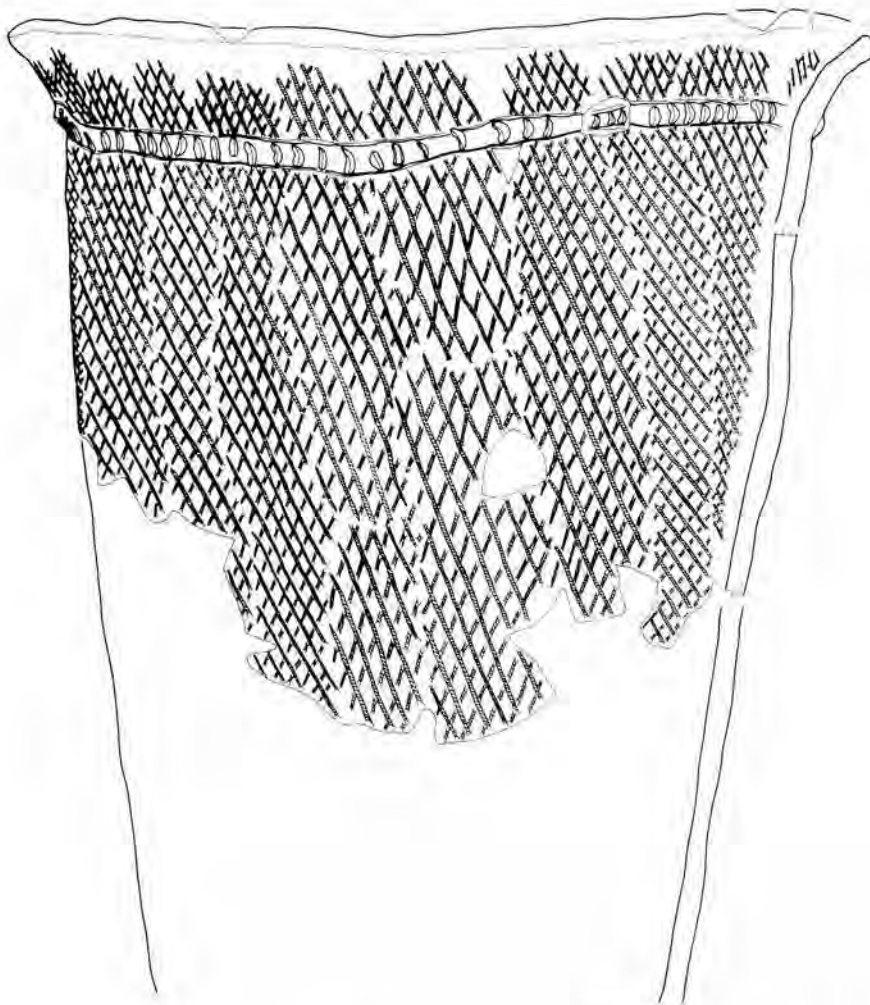
2502は調査区南西隅に検出したものである（pot.1）。口縁部のやや外反する大形の深鉢で、頸部に横位の隆帯をめぐらせ、この上に円形～楕円形の連続刺突が伴う。口縁部から体部にかけて地文として網目状撚糸文を施す。2524は1に伴い出土したもので、口縁部を複合口縁とする。口縁部上端には隆帯を施す。2524は大木7a式に伴う。2502は前期に伴うものかと思われる。

2504は調査区中央よりやや北寄りに検出した（pot.2）。口縁部のやや外反する深鉢で、体部にL-R単節斜縄文を横方向に回転する。一部にケズリ状の痕跡が見られるものの器面調整ではないと思われる。

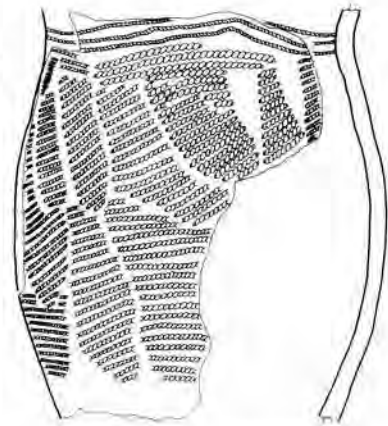
2520は調査区中央よりやや北側に検出した（pot.3）。体部下半に膨らみを持つ深鉢で、地文としてL-R単節斜縄文を縦方向に回転する。

2521は隆沈線により施文されるもので、大木8b式に伴う。2522・2523は2524に類似するもので大木7a式に伴う。2525は把手部の破片で、口唇部に楕円形の圧痕を施し、口縁部に隆起線による施文がみられる。大木7a式～大木7b式に伴うものかと思われる。2527は隆帯上(?)に沈線を施文するもので、前期後半に伴うものであろう。2528はS字状連鎖沈文を施すもので大木2b式に伴うものと思われる。2529・2530は胎土に植物繊維を含む。2529は口唇部に円形の連続刺突文が施される。いずれも大木1式に伴う。

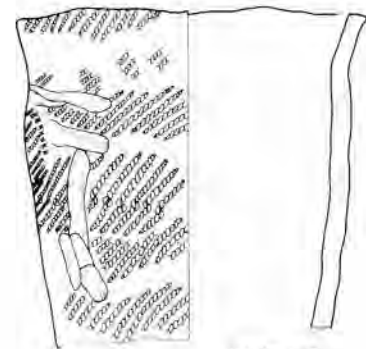
表土層（I層）から出土したものは2532～2541である。2532は隆沈線により渦巻文等を施すが、沈線部の幅が広く磨消的となる。大木9式に伴うものであろう。2533～2536は隆沈線や沈線により施文されるもので大木8b式に伴う。2538は把手部破片でやや複雑な構成となる。2539は波頂部破片で隆帯や沈線で施文される。2540は口縁部を肥厚させ、この下位に沈線による楕円形文などを施す。2538～2540は大木7b式～大木8a式に伴うものであろう。2541は2524などに類似し、大木7a式に伴う。



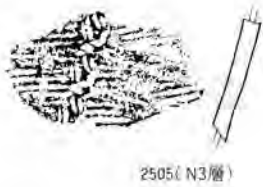
2502(Pot.1)



2503(N4層)



2504(Pot.2)



2505(N3層)



2506(N3層)



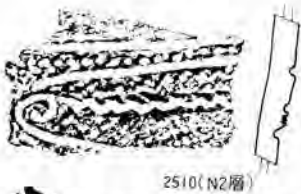
2507(N2層)



2508(N2層)



2509(N2層)



2510(N2層)



2511(N2層)



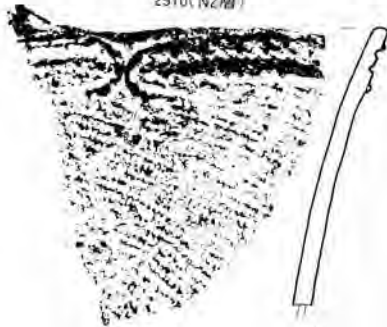
2512(N2層)



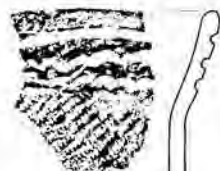
2513(N1層)



2514(N1層)



2515(N1層)



2516(N1層)



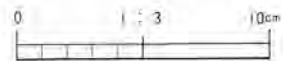
2517(N1層)



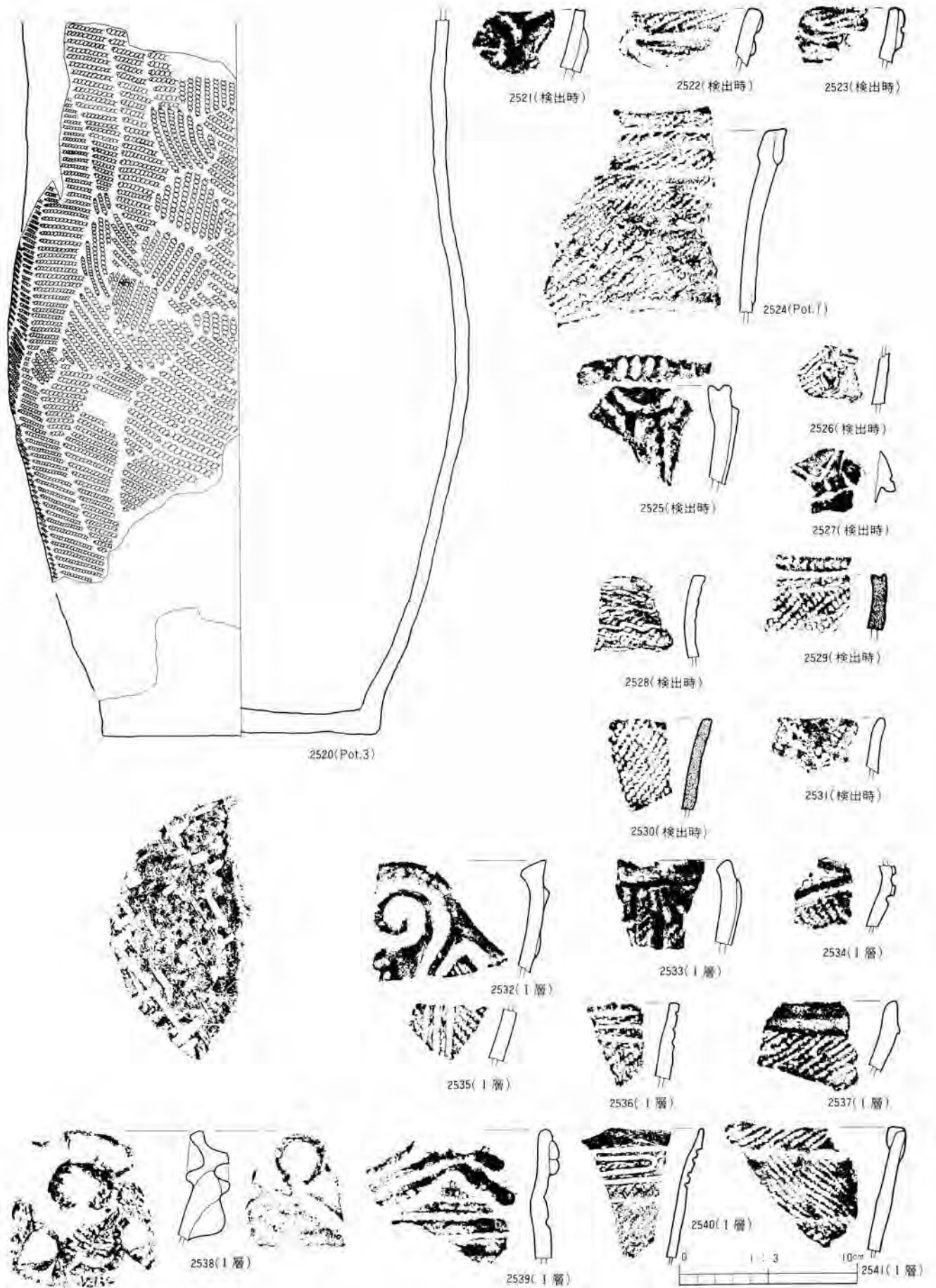
2519(N1層)



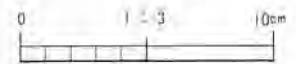
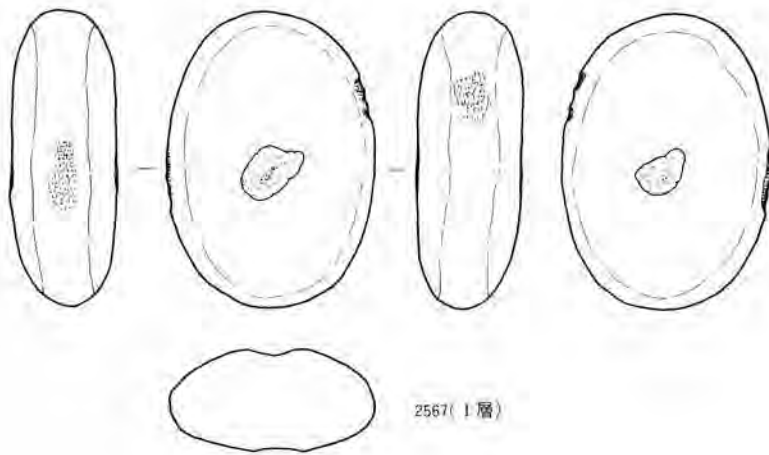
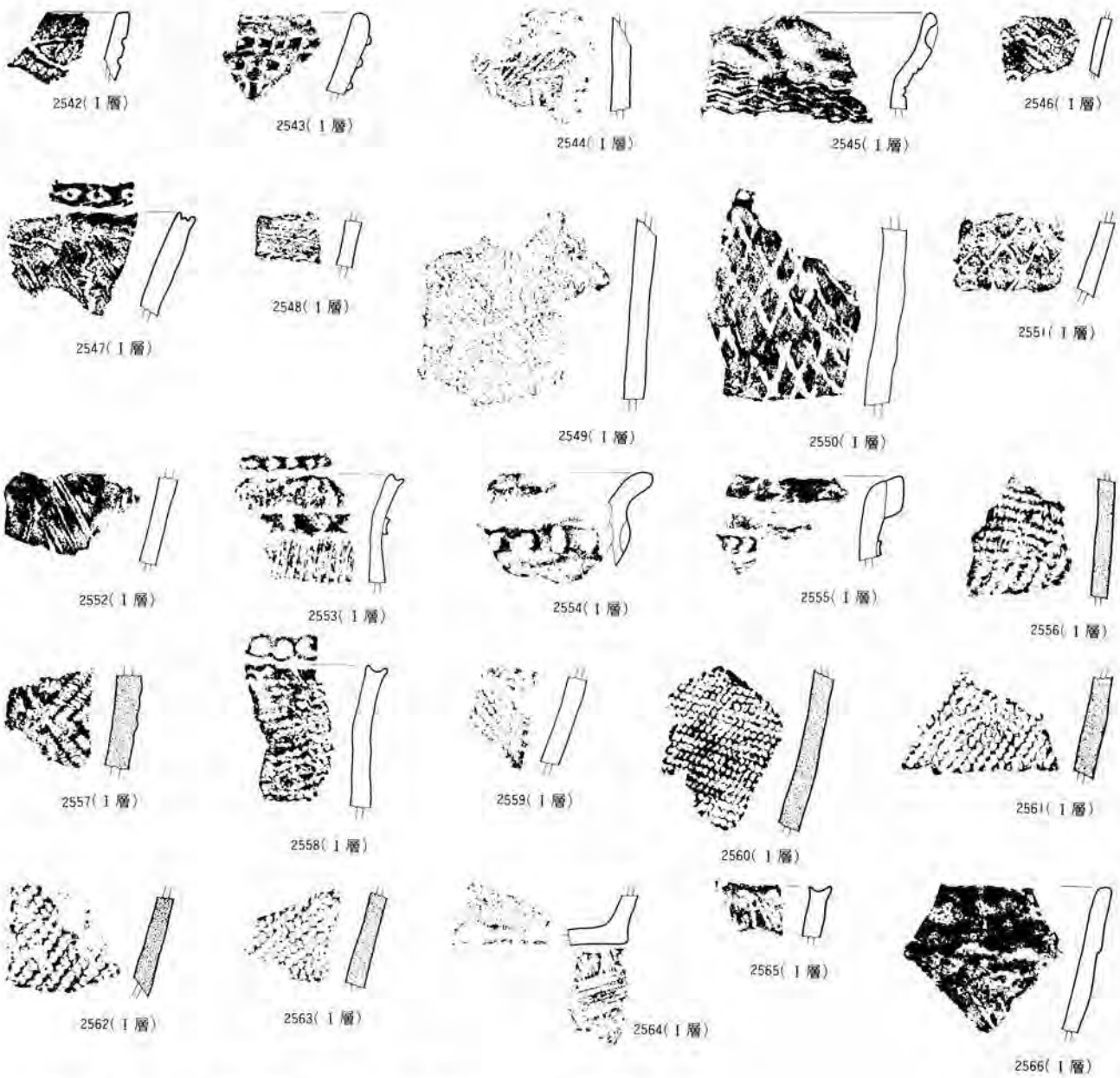
2518(N1層)



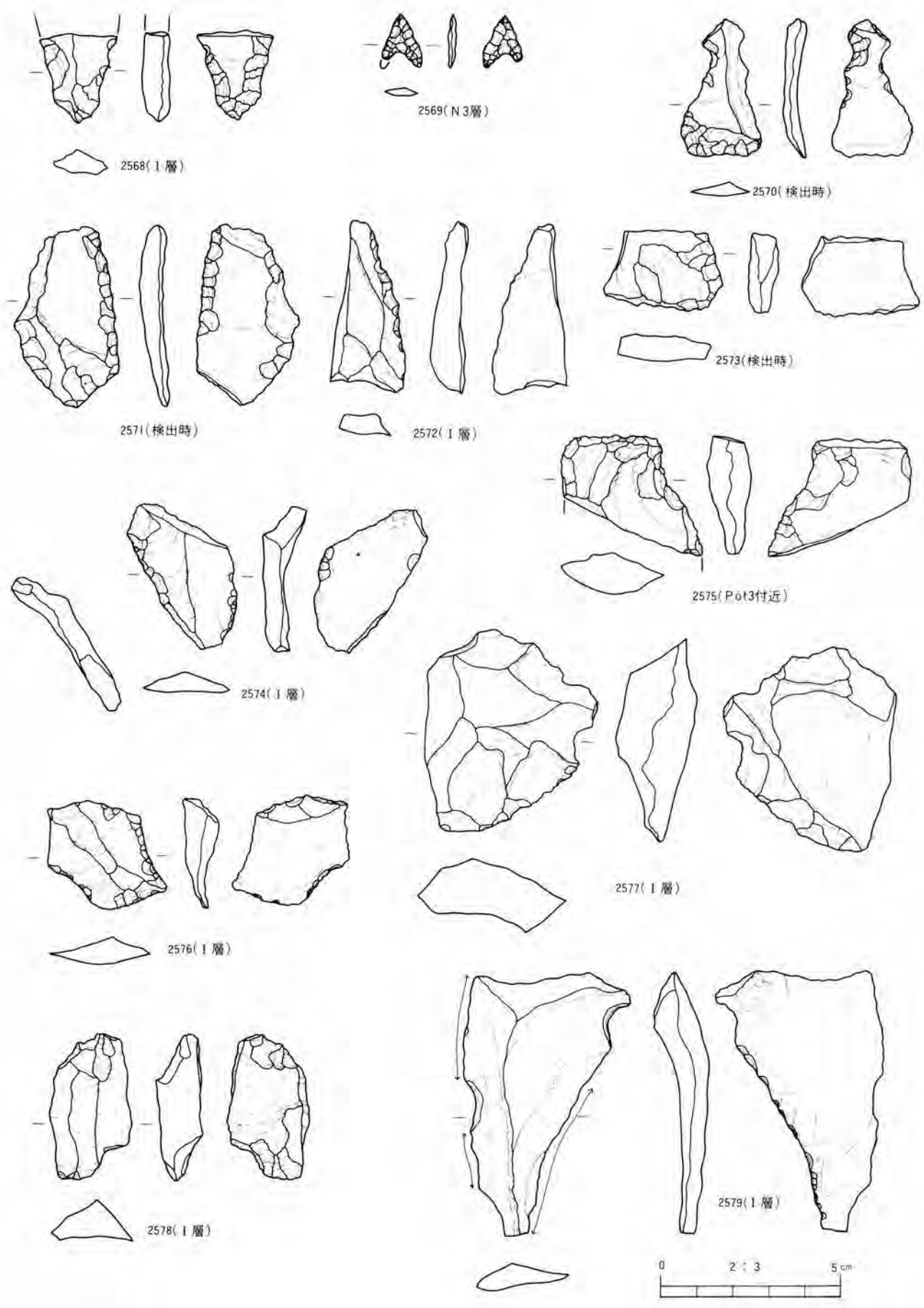
第180図 第5次調査区出土遺物 (1)



第181図 第5次調査区出土遺物 (2)



第182図 第5次調査区出土遺物 (3)



第183図 第5次調査区出土遺物 (4)

2542～2563は前期に伴うと思われるものである。2542～2555は大木2 b式以降に伴うものであろう。

一方、2556～2563は大木1式に伴うと思われるものである。2564～2566は所属時期が不明である。

② 石器

- 石鏃 2569は無柄凹基の石鏃である。
- 石匙 2570は石匙と思われる。つまみ部の作り出しは粗雑である。下辺の刃部は片面からのみ調整され、搔器様となる。
- 削器 2568・2571・2572・2574～2576は削器で、側縁部に刃部を有している。2571は両面から調整されるが、一部に自然面を残す。2572は片面のみ調整するために刃部角度は搔器的となる。2568は石槍の基部破片の可能性も考えられるが、やや調整が粗雑であり削器とした。
- 搔器 2573は側縁部を片面からのみ調整するもので、鈍い角度の刃部を有するために搔器と思われる。但し、通常調整される面とは逆の面を調整している。
2577は両面をやや大き目の剥離にて調整するもので、側縁部に鈍い角度の刃部を有している。
- ピエス・エスキューイ 2578はやや大形ではあるが、上下両方向からの加撃による剥離がみられ、ピエス・エスキューイと思われる。リングの間隔はややつまっている。
- 使用痕のある剥片 2579は使用痕のある剥片で、両側縁に使用時のものと思われる微細な剥離がみられる。
- 凹石 2567は凹石で、楕円形扁平礫を素材とする。両方の平坦面に凹石としての使用痕がみられ、両側縁には敲打痕がみられる。

③ 動物遺存体

前述したようにN₁～N₄層中には少量の骨片が含まれ、焼成を受けたものが比較的多く目についた。同定された種はわずかで、いずれも魚類である。但し、これらに伴って獣骨片も若干出土している。

	総重量 (g)	総体積 (cc)	板鰓亜綱 遊離歯	マイワシ 尾椎骨	サケ科の一種 椎骨	カツオ 尾椎骨	サバ属 尾椎骨	タイ類 遊離歯	アイナメ属 尾椎骨	カレイ科の一種 尾椎骨
N 1 層	70,120	81,300	5	0	1	0	1	33	0	0
N 2 層	57,900	72,650	12	0	0	1	0	25	1	1
N 3 層	68,590	88,340	15	1	0	0	0	30	0	0
N 4 層	29,590	35,700	0	0	0	0	0	4	0	0

第50表 第5次調査区出土魚類集計表

c) 第7次調査区 (第185図)

北貝塚西端部にて地形に合わせて東西2本のトレンチを設定した。それぞれEトレンチ、W

トレンチと呼称する。

i) 基本層序 (第185図)

本調査区内に堆積する土層はⅠ層・Ⅱ層・Ⅲ層・Ⅳ層・Ⅴ層に大別される。

Ⅰ層は表土層で、暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。やや柔らかくややしまりがない。

Ⅱ層は2層に細分される。Ⅱa層は、ややシルト質の褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を少量含む。柔らかくしまりがない。Eトレンチにのみ堆積する。Ⅱb層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などを少量含む。柔らかくややしまりがない。Wトレンチのみに堆積する。

Ⅲ層は黒褐色粘質土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。やや柔らかくしまりがない。遺物包含層でEトレンチにのみ堆積する。

Ⅳ層は、やや明るい暗褐色粘質土を基本土とし、褐色土塊などをやや多く含む。固さ、しまり具合ともに中程度である。下面は層へ漸移的に移行する漸移層である。

Ⅴ層は地山層で、ややシルト質の褐色土を基本土とする。

ii) 出土遺物 (第184図)

① 土器

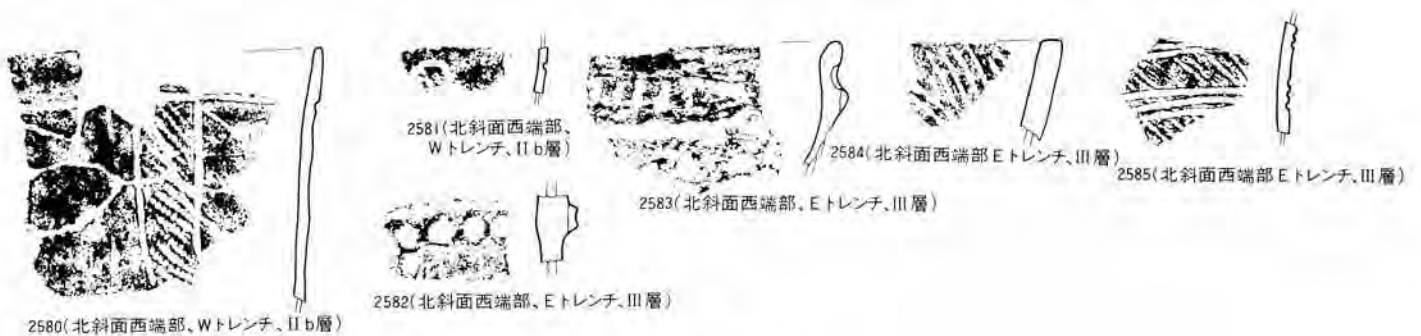
本調査区内で遺構は検出されなかった。出土遺物は、EトレンチのⅢ層から若干の土器片が出土したほか、WトレンチのⅡb層からもわずかに土器片が出土している。

2580・2581はWトレンチのⅡb層から出土したもので、いずれも磨消技法により施文される。2580は口縁部がほぼ直立する深鉢で、口縁部を無文帯とし、体部に「L字形」または「逆L字形」の縄文区画文を施す。大木10式に伴う。2581は全体のモチーフが判然としないが、大木9式～大木10式に伴うものであろう。

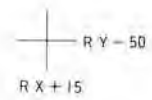
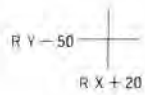
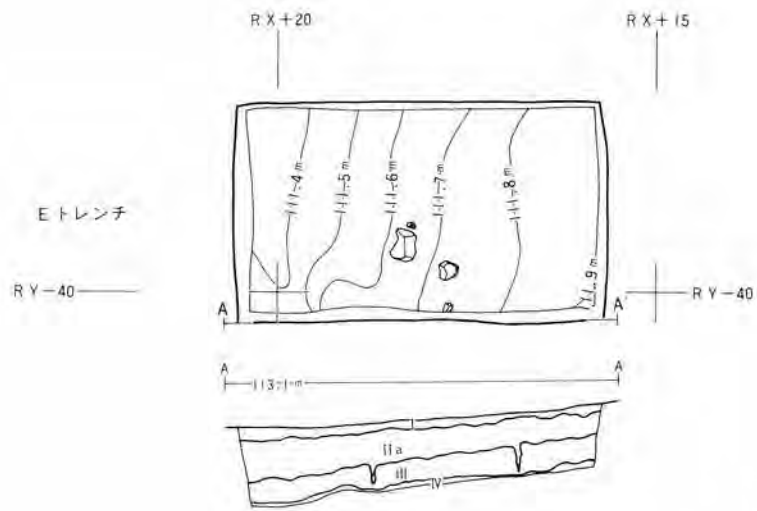
2582～2585はEトレンチのⅢ層から出土したものである。2582は隆起線上に円形押捺を連続させるもので、2585は平行沈線により施文されるものである。両者ともに大木8b式に伴う。2583はキャリパー形深鉢かと思われ、口縁部に隆起線による長楕円形の区画文を施し、内部を縦位の原体圧痕文で充填している。大木8b式に伴う。2584は撚糸文を地文とするものである。

第Ⅺ群

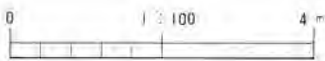
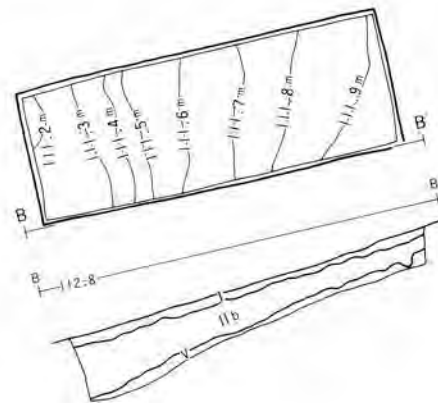
第Ⅸ群



第184図 第7次調査区出土遺物



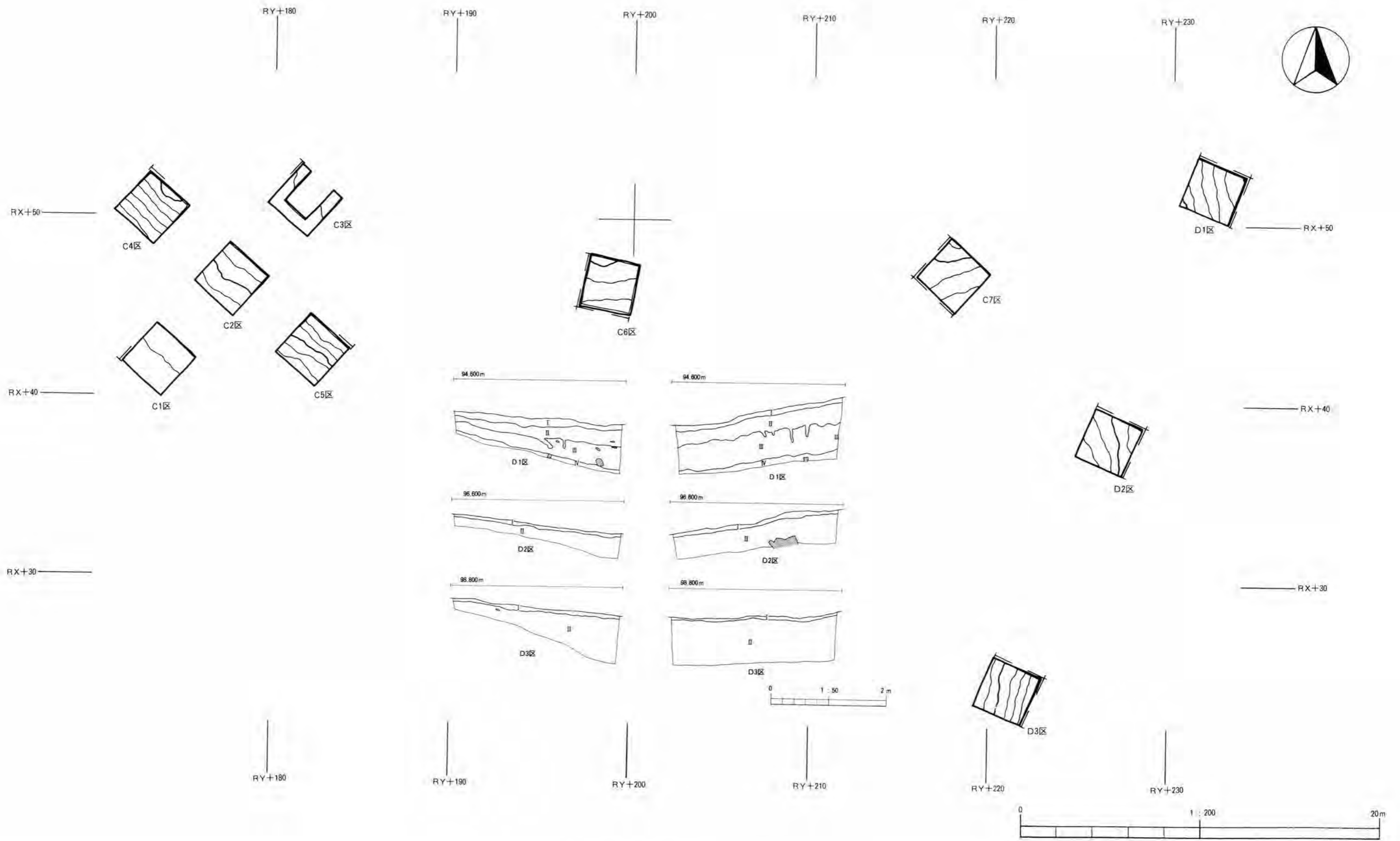
Wトレンチ



第185図 第7次調査区設定図



第186図 東包含層調査区設定図



第187図 第8次調査C区・D区平面図

(3) 台地東部（東包含層）（第186図・第187図）

台地東端部での遺構や遺物包含層などの有無を探るために、西側の谷状の地点をC区、東側の尾根状の地点をD区として調査区を設定した。

i) 基本層序

最も堆積層の厚いC6区では、6層の堆積層を確認している。

I層は表土層で、褐色シルト質土を基本土とし、やや明るい褐色土塊を含む。柔らかくしまりがない。

II層は、褐色シルト質土を基本土とし、上層にやや明るい褐色シルト質土を層上に含むほか、褐色土塊を含む。やや柔らかく、ややしまりがない。

III層は、黒褐色シルト質土を基本土とし、暗褐色土塊などをやや多く含む。やや柔らかく、ややしまりがない。炭化物粒を少量含む。

IV層は3層に細分される。IVa層、IVc層は、暗褐色シルト質土を基本土とし、褐色土塊などを含む。IVa層は、固さ、しまりともに中程度で、IVc層より明るい。IVc層はやや柔らかく、ややしまりがない。

IVb層は、黄褐色シルト層で層位面にやや凸凹がある。固さ、しまりともに中程度である。

ii) 出土遺物（第189図）

①土器

C区・D区ともに検出遺構はない。C6区付近に遺物包含層が形成されており、土器片が少量出土している。他の調査区では表土等から少量の土器片が出土している。

C4区出土土器（2586～2590）

2586・2587・2589・2590は隆沈線等により施文されるもので、大木8b式に伴う。

第IV群

732は口唇部と口縁部隆起線上に円形の連続刺突が伴うもので、大木2式～大木3式に伴う。

C5区出土土器（2591～2593）

いずれも地文のみであるが、縄文前期に伴うものである。

縄文前期

C6区出土土器（2594～2608）

V層出土土器（2594～2598）

いずれも地文のみであり、胎土に植物繊維を含む。2595・2597・2598は組縄縄文を地文とするものである。2594・2596は単節斜縄文を地文とする。これらはいずれも大木1式に伴う。

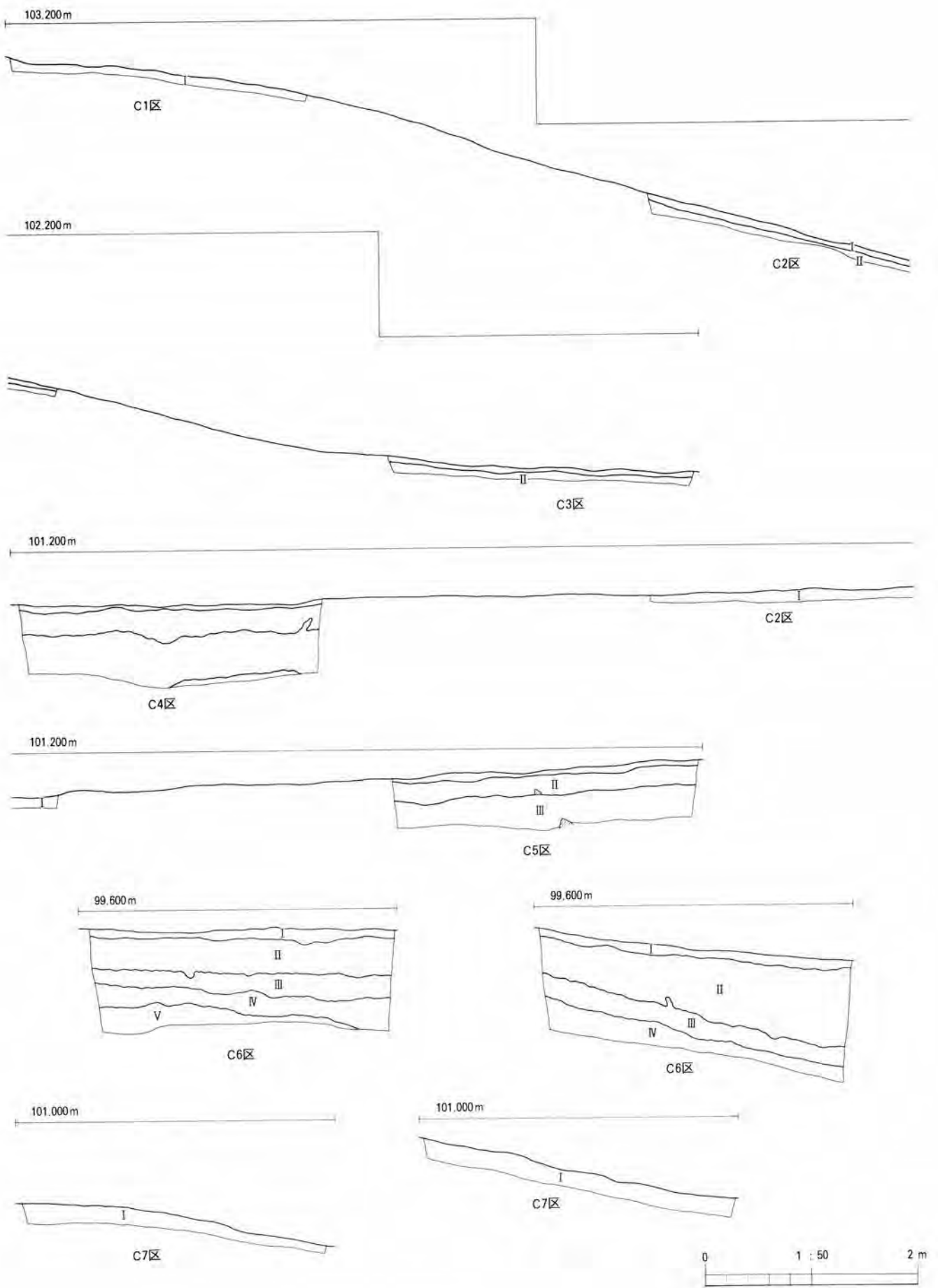
第I群

IV層出土土器（2599～2604）

2599は胎土に植物繊維を含むもので、結束する羽状縄文を地文とし、前期前葉に伴う。

縄文前期前葉

2604は横位の沈線と、縦位の羽状縄文を施す。縄文中期初頭に伴うものか。



第188図 東包含層土層断面図

Ⅲ層出土土器 (2600~2603・2605~2608)

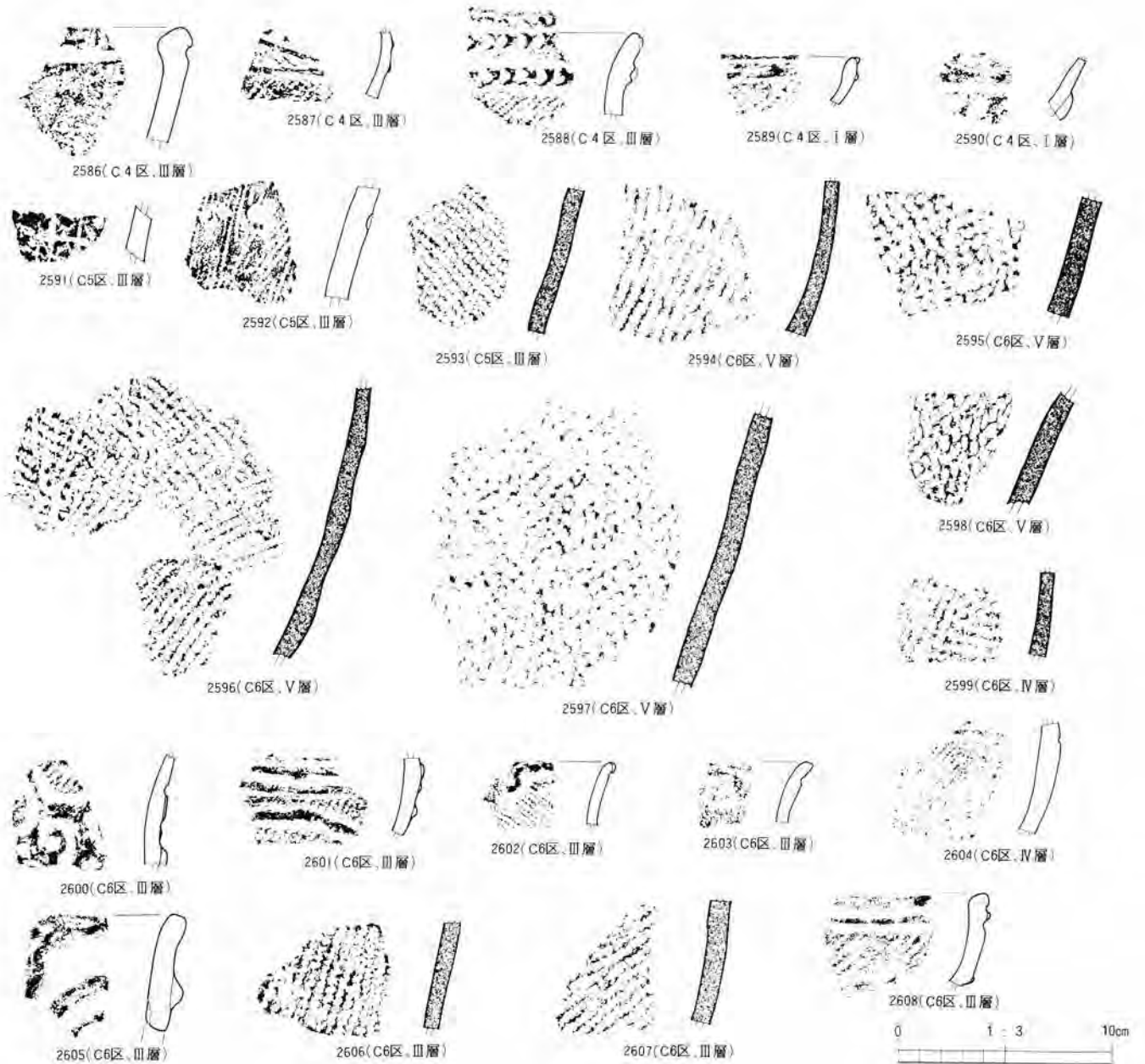
2603・2601・2608は隆沈線により施文されるもので、大木8 b 式に伴う。

第Ⅸ群

2605は方形を呈する口縁部波頂の破片で、円孔が穿たれる。大木7 b 式に伴うものか。

2602・2603は口縁部に隆起線を貼付けるもので、縄文前期に伴うものか。

2606・2607は地文のみであるが、胎土に植物繊維を含み、縄文前期前葉に伴う。



第189図 東包含層出土遺物

4 低湿地

崎山貝塚の北・東・南の三方は低湿地にとり囲まれており、北側と南側から湧き出した小さな沢は東流し、崎山貝塚の東端部にてひとつの流れとなり、宿地区にて太平洋に注いでいる。この低湿地は現在種に水田として活用されているが、地元の方によると開田されたのは比較的新しく終戦前後（昭和20年代前後）頃からだという。また、開田以前の地表面は現在よりだいぶ低いところにあり、沢水も清らかでウナギ等の魚がとれたとのことであった。

今回の調査は低湿地での遺構や泥灰層等の特殊な包含層の有無を探ることを目的とした。当初、南北両側に調査区を設定する予定であったが、時間的且つ経済的理由により南側はボーリングによる調査のみに留めた。

北側の調査区は昨年度実施した北貝塚の調査区北端部より北方へおよそ30mのところへ3m×3mのグリッドを2地点設けて表土を剥いだ後に、湧水量等からA地区のみを掘り下げた。

A区は地表から1.4m掘り下げた時点で凍結と安全性の問題から調査を打ち切り、これより下はボーリングによる調査を実施した。

(1) 基本層序

調査区内の堆積層はⅠ層～Ⅲ層に大別される。

Ⅰ層は黒褐色土を基本土とし、暗褐色土塊を含む。Ⅰa層は酸化により赤味がかったり。また、Ⅰc層はやや黒味を帯びている。いずれの層も柔らかく、しまりがない。

Ⅱ層も黒褐色土を基本土とするが、Ⅰ層よりも暗い。暗褐色土塊や黒色土塊を含む。上層より下層へ次第に暗くなる。いずれの層も柔らかく、しまりがない。

Ⅲ層は黒色土を基本土とし、黒褐色土塊などを含み、上層から下層へ次第に暗くなる。いずれの層も柔らかく、しまりがない。

ボーリング調査によると、この下にⅢ層が更に20cm程堆積し、以下層厚30cm程の黒褐色土層、層厚30cmの暗褐色土層、褐色土層と漸移的に推移する。褐色土層については層厚50cmを確認した段階で大きな転石に当たり、これ以上掘り下げられず、以下の堆積層については不明である。

結果として、今回の調査区内では縄文時代の泥灰層等は確認できなかった。

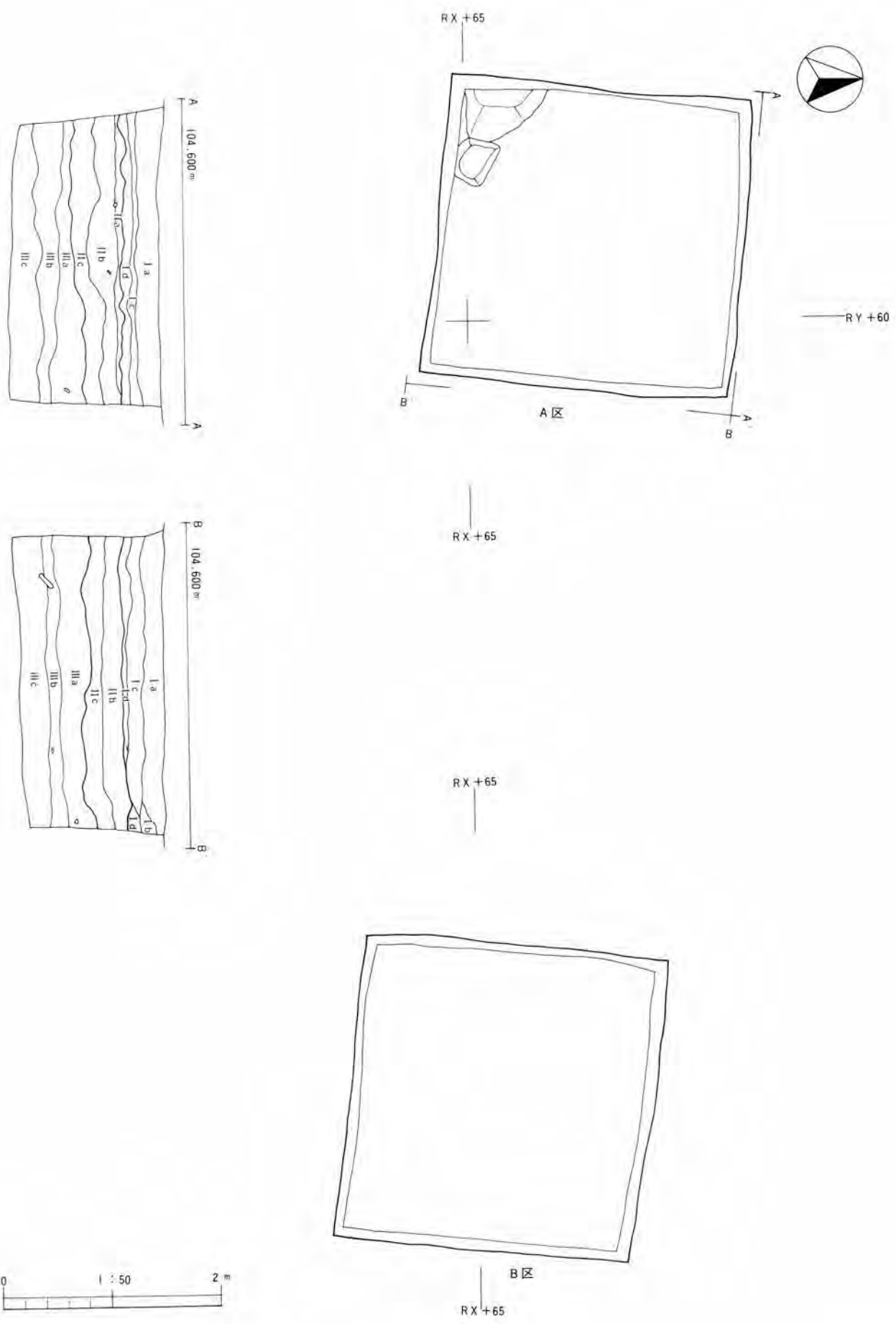
しかし、下層部の暗褐色土層～褐色土層は北貝塚A-5区の5-Ⅳ層～5-Ⅴ層に対応しているようで、縄文時代の堆積層である可能性は極めて大きいと言える。

(2) 出土遺物

出土遺物は極めて少なく、Ⅲ層から桶の底かと思われる円板状の板が、Ⅱ層下部～Ⅲ層上部から陶器片が、Ⅱ層からガラス片が出土しており、いずれも比較的新しい時期のものである。

これら以外には、各層から縄文土器片や石鏃などが少量出土している。

ボーリング調査にて掘り下げた土については、まだ水洗選別をしていないため不明であるが、やはり遺物の出土量は少ない様である。



第190図 北側低湿地調査区設定図

5 資料紹介

ここではかつて中嶋隆氏により崎山貝塚から採集された資料のうち骨角器類の一部を紹介する。これらの大半は南貝塚、特に第2次調査区付近から採集されたとのことである。また、採集されたもののうちマグロ棘などは明瞭な使用痕がみられないので割愛した。

ここに紹介する資料は、釣針・ヤス状刺突具・刺突具類・ヘラ・磨製刃器・装飾品類・加工痕を残す素材から構成される。

生産用具

釣針(2609) 鹿角製の釣針で、軸頂部と針先部を欠く湾曲部付近の破片である。軸部は真直でなめらかに湾曲しU字形を呈する。発掘調査で出土したものの断面はおよそ円形であったのに対し、これは隅丸方形を呈する。

ヤス状刺突具(2614) シカの中手・中足骨を縦方向に半截したものを素材とする。基部のみを残すが端部にアスファルト状の付着物がみられる。

刺突具類(2610~2613) 2610・2611・2613は大形獣の四肢骨を素材とする。一方を尖らせて機能部としておりここに擦痕が集中する。2611は小形の製品で完成品である。基部は丸く整形されている。幅1.3cm、長さ5.9cmである。

2612は大形の鳥（アホウドリか？）の管状骨を素材とする。一方の端部を斜めに削り落とし機能部とする。

ヘラ(2615・2616) 2615はシカの脛骨（R）の近位部を素材とする。先端部のみを使用するもので擦痕が集中する。前述したものとは分割の方法を異にし、大略横方向に半截したものの前面を使用する。2616はシカの中手骨を縦方向に半截したものを素材とする。基部を欠くためどちらの端部を残すか不明である。

磨製刃器(2617) 雄イノシシの左下顎犬歯舌側のエナメル質部を素材とする所謂刃斧である。両端を入念に整形し、同様な刃部を作り出している。整形の若干の粗密により犬歯の尖端部（下）を機能刃部とした。エナメル質側のカーブに合わせ蛤刀形とするため象牙質部を入念に整形している。かなり大きな個体の犬歯を利用したものと思われる。幅2.2cm、長さ5.5cmである。

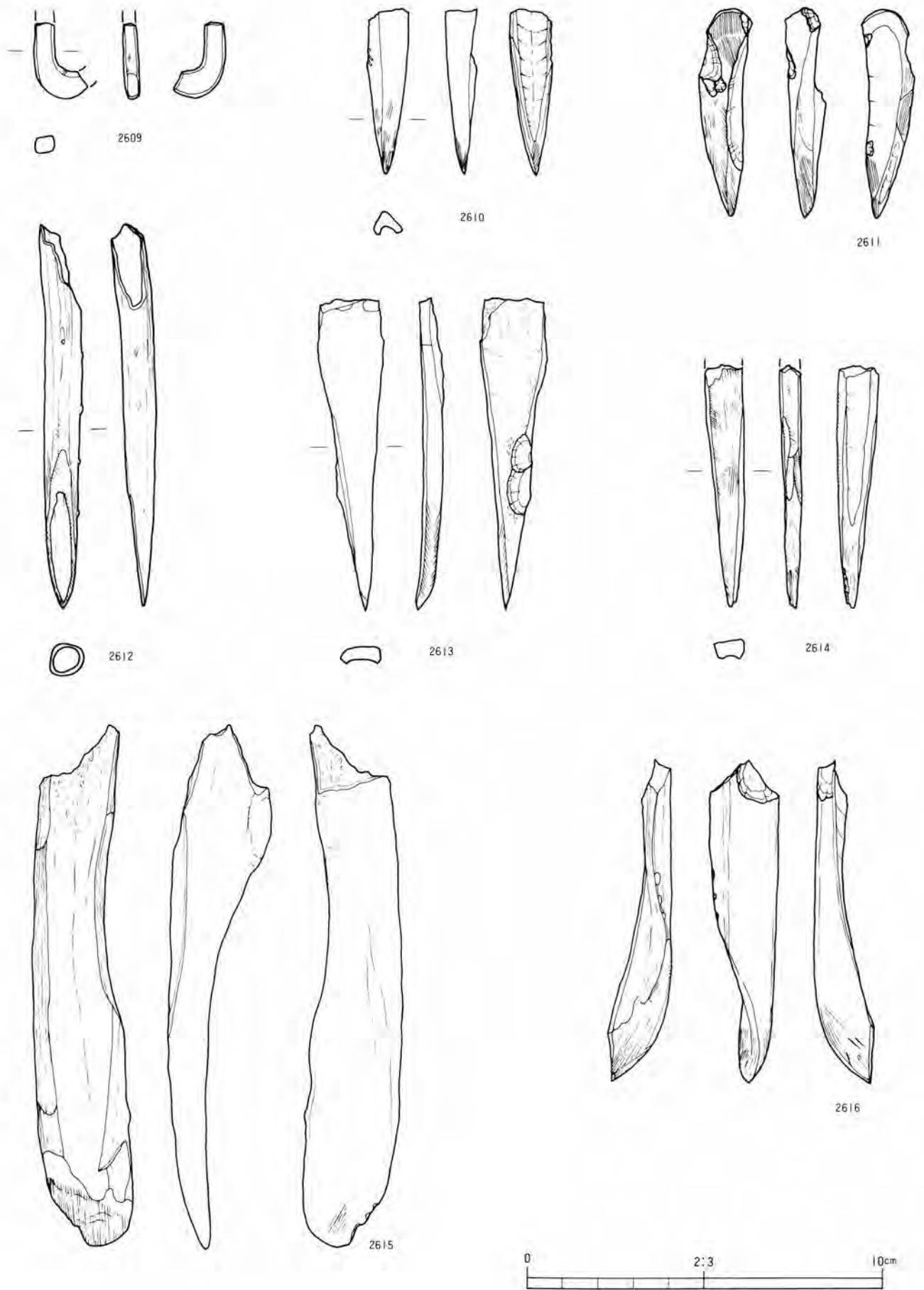
装飾品類

装飾品類(2618~2622)

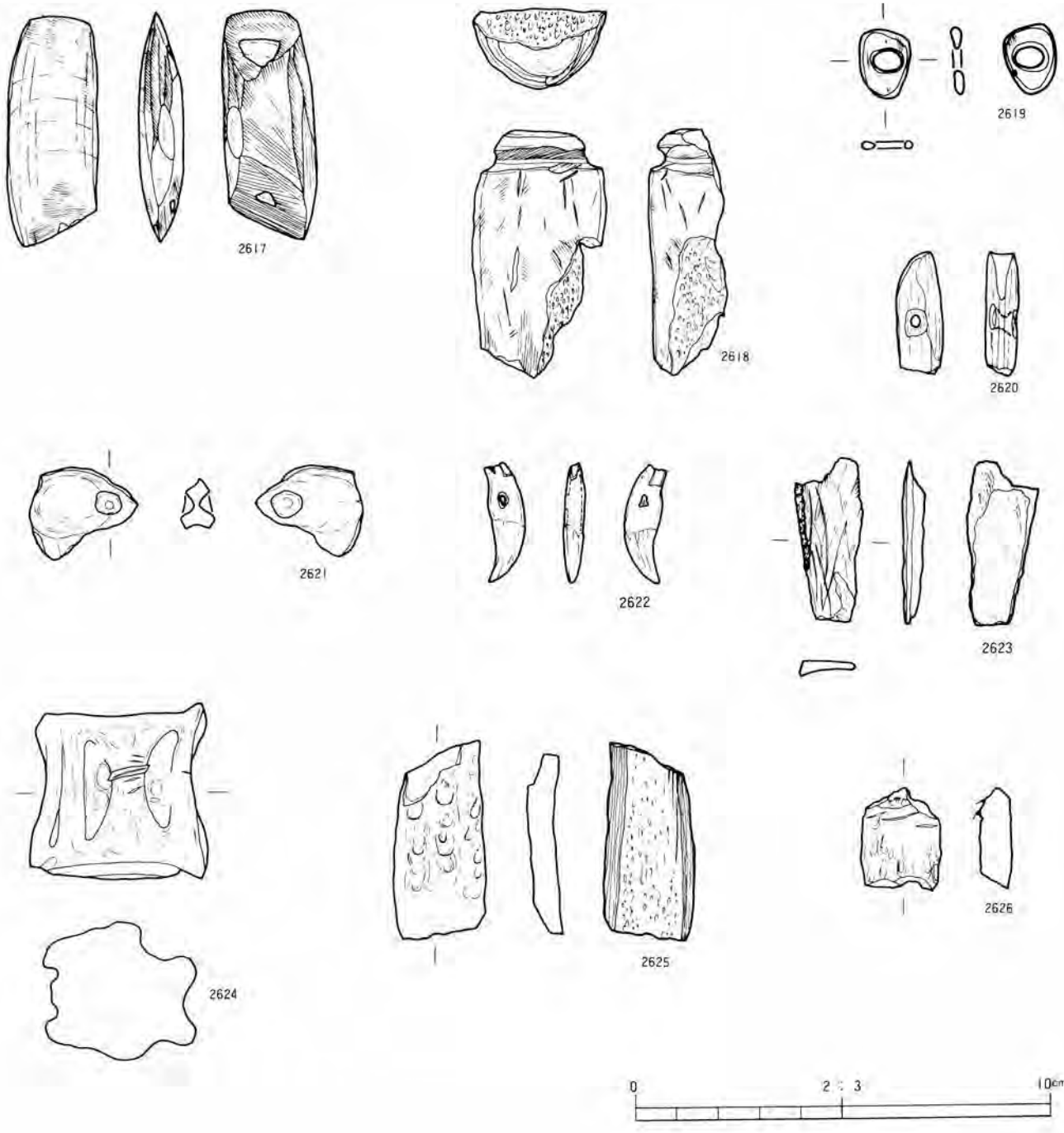
垂飾品(2619~2622) 2619は不定形であるが環状を呈し入念に整形されたものである。鹿角製かと思われる。2620はイノシシの切歯に穿孔するものである。2621はマダイの上後頭部を素材とするが、周縁を研磨し整形している。端部に穿孔するが貫通はしていない未製品である。2622はイヌの犬歯に穿孔するものであるが貫通していない。

棒状加工品?(2618) 鹿角を素材とする大形の製品である。端部のみを残すため全体の形状は不明であるが比較的丁寧に整形される。頂部付近には溝が1条めぐる。

加工痕を残す素材(2623~2626) 2623は剥離や擦痕を有するものである。2625・2626は鹿角片である。2625は側縁~両面を研磨し板状にするが、外面には手がつけられていない。2626は端部に打ち削り(chop)痕を有するものである。2624はマグロ属の尾椎であるが、石器による擦痕がきつく施される。おそらくは解体痕かと思われる。



第191図 崎山貝塚出土骨格器—中島コレクション(1)



第192図 崎山貝塚出土骨格器—中島コレクション(2)

以上の骨角器類は今回の調査で出土した資料と基本的には類似した構成をとるものと思われ、また、出土地点からもほぼ縄文時代前期～中期前葉に伴うと思われる。

次に同じく中嶋氏により採取された動物遺存体を紹介する。これらの動物遺存体の大半は南貝塚から表面採集されたものであり、北貝塚のもの若干含むとのことであった。北貝塚から出土した資料については特にその旨を示したが、何も表示の無いものは南貝塚からの出土資料である。

資料数の割には同定された種名が少なく今までの調査資料に比較すると、特に魚類ではイワシ・アジ・サバなどの小魚やアイナメ属が欠落している。また、カツオ・フサカサゴ科の点数が極端に少ない。しかし、今回サワラとフグ科を新たに追加することができた。

鳥類は極端に少なく同定できたものは2点だけである。新たにキジ・ヤマドリ科を追加することができた。

哺乳類は最も点数が多かったものの骨幹部などの同定できない部分が圧倒的に多かった。同定されたものはシカとイノシシに集中し、他のものは極端に少ない。シカとイノシシは比較的部位が出そろっており、やはり貝塚を構成する主要な種となっているようである。

この2種類以外ではイルカ科がやや多く、同定部位もやや多い。

オットセイは、成獣と幼～若獣の2個体がみられる。また、海獣骨としたものもオットセイである可能性は大きい。更に、同様な骨質の遺存体骨幹部がやや目についたが、これらについては現在標本を所有していないため同定できなかった。

イルカやオットセイなどの海棲哺乳類は今までの調査ではあまり出土点数が多くはなかったが、今後注目が必要となる種である。

オオカミ?としたものはやや大形の肩甲骨であるが、オオカミの原生標本を所有していないので同定はできなかった。今後、しかるべき機関や研究者に同定を依頼する必要がある。

カモシカは今回新たに追加されたものである。

貝類等は極端に少ないがヒレガイが新たに追加された。

以上であるが、表面採集資料という制約上どうしても大きめの遺物が集まりやすいということや、採集者の指向性に左右されるという点を考慮すれば、基本的には今までの調査資料とは矛盾しないものなのであろう。しかし、新たにいくつかの種名が追加されたことや、オットセイなどの海獣類やイルカ類など、海棲哺乳類への再考が必要となった点は有意義であらう。

種名	部位	主上顎骨	歯骨	角骨	口蓋骨	前鰓蓋骨	主鰓蓋骨	間鰓蓋骨	前頭骨	上後頭骨	基後頭骨	後側頭骨	擬鎖骨	第一脊椎骨	腹椎骨	尾椎骨	尾部棒状骨	備考 (その他)	最小個体数
ツノザメ科																	背鰭棘 4		2
マグロ属	L R	2	1			1		1			1		2	1	35	95	1		2
マグロ属(小)														1					1
カツオ																1			1
サワラ(?)	L R		1																1
ブリ属														1					1
スズキ	L R		1(8) 1(4)				1 1												2
マタイ	L R	1	2	1	1				6	5									6
タイ類	L R											1							1
フグ科																		下顎歯板 RI	1
フサカサコ科	L R																		1

第51表 中嶋コレクション魚類集計表

シカ

部位	頭		下顎骨		環	軸	椎	仙	肩 甲 骨				上 腕 骨				桡 骨				尺 骨				尺側手根骨		第4手根骨	
	骨	L	R	椎	椎	骨	骨	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	L	R	L	R			
南貝塚	5	6	8	3	2	8	1	1	2	4		5	1	1	2	2		2	1	5		1		1				

部位	中 手 骨		寛 骨		大 腿 骨		脛 骨		中心+ 第1足根骨		中 足 骨		膝蓋骨	踵 骨		距 骨		基節骨							
	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R	L	R					
南貝塚	2		4	1	1	1	4		2	3	4	1	4	1	3		2	1	1	2	2	6	4	9	1

部位	中節骨		末節骨		鹿 角	
地点	L	R	L	R	L	R
南貝塚	1	1	2	6	2	1

イノシシ

部位	頭		下顎骨		軸	肩 甲 骨				上 腕 骨				桡 骨	第4手根骨		第4中手骨		脛 骨		第3中足骨	
	骨	L	R	椎	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	近	遠	L	R	近	遠	近	遠	L	R
南貝塚	2	5	2	2		1	1	1		1	1	1	1	1	1		1	1		1	1	1

部位	踵 骨		中節骨		末節骨	
地点	L	R	L	R	L	R
南貝塚	1		1		1	

ウサギ

部位	下顎骨	
地点	L	R
南貝塚		
北貝塚	1	

ツキノワグマ

部位	上顎大歯	
地点	L	R
南貝塚		1
北貝塚		

クヌギ

部位	上顎大歯	
地点	L	R
南貝塚		1
北貝塚		

イヌ?

部位	下顎骨		脛 骨	
	L	R	近	遠
南貝塚				1
北貝塚	1			

オオカミ?(大型犬?)

部位	肩 甲 骨	
	L	R
南貝塚	1	

オットセイ

部位	下顎骨		上腕骨		大腿骨	
	L	R	L	R	L	R
南貝塚		1	1		1	

オットセイ?

海獣類?

部位	寛 骨	
地点	L	R
南貝塚	5	1

カモシカ

部位	中 足 骨	
	L	R
南貝塚	1	

イルカ

部位	環	椎	肩甲骨		手	肋
	椎	骨	L	R	骨	骨
南貝塚	2	33	1		1	1

ヒト

部位	下顎白歯	脛 骨
地点	L	R
南貝塚	1	1

キジ・ヤマドリ科

部位	上腕骨	
地点	L	R
南貝塚		1

ガン・カモ科

部位	尺 骨	
	L	R
南貝塚	1	

貝類

種名	ア	ヒ	レイ	チ	エ	マ	イ	チ
地点	ワ	レ	イ	チ	ゾ	ガ	ソ	シ
	ビ	カ	カ	ミ	チ	キ	シ	ミ
		イ	イ	ホ	ミ	キ	ミ	ホ
南貝塚	1	1	2	1	3	1	R1	1

IV 考 察

1 崎山貝塚の集落構成とその変遷について

崎山貝塚の集落構成については既に何度かの報告や発表を行ってきた（註1）が、発掘調査の進展及び指導委員会における指摘に伴い、この名称や内容に若干の訂正があるが、その経緯については既に述べたとおりであるため、ここではその結論のみを述べることにする。

崎山貝塚は舌状に張り出す台地上に集落跡が展開しており、これに連続する斜面部に貝塚や遺物包含層（土器捨場）が形成され、さらにこの外側を沢や低湿地がとり囲むという構造となっている。

台地上の集落跡は縄文前期から後期にかけてと、極めて長期にわたり営まれており、しかも中期以降についてはその変遷過程がかなり明確に把握できている。また、集落形態についても最盛期には中央部から「立石を伴う中央広場」・「環状遺構帯」・「掘立柱建物跡及び土坑域」・「居住域」という極めて特徴的な構造をとっており、なかでも「環状遺構帯」については明らかに掘削（掘り込み）と盛土といった土木工事を伴ったものであり、その配置形態も今のところ他に例を見ない崎山貝塚独自のものとなっている。

ここでは、これまで検出した遺構群を整理したうえで、遺跡全体での変遷過程についてまとめることにする。また、関連する遺跡にも触れながら崎山貝塚の集落について考察を加えてみたい。

なお、タイム・スケールとなる土器群の分類については、縄文期に伴うものを12群に分類したが、これらは既に設定されている土器型式におおむね対応させたものであり、その内容については後述する。

（1）検出遺構の分類について

これまでの発掘調査により検出された遺構は、立石・竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑跡・配石遺構および柱穴状ピットなどがある。

a) 立石

立石は中央広場の東端部に1基現存するほか、地区住民からの伝聞によると中央広場の西端部に相当する位置にもう1基の立石があり、昭和40年代ころまでは存在していたとのことである。しかし、これまでの調査ではこの立石を抜きとった穴（例えば攪乱穴など）を検出できず写真等による確認も出来ていないので、その真疑について検証できる情報を欠いている。ただし、台地と北貝塚の境界付近を通る赤線道路沿いには、現存する立石に類似した巨大な礫が2個打捨てられており、立石が複数存在したという話もあながち否定できない状況にある。いずれにしても、今後もこの件について情報を収集して行く必要がある。

b) 竪穴住居跡

竪穴住居跡は検出総数が35棟であり、中期初頭から後期にわたり構築されている。平面形や

規模等によりいくつかの類型化が可能であろうが、大半が現状保存するために検出のみに留めており、その実態はほとんど不明である。ここでは精査したものを中心に次のとおり2つのグループを指摘するに留める。

a 類—第11号竪穴住居跡

本類は単式の炉を伴うもので、平面形は方形を呈し、柱穴配置は方形を呈する6本柱と思われる。床面のほぼ中央部に方形の石囲炉が伴う。第11号竪穴住居跡の伴出土器は第Ⅷ群（大木8 a 式）である。

b 類—第12号竪穴住居跡・第14号竪穴住居跡

本類は複式炉を有するものを一括した。第12号竪穴住居跡は平面形が多角形～不整形を呈し、柱穴配置は不明（5角形か）で、床面の北東部に石組複式炉（石組炉＋前庭部）を伴う。伴出土器は第Ⅸ群（大木8 b 式）である。

第14号竪穴住居跡は平面形が不整形の隅丸方形を呈し、柱穴配置は不明である。床面の東よりに石組複式炉（掘込炉＋石囲炉）が伴う。伴出土器は第Ⅹ群（大木9 式）である。

c) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は東集落西端部付近にのみ検出したもので、次のとおり分類する。

a 類—第1号掘立柱建物跡

ほぼ東西棟で、東西2間、南北1間である。やや大形の柱穴により構築されており、伴出土器は第Ⅺ群（大木10式）である。

b 類—第2号・第3号掘立柱建物跡

a 類に比して著しく小形の柱穴により構築されている。いずれも2間×1間であるが主軸方向に大きなばらつきがある。所属時期は不明である。

c 類—第4号柱列

柱穴2基を確認したのみなので柱列としたが、おそらく掘立柱建物跡の一部だと思われる。柱穴の規模はa 類に近似し、主軸方向もこれにやや近い。所属時期は不明である。

柱穴状ピット

掘立柱建物跡の周辺部から環状遺構帯西半部にかけて 基を越える柱穴状ピットが検出されている。本来これらは掘立柱建物跡を構成するものと思われるものの、他の遺構との重複もあり復原はできていない。しかし、これらの柱穴状ピットの中には第Ⅸ群（大木8 b 式）に伴うものもあることから、掘立柱建物跡は第Ⅸ群（大木8 b 式）～第Ⅺ群（大木10式）の間に継続的に構築された可能性が大きいと思われる。

d) 土坑跡

土坑跡は中央広場や環状遺構帯及び東集落西部などを中心に多数検出されており、既に記述したとおり次のように分類する。

a類、平面形が長方形や楕円形を呈するもので、一般に掘り込みが深い。他の遺跡の報告例では墓坑跡とされるものであり(註2)、本書でもこれらの知見に従っておく。ただし、脂肪酸分析等の化学的分析は実施していないので確定はできない。伴出遺物はS24W15-1号墓坑跡埋土中に第Ⅸ群(後期前葉)に伴う土器が1/3個体程度(残りは調査区外か)出土した例が特筆される。本類の所属時期は第Ⅷ群(大木8a式)~第Ⅸ群にわたる。

b類、平面形が円形を呈するもので、断面形が皿状を呈するものをb1類、擋鉢状を呈するものをb2類とした。b1類のなかにはマグロ属椎骨の集積したものがあり特筆されるが、これ以外には伴出遺物を有するものが少なく、性格が不明であると言わざるを得ない。所属時期は第Ⅸ群~第Ⅺ群にわたるが、時期不明のものも多い。

c類、大形の土坑跡で、断面形がフラスコ状のものをc1類、ピーカー状のものをc2類、いずれか不明のものをc3類とした。これらは一般に貯蔵穴とされるものであり、人為的堆積状況を呈するものが多い。伴出遺物は埋土中に貝層を形成するものが1基あるほかは、土器や石皿・凹石・敲打磨石などの石器類を伴うものも多い。

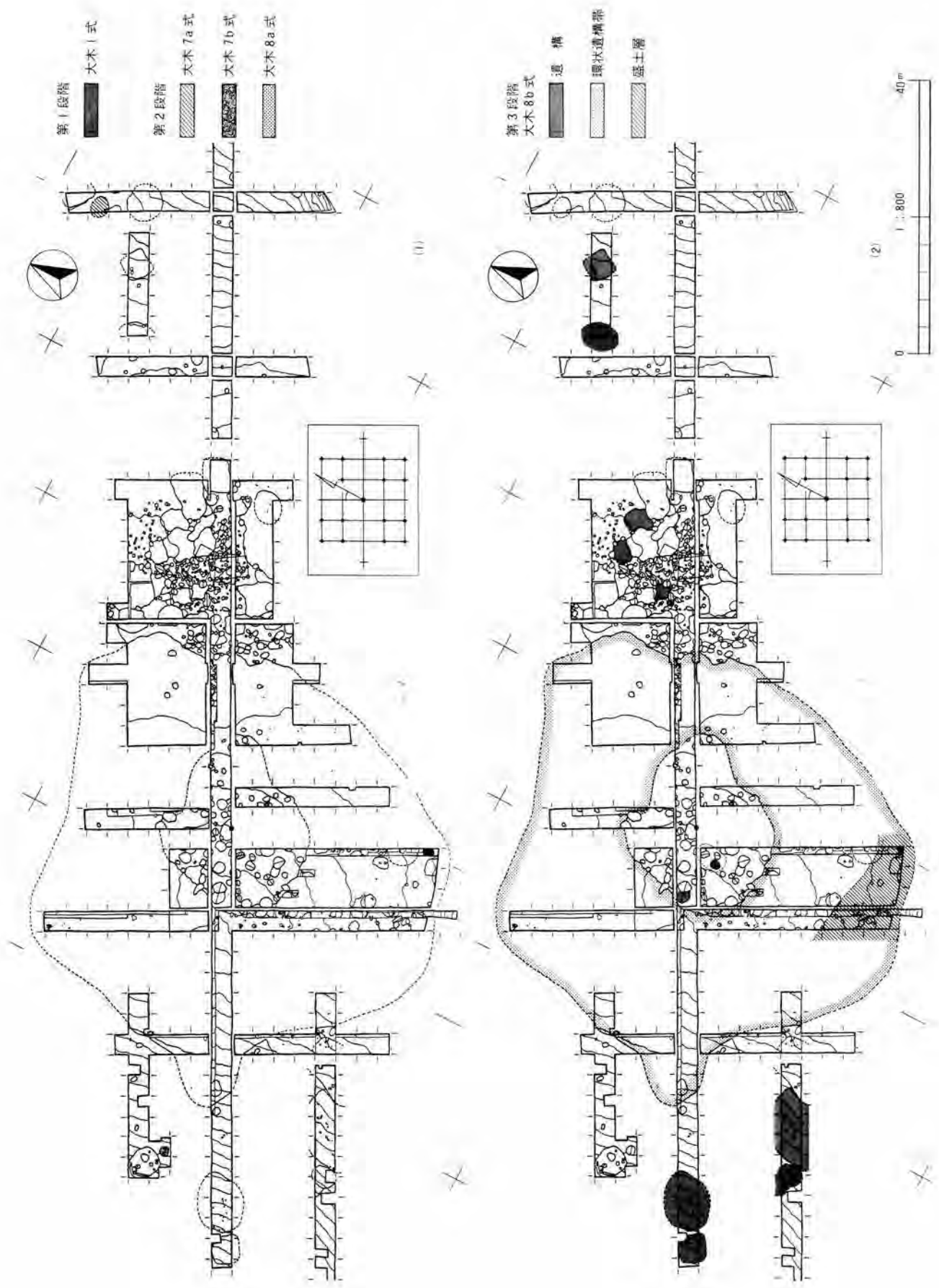
これらの所属時期は前期初頭~後期の長期にわたる。また、c1類とc2類の比較については古い時期のものほどc1類が多い傾向も見受けられるが明瞭なものではなく、むしろ両者が混在していると見るのが妥当だと思われる。

e) 配石遺構

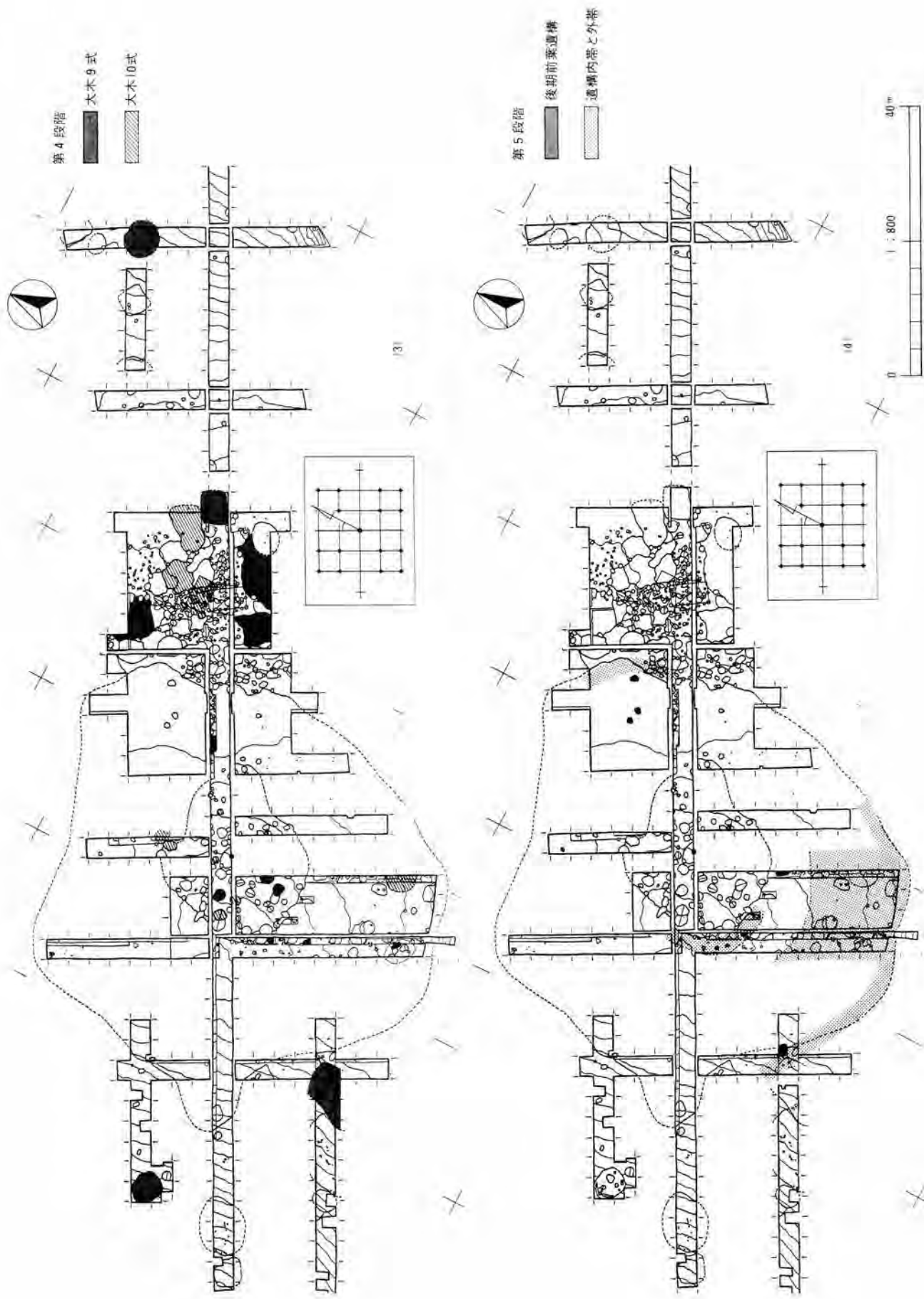
配石遺構は、やや小形のものとやや大形のものと及び石棒を埋設したものがある。このうち石棒を埋設したものは別に扱う必要があると思われるが、配石遺構は全般に精査した件数が少ないため一括する。

環状遺構帯西部の東縁付近(中央広場の西縁付近)にはN3W15-3号配石遺構~S9W12-2号配石遺構の7基が弧状に配置され、このうち精査した3基はいずれも下部に小規模な土坑跡を確認している。一般に土坑跡を伴う配石遺構は墓とされるが、前述した7基の配石遺構は人を埋葬するには、やや小規模すぎるものと思われる。とすれば小児の埋葬か再埋葬である可能性の2者が考えられる。ここで、配石された礫に注目すると、石皿・凹石・砥石等の石器類のみ、磨製石斧のみ、扁平円礫のみという様に遺構毎に著しい片寄りが見られる。これらを墓坑と仮定すれば、被葬者に深く関わる礫のみを選択して配置したものと想定できる。このため、小児の埋葬墓とするよりは成人の再埋葬と考える方が自然だと思われる。なお、これら以外の配石遺構については通常の規模のものであり、特に再埋葬の可能性を考える必要は無いものと思われる。

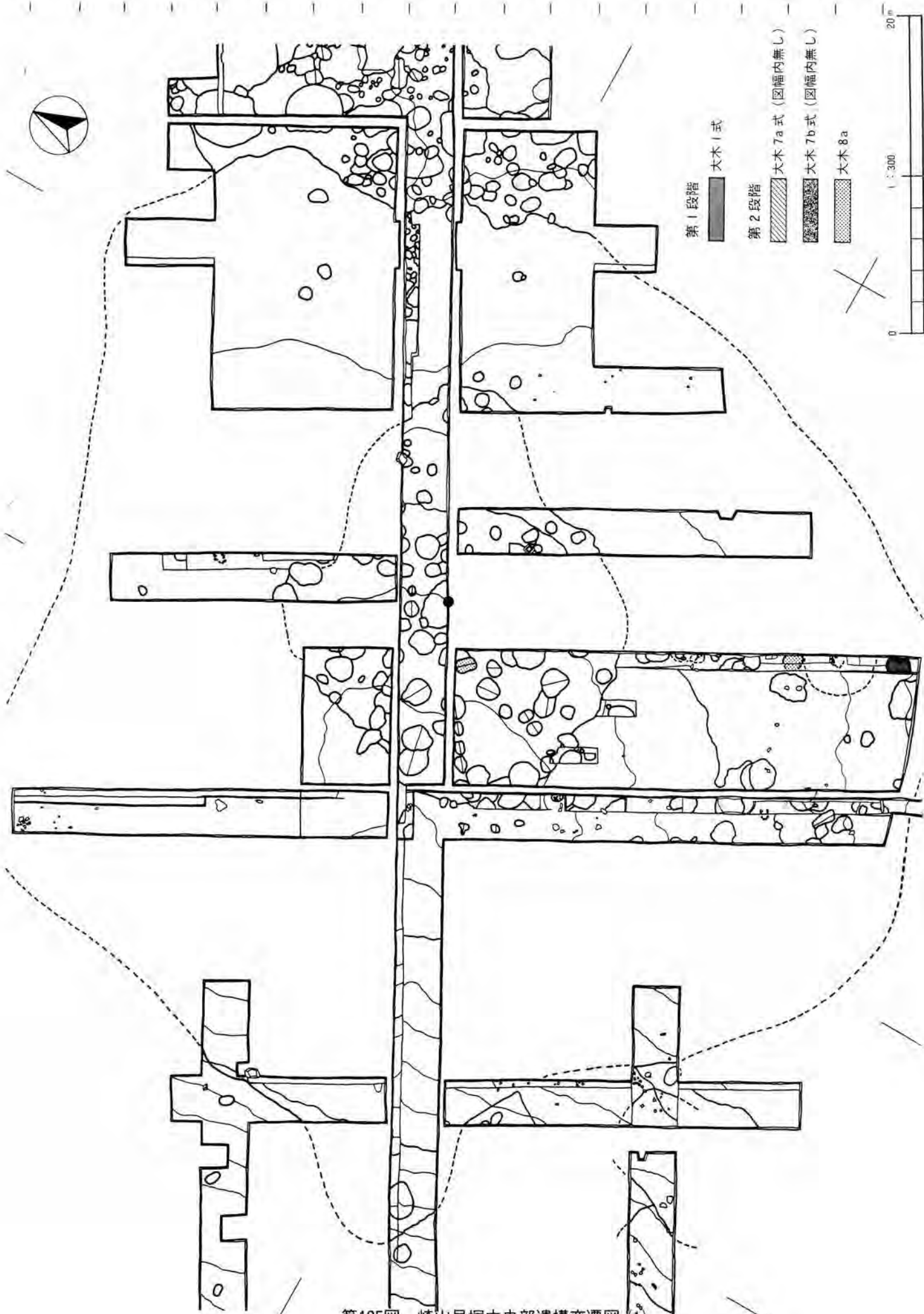
配石遺構の伴出遺物は前述したもの以外は極めて少なく、所属時期は明確ではないが、大半がⅣ層上面で検出されていることや、S15W30-1号配石遺構周辺から後期の土器片が出土していることなどから、おおむね後期を中心に形成されたものと考えられる。



第193図 崎山貝塚遺構変遷図(1)、(2)



第194図 崎山貝塚遺構変遷図 (3)、(4)



第195図 崎山貝塚中央部遺構変遷図 (1)

(2) 集落構成との変遷について

ここでは前述した遺構群の変遷過程と貝塚や遺物包含層の形成過程を合わせて5段階に大別し、各段階での構成内容についてまとめることとする。

<第1段階、集落前期—第Ⅰ群～第Ⅴ群(大木1式～大木6式)>

第1段階は前期に伴うものを一括した。検出遺構は環状遺構帯盛土層直下の土坑跡(S30W6-3号土坑跡)1基と第1次調査区No.2グリッド3c層上面から掘り込まれた小ピット1基があるのみで、集落構成については全く不明である。

しかし、南貝塚と東包含層には第1段階に伴う堆積層が確認されている。南貝塚では第1次調査区が第Ⅰ群(大木1式)から第Ⅱ群(大木4式)にかけて包含層が十分な層厚を持って堆積しており、特に第Ⅰ群(大木1式)から第Ⅱb群(大木2b式)にかけて遺物の出土量も多い。

動物遺存体については第Ⅰ群で小規模な廃棄ブロック(貝ブロックA～C)の形成を見た後に、第Ⅱb群～第Ⅲ群に伴う獣骨層が形成されているが、これは該期から崎山貝塚において本格的な動物遺存体包含層の形成が始まったことを示している。

第2次調査区については最下層がやはり第Ⅰ群に伴うものであるが、その下限はC区出土の遺物により第Ⅶ群(大木7b式)前後と想定しておく。

動物遺存体については、B区で第Ⅲ群に伴う灰まじり層が堆積した後に、やはり第Ⅲ群に伴う獣骨を多く含む混貝土層が形成される。また、A区ではポーリング坑中に植物繊維を含まない土器片が出土していることからおそらく第Ⅲ群～第Ⅳ群に伴う時期から堆積が始まったと考えられる。A区での構成内容は小規模な廃棄ブロックを伴うが、主体は魚骨層である。

また、東包含層でも第Ⅰ群に伴う遺物包含層が形成されている。

これらを要約すると、崎山貝塚の開始年代は第Ⅰ群であり、遺物の出土量から見ると当初から比較的規模の大きな集落跡が形成されていた可能性が大きい。更に動物遺存体を含む層の形成過程を見ると、小規模な貝ブロック→獣骨層→大規模な魚骨層という変遷がみられ、これは生業活動の変容のみならず、集落跡の規模や構成内容の変化を反映している可能性が大きい。

これまで検出した該期の遺構は極めて少ないが、台地南辺部(環状遺構帯外縁部)から南貝塚にかけて集落跡が形成されている可能性が大きくなって来たのでこの実態をつかむことが急務となる。

<第2段階、胎動期—第Ⅵ群～第Ⅷ群(大木7a式～大木8b式)>

第2段階は縄文中期前半期に相当する。検出遺構は第Ⅵ群(大木7a式)に伴う竪穴住居跡が東集落から1棟、第Ⅶ群(大木7b式)に伴う土坑跡が西集落から1基検出されている。また、第Ⅷ群(大木8b式)になると中央広場に墓壇跡1基、西集落に竪穴住居跡1棟、環状遺構帯底面構築土層(Ⅷ層)直下にフラスコ状土坑跡が1基検出されている。

第2段階についても集落構成の全容が不明ではあるが、少なくともこの段階から台地上に集落跡が形成されており、しかも中央部に竪穴住居跡が進出していない点が、換言すれば当初から中央広場を意識して集落跡を形成していた点が指摘できる。このことは第Ⅷ群において1基

のみではあるが中央広場に墓壇跡が形成されることによっても裏づけられる。

また、南貝塚C区や北貝塚中央部には第Ⅶ群や第Ⅷ群に伴う遺物包含層が盛んに形成されており、次の第3段階へ発展する素地が十分に蓄積されていたことを伺わせる。

<第3段階、発展期—第Ⅸ群（大木8b式）>

第3段階は縄文中期中葉に相当する。この段階で掘削と盛土の大規模な土木工事を行うことにより極めて定形的で且特徴のある集落跡が形成される。また、各ブロックでの検出遺構数が著しく増加する。

集落形態は中心部から立石を伴う「中央広場」・「環状遺構帯」・「居住域」といった重層構造をとる。「中央広場」は表土や旧表土の直下が地山面となっており、長軸26.7m、短軸21mの不整楕円形を呈し面積はおおよそ350㎡を計る。「中央広場」に伴う遺構は、東端部に立石1基、中央部～西半部に墓壇跡2基、西端部にフラスコ状土坑跡1基となる。墓壇跡はこの他に時期不明のものが南東部に1基、中央部に1基確認されている。第2段階以降墓壇跡の占地状況に変化がみられることを考えるとこの2基の墓壇跡も第3段階に伴う可能性は大きいと言える。また、「中央広場」には第4段階の土坑跡が多数掘り込まれるため、これらとの重複により判別できないものも多く、墓壇跡の総数は更に増えるものと思われる。

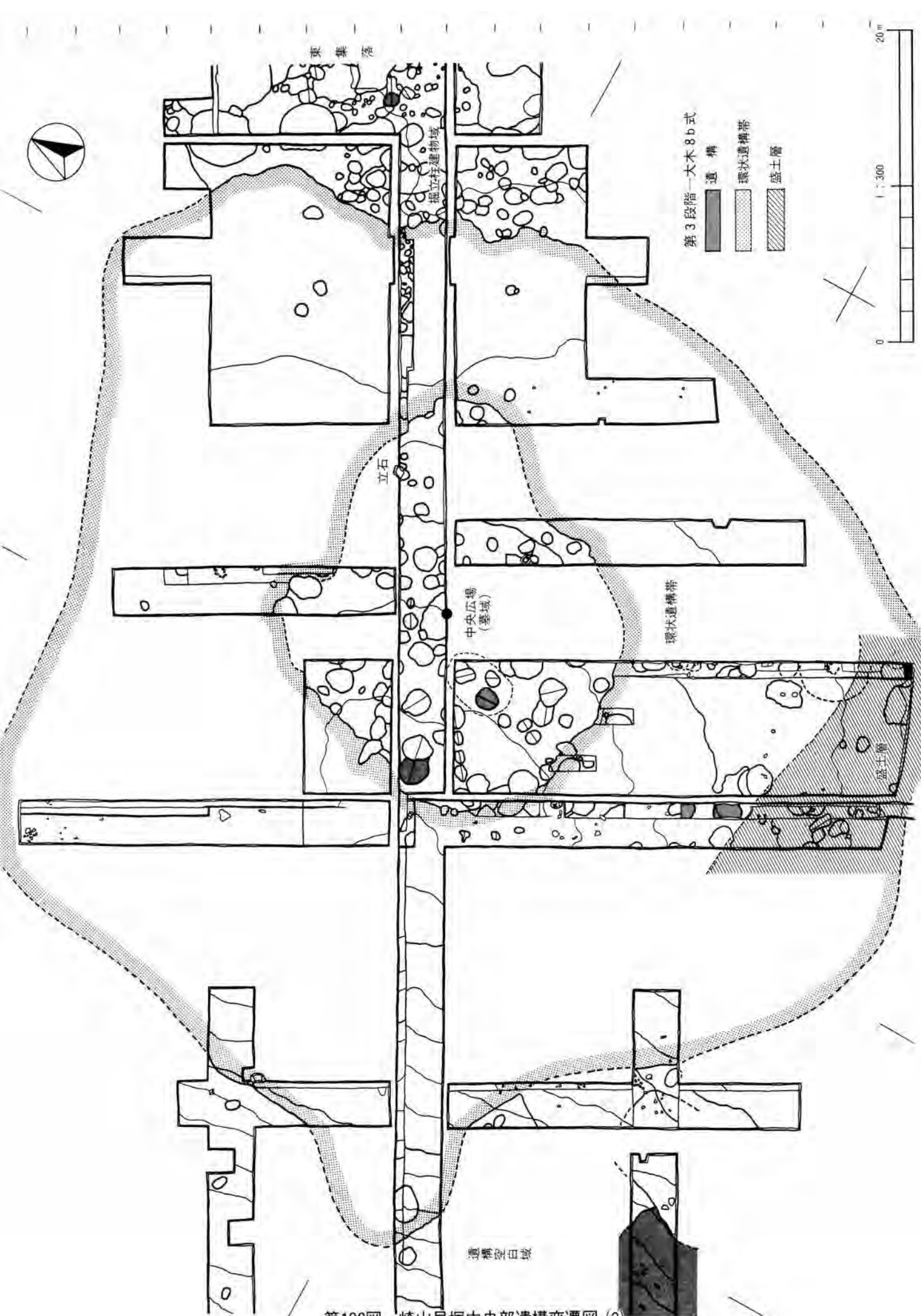
以上により、「中央広場」は立石を伴う墓域として形成されたものであり、集落構成員の埋葬や何らかの儀式・祭記などを取り行う場であったと想定できる。

ただし、本年度実施した第11次調査の結果、「中央広場」の西縁がこれまで想定していたラインより1m程内側へ入り込むことが判明した。このため一部の遺構が第4段階以降にずれ込むこととなったため、本書にて訂正しておきたい。

「環状遺構帯」は「中央広場」をとり囲む形でドーナツ状に形成されている。「環状遺構帯」の内縁はいずれも「中央広場」を削り残すように掘削されており、断面形は東側で不整の溝状を、南側では段状を呈し、幅は13.2m～25m、最深部の深さは1.0mを計る。

「環状遺構帯」南辺部付近には斜面の肩を埋め立てて、平坦面（環状遺構帯底面）を拡幅する様に盛土層が形成されている。盛土層はおおむね下層（Ⅷ層～Ⅹ層）が褐色土層で、上層（Ⅹ層～Ⅸ層）が暗褐色土層であり、いずれも塊状の混入土を多く含む。盛土層の最上面には部分的にはあるが堅穴住居跡の貼床層に類似する構築面が見られ、「環状遺構帯」の底面より20cm程高まっている。また、盛土層内側のラインを結ぶと「中央広場」外縁のラインとほぼ平行し、おおむね幅13m程となる。これは、東側のトレンチ（Eトレンチ）での規模にほぼ対応するものとなる。このため、少なくとも東から南にかけては幅13m程の溝状の遺構がめぐっていると理解することもできるが、現時点では確認できない。

次に「環状遺構帯」の構築された時期であるが、底面に検出したS24W6-2号土坑跡の伴出遺物が第Ⅶ群（大木8a式）の新しい部分に伴うものであり、この土坑跡の最上部を粘土層（Ⅷ層）で埋めて底面を構築している。従って、この部分での掘削及び底面の構築が第Ⅶ群（大木8a式）最終末～第Ⅸ群（大木8b式）の初期に行われたものと見ることが出来る。また、盛土層については、地山面から掘り込まれたS30W6-2号土坑跡や盛土層全般及び盛土層中から掘り込まれた土坑跡や小ピット類の伴出遺物が第Ⅸ群（大木8b式）に伴うものである。



第196図 崎山貝塚中央部遺構変遷図 (2)

これらのことから、「環状遺構帯」の掘削と盛土は第Ⅸ群（大木8b式）の中でもおそらく比較的早い段階に終了していたものと思われる。

ここで、「環状遺構帯」の性格について触れておく必要がある。まず第一に「環状遺構帯」は第3段階では「中央広場」をとり囲んで掘削と盛土による土木工事が行われた結果作り出された環状の遺構である点を再度確認しておきたい。また、「環状遺構帯」底面から掘り込まれた遺構は極めて少なく、しかも今のところ第3段階に伴う確実な例はほとんど無いことが指摘できる。

一方、盛土層中には土坑跡や小ピット類が掘り込まれるが、盛土層の形成過程から見ると、極めて短期間のうちに掘削と廃棄がくり返されたものと見られる。土坑跡の形態も貯蔵穴とされるc類とは異なりb2類（搗鉢状）が主体となる点も注目され、また、盛土層や土坑跡の埋土中には、焼土や炭化物を多く含む層や焼骨片を含む層が狭在していることも特筆される。これは、ただ単に掘削した土砂を盛り上げるという単純な行為のみでは説明できない何かがあるものと思われる。更にこれにつけ加えると、盛土層の形成にあたっては当初から掘削した土砂のすべてを盛り上げて巨大な堤状のものを構築しようという意識は無かった様で、「東集落」や「西集落」の「環状遺構帯」に接する部分には全く盛土の痕跡が見出せない。従って、必要な量だけを盛り上げて、これ以外土砂は北斜面に投げ捨てたものと思われ、この結果（部分的にはあるが）北斜面では第2段階の遺物包含層を覆う褐色土層が形成されたものと見られる。

これらを要約すると、「環状遺構帯」は第3段階においては「中央広場」を削り残す様に構築された環状の遺構であり、底面において該期に伴う遺構が極めて少ないことから遺構の空白地帯として形成されたものと想定できる。これは「中央広場」と「居住域」を分け隔てる空間区画を意図したものと想定される。また、南辺部の盛土層も掘削部と一体となり空白域を形成していたと言えるが、盛土層を形成にあたり平坦面の拡幅を意図したのか、あるいは外側を高めることにより結果的に溝状の遺構を作り出す意図があったのかは現時点では不明であると言わざるを得ない。

更に、指導委員会からは「環状遺構帯」は旧地形がある程度凹んでいた地点を上手く活用して掘削（あるいは底ざらい）した可能性も考えられるとの指摘を受けている。この2点については来年度に北側と西側の調査を予定しておりこの結果を待って結論づけたい。

「環状遺構帯」の外側には東西両側に居住域が形成されており、それぞれ「東集落」・「西集落」と呼称している。

「東集落」については、西端部に柱穴状ピットとフラスコ状土坑跡などが密集している。前述したとおり、第3段階に伴う柱穴状ピットは掘立柱建物跡としては復元できなかったものの、第4段階と同様に掘立柱建物跡を構成するものであった可能性が大きい。従って、この地点は掘立柱建物跡と貯蔵穴により構成される空間であったと想定される。「東集落」での竪穴住居跡は、この西端部を避けるように、しかも台地全体に分布していることが指摘できる。

「西集落」については、東端部に柱穴状ピットのみならず遺構が全く検出されない幅10m程の空白地帯があり、この西側に竪穴住居跡が分布している。未調査区が多く確定はできないが、やはり台地全体に竪穴住居跡が広がっているように思われる。

「東集落」と「西集落」を比較すると、「東集落」でのみ掘立柱建物跡を保有している点と

「東集落」が著しく規模が小さい点で差違を見出すことができるが、これは両者の性格が均一でないことを表わしているものと思われる。

最後に第3段階での斜面部の様相については、南貝塚では部分的な遺物包含層が形成されるのみであるが、北貝塚では比較的広範囲に遺物包含層が形成され、また、第2段階の遺物包含層を覆って地山に類似する褐色土層が堆積している。

さらに、北貝塚の中心部に位置する貝層も周辺部の出土土器から、ほぼこの段階以降に形成されたものと見られる。

以上、第3段階の集落構成は中心部から立石を伴う「中央広場」(墓域)・区画施設としての「環状遺構帯」・土坑域を含む掘立柱建物域(東集落)及び空白域(西集落)・居住域(東集落と西集落)の4重構造であったことを指摘する。

<第4段階—変革期、第X群～第XI群(大木9式～大木10式)>

第4段階は縄文中期後葉～末葉に相当する。この段階では「環状遺構帯」の埋没に伴い、空間の利用形態が第3段階と明瞭な異なりと見せる様になる。また、検出遺構数は相変わらず多く、ある一定規模の集落跡を保持していたものと思われる。

まず、最も変容するのが「中央広場」であり、墓域跡に変わりフラスコ状やピーカー状を呈する大形の土坑跡が多数掘り込まれる。また、「環状遺構帯」でもVI層が堆積し「中央広場」との境界が不明瞭になると、「中央広場」同様にフラスコ状やピーカー状の土坑跡が多数掘り込まれ、結果的には「中央広場」から「環状遺構帯」にかけて一体となった土坑域が形成される。この傾向はV層堆積時まで継続する。

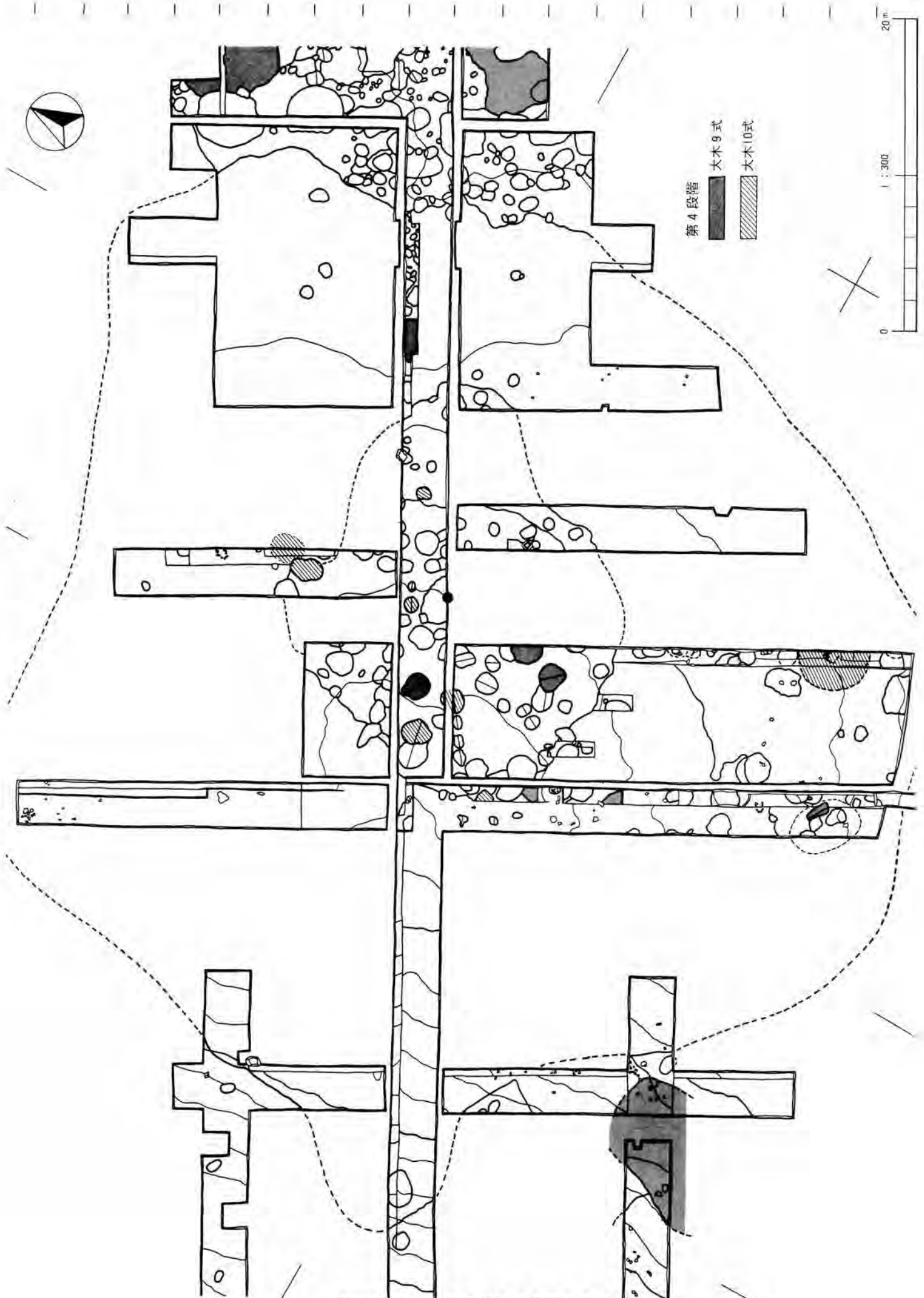
また、この段階では前段階ほど明瞭な墓域を形成せずに、土坑域の中に何地点かで小規模な塊状の墓域を形成しており、特に「中央広場」に集中するといった傾向は見られない。

ところで、この土坑域の性格についてであるが、形態からは従来貯蔵穴とされて来たものに相当する。これら大形の土坑跡内外からは石皿・凹石・敲打磨石といった堅果類の処理に用いたとされる石器類が多く出土しており、(特に第11次調査区付近で顕著)実際に「環状遺構帯」東部のN3E18グリッドVe層からは殻むき(脱殻)を終えたばかりのドングリが塊状にまとまり酸化した状態で出土している。これらのことから、土坑域は集落外から採集してきたドングリなどの堅果類を貯蔵・殻むき(脱殻)・アク抜きといった過程を経て食糧とするまでの共同作業を行う場であったと想定される。さらに、この地点に塊状の墓域を含むことから前述した生産活動のほかに、何らかの儀式や祭祀なども行われていた可能性もつけ加えたい。

土坑域の外側は、「東集落」側で柱穴状ピットが「環状遺構帯」内に掘り込まれ、掘立柱建物域が内側へ拡大していることが指摘できる。

居住域については、第3段階同様に「東集落」と「西集落」とが相対して存在しているが、第X群(大木9式)から竪穴住居跡が次第に中心部に向け寄り集まり、第XI群(大木10式)になると一部「環状遺構帯」の外縁部付近(特に南側と北側に竪穴住居跡や炉跡が確認されている)に進出して来る例もあり、結果として不整な環状か馬蹄形を呈していた可能性が大きくなった。

また、出土遺物では第4段階以降集落跡の中心部を境にして、東側には石棒が多く、西側に



第197図 崎山貝塚中央部遺構変遷図 (3)

は石皿が多いという傾向が見られた。これは「東集落」と「西集落」が石棒と石皿をそれぞれの集団のシンボルとして保有していたとの想定が可能となろうし、更に論を進めればそれぞれの集団が異った役割や性格を持っており、互いの相違をそれぞれが意識し合っていたとの想定も可能となる。しかし、これをただちに血族が異なる集団の同居などといった大きなレベルまで拡大して良いかどうかいささか疑問もあるため、ここでは同一の共同体内に役割や生活の異なる2つの集団が存在していた可能性を指摘するに留めたい。

おそらく、この傾向は少なくとも第3段階までは遡れる可能性が大きいと思われる。

最後に第4段階での斜面部の様相については、北貝塚でのみ遺物包含層が形成されるが、第3段階以前に比べるとやや低調となる傾向がある。しかし、北貝塚中心部の貝層についてはこの段階まで継続していた可能性が大きい。また、記述が前後したが動物遺存体についてはN3W3-1号土坑跡の埋土中にも貝層が形成されており、漁撈活動が継続していたことを指摘できる。

以上、第4段階の集落構成は中心部から墓壙域を含む土坑域・掘立柱建物域（東集落のみ）・居住域の3重構造で形成されており、居住域については当初東と西に分れていたものがやがて環状の馬蹄形を呈することを指摘する。

<第5段階—終末期、第Ⅶ群（後期前葉）>

第5段階はおおむね縄文後期の前葉に相当する。この段階は「環状遺構帯」の埋没する最終段階にあたり、IV層の下面～上面にかけて遺構が掘り込まれるものの、遺構総数はかなり減少する様である。集落構成についてもやはり第4段階と差異が見られる。

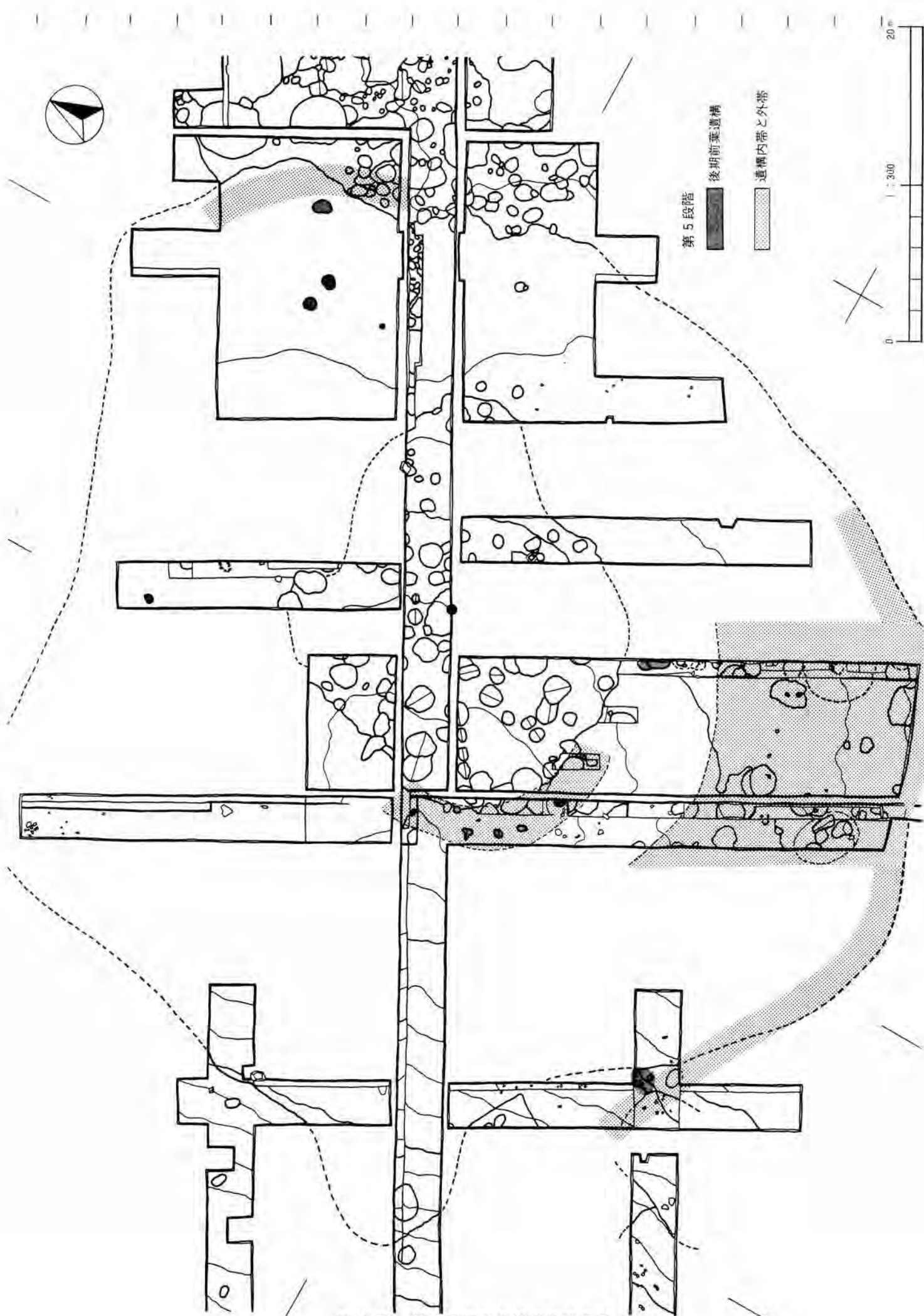
集落跡の中心部でおおむね第3段階の「中央広場」に相当する部分には第5段階に伴う遺構の確実な例は今のところ皆無である。末精査の遺構の中に該期に相当するものが含まれている可能性が全く無いとは言い切れないが、遺構の空白地帯あるいは稀薄地帯であり、「中央広場」と想定される。

「中央広場」の西縁部付近には小規模な配石遺構が7基弧状に分布している。この遺構群については、下部の土坑の規模や配石された礫の特徴から再葬墓である可能性を既に指摘しておいた。今のところ同様な遺構を北側や東側などで確認していないため環状にめぐるものとは言えないが、ややまとまって分布しているために「小配石遺構域」としておく。

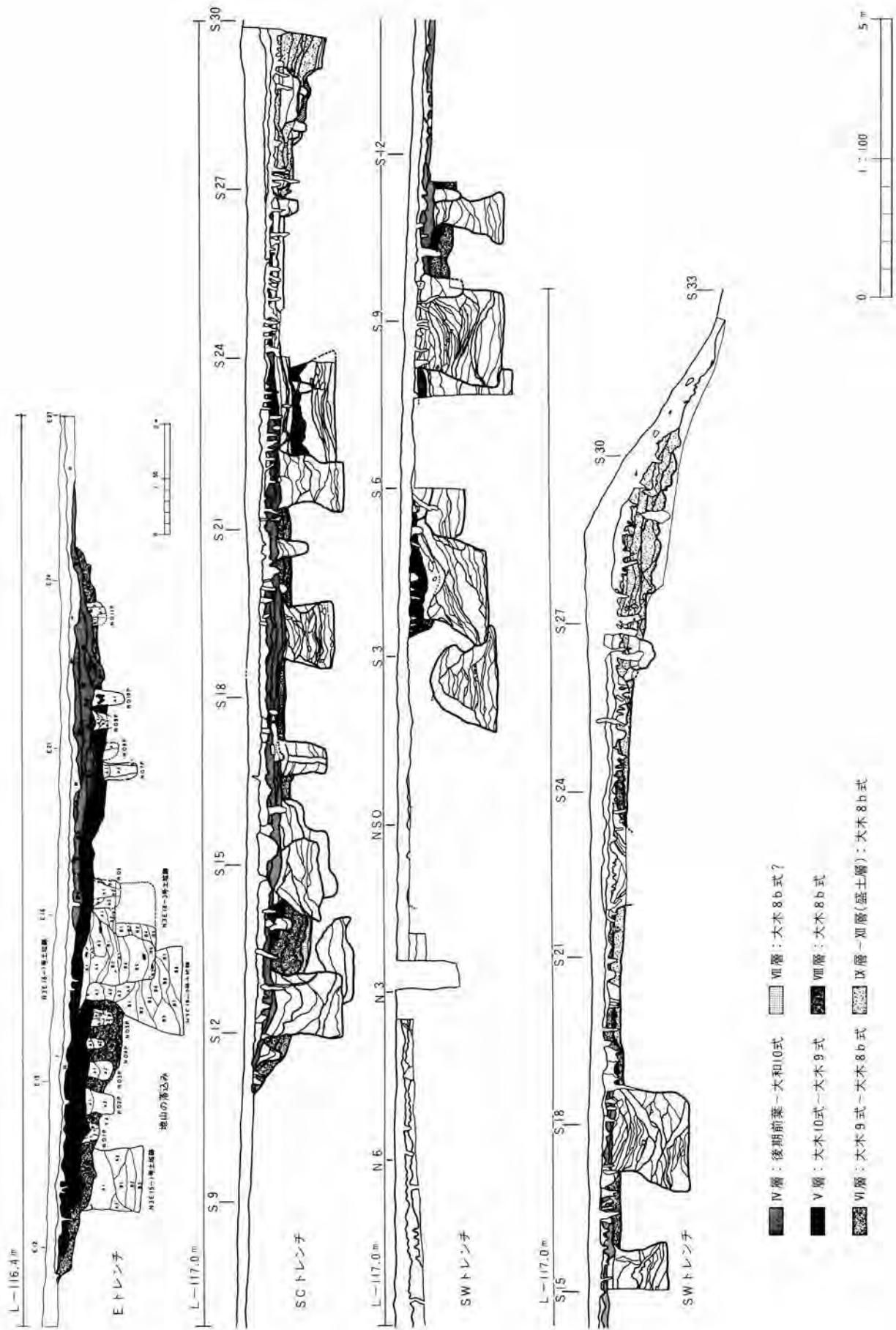
「小配石遺構域」の外側には比較的多くの遺構が確認されているものの明確な規則性を見出し得ない状況にある。南部～西部については「環状遺構帯」のIV層上面及び下面から遺構が掘り込まれており、「中央広場」寄りの部分にフラスコ状土坑跡などの大形の土坑跡が分布し、この外側に堅穴住居跡が分布する傾向が見られる。また、外側の部分には土器を伴出した墓壙跡（S24W15-1号墓壙跡）や配石遺構（S15W30-1号配石遺構）を含んでいる。

東部については「環状遺構帯」のIV層上面に石棒埋設遺構のほか配石遺構3基を確認している。このうち1基には破片ではあるが、やはり石棒を配石されたものが見られる。これらの南側には、やや小規模な遺構（土坑跡か）が数基検出されているが、性格は明瞭ではない。

北部については「環状遺構帯」のIV層上面からマグロ属椎骨を伴出した皿状土坑跡を検出している。この椎骨については11点出土したうち6点には刺突貝による貫通孔が認められた。貫



第198図 崎山貝塚中央部遺構変遷図(4)



第199図 環状遺構帯土層断面図

穿孔は白部を上下に貫通するものと、側面を貫通するものの2種がみられ、いずれも解体後に穿たれたものと見られる。これは通常の廃棄形態とは異なるもので、何らかの儀礼や儀式などが取り行われたものと考えられる。

これらの「小配石遺構域」の外側に分布する遺構群については明瞭な規則性を見出せなかったので「外側遺構域」として一括しておく。ただし、前述した様に墓墳跡・配石遺構・石棒埋設遺構・マグロ属椎骨集積土坑跡などの非日常生活に深く結びつく遺構を多く含む空間であることを強調しておきたい。

また、この段階では前段階まで見られた掘立柱建物跡の明確な共伴例は認められず、集落跡の範囲もおおむね「環状遺構帯」外縁に相当する直径60m程と、かなり小規模になる。さらに、斜面部には遺物包含層は全く形成されなくなる。ただし、わずかではあるがマグロ属椎骨などの魚骨を含むことにより、かろうじてではあるが漁撈活動が継続していたものと思われる。

以上、第5段階の集落構成は中心部から遺構空白域としての中央広場・遺構内帯としての小配石遺構帯・遺構外帯としての外側遺構帯の3重構造で形成されており、直径60m程の環状を呈することを指摘する。また、本段階の終了を以って崎山貝塚の縄文集落は終焉を迎える。

<第5段階以降>

第5段階以降についてはⅢ層中に縄文晩期や弥生時代の土器片が散在するのみで、遺構は確認していない。やや下り、平安時代になると「東集落」の東端部に竪穴住居跡を1棟検出したのみで、集落を形成したとは言い難い状況となる。さらに、中世以降は、表土や旧表土中に陶磁器片等の遺物が若干含まれる程度で遺構は全く確認されない。

(3) 周辺遺跡との関係について

ここでは前期初頭から後期前葉にかけて形成された崎山貝塚の集落跡と周辺部の集落跡の関係について触れてみる。

宮古市周辺部で確認された縄文土器で最も古い例は、今のところ貝殻文を施す土器群であり、銚ヶ崎館山貝塚の遺物包含層からは前期前葉の土器に混在した状態で、貝殻文を施すもの、微隆起線を施すもの・縄文日縄文や縄文日条痕を施すものが出土している。銚ヶ崎館山貝塚では今のところ遺構の確認ができていないものの、おそらく早期段階から集落が営まれたものと思われる(『館山報文90』)。

また、発掘調査により確認された遺構として最も古いものは、平成5年度に調査した重茂地区北部の笹沢Ⅰ遺跡から検出された1基の小竪穴であり、埋土中からは条痕日条痕文土器のみがまとまって出土している(註2)。

崎山貝塚で第1段階とした前期では、周辺地域において次第に遺跡の増加する傾向がみられ、しかも集落跡と呼ぶに十分な内容を持つ例が見られる。

前期で最も古い集落跡は重茂地区南部の千鷲遺跡である。千鷲遺跡は前期最初頭に位置づけられる上川名Ⅱ式(千鷲Ⅰ式)期に集落が形成されはじめ、上川名Ⅱ式後半～次型式(桂島式併行期)(千鷲Ⅱ式期)までは確実に集落が営まれるものの、大木Ⅰ式以降の竪穴住居跡は確認されていない。検出された竪穴住居跡の総数は34棟であるが、調査区外に存在するであろう

ものを含めるとその実数は更に増加すると思われる。いずれにしても該期においては有数規模の集落跡であると言える(註3)。

千鶏遺跡の集落構成については既に富樫泰時氏による論考がある(富樫、1993)。富樫氏によれば千鶏遺跡の集落は、中央部に広場を有しこれをとり囲む形で竪穴住居跡が環状にめぐり、しかもこれらの竪穴住居跡は北東側と南西側の2大群に分類できるというものである。

筆者らもこの意見にはおおむね賛同するものであるが、伴出遺物が無く所属時期が特定できないものまで含めて2段階の変遷を唱えるのは若干無理であろうと思われる。ここでは、千鶏Ⅰ式期では北東部にのみ弧状～半円状に展開していた居住域が千鶏Ⅱ式期で環状の構成をとったものと理解しておきたい。

また、崎山遺跡群内では大付遺跡から大木Ⅰ式期の竪穴住居跡1棟が、早稲橋Ⅱ遺跡からは大木Ⅱb式期の土坑跡1基が確認されている。いずれも崎山貝塚に関係した小規模な集落跡の一部と考えられる。

これらの遺跡数の増加は、通常は縄文海進に代表される温暖化によって説明づけるのが一般的であろう。この様な自然環境の好転とそれに伴う縄文社会の充実が崎山貝塚や千鶏遺跡などの大規模集落を生み出す母胎となったのであろう。

前期後半期については重茂地区北部の赤なしヶ沢遺跡から多量の土器が採集された例などがあるものの、発掘調査により集落跡を確認した例は今のところ無い。

崎山貝塚で台地上に中期集落が営まれた第2段階になると調査例がやや増加し、大木Ⅶa式～大木Ⅶb式期では山口地区の高根遺跡から竪穴住居跡が1棟確認されているほか重茂地区中央部の重茂館遺跡群から比較的規模の大きい遺物包含層を確認している調査例があるものの集落構成を明確にし得るものは無い。

続く大木Ⅷa式期になると遺跡数も増加し、鉾ヶ崎館山貝塚で集落形成が始まり、高根遺跡でもひとつの画期を迎える。高根遺跡は山口川に面した幅の狭い緩斜面上に居住域が形成され、この南側のやや低い部分に貯蔵穴群があり、ここから幅25m程の空白地帯を置いた南側の最も低い部分に土坑墓が密集するという構造をとる。検出した土坑墓の総数は80基以上に及び、通常の土坑墓のほか配石遺構状のものや完形に近い土器を埋設したものの3タイプが認められた。

居住域での調査面積が少なく集落構成は不明ではあるが、地形から見ると墓域群を中心とした環状構造をとる可能性は極めて小さく、居住域・貯蔵穴域・墓域がそれぞれ塊状に形成されたものと見るべきであろう。

尚、高根遺跡の墓域は崎山貝塚とともに市内で最も古い例のひとつとして位置づけられる。

大規模な土木工事を伴い極めて特徴的な集落跡が構成された崎山貝塚の第3段階(大木Ⅷb式)になると周辺の遺跡数は更に増加する。

鉾ヶ崎館山貝塚でもこの段階に画期を迎え、遺構数は増加するが竪穴住居跡と貯蔵穴が混在しており明確な規則性は見出せない。また、墓域の所存も今のところ不明である。

磯鶏地区では上村貝塚で小規模な貝塚を伴い集落が形成されはじめるが、この段階で底部穿孔の埋壙に伴い5体の改葬人骨が検出されたことと、遺構外ではあるがヒスイ大珠の出土を特筆しておく(小田野ほか1991)。

崎山遺跡群内ではトロノ木Ⅰ遺跡・トロノ木Ⅳ遺跡・大付遺跡などの小規模な集落が多く形

成されるが、やはり崎山貝塚に深く結びつくものであった可能性が大きい。

続く第4段階の前半期（大木9式）には著しく遺跡数が減少し、鎌ヶ崎館山貝塚や上村貝塚で中小規模の集落を営むに過ぎない状況となり、崎山貝塚で定形的な集落が保持され続けて行くこととは好対象を成す。

この段階の後半期（大木10式）になると遺跡数はいくらか持ち直す様であり、近内中村遺跡から堅穴住居跡が若干確認されたほか、金浜館跡からは60基以上の貯蔵穴のみが確認されている。

崎山遺跡群内では近隣の白石遺跡や早稲栃Ⅲ遺跡に比較的規模の大きな集落跡が出現するほか、早稲栃Ⅱ遺跡や千束長根遺跡に小規模な集落跡が形成される。

白石遺跡はおおむね大木10式期に形成され始める集落であるが、これまでの調査結果と遺物の散布状況から見ると環状か馬蹄形を呈するものと思われる。

ひとつの領域（遺跡群）内にこのような大規模集落の併立ないしは鼎立が起ったことは、周辺環境の豊かさも当然あったものと思われるが、やはり崎山貝塚が持っていた何らかの求心力が次第に弱まり解体に向かう傾向にあったことも想定する必要がある。これは、第3段階で形成された「中央広場」や「環状遺構帯」に貯蔵穴群を形成し始めた第4段階前半には既にその萌芽があったものと見られる。

崎山貝塚に形成された縄文集落の最終段階となる第5段階（後期中葉）になると再び集落数が減少し、崎山貝塚と白石遺跡以外で確実な例は今のところ無い。

崎山貝塚では中心部に中央広場を残しながらこの外側の遺構群が配石遺構・墓壇跡・石棒埋設遺構などを主体とし、堅穴住居跡や貯蔵穴が前段階に比して著しく減少する傾向がうかがえる。この結果、生活臭が薄く儀礼的色彩の濃いものになってしまう。

一方、白石遺跡は遺構数を減じながらも集落を維持していた様であるが、その実、例えば遺構面では通常石組複式炉から斜位土器埋設炉へ作り変えられ、また遺物面ではこれまで前期初頭から継続的に編入されていた大木式土器文化圏から離れ、青森県～岩手県北を中心とする上村式～蛭沢式の土器文化圏の影響下に入ることになる。

やがて、両遺跡ともに後期中葉を待たずしてほぼ同時に消滅してしまうことになる。

ところで、第5段階における崎山貝塚と白石遺跡の関係は祭祀性の強い集落と通常集落の併立と見ることも出来る。例えばこれは岩手県内で立石遺跡や湯舟沢遺跡などのように配石遺構や土坑墓などがあっても個別の遺跡であるが如く検出される事例を類例として上げることが出来る。

第5段階以降の後期中葉から晩期にかけて遺跡数の減少と分散化はより増加する傾向がみられる。崎山遺跡群内ではこの時期に崎山貝塚からわたのは遺跡を経て大付遺跡へと拠点集落が変遷して行ったものと想定されるものの、その実態は不明瞭である。しかし、これらの遺跡の立地状況等を見ると第5段階で見られた規模の縮小化を伴ったまま変遷していった可能性は大きいと言える。

また、大付遺跡では屈葬人骨1体のほか土坑墓がまとまって検出されており、集落内に墓域が固定されていたと思われる点を特筆しておきたい。

崎山遺跡群以外では今のところ市内で最大唯一とも言える大集落が近内中村遺跡に出現する。

集落の存続時期はおおむね後期後半から晩期を主体とし、巻貝を模した完形土器が出土するなど極めて特殊な内容を持つが、調査中でもあり詳細はこの正報告書を待つこととしたい。

(4) 同心円状の重層構造を呈する集落について

(1)～(3)では崎山貝塚の集落変遷と周辺部での遺跡群の様相を述べて来た。当地方でも各地区毎に崎山貝塚をはじめとする大規模集落が存在し、それぞれ拠点集落としての性格を果たしていたものと思われ、これらの大規模集落のうちほぼ同時期のものは約4kmの距離を置いて分布する傾向が見られる。

しかし、崎山貝塚の様に前期初頭から後期前葉にわたる長期間拠点的集落として存続した例は極めて稀である点・第3段階以降の集落形態が他に比較するもの無い点・集落構築時に大規模な土木工事を伴う点の3点を再確認しておきたい。

崎山貝塚の第3段階以降の集落は広場や墓域・居住域などといった空間が同心円状に重層構造をとることが判明した。各段階での構成内容は既に述べたとおりであるが、ここで再度要約すると、

第3段階、中央広場(墓域)―環状遺構帯(掘削と盛土による)―掘立柱建物域及び遺構空白域―居住域(東集落と西集落)

第4段階、土坑域(墓域を含む)―掘立柱建物域―居住域(当初の東集落と西集落の2群対立から後半では環状となる可能性大)

第5段階、中央広場(空白域)―遺構域(内帯として小配石遺構域、外帯として墓域、配石遺構、土坑、竪穴住居跡が形成されるが後2者は前段階に比して著しく減少)

となる。これらの共通する特徴は、集落の中心部には最終段階まで竪穴住居跡が進出することがなく常に非居住空間として固定されており、この結果居住域と非居住域が空間内には明瞭に区別されることになるが、その初源は第2段階まで遡りうる。更に、この2つの空間内にも環状遺構帯や掘立柱建物跡を配することによりその空間利用は複雑さを増すこととなる。

このように、ひとつの遺跡の中で広場・墓域・土坑域・掘立柱建物域・居住域などの空間が同心円状に整然と配置された例としては紫波町西田遺跡を上げることができる(佐々木ほか1980)。

西田遺跡は北上川中流域で奥羽山系からはほぼ東流する滝名川と北上川の合流点付近に位置し、両河川により形成された低地に逆L字形に張り出す残丘上に立地している。

発掘調査は東北新幹線の建設に伴い昭和50年度～昭和52年度にかけて実施されたもので、残丘上の平坦面から縄文中期中葉の大木8a式を主体とした極めて特殊な形態の集落跡が発見されたことはあまりに有名である。

第200図は西田遺跡の地形と検出遺構配置を示したものである(註4)。発掘調査が新幹線のルート内に限られており全容は把握できないものの、中期中葉の集落は逆L字形の残丘上の丁度折れ曲がった部分に立地しており、少なくとも南側の台地上へは広がらない様である。

次に集落の構成内容を見ると、中心部に192基にも及ぶ土坑墓を有する墓域があり、この外側に掘立柱建物跡がめぐり、更に外側に竪穴住居跡を主体とした住居域が形成されている。中心部の墓域は内帯を構成する14基と、環状帯を構成する178基に大別され、特に後者では8大



第200図 紫波町西田遺跡地形図、検出遺構配置図

群-11小群にわたる埋葬区が想定され、外側の掘立柱建物跡における構成単位と明確な対応関係が見られるという。

外縁を構成する居住域には北部で貯蔵穴の集中が見られ、これのみで環状の配置をとるものか、居住域内に塊状のブロックを形成するものなのかは不明であるものの、独立した空間を確保していたことは想定できよう。

西田遺跡の集落は、台地上の平坦面に地形に制約され自然発生的に形成されたものではなく、同一の台地上でもある一定の空間のみを限定して、極めて強力な社会的規制の下に形成されたものであると指摘できる。

この様にある意味では縄文集落の理想形とも言うべき極めて定形的な西田遺跡の集落跡は、この後周辺地域での類例報告が無かったために、特別視される傾向が強かった（酒井1991）。

ところが近年、青森県八戸風張（1）遺跡（後期中葉～後葉、坂川1992）・山形県村山市西海淵遺跡（中期後半主体、黒坂1992）・秋田県協和町上ノ山Ⅱ遺跡（前期後半）・岩手県一戸町御所野遺跡（中期後半主体、高田1993）などで西田遺跡に類似する形態の集落跡が確認されて来ており、改めてこの様な形態の集落跡に対する再認識が必要となっている。これらを概観すると、上ノ山Ⅱ遺跡が前期後半に伴う集落跡で、中心部から配石遺構-広場-大型住居跡群（中央部遺構群）-居住域（北東部遺構群・西部遺構群）（註5）の4重構造をとるといふ。

西海淵遺跡は中期後葉の大木8b式～大木9式前半期の集落跡が中心部より中央広場-墓壇群-土坑群-住居群（大型住居跡→円形住居跡へ変遷）-小ピット群？の4重～5重構造をとる。

御所野遺跡は中期後半を主体とする集落跡で、中心部から配石遺構群及び墓壇群-掘立柱建物群-弧状の盛土層-中央部居住域-東部及び西部居住域の5重構造となる（居住域をひとつと考えれば4重構造）。

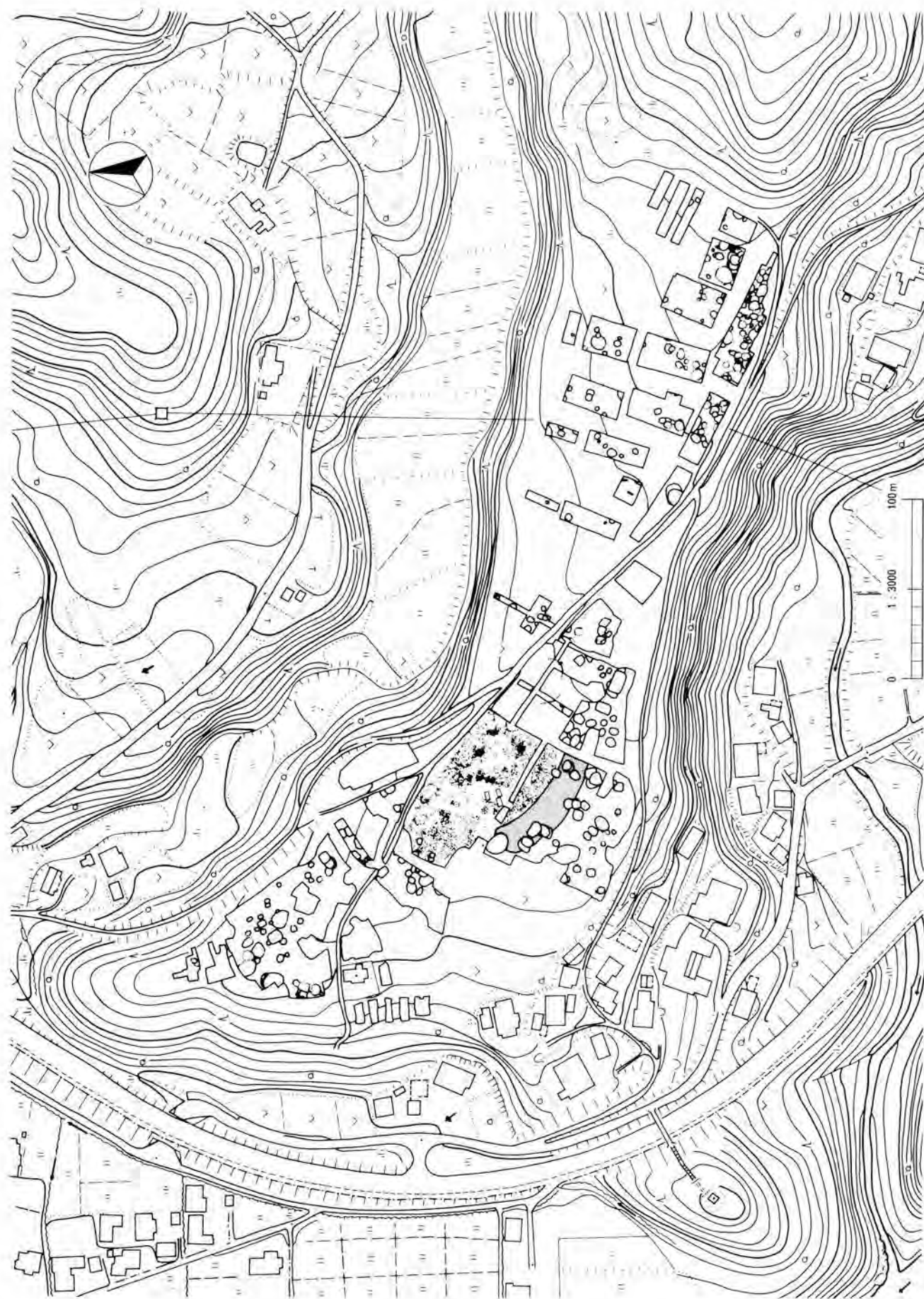
風張（1）遺跡は後期中葉～後葉の集落跡で、中心部から東西両端に墓域を含む広場-貯蔵穴群-掘立柱建物群-居住域の4重構造をとる。

これらの極めて特徴的な形態を有する集落跡の形態的特徴については、墓域や居住域などの集落を構成する空間が円心円状に整然と幾重にも重なっている点にはかならない。しかし、これよりも重要なのは集落跡の中心部を墓域として集落を構成し、しかも墓域と居住域の間に掘立柱建物群を伴っている点であり、西田遺跡の例を典型と見れば、報告者の佐々木勝氏が指摘する様に掘立柱建物跡は埋葬区に対応する祭祀施設（葬送儀礼の施設や霊送りの場）として位置づける必要があろうと思われる。

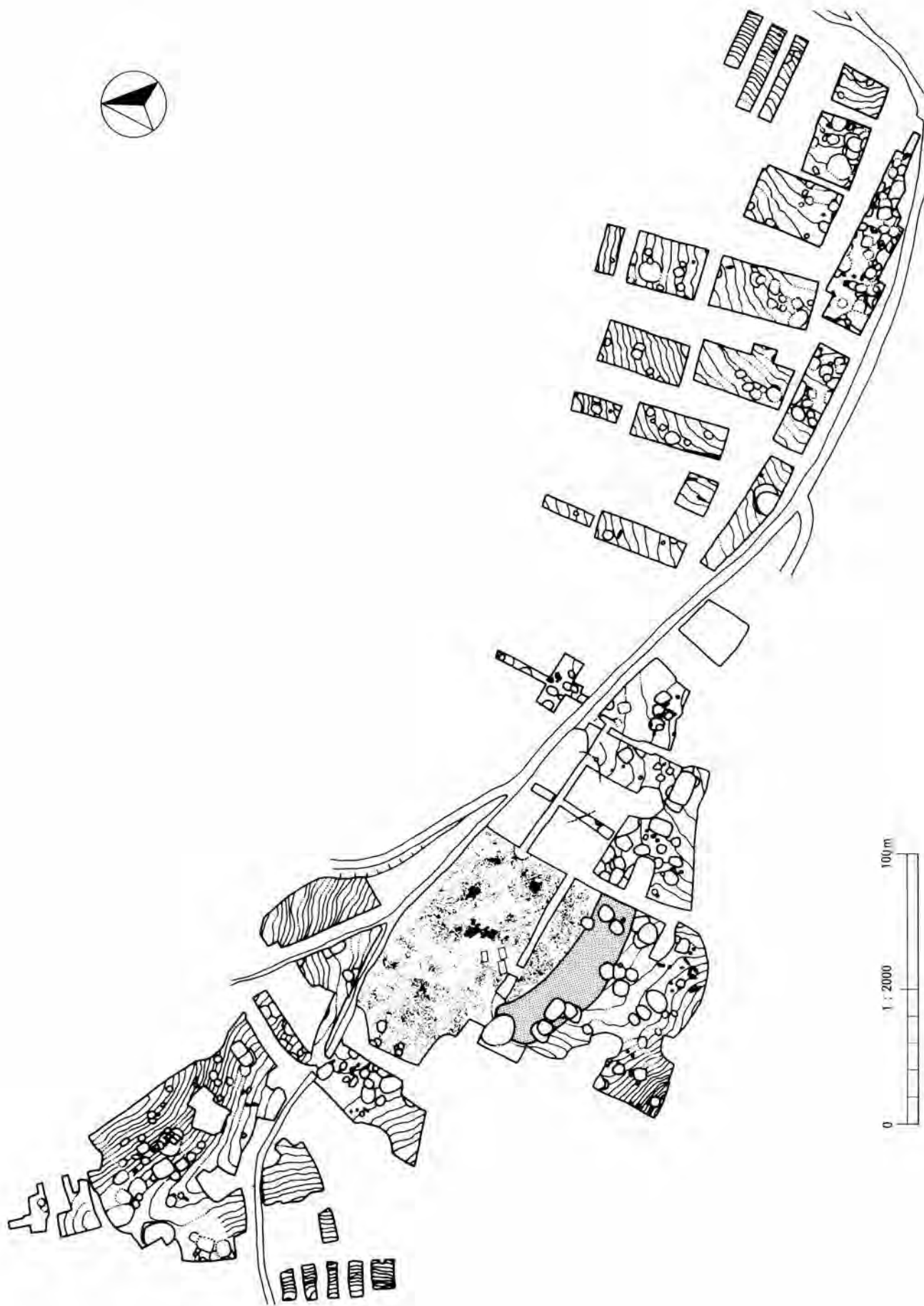
つまり、同心円状の重層構造を呈する集落では、集落の中心部に墓域を固定したのみならず、おそらくは葬送儀礼までもがひとつの確立を見た結果構成された集落であるとも想定できる。

ところで、この様な形態の集落は言うまでもなく所謂環状集落の一類形として位置づけられ、鈴木保彦氏の分類（鈴木1991）によれば「集落の中央部に墓域が設定されるもの」にはほぼ相当するものである。鈴木氏によれば関東地方では阿久遺跡をはじめとして前期から後期・晩期にわたり類例がみられるが、特に神奈川県内に多く集中する傾向があるという。

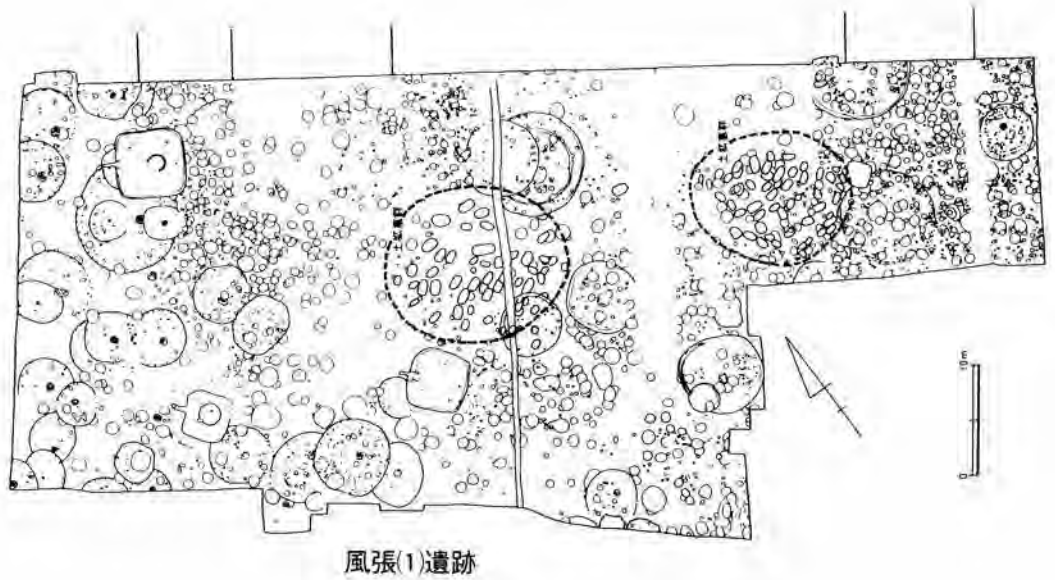
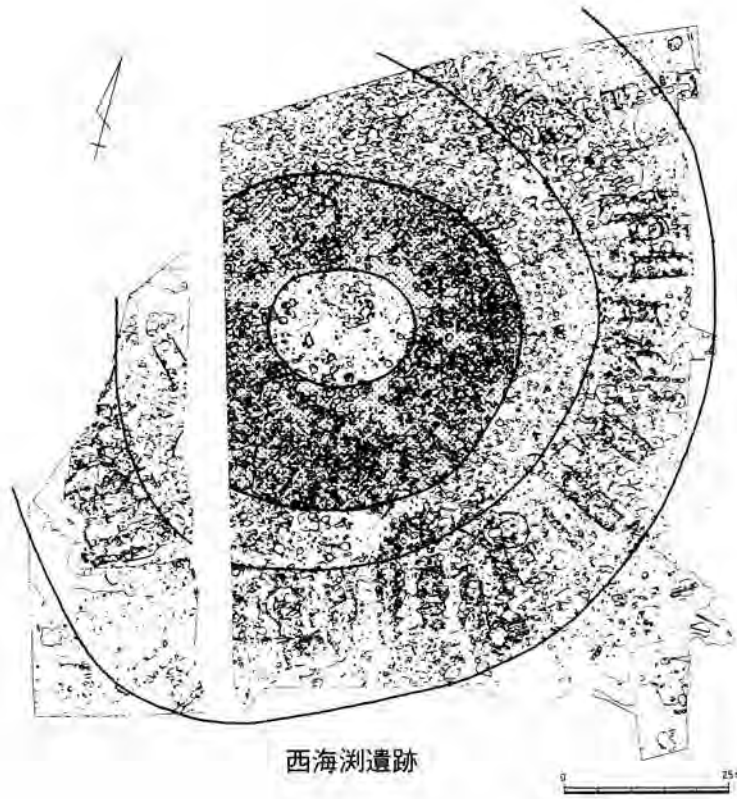
さらに、鈴木氏はこのような集落のあり方は静岡県若宮遺跡の集落を例として草創期末葉まで遡る可能性があるが、おおむね前期以降の東北地方から関東・中部地方において決して普遍



第201図 一戸町御所野遺跡地形図



第202図 一戸町御所野遺跡検出遺構配置図



第203図 山形県村山市西海淵遺跡、青森県八戸市風張(1)遺跡

的なあり方ではないにしても縄文集落の一典型として確実に位置づけられる点を指摘している（鈴木1991）。

また、長沼孝氏によれば北海道地方では中野B遺跡に代表されるように早期中葉の段階から中央部に墓域を持つ環状集落が出現するという（長沼1993）。

東北地方においては早期以前の環状集落で確実な例はほとんど無く、前期初頭の千鶏遺跡で環状を呈する集落が確認され、前期後半の上ノ山Ⅱ遺跡では同心円状の重層構造を呈する集落が形成されるが、これらの前期集落では墓域や掘立柱建物跡が集落内の空間に固定されておらず、未だ定型化されていない段階だと考えることができよう。

ところが、中期中葉の西田遺跡の段階では極めて典型的な同心円状の重層構造を呈する集落の出現を見ることになり、この系譜は中期中葉～後葉の西海淵遺跡・崎山貝塚第3段階の集落や中期後半の御所野遺跡・崎山貝塚第4段階の集落を経て、後期前葉の風張（1）遺跡・崎山貝塚第5段階の集落へ受け継がれて行ったと言える。

さらに、この集落形態は佐々木氏や富樫氏らが指摘する様に秋田県鹿角市の大場環状列石に極めて類似することから、これらの環状列石を生み出す母胎となった可能性が大きい。事実、万座環状列石の外側にも掘立柱建物跡が見られ、配石墓との対応関係を有する可能性が大きいという。報告者の秋元信夫氏はこれらの掘立柱建物跡を西田遺跡との比較を通してやはり祭祀施設と想定されている（秋元ほか1988）。

以上のように崎山貝塚の第3段階以降の集落形態を西田遺跡を代表とする同心円状重層構造集落の1類型として位置づけてみたが、これらの集落跡と崎山貝塚の相違点についても触れてみたい。

第1は崎山貝塚第3段階の集落では中央広場（墓域）外側に環状遺構帯がめぐる点、第2は、外側の居住域が環状とならない点、第3は他の集落跡はおおむね1型式～2型式程度の短期間で終焉を迎えるのに対し、崎山貝塚は数型式にわたり集落が営まれている点である。

まず、第1点に関してはこの形態が今のところ崎山貝塚独自のものであり、かつて北海道苫小牧市静川16遺跡などとの類似性からその施設を墓域を区画する環濠であろうとの想定をした。現在は既に述べたとおり環濠の名称は用いないが、崎山貝塚の環状遺構帯も掘削を伴う土木工事により構築されていることと、この施設が機能した第3段階ではこの地点がほぼ遺構の空白地帯となっていることから、やはり墓域とその外側の区画を意図したものであり、墓域をより際立たせるためのものである可能性が大きいことを指摘しておきたい。そしてこの施設が機能するのはあくまで精神的、社会的規制に基づくものであり、むしろ集落の構成員による共同作業でこの様な施設を造営すること自体に大きな意義があったと考えたい。

第2点については第3段階の集落形態が環状遺構帯の外側に存在する掘立柱建物跡と居住域が環状とならないということである。居住域が東と西に二分化した理由は台地上に十分な広さが無かったという地形的制約を理由にできよう。しかし、この内側の掘立柱建物跡については西集落東縁の空白地帯にもこれを配せばほぼ環状の配置になるはずだし、更には集落の中心部をもう少し西寄りにレイアウトするか、あるいは環状遺構帯の規模をもう少し縮小しておけば掘立柱建物跡を環状に配置する空間は十分に確保できたはずであった。

しかし、崎山貝塚第3段階集落造営時にはあえてこのような配置をとらなかつたと考えたい。

これは居住域の二分化こそが当初からの大きなテーマであり、既に述べたように非等価的な居住域を東西の両極に配し、それぞれに異なった性格を与えようとする意識の表れだったと想定される。ふたつの居住域の違いを決定的なものとするのはやはり掘立柱建物跡の有無である。この遺構が西田遺跡同様に葬送儀礼に伴う祭祀施設だとすれば、崎山貝塚ではこの行為が東集落でのみ行われたことになりうる。こうした傾向は第4段階まで継続しているが、更に遺物面では東集落周辺でのみ石棒が集中していることも無関係でないと思われる。

第3点については崎山貝塚以外の同心円状の重層構造を呈する集落が概して短命であったためにひとつの遺跡の中でこの様な集落跡が形成され始めてから終焉を迎えるまでのプロセスがつかみづらい点が問題点となっている。

一方、崎山貝塚では第3段階から第5段階と長期にわたり同心円状の集落構成が確認されたことになり、一応同心円状の重層構造を呈する集落の形成から終焉までのプロセスを追うことができる。しかし、特に第4段階では第3段階での規制がくずれて集落構成がやや変容する点が問題となっている。この点については第4段階でも中央広場が存在し、土坑墓・貯蔵穴・ドングリのブロックが一体となった何らかの祭祀がとり行われていたとの想定も可能にはなるが、これを検証する類例が欠落しているのが実情である。

いずれにせよこれらの問題点については、当時崎山貝塚の集落自体がかかえていた問題点だったのか、あるいは当時の縄文社会内での情勢、例えば複式炉を持つ集落跡と以前の集落では異なった社会規制が働いていたのか、更には同心円状の重層構造を呈する集落自体がかかえていた変革の時期だったのかといった様な問題設定を踏まえて資料の蓄積を待ち再度検討することとしたい。

(5) 立石について

崎山貝塚の集落跡を特徴づけるものとして集落の中心部に立つ立石の存在を忘れることはできない。

岩手県内では近年の発掘調査により立石を持つ集落の類例が増加しつつあるので、これらの紹介をしながら崎山貝塚との比較を試みたい。

まず、県北部の馬淵川流域にまとまった分布が見られ、二戸市内には荒谷遺跡(註6)のほかに堀野遺跡と舌崎遺跡に類例が報告されている(註7)。また、一戸町では御所野遺跡(高田1993)が上げられる。

次に北上川流域では上流域に松尾村の釜石環状列石(註8)が、中流域に北上市樺山遺跡(註9)や大迫町立石遺跡(中村1979)が存在している。

また、沿岸部では田野畑村館石野I遺跡(註10)があるほか、閉伊川中流域の新里村で腹帯配石遺構群(瀬川1989、1990)、上流域の川井村の片巢遺跡(註11)が分布している。

更に、宮古市内では崎山貝塚のほかにかつて磯鶏蝦夷森貝塚にも立石があったが現在は抜きとられた様である。

これらのうち、発掘調査により内容の判明しているものは御所野遺跡であり、集落の中心部に形成された配石遺構群のなかの1基に立石が伴っている。荒谷遺跡もこれとほぼ同様と思われる、居住域に隣接する(集落の中心部か?)配石遺構群のなかに高さ1.35mという巨大な立石

が1基伴っている。

これらとは若干趣を異にするものとして大迫町立石遺跡を上げることができる。立石遺跡も配石遺跡群のなかに立石を伴うものがあるが、周辺に居住域が確認されず配石遺構のみで形成された遺跡の様に見受けられる。また、この周辺部からは多量の土偶や土製品・石製品が出土しており、祭祀遺跡として位置づけられている。ただし、配石遺構自体は下部に土坑を伴うものもあり、墓壙と考えて良さそうである。

樺山遺跡でも居住域からやや離れた地点に配石遺構群が形成され、自然礫のほかに石皿を転用した立石が伴っている。

以上のものはおおむね墓壙に伴う例として指摘されよう。そして、立石の性格は墓標の様な性格が想定される。

一方、閉伊川流域や沿岸部のものに目を向けると、腹帯配石遺構群では立石の下部に土坑跡を確認できないものもあり、また、立石の配置も南北に3基が並ぶ例や、環状の配石遺構中に埋設されるものもあるなど多様性があり、一概に墓壙に伴ったものとは言い切れないものもある。しかし、ここでは確認調査のみで精査を行っていないので断定はできない。

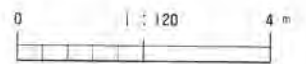
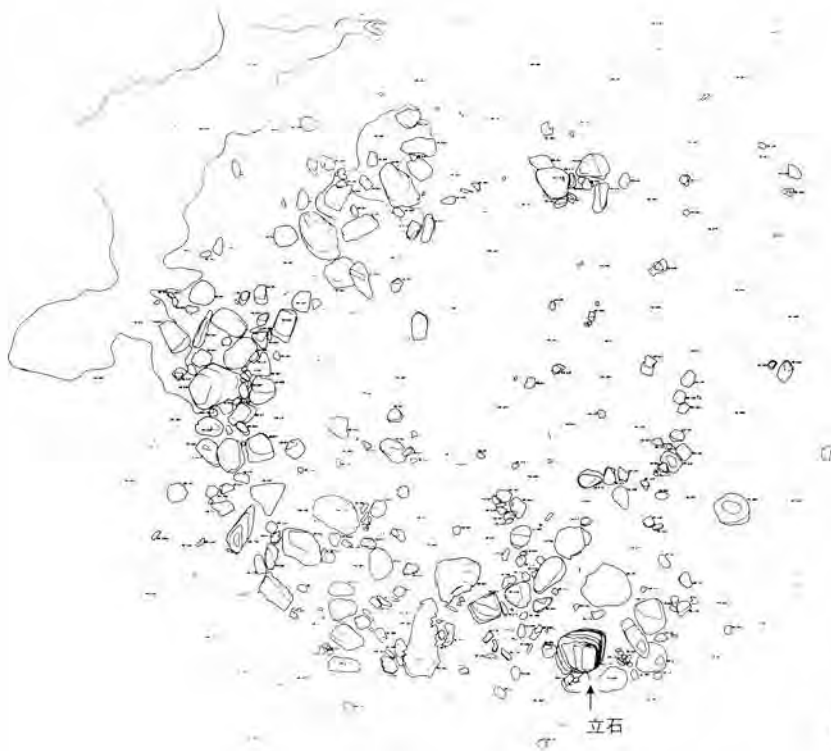
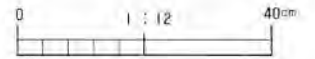
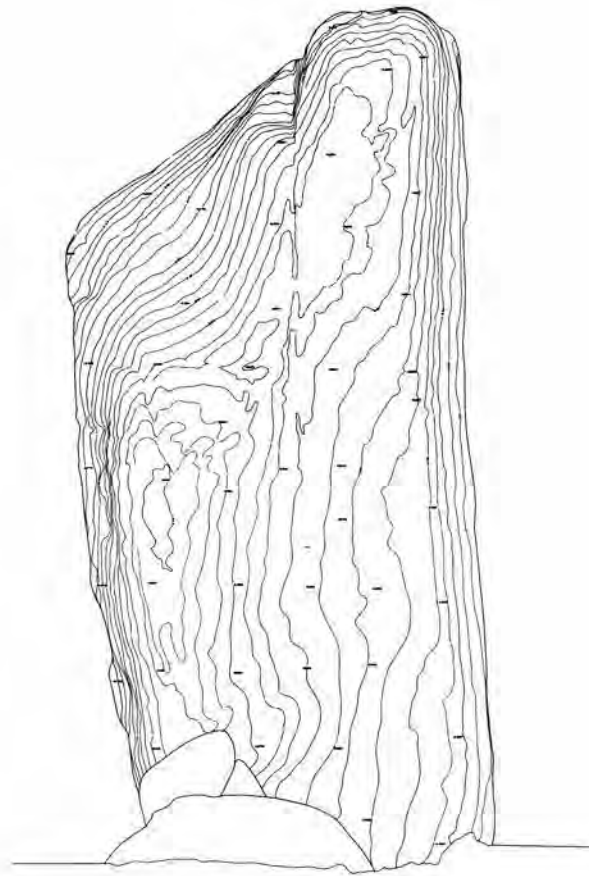
また、館石野Ⅰ遺跡では、長さが100mを超える列石が確認され、これの所々に立石が伴っている。立石の下からは墓壙と思われる土坑の発見されたものと、掘り方と思われる小規模な土坑のみしか伴わないものの2種が報告されており、必ずしもすべてが墓壙に伴ったものでない可能性が指摘できる。

このように、沿岸部の立石は内陸部のものに比べて多様性があり、定型化されていない可能性が指摘できよう。尚、これら県内の立石はおおむね中期後半～後期前半に伴うとの年代観が与えられている。

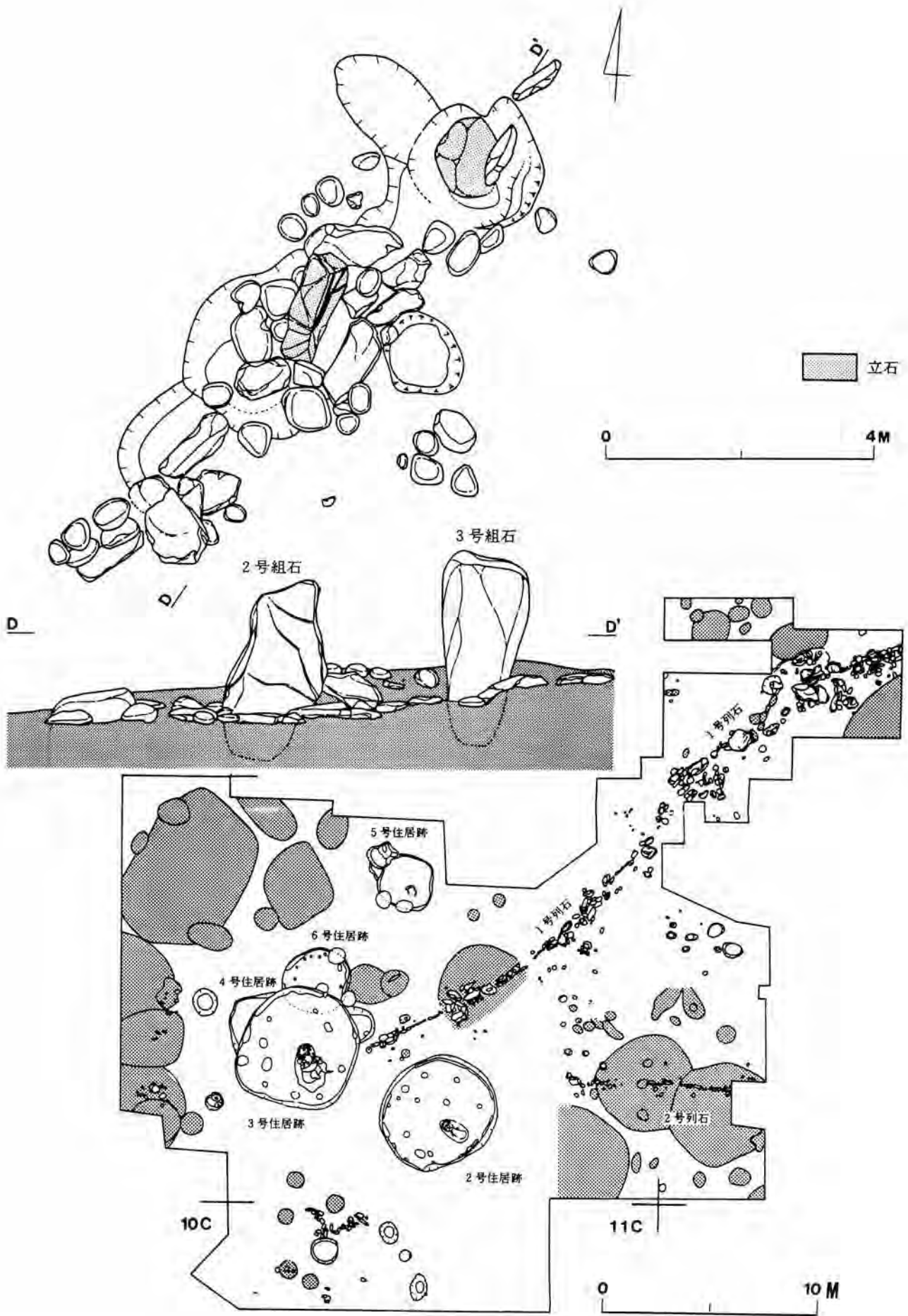
ところで、崎山貝塚の立石は検出面では下部に掘り方程度の小規模な土坑しか認められず、また、これに伴う配石も認められない。更に、かつては中央広場の両端に存在していたらしいことを加味すると、やはりこれも一概に墓壙跡に伴うものとは決めかねる状況にある。

更に、この立石の造営時期は他の例よりやや古い年代観を与えることになるが、土木工事を伴って中央広場と環状遺構帯を作り、東西に居住域を配した第3段階に立てられ、以後第5段階まで機能したものと考えておきたい。

つまり、この立石が絶えず存在していたために、集落の中央部が絶えず非居住域であったと想定しておく。ただし、この点については立石の下部を精査するなど発掘調査を通して検証して行きたい。



第204図 二戸市荒谷遺跡の配石遺構と立石



第205図 田野畑村館石野I遺跡の立石



川井村 片巢遺跡 立石遠景



同上 近景 (写真 新里村 佐々木健氏 提供)

註

- 註1 1992 『崎山遺跡群Ⅵ ー平成3年度発掘調査概報ー』 宮古市教育委員会
1993 高橋憲太郎 「岩手県宮古市崎山貝塚」『月刊考古学ジャーナル』No. 364
ニューサイエンス社 ほか
- 註2 平成6年度報告書刊行予定
- 註3 千鶏遺跡以下市内各遺跡の調査内容はそれぞれの調査報告書によった。いずれも宮古市教育委員会刊行。
- 註4 西田遺跡及び御所野遺跡の地形図と検出遺構配置図を第200図～第202図に提示したがこれは報告書をもとに新たに作成したものであり、もしも事実と異なる場合は筆者の責任である。
- 註5 富樫1993による。
- 註6 荒谷遺跡の立石は高さ135cmにも及ぶ国内でも最大級のものである。尚、同遺跡は現在報告書作成中であるが担当者の関豊氏の御好意により資料を提供していただいた。ここに記して感謝申し上げます。
- 註7 1953 草間俊一ほか「第七章 立石遺跡」『考古学提要ー岩手県を主とする』奥羽史談会 及び、1960小山末治「三 県内の石造遺構」『岩手県史 第1巻 上古篇・上代篇』岩手県、による。
- 註8 1985 『岩手の遺跡』岩手県埋蔵文化財センターより。
- 註9 1969 『北上市稲瀬町樺山遺跡緊急調査報告（昭和43年度）』北上市教育委員会 及び註7・註8による。
- 註10 早大考研 1992 ほかによる
- 註11 片巢遺跡は閉伊川の上流域に位置するが、最近この遺跡に立石が伴うことが新里村佐々木健氏により確認された。同氏の御好意により立石の写真を提供していただき感謝申し上げます。
- 参考・引用文献（前述したものは除く）
- 秋元信夫ほか 1987 『大湯環状列石 周辺遺跡発掘調査報告書（3）』鹿角市教育委員会
秋元信夫ほか 1988 『大湯環状列石 周辺遺跡発掘調査報告書（4）』鹿角市教育委員会
秋元信夫ほか 1989 『大湯環状列石 周辺遺跡発掘調査報告書（5）』鹿角市教育委員会
秋元信夫ほか 1992 『大湯環状列石 発掘調査報告書（8）』鹿角市教育委員会
小野田哲憲ほか 1991 『上村貝塚発掘調査報告書』（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター
黒坂雅人 1992 「山形県村山市西海湖遺跡」『日本考古学年報43（1990年度版）』日本考古学協会
酒井宗孝 1991 「岩手県における縄文中期の集落遺跡」『よねしろ考古第7号』よねしろ考古学会
坂川進 1992 「青森県八戸市風張（1）遺跡」『日本考古学年報43（1990年度版）』日本考古学協会

古学協会

- 佐々木勝ほか 1980 『東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書-VII-(西田遺跡)』 岩手県教育委員会
- 佐藤一夫ほか 1983 『静川16遺跡 縄文時代の環濠と集落』 苫小牧教育委員会
- 鈴木保彦 1984 「集落の構成」『季刊考古学』第7号 雄山閣
- 々 1991 「関東・中部地方における縄文時代の集落」『よねしろ考古』第7号 よねしろ考古学会
- 々 1988 a 「定型的集落の成立と墓域の確立」『長野県考古学会誌』57号 長野県考古学会
- 々 1988 b 「縄文集落の盛衰」『考古学ジャーナル』No. 293 ニューサイエンス社
- 瀬川司男 1989 『腹帯配石遺構群発掘調査報告I』 新里村教育委員会
- 々 1990 『 々 II』 々
- 高田和徳ほか 1993 『御所野遺跡I 縄文時代の大集落』 一戸町教育委員会
- 武井則道 1984 「「村落」のなかの集落」『季刊考古学』第7号 雄山閣
- 富樫泰時 1993 「縄文集落の変遷=東北地方」『季刊考古学』第44号 雄山閣
- 中村良幸 1979 『立石遺跡-昭和52年・53年度発掘調査報告書-』 大迫町教育委員会
- 長沼考 1993 「縄文集落の変遷=北海道」『季刊考古学』第44号 雄山閣
- 横浜市埋蔵文化財センター 1990 『全遺跡調査概要』
- 早稲田大学考古学研究室 1992 『館石野I遺跡-縄文時代列石遺構の調査-』
- 々 1993 「岩手県田野畑村館石野I遺跡第七次発掘調査概報」
- 『史観第百二十九冊』

2 貝塚とその構成内容について

崎山貝塚は1で述べたとおり極めて特徴のある集落を構成しているが、これに伴い斜面部や遺構埋土中に貝塚を形成しており、これらが遺構の変遷過程にほぼ対応している点が大きな特徴となっている。つまり、第1段階では南貝塚を中心に堆積し下層から小規模な貝ブロックA～C（大木1式期）、獣骨層（大木2b式～3式）、魚骨層（大木4式?以降）となる。第2段階では南貝塚最上部の魚骨層と東集落のN21E93-1号堅穴住居跡埋土中に貝塚などが形成されている。第3段階から第4段階では北貝塚中央部の貝塚が形成されるが、第4段階の後半になると集落中央部のフラスコ状土坑中にも貝層を形成した例が認められる。集落最終段階の第5段階になると斜面部に貝塚は形成されず、集落内の土坑跡にマグロ層の椎骨が集積した例を認めただけとなる。

また、これ以外に最近宮古市文化財保護審議委員の北山浩氏から北貝塚には新たな貝塚が存在するとして、昭和48年に撮影した写真数葉の提供を受けたのでここに提示する。北山氏から伺った貝塚の発見地点を第213図（A地点）に示しておくが、丁度北貝塚と東集落の境界付近に相当する。

この後現地踏査を試みたが土砂が厚く堆積しておりその存在を確認できなかったので後日改めて再調査を行った上で報告したい。尚、提供を受けた写真によるとこの貝塚は破碎された貝殻を主体とするようで、間に土層を挟みながらもかなりの層厚をもって堆積しているようである。

これらを総合すると崎山貝塚の貝層は中小規模の地点貝塚が集まって南北斜面に貝塚群を構成しており、また、貝塚の周辺部には遺物包含層（土器捨場）が伴うことから斜面部全体が廃棄域を構成していたと言える。そして、これらは前期では南貝塚や東包含層で形成されるがやがて中期になると北貝塚へ移行して行ったものである。

（1） 崎山貝塚から検出された動物遺存体について

これまでの調査で得られた動物遺存体は一部のものを除き一応同定が終了している。これらの同定は高橋と三浦が担当したが、調査指導委員の先生方をはじめ岡村道雄氏・小田野哲憲氏・熊谷常正氏・佐藤正彦氏・熊谷賢氏・高橋一成氏の諸氏には指導・助言をいただき、さらには一部の資料の同定までお願いしている。

尚、概報では種名まで記載したものの、後の検討で属や科レベルの同定の留めたものもあるので、ここに訂正する。また、種名の記載順は『新日本動物図鑑』（北陸館）に従った。

<崎山貝塚出土動物遺存体種名一覧>

I 軟体動物門 Phylum MOLLUSCA

i) 腹足綱 Class GASTROPODA

a) 前鰓亜綱 Subclass PROSOBRANCHIA

1 クロアワビ *Nordotis discus* (REEVE)



北貝塚A地点貝層の堆積状況（昭和48年撮影）



同上 獣骨等出土状況（昭和48年撮影）

（写真提供 北山浩氏）

- | | | |
|------------------------------|--------------|---|
| 2 | ユキノカサガイ科の一種 | Acmaeidae gen. et sp. indet. |
| 3 | イシダタミガイ | <i>Monodonta labio</i> (LINNÉ) |
| 4 | コシタカガンガラ | <i>Omphalius rusticus</i> (GMELIN) |
| 5 | クボガイ亜科の一種 | Tequolinae gen. et sp. indet. |
| 6 | タマキビガイ | <i>Littorina brevicula</i> (PHILIPPI) |
| 7 | クロタマキビガイ | <i>Neritrema sitkana kurila</i> (MIDDENDORFF) |
| 8 | オオウヨウラクガイ | <i>Ocenebra japonica</i> (DUNKER) |
| 9 | チヂミボラ | <i>Nucella heyseana</i> (DUNKER) |
| 10 | エゾチヂミボラ | <i>N. freycineti</i> (DESHAYES) |
| 11 | レイシガイ | <i>Thais bronni</i> (DUKER) |
| 12 | イボニシ | <i>T. clavigera</i> (KUSTER) |
| b) 有肺亜綱 Subclass PULMONATA | | |
| 1 | オカモノアラガイ | <i>Succinea lauta</i> Gould |
| 2 | ホソオカチヨウジガイ | <i>Allopeas pyrgula</i> (SCHMACKER et BÖTTGER) |
| 3 | オカチヨウジガイ | <i>A. kyotoensis</i> (PILSBRY et HIRASE) |
| 4 | マルオカチヨウジガイ | <i>A. brevispira</i> (PILSBRY et HIRASE) |
| 5 | ナカネガイ科の一種 | Punctidae gen. et sp. indet. |
| 6 | バツラマイマイ | <i>Discus pauper</i> (GOULD) |
| 7 | オオコハクガイ | <i>Zonitoides nitidella</i> (MÜLLER) |
| 8 | コハクガイ科の一種 | Zonetidae gen. et sp. indet. |
| 9 | ベッコウマイマイ科の一種 | Helicarinae gen. et sp. indet. |
| 10 | オナジマイマイ科の一種 | Bradybaenidae gen. et sp. indet. |
| ii) 二枚貝綱 Class BIVALVIA | | |
| 1 | ムラサキインコガイ | <i>Septifer (Mytilisepta) virgatus</i> (WIEGMANN) |
| 2 | イガイ亜科の一種 | Mytilidae gen. et sp. indet. |
| 3 | マガキ | <i>Crassostrea gigas</i> (THUNBERG) |
| 4 | チリハギガイ | <i>Lasaea undulata</i> (GOULD) |
| 5 | コタマガイ | <i>Gomphina (Macridiscus) melanaegis</i> ROMER |
| 6 | アサリ | <i>Tapes (Amygdala) philippinarum</i> (A. ADAMS et REEVE) |
| 7 | クチバガイ | <i>Caecella chinensis</i> DESHAYES |
| 8 | イソシジミ | <i>Soletellina (Nuttallia) olivacea</i> (JAY) |
| 9 | ニッコウガイ科の一種 | Tellinidae gen. et sp. indet. |
| 10 | オオノガイ | <i>Mya (Arenomya) arenaria oonogai</i> MAKIYAM |
| A II 節足動物門 Phylum ARTHROPODA | | |
| i) 蔓脚亜綱 Subclass CIRRIPIEDIA | | |
| 1 | アカフジツボ | <i>Balanus tintinnabulum rosa</i> PILSBRY |
| 2 | チシマフジツボ | <i>B. cariosus</i> (PALLAS) |

Ⅲ 棘皮動物門 Phylum ECHINODERMATA

i) 海胆綱 Class ECHINOIDAE

- 1 オオバフンウニ科の一種 Strongylocentrotidae gen. et sp. indet.

Ⅳ 脊椎動物門 Phylum VERTEBRATA

i) 軟骨魚綱 Class CHONDRICHTHYES

- 1 ツノザメ科の一種 Squallidae gen. et sp. indet.
2 板鰓魚綱の一種 Elasmobranchii oder indet.

ii) 軟骨魚綱 Class OSTEICHTHYES

- 1 ニシン *Clupea pallasii* (CUVIER et VALENCIENNES)
2 マイワシ *Sardinops melanosticta* (TEMMINCK et SCHLEGEL)
3 カタクチイワシ *Engraulis japonica* (HOULTUYN)
4 サケ科の一種 Salmonidae gen. et sp. indet.
5 ウグイ属の一種 *Tribolodon* sp.
6 アナゴ科 Congridae gen. et sp. indet.
7 マグロ属の一種 *Thunnus* sp.
8 カツオ *Katsuwonus pelamis* (LINNE)
9 ソウダガツオ属の一種 *Auxis* sp.
10 サバ属の一種 *Scomber* sp.
11 サバ科の一種 Scombridae gen. et sp. indet
12 ブリ属の一種 *Seriola* sp.
13 アジ科の一種 Carangidae gen. et sp. indet
14 スズキ *Lateolabrax japonicus* (CUVIER et VALENCIENNES)
15 マダイ *Pagrus major* (TEMMINCK et SCHLEGEL)
16 クロダイ *Acanthopagrus shlegelii* (BLEEKER)
17 タイ科の一種 Sparidae gen. et sp. indet.
18 ニシキギンポ科の一種 Pholidae gen. et sp. indet.
19 ハゼ科の一種 Gobiidae gen. et sp. indet.
20 ウミタナゴ科の一種 Embiotocidae gen. et sp. indet.
21 ベラ科の一種 Labridae gen. et sp. indet.
22 カワハギ科の一種 Monacanthidae gen. et sp. indet.
23 フサカサゴ科の一種 Scorpaenidae gen. et sp. indet.
24 アイナメ科の一種 Hexagrammidae gen. et sp. indet.
25 カジカ科の一種 Cottidae gen. et sp. indet.
26 ホウボウ科の一種 Triglidae gen. et sp. indet.
27 ヒラメ *Paralichthys olivaceus* (TEMMINCK et SCHLEGEL)

28 カレイ科の一種	Pleuronectidae gen. et sp. indet.
iii) 爬虫綱 Phylum REPTILIA	
1 ヘビ亜目の一種	Ophidia family indet.
iv) 鳥綱 Phylum AVES	
1 ミズナギドリ科の一種	Procellariidae gen. et sp. indet.
2 ガンカモ科の一種	Anatidae gen. et sp. indet.
3 ワシタカ科の一種	Accipitridae gen. et sp. indet.
4 キジ科の一種	Phasianidae gen. et sp. indet.
5 ツグミ亜科の一種	Turdinae gen. et sp. indet.
V) 哺乳綱 Phylum MAMMALIA	
1 ニホンザル	<i>Macaca fuscata</i> (BLYTH)
2 ノウサギ	<i>Lepus brachyrus</i> TEMMICK et SCHLEGEL
3 ムササビ	<i>Petaurista leucogenys</i> (TEMMICK)
4 ネズミ科の一種	Muridae gen. et sp. indet.
5 ツキノワグマ	<i>Selenarctos thibetanus</i> (G. CUVIER)
6 タヌキ	<i>Nyctereutes procyonoides</i> GRAY
7 イヌ	<i>Canis familiaris</i> LINNAEUS
8 テン	<i>Martes melampus</i> (WAGNER)
9 オットセイ	<i>Callorhinus ursinus</i> (LINNÉ)
10 イノシシ	<i>Sus scrofa</i> LINNÉ
11 シカ	<i>Cervus nippon</i> TEMMINCK
12 イルカ科の一種	Delphinidae gen. et sp. indet.
13 ヒト	<i>Homo sapiens</i> LINNAEUS

次にこれらを生息環境等を考慮しながらいくつかのグループに分けて検討したい。

1. 前鰓亜綱はいずれも海産の巻貝類であり一括する。いずれも岩礁地帯に生息するが、クロアワビがやや深い所に生息するほかは潮間帯～飛沫帯に生息する。発掘調査で得られたものはタマキビ類・チヂミボラ・エゾチヂミボラが若干多かったが、他の種は著しく少ない。

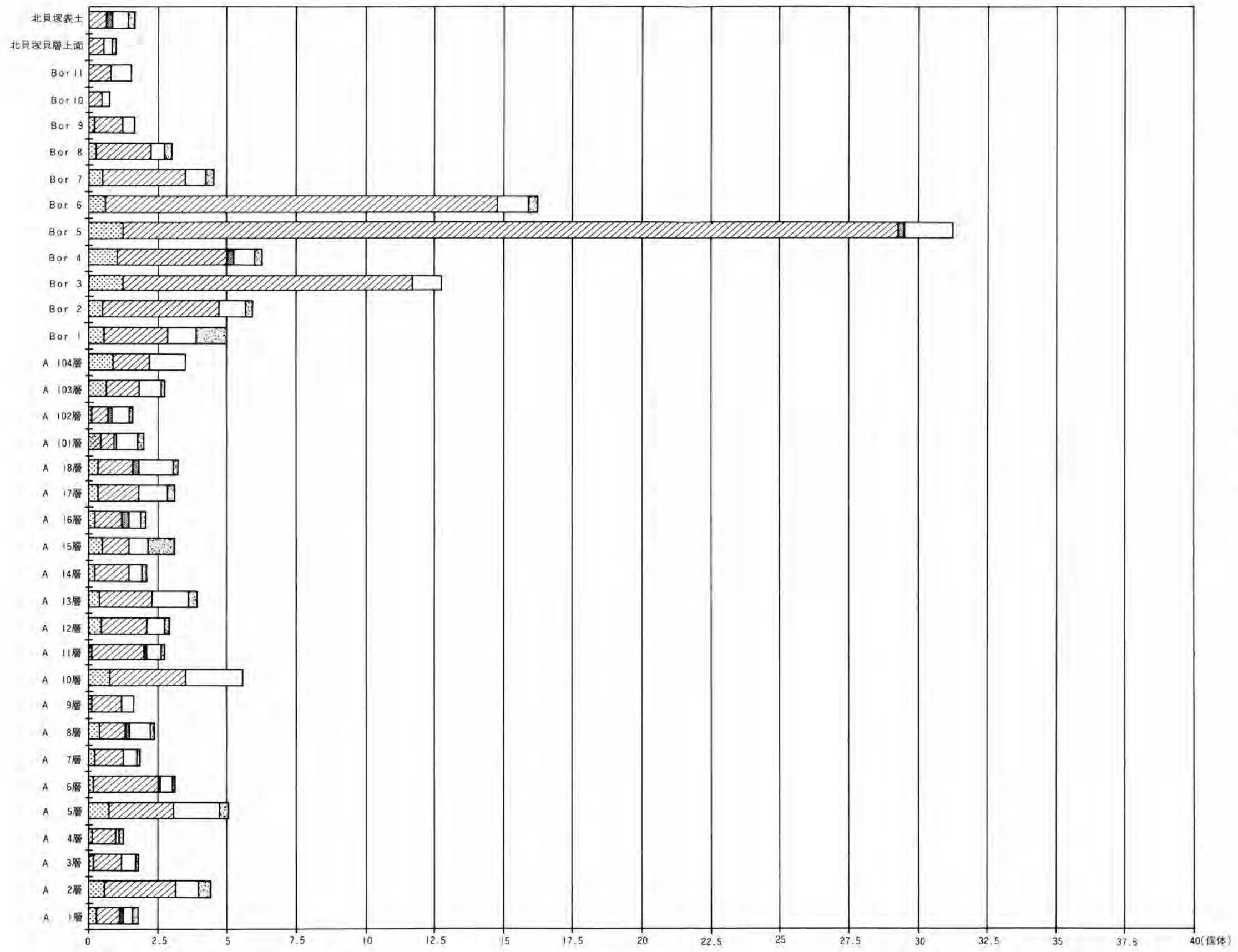
2. 有肺亜綱はいずれも陸産の巻貝類であり一括する。ほとんどが微小な巻貝で、発掘調査時には全く気がつかなかったが、層によっては多量に含まれる場合があった。オカチョウジガイ属・バツラマイマイ・オオコハクガイが多く、他の種は著しく少ない。

3. 二枚貝綱は岩礁性のものと内湾性(砂底性～砂泥底性)のもの2種に分類が可能である。前者はムラサキインコガイ・イガイ亜科の一種・マガキ・チリハギガイである。イガイ亜科の一種としたものはおおむねイガイに相当するがエゾイガイを含んでいる。現生標本等の検討結果から殻頂部形態や殻形などでは両者の判別が困難であり一括した。チリハギガイはムラサキインコガイなどの足糸に生息している。これらは貝層の主体を成すものであるが、いずれも破碎もしくは粉碎されていた。

後者はコタマガイ・アサリ・クチバガイ・イソシジミ・ニッコウガイ科の一種・オオノガイである。北貝塚でのみ検出され、出土量は著しく少ない。



第1図表 崎山貝塚出土二枚貝綱・腹足綱・蔓脚亜綱の1,000ccあたりの個体数



第2図表 崎山貝塚出土軟骨魚綱・硬骨魚綱の1,000ccあたりの個体数

	1 月	2 月	3 月	4 月	5 月	6 月	7 月	8 月	9 月	10 月	11 月	12 月
マダイ				■	■	■						
マイワシ				■	■	■	■	■	■			
マグロ				■	■	■	■	■	■	■		
カツオ						■	■	■	■	■		
ソウダガツオ属							■	■	■	■		
クロダイ								■	■	■	■	
サバ属	■	■				■	■	■	■	■	■	■
ブリ属	■	■					■	■	■	■	■	■
カタクチイワシ	■	■					■	■	■	■	■	■
サケ科	■	■			■	■	■		■	■	■	■
周年魚 アイナメ・フサカサゴ科 カレイ科など	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

第3図表 宮古湾周辺での魚類の漁獲時期

4. 蔓脚亜綱は岩礁地帯に生息するフジツボ類であり一括する。
5. 海胆綱は岩礁地帯に生息するウニ類である。キタムラサキウニとエゾパフンウニの2種を含むものと思われるが、棘の形状等からは前者が圧倒的に多い様である。
6. 軟骨魚綱と硬骨魚綱は魚類として一括した上で次のとおり分類する。
 - ・大型回遊魚　　マグロ属の一種・カツオ・ソウダガツオ属の一種・ブリ属の一種。
 - ・小型回遊魚　　ニシン・マイワシ・カタクチイワシ・サバ属の一種・アジ科の一種。
 - ・内湾魚　　　　アナゴ科の一種・スズキ・クロダイ・ハゼ科の一種・ヒラメ・カレイ科の一種。
 - ・岩礁魚　　　　マダイ・ニシキギンボ科の一種・ウミタナゴ科の一種・ベラ科の一種・カワハギ科の一種・フサカサゴ科の一種・アイナメ科の一種・ホウボウ科の一種。
 - ・その他　　　　板鰓亜綱の一種（ツノザメ科を含む）・サケ科の一種。
7. 爬虫綱と鳥綱はいずれも数が少なくそれぞれ一括する。
8. 哺乳綱はシカとイノシシが圧倒的に多いほかノウサギ・タヌキ・オットセイがやや多く他は著しく少ない。

(2) 南貝塚と北貝塚の比較について

南貝塚はほぼ中央部に位置する貝塚（第2次調査区）のうちほぼ同定の終了しているA区（A1～18層・A101～104層・ボーリング1～11）を対象として、また、北貝塚についてもほぼ中央部に位置する貝塚でサンプリングした資料（第7次調査A3区貝層上面サンプル資料と第3次調査にて貝層上の表土サンプル資料）を対象とした。

i) 腹足綱・二枚貝綱・蔓脚亜綱

第1図表は両貝塚での貝類及び蔓脚亜綱の個体数を比較したものである。南貝塚での二枚貝綱と前鰓亜綱（海産巻貝類）は極めて少なく、A3層とA13層にわずかなピークが見られるが、1,000cc当りの個体数は両者合せてもほぼ1個体内におさまってしまう。また、ボーリング坑でBor. 5でわずかに出現したのみで、全く含んでないと考えて良い程である。

尚、固定されたものはすべて岩礁性のもので、内湾性のもは一切含んでいない。

蔓脚亜綱（フジツボ類）は多寡があるもののほぼすべての層から出土しており、1,000cc当りの個体数でおよそ1個体程度が普通である。

有肺亜綱（陸産巻貝）は貝層形成時に周辺に生息していたものが入り込んだと思われる。ほとんどの層から検出されており、1,000cc当りの個体数では0.5～1個体が通常の状態かと思われるが、A13層では1,000cc当りおよそ5個体とやや多い。これはこの堆積面が比較的長期間露出していたためと思われる、土層断面で観察した同層の堆積状況と良く符号している。

また、A9層・A11層・A14層及びボーリング坑中では有肺亜綱の出現率が極めて低いか皆無であり、これらの層が堆積した直後に上層が堆積したことを示している。特にボーリング坑中には全く含まれず、各層がタイムリーに堆積していったことを示している。

一方、北貝塚では貝類の出現率が極めて高く、A3区のサンプル資料では二枚貝綱と前鰓亜綱を合せた1,000cc当りの個体数は14.04個体、表土サンプル資料では同様に54.84個体と南貝塚

に比べて圧倒的に多い。これらの主体はムラサキインコガイで、貝類全体のおよそ93~96%を占める。また、アサリなどの内湾性二枚貝類も全体の0.8%程度と少ないながらも両サンプル資料から確実に検出されており特筆される。

蔓脚亜綱はA 3区サンプル資料でのみ個体数を算定しているが、1,000cc当りの個体数が4.61個体とやはり南貝塚に比べて著しく多い。

有肺亜綱についてはA 3区サンプル資料で1,000cc当りの個体数が6.91個体、表土サンプル資料では同じく23.5個体と非常に多いが、サンプリングした層位が表土~貝層上面ということ考えると現生種が多く混入している可能性も指摘できる。

この様に南貝塚は岩礁性貝類を主体とするが個体数は著しく少なく、また特定種への片寄りには特に見られない。一方、北貝塚はムラサキインコガイを主体とする貝層で、これに少量の岩礁性巻貝とフジツボ類を含むものである。更に、微量ではあるが南貝塚で全く見られなかった内湾性二枚貝類の検出が特筆される。

ii) 軟骨魚綱・硬骨魚綱

魚類については(1)での分類を基に個体数を表わしたのが第2図表である。各層からの1,000cc当りの個体数を合計するとA 1層~A104層ではほぼ1.25~5個体の間におさまるが、2.5個体を越える層が半数ある。これに比べ、ボーリング坑中で非常に個体数が多く、特に中層にピークが見られ、Bor. 5では31.25個体、Bor. 6では16.25個体となる。これは、A 1層~A 18層が貝塚(魚骨層)の上層部に相当し比較的魚骨等の含有率が少ない点が考えられ、事実A 18層以下には良好な魚骨層の堆積していることを確認している。A101層~A104層もこれと同様である。

一方、ボーリング坑では魚骨層の中心部を抜いており、特にBor. 3~Bor. 6が魚骨層の主体部となっていると考えて良いだろう。

次に分類毎に構成内容を見ると、マグロ類・カツオ・ソウダガツオ類・ブリ類などの大型回遊魚、マイワシ・カタクチイワシ・サバ類・アジ類などの小型回遊魚、フサカサゴ科・アイナメ類・マダイ・ウミタナゴ類などの岩礁魚を主体とした所謂外洋性魚種により構成されていることがわかる。この中で特に主体を占めるのは小型回遊魚であり、なかでもマイワシとカタクチイワシが圧倒的に多い。両者の関係はA 1層~A104層でマイワシが多いのに対してボーリング坑中ではカタクチイワシの方が多くなる傾向が見られた。

また、内湾性魚種やその他としたサメ類やサケ類もほとんどの層から検出しているが出現率は極めて低い。

北貝塚では1,000cc当りの魚類全体の個体数がA 3区サンプル資料で0.99個体、表土サンプル資料で1.68個体と極めて低く、また、大型回遊魚を欠く(表採資料等にはある)点と、小型回遊魚が極めて少ない点が指摘できる。マダイについてはブロックサンプル資料では少ないが、表採資料ではやや目についた。

次に南貝塚での魚類の捕獲時期(季節性)について触れてみる。今回固定した魚種が宮古湾付近で漁獲される時期を表わしたものが第3図表である。ほとんどの魚種は比較的長期間にわたり出現しているが、そのピークとなる時期を見ると4月~6月にピークを迎えるマダイが春

～夏、マイワシ・マグロ類・カツオが夏から秋にかけて、クロダイ・ソウダガツオ類・サバ類・ブリ類が夏～初冬にかけて、カタクチイワシ・サケ類が晩秋から冬にかけてとなる。また、これ以外はニシン科が冬から春、アジ科が初夏～冬・ハゼ科が夏～冬となり、他の魚種はほぼ同年となる。

これと各層位の構成を比較すると比較的短期間に形成されたと見られる小規模な廃棄ブロックのA2層・A5層・A10層・A12層はマダイからカタクチイワシまでを含んでおり春から冬にかけてとなるが、その主体はおおむね夏から秋の間と設定することができよう。ところが、これ以外の層は比較的層厚もあり広範囲に堆積しているためにやや長時間かけて形成されたと見られるが、小規模な層とはほぼ同様な構成内容を持っている。これらの大規模な層は何ヶ年かにわたり漁獲されたものが累積したと考えられるのが妥当かと思われるが、残念ながら今回の調査区内だけでは判断できなかった。

一方、ボーリング坑中ではカタクチイワシの多出があるため、上記の層よりはやや冬に寄った季節での漁獲が想定されよう。

iii) 爬虫綱・鳥綱・哺乳綱

爬虫綱と鳥綱については出土点数が少なく多くを述べる事が出来ないが、一応の基本的種類は出土していると言える。しかし、両者に対する狩猟は低調であったことを認めるべきであろう。

哺乳綱については南貝塚・北貝塚ともにシカとイノシシが主体となるが前者がやや多い傾向にある。南貝塚の第1次調査区や第2次調査区B区などでは獣骨層からシカやイノシシがややまとまって検出されているが個体数を算定すると他の地区も含めて各層から1個体程度というのが一般的であり、意外に少ないという印象を受けた。

他の種は極めて少ないが、その中でもノウサギ・ムササビ・タヌキ・オットセイが複数の層から出土している。また、イヌ・テン・イルカ類は稀であり、これら以外の種はほとんどが表採資料である。

この様に崎山貝塚の南貝塚は貝類が極めて少なく、小型回遊魚と岩礁性魚種及び大型回遊魚を基本とする魚骨を主体とし、これに獣骨やフジツボ類などを加えた構成となるため、その実態は魚骨層だと言える。これに対し、北貝塚はムラサキインコガイを主体とする貝塚が形成された代わりに魚類（特にイワシ類などの小型回遊魚）の漁獲が低調になっている点を指摘できる。

また、南貝塚に全く含まれていない内湾性の二枚貝類が北貝塚で検出されていることから周辺の海域が前期では海進の影響もあったためかほとんどが岩礁地帯であったのに対し、中期では海水面が下降し、砂浜などの内湾的環境が形成されていたことが伺える。

崎山貝塚の貝塚は、前期段階では南貝塚の貝ブロックに始まり獣骨層の形成後層厚1m以上の魚骨層の形成を見る。続く中期段階では北貝塚や遺構埋土中に岩礁性二枚貝類を主体とする貝層が形成され、更に後期段階では土坑跡内のマグロ類椎骨が集積するというプロセスが確認された。この様に地点や構成内容を変えながらも極めて長期間にわたり形成された外洋性（岩礁性）貝塚であったことが判明した。

ここで三陸沿岸の諸貝塚との比較を試みると、宮古以北に分布するDブロックの中では最も古い貝塚であり、その規模や構成内容はこの地区を代表するに十分な内容を持つものと言える。

また、宮古以南のEブロックと比較すれば、崎山貝塚がマグロ類などの大型回遊魚などへの漁獲がやや低調であった点を指摘できるものの、ありとあらゆる魚種への働きかけがあったことは積極的に評価すべきであろう。更にEブロックの諸貝塚の中でも崎山貝塚はやはり最も古いもののひとつとして位置づけられるし、しかもそれが層厚1 m以上にもわたる魚骨層であり今後も分層発掘が可能であるということは極めて重要な内容を持つものであると言える。

(3) 骨角器について

崎山貝塚の骨角器類は範囲確認調査で得られたもののほかに個人所蔵分を含めると総数は70余点となる。当貝塚において貝層主体の本格的調査を実施していない割には出土点数は多いと言えよう。

ここでは、これらの骨角器を器形毎に分類した上で、その変遷について触れてみる。

i) 分類

1 釣針(単式釣針)

いずれも欠損品であるため大きさをもとに大別した。素材はすべて鹿角を用いている。

a類 小形のもの(第206図1・3・4・7・8)

いずれも軸部が真直で彎曲部がU字形を呈している。軸頂部の形態は1でのみ知り得るが、これによると扁平な小突起が後方へ張り出しており上面は丁寧に研磨されていることから、軸頂部を擦り切りあるいは折りとった後に調整を加えたものと見られる。

針先は1点のみ出土しているがかえしが無い(無鋸)。

b類 中形のもの(第206図2・6)

いずれも軸部は真直であるが、彎曲部の形態はL字形を呈するものとU字形を呈するものの2種がある。2の軸頂部は有頭状に膨らみを持たせている。針先の形状は不明である。

c類 大型のもの(第206図5)

1点のみである。下半部を欠くが鋸ヶ崎館山貝塚の類例(『分布調査1』)をもとに復元を試みた。軸部はほぼ真直であるが径1.4cmと他を圧倒している。軸頂部はやや小振りであるが沈線をめぐらせることにより明瞭に作り出されている。彎曲部～針先は軸部に比べてかなり小形となり、針先については有鋸と無鋸の両者が想定される。

2 錐

2点出土しており次のおり分類する。

a類 大型獣の四肢骨製のもの(第206図18)

18は体部に比して先端部がかなり細くなり回転方向につく擦痕が認められる。基部の切り込みは着柄のためであろうか。

b類 イノシシの牙製のもの(第206図19)

19は雄イノシシの左下顎犬歯側エナメル質部を使用するもので、非常に丁寧な作りである。先端部を欠くために使用痕は確認できない。

3 ヘラ

比較的多く出土しており素材の部位により分類した。

a類 シカの中手・中足骨を使用するもの（第206図13・14・15・18）

熊谷常正氏の分類に従い細分を試みると次のとおりとなる。

○A類型－素材を横方向に半裁するもの（金子・忍沢両氏のi-I-Aに相当）－15

○B類型－素材を縦方向に半裁するもの（金子・忍沢両氏のi-I-Bに相当）－18

○C類型－素材を前後左右に4分割するもの（金子・忍沢両氏の分類には無い）－13・14

これらのうち、C類型とした13・14は定形的な形態を持ち、所謂骨篋に相当する。他のものは破片であり不明ではあるが、定形的な骨篋とは異なるものである可能性が大きい。

b類 シカの脛骨を使用するもの（第206図11・17）

いずれも使用痕や調整痕が伴うものの、定型化された器種かどうかは疑わしい。金子・忍沢両氏のviその他獣類の四肢骨製としたものに相当する。

c類 鹿角を使用するもの（第206図16）

基部を欠き全体の形態は不明であるが、やや小型で丁寧に調整されている。所謂角篋に相当する。

d類 その他のもの（第206図10・12）

いずれも破片であり形態等は不明である。

4 骨針

刺突貝類に類似する形態を持つものうち有孔のものを一括した上で次のとおり細分する。

a類 小形のもの（第206図20・21）

現在の金属針と全く同じ形態を有する。20は貫通孔が上端につくのに対し、21はやや下に寄っている。

b類 大形のもの（第206図22）

シカの右中手骨を4分割したものの前面右側を使用する。先端部を欠くが基部に及ぶまで器面全体を丁寧に調整している。

5 刺突具A（ヤス？）

刺突具類のうち基部の成形方法や着柄材（アスファルトか？）の存在により着柄による使用が見込まれ、ヤスとして使われた可能性を想定しておく。

6 刺突具B

刺突具類のうち前述したもの以外を一括したが、基本的には着柄されずに使用されたものと思われる。

a類 大型獣の四肢骨を使用するもの（第206図25・27・28・30）

これらのうち27は基部の調整が非常に丁寧であり別な器種に含まれる可能性もある。28は他の貝塚にも普遍的に見られる定型的器種である。

b類 鳥の管状骨を使用するもの（第206図26・29）

27は4分割したものを使用する。27は大形鳥骨を斜に切ったもので、定型的器種である。

7 磨製刃器（牙斧）（第206図31）

1点のみであるが非常に丁寧な作りである。また、19と全く同じ部位を素材としており特筆される。

8 髪針（ヘアピン）

いずれも鹿角製であり形態的には前述した刺突具類に類似するためこれらに含まれる可能性を全く否定すること出来ないが、他に比して非常に丁寧な調整が認められるためここに分類しておく。

a 類 鹿角を用い基部に穿孔するもの（第207図32）

骨針に類似するが非常に薄く丁寧な作りである。

b 類 鹿角を用いつまみ状の基部を有するもの（第207図33）

全体に細く丁寧に調整している。頭部は扁平に作り出す。

9 叉状角製品（腰飾り）

2点出土しておりいずれも鹿角を使用し、非常に丁寧に調整されている。

a 類 無文のもの（第207図34）

右鹿角の第1角枝を用いるもので一部欠損するが、ほぼ全体の形態が把握できるものである。これによると、角座・角幹・角枝の3方を切り落した後に角幹部の海綿体質部をくり抜き貫通孔としたものである。器面には施文や貫通孔などが認められず極めてシンプルな作りである。

b 類 有文のもの（第207図35）

35は欠損品であり全体の形状を明らかにし得ないものの、使用した部位や製作方法は34と共通性が認められる。上端部に段を作り出した上で、器面全体に沈線や貫通孔を施すという装飾性に富むものである。

10 装飾品・儀品類

いずれも欠損品であり一括する。第207図36は鹿角を用い中央部に円孔を穿ち、周辺部に刻目状の沈線を施す。極めて装飾性に富み、何らかの装飾品類の残欠と考えられる。

37は海獣骨（肋骨か）製のもので、現存部上部に方形の小突起を左右に施す。

38は鹿角を用い上端部に沈線を施すもので、大形の棒状製品であろうと思われる。

11 垂飾品

垂飾のための貫通孔を有する小形の製品であり未製品を含む。

a 類 獣魚骨を使用するもの（第207図39～41・45）

39・40はシカの右側第2・第3手根骨を使用するもので、39は未製品である。この部位を使用する類例は極めて少ないようであるが、玉状のものを作る場合には比較的合理的な部位であると言えよう。

41はサメ類の椎骨を使用するもので、45はマダイの上後頭骨を使用するものである。45は未製品である。

b 類 動物の歯牙を使用するもの（第207図42・43）

42はイノシシの切歯を使用するもので、43はイヌの犬歯を使用するものである。43は未製品である。

c 類 玉状のもの（第207図41）

41は鹿角を使用するもので極めて丁寧に調整されている。

12 小形棒状製品ほか（第207図46～51）

棒状を呈する小形の製品を一括した。46・48・49は体部破片で刺突具類や装飾品類の残欠で

	釣 針	へ ら	錐	骨 針	刺突具 I	刺突具 II	磨 製 器
南 貝 塚	(第I群) 大木1式						
	(第III群) 大木3式						
	(第III-IV群) 大木3-4式						
	(第IV群) 大木4式						
	(第V-VI群) 大木5式-中期前葉						
北 貝 塚	(第I-VII群) 前期-中期前葉						
	(第IX-XI群) 中期後半						
南 貝 塚 主 体	個人所蔵表採資料 						

第206図 骨角器集成図(1)

	髪 針	叉状角製品	装飾品・儀器等	垂飾品	棒状加工品等	加工痕を残す素材
南 貝 塚	(第I群) 大木1式				棒状加工品等 46 (NO21G-ivc層) 貝ブロックA	加工痕を残す素材 52
	(第III群) 大木3式			39 (B3層)		53 (NO21G-iii層)
	(第III-IV群) 大木3-4式	32 (A区 ホーリング6)				
	(第IV群) 大木4式					54 (NO21G-ivc層)
	(第V-VII群) 大木5式-中期前葉			36 (A2層)	47 (A13層)	55 (NO20G-iii層)
北 貝 塚	(第I-VII群) 前期-中期前葉		34 (A区貝管上面東壁中央部)	37 (A区貝管上面南西隅)	40 (1層) 41 (1層)	50 (1層) 51 (1層)
	第IX期 中期後半	33 (A区貝層上面)	35 (表採)			56 (A2区1層) 57 (A3区、貝層上面) 58 (A3区、貝層上面)
南 貝 塚 主 体	個人所蔵表採資料		38	42 43 44 45		59 60

第207図 骨角器集成図(2)

あろう。47は頭部破片であるが丁寧に調整されており装飾品類の残欠であろう。

50・51は47と異なり粗雑な作りである。釣針（第206図1）などの小形の製品を擦り切り、折りとった残りの部分と考えられる。

13 加工痕を残す素材（第207図52～60）

加工痕を残す素材は鹿角片を中心に極めて多量に出土しているが、ここでは主なものだけを示す。52・56～58・60は鹿角である。52は角座や角枝などを落としたもので、60は板状のものである。これらは骨角器の材料となったものであろう。56は形態やサイズから角篋の素材である可能性が考えられる。

一方、57・58は骨角器の素材をとった残りかと思われる。

54はシカの右中手骨（奇形骨）を横方向に打割したもの（A類型）で、ピエス・エスキューイかと思われる楔形石器を打込んだ痕跡が認められる。55はシカの右距骨に磨面の認められるものである。

59はマグロ属尾椎骨に石器による傷を有するもので解体痕かと思われる。

53はヒトの右尺骨に石器による傷を有するものである。尚、この資料については巻末に分析結果を掲載してあるので参照されたい。

ii) 編年と他地域との比較

釣針については今のところ南貝塚からの資料しか得られておらず、おおむね前期～中期前葉に伴うものが主体となるが、大木4式に伴ったもの（第206図1）が最古の例となる。

気仙地区の釣針を集成した佐藤正彦氏らによると、同地区での単式釣針の出現期は大木4式期であり、宮野貝塚・清水貝塚・中沢浜貝塚にその出土例があるという。また、これらの中には折りとり技法による製作法の存在することが報告されている（佐藤・熊谷1994）。

崎山貝塚とこれらの類例を比較すると、形態的類似性はもとより製作技法にも強い共通性が見られる点が指摘できる。なお、これらは県内で最も古い釣針の出土例であると言えるが、両地方においてほぼ同時に同様な技法による釣針が存在していることは極めて興味深い。

また、第206図2については気仙地方では主に中期に伴ったものに類例が認められる様である。

第206図5は極めて特徴的な形態を呈するもので、これまで歟々崎館山貝塚出土例（『分布調査1』）と八戸方面での出土例（金子ほか1986）しか知られておらず、三陸沿岸北部を中心に分布するものと考えられて来た。しかし、近年陸前高田市の中沢浜貝塚から1例確認された（佐藤・熊谷1994）ほか、北海道の戸井貝塚から多量に出土したことが報告されている（西本ほか1993）。

戸井貝塚の例は中期末～後期に伴うものであるが、崎山貝塚では南塚の形成時期が前期～中期前葉でありこれ以降の堆積層は確認されていない。5は貝層上面のクリーニング時に検出したものであり、後世のものがまぎれ込んだ可能性を全く否定することはできないが、一応中期前葉に伴ったものと見做しておく。

尚、戸井と崎山以外の類例はその所属時期が不明瞭であるため、今後類例の蓄積を待つて再度検討すべであらう。

ヘラについては、特に骨篋の製作技法が4分割（C類型）を主体としており、かつて熊谷常正氏が指摘されたように三陸沿岸北部（Dブロック）ではA類型が少なくB・C類型が多いと

いう傾向を裏づけるものとなった。

また、崎山貝塚で定型的な骨篋や角篋が多く出土するのは北貝塚から（中期後半）であるということは注目される。一般にこれらの定型的な骨角篋は岩礁性二枚貝類の採捕用と考えられてきたが、確かに当貝塚の南貝塚では貝類自体が極めて少なく、北貝塚でムラサキインコガイを主体とする貝層が形成されていることから、この説を裏づけているものと思われ興味深い。

この他の生産用具としては、錐・骨針・ヤス・刺突具・磨製刃器などひとつおりの器種がそろっていると見えるが、今のところ漁具としての銚頭の欠落が特筆される。

装飾品や呪術具については、又状角製品の存在が特筆される。第207図34は第209図126に示した土器付近から出土したものであり大木5式に伴うと思われる。35は北貝塚からの出土であり中期後半期に伴う。

又状角製品のうち半載品を除いたもの（金子・忍沢両氏のI-b型に相当）は東北、関東地方の後・晩期に盛行するが、金子・忍沢両氏によると岩手県崎山弁天遺跡（中期末葉）の資料を祖形として発達していったことを想定しておられる。崎山貝塚の又状角製品はいずれも角幹部に貫通孔を有するのに対して、崎山弁天遺跡のものはこれと直角方向に貫通孔を穿つ点で差異がある。いずれにせよこれらは後～晩期に先行する古期の類例として位置づけられるが、崎山貝塚の出土例により本タイプの出現期がこれまで考えられていた中期末から前期後葉まで大きく遡ったことは特筆されよう。

他の装飾品類や呪術具類については欠損品が多いこともあり多くを語れないが、第207図36のように比較的古いものの中にも極めて装飾性に富むものが含まれている点は指摘できる。

崎山貝塚の骨角器類は前期から中期を主体とするものであり、後～晩期のものに比較すると同一器種内でのバラエティーが少ない点や装飾性が乏しい点が指摘できるが、逆にこれは崎山貝塚の持つ時代性を反映したものと受けとめておく必要がある。

崎山貝塚の南貝塚から出土した資料は前期～中期前葉に伴ったものであるが、一応ひとつおりの器種は揃っていると見える。この中で特に前期に伴う資料は三陸沿岸地方（D・Eブロック）の中でも最も古い段階のひとつとして位置づけられるが、器種によっては当地方のみならず全国的にも最も古い段階のものを含んでいる事実が判明した。

更に、今後の調査により該期の資料が蓄積されれば、当地方における古期の骨角器のあり方を示す基礎的資料となろうし、魚骨と漁具を関係づけた漁業発達史的観点に立った考察も可能となると思われる。

参 考 ・ 引 用 文 献

- 池田嘉平ほか 1971 『日本動物解剖図説』 広島大学生物学会編
石塚和雄ほか 1979 『宮古市の自然』 宮古市
井田 齊 1991 『宮古の魚類図鑑』 宮古市
大竹憲治 1989 『骨角器』 ニューサイエンス社

- 岡田要ほか 1965 『新日本動物図鑑(中)・(下)』 北隆館
- 加藤嘉太郎 1979 『家畜比較解剖図説 上巻』 養賢堂
- 金子浩昌ほか 1986 『骨角器の研究 縄文篇Ⅰ・Ⅱ』 慶友社
- 鎌田祐二 1987 「資料紹介 宮古市磯鶏蝦夷森貝塚出土の資料—自然遺物及び骨角器を中心として—」『宮古地方史研究』第四号 宮古地方史研究会
- 〃 1994 「三陸北部の骨角器」『考古学ジャーナル』No. 383 ニューサイエンス社
- 佐藤正彦ほか 1994 「岩手県南部の骨角器」『考古学ジャーナル』No. 383 ニューサイエンス社
- 鈴木公雄ほか 1978 『自然科学の手法による遺跡・古文化財の研究 昭和52年度年次報告書』文部省科学研究費特定研究「古文化財」総括班
- 樋泉岳二 1994 「遺跡産魚骨同定の手引(Ⅰ); 同定の考え方と手順」『動物考古学』第2号 動物考古学会
- 西本豊弘ほか 1993 『戸井貝塚 縄文時代後期初頭の貝塚発掘調査報告』 戸井町教育委員会
- 波部忠重 1977 『日本産軟体動物分類学 二枚貝綱/堀足綱』 北隆館
- 〃 ほか 1975 『学研生物図鑑 貝Ⅰ・Ⅱ』 学習研究社
- 堀田秀之 1961 『日本産硬骨魚類の中軸骨の比較研究』 農林水産技術会議事務所
- 益田一ほか 1984 『日本産魚類大図鑑』 東海大学出版会
- ELISABETH SCHMID 1972 『Atlas of Animal Bones For Prehistorians, Archaeologists and Quaternary Geologists』

3 出土遺物について

(1) 土器群の分類と編年について

崎山貝塚の遺構や遺物包含層などから出土した土器は前期初頭から後期前葉にわたる。これらを12群に分類した上で、層位的にまとまりのあると思われる資料を中心に集めたものが第208図～第211図である。

尚、土器群の分類に際しては破片でしか提示できない資料が多い点と、各群毎に器形・文様要素・施文技法のすべて網羅できていない点や層位によっては出土量に著しい多寡がある点を考慮し、細分は避けている。このため、各群はこれまで提唱されてきた土器型式にほぼ対応するものとなっている。

前期に伴う土器群は第Ⅰ群～第Ⅴ群がこれに相当する。

第Ⅰ群（第208図Ⅰ～46）

前期初頭の大木1式に伴う土器群をこれに当てた。第1次調査区のNo.16～19グリッドの貝ブロックCからⅡd層にかけての資料（12～33・35～41）が最もまとまっており、いずれも胎土に植物繊維を含んでいる。

器形は、底部破片（12・23）がいずれも尖底であり、体部下半までの器形が推定できる例（35・36）と合わせて考えると、いずれも砲弾形を呈する尖底深鉢になるものと思われる。

口唇部に円形や楕円形の押捺文を刻目文の施されるものも見られるが、この部分を無文とするものの方が多い。

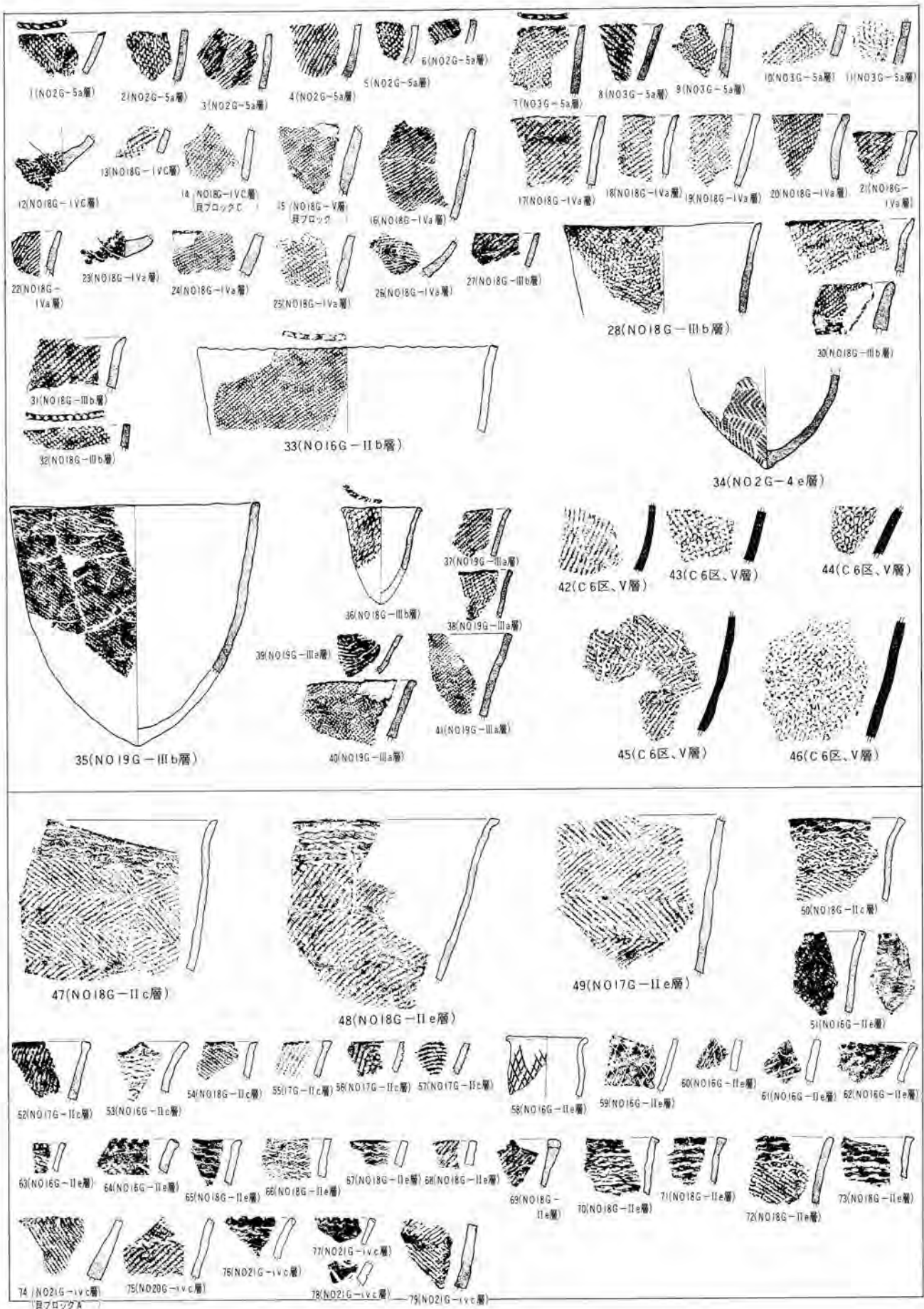
口縁部から体部にかけては主要な施文が全く認められず、単節斜縄文や組縄文（高橋（亜）1992）のみを施す点を特徴とする。

尚、上記のグリッド内では第Ⅰ群と続く第Ⅱa群が層位的に分層発掘されている。この点に注目した相原淳一氏は前述した土器群を「崎山Ⅱd層下土器」と呼称し、該期において東北地方北半を代表する資料として位置づけられており、東北地方南半の「三神峯第Ⅱ層土器」（大木1式に比定）との対応関係を考えておられる（相原、1990）。

ところで、宮古市周辺では前期最初頭に位置づけられる土器群として既に「千鷲Ⅰ式」と「千鷲Ⅱ式」が設定されている（『千鷲報文89』）ので、これらを当遺跡の第Ⅰ群土器と比較してみる。

「千鷲Ⅰ式」は上川名Ⅱ式にはほぼ相当するものであるが、加藤孝氏により提示された資料（加藤、1952）のうち、竹管捺糸文土器・竹管文土器・羽状縄文土器及び長七谷地Ⅲ群（A d類2種）がセットになったものであり、結束のある羽状縄文や本群のような組縄文は共伴していない。

「千鷲Ⅱ式」は「千鷲Ⅰ式」に直接後続するものと思われ、口縁部文様帯に刻目を有し結束のある羽状縄文を地文とするもの（桂島式に類似するもの）と組縄文・捺糸文・斜縄文を地文とするものがセットとなっている。現在、桂島式は独立した型式として認められず上川名Ⅱ式の中に位置づけて考えるのが一般的であるが、桂島式を認めるかどうかは別問題としても千鷲遺跡の成果に基づけば、大木1式以前の段階で少なくとも2つのグループの土器群が存在し



第208図 土器集成図(1)

ていることは明らかだと言えよう。

「千鷲Ⅱ式」と本群の関係は、口縁部文様帯を全く持たない点や羽状縄文を欠く点などから「千鷲Ⅱ式」より後出の土器群として位置づけるのが妥当だと思われ、既に熊谷常正氏により大木Ⅰ式に位置づけられた沢内B遺跡の資料との共通性を指摘すべきであろう。

しかし、本群土器は相原氏も指摘された様に東北地方南半部と著しい差を有している点は改めて認識すべき問題である。ただし、本群に代表される土器群の様相は東北地方北半部でもとりわけ岩手県付近を中心としたものであり、「千鷲Ⅰ式」以降の系譜をひくものとして位置づけるべきであろう。

本群に含まれる土器はこのほかに第1次調査区№1～3グリッド5 a層(1～11)・第2次調査区B 8層～B 7層・第8次調査区(東包含層)C 6区V層(42～46)などから出土している。この中で特にC 6区V層出土資料は前期初頭に降下したとされる安家火山灰(中振浮石に相当)の下層から出土している点が特筆される(註1)。

最後に、本群を出土する堆積層からは本群以前の土器を全く含んでいないことから、崎山貝塚の集落形成期が該期であったことが予想される。

第Ⅱ a 群(第208図47～79)

大木Ⅱ式のうちでもおおむね大木Ⅱ a式に相当すると思われる一群を当てた。

第1次調査区の№16～19グリッドのⅡ c層～Ⅱ b層出土資料が最もまとまっており、これを図示した。

器形は不明であるが口縁部は前群よりやや外反するものが多くなり、平縁のものと4単位の小突起を有するものの2種がある。また、胎土に植物繊維を含まないものが少数認められる。

文様帯は口縁部に集中し、不整撚糸文条を横方向に回転させる。地文は結束のない羽条縄文を施すが、回転方向を変えて菱形とする例(47・79)もみられる。

これら以外には撚糸文・単節斜縄文・組縄文を地文とするものが認められる。

押し沈線により施文されるもの(56・57)も見られるが、本群より古く位置づける必要があらう。

前述した様に本群は前群と層位的上下関係が認められる。相原氏は本群に相当する土器群を「崎山Ⅱ c～b層土器」と呼称し、「三神峯第Ⅰ層土器」(大木Ⅱ a式)と対応するものと位置づけられている。

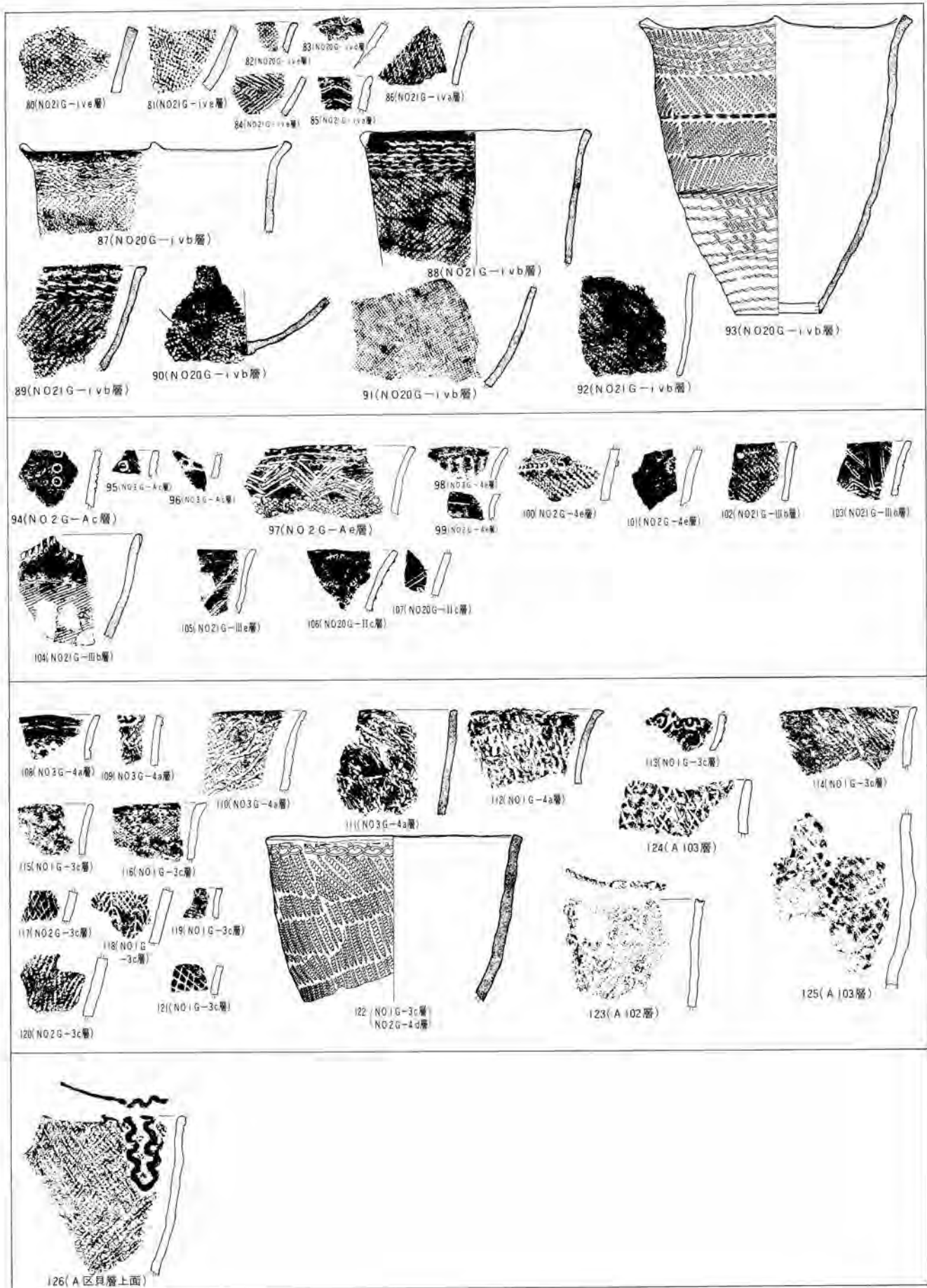
従来、口縁部文様帯に不整撚糸文を施す土器群は大木Ⅰ式の中に位置づけられて来た(註2)が、三神峯遺跡の調査成果により大木Ⅱ a式まで下ることが確認されている。

ここではこれら先学の研究成果に基づき本群を大木Ⅱ a式に位置づけておく。しかし、東北地方北半部での円筒上層 a式の成立課程を考えると、不整撚糸文を施す一群のうちの一部が更に新しい段階へ下る可能性も考慮しておく必要があるかもしれない。

第Ⅱ b 群(第209図80～107)

大木Ⅱ式のうちでもおおむね大木Ⅱ b式に相当すると思われる一群を当てた。

第1次調査区の№20～21グリッドのⅣ a層出土土器を図示したが、本群より古いものを含



第209図 土器集成図(2)

んでいる可能性が大きい。

器形は93によるとやや胴張りの深鉢形を呈し、底部は平底である。口縁部はやや外反し、前群同様に4単位の小突起を有する。

文様帯は口縁部と体部下半にみられ、いずれも横位S字状連鎖沈文を施す。体部上半は羽状縄文を地文としている。

93以外はS字状連鎖沈文を施すもの(83)、竹管文を施すもの(85)、胎土に植物繊維を含まないもの(92)などが本群に伴うものと思われるが、他のものは本群より古い可能性も指摘できる。

第Ⅲ群(第209図94~107)

大木3式に相当する一群を当てた。やや層位的まとまりに欠けるが第1次調査区のNo.1~3グリッド4c層~4b層、No.20~21グリッドiiib層出土土器を図示した。本群から胎土に植物繊維をほとんど含まなくなる。

器形は全く不明であり、文様要素に注目すると、円形の竹管文を施すもの(94~96)・竹管により鋸歯状文などを施すもの(97~100・103・105・107)・細い隆起線上に刻目を施すもの(100・102・106)がある。

口縁部に刻目を有するものは前群以前に伴うものである可能性が大きい。

第Ⅳ群(第209図108~125)

大木4式に相当する一群を当てた。第1次調査区のNo.1~3グリッドの4a層~3c層出土土器にややまとまりが見られたのでこれを図示した。

器形は全く不明であり、文様要素に注目すると、幅の広い沈線で鋸歯状文を施すもの(108)・細い隆起線を施すもの(109・113)がある。また、地文にはバラエティーがあり不整の沈線状のもの(110)・斜行縄文(114)・撚糸文(120)・木目状撚糸文(118)・網目状撚糸文(117・121)などがある。122は原体端部を結んだためか口縁部に不整な施文がみられるものである。本群以前に伴うものかもしれない。

尚、これらに類似するものとして第2次調査区のA102層~A103層出土土器を図示した。124・125は網目状撚糸文を施すもので、123は口唇部に小突起を有するものである。

第Ⅴ群(第209図126)

大木5式~大木6式に伴うものを一括した。層位的には全くまとまりを持たず、126のみを図示した。

126は円筒形~バケツ形の深鉢で、口縁部に幅の広い隆起線により鋸歯状のモチーフを垂下させるもので大木5式に伴う。

大木6式に伴うものは今のところ表土中などに散見するのみである。

中期に伴う土器群は第Ⅵ群~第Ⅺ群がこれに相当する。

第Ⅵ群（第210図127～141）

第Ⅵ群は大木7 a式に相当する一群を当てた。

第4次調査区のN21E93-1号竪穴住居跡検出面（埋土最上層）出土土器が最もまとまっており、これと第1次調査区№10グリッド出土土器を図示した。

127は口縁部が外傾する長胴の深鉢である。口縁部を肥厚させてここを文様帯とし、口縁部上縁に幅の広い隆起線をめぐらせ、文様帯内を縦位4単位の隆起線で分割している。

128～141は層位的にまとまりのある土器群である。128は体部上半が球形に膨らむ深鉢である。体部上半を文様帯とし、押捺や刻目を伴う隆起線による施文まが認められる。他のものは円筒形か口縁部の外反する深鉢で、129・131・132は128に類似する施文がみられる。

これら以外には130・136・137が隆起線上に縄文を施すもの、134・135が隆起線を施すもの、141が沈線を施すものである。地文は通常の単節斜縄文のほか綾絡文（131）や網目状燃糸文（139・140）がある。

尚、宮古市内では重茂館遺跡群にて大木7 a式の新段階から大木9式にかけて継続して堆積した遺物包含層が検出されており各土器型式内での細分を試みている（『重茂報文』）。ここでの資料を比較すると最下層から出土した重茂館遺跡群第Ⅰ群土器と本群のうち128～141に共通性が認められる。このように本群内には新旧2つのグループが存在している可能性が認められるが、それぞれの実態が不明瞭であるためにここでは一括しておく。

第Ⅶ群（第210図142～172）

第Ⅶ群は大木7 b式に相当する一群を当てた。

第2次調査区のC1層や第5次調査区のN4層～N1層からまとまって出土しているものの両地点とも部分的にしか精査していないため破片を中心に図示する。また、これらとほぼ同じ内容を持つものが第7次調査区N12W48-1号土坑跡からも出土している。

C1層出土土器のうち器形の判明するものは142であり頸部にゆるやかな屈曲を有する深鉢である。口縁部文様帯内には隆起線による横位楕円形区画文を施し、この連結部の直下にはY字状文を施す。143・144もこれとほぼ同様かと思われるが143は口縁部に小突起を有する。地文は羽状縄文や綾絡文が多用される。

153～167は北貝塚N層出土土器である。器形は161は体部の膨らむ小形深鉢、162が口縁部の外反する小形深である。164は口縁部の外傾する深鉢で、169はキャリパー形を呈するものかと思われる深鉢の体部下半である。また、155や167の様に台形状の把手を有するものもある。

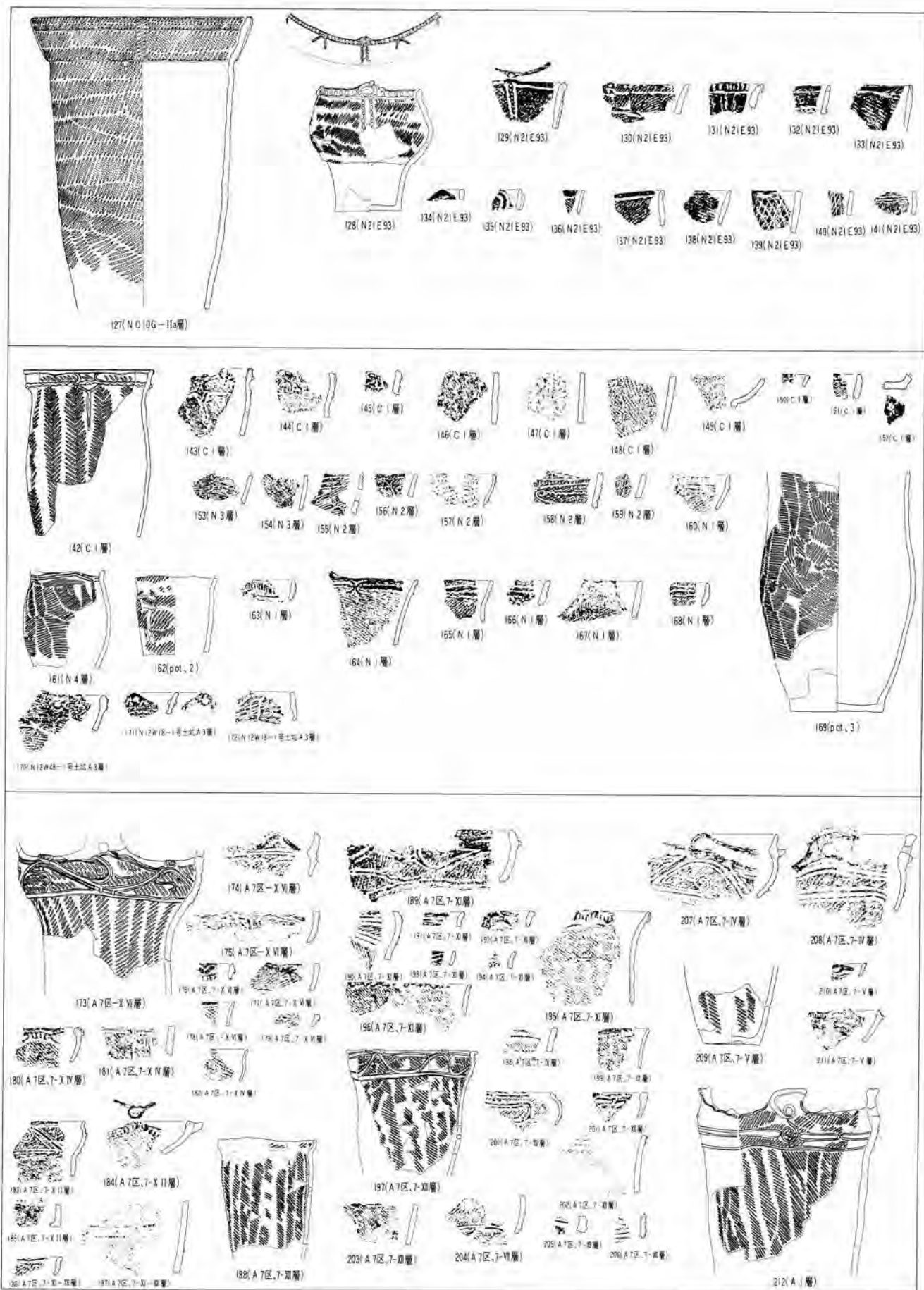
施文要素は横位楕円形区画文を施すものや横位の原体圧痕文を施すものなどがあるが、特に原体圧痕文の多用が特筆される。170～172もこれとほぼ同様であろう。

これらのうちC1層出土土器は原体圧痕文を伴わず、他のものよりやや古い可能性も考えられるが、モチーフの共通性等によりここでは一括しておく。

尚これらは重茂館遺跡群の第Ⅱ群～第Ⅲ群に相当する。

第Ⅷ群（第210図173～212、第211図213～225）

第Ⅷ群は大木8 a式に相当する一群を当てた。



第210图 土器集成图 (3)



第211图 土器集成图(4)

第7次調査区のA-7区では7-IV層以下に10数層にもおよぶ該期の遺物包含層が確認されており、これらの上層部や検出面からかなりまとまった資料が得られたのでこれを中心に記述する。

173～195はA-7区の7-XⅦ層～7-XⅧ層から出土した土器である。173はやや大形のキャリパー形深鉢であり、口縁部に円孔を穿つ把手を4単位有する。口縁部文様帯内には沈線を伴う隆起線による波状文を施すが端部を反転させたり、小渦巻文を配すなどにより文様帯内を細分割している。

他のものもこれとほぼ同様であるが、これら以外には195・196が口縁部に横位波状の隆起線を施し上面を原体圧痕により刻むもの、188が地文のみを施す小形のキャリパー形深鉢、184が口縁部に原体圧痕による刻目を有する浅鉢である。

一方、同地点の7-X層～7-Ⅲ層出土土器は下層のものに比して様相が異なっている。例えばキャリパー形深鉢では横位波状に展開しながらも文様帯内をあまり細分割しないもの（197・207・216）やクランク状文を施すもの（200・213）などのほかに214の様に不整な区画文を施すものなどが見られる。

同地点の下層部から出土したものの類例は第5次調査区の第11号竪穴住居跡出土土器（212）、上層の類例はA4区Ⅱ層～4-Ⅲ層上面やA6区6-Ⅲ層上部の一部などが上げられる。

これらの2つのグループのうち下層の一群は重茂館遺跡群の第V群に相当し、上層の一群は重茂館遺跡群では認められなかったものである（註3）。

大木8a式の細分案については丹羽茂氏（丹羽、1981）や熊谷常正氏（熊谷、1989）等の論巧がある。両氏ともに大木8a式を新旧の2段階に分類されており、本群内の2つのグループもおおむねこれらに対応するものと言える。

しかし、前群と本群の関係にやや不明瞭な点があることや、本遺跡においては本群の良好な遺物包含層が未精査である点を考慮すれば、これらの精査を待ってから結論を出しても遅くはないと思われる。従ってここでは本群を細分せず一括しておく。

第Ⅸ群（第211図 226～252）

第Ⅸ群は大木8b式に相当する一群を当てた。

遺跡内における出土点数が最も多い割には層位的にまとまった資料を欠いている。これは例えば遺物包含層では本群以前の土器を多量に含み、これらを分離するのが困難だという点と、遺構の大半を現状保存しているためである。

ここでは第7次調査区のA6区、6-Ⅲ層上部の一部（227～234）と第8次調査区のN6E36-1号土坑跡出土土器（236～252）を中心に図示した。

前者は大形のキャリパー形深鉢・体部に膨らみを有する深鉢・口縁部が外反～外傾する深鉢・小形深鉢などにより構成され、隆沈線や平行沈線などにより渦巻文・平行線文・波状文などを施文するが閉鎖性の弱い開放的なものとなる。しかし、前述したように本群より古いものを一部含んでいるかもしれない。これと類似するものが第4次調査区のN15E75-1号竪穴住居跡から出土している。

一方、後者は前後の段階を全く含まないまとまった資料である。器形はキャリパー形深鉢

(236・240)・口縁部が外反し体部がわずかに膨らむ深鉢(237～239)・口縁部の内彎する深鉢(241・242)などがある。

キャリパー形深鉢の口縁部文様帯は隆沈線により渦巻文と楕円形区画文を施す極めて定型的な施文となる。また、深鉢の体部文様帯は隆沈線や平行沈線文により渦巻文や区画文を施す閉鎖性の強いものとなる。これらと類似するものが第6次調査区第12号竪穴住居跡から出土している。

これらのうち前者は重茂館遺跡群の第Ⅵ群～第Ⅶ群に、後者は第Ⅷ群に相当する。

大木8b式の細分については丹羽氏の2～3分説(丹羽, 1981)と筆者等の3分説(高橋ほか, 1982)がある。本群のうち前者は大木8b式の前段階に、後者は大木8b式の最終段に伴うものであるが、本遺跡の場合は古段階にまとまりを欠くためにやはり大別のみ留めておくべきであろう。

尚、後者の大木8b式最終段階のものは大木9式の最古段階に位置づける意見もあるが、磨消技法により施文されるものを全く含まないことから本群に含むこととする。

第Ⅹ群(第211図253～259)

第Ⅹ群は大木9式に伴うものを一括した。

本群も出土量は多いものの、遺構(特に土坑類)からは破片のみしか得られない例が多くまとまりを持つ資料を欠いている。

253は沈線による磨消技法にて区画文を施すものである。254・255は隆起線による磨消技法にて区画文等を施すものである。

重茂館遺跡群の第Ⅸ群に相当する。

第Ⅺ群(第211図260～273)

第Ⅺ群は大木10式に伴うものを一括した。

本群も出土量は多く、特に集落中央部で精査した土坑類の多くは本群に伴うものであったが、前群同様破片が多く、まとまりを持つ資料を欠いている。

260・261は隆起線による磨消技法にて施文されるもので、260は波頭状文を、261は円形文を施す。また、256の口縁部隆起線の上下には連続刺突文が伴う。

262・263は隆起線を「ノ」字状に貼付するものである。

尚、図示した以外にも沈線により施文されるものが多く出土している。

第Ⅻ群(第211図274～277)

第Ⅻ群は後期前葉に伴うものを一括した。

該期は遺構総数が極めて少ない点と、今のところ良好な遺物包含層が確認できていないため出土点数が少なく、まとまりに欠けている。

該期に伴うもののうち数点を図示したが、いずれも後期中葉の十腰内Ⅰ式により古いものであり、本間宏氏により提唱されている上村式・菲窪式・蛭沢式に相当すると思われるものを主体とする。

274は波頂部に2条の隆起線を半円形に施し直下に2条の隆起線を垂下するものである。これとはほぼ同時期と思われるものが近隣の白石遺跡第15号竪穴住居跡から出土しており、両者ともに本間氏の葎窪式に相当するものであろう。

276はS24W15-1号墓壙跡から出土したやや大形の深鉢である。口縁部から体部にかけて沈線による波頭文を4段施している。本間氏の蛸沢式に相当するのであろう。

また、277はこれらとは系譜を異にするもので関東地方の称名寺式に相当すると思われるのである。

これら以外には図示しなかったが門前式の影響を受けたと思われる連鎖状文のみを施すものが散見されるが、典型的な門前式は今のところ確認できていない。

以上、前期初頭から後期前葉の土器群を概観してみた。前期初頭の「千鷲Ⅰ式」段階では東北地方南部の上川名Ⅱ式とほぼ類似する内容を有していたが、この直後あるいは上川名Ⅱ式の後半期に相当する「千鷲Ⅱ式」の段階で成立したと見られる組縄縄文土器が岩手県地方を中心に分布し、東北地方南半と著しく異なった様相を呈することとなる。こうした傾向は「千鷲Ⅱ式」に後続する本遺跡の第Ⅰ群段階でより顕在化し、例えば大木Ⅰ式に認められるループ文等の文様を全く施さない組縄縄文や斜行縄文のみを施す土器が主体となっている。

しかし、続く第Ⅱ群段階では不整撚糸文・S字状連鎖波文・羽状縄文などを施す土器が主体となり、おおむね大木Ⅱ式土器に比定できる内容を有することとなる。おそらくこの段階から当地方は大木式土器文化圏へ取り込まれたものと思われ、以後、中期末葉の第Ⅳ群段階（大木10式）に至るまでほぼ仙台湾周辺地域と同様な土器群が変遷することとなる。

ただし、当地方は大木式土器文化圏の北部に位置づけられることから、仙台湾地方とは異なった地方相を有していることは指摘できよう。

また、大木式土器文化圏と対峙する円筒土器文化圏との関係については、内陸地方では時期によりかなり大きな差があるが、おおむね盛岡市～二戸市の間にその境界線（かなり漸移的ではあるが）を求めることができよう。同様に沿岸地方では宮古市～久慈市の間にその境界線を設定できるが、宮古市では前期から中期にかけて円筒式土器がほとんど出土しておらず、絶えず大木式土器文化圏内に存在していたことを確認しておきたい。

ところで、後期に入ると岩手県南地方では門前式の成立を見るわけだが、宮古市内では今のところ典型的な門前式は出土しておらず、これの影響を受けたと見られる連鎖状文等を施すものが見られるのみとなる。このため、当地方は門前式の分布圏からはずれている可能性が大きい。

本遺跡では該期の資料数が少なく、十腰内式が出現する以前の土器群（後期前葉のもの）を一括したが、青森県～岩手県北部に分布する土器群が比較的多く目についた。近隣の白石遺跡でも門前式亜流の土器と本間氏の葎窪式土器との共伴が認められ、該期において当地方が次第に北方系の土器文化圏の影響下に再編成されて行った可能性が考えられる。この件については資料の蓄積を待つて再度検討を加えたい。

尚、本遺跡において称名寺式と見られる土器が出土したことは改めて注目される問題となろう。

この様に、崎山貝塚は前期初頭から後期前葉にわたる土器群が継続的に存在している点が確

認められた。これらの中で特に前期～中期の資料については遺構や遺物包含層中に多量に含まれており、今後、これらの精査を実施すれば大木式土器文化圏北部での実態が明確になるとともに、その細分についても言及できる可能性を秘めたものであると言えよう。

(2) 石器群について

昭和61年度から平成5年度にわたる範囲確認調査にて出土し概報に図示した石器及び石製品は432点に及ぶが、これら以外にも表土等から出土したもので図示しなかったものもあり、総数は更に増える。

ここでは、これら石器群を大まかに分類した上で、土器群との共伴関係や石材産地との関係について触れてみたい。

石器群の分類

<剥片石器>

石槍（第212図1～3）——形態により次のとおり分類した。

A類（1）——木葉形を呈するもの。B類（2）——柳葉形を呈するもの。C類（3）——大略三角形を呈するもの。

石鏃（第212図4～13）——基部等の形態により無柄のもの（A類）、有柄のもの（B類）、基部と尖頭部の境界が不明瞭のもの（C類）と大別した上で次のとおり細分した。

A1類（4）——二等辺三角形を呈する三角鏃で基部が平らなもの。A2類（5）——前類に似るが基部が若干膨らむもの。A3類（6）——A1類に似るが基部が若干凹むもの。A4類（7）——基部の彎入が前類より著しいもの。A5類（8）——側縁部に明瞭な段を有し、基部が凹基のもの。あるいは着柄形態の可能性も考えられる。

B1類（9）——A1類に準じた形態を持ちながら柄部を有するもの。B2類（10）——A2類に準じた形態を持ちながら柄部を有するもの。B3類（11）——A3類に準じた形態を持ちながら柄部を有するもの。

C1類（12）——柳葉形を呈するもの。C2類（13）——本葉形を呈するもの。

石錐（第212図14・15）——基部形態により次のとおり分類した。

A類（14）——基部の調整が粗雑、あるいはほとんど手を加えていないもの。B類（15）——基部の全周を丁寧に調整するもの。

石匙（第212図19・20）——これまでの分類に従い次のとおり分類した。

A類（19）——縦形を呈するもの。B類（20）——横形を呈するもの。

削器（第212図16～18）——刃部形態等により次のとおり分類した。

A類（16）——剥片のほぼ全周を調整した比較的定形的なもの。B類（17）——彎入する刃部を有する三日月形のもの。C類（18）——剥片の側縁部に簡単な調整を加えて刃部とした不定形なもの。

搔器（第212図21・22）——調整方法等により次のとおり分類した。

A類（21）——剥片の下端に半円状で鈍角的な刃部を有するもので、エンド・スクレーパーに相当するもの。B類（22）——剥片のカーブを利用し、簡単な調整を加えただけで鈍角的な

刃部を有する不定形なもの。

篋状石器（第212図23）——出土点数が少なく、また欠損品が多いため一括する。

ピース・エスキューイ（第212図24）——出土点数が少なく一括する。

両面石器（第212図25）——出土点数が少なく一括する。

使用痕のある剥片（第212図26）——出土点数は多いが形態的斉一性が無いため一括する。

<石核石器>

石核（第212図27）——定形的なものや大形のは出土していない。27は黒耀石の小礫から剥片をとったものであるが、いずれの剥離面もネガティブであるため石核としておく。

<礫石器>

磨製石斧（第212図28・29）——成形の段階により次のとおり分類した。

A類（28）——器面全体を丁寧に磨き上げて整形したもの。B類（29）——敲打整形時のものであり、一部刃部付近のみを磨き上げたものもある。刃部形態や欠損状態からこの様な未製品段階のものも使用していた可能性が大きい。尚、本来であればこれにC類として打製整形段階のものを加えるべきであるが、後述する打製石斧との分離が困難でありこれに一括する。

打製石斧（第212図30・31）——刃部形態や製作方法により次のとおり分類した。

A類（30）——やや大き目の縦長礫の両面を調整して両刃の刃部を作り出すもの。前述した様に磨製石斧の打製整形段階のものを含む可能性もある。B類（31）——扁平円礫を縦方向に剥離させた後に主に主要剥離面を調整して片刃の刃部を作り出すもの。

礫器（第212図32）——円礫などを横方向に剥離させて片刃の刃部を作り出すもので、chopperに類似するものを一括した。

敲打磨石（第212図33～36）——機能磨面の部位により次のとおり分類した。

A類（33）——断面三角形の礫の側縁を使用するもので、機能磨面に隣接して調整磨面が認められるもの。B類（34）——扁平楕円形礫の側縁部を使用し、調整磨面を伴わないもの。C類（35）——扁平楕円形礫の長軸方向両端部を使用するもの。D類（36）——扁平円礫の周縁部を使用するもの（註2）。

敲石（第212図37～39）——機能部の部位により次のとおり分類した。

A類（37）——扁平楕円形礫の側縁部を使用するもの。B類（38）——扁平楕円形礫の長軸方向両端部を使用するもの。C類（39）——扁平円礫の周縁部を使用するもの。

磨石（第212図40）——出土点数が少なく一括する（註3）。

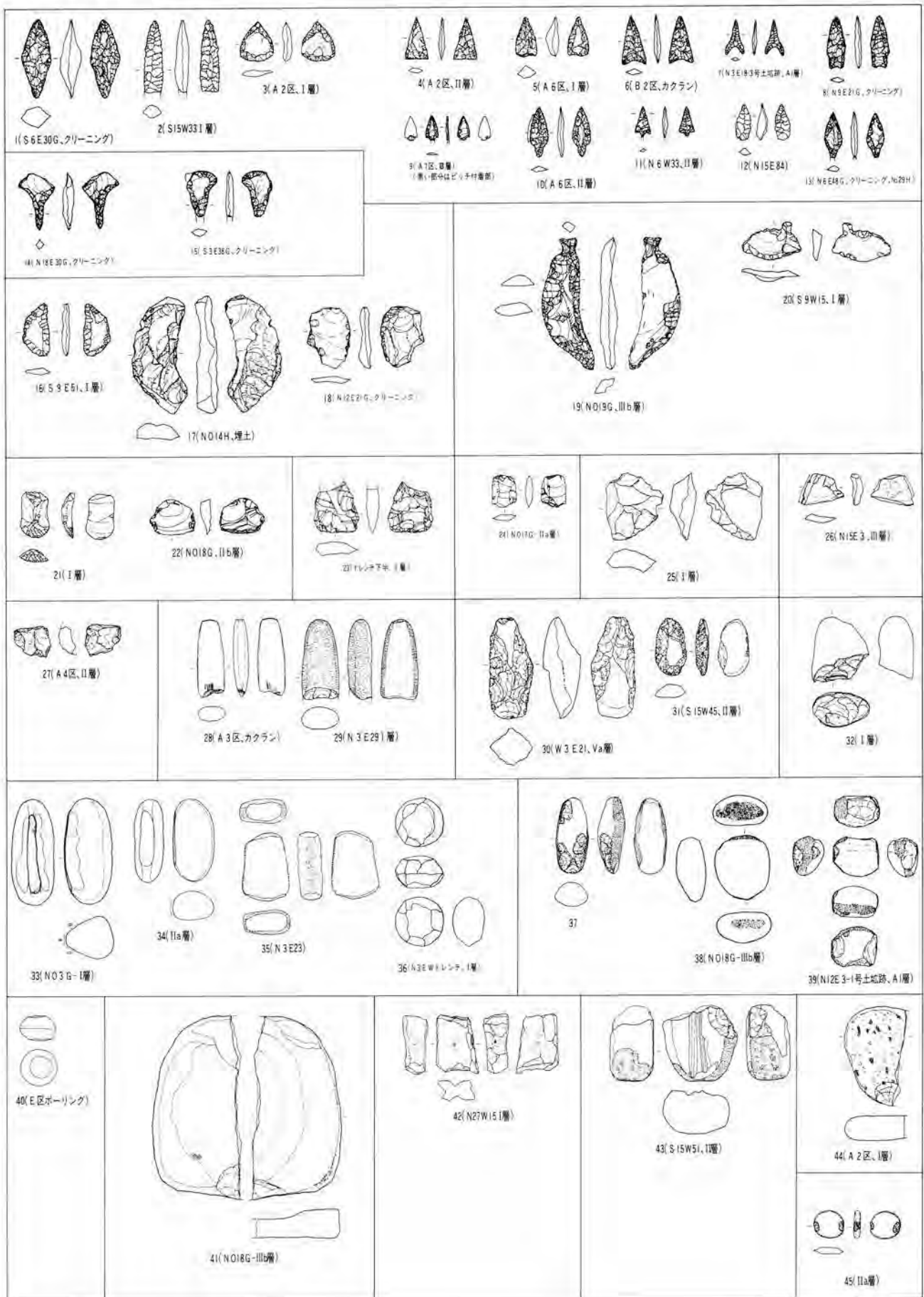
石皿（第212図41）——欠損品が多く一括する。大き目の礫に凹んだ使用面を有するものが大半で、縁や脚部を有するものは少ない。

凹石（第212図42）——使用する素材の形態差等による細分も可能であるが、ここでは一括する。

砥石（第212図43）——石材による差違や、磨面の状態（例えば平坦、細い溝状、広い溝状等）

による細分も可能であるが欠損品が多く一括する。

台石（第212図44）——石皿に類似するが、使用面が凹んでいない点や摩擦痕が認められず小さなまとまりを持つ敲打痕のみを有することから石皿と区別した。



第212図 石器分類図

礫石錘（第212図45）——出土点数が極めて少なく一括する。

次にこれらの石器群の時期について触れる。本来であれば、土器群の分類に従い細かな時期設定を行なうべきであろうが、伴出土器の明確な資料が少なかったため、集落の変遷過程に合わせて時期設定を行った。

＜第1段階＞（第Ⅰ群～第Ⅳ群土器に伴うもの主体）

器種毎の組み合わせは、石鏃（A1類・A2類・A3類）・石匙（A類・B類）・削器（C類）・搔器（C類）・篋状石器・ピエス・エスキューイ・磨製石斧（A類・B類）・礫器・敲打磨石（A類・B類）・敲石（A類・B類）・石皿・凹石である。

これらを概観するととりあえずひとつおりの器種がそろっているが、石鏃はいずれも無柄の三角鏃を主体としている点や、敲打磨石も特殊磨石に相当するA類が主体となる点、礫器が伴う点など、比較的古期の様相を呈していると言える。

また、ピエス・エスキューイについては獣骨層から楔形石器を打込んだ跡のあるシカ中手骨を得ているが、これに近い層位から出土しており特筆される。

＜第2段階＞（第Ⅵ群～第Ⅷ群土器に伴うもの）

器種毎の組み合わせは、石鏃（A3類・B1類）、石匙（A類）・削器（A類・C類）・礫器・敲打磨石（B種）・敲石（B種・D種）・砥石である。

出土点数が少なく該期の特徴を反映しているとは言い難く、上記以外の器種でも主要なものもは伴っていたと考えるのが自然であろう。石鏃についてはやはり無柄の三角鏃が主体ではあるものの本遺跡では第Ⅷ群土器の段階（大木8a式）から有柄三角鏃が出現している。敲打磨石は1点のみであるがB類を確認した。また、敲打磨石とはほぼ同様な部位を使用する敲石にD類が出現することから、これらの石器類が該期以降次第に多様化している点がかがえる。礫器については1点のみであり該期に伴うものか混入したものか不明である。

＜第3段階＞（第Ⅸ群土器に伴うもの）

器種毎の組合せは、石鏃（A3類・C1類）・石匙（A類）・削器（A類・C類）・搔器（B類）・磨製石斧（A類）・礫器・敲打磨石（A類・B類）・石皿・凹石・砥石である。

石鏃については無柄三角鏃を主体とし、該期から新たに柳葉形のものが出現している。礫器と敲打磨石A類は下層のものが混入している可能性が大きい。これまでの調査では敲打磨石・敲石・磨石などの礫石器類の該期の共伴例が少なかったが、今後の調査により補充されるものと思われる。

＜第4段階＞（第Ⅹ群～第Ⅺ群土器に伴うもの）

器種毎の組合せは、石鏃（A3類・C2類）・石匙（A類）・削器（A類・B類・C類）・搔器（B類）・磨製石斧（A類・B類）・打製石斧（A類）・敲打磨石（B類・C類・D類）・敲石（C類）・石皿である。

石鏃については無柄三角鏃を主体とし、やはり木葉形のものに伴う。削器は新たにB類とした三日月形のものが出現している。打製石斧は1点のみであるがA類を確認している。敲打磨石はB類～D類が認められ、多様化している傾向が窺える。敲石も同様であろう。

＜第5段階＞（第Ⅻ群土器に伴うもの）

出土点数が極端に少なく、石鏃（A 2類）・削器（C類）・敲石（C類）を確認したのみである。

これら以外に時期を特定できなかった石器類についてはほとんどの器種が出揃ってはいるがおおむね前期～後期に伴うものとして一括すべきものであるから細かな検討は省略する。

ただし、打製石斧B類は千鷲遺跡で前期初頭の共伴例があり比較的古期の石器と見るのが妥当であるが、本遺跡ではこれを確認できていない。

また、石核かと思われるもののなかには黒曜石製の小形のものが認められる。

黒曜石については剥片として持ち込まれている可能性も十分考えられようが、直径数cm程度の小礫の状態を持ち込まれ、本遺跡内で消費された可能性も指摘されよう。

更に、本遺跡では礫石錘を含めた石錘類が極めて少ない点が特徴となる。これは特に前期において十分な層厚を持つ魚骨層が形成されたことを考えると異状とも言える様相を呈する。これまでに確認された釣針・ヤスなどの漁具のほかに仮に石鏃や石槍を用いたとしてもイワシからマグロまでの多種多様な漁法に対応する道具立てとしてはあまりに稀薄で脆弱な内容だと言わざるを得ない。このためかつて礫石錘に代わるものとして遺跡内に多数持ち込まれた扁平円礫（浜石）をこれに充てて考察を加えたことがあった（『崎山遺跡群Ⅳ』）。

これらの扁平円礫のうち出土量の最も多い小形のものは石器の素材として持ち込まれたと考えるには小さ過ぎ、重量を計測すると礫石錘の小形のものや切目石錘などとほぼ同様な値を持つことから、定形的な石錘の代わりとして利用するために持ち込まれた可能性が指摘される。

最後に石器群の石材について触れる。

432点の石器及び石製品のうち石材名と産出地の判明したものが30種類で348点である。このうち石製品類を除き、産出地の判明した石器330点を抽出して分析する。

まず、剥片石器及び石核として使用されたものは、15種類で145点である。最も多いのが凝灰岩質泥岩の27.5%で、以下チャート質泥岩26.2%、粘板岩10.9%、チャート9.0%、硬質泥岩8.3%、流紋岩質細粒凝灰岩5.5%であり、その他のものは少ない。石材と器種の間では玉ずい、石英、水晶、チャート、黒曜石、鉄石英などがやや良質で、流紋岩がやや粗い印象を受けるが、おおむね剥片石器の素材としては十分な質を持っていると言える。特定の器種と石材が結びつく傾向は特に究えなかった。

礫石器として使用されたものは18種類で185点である。最も多いので安山岩質緑色凝灰岩の28.7%で、以下砂岩21.2%、安山岩18.5%、硬砂岩8.7%、デイサイト5.4%であり、その他のものは少ない。石材と器種の間では流紋岩質細粒凝灰岩、チャート質泥岩、凝灰岩質泥岩、安山岩質細粒凝灰岩を使用した敲打磨石や磨製石斧がやや緻密な印象を受ける。

また、デイサイト質凝灰岩、凝灰岩質硬砂岩、安山岩、安山岩質緑色凝灰岩、安山岩質細粒凝灰岩、アルコース砂岩は磨製石斧、打製石斧・敲打磨石・敲石の素材として、花崗閃緑岩、片麻岩は敲打磨石、敲石の素材として、砂岩は石皿・凹石・砥石、台石の素材として、硬砂岩のは礫器、砥石の素材として利用されており器種と石材に比較的对応関係が認められる。

次に石材産地との距離を見ると、崎山貝塚から直線距離で3km未満をAエリア、15km以上の北上山地内をBエリア、北上山地より遠方（北上山地南部を含む）をCエリアの3地域に大別される。

<Aエリア>

硬質泥岩・流紋岩質細粒凝灰岩・玉ずい・チャート質泥岩・凝灰岩質泥岩・流紋岩・デイサイト質凝灰岩・花崗閃緑岩・凝灰岩質硬砂岩・安山岩・安山岩質緑色凝灰岩・安山岩質細粒凝灰岩・砂岩・長石玢岩・アルコース砂岩・デイサイト・片麻岩

<Bエリア>

粘板岩・粘板岩（ホルンフェルス化）・石英・水晶・凝灰岩質粘板岩・チャート・赤褐色凝灰岩・硬砂岩

<Cエリア>

黒耀石・鉄石英

剥片石器での各地域産の比率はAエリア70.3%、Bエリア27.6%、Cエリア2.1%、礫石器での比率はAエリア90.3%、Bエリア9.7%、Cエリア0%となり、石器全体の比率はAエリア81.5%、Bエリア17.6%、Cエリア0.9%となる。

これらのことから、崎山貝塚周辺のAエリアでは比較的石器の素材に恵まれており、ひと通りの器種は自給できる体制が整っていたと言える。周辺部の海岸線では浜石が無尽蔵にあり、これらの中から石器の素材は容易に入手できたり、崖面の露頭から切り出す場合もあったと思われる。砂岩については日出島周辺の宮古層群中に良好な露頭があるが、これの中にはアンモナイトや貝類などの中生代の化石が含まれるが、石器として使用されたものの中にこれらの化石は全く含まれておらず、縄文人達は良好な石材を産する露頭を熟知しており、しかもシルト岩などの不純物を取り除いて使用していたと推察される。あるいはここから周辺の遺跡へ石材を供給していた可能性も考えられる。流紋岩の産出地は浄土ヶ浜周辺や日出島などに認められるが、やはり良質なものは浄土ヶ浜産である。しかし、この場所は鎌ヶ崎館山貝塚にも近く、両遺跡の入会地となっていた可能性が大きい。

このように半径3kmの日常生活圏内でほとんどの石材が入手できたことは特筆されよう。Bエリアについては崎山貝塚から直接採取にいった可能性も考えられるが、途中に多くの縄文遺跡が存在することを考えると、間に1遺跡以上が介在した交易を考える必要があるかと思われる。石材に着目すると剥片石器でチャートなどの比較的良質なものが多く、礫石器でも比較的硬質な硬砂岩が持ち込まれるなど、Aエリアでなお不足するものを補ったという事になるかと思われる。

Cエリアについては明らかに交易品と考えられるもので、黒耀石や鉄石英は最も近い所でも盛岡市以西などの奥羽山系に産出地を求められるものと思われる。

また、石器以外の石材では块状耳飾りの素材として滑石が宮守村周辺からもたらされている。さらに、本遺跡では今のところ未検出であるがヒスイやコハクなどが市内の縄文遺跡から検出されており、これら遠方からの交易品も今後の調査により検出される可能性が大きいものと思われる。

なお、これらは前期～後期の資料を一括して検討したものであり、今後はもっと短期間のタイムスケールでの検討を試みる必要があることは言うまでもない。

(3) 土製品・石製品について

a) 土製品

1はキノコ形土製品である。2は環状の土製品であり装飾品類かと思われる。3・4はミニチュア土器で、3は浅鉢形、4は深鉢形である。5はスプーン状か皿状を呈する土製品である。6は焼成粘土塊であり、3片以上が接合する粘土塊を焼成したものである。7・8は円盤状土製品であり、7は前期前葉に伴うもの、8は中期後葉～未葉に伴うものである。

b) 石製品

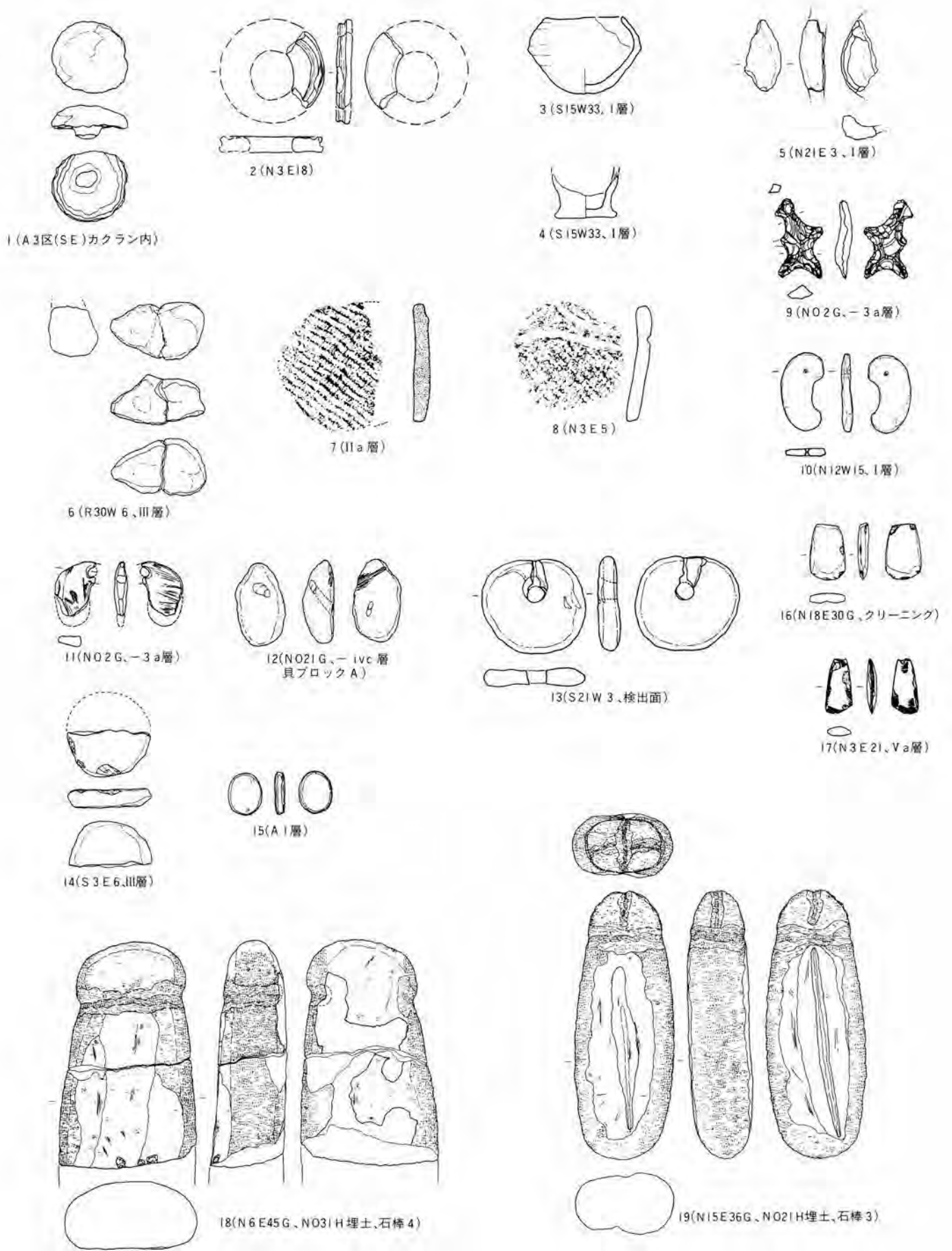
9はチャート製の動物形石製品である。10は粘板岩製の匂玉であるが、やや板状を呈している。11は滑石製の玦状耳飾りである。12は有孔自然石であるが背面に擦痕が認められるもので、垂飾品か錘として使用されたものと思われる。13は扁平円礫の上端に貫通孔を穿ったもので垂飾品かと思われる。14・15は円盤状石製品である。15は小形の扁平円礫の周縁を擦ったもので、14は扁平円礫の周縁を打ち欠いた後に擦り上げたものである。16・17は小形磨製石斧であるが、基部や刃部に小剥離を伴うものが多く楔形石器等として使用した可能性も指摘される。18・19は石棒である。頭部形態の判明するものはいずれも敲打により溝状のくびれを作出している。19は頭部上面に十字形の溝を有し、体部には両面に溝状の磨面を有するものである。

これらの中で、キノコ形土製品については宮古市内では縄文中期未葉以降の遺跡に普遍的に出土している遺物であり、当地方が分布のひとつの中心地域であったと指摘できる。また、特に後期～晩期を中心として馬淵川流域などの岩手県北～青森県にも広く分布しているようであり、今後両地域での比較検討が必要となろう。

石棒については第9次調査で東集落周辺からまとまって出土している点が特筆される。

以上の様に土製品・石製品については遺構や包含層が未精査であることから本遺跡で特に特殊なもの多出するという様な極立った特徴を見られず、全体とすればやや低調な内容であったと言ふべきであろう。例えば装飾品や儀器などは骨角器に置替っている可能性も指摘できるが土偶の欠落は注目すべきである。

当地方では前期～中期の土偶が少なく、確実な例は重茂館遺跡群から1例が知られているだけである。しかし、後期以降は次第に出土量が多くなる様である。一方、内陸地方では前期未葉～中期初頭にかけて土偶が爆発的に増加するが、この様な差異が如何なる原因によるものか、今後も資料の蓄積を待った上で再度検討したい。



第213図 土製品・石製品分類図

登録番号	出土地点	出土層位	出土石器	器種	石目名	エリア	石料産地	掲載番号	備考
1	1001 No. 18G	目ブロックC	IV c層	I	石鏡A-1	不明		1702	
2	1016 No. 18G		IV a層	I	石鏡A	不明		1717	
3	1021 No. 19G		III b層	I	石鏡A	不明		1722	
4	1041 No. 18G		III b層	I	削器C	不明		1742	
5	1043 No. 18G		III d層	I	削器C	不明		1744	
6	1034 No. 16G		II d層	I	撚器B	不明		1735	
7	1025 No. 18G		III b層	I	撚器B	不明		1726	
8	1047 No. 18G		III a層	I	磨製石斧A	不明		1748	
9	1050 No. 21G	目ブロックA	4 c層	I	磨製石斧A	不明		1751	
10	1052 No. 18G		III a層	I	撚器	不明		1753	中生界
11	1054 No. 18G		III b層	I	撚器	不明		1755	中生界
12	2028 B区		B 7層	I	敲打磨石A	不明	岩泉方面	1978	中生界
13	2027 B区		B 7層	I	敲打磨石A	不明	浄土ヶ浜～日出島	1977	中生界
14	1064 No. 18G		III a層	I	敲打磨石A	不明	伊伊川上流	1765	
15	8805 C 6区		V層	I	敲打磨石B	不明		2470	中生界
16	1069 No. 19G		III b層	I	敲打磨石B	不明	田老～嶺山	1770	中生界
17	1073 No. 18G		III b層	I	敲打磨石B	不明	宮古～田老	1774	中生界
18	1079 No. 18G		III b層	I	敲打磨石B	不明	嶺山～田老	1780	中生界
19	1071 No. 19G		III b層	I	石皿	不明	嶺山～日出島	1772	中生界
20	1077 No. 19G		III b層	I	凹石	不明	田老	1778	中生界
21	1102 No. 18G		III a層	I	凹石	不明	嶺山～日出島	1786	中生界
22	1003 No. 18G		II b層	II	小形磨製石斧	不明		1704	
23	1019 No. 16G		II c層	II	石鏡A-3	不明		1720	
24	1017 No. 17G		II c層	II	石鏡A	不明		1718	
25	1022 No. 2G		4 d層	II	石鏡A	不明		1723	
26	1014 No. 20G		4 b層	II	石鏡B	不明		1715	
27	1038 No. 21G		4 b層	II	削器C	不明		1739	
28	1033 No. 20G		4 a層	II	撚器B	不明		1734	
29	1037 No. 21G		4 a層	II	撚器B	不明		1738	
30	1035 No. 2G		4 d層	II	撚器B	不明		1736	
31	1046 No. 16G		II c層	II	磨製石斧A	不明		1747	
32	1051 No. 17G		II c層	II	磨製石斧A	不明		1752	
33	1056 No. 2G		4 d層	II	撚器	不明		1757	中生界
34	1062 No. 17G		II c層	II	敲打磨石A	不明	嶺山～田老	1763	中生界
35	1081 No. 20G		4 a層	II	石皿	不明	嶺山～日出島	1782	中生界
36	1007 No. 21G		2 c層	III	石鏡A-2	不明		1708	
37	1009 No. 20G		4 b層	III	石鏡A-3	不明		1710	
38	1018 No. 21G		2 c層	III	石鏡A	不明		1719	
39	1036 No. 21G		3 b層	III	撚器B	不明		1737	
40	1026 No. 3G		4 b層	III	撚器B	不明		1727	
41	1028 No. 21G		2 a層	III	ピース・エスキューイ	不明		1729	
42	1049 No. 3G		4 c層	III	磨製石斧B	不明		1750	
43	1065 No. 20G		2 c層	III	敲打磨石A	不明		1766	中生界
44	1060 No. 3G		4 c層	III	敲打磨石A	不明		1761	
45	1066 No. 3G		4 c層	III	敲打磨石A	不明		1767	
46	1070 No. 21G		3 b層	III	敲打磨石A	不明		1771	
47	1074 No. 21G		2 c層	III	凹石	不明		1775	
48	1002 No. 2G		3 c層	IV	石鏡A-3	不明		1703	
49	1005 No. 2G		4 a層	IV	石鏡A-3	不明		1706	
50	1045 No. 3G		4 a層	IV	磨製石斧A	不明		1746	
51	2004 B区		B 2層	IV?	石鏡A-3	不明	嶺山付近～岩泉方面	1954	中生界
52	2016 A区上		A 1の1層	IV?	撚器	不明	伊伊川上流	1986	中生界
53	2008 A区下		A 3層	V～	撚器	不明	浄土ヶ浜～日出島	1958	中生界
54	4112 N21B03-1号住			VI	削器A	不明		525	
55	5058 北目録N区		N 3層	VI	削器A-3	不明	嶺山～岩泉方面	2569	中生界
56	5074 Pot1附近			VI	削器C	不明	嶺山附近～岩泉方面	2575	中生界
57	2020 C区		C 1層	VI	撚器	不明	伊伊川上流	1970	中生界
58	8750 A 7区		7-X II層	VI	石鏡B-1	不明	嶺山～岩泉方面	2438	中生界
59	8771 A 7区		7-III層上部	VI	石鏡A	不明	北上山地伊伊川流域	2450	中生界
60	8804 A 7区		7-III層上部	VI	敲打磨石B	不明	嶺山～岩泉方面	2469	中生界
61	8808 A 7区		7-III層上部	VI	敲打磨石B	不明	浄土ヶ浜～日出島	2473	中生界
62	8811 A 4区		7-III層上部	VI	敲打磨石B	不明	日出島附近	2476	中生界
63	8817 A 7区		7-III層	VI	敲打磨石B	不明	嶺山～日出島	2482	中生界
64	1004 No. 16G		II a層	IX	石鏡A-3	不明		1705	
65	1008 No. 17G		II a層	IX	石鏡A-3	不明		1709	
66	1013 No. 17G		II a層	IX	石鏡A-3	不明		1714	
67	1010 No. 18G		II a層	IX	石鏡A-3	不明		1711	
68	1011 No. 19G		II a層	IX	石鏡A-3	不明		1712	
69	1012 No. 14G		II a層	IX	石鏡C-1	不明		1713	
70	1020 No. 17G		II a層	IX	石鏡A	不明		1721	
71	1023 No. 18G		II a層	IX	石鏡A	不明		1724	
72	1015 No. 1G		2 a層	IX	石鏡A	不明		1716	
73	1027 No. 16G		II a層	IX	削器A	不明		1728	
74	8777 A 5区		5-IV層	IX	削器C	不明	嶺山～岩泉方面	2456	中生界
75	1039 No. 16G		II a層	IX	削器C	不明		1740	
76	1040 No. 17G		II a層	IX	削器C	不明		1741	
77	1042 No. 18G		II a層	IX	削器C	不明		1743	
78	1030 No. 16G		II a層	IX	撚器B	不明		1731	
79	1031 No. 16G		II a層	IX	撚器B	不明		1732	
80	1032 No. 18G		II d層	IX	撚器B	不明		1733	
81	8795 A 6区		6-III層上部	IX	磨製石斧A	不明	嶺山附近	2460	中生界
82	1057 No. 2G		3 a層	IX	撚器	不明	岩泉方面	1758	中生界
83	1061 No. 17G		II a層	IX	敲打磨石A	不明		1762	
84	1058 No. 19G		II a層	IX	敲打磨石A	不明		1759	
85	8802 A 4区		4-III層	IX	敲打磨石B	不明		2467	中生界
86	6054 No. 12H		床面	IX	石皿	不明	宮古～田老	1198	中生界
87	6055 No. 12H		床面	IX	石皿	不明	嶺山～日出島	1199	中生界
88	8812 A 4区		4-III層	IX	凹石	不明	嶺山～日出島	2477	中生界
89	1076 No. 1G		3 a層	IX	凹石	不明		1777	
90	6056 No. 12H		床面	IX	凹石	不明	嶺山～日出島	1200	中生界
91	1101 No. 2G		3 a層	IX	動物形石製品	不明	津軽石上流	1785	中生界
92	1104 No. 2G		3 a層	IX	耳飾り	不明	宮古	1788	中生界
93	6053 No. 12H		A 1層	IX	凹石	不明	嶺山～日出島	1197	中生界
94	5020 N3E18-1号土坑跡		A 6層	X	石鏡A-3	不明	嶺山～岩泉方面	87	中生界
95	8267 N014H		埋土	X	削器B	不明	嶺山～岩泉方面	1093	中生界
96	8262 N014H		埋土	X	削器C	不明	日出島	1088	中生界
97	5028 N3E18-1号土坑跡		B 3層	X	削器C	不明	嶺山～岩泉方面	95	中生界
98	8264 N014H		A 1層	X	削器C	不明	北上山地伊伊川流域	1090	中生界
99	5025 N3E18-1号土坑跡		B 3層	X	撚器B	不明	日出島	92	中生界
100	8265 N014H		埋土	X	撚器B	不明	嶺山～岩泉方面	1091	中生界
101	8263 N014H		埋土	X	撚器B	不明	不詳	1089	中生界
102	8266 N014H		埋土	X	磨製石斧A	不明	嶺山～岩泉方面	1092	中生界
103	8033 N014H		埋土	X	磨製石斧B	不明	田老～嶺山	848	中生界
104	9279 N15E36G, N20F, No. 21H		埋土	X	敲打磨石B	不明	田老	813	中生界
105	8803 A 5区		5-III層	X	敲打磨石B	不明	宮古～田老	2468	中生界
106	9280 S6E45G, No. 33H		クリーニング	X	敲打磨石B	不明	田老～嶺山	814	中生界
107	5042 N3E18-1号土坑跡		B 3層	X	敲打磨石C	不明	田老～嶺山	109	中生界
108	5044 N3E18-1号土坑跡		A 3層	X	敲打磨石D	不明	田老～嶺山	111	中生界
109	5047 N3E18-1号土坑跡		A 4層	X	石鏡C	不明	宮古～田老	114	中生界
110	8032 N014H		埋土	X	石皿	不明	嶺山～日出島	847	中生界

第53表 石器類集計表 (1)

登録番号	出土地点	出土層位	伴出土器	器種	石材名	エリア	石材産地	地誌番号	備考
111	9282 N15E76G, No. 2111 石橋3	埋土	X	石橋	砂岩	A	岡山-日出島	816	中生界
112	5023 N3E15	Vc層	X~X1	削器A	チャート質泥岩	A	日出島	90	中生界
113	5034 N1E18	Vc層	X~X1	磨製石斧A	凝灰岩質粘板岩	B	閉伊川流域	101	古生界
114	5036 N3E21	Va層	X~X1	打製石斧A	アルコノス砂岩	A	岡山附近	103	中生界, 宮古層群
115	5037 N3E18	Vc層	X~X1	磨製石斧B	花園閃緑岩	A	田老	104	中生界, 白亜系
116	5033 N3E21	Va層	X~X1	小形磨製石斧	凝灰岩質粘板岩	A	閉伊川流域	100	古生界
117	9262 N6E48G, No. 29H	クリーニング	X1	石橋C-2	チャート質泥岩	A	日出島	796	中生界
118	9271 N9E42G, No. 27H	クリーニング	X1	石橋A	チャート質泥岩	A	日出島	805	中生界
119	5112 N1E33-1号土坑跡	A層	X11	石橋A-2	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	179	中生界
120	5113 N1E33-1号土坑跡	B層	X11	削器C	チャート	B	津軽石川上流	180	中生界
121	5117 N1E33-1号土坑跡	A1層	X11	磨製石C	茨山岩質緑色凝灰岩	A	宮古-田老	184	中生界
122	8756 A7区	I層	不明	石橋A	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	2435	中生界
123	9260 S6E30G	クリーニング	不明	石橋A	チャート質泥岩	A	日出島	794	中生界
124	3002 N3W15	I層	不明	石橋A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	289	中生界
125	4001 S15W33	I層	不明	石橋A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	288	中生界
126	8752 A5区	II層	不明	石橋B	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	2436	中生界
127	4107 N24E93-1号住	I層	不明	石橋B	不明	不明	不明	522	中生界
128	8758 A2区	I層	不明	石橋C	チャート	B	津軽石川上流	2437	中生界
129	7036 S6E6-1号土坑	埋土	不明	石橋A-1	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	10	中生界
130	2006	I層	不明	石橋A-1	チャート質泥岩	A	日出島	1956	中生界
131	2007	I層	不明	石橋A-1	チャート質泥岩	A	日出島	1957	中生界
132	2001	I層	不明	石橋A-1	凝灰岩質泥岩	A	津上7溪-日出島	1951	中生界
133	6103	I層	不明	石橋A-1	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	1303	中生界
134	8762 A2区	II層	不明	石橋A-1	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	2441	古生界
135	2002	I層	不明	石橋A-1	不明	不明	不明	1952	中生界
136	4110 N24E93-1号住	I層	不明	石橋A-1	不明	不明	不明	524	中生界
137	8767 A6区	I層	不明	石橋A-2	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	2446	中生界
138	8269 N15W51	I層	不明	石橋A-2	チャート質泥岩	A	日出島	1095	中生界
139	3008 N18W33	II層	不明	石橋A-2	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	295	中生界
140	8768 A5区	II層	不明	石橋A-2	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	2447	古生界
141	9269 N12E45G	P4埋土	不明	石橋A-2	チャート	B	津軽石川上流	803	中生界
142	7037 S18E6	II層	不明	石橋A-2	チャート	B	津軽石川上流	294	中生界
143	3007 S6E24	I層	不明	石橋A-2	チャート	B	津軽石川上流	294	中生界
144	2003	I層	不明	石橋A-3	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	1953	中生界
145	8765 A5区	II層	不明	石橋A-3	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	2444	中生界
146	8272 S15W36	II層	不明	石橋A-3	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	1098	中生界
147	2005	I層	不明	石橋A-3	チャート質泥岩	A	日出島	1955	中生界
148	8763 A4区	II層	不明	石橋A-3	チャート質泥岩	A	日出島	2442	中生界
149	8764 A5区	II層	不明	石橋A-3	チャート質泥岩	A	日出島	2443	中生界
150	8766 A7区	II層	不明	石橋A-3	チャート質泥岩	A	日出島	2445	中生界
151	9266 N9E18G	クリーニング	不明	石橋A-3	チャート質泥岩	A	日出島	800	中生界
152	8270 S15W42	II層	不明	石橋A-3	チャート質泥岩	A	日出島	1096	中生界
153	6104	I層	不明	石橋A-3	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	1304	中生界
154	8784 A4区	II層	不明	石橋A-3	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	2489	中生界
155	5019 N3E15	I層	不明	石橋A-3	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	86	中生界
156	3004 N3W48	I層	不明	石橋A-3	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	291	中生界
157	3003 N9W33	II層	不明	石橋A-3	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	290	中生界
158	3006 S27W15	II層	不明	石橋A-3	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	293	中生界
159	8761 B2区	カクラン	不明	石橋A-3	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	2440	古生界
160	9267 N6E21G	I-II層	不明	石橋A-3	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	801	古生界
161	9265 N6E45G	クリーニング	不明	石橋A-3	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	799	古生界
162	9264 N12E42G, No. 26H	クリーニング	不明	石橋A-3	凝灰岩質粘板岩	B	閉伊川流域	798	古生界
163	9268 N15E21G	クリーニング	不明	石橋A-3	チャート	B	津軽石川上流	802	中生界
164	4109 N13E18	I層	不明	石橋A-3	不明	不明	不明	1707	中生界
165	1006 地点不明	I層	不明	石橋A-3	不明	不明	不明	292	中生界
166	3005 N21W15	I層	不明	石橋A-4	玉子い	A	田老-岡山	1097	中生界
167	8271 S15W45	II層	不明	石橋A-4	チャート質泥岩	A	日出島	88	中生界
168	5021 N3E18-3号土坑跡	A1層	不明	石橋A-4	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	795	古生界
169	9261 N9E21G	クリーニング	不明	石橋A-5	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	2439	中生界
170	8760 A6区	II層	不明	石橋B-2	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	296	中生界
171	4009 S10W15	II層	不明	石橋B-2	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	297	中生界
172	7010 N6W33	II層	不明	石橋B-3	玉子い	A	田老-岡山	797	中生界
173	9263 S3E21G	クリーニング	不明	石橋C-1	チャート	B	津軽石川上流	523	中生界
174	4108 N15E84-1号住	I層	不明	石橋C-1	不明	不明	不明	1959	中生界
175	2009	I層	不明	石橋A	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	2432	中生界
176	8753 A4区	II層	不明	石橋A	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	1094	中生界
177	8268 N15W39	I層	不明	石橋A	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	2433	中生界
178	8754 A4区	II層	不明	石橋A	チャート質泥岩	A	日出島	2434	中生界
179	8755 A4区	II-II層	不明	石橋A	チャート質泥岩	A	日出島	298	中生界
180	3011 N15W15	III層	不明	石橋A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	299	中生界
181	3012 N3E45	I層	不明	石橋A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	300	中生界
182	3013 N1W27	II層	不明	石橋A	凝灰岩質粘板岩	A	閉伊川流域	792	古生界
183	9258 N18E30G	クリーニング	不明	石橋B	凝灰岩質粘板岩	B	閉伊川流域	793	古生界
184	9259 S3E36G	クリーニング	不明	石橋A	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	2448	中生界
185	8769 北貝塚	I層	不明	石橋A	チャート質泥岩	A	日出島	804	中生界
186	9270 N6E21G	クリーニング	不明	石橋A	凝灰岩質泥岩	A	津上7溪-日出島	1962	中生界
187	2012	I層	不明	石橋A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	2451	中生界
188	8772 A2区	II層	不明	石橋A	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	2570	古生界
189	5069	検出時	不明	石橋A	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	2449	古生界
190	8770 北貝塚	I層	不明	石橋A	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	1960	古生界
191	2010	I層	不明	石橋A	粘板岩ホルンフェルス化	B	閉伊川上流	528	中生界
192	4115 N13E15	I層	不明	石橋A	不明	不明	不明	1961	中生界
193	4117 N24E93	I層	不明	石橋A	不明	不明	不明	1963	中生界
194	2011	I層	不明	石橋B	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	301	中生界
195	2013	I層	不明	石橋B	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	301	中生界
196	3014 S9W15	I層	不明	石橋B	チャート質泥岩	A	日出島	526	中生界
197	8274 北貝塚 A1区	I層	不明	石橋B	チャート質泥岩	A	日出島	2568	中生界
198	4113 N24E93-1号住	I層	不明	石橋B	不明	不明	不明	1101	中生界
199	5067	I層	不明	削器A	硬質泥岩	A	岡山附近-岩泉方面	1306	中生界
200	8277 N15E10レンチ	I層	不明	削器A	凝灰岩質粘板岩	A	日出島附近	807	中生界
201	6106	I層	不明	削器A	チャート質泥岩	A	日出島	306	中生界
202	9273 S3E45G	クリーニング	不明	削器A	チャート質泥岩	A	日出島	305	中生界
203	3019 N12W15	I層	不明	削器A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	2571	古生界
204	3018 S9E51	I層	不明	削器A	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	97	古生界
205	5070	検出時	不明	削器A	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	91	古生界
206	5030 N3E15	I層	不明	削器A	チャート	B	津軽石川上流	2574	中生界
207	5024 N3E18-3号土坑跡	A3層	不明	削器A	チャート質泥岩	A	日出島	809	中生界
208	5073	I層	不明	削器C	チャート質泥岩	A	日出島	187	中生界
209	9275 N12E21G	クリーニング	不明	削器C	チャート質泥岩	A	日出島	310	中生界
210	5114 N15E3	II層	不明	削器C	チャート質泥岩	A	日出島	307	中生界
211	3023 N18E51	I層	不明	削器C	チャート質泥岩	A	日出島	1105	中生界
212	3020 N24W15	II層	不明	削器C	チャート質泥岩	A	日出島	308	中生界
213	8278 S15W39	II層	不明	削器C	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	313	中生界
214	5021	I層	不明	削器C	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	2576	中生界
215	3026	I層	不明	削器C	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	309	中生界
216	5075	I層	不明	削器C	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	1103	中生界
217	3022 S12E24	I層	不明	削器C	凝灰岩質泥岩	A	岡山-岩泉方面	2572	古生界
218	8279 S15W60	I層	不明	削器C	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	808	古生界
219	5071	I層	不明	削器C	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	808	古生界
220	9274 N12E21G	クリーニング	不明	削器C	粘板岩	B	北上山地閉伊川流域	808	古生界

第54表 石器類集計表(2)

登録番号	出土地点	出土層位	住上土器	器種	石材名	エリア	石材産地	掲載番号	備考
221	8273 S15W63	I層	不明	削器C	新灰岩	B	北上山地伊川流域	1099	古生界
222	8776 A 4区	II層	不明	削器C	石英	B	北上山地	2455	不詳
223	7038 S3W6	I層	不明	削器C	チャート	B	津軽石川上流	—	中生界
224	5022 N3E18トレンチ	I層	不明	削器C	赤褐色燧灰岩	B	北上山地伊川流域	89	中生界
225	5029 N3E18-3号土坑跡	A I層	不明	削器C	黒曜石	C	不詳	96	不詳
226	1044	I層	不明	削器C	—	不明	—	527	—
227	4114 N24E93-1号住	I層	不明	削器C	—	不明	—	1745	—
228	2015	I層	不明	掘器A	硬質泥岩	A	崎山付近～岩泉方面	1965	中生界
229	2014	I層	不明	掘器A	粘板岩ホルンフェルス化	B	伊川上流	1964	古生界
230	4111 N3E18	I層	不明	掘器A	—	不明	—	—	—
231	3017 N18W33	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	304	中生界
232	5026 N3E15	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	93	中生界
233	5027 N3E18トレンチ	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	94	中生界
234	8276 S15W45	II層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	1100	中生界
235	8775 A 2区	目層上面	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	2454	中生界
236	8783 A 5区	II層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	2488	中生界
237	7039 S3E15	III層	不明	掘器B	流紋岩	A	浄土ヶ浜	—	古第三系
238	5072	掘出時	不明	掘器B	粘板岩	B	北上山地伊川流域	2573	古生界
239	8774 A 5区	II層	不明	掘器B	チャート	B	津軽石川上流	2453	中生界
240	3016 N3W36	I層	不明	掘器B	チャート	B	津軽石川上流	303	中生界
241	3015 S9W33	II層	不明	掘器B	チャート	B	津軽石川上流	302	中生界
242	4116 N3E24	I層	不明	掘器B	—	不明	—	—	—
243	8778 A 4区	II層	不明	掘器B?	水晶	B	北上山地	2457	不詳
244	2017	I層	不明	掘器B	硬質泥岩	A	崎山付近～岩泉方面	1967	中生界
245	8275 S15W27	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	1102	中生界
246	1024 トレンチ下半	I層	不明	掘器B	—	不明	—	1725	—
247	2019	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	1969	中生界
248	5077	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	2578	中生界
249	2018	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	浄土ヶ浜～日出島	1968	中生界
250	8773 A 7区	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	2452	中生界
251	9276 N18E30G	クリーニング	不明	掘器B	チャート	B	津軽石川上流	810	中生界
252	1029 No. 17C	IIa層	不明	掘器B	—	不明	—	1730	—
253	5076	I層	不明	掘器B	流紋岩	A	浄土ヶ浜	2577	古第三系
254	8280 S15W42	I層	不明	掘器B	チャート質泥岩	A	日出島	1106	中生界
255	6105	IIa層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	1305	中生界
256	3024 N12E24	III層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	311	中生界
257	3025 N18E51	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	312	中生界
258	5078	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	2579	中生界
259	2024	I層	不明	掘器B	粘板岩	B	北上山地伊川流域	1974	古生界
260	8779 A 4区	II層	不明	掘器B	燧砂岩	B	伊川上流	2458	不詳
261	8794 A 3区	II層	不明	掘器B	黒曜石	C	不詳	2459	中生界
262	8261 S15W27	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	崎山～岩泉方面	1087	中生界
263	6109	IIa層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	1309	中生界
264	6110	IIa層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	1310	中生界
265	3032 S30W15	II層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	—	中生界
266	7031 S3E6	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	—	中生界
267	7032 S3E6	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	—	中生界
268	9278 S6E15G	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	—	中生界
269	3031 N3W57	I層	不明	掘器B	燧灰岩質泥岩	A	宮古～田老	812	中生界
270	9277 N18E30G	クリーニング	不明	掘器B	アルコームス岩	A	崎山附近	—	中生界 宮古層群
271	6111	I層	不明	掘器B	粘板岩	B	北上山地伊川流域	811	古生界
272	8797 A 6区	I層	不明	掘器B	燧砂岩	B	伊川上流	1311	古生界
273	4102 N15E87	I層	不明	掘器B	燧砂岩	D	不詳	2462	不詳?
274	3041	I層	不明	掘器B	燧砂岩	D	不詳	530	—
275	3043 N3E27	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	—	中生界 白亜系
276	3035 N3W18	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	—	中生界 白亜系
277	3037 N3W27	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	—	中生界 白亜系
278	8285 S15W33	II層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	1110	中生界
279	8287 S15W33	II層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	1112	中生界
280	3044	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	—	中生界
281	6112	IIa層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1312	中生界
282	6113	IIa層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1313	中生界
283	6114	IIa層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1314	中生界
284	8796 A 4区	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	2461	中生界
285	8798 A 5区	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	2463	中生界
286	3039 N24W15	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
287	3040 N24W15	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
288	5035 N3E18トレンチ	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	102	中生界
289	3038 S12W33	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
290	7033 S15E6	III層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
291	8284 S15W27	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1109	中生界
292	8286 S15W39	II層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1111	中生界
293	7034 S18E15	III層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
294	3034 S18W15	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
295	3033 S3W33	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
296	3036 S3W33	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
297	4104 N24E93-1号住	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	529	—
298	1048 トレンチ下半	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1749	—
299	8799 A 4区	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	2464	中生界
300	3044 N15E24	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	—	中生界 白亜系
301	8288 S15W33	II層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	1113	中生界
302	8292 S15W33	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	1117	中生界
303	8293 S15W48	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	1118	中生界
304	6115	IIa層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1315	中生界
305	7035 S15E15	III層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
306	8294 S15W27	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1119	中生界
307	8291 S15W33	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1116	中生界
308	8800 A 4区	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	2465	中生界?
309	8290 S15W45	II層	不明	掘器B	燧砂岩	A	田老～崎山	1115	中生界
310	8289 S15W27	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	宮古～田老	1114	中生界
311	1053 No. 18G	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	崎山～田老	1754	中生界
312	2021	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	伊川上流	1971	古生界
313	1055 No. 18G	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	伊川上流	1756	不詳
314	3046 S9W15	I層	不明	掘器B	チャート質燧砂岩	A	不詳	—	中生界
315	8298 S15W33	II層	不明	掘器B	チャート質燧砂岩	A	浄土ヶ浜～日出島	—	中生界
316	3048	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	崎山～岩泉方面	1123	中生界
317	3045 S3E24	I層	不明	掘器B	燧砂岩	A	崎山～岩泉方面	—	古第三系
318	1063 No. 3G	I層	不明	掘器B	流紋岩	A	浄土ヶ浜	—	古第三系
319	1067 No. 9G	I層	不明	掘器B	流紋岩	A	浄土ヶ浜	—	古第三系
320	5039 N3E15	I層	不明	掘器B	—	不明	—	1764	—
321	5038 N3E15-1号土坑跡	I層	不明	掘器B	—	不明	—	1768	—
322	8299 S15W39	I層	不明	掘器B	花崗閃緑岩	A	田老	106	中生界 白亜系
323	3047 S6W33	I層	不明	掘器B	花崗閃緑岩	A	田老	105	中生界 白亜系
324	5116 N15E3	III層	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	崎山～岩泉方面	1125	中生界 白亜系
325	7043 S15E6	I層	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	崎山	—	中生界
326	8297 S15W42	II層	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	田老～崎山	183	中生界
327	6116	I層	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
328	6117	IIa層	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	宮古～田老	—	中生界
329	6118	IIa層	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	浄土ヶ浜	1124	古第三系
330	8801 A 3区	目層上面	不明	掘器B	燧灰岩質燧砂岩	A	浄土ヶ浜	1316	中生界
					チャート	A	崎山～日出島	1317	中生界
					チャート	A	崎山～日出島	1318	中生界
					チャート	A	崎山～日出島	2466	中生界

第55表 石器類集計表 (3)

登録番号	出土地点	出土層位	伴出土器	器種	石材名	エリア	石材産地	掲載番号	備考	
331	5115	E1MSトレンチ	I層	不明	敲打磨石B	デイサイト	A	岡山-日出島	182	中生界
332	8295	S15W30	I層	不明	敲打磨石B	デイサイト	A	岡山-日出島	1120	中生界
333	8296	S15W33	II層	不明	敲打磨石B	デイサイト	A	岡山-日出島	1121	中生界
334	1068	No. 15G	I層	不明	敲打磨石B		不明		1769	
335	1059	No. 20G	I層	不明	敲打磨石B		不明		1760	
336	6120		IIa層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	1320	中生界
337	6121		IIa層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	1321	中生界
338	8301	S15W33	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	1126	中生界
339	8303	S15W33	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	1128	中生界
340	6119		I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	1319	中生界
341	4106	N3E15	I層	不明	敲打磨石C		不明		-	
342	4103	N3E23	I層	不明	敲打磨石C		不明		-	
343	4105	地点不明	I層	不明	敲打磨石C		不明		-	
344	6122		I層	不明	敲打磨石D	チャート質泥岩	A	不詳	1322	不詳
345	6124		IIa層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	田老-岡山	1324	中生界
346	6125		IIb層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	田老-岡山	1325	中生界
347	5040	N3E15	I層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	田老-岡山	107	中生界
348	8304	S15W42	II層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	田老-岡山	1129	中生界
349	6123		I層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	宮古-田老	1323	中生界
350	6126		IIa層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	宮古-田老	1326	中生界
351	5041	N3EWトレンチ	I層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	宮古-田老	108	中生界
352	8302	S15W33	II層	不明	敲打磨石D	安山岩	A	宮古-田老	1127	中生界
353	2022		I層	不明	敲打磨石A	デイサイト	A	浄土方面-日出島	1972	中生界
354	1072	No. 10G	I層	不明	敲打磨石A	花崗閃緑岩	A	田老	1773	中生界
355	6127		IIb層	不明	敲打磨石A	デイサイト	A	岡山-日出島	1327	中生界
356	6128		I層	不明	敲打磨石A	安山岩	A	宮古-田老	1328	中生界
357	5046	N3EWトレンチ	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	113	中生界
358	6130		IIa層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	田老-岡山	1330	中生界
359	6131		IIa層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	田老-岡山	1331	中生界
360	6132		IIa層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	田老-岡山	1332	中生界
361	8307	S15W33	II層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	田老-岡山	1132	中生界
362	5118	N1E5	II層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	宮古-田老	185	中生界
363	8308	S15W33	II層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	宮古-田老	1133	中生界
364	7044	S6E6	I層	不明	敲打磨石B	安山岩	A	宮古-田老	-	中生界
365	6129		IIa層	不明	敲打磨石B	デイサイト	A	岡山-日出島	1329	中生界
366	2023		I層	不明	敲打磨石C	デイサイト	A	浄土方面-日出島	1973	中生界
367	6133		IIb層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	1333	中生界
368	8807	A 2区	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	2472	中生界
369	5045	N3EWトレンチ土坑跡	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	112	中生界
370	7045	第6次調査区	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	2471	中生界
371	8809	A 2区	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	田老-岡山	2472	中生界
372	8806	A 4区	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	2471	中生界
373	8810	A 4区	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	2475	中生界
374	1049	N2W15	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	-	中生界
375	5043	N3E18-3号土坑跡	A 2層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	110	中生界
376	8305	S15W27	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	1130	中生界
377	8306	S15W33	I層	不明	敲打磨石C	安山岩	A	宮古-田老	1131	中生界
378	2025		I層	不明	敲打磨石A	安山岩	A	田老-岡山	1975	中生界
379	2026	E区	E区ボーリング	不明	敲打磨石A	安山岩	A	田老-岡山	1976	中生界
380	5052	N3EWトレンチ	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	119	中生界
381	6135		I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1335	中生界
382	8816	A 2区	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2481	中生界
383	8818	A 2区	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2483	中生界
384	5048	N3E15	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	115	中生界
385	5051	N3E15	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	118	中生界
386	5049	N3E18	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	118	中生界
387	1080	No. 18G	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1781	中生界
388	7048	S2W6	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
389	7046	S9E6-1号土坑跡	B-C層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	12	中生界
390	7047	S9E6-1号土坑跡	B層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	11	中生界
391	1075	No. 17G	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1776	中生界
392	8813	A 4区	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2478	中生界
393	5066		I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2587	中生界
394	3051	N27W15	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
395	1078	No. 11G	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	不明		1779	中生界
396	6134		I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1334	中生界
397	8819	A 4区	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2484	中生界
398	1082	No. 20G	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1783	中生界
399	7049	S15E6	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
400	7050	S15E6	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
401	7053	S15E6	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
402	8310	S15W30	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1135	中生界
403	8300	S15W33	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1122	中生界
404	8309	S15W51	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1134	中生界
405	7051	S30W6	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
406	7054	S3W6	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
407	7052	S9W6	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界
408	3056	N21E3	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
409	3050	N27W15	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
410	3052	N3E21	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
411	3057	N3E24	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
412	3053	N3E27	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
413	3055	N3W54	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
414	3054	N9W15	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	-	中生界
415	1083	No. 3G	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	不明		1784	中生界
416	8030		II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	宮古-田老	845	中生界
417	8031		II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	846	中生界
418	8815	A 2区	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2480	中生界
419	8814	A 4区	II-4-1出層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	2479	中生界
420	5050	N3E15	Vh層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	117	中生界
421	6136		IIa層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	岩泉方面	1336	中生界
422	3027	N3E51	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	宮古-田老	314	中生界
423	3028	N3E51	検出面	不明	敲打磨石A	砂岩	A	宮古-田老	315	中生界
424	9272	S3E39G	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	宮古-田老	806	中生界
425	8780	A 2区	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	北上山地	2485	中生界
426	8781	A 5区	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	北上山地	2486	中生界
427	5031	N3EWトレンチ	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	北上山地	98	中生界
428	3030	N12W15	I層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	北上山地	317	中生界
429	6137		IIa層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	1337	中生界
430	9281	N6E45G, No. 31H, 石標4	埋土上層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	815	中生界
431	8281	S15W54	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	B	北上山地	1104	中生界
432	7040	S3E6	II層	不明	敲打磨石A	砂岩	A	岡山-日出島	-	中生界

第56表 出土石器類集計表(4)

註

註1 調査時には火山灰と気がつかなかったが、後に隣接地の調査で同様のものを確認し、菊池強一氏に鑑定をお願いしたところ安家火山灰であるとの鑑定をいただいた。

この後、他の遺跡でも安家火山灰の検出が相次ぎ、宮古市周辺でも主要な鍵層となる可能性が大きくなった。

註2・3 崎山貝塚調査指導委員会の武井則道委員の御教示によるとこのタイプの石器はハンマーの可能性も考えられるとのことだった。

参 考 ・ 引 用 文 献

- 相原淳一 1990 「東北地方における縄文時代早期後葉から前期前葉にかけての土器編年—仙台湾周辺の分層発掘資料を中心に」『考古学雑誌』第76巻第1号
- 岩渕康治ほか 1980 『仙台市富沢 三神峯遺跡発掘調査報告書—東北電力送電線鉄塔移設に伴う北東部C地点緊急発掘調査』 仙台市教育委員会
- 加藤孝 1951 「宮城県上川名貝塚の研究」『宮城学院研究論文集』
- 興野義一 1967～1970 「大木式土器理解のために（I）～（VI）」『考古学ジャーナル』No. 13・16・18・24・32・48 ニューサイエンス社
- 熊谷常正 1983 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立—一条痕文系土器群から羽条縄文土器群へ—」『岩手県立博物館研究報告』第1号
- 〃 1986 「門前式土器の検討」『岩手県立博物館研究報告』第4号
- 〃 1989 「北上川中流域における大木8a式土器」『岩手県立博物館研究報告』第7号
- 小岩末治 1960 『岩手県史 第1巻 上古篇・上代篇』 岩手県
- 高橋亜貴子 1992 「東北地方縄文時代前期前葉組縄文について」『加藤稔先生還暦記念 東北文化論のための先史学歴史学論集』
- 高橋憲太郎ほか 1982 『柿ノ木平遺跡—昭和50・51年度発掘調査報告書—』 岩手大学考古学研究会編
- 丹羽茂 1981 「大木式土器」『縄文文化の研究 4 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 本間宏 1987～1988 「縄文時代後期初頭土器群の研究（1）・（2） 東北地方北部を中心に」『よねしろ考古』第3号・第4号 よねしろ考古学会
- 〃 1990 「東北地方南部における情念後期前葉土器群の変遷過程」『第4回縄文セミナー—縄文後期の諸問題』 縄文セミナーの会
- 〃 1994 「大木10式土器の考え方」『しのぶ考古』10

4 植物遺存体について

植物遺存体は貝層等からクルミと思われる炭化種実の細片がわずかに出土しているほかに、第5次調査時に環状遺構帯東部のEトレンチからドングリ類がまとまって出土しているのを、これを中心に検討する。

このドングリ類は環状遺構帯東部に設定したEトレンチのV e層（炭化物層）中に小規模なブロックを形成しており、西側からドングリブロックA～ドングリブロックFと呼称した。尚、V e層は柱穴状ピット（No.3～No.5 p）を直接覆っており両者の関係も想定できようが現時点では不明と言わざるを得ない。また、V e層上部に堆積するV c層上面から掘り込まれたフラスコ状土坑跡が大木9式に伴うものであることから、V e層もほぼこれに近い堆積時期が想定される。

各ブロックのドングリ類はすべて土ごと持ち帰り篩分けを実施した。更に、これらのドングリ類は長さ・幅・厚さの3点で計測を行い、3点のすべてを計測できたものを完形品として、2点以下でしか計測できなかったものを欠損品として扱うこととし、計測できない小片は除外した。また、ドングリ類の子葉部に伴い殻皮及びはかまとの接合部が検出されており、それぞれ殻とヘソと呼称する。

Aブロックは調査中に上部をA 1、下部をA 2ブロックとしたが本来同一のブロックである。両者合わせて、完形品が204点、欠損品が201点、殻片が17点、ヘソ片が13点検出された。

Bブロックは完形品が35点、欠損品が37点、殻片が1点、ヘソ片が1点検出された。

Cブロックは完形品が2点、欠損品が4点で、殻、ヘソともに検出されなかった。

Dブロックも調査中に上部をD 1、下部をD 2ブロックとしたが本来同一のブロックである。両者合わせて、完形品が109点、欠損品が153点、殻片が18点、ヘソ片が2点検出された。

Eブロックは完形品が12点、欠損品が16点で、殻・ヘソともに検出されなかった。

Fブロックは完形品が19点、欠損品が7点で、殻・ヘソともに検出されなかった。

また、これらの検出時に完形品17点、欠損品24点のほか、クルミ片を1点検出している。

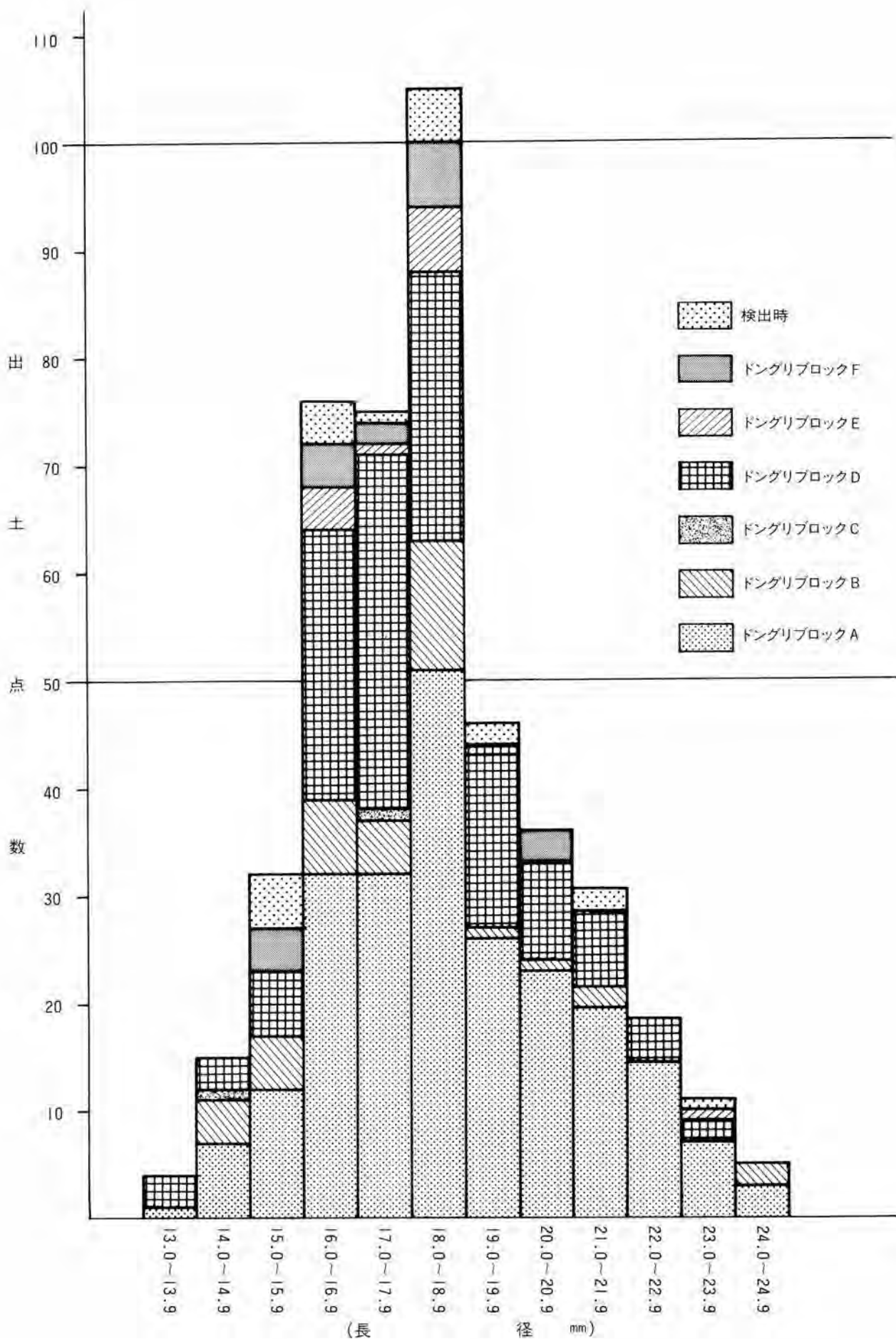
以上を合計すると、完形品が398点、欠損品が442点であり、最小個体数は199個体、最大個体数は420個体となる。

次にこれらのドングリ類の長さとう土点数の関係をみると、長さが13.0～24.9mmの間におさまり、17.0～18.9mmに出土点数のピークが認められた。このことから、このドングリ類はおそらく同一種の可能性が大きいのではないと思われる。

現在、遺跡周辺ではコナラやミズナラを含む雑木林（二次林）が形成されており、これらのドングリ類は秋期には容易に入手出来、現在でも部分的にはあるが食用にされている。

今回検出したドングリ類は若干大き目であり、現生種と比較すればミズナラに近いものと思われるが、専門家の同定を経たものではないので、ここではブナ科コナラ属の一種（*Quercus* sp.）のうちコナラかミズナラのいずれかとしておく。

尚、これらのドングリ類について炭化したものと理解していた（『崎山遺跡群V』）が、調査後岩手県立博物館赤沼英雄氏の御教示をいただいたところ、肉眼観察上炭化の痕跡は見られず、



第4図表 どんぐり類の長径毎出土点数

長期間土中に埋没していたために酸化した可能性が大きいとのことであった。

また、名古屋大学渡辺誠氏及び元岩手県立博物館名久井文明氏（当時宮古市文化財保護審議会委員）にも実見した上で御教示をいただいている。

両氏ともに、このドングリ類は採集後の乾燥を経て殻むき作業を行った段階のものであり、アク抜きを行う直前のものと考えられている。

更に名久井氏はこの中に微量ではあるがクリが含まれている可能性を指摘されている。

環状遺構帯は第4段階になると埋没に伴ってフラスコ状土坑跡群が形成され、周辺からは石皿のほか、敲打磨石・敲石・凹石などの礫石器類が多く出土している。これらのことから、第4段階の集落中心部は塊状の墓域に隣接して、ドングリ類の貯蔵・乾燥・殻むきといったアク抜き処理に係る共同作業を行う場であったと想定される。しかし、アク抜きには水サラシが必要不可欠であるが、台地上には湧水点が無いためおそらく低湿地内に水サラシの場を持っていたと考えるべきであり、台地上と低湿地の両方の場を使いながらこれらの作業が完結していたと想定されるので、今後は低湿地での水場遺構の検出が急務となる。

最後に、これらのドングリ類について当初は炭化したものと考えていた。これはつまりアク抜き処理途中に何らかの事故により焼成を受けてしまい作業が継続できなくなってしまったので廃棄されたものと理解したものであった。

しかし、これらが酸化したものであるならば、検出地点周辺でアク抜き処理の前段階でやはり何らかの事故があり作業が中断したままの状態で埋没したものか、あるいは一連の作業途中に儀礼的なものを行ったために検出地点に意識的に遺棄したものや供献の形態である可能性も指摘できる。この点についても隣接する地点の精査を行って再度検討することとしたい。

5 崎山貝塚の範囲について

前項までは崎山貝塚の集落構成・貝塚・出土遺物等について検討を加えたが、最後に遺跡としての崎山貝塚の範囲について触れて考察を終えたい。

崎山貝塚は黒森山地東縁の館ヶ森（標高248.9m）から北東へ伸びる舌状台地上に立地している。これまで述べて来た様に集落跡は台地上の平坦面上に展開しており、これを取りまく斜面部には貝塚や遺物包含層が形成されている。更にこの外側は沢や低湿地がとり囲んでいる。

台地上の集落跡と斜面部の貝塚や遺物包含層を遺跡の範囲として捉えるのは当然であるが、問題はこれを取り囲む低湿地についてである。

これまでの調査によると、南側低湿地では第1次調査時に南斜面の遺物包含層が水田面下へもぐり込んでいることを確認しており、更に、第2次調査時及び第9次調査時のボーリング調査では遺物や動物遺存体をわずかに含む縄文時代の堆積層を確認している。

北側低湿地では第9次調査時に発掘調査とボーリング調査を実施しており、上層部には新しい時期の堆積層が厚く堆積しており、この下部にやはり縄文時代と思われる堆積層を確認している。

低湿地の東端部では宮古市農林課の依頼により調査した第10次調査（別途報告予定）にて古

代以降に伴うと思われる泥炭層を確認しており、杭・籬木などの木製品やファイゴ羽口片などの遺物を検出しているが、直下が砂礫層となり縄文時代の堆積層は確認できなかった。

この様に低湿地では今のところ縄文時代の特殊な包含層や遺構は確認できておらず、遺物が散布する程度、あるいは古代以降の泥炭層が形成されているのみである。

しかし、遺跡の南北両側を流れる沢水は縄文人たちの飲料水となったであろうし、台地上の集落跡ではドングリ類のアク抜き処理の痕跡が確認されており、沢水がアク抜きのための水サラシに使用されていた可能性が大きい。

このため、低湿地についても生活空間の一部として遺跡の範囲内に取り込んでおく必要がある。今後は、この地点で木製品などを含む特殊な包含層や水場遺構の検出に努めることとしたい。

最後に遺跡の西端ラインについては昭和36年の地形図（第214図）を基に検討を加えてみたい。この地形図によると西集落の西縁部付近に旧国道45号線が走っており、これの東西両側では尾根の形状が異なることがわかる。つまり、旧国道45号線より東側は比較的広い平坦面があり台地状を呈するのに対し、西側は馬の背状のやせ尾根となっている。更に、旧国道45号線の東西では比高差が数m程あったことが読みとれる。

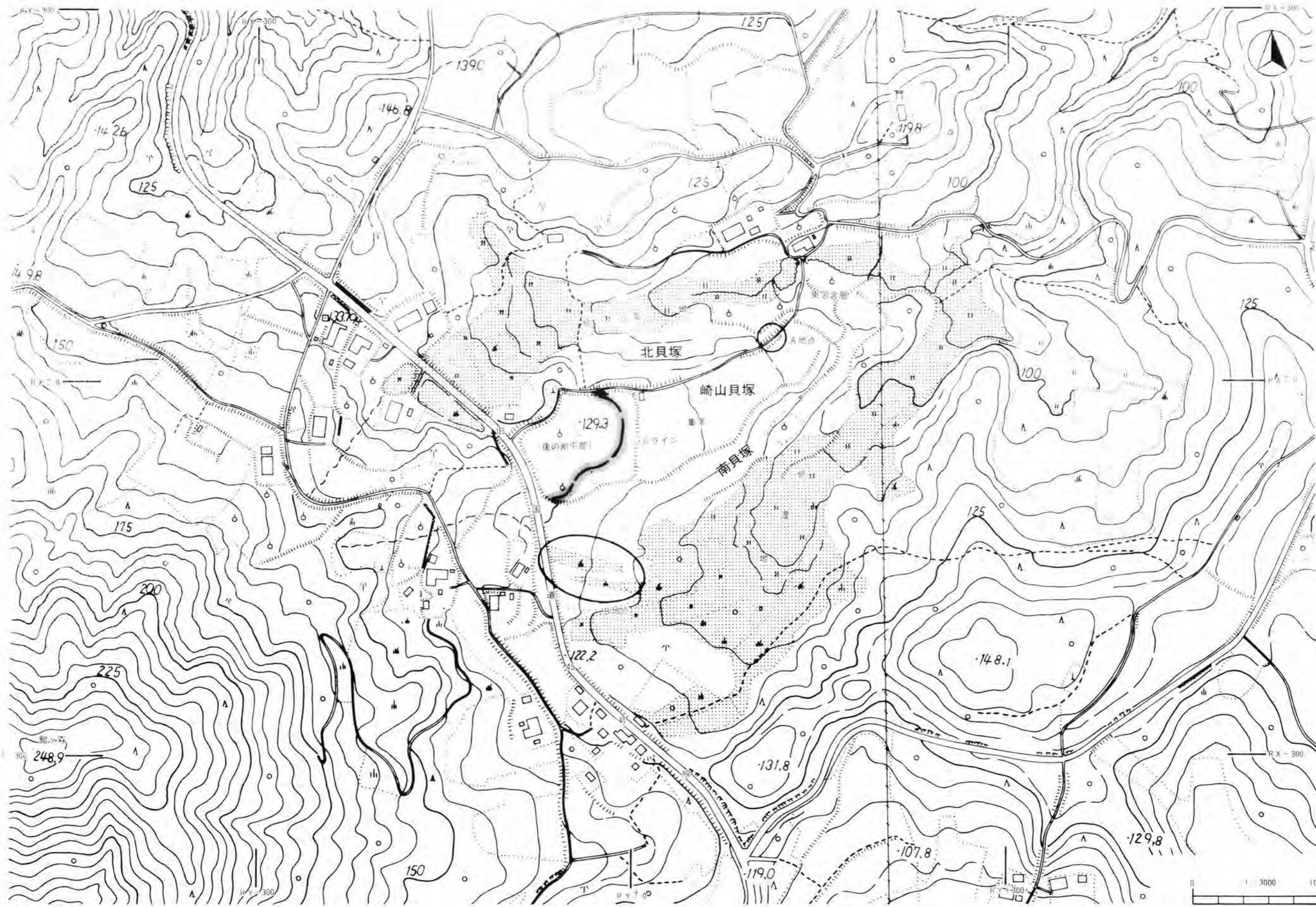
また、台地の南西部には小さな谷状の湿地が2本存在していたことが確認される（第214図B地点）が、おそらくこの地点にも小さな沢が流れていた可能性があると思われる。この地点は第6次調査区の南側に位置する。第6次調査区内では崖錐性堆積物かと思われる巨礫が多く堆積しており、やはりこの付近が遺跡の限界ラインと想定できそうである。

昭和40年代に入り国道45号線は改良工事が実施されるが、崎山貝塚周辺では尾根を削り、西側へいくらか寄っているがほぼ同じルートを通っている。

この直後に国道45号線東側で大規模な造成工事が実施され、西集落の西半部を削平し北側低湿地の一部を埋立てて、現在は工場用地となっている。

第11次調査では工場用地内に小発掘区を設定し、遺構等の保存状態を確認している。この調査により、工場用地の東側と南側は造成時の盛土層が厚く堆積しており、この直下に遺構や旧地形が保存されていることを確認している。

以上により、現在の国道45号線より東側の台地上平坦面（集落跡）と斜面部（貝塚・遺物包含層）および低湿地を加えた範囲が遺跡としての崎山貝塚の範囲であり、また、遺跡の保存されている範囲は上記より工場用地の大部分を除いた範囲（第214図Cライン）であると言える。



第214図 崎山貝塚周辺地形図 (昭和36年度)

V 調査のまとめ

9ヶ年にわたる崎山貝塚の発掘調査により検出された遺構や遺物の概要とこれらに対する考察は既に述べたとおりである。ここではこれまでの調査により明らかになったことと、今後の課題について箇条書きにしながらまとめてみる。

1. 崎山貝塚は縄文時代前期初頭から後期前葉にかけて営まれた集落跡と貝塚及び低湿地までもがセットとなり良好な状態で保存された遺跡である。
2. 集落跡は5期にわたる変遷が確認され、第1段階と第2段階について遺構数が少なく集落の構成内容が不明ではあるが、貝塚や遺物包含層の規模から当初より相当規模の集落が形成されていた可能性が大きい。また、第2段階の最終末（大木8 a 式期）には集落の中心部に墓域が形成されはじめていたことが確認された。
3. 第3段階～第5段階の集落は明らかに中央部の墓域を形成するもので、しかも同心円状の重層構造をとることが判明した。こうした形態を有する集落跡は紫波町西田遺跡が著名であるが、西田遺跡や他の類例と比較すれば、崎山貝塚は墓域の外側を環状遺構帯がとり囲み、最外部の居住域が環状とならずに東西に2分されるという差異を有し、今のところ崎山貝塚は独自の集落形態を呈しているといえよう。
4. 貝塚については、貝ブロック→獣骨層→魚骨層（以上南貝塚）→遺構埋土中に形成された貝層→岩礁性二枚貝を主体とする貝層（北貝塚）→土坑内に集積するマグロ類椎骨（環状遺構帯IV層上面）という様に地点や内容を変えながらも前期初頭から後期前葉までの極めて長期にわたり動物遺存体の集積が認められ、当地方における漁業や狩猟などの生業活動の初源から発展過程を知る上で必要不可欠な基礎資料となっている。
同時に崎山貝塚は宮古地方以北の三陸沿岸北部地方を代表する古期の貝塚であり、八戸市周辺部と三陸沿岸南部地方及び仙台湾沿地方の間をつなぐ資料としても注目されよう。
5. 貝塚から検出された動物遺存体のうち特に魚介類については岩礁性や外洋性のものを主体とするもので所謂外洋性貝塚に相当するものである。三陸沿岸南部地方の貝塚と比較すれば、基本的には同様な構成を呈するものと考えられるが、崎山貝塚ではマグロ属やマダイがやや少ない傾向が見られた。
6. 骨角器は前期から中期に伴うものが出土しており、貝塚本体の精査をほとんど実施していない割には比較的出土量も多く、ひとつおりの器種も出揃っていると言える。このうち大木1式～大木3式に伴うものは県内で最も古い資料として位置づけられるうえに、三陸沿岸地方でも古い段階に相当する。また、叉状角製品は全国的にみても最も古いもののひとつに位置づけられる可能性が大きい。この様に特に前期に伴う骨角器は重要な内容を有していると言えよう。
7. 土器群については前期初頭から後期前葉に伴うものをこれまでの土器型式に対応させながら12群に分類した。しかし、今後遺構や遺物包含層（土器捨場）の精査を通して層位的にまとまった資料が蓄積されれば大木式土器文化圏北部での土器組成のあり方と型式細分を解明できる可能性を持つ遺跡であることは指摘できる。

8. 石器群については土器群との共伴関係をつかめないものも多かったが、特に石鏃で遺跡内での形態変化が認められた点、特殊磨石や礫器などが前期を中心に検出された点、石皿・敲打磨石・敲石・砥石などが中期中葉以降に増加する傾向を持つ点、ピエス・エスキューイなどの楔形石器が大型獣の四脚骨を打割るために使用された可能性が大きい点などが把握できたので、今後は各時期毎の組成や集落変遷との関係などについて深めて行きたい。
9. 土製品・石製品については集落規模を考えるとやや出土量が少ない傾向がある。しかし、この中で石棒と石皿の関係は極めて特徴的なあり方を示しており特筆される。
10. 環状遺構帯内で検出されたドングリ類は酸化状態の可能性が大きいとのことであり、検出地点付近でアク抜き処理工程の一部が行われていた可能性を指摘したが、あるいはこれに伴う何らかの儀礼的なものが存在した可能性も想定される。
ところで、ドングリ類のアク抜き処理はこの地点でのみ完結せず、低湿地での水さらしが必要となるので今後はこの方面での水場遺構等の検出が急務となる。
11. 崎山貝塚の範囲は国道45号線より東側の台地上平坦面（集落跡）、斜面部（貝塚と遺物包含層）および低湿地であることが判明した。
また、遺跡の保存されている範囲もほぼ確認できたので来年度以降西集落での遺構のあり方も確認して行く予定である。

以上がこれまでの調査により明らかになった点と課題である。頭初の目的であった遺跡の範囲確認と内容確認については一応の結論を出せたと言えるが、範囲確認調査という制約上遺構精査を最低限度に留めているために細部についてはなお不明な点を残している。これは例えば集落中央部の性格と変遷過程を明確にすること、西集落における遺構のあり方を確認すること、南北両貝塚の構成内容を把握すること、低湿地において水場遺構や特殊な包含層の検出に努めることなどである。

これらの調査課題については崎山貝塚調査指導委員会の指導に基づき、短期間で対応すべきものと、中長期的に対応すべきもの2者に分けて、短期的なものは平成6年度から2ヶ年程度の子で内容確認調査を実施中である。

また、上記した以外には花粉分析、炭化物の樹種同定、墓壇跡と思われる遺構埋土の脂肪酸分析などの理化学的な分析は一切実施していないので、今後の調査にて補足して行きたい。

これまでの発掘調査成果に基づき、宮古市としては地権者をはじめとする市民各位の協力をいただきながら崎山貝塚を将来的に保存する意志決定をしています。

今後は崎山貝塚調査指導委員会をはじめとして文化庁、岩手県教育委員会などの関係各位には保存と活用方法及びこれに伴う発掘調査の方法について御指導、御協力をいただき、早急に具体的な保護策を講じたいと考えて居ります。

最後に、これまでの発掘調査の実施にあたり多大な御迷惑をおかけしたにもかかわらず御協力いただいた地権者の皆様、実際に発掘調査や整理作業に従事された皆様、また、発掘調査や本書の執筆に際して御指導、御協力をいただいた関係者各位に深くお礼申し上げて結びとします。

(分析結果)

崎山貝塚出土損傷人骨について

奈良 貴史(1) 鶴沢 和宏(2) 佐宗 亜衣子(3) 百々 幸雄(1)

(1)東北大学医学部第一解剖 (2)東京大学大学院理学系研究科生物学専攻 (3)慶應義塾大学文学部民族学考古学研究室

崎山貝塚出土の人骨片について、人類学的所見と観察された線状痕について記載する。

人骨片は、2片が確認された。1つは、左上腕骨遠位端であり、もう1つは、右尺骨近位端である。

上腕骨は、依存長71mmの遠位端内側部破片である。鈎突窩が深くかなり発達している。肘頭窩に長さ6mm、幅3.5mmの加齢的なものと思われる骨増殖が骨軸に垂直方向にある点と、遠位端の骨化が完全に終了していることから、この個体は成人でも年齢の達した、熟、老年段階の可能性が高い。損傷と思われる傷等は確認されなかった。

尺骨は、依存長177mmで上端部は破損もなく、保存状態良好であるが、遠位約三分の一を欠く。近位端が完全に骨化が終了していることから成人で25歳以上と思われる。関節部がかなり大きく、華奢でないことから男性的であるが、この点だけで性別は断定できない。

滑車切痕は、山口(1972)の分類のNo.5に相当し二分傾向が強く認められることから、この個体は成人でも年齢の達した、熟、老年段階の男性の可能性が高い、筋付着面の発達はやい。中央最大径(19.3mm)は骨間縁と後縁の間にあり、最小径(13.5mm)は、前縁と後面の間にある。この特徴は縄文時代に多く見られるものである。骨体中央部は、やや扁平である。

ところで当人骨片には石器を用いてつけられたと思われるカットマークが観察された。これらが人為的なカットマークなのか、その他の生物的、物理的要因によって生じた条痕なのか明らかにする目的で、詳細な観察を行った。

石器時代遺跡から出土する骨に観察される様々な損傷のうち、人為的なカットマーク(cutmark)を、他の生物的、物理的な要因によって生じたマークからどのように識別するかについてはこれまでに多くの研究がある(例えば Ports and Shipman 1981: Shipman and Rose 1984)。カットマークと誤認される可能性のある非人為的なマークとして、食肉類の歯の痕、齧歯類の歯の痕、土中に埋没した骨に植物の根がからむことによって生じる溝状の腐食、礫や砂利の上で骨が人や大型の動物に踏みつけられることによって生じる擦痕、さらに、発掘やその後の分析の過程で生じる損傷等々がある。

Shipman(1981)はカットマークおよび他の生物的、物理的要因による条痕を実験的に再現し、その形態を走査型電子顕微鏡を用いて詳細に比較することによって、疑似カットマークから、石器による人為的なカットマークを同定する基準として、(1)断面が鋭い“V”字状を示す、(2)主要な溝の内部に平行する微小な溝がある、(3)主要な溝の外部、部分に平行する微小な溝がある。という3つの形態基準が有効であると主張した。これらの基準は、石器刃部の、直線ではなく凹凸を有するという形態特徴の骨損傷への反映として説明される。この3基準によって、動物の歯の痕や植物の根の腐食痕、血管溝などからのカットマークの識別は可能となるが、踏みつけによって礫や砂利に骨がこすりつけられることによって生じるマークとの識別には問題が残る。ふつう踏みつけによるマークは傷が浅いという点でカットマークと見分けられることが多いが遺跡の堆積環境によっては深い断面を持つものもあり、形態的にはカットマークと識別困難な場合がある(Fiorillo 1989: Behrensmeyer et al 1989)。

つまり石と骨との接触によって生じた損傷が人為的か否かを形態基準のみによって識別することは論理的に不可能であり、正確な同定には、マークの分布の規則性、出現頻度などの形態的特徴以外の同定基準が求められることになる。しかし今回の標本は1点のみの資料であり、カットマークの同定は主要3形態基準に基づいて判定を行った。

当標本の保存状態は良好で、実体顕微鏡による観察に加え、走査型電子顕微鏡による検鏡が可能であった。観察はまず、シリコン樹脂でカットマークの雌形を取り、エポキシ剤でレプリカを作成し、これを検鏡するという手順で行った。

肘頭と滑車切痕の境の内側に2本の傷が認められる(a)。前方のは、小さく長さ1.0mm、幅0.2mm、断面形は、V字形態である。後方のもは、長さ2.1mm、幅0.4mm、断面形は、V字形態である。また、近位端後面、肘頭の最上点から2.8—4cmの所に長さ、幅の違うものが、最低7本骨軸に対して直角方向に存在する。最近位に位置するものが最も明瞭で、長さ5.2mm、幅2mm、深さ0.5mm、断面形態はV字形である(b)。その下方に若干の間隔をおいて、長さ約5mm、幅0.5mm、断面形態がV字形のものが3本集中し、メインの溝内部及び、外部周辺に平行する細い条線が最低3本存在する(c)。

観察されたカットマークa,b,cは3基準を満たしており(PL.1)、しかも複数のマークがそれぞれ1カ所にまとまって観察され、人為的なカットマークの特徴をしめしている。

次に問題になるのは、いかなる行動がこれらのカットマークを生じさせたのかという点である。カットマークは尺骨近位後面に分布し、その走行は骨の長軸に直角である。また、マークの断面が深いこと、複数の傷が集中することは、この部分に強い力で繰り返し刃が入れられたということを示唆している。これらのことから、当標本のカットマークは筋肉や腱が新鮮なうちに肘関節を切り離そうとして生じた可能性が高い。ところが解剖学的には、肘関節の切離しには関節の前面から刃を入れるのが合理的である。b、およびcのカットマークの分布は最適な位置を選んでいとは言い難い。しかし、関節の切り離し以外にこれらのカットマークの機能的意味を想定することも困難であり、縄文時代人が人体の解体に不慣れなことを示唆する例かと思われる。また、関節の分断が食人の過程で行われたのか、埋葬儀礼として行われたのかについても1点の資料からは判断できない。この推察の是非に関しては今後の更なる事例研究が必要である。

縄文時代人骨における人為的損傷については、現在まで数多く報告されているが、前述のように形態のみでの判断は難しい。しかし、利器が骨に残存している場合、判別は確実である。

利器が残存していた最初の報告例は清野謙次ら(1922)によって発見された岡山県粒江貝塚の老年の男性の第三腰椎体に石鏃がほぼ垂直に刺入したものである。鈴木尚は愛知県伊川津貝塚の男性右尺骨に石鏃が刺入し周囲の骨組織の増殖により石鏃片が被われている例(1938)や、福島県三貫地貝塚の熟年男性に石鏃が刺入した例(1958)を報告している。

ほかに、愛媛県上黒岩陰遺跡の壮年男性の寛骨に有孔ヘラ状骨器が刺入したまま発見された例(江坂ら1969、森本ら1970)、岩手県宮野貝塚の熟年男性寛骨に石鏃の嵌入した例(百々ら1981)、北海道有珠10遺跡の成人男性右大腿骨骨頭に石鏃の刺入した例(松村1989)等が報告されている。

これに対し、損傷の形態そのものから人為的であるとの判断をくだし報告している例は少ない。鈴木尚(1938)は、岡山県羽島貝塚貝塚人骨、愛知県伊川津貝塚人骨、愛知県保美貝塚人骨、北海道本輪西第一号貝塚人骨に見られた直線的創痕についてその溝の形状や色彩等から人為的なものであると述べている。鈴木(1941)はまた、千葉県余山貝塚の右橈骨に明瞭な線状切痕が見られた例を報告している。石鏃は発見されていない、千葉県高根木戸遺跡から出土した男性の右上腕骨三角筋粗面に穿たれた小孔の周囲に骨増殖があった事例について、小片保(1971)

は石鏃による傷と推定している。鈴木(1938)は羽島貝殻塚、伊川津、保美、本輪西の4貝塚人骨についてはそれぞれの位置が解剖学的に不自然であること、一定の部分(獣骨の解体痕とほぼ一致)に切痕が見られ、部分的に焼かれた痕跡があることなどから食人の可能性を指摘している。しかし、伊川津貝塚人骨については、近年、重葬・合葬・集積葬・洗骨葬・盤状集積葬など様々な埋葬の形式が確認され、江原昭善ら(1988)は、闘争及びカニバリズム以外に、原始宗教的な行為の可能性を指摘している。

これらの縄文時代の人為的損傷と思われるもののうち、カットマークのあるものを集成してみると、管見したところでは、8遺跡、16例ある(表2)。これらの中には、人為的なものかどうか疑わしいものがあるので、今後、走査型電子顕微鏡検鏡を含め再検討が必要である。地域別では、東海地方が全体の44%を占めているが、北海道から岡山県までほぼ全国的規模で分布している。時代別では、晩期が75%以上を占めており、前期からは崎山貝塚が最初の確認例であり、東北地方では中沢浜貝塚について2例目である。縄文時代人の心性の歴史へも迫れると思われるカットマークの意義については今後の詳細な研究が必要である。

なお、この報告書の走査型電子顕微鏡写真作成において、東北大学医学部第二解剖岩佐博雄技官の指導もと同第一解剖末田輝子技官の手を煩わせた。ここに記して謝意を表したい。

参考文献

- 百々幸雄 山口敏 古人骨研究の事例(2) 東北・北海道 考古学ジャーナル 197
- 江坂輝弥 森本岩太郎 小片丘彦 1969 愛媛県上黒岩岩陰遺跡第4次発掘速報 考古学ジャーナル 37
- 福島県立博物館 1988 福島県立博物館調査報告第17集 三貫地貝塚
- 清野謙次 星島寿 1922 化石病理学特ニ日本原住民族ノ骨疾病ニ就テ 日本微生物学会雑誌 13
- 松村博文 1989 石鏃を射込まれた有珠10遺跡出土の続縄文時代恵山文化期の人骨について 人類学雑誌 97-1
- 宮乃貝塚調査団 1981 宮野貝塚B・C地区調査概要
- 森本岩太郎 小片丘彦 小片保 江坂輝弥 1970 受傷寛骨を含む縄文早期の二次埋葬例 人類学雑誌 78-2
- Potts, R. and Shipman, P. 1981 Cutmarks made by stone tools from Olduvai Gorge, Tanzania. *Nature* 291 : 577-580
- 札幌医科大解剖学第二講座 1989 伊達市有珠10遺跡発掘調査計画書
- Shipman, P. 1981 Application of Scanning Electron Microscopy to taphonomic problems. *Annals of the New York Academy of Science* 276 : 357-385
- Shipman, P. and Rose, J.J. 1981 Cutmark mimics on modern and fossil bovid bones. *Current Anthropology* 25 : 116-117
- 鈴木尚 1938 日本石器時代人骨の利器による損傷について 人類学雑誌 53-7
- 鈴木尚 1941 下総余山貝塚発見の切痕のある人骨について 人類学雑誌 58-7
- 鈴木尚 1958 石鏃が嵌入した石器時代時骨盤 人類学雑誌 60
- YAMAGUTI, B. 1972 The Bipartient Tendency of the Articular Surface of the Trochlear Notch in the Human Ulna. *Okajimas Fol. anat. jap.*, 49 : 23-36

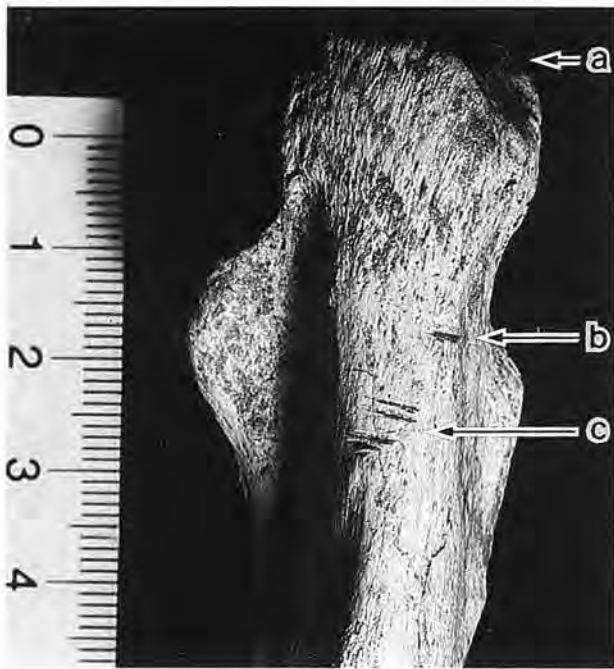
表1. 尺骨計測値 (mm)

M 5.	肘頭頂高	8.2	M 7.	肘頭深	25.3
M 5(1).	近位関節面高	42.3	M 7 b.	肘頭前後径	17.0
M 5(2).	滑車関節高	33.2	M 7(1).	肘頭鈎状突起距離	25.0
M 6.	肘頭幅	23.7	M 8.	肘頭高	21.2
M 6 a.	最小肘頭幅	19.3			

表2. 縄文時代損傷人骨 (カットマーク)、時期、地域別集計

	北海道	東北	関東	中部	近畿	中国	四国	九州	計
早期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
前期	0	崎山1	0	0	0	0	0	0	1
中期	0	0	0	0	0	0	0	0	0
後期	0	0	称名寺2	0	0	羽島貝塚1	0	0	3
晩期	本輪西2	中澤浜1	余山1	伊川津5 保美3	0	0	0	0	12
計	2	2	3	8	0	1	0	0	16

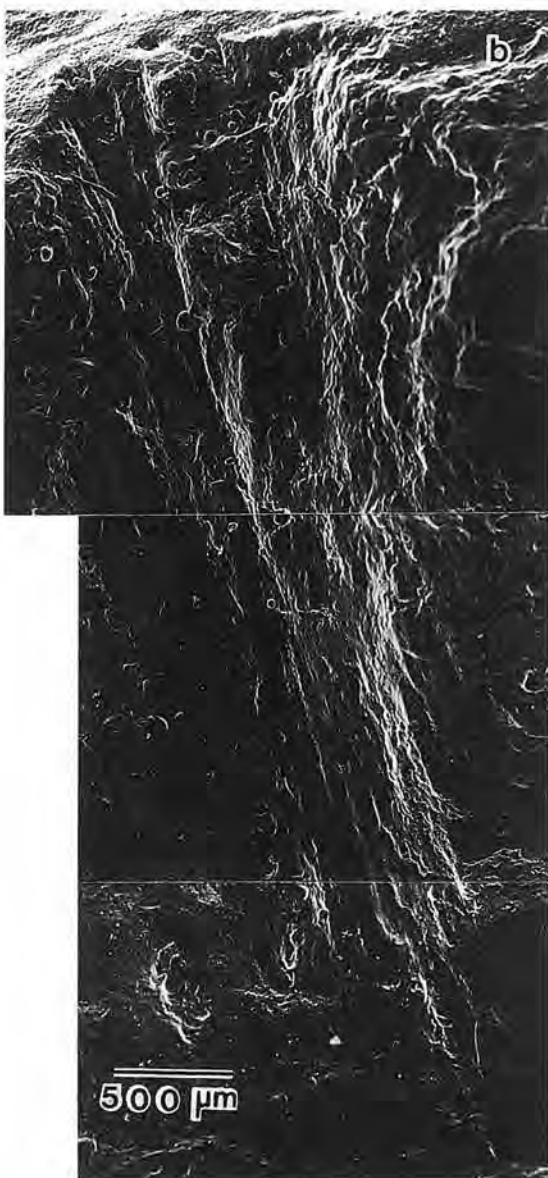
称名寺貝塚人骨は、現在慶應義塾大学人類学研究室において整理・研究中



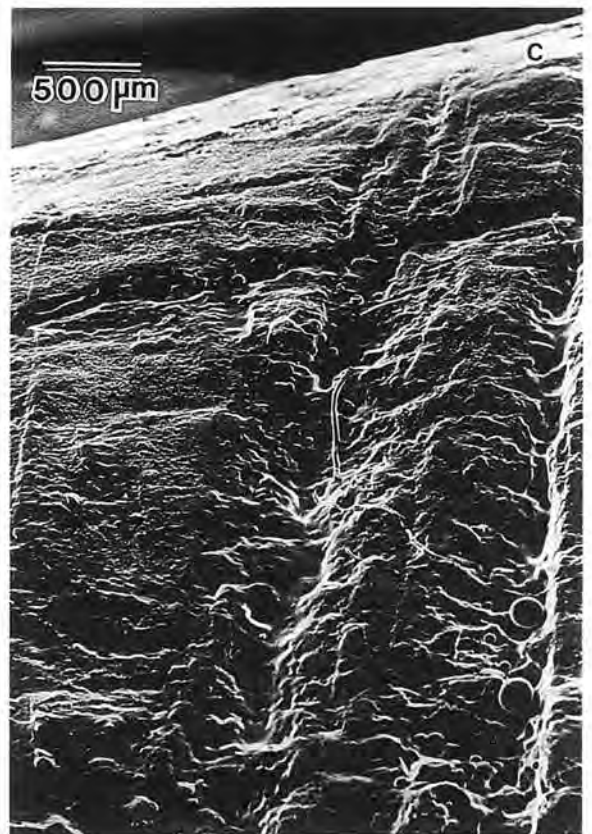
尺骨のカットマーク



カットマーク a



カットマーク b



カットマーク c

Sakiyama Shell Mounds

Sakiyama Shell Mounds are shell mounds of the Jomon Period, located on the hill formed on the coastal terrace north of Miyako. The eastern coast in Tohoku districts is called the "Sanriku" coast and Sakiyama Shell Mounds are centrally situated at the Sanriku Coast. It is about 1.5km from the sea-shore and 120m above sea level.

We have many shell mounds of the Jomon Period along this coast. We can divide them into two groups according to their environment.

One is a group situated on the coastal terrace north of Miyako and the other is situated on the Riascoast south of Miyako. Sakiyama Shell Mounds belong to the northern group and its location is at the southern end of that group.

Sakiyama Shell Mounds have been famous since the Meiji Era. No official survey, however, has been made except once in 1924, therefore the contents of the site have remained unknown for a long time.

The distribution research carried out by the Miyako Board of Education during 1982-1985 revealed that Sakiyama Shell Mounds are one of the most well preserved shell mounds in Miyako. As developments around the Sakiyama Site have increased in number since the early 1980's, Sakiyama Site itself has been in danger of being bulldozed.

Under these circumstances we have made surveys since 1986 to confirm the content and bounds of the Sakiyama Site in order to preserve the remains.

The results of these surveys are as follows;

- (1) The Sakiyama Shell Mounds are the remains of settlements lasting from Early Jomon (6000~4000 B.P.) to Late Jomon (4000~3000 B.P.), with shell mounds and low swamp surrounding the site.
- (2) Sakiyama Shell Mounds have 5 phases and the 3rd phase is their peak (Daigi 8b type period). At their peak they piled up soil to make a circle area for burial with a large standing stone embedded in it and separated the area by digging a wide round ditch. Outside this area on the east side there is an area for buildings with pillars embedded directly in the ground and on the west side an area with no structural remains. Furthermore outside these areas there are places for pit dwellings on both sides. This type of site arrangement is peculiar to the Sakiyama Shell Mounds.
- (3) The shell mounds accompanying these settlements were formed both on the north and south side of the slope. Some of the deposits in the structural remains have layers containing shell stratum and faunal remains. We can place them in chronological order as follows;
Shell block (small scale waste block) → layers of faunal remains → layers of fish remains (the above are of Early Jomon) → layers of BIVALVIA (Middle Jomon) → a block of vertebrae of tuna (Late Jomon)
- (4) We unearthed some kind of acorns from the settlement. They are one of the major provisions for Jomon people. Because they have to soak them in a stream for a long time to remove their harshness, we hope we can find facilities for that treatment at the low swamp in the future.

(5) Among the many artifacts, grinding slabs and stone rods were unearthed in distinct situations. Stone rods, which are in the shape of male genital were localized in the eastern settlement (after the 4th phase) and one of them was found standing erect with its lower part embedded in the ground. Grinding slabs which are said to grind nuts into flour or to be used for kneading were localized in the western residential area. This fact may suggest that they kept different things as symbols on both sides.

The results of these surveys show that Sakiyama Shell Mounds are well preserved settlements with every element of the Jomon Period, each of which has significant value in archaeological terms. Therefore we plan to preserve and make use of these remains in Miyako City.

写 真 图 版



航空写真（北より）



第11次調査区全景（北西より）

第2図版



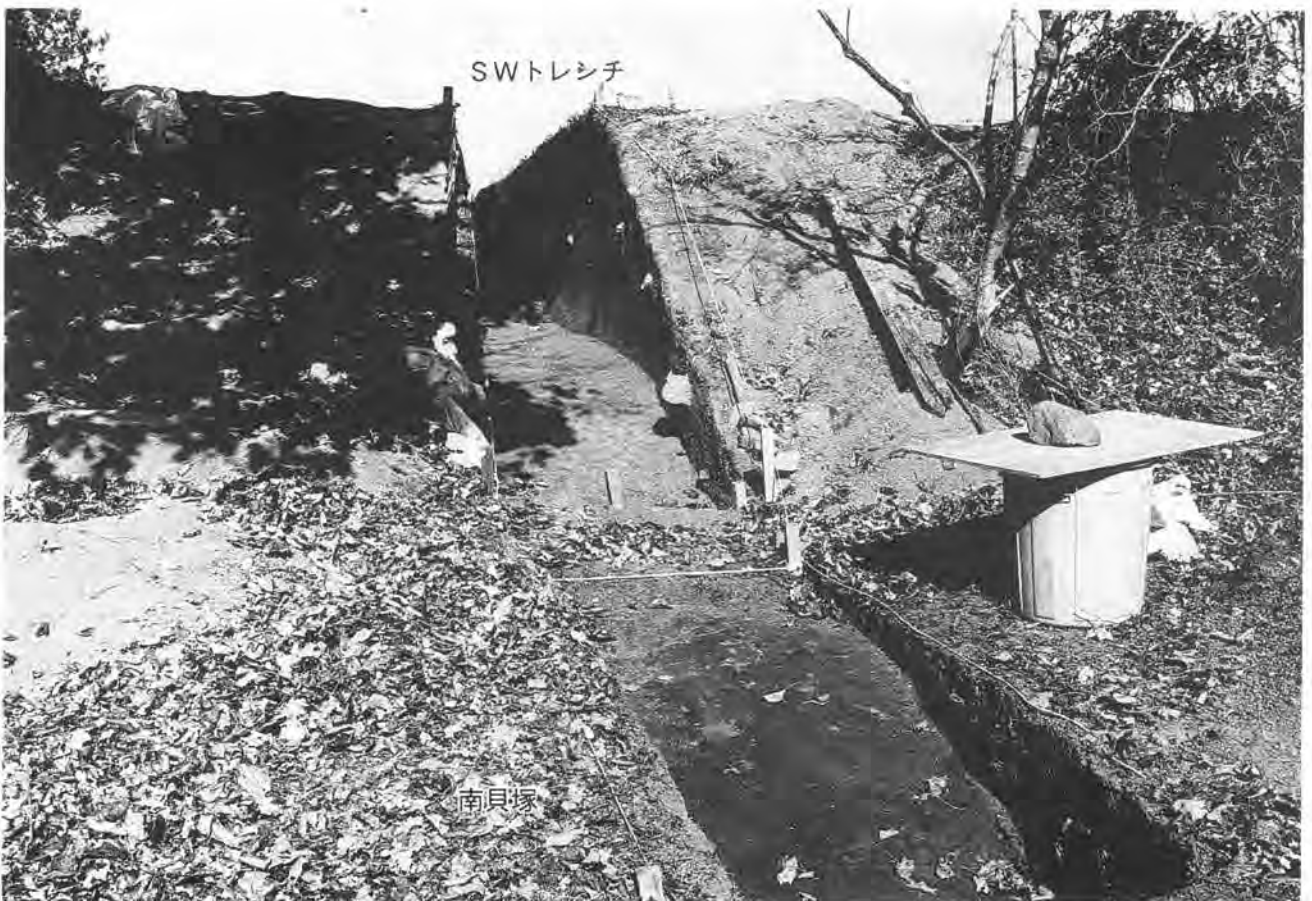
N3E9-1号 立石



中央市場検出墓墳跡・土坑跡 (S3W6グリッド付近)



環状遺構帯堆積状況(SCトレンチ)

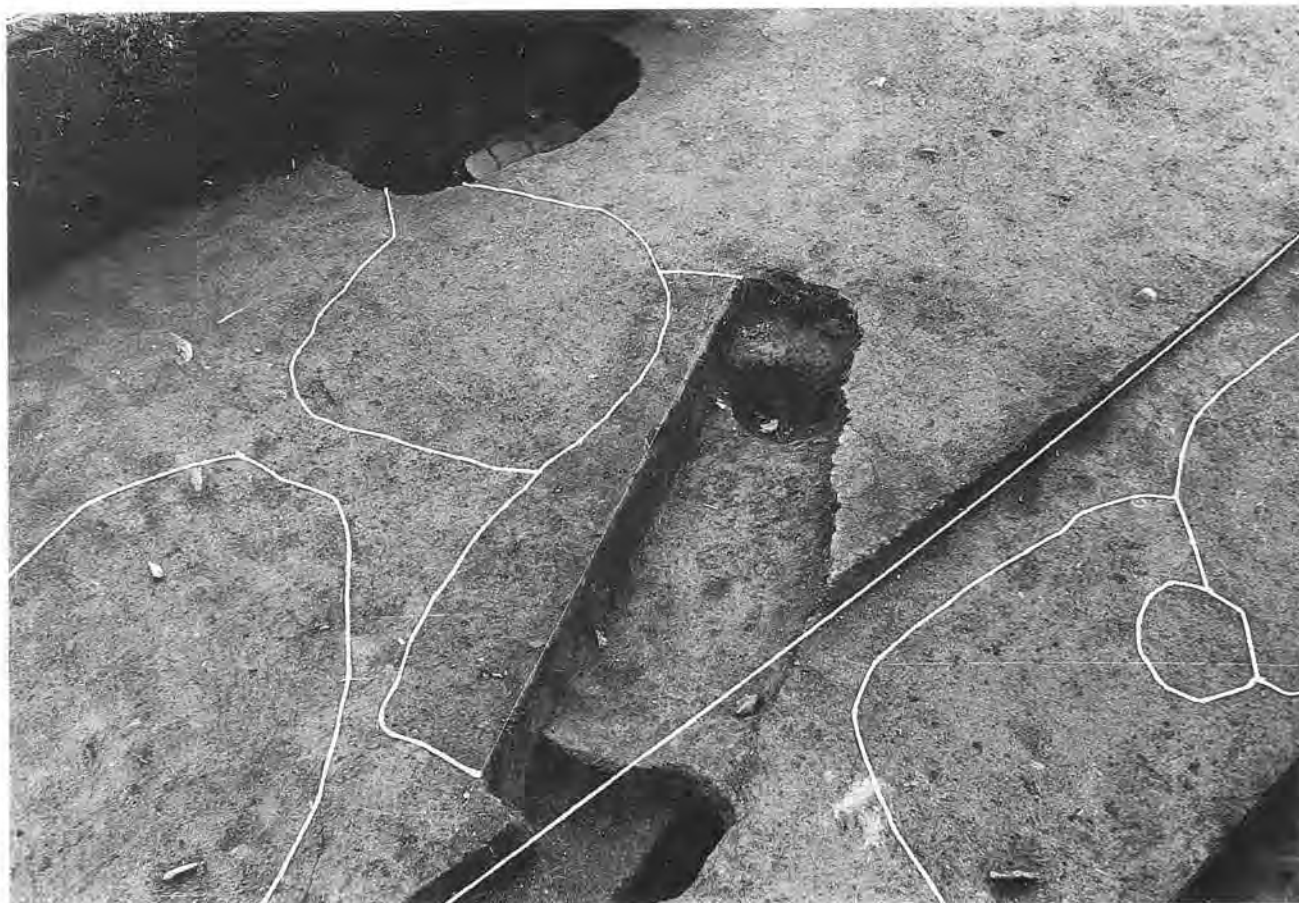


環状遺構帯盛土層堆積状況

第4図版



環状遺構帯内検出土坑跡（S24W 6 - 1号土坑跡）



同検出墓塚跡（S24W157グリッド付近）



環状遺構帯内ドングリブロック検出状況 (Eトレンチ)



同マグロ属椎骨検出状況 (N21E 3-1号土坑跡)

第6図版



環状遺構帯内検出配石遺構 (S6 W15-1号配石遺構)



同 (S9 W12-1号配石遺構)



第9次調査区全景(東北より)



環状遺構帯内石棒出土状況 (N 6 W18-1号石棒埋設遺構)

第 8 図版



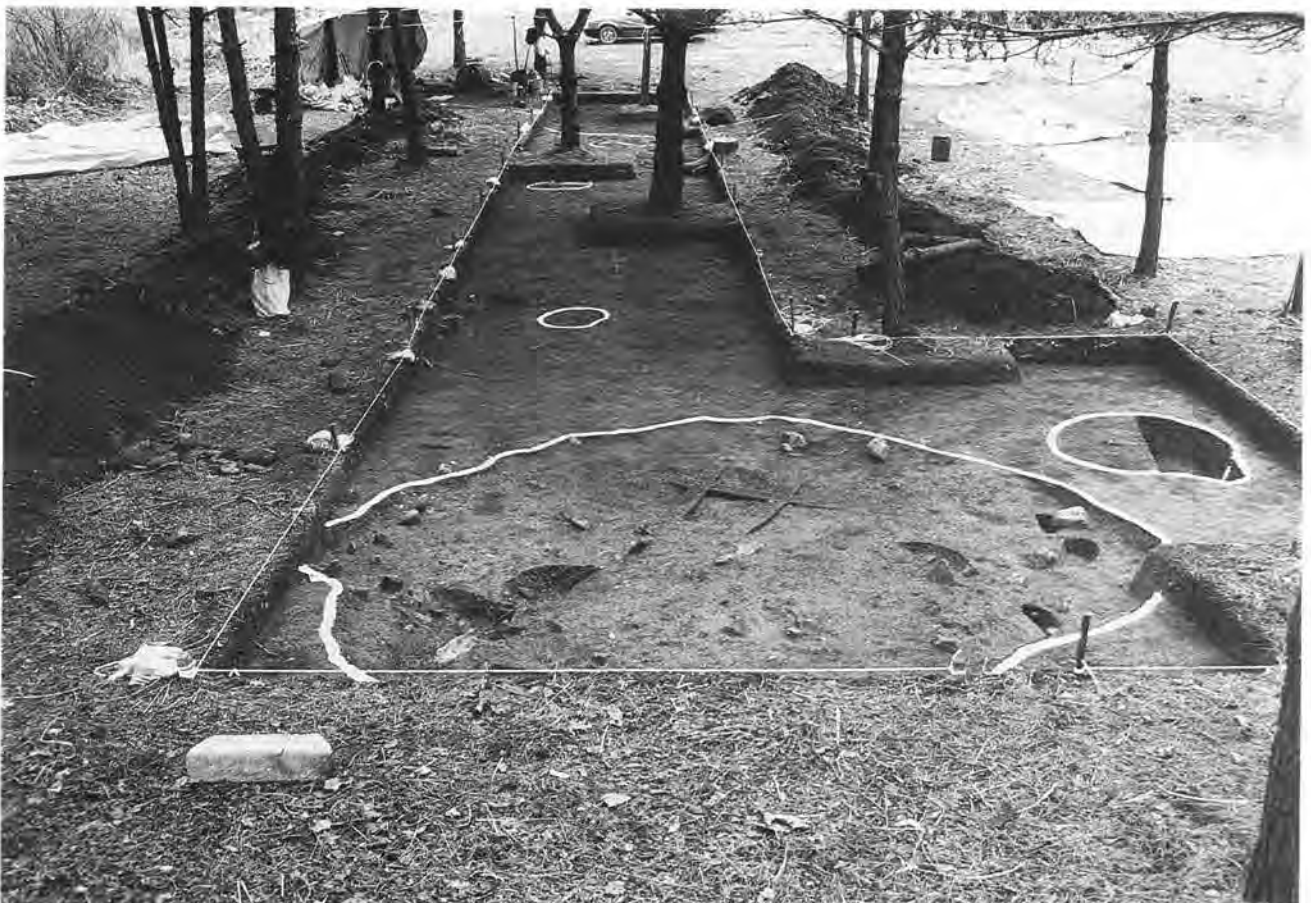
東落石石棒出土状況（N15E36—1号竪穴住居跡）



同（N6E42—1号竪穴住居跡）



環状遺構帯内石皿出土状況(第11次調査区)

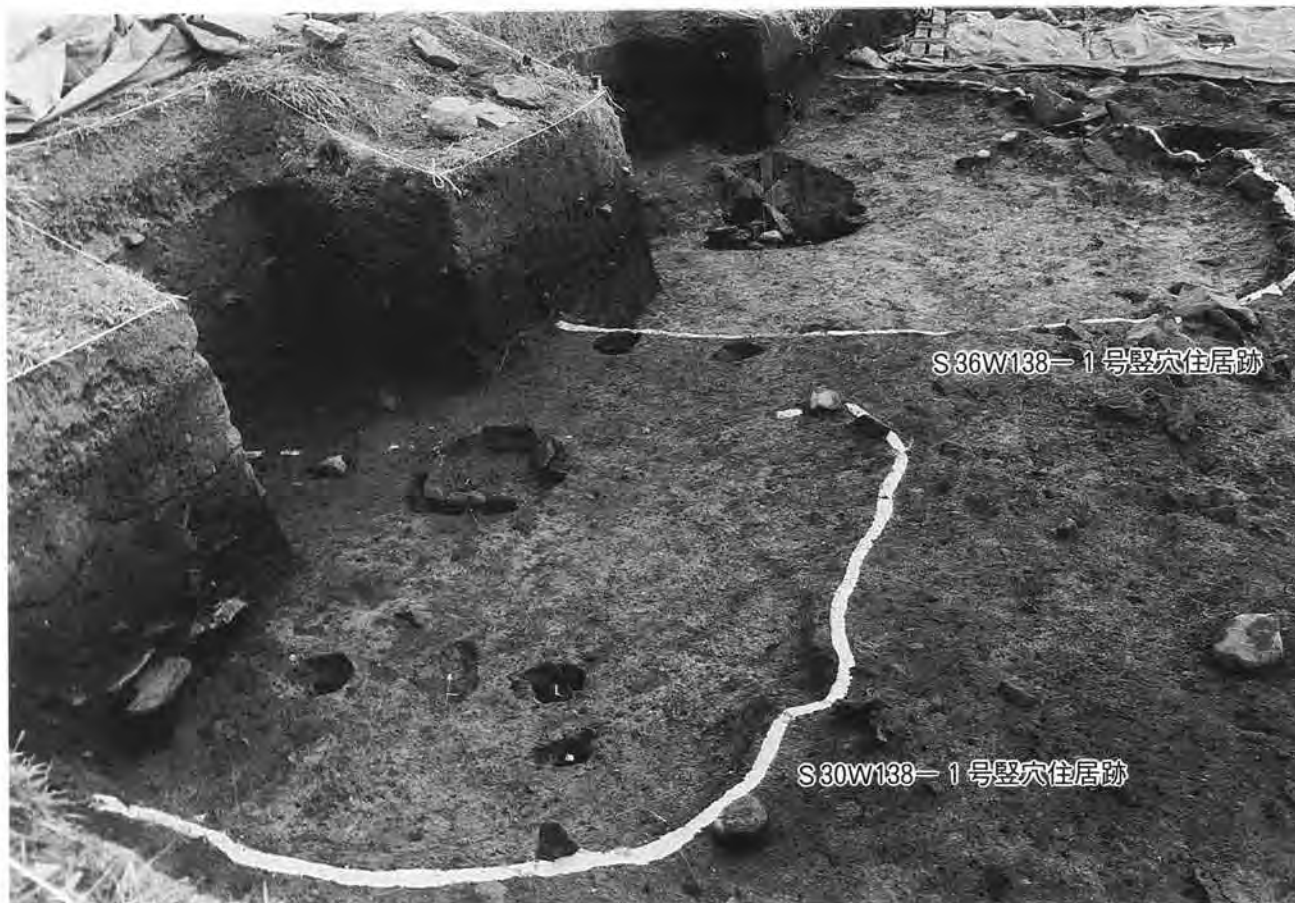


西集落検出遺構 (N15W51-1号竪穴住居跡ほか)

第10図版



西集落跡検出遺構 (N15E30-1号配石遺構)



S36W138-1号竪穴住居跡

S30W138-1号竪穴住居跡

同 (S30W138-1・S36W138-1号竪穴住居跡)



南貝塚第1次調査区(南東より)



同第2次調査区(北西より)

第12図版



北貝塚第8次調査区(南東より)



同A7区遺物包含層検出状況



東包含層D区（東より）



同C区（北西より）

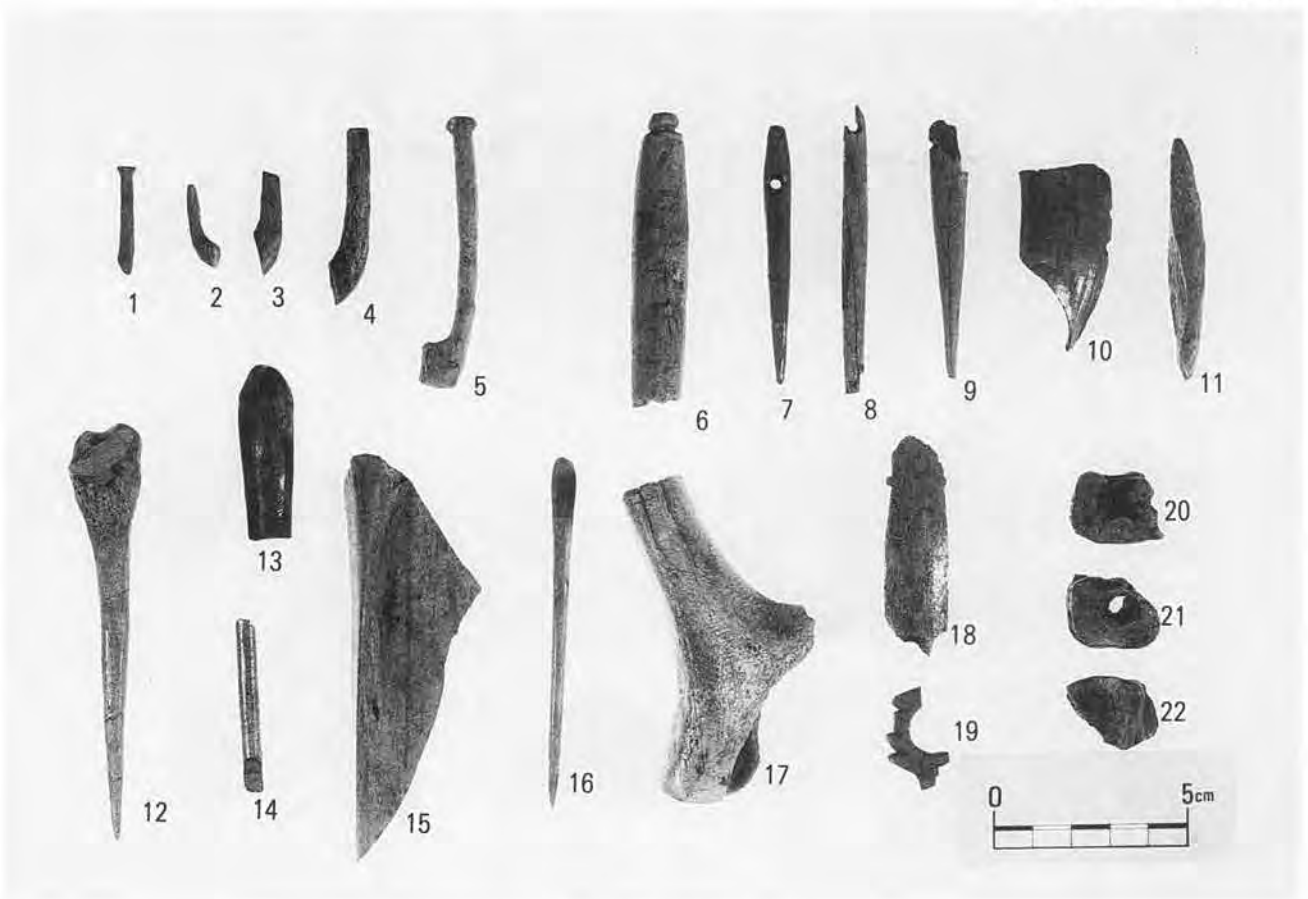
第14図版



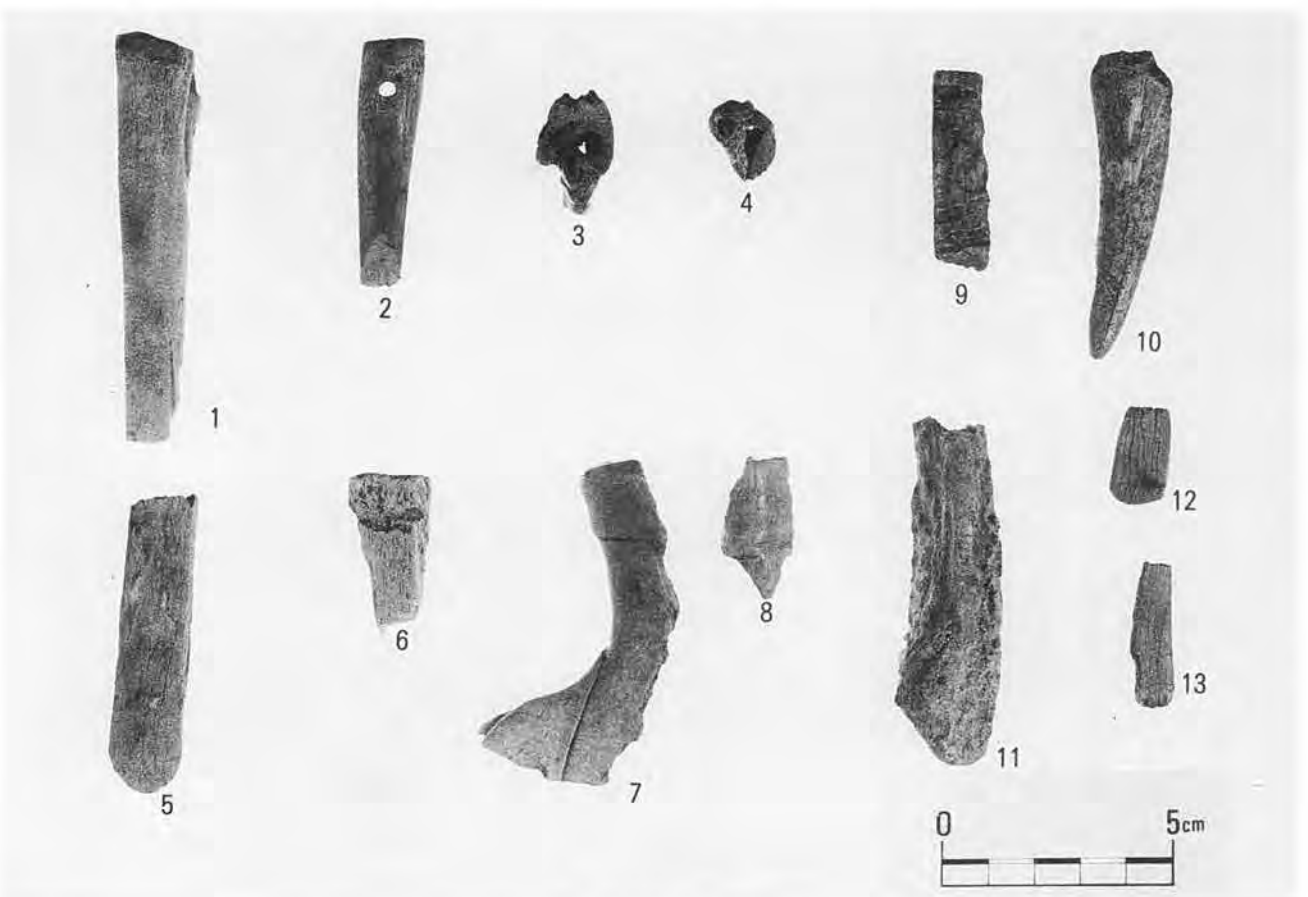
出土土器（前期）



同（中期）

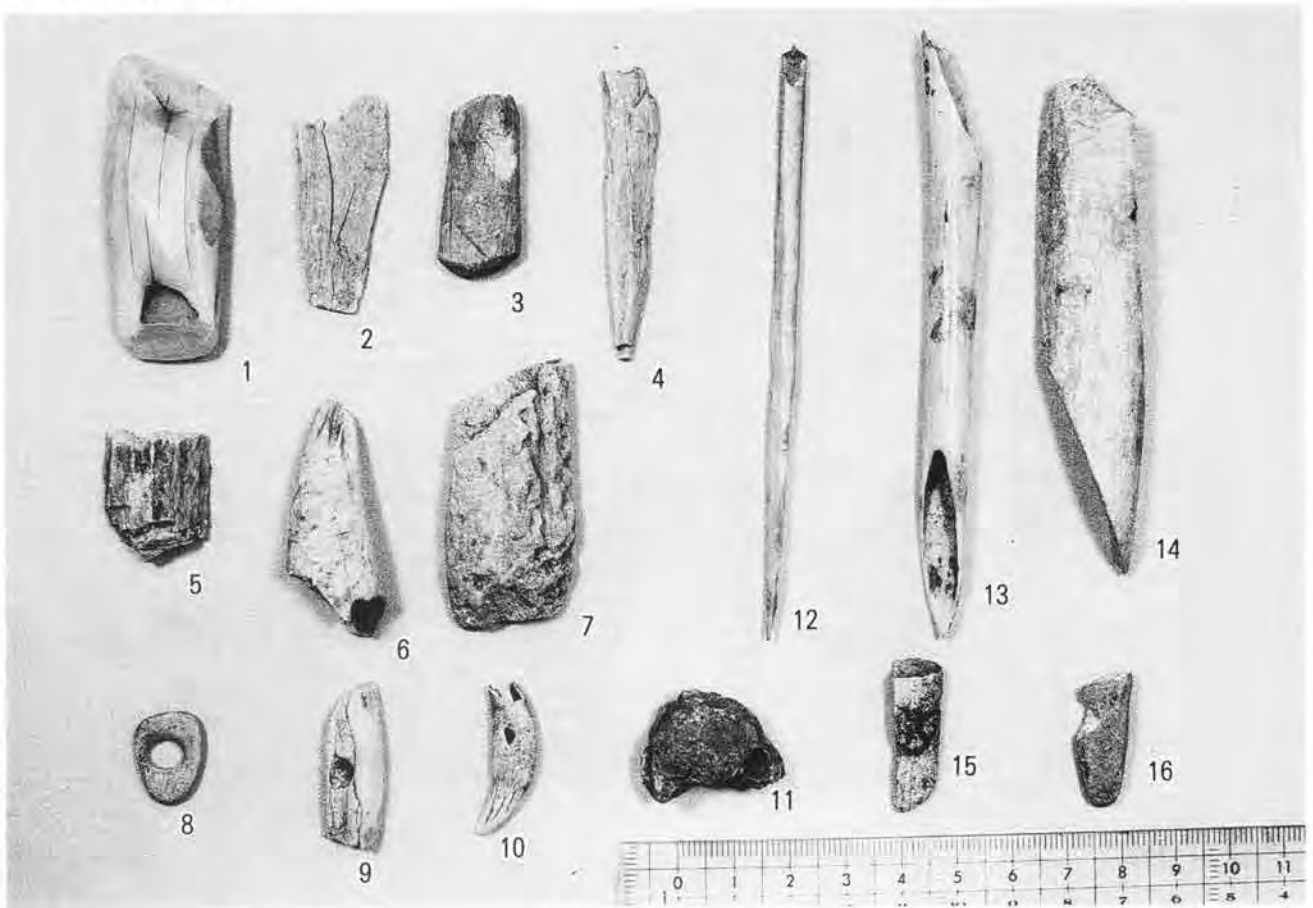


出土骨格器 (南貝塚)



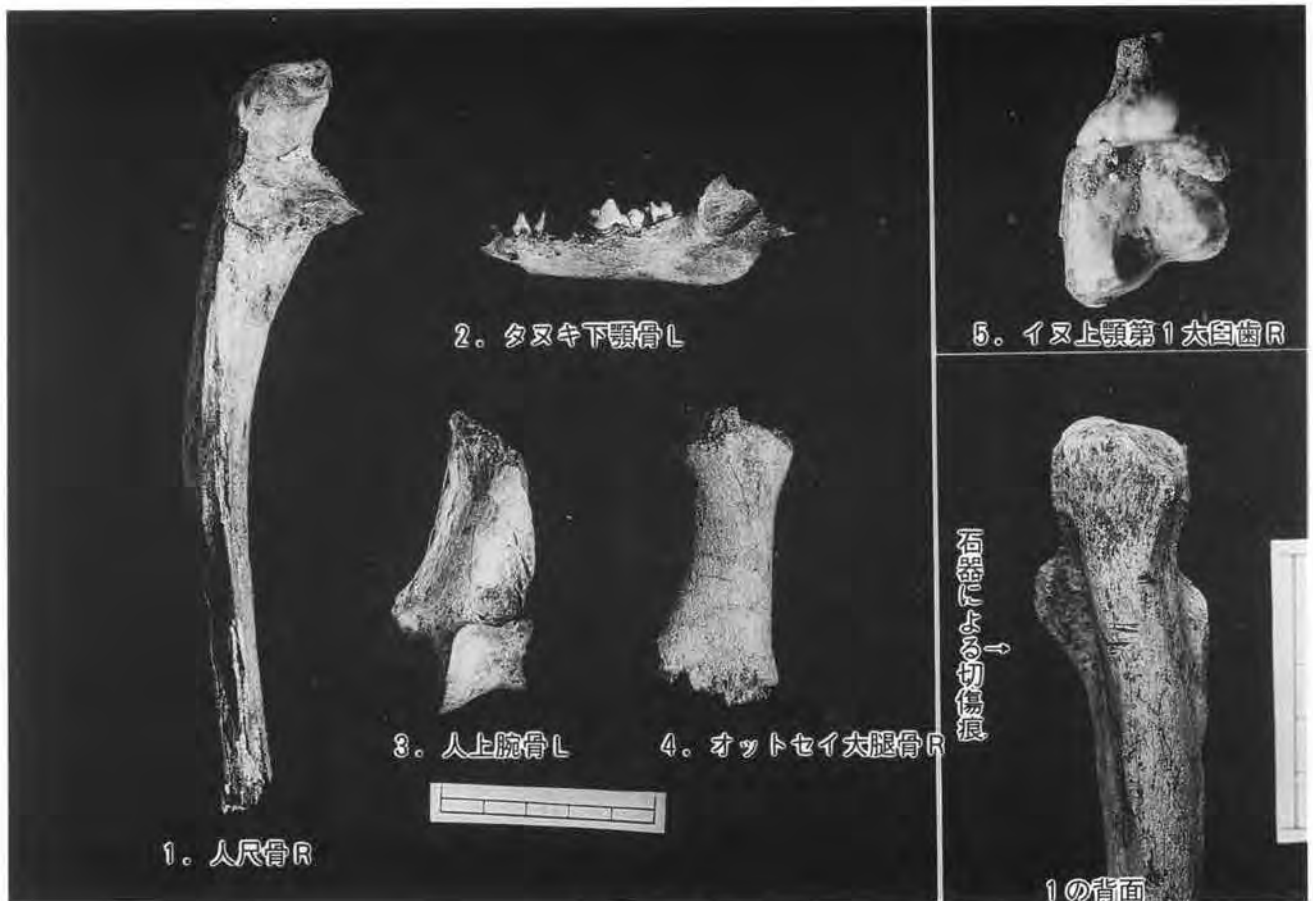
同 (北貝塚)

第16図版



出土骨角器（個人所蔵）

（6. 12は加工品でない）



1. 人尺骨R

2. タヌキ下顎骨L

5. イヌ上顎第1大臼歯R

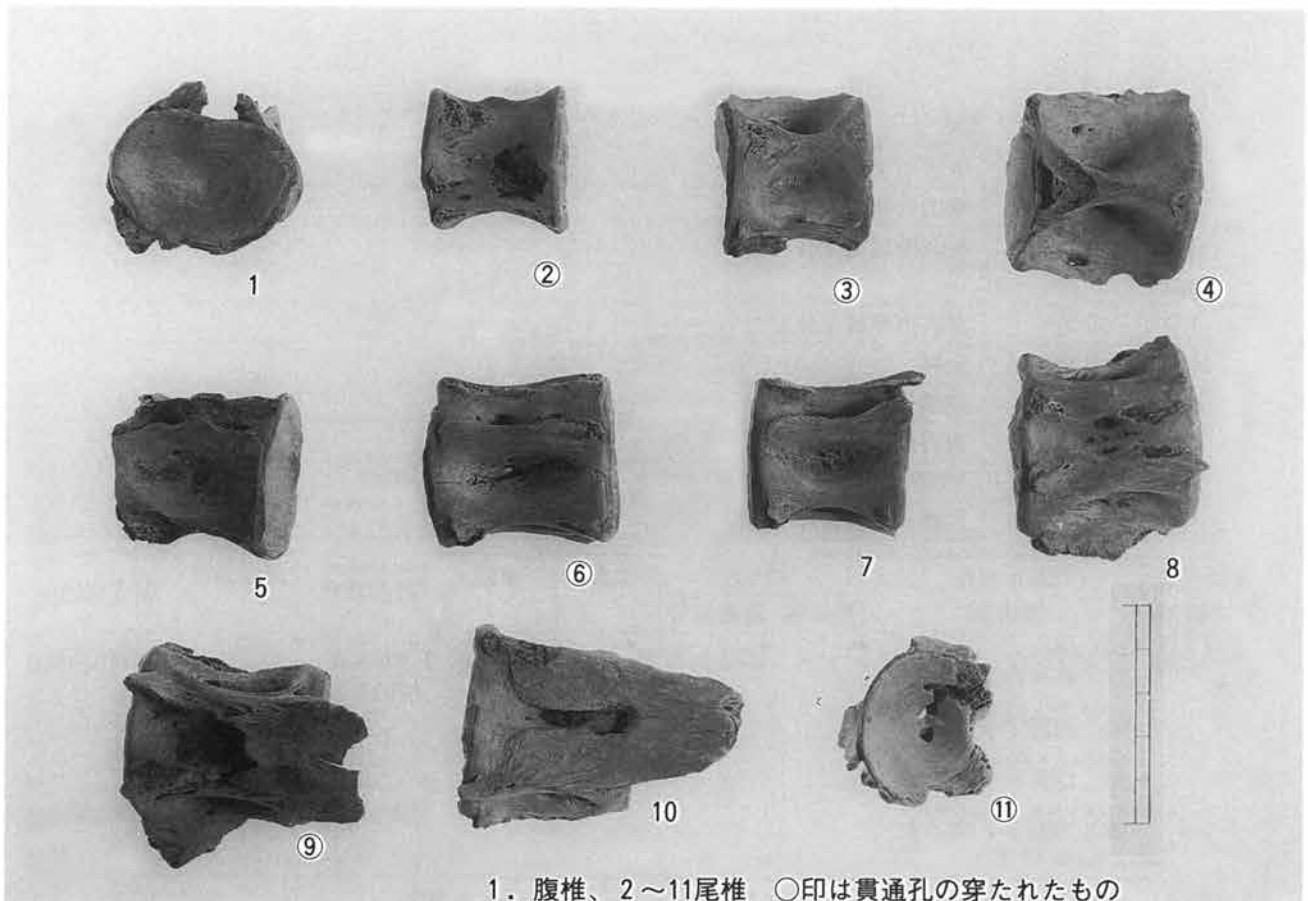
3. 人上腕骨L

4. オットセイ大腿骨R

石器による切傷痕
→

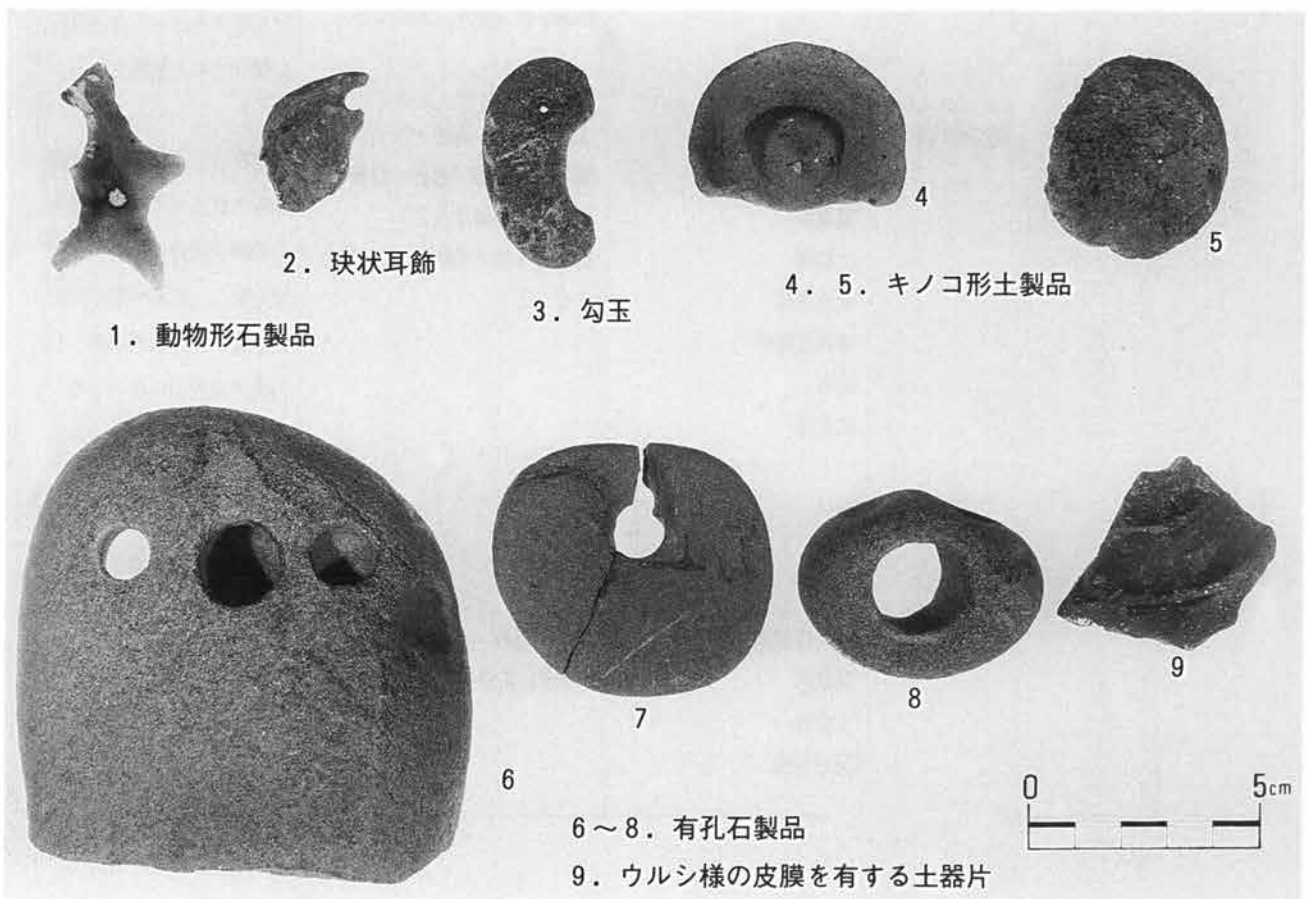
1の背面

南貝塚出土遺物



1. 腹椎、2～11尾椎 ○印は貫通孔の穿たれたもの

N21E-3-1号土坑跡出土マグロ層椎骨



1. 動物形石製品

2. 玦状耳飾

3. 勾玉

4. 5. キノコ形土製品

6

6～8. 有孔石製品

9. ウルシ様の皮膜を有する土器片

出土遺物（土製品・石製品）

報告書抄録

ふりがな	さきやまかいづか
書名	崎山貝塚
副書名	範囲確認調査報告書
巻次	
シリーズ名	宮古市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	No.44
編著者名	高橋憲太郎・三浦千秋
編集機関	宮古市教育委員会
所在地	〒027 岩手県宮古市新川町2-1 TEL0193-62-2111
発行年月日	西暦1995年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
		市町村	遺跡番号						
さきやまかいづか 崎山貝塚	いわてけんみやこしおおあざさきやま 岩手県宮古市大字崎山 第1地割字千束長根 だいにちわりあざせんせくながわ 第2地割字道ノ下 だいさんちわりあざとろのき 第3地割字トロノ木	—	LG14-2079	39° 40' 21"	141° 57' 48"	昭和61年度～ 平成5年度		範囲確認調査	
						平成6年度			内容確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
崎山貝塚	集落・貝塚	縄文時代前期	土坑跡 南貝塚	土器・石器・骨角器（釣針、骨 針刺突具又状角製品など）・動 物遺存体（獣骨・魚骨など）	崎山貝塚は縄文時代前期～ 後期にわたり営まれた集落 と貝塚がセットとなり良好 に保存された遺跡である。
		縄文時代中期	竪穴住居跡 掘立柱建物跡 墓壇跡 土坑跡 配石遺構 環状遺構帯 立石 北貝塚	土器・石器・石棒・キノコ形土 製品・骨角器（釣針・骨筥・角 筥・又状角製品など） 動物遺存体（岩礁性貝類・獣骨・ 魚骨など）	集落跡は5期にわたる変遷 がみられるがその最盛期と なる第3段階は中心部に墓 域を有し、この外側に環状 遺構帯、掘立柱建物跡、居 住域が重層的に配置されて いることが判明した。 貝塚や動物遺存体を含む層 は地点や規模を変えながら も継続的に形成されるがな かでも前期に伴う骨角器や 動物遺存体は三陸沿岸地方 でも比較的古期に属するも のである。
		縄文時代後期	竪穴住居跡 墓壇跡 土坑跡 配石遺構	土器・石器・石棒・動物遺存体 （マクロ属椎骨など）	

宮古市埋蔵文化財調査報告書44

崎 山 貝 塚

— 範囲確認調査報告書 —

1995.3

発 行 岩手県宮古市教育委員会
宮古市新川町2番1号

印 刷 株式会社 文化印刷
岩手県宮古市大通2丁目5の2